

聖闘士 D x D

挫椰道

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

原典とは全く別の人物（アノオトコ）が、『赤き龍』を身に宿した世界の物語。

現在（2019.7.1）、文章大幅修正中。

目次

オカルト研究部へ ようこそ

神崎孜劉

少女の悲鳴！

赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）

アテナの聖闘士（セイント）

墮天使

はぐれ悪魔祓い

解き放て！ 龍（ドラゴン）の波動！！

ドラゴン波です

シスター、拾いました！

三日月が紡ぐ縁

学園壊滅のフェニックス

メイドさん、やって来ました！

喧嘩、売買します！

眷属、募集します！

使い魔、ゲットだぜ！

ソーナの秘密！！

使い魔の森の魔獣！

汝が御銘は…

開戦！シリユーvsライザー！！

魔法少女☆ミルたん！

赤龍帝の鎧！

決着！ドラゴンvsフェニックス！！

赤龍帝の逆鱗！！

212 198 188 175 164 152 145 130 121 112 97 91 82 71 62 49 41 30 21 15 9 1

一刀両断のエクスカリバー

行け！駒王学園オカルト研究部！！

教会からの使者

唸る聖剣！エクスカリバー！！

唸る聖剣！エクスカリバー！！②（仮）

聖剣計画

狂気の はぐれ悪魔祓い、再び！

Bello・Cancro

黄金の誘（いざな）い！！

頑張れ天界勢

コカビエル！戦を望む墮天使！！

皆殺しの大司教！バルパー・ガリレイ！！

衝撃の真実！！

決戦！コカビエル！！

白き龍！バニシングドラゴン・白龍皇！！

天使長ミカエルの受難

Extra Episode ①

停止空間のヴァンパイア

停止空間のヴァンパイア②

校庭崩壊の白龍皇

はぐれ悪魔討伐任務（但しシリユー抜き）

躊躇いと覚悟

墮天使総督！アザゼル！！

白と黒の猫姉妹

嵐の前の ほのぼの？

404

397

389

380

372

366

358

347

338

328

319

310

299

290

283

276

268

262

253

244

235

225

魔王降臨！（笑）	409
和平を結ぼうぜ	420
テロリスト襲来！	426
禍の団（カオス・ブリゲード）	436
2人のレヴィアタン！魔王vs魔王少女！！	444
赤と白	454
この宿命の対決に決着を！	462
無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）オフィス！	475
駒王協定	485
 Extra Episode ②	
first contact	491
first contact ②	506
first contact ③	517
 嗚呼 夏休み	
冥界に逝こう！！	536
グレモリー家の人々	543
悪魔貴族とのO☆H A☆N A☆S H I ☆	551
若手悪魔集結！	565
若手と老害と魔王とドラゴン	576
Dの悲劇（仮）	590
パーティー（仮）	598
強化フラグが立ちました！	604
魔王遊戯	612
弩Sドラゴン	620
甲子園の時間	637

神々と悪魔達の黄昏（ラグナロク）	
ポニーテールと乳と温泉と父（仮）	647
悪神ロキ！北欧のトリックスター！！	654
黄金の獅子！！	663
リアスvsディオドラ（仮）	675
ギヤスパー（15）、人生最大の危機！	687
GとDの悲劇	699
CAT FIGHT	709
衝突！聖剣vs聖魔剣！！	719
女王（クイーン）vs女王（クイーン）！！	731
Dangerous Suplex Combo	742
覚悟と決意	749
オカ研の聖女さん	759
悪神、再び！！	771
開戦！ラグナロク！！	782
怪獣大激戦！！	792
戦慄の巨人！！	801
戦う少女達！	808
燃えろ小宇宙（コスモ）！ 最強の必殺技！！	823
駒王学園は、アナタを歓迎します！	837
 【Bonus Episode】	
新学期です！	846
赤と白、再び！	860

オカルト研究部へ ようこそ
神崎孜劉

「は、放しやがれ、神崎！」

テメー、何時から生徒会や風紀委員と手を組んだんだよ!?!」
「嬉しい!この変態3人衆が!!」

私立駒王学園高校。

以前から、所謂セクハラ的行動で、全校生徒から不評を得ていた2年生の男子3人組、通称『変態3人衆』。

この日の放課後、生徒会と風紀委員、そして何処の部活や委員会にも所属はしてないが、その実力から、クラスメートである生徒会役員からの協力要請を受けた、2年生の男子生徒により、この3人が、女子剣道部の更衣室を覗いた現行犯として取り押さえられた。

》》

「いや、神崎君、今回の協力、本当にありがとう。」

「どうしても、現行犯逮捕する必要があるのですが、この3人はなかなか素速っこいので…」

「いや、この手の輩は、俺も同じ男として、許せませんから。」

神崎と呼ばれた少年が、同級生からのブーイングを一蹴し、風紀委員と生徒会の役員から感謝の言葉を言われるも、それを当然の事と、全く意に介さない様に言う。

「まあ、本音言えば、困った顔した従姉妹に相談されて、自ら どうにかしようと思ってた時に、俺が話を持ってきたからだよな(ゴン!)。ouchii!」

「匙よ…貴様は1度、殴らんと解らん様だな?」

「殴ってから言ーな!」

拳骨を喰らい、脳天を両手で抑えて蹲りながら、匙と呼ばれた少年がツツコミを入れる。

「全く、お前が何を期待してるかは察しは付くが、ユキコは只の従姉妹だ。」

それ以上でも以下でもない。

そもそも お前、俺に彼女いるのは知ってるだろうが？」

「それは知ってるが、お前がイトコンである事には、変わりg(ガン!)痛い!!」

追撃の手刀を脳天に貫う匙。

「はあ…大体、ユキコにはユキコで、他校に彼氏いるぞ?」

「な、何い?」

神崎君、それは本当なのかい?」

「先輩?」

この『カレシイルシ』発言に、今回の捕り物に参加していた、風紀委員の3年の男子生徒が、神崎に詰め寄る。

どうやら彼の従姉妹とやらは、学園内でも それなりに評判が良いらしい。

「…それで、ソイツは一体、どんな男なんだ?」

「匙、お前もか!」

更には匙も便乗して、一緒に聞いてきた。

「やれやれ…まあ俺も、直接に会った事はないけど、聞いた話だと、中学の時のクラスメートらしい。

野球やってて、何でも1年にして既に、1軍の控えピッチャーだとか…

会う度に惚気られてるよ。」

少しだけ呆れた様な顔で、話す神崎。

「…てゆうか匙よ、お前、お前ん所の会長さんが好k

「わーっ!!? テメーっ! この場で言ーなー!!

「んがが??」

学園内で、「生徒会役員」である匙元士郎と云う人物を知っている生徒ならば、当事者の生徒会長を除けば、誰でも知っている事実。

その真実を言おうとした神崎の口を、顔を真っ赤にした匙が、慌てて止めに入った。

「元ちゃん、もう良いでしょ?」

早く戻って、会長に報告しないと。」

「お、応…」

同行していた生徒会の女子生徒に嗜められる匙。

ついでに言えば、匙と一緒に従姉妹の事を聞いていた風紀委員も、同僚に抑えられ、この場は解散となった。

因みに件の3人組は この後、生徒指導室に連行された後に、停学3週間の処罰が下された。

》》》

次の日。

「へえ？そんな事があつたんだ？」

「ああ、だから今日は、静かだったろ？」

昼休み時間の校舎屋上、フェンスに凭れ掛け、パンを食べながら話をしている3人の男子生徒。

神崎と匙、そして もう1人、端正な顔立ちをした、金髪の少年である。

「…それで、神崎君、前の話だけど？」

「木場、前にも言ったが、俺は『人間』を辞めるつもりは無いんだ。」

神崎に木場と呼ばれた、金髪の生徒が、話を続ける。

「ん、その件はね…」

リアス部長も言ってたよ。

残念だけど、今の部長の力量じゃ、現在 残った『駒』を全て消費したとしても、キミを『眷属』には出来ないらしい。

部長曰わく、キミを眷属にするには少なくとも、『魔王』様クラスの實力がないと無理だそうだ。」

「かぁーっ！おい、『赤龍帝』、お前、どんだけなんだよ？」

「知るかよ…。」

匙から赤龍帝と呼ばれた神崎が苦笑する。

「それにしても、『悪魔』ねえ…」

俺はグレモリー先輩や お前達に会う迄、全身真っ黒で、頭に角、背中に蝙蝠みたいな羽根を生やしてて、巨大フォークを持っているのを想像していたよ。」

「いや、それは偏見だから！」

神崎が、自分のイメージしていた悪魔像を話すと、彼に『悪魔』呼ばわりされた2人が、声をハモらせて突っ込んだ。

「…それで、話を戻すけど、その辺りを踏まえて、もう一度、正式に話をしたいらいいんだ。」

神崎君、今日の今日で悪いけど、放課後、部室に来て貰えるかな?」

「…OK、分かったよ。」

◇神崎 side◇

生まれた時から、この町に根を下ろす『人に非ず者』の存在は確認出来ていた。

ただ、その者達が、『人に仇なす邪悪な存在』かと聞かれたら、それは『否』と答える事になる。

生前：所謂『前世』と謂われる物の、当時の記憶と能力チカラを喪わないだけでなく、本当の『龍』までも この身に宿し、今の世に生まれ落ちた。

そして使われる漢字は違えど、生前と『同じ読み方』の名前を、今の両親より授かった。

更には、『悪魔』と呼ばれる者達との邂逅…

これは偶然なのか…

それとも、何者かの意図なのか…

…サン、もしかして これは全て、貴女の仕業なのですか?

▼▼

「…それで、何故 お前も一緒に着いて着てるのかな?」

「会長が来いってさ。」

隣を歩くクラスメートの質問に、「メールが着た」と言わんばかりに、制服の上着ポケットからスマホを取り出して答える匙。

神崎と匙、2人が向かっているのは駒王学園旧校舎。

学園の正校門を背に学園全体を見据えた場合、西側角に位置している、木造2階建ての、白く塗られた外壁に赤い屋根。

正面中心の赤く小さな三角屋根の下には、今は使われてはいないが、嘗ては予鈴を鳴らしていたであろう鐘が、未だ吊られている建物だ。

この建物は現在は既に授業等には使われておらず、只1つの部活動の部室として、1部屋だけ活用されている状態だった。

その部員達が普段からマメに掃除しているのだろう、綺麗に磨かれた廊下を進み、『オカルト研究部』と書かれた札が掛けられている部屋の前で立ち止まると、

ガラ：

「失礼しまーす。」

その扉を開き、中に入っていた。

「やあ、神崎君、匙君。」

「……………」

部屋に入ると木場が、そしてソファーに座って羊羹を食べていた小柄な少女が、無言で会釈した。

「さあ、こつちだよ。」

木場に案内され、2人は部屋の奥に入っていく。

》》》

「来てくれたのね、ありがとう。」

「…神崎君、報告は聞いています。」

昨日は協力、ありがとうございました。」そこに居たのは紅色の長い髪的美少女…学園N.O. 1アイドルであり、オカルト研究部…通称『オカ研』部長のリアス・グレモリー。

リアスと並び、『学園2大お姉様』の双壁を成す、黒髪をポニーテールで結った、正しく大和撫子の形容がが相応しい、同じくオカ研副部長の姫島朱乃。

そして、駒王学園生徒会長の支取蒼那と生徒副会長の新羅椿姫だった。

》》》

「あの…姫島先輩も新羅先輩も、こつち座つたら どうですか？

あ、匙は そこで立ってて良いから。」

「をゐっ!？」

今、オカ研部室の奥にある応接室では、2つ並んだ1人掛けのソファーに、リアスと蒼那が それぞれ座り、対面にある3人掛けソ

フアーに神崎1人が座っている。

そして朱乃、椿姫、匙の3人は、リアス達の後ろに立っている形である。

神崎には、別に美少女2人を両隣に侍らせよう等の下心は無く、単に座るスペースが空いているのに、女性を立たせておくのは…という所からくる発言だったのだが、

「いえ、お気遣い無く。」

自分達の位置は この場とばかりに、その申し出をやんわりと受け流す。

「それじゃ、そろそろ、話しても良いかしら？」

そう言うと、リアスは神崎が自分達の『正体』を知っていると云う前提で、話し始めた。

◇神崎 side◇

「…そんな訳で、私達はアナタを敵に回したくない、アナタが私達の敵になって欲しくないの。」

これは、私達、駒王学園在籍でなく、冥界の…魔王様達の考えよ。「監視、拘束、或いは有事の際に、利用しようとしていると受け止められても構いません。」

それでも、それを承知で神崎君に…赤龍帝に、私達の側に居て欲しいというのが本音です。」

話の内容は要約すれば、”赤龍帝”である俺に、悪魔の側に着いて欲しいという要請だった。

グレモリー先輩も支取先輩も、その目は真剣そのもの。

敢えて此方の都合や悪魔側に着いた時のメリットやデメリットには一切触れず、自分達の要望だけをストレートに、ハッキリと言ってきた。

だから…

「俺の中にある『龍』の力が、様々な陣営を呼び寄せ、結果的に何処かの所属になってしまうのだけは決まりならね…」

最終決定の前に、互いに色々条件等を出して話し合う事になるでしょうが、基本的には『転生』無しが絶対条件なら、俺は別に先輩達

の居る、悪魔サイドでも構いませんよ。」

…これが、『今の世を生きる』、俺が出した答えだ。

ガタツ

「ほ、本当に？」

俺の応えに、グレモリー先輩と支取先輩が揃って立ち上がり、身を乗り出してきた。

「ちよつと待って、神崎君？」

「朱乃？」

しかし、ここで姫島先輩が口を挟んだ。

「貴方の その言い方ですと、既に他の勢力からのコンタクトも有った様に見受けられますが、違いますか??」

姫島先輩の この読み、実は正解だ。

1週間前位から、本当に日を置いての入れ替わり立ち替わりで、他校の女子高生に始まり、大学生か社会人風な大人の雰囲気むんむんな女性、更には中学生：下手したら、小学生かも知れない様なロリッ娘に声を掛けられていたのだ。

》》》

「…でも、『人間』ではないのが、気配でバレバレでしたからね。

如何にも怪しいから、無難に言葉を濁してスルーしてたんです。

…いや、1回だけ、かなり泥沼展開になりましたが…」

そう言いながら、黒歴史を思い出したかの様に、遠い目をする神崎。

「「「「??」」」」

「あ、勿論バレてるのをバラしたりはしていませんよ？」

…だから、そういう事もあって、一番最初に正直に正体を明かした上で、接触してきてくれた先輩達の所かな…てね。

そういう意味では、先輩達は信用出来ますからね。」

「あ、ああ…」

「…先輩？」

「ありがと~~~~~~~~っ!!!」

がぼっ！

「ぷふあ?!ぎゅ、ぎゅれみよいーふえんふあい、にゅれ、にゅれくくく

~~~~~!!」

「り、リアス!？」

更に続いた神崎の言葉に、感激したりアスが飛び付き抱き付き、その場で窒息死させるかの様な、公開顔面圧迫を展開させたのだった。

「クソ、神崎のヤロー! 何て羨まけしからん事を…後で絶対に殴

「匙?」

「…いえ、何でも無いです…。」

》》》》

3日後。

「改めて自己紹介させて貰う。

この度、オカルト研究部に入部させて貰う事になった、2年C組の、神崎孜劉だ。

今後ともヨロシク。」

「あらあらあら、これは御丁寧に。

副部長の3年、姫島朱乃ですわ。

宜しく願いますわ。」

「じゃ、僕も。

2年A組の木場祐斗だよ。ヨロシクね。」

「…1年の塔城子猫です。

よろしく願います。」

オカ研新入部員の神崎の挨拶に、他のメンバーも応えていった。そして、

「部長のリアス・グレモリーよ。

神崎君…いえ、これからはシリューと呼ばせて貰うわ。

ようこそシリュー。」

オカルト研究部は、貴方を歓迎するわ!!」

## 少女の悲鳴！

「暇だな…」

私立駒王学園高校のオカルト研究部。

その実態は駒王町を陰ながら管理している悪魔の1柱(家)、グレモリー家の次期当主と その眷属が活動する為の拠点である。

その部に、悪魔としてではなく、只の人間として？入部したシリューは悪魔としての活動…本格的な望みを叶えるに応じた対価の取得は勿論、例えばシェア拡大の為のビラ配り等も免除、一応は形だけでもと、ある程度の時間帯迄は、部室に待機という事になっていた。尤も最初の1週間は、部長のリアスや副部長の朱乃から、悪魔…冥界や他の勢力等の情報情勢事情を学んではいたが。

部室内の応接テーブルに、ノートや参考書を広げて宿題を片付けた後は、何をするでなく、アームチェアに体を沈め、スマホを弄っている毎日だった。

「…隣の空き部屋に、トレーニング機材でも持ち込むか？」

部長が戻ってきたら、聞いてみるか…」

1時間後、その部屋の掃除等を責任持つてこなすのを条件に、シリューはリアスから機材持ち込みの許可を受ける。

》》》

3日後。

「あら？シリューは？」

放課後、部室の応接兼ミーティング室に部員全員が集まり、御茶でもと思っていたら、約1名程不在。

「また隣の部屋じゃないですか？」

部室の隣、最早シリューの専用トレーニングルームと化した部屋。リアスに機材持ち込みの許可を得たシリューは、様々な器具をテレポーションを使って持ち込み、その部屋は翌日には、ちよつとしたジムの様な完備になっていた。

「仕方無いわね？祐斗、悪いけど…」

「…あ、わたしが呼んできます。」

リアスが隣の部屋に居るであろう、シリューを木場に呼びに行かせようとした所、後輩である塔城小猫が自分がと、先に茶菓子を食べていたのを止めて、立ち上がった。

「じゃ、小猫、お願いね。」

《《》》

ガラ：

「シリュー先輩、居ますk…」

「ん？小猫か、何かあったのか？」

「……………」

扉を子猫が開けると、其処には床に敷いたマットの上で、腹筋を鍛える如くな上体反らしをしているシリュー。

彼からすれば、突然の訪問者。

腹筋運動を一端止めて、何事かと起き上がって聞いてみるが、小猫は そんなシリューを見ると、無言で固まってしまう。

ガラガラ：

「…？」

そして、やはり無言で扉を閉める小猫。

その後 彼女は、虚ろな目をしてフラフラと、まるで酔っ払いの様な覚束ない足取りで部屋に戻ると、

「あら？小猫ちゃん？シリュー君は居なかつたの？」

「は、はだ、はだ、はだ…い、いやあああああああああああ  
ああっ!!」

「!!!!」

絹を引き裂いたかのような乙女の悲鳴を、旧校舎に響かせたのだっ  
た。

ガラっ!!

「な…何だ、今の叫び声は？」

小猫、一体何があった!?!敵か？」

そして その叫び声を聞き、シリューも部屋に駆け付けた。

…が、

「ひえっ!?!」



「あらあらあらあら…?」

「う…わ…」

「Ω | ♂ x ♀ (。▽。) ♪?とP&ffo…?!」

パターン…

「こ、小猫ちゃん?!」「小猫お?!」

《《》

「…で、部長に滅つ茶苦茶説教された。」

「くくく…そりゃ、お前が悪いよ。」

翌日の朝、教室で昨日のあらましをシリユウが話すと、それを聞いた匙は、腹を抑え、必死に大笑いするのを堪える顔をする。

「お前なあ…耐性の無い女の子の前、上半身真っパって、普通にアウトだろ?」

昨日、小猫が呼びに行った時、上半身には何も身に着けず、トレーニングしていたシリユウ。

その際に、結果的に二度に渡って見せられた、その上半身に、免疫の無かった子猫はフリーズして倒れてしまう。

ついでに その時に巻き添えな感じで、小猫程ではないが、地味にダメージを受けたリアスからも、散々とOHANASHIされたのだった。

「いや、しかしだな、下はキチンとジャージを履いていたのだが?」

そもそも、全く身に覚えの無い、露出狂とか、露出癖を もう少し自重しろだとか、失礼な話だとは思わんか?」

「いや、お前、ギルティ有罪。

…ってか、お前、自覚無いかよ?」

「解せん。姫島先輩は、どうって事も無かったのだぞ?」

てゆうか寧ろ、目を輝かせてガン見してたぞ、あの人?」

「まあ、あの方は…な…」

…で、グレモリー先輩は顔真っ赤にしてドン引き、塔城さんに至っては、オーバーキルって訳か…」

「初ウツな悪魔って…」

「だから、そーゆーのは偏見だつて…」

》》》

ガラ：

「ちやつす…」

「あ、シリユー先輩…」

「よつ、小猫、今から依頼人クライアントの所に行くのか？」

放課後、シリユーが部室の扉を開けると、転移魔法陣を転開していた小猫が居た。

「…はい。」

シリユーの顔を見た途端、何かを思い出したかの様に、顔を真っ赤にして返事をする小猫。

「大丈夫か？何だか顔が赤いけど、熱でもあるんじゃないのか？」

「え？だだだだだ…大丈夫です！」

「そつか…じゃ、頑張つて来いよ！」

「はい…行って来ます…」

良い笑顔でサムズアップするシリユーに小猫は頷くと、魔法陣が放つ光に溶け込む様に、姿を消して行った。

「…大丈夫か？アイツ？」

子猫が姿を消した後、改めて心配そうな顔をするシリユーだが、直後に「お前が大丈夫か」と、部室の奥側から2人のやり取りを見ていたリアスと朱乃から、盛大に突っ込まれる。

「アナタ、それなりに頭良いって聞いてたけど、もしかしたら1周回つてバカってゆるヤツ？」

「あらあら…シリユー君つて、意外と天然なのですな。」

それとも、単純に鈍どんなのかしら？」

「…解せん。」

》》》

「ふう、思った以上に遅くなってしまったな…」

日も落ちて、電柱の街灯に光が灯る住宅街、シリユーは1人、家路を歩いていた。

この日は小猫が『仕事』から帰った後（何故か他校？の制服を着用）に、少しばかり長いミーティングが行われた。

『部活動』の報告だけなら、シリューは別に参加する必要性は無く、直ぐに帰宅出来たのだが、今回は少し前に赤龍帝であるシリューに接触してきたと思われる、他勢力についての話だった為、一番の当事者が参加しない訳には かなかつた。

墮天使：ね：

シリューがオカルト研究部に入部した時点で、他勢力と思われる者との接触があつた事は、リアスが冥界の上層部：魔王に報告していた。

そして今日の昼過ぎに冥界から、駒王町に墮天使の一派が潜伏している可能性の連絡があつたのだ。

シリューに正体を隠して言い寄ってきたのも、その墮天使達である可能性が高いとの事。

尚、組織ぐるみでの行動か、一部の者の独断での動きかは、現在確認中との事。

「おい、やっぱり戦いになるのかな？」

「ん？臆したのか？相棒？」

「いや、そうじゃないが…」

「どうやら”神”は、余程俺を、戦いの場に引き込みたいらしいな。」

『フツ…【神】…か…』

「…？」

歩きながら、何やら小声で、左手に向けて話し掛けるシリュー。

それに対し、その左手の中に存在している様な『何か』が、直接、彼の精神の内に応える。

その声はシリュー以外には聞こえない為、端から見たら、左手相手に独り言、或いは妄想な会話をしている怪しい人、又は ぼつちに見えなくもないが、幸いにも、この場面を目撃している者は居なかつた。

「この小僧…貴様、神崎孜劉だな？」

「!？」

そう、まるで待ち伏せしていたかのように、電柱の陰から姿を現した、

1人のスーツ姿の男以外は…

## 赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）

『いいや違う。俺は神崎孜劉じゃない。』

その息子の、神崎龍鋒だ。』

いきなり目の前に現れたかと思えば、如何にも自分に何か用が有ると言いた気な、シルクハットを被り、ロングコートを着込んだ中年男。

間っ違い無く碌な事じゃない、絶っ対に面倒事に巻き込まれるに決まってる!!

…そう直感したシリューは、遠い昔の時代の、実の息子の名前を拝借して誤魔化そうとするが、

「巫山戯ているのか？貴様っ!!」

その返答にコートの男は怒りの表情を浮かべて襲い掛かってきた。

「ちいっ…やはり、息子は無理が有り過ぎたか!!」

せめて、『双子の弟』位にしておくべきだったか？」

決して『巫山戯ける』訳でなければ、ボケてる訳でもなく、『真剣』と書いて『ガチ』と読む…本当に そう考えながらも、男の繰り出す攻撃を悉く躲すシリュー。

そして、

「でえい!!」

ドスッ!!

「ぐはっ!」

自分の顔面を狙った拳を捌くと同時に、男の鳩尾に、強烈な回し蹴り突き刺した。

「こ、小僧お…」

予想以上…いや、予想外のダメージに、思わず膝を着くコートの男だが、そこにシリューが追撃。

相手の立てた片膝を踏み台の様に駆け上がると、

「廬山龍戟閃!!」

ドゴッ!

「ぐわあっ！」

その歪んだ顔を目掛け、更に強力な膝蹴りを打ち込み、吹っ飛ばす。  
「どうした、もう終わりか?…墮天使?」「!!」

面識無しにも拘わらず、自分の名前を知っており、問答無用で襲い掛かってきた男。

先程迄、部室でリアス達と話していた事に加え、最初に声を掛けられた時から感じていた、この男の内側から溢れる『人に非ざる者』の気配。

半ば、正体を確信していたシリユーが鎌を掛けてみると、男は何とも判りやすい、明から様に肯を唱えている様な顔で驚く。

「くっ…気付いていたか…!」

馬鹿め!何も考えずに、大人しく付いて来ておれば、苦しむ事も無かったのにな!」

そう言つて男は立ち上がると、その儘 斜め後方に大きく跳躍…いや、飛翔すると、空中で静止し、

バサツ…

背中から、一対の巨大な漆黒の翼をこれ見よがしと、左右に大きく展開させた。

「チョっろ…」

しかしシリユーは取り立て慌て驚く事も無く、あつさりとして現した その姿に呆れ顔で、溜め息混じりに目の前のドヤ顔な男に聞こえない様に小さく呟く。

「心配するな、まだ、殺したりはせんよ…」

今は まだな!!」

そのシリユーの呟きが、まるで聞こえてない男…墮天使は そう言うとうと、何時の間にか手に握っていた光輝く槍…と云うよりは、槍の形をした光のエネルギー体を、上空から地上のシリユー目掛けて投げつけた。

バシユ…

「な…!?」

「遅い!!」

しかし当然の如く、それを躲すシリユー。

「ふっ…光の槍と言っても、それを放つ速度は、光速ではないみたいだな!!」

まるで「俺を倒したいなら、光速で撃つてこい」と言わんばかりな顔を見せたシリユーは、

「ならば此方も、本気を出させて貰うぞ！」

逝くぞ、ドライグ!!」

『応よ、相棒!!』

左腕を前に出した状態での、戦闘の姿勢を取り、

ブーステッド・ギア  
「赤龍帝の籠手!!」

『Boost!!』

自身の『内に宿る者』との掛け声と共に、その左腕に、真紅の籠手を纏わせた。

それは無数の鋭利なパーツを鱗の様に、幾重にも組み合わせた様なデザイン。

その鉄甲の部分に埋め込まれているのは、碧色に光る宝玉。

それは全体的に重々しく禍々しく、所々に派手な装飾が施されている、肘から下、指の先まで腕半分を隈無く覆う真紅の籠手。

ブーステッド・ギア  
赤龍帝の籠手…

嘗て”神”が造り出した、セイクリッド・ギア 神 器と呼ばれる奇跡の神具。

その中でも、遥か昔から最強最恐最凶と謂わしめた二天竜と呼ばれるドラゴンの一角である、赤き龍、『ウエルシュ・ドラゴン』の魂を宿

セイクリッド・ギア  
し、神 器の中でも『神滅具』と詠われる、文字通り、『神』です『滅』

する事が出来ると謂われる力を秘めた、数少ない逸品。

「な…ば、馬鹿な!」

只の神器持ちだと思っていたら、ロンギヌス 神滅具…しかも、赤龍帝だとお!!」

その赤い籠手を見た途端、墮天使は慌てふためいた顔を見せ、

「ちい、小僧、今日の所は見逃してやる!次は、逃げられると思うな!!」

墮天使の世界では分からないが、人間界では大方、三下が逃げる時に言う様な捨て台詞を吐き、空の彼方に飛び去って行った。

「……………」

「さあ、いざバトル！」…と、意気込んだと思っただら見事にスカされ、その墮天使が三日月の向こう、夜空に消え往く様を、あつけらかんとした顔で眺めるシリユー。

その後、墮天使の気配が完全に消えたのを確認したシリユーは、ズボンのポケットからスマホを取り出し、

「あ、もしもし部長？」

今 電話、大丈夫ですか？」

》》》

翌日の放課後、駒王学園生徒会室には、生徒会役員、そして、オカルト研究部の部員が集結した。

「この場に要る、皆が悪魔なのか…」

そう、生徒会役員とオカルト研究部…

シリユーを除けば、そのメンバー全員が、純血、或いは『イーヴィル・ピース悪魔の駒』による転生悪魔だった。

「皆さん、お疲れ様です。」

今回の生徒会とオカルト研究部との合同会議ですが、その…出席予定の方が、もう1人…来られて…ない…ので、もう少し待って貰えますか？」

駒王学園生徒会長であり、リアス、朱乃、そして1年生の とある一般生徒と共に、校内の男子生徒から、『学園きよぬー四天王』と云う、何とも有り難いのか傍迷惑なのか、そんな微妙な俗称を授かった4人の一角を担っている支取蒼那。

議長に相当するテーブルに座っている彼女が、慎重な面持ちで話すが、その口調は たどたどしく、落ち着きが無い。

明らかに何かに緊張、或いは動揺してるのが、丸分かりだった。

「生徒会とオカ研、全員揃っているが…」

冥界から、誰か来るのか？」

しかも、かなり偉い人？」

「ん。事が事だから、それは有り得るね。」

だいたい ほら、前の机。

部長と生徒会長、如何にも間に もう1人、誰かが座る様な感じに



1 席空けて座ってるし。」

「会長の、あの緊張具合…まさかね…」

そんな風に端側の席に着き、ヒソヒソと話すシリユウ、木場、匙。  
「!!?」  
「!!?」

その時、一瞬にして、その場の『空気』が変わった。

常人なら気付く事の無い程度の違和だが、この場の『常人でない者達』なら全員、普通を感じ取れる空気の変化。

「結界…?」

それは『人払いの結界』。

生徒会室とその外の廊下の通りは、『気付いている者』以外は無意識に足を遠ざける様になり、そして気付いている者にしろ、その領域に足を踏み入れようとしても、強力な魔力障壁が、行く手を阻む。

単純な話、結界を張った術者よりも、『より強い力を持つ者』以外は、何人をも拒む空間となった。

ざわざわざわざわざわざわざわざわ…

僅かに ざわつく生徒会室。

しかし、リアス、朱乃、そして生徒会副会長の新羅椿姫は冷静さを崩さず、

「はああ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~」

蒼那は何か、諦めの表情で大きく深く、そして長い溜め息を零す。

そんな中、部屋の中心に、直径約5メートル程の魔法陣が薄青い光を放ちながら浮かび上がり、その中から、

「ソーた〜ん！会いたかったよ〜!!☆」

ぱしーん!!

「きやわん!?ソーたん、いきなり何をするのよ〜?」

黒髪をツインテールに結び、まるでアニメの世界から飛び出してきたみたいなの…所謂魔法少女の様な、水色を基調とした衣装に身を包んだ女性が飛び出て来たかと思えば、いきなり蒼那に抱き付かんとばかりに飛びつき、カウンターの…何処から取り出したのか、ハリセンのフルスイングを顔面に貰うのだった。

「…お姉様こそ、何、いきなり人に襲い掛かろうとしてるのですか？」

「え〜？あたしがソーたんを襲う訳が無いじゃないの〜？」

あ、でも、別の意味じゃ、襲つちやうかも？☆（ぺしっ！）痛い!？」

ジト目&呆れ顔で「いきなり何をする」という蒼那の質問に対し、更に呆れさせる様な応えで返そうとする、彼女の姉らしき女性の脳天に、再びハリセンの唐竹割りが炸裂した。

「……………」。

な、なあ匙、支取先輩 今、「お姉様」って言ってたけど…」

「応…あの御方が支取会長、いや、ソーナ・シトリー様の姉君であり、冥界四大魔王が1人、セラフオルー・レヴィアタン様だ。」

「まさかとは思ったけど、本当に魔王様が直々に来られるとはね…」

## アテナの聖闘士（セイント）

◇シリユースィデ◇

魔王降臨。

生徒会室に現れた魔王セラフオール・レヴィアタン。

：魔王という存在は以前、リアス部長から聞かされていたが、その1人が支取先輩のお姉さんなんて、聞いていなかっただが？

そういう事は、かなり大事な事柄であると思うのだが：

兎に角、その魔王は現れる早々に、妹である生徒会長の支取先輩：

ソーナ・シトリーとの『姉妹漫才』という名のじゃれ合いを暫くの間

披露すると、漸く満足したのか席に着き、

「それじゃ早速会議、始めよつか！☆」

何事も無かった様に言っただけだ。

「……………」

その場の誰もが、「既に早速ぢやねーよ！」と、目の前の魔王少女にツツコミたい顔をしているが、相手が相手なだけに、何も言えないという顔をしている。

仕方あるまい。

一応、形式の上で、俺は現在オカ研所属、リアス部長の仮眷属という事にはなっているが、基本的に悪魔とは『主従関係』等は無いかからと、皆の代わりに声を大にして言おうとしたら、それを敏感に察知した、木場と匙に取り押さえられた。

「それじゃ、赤龍帝ちゃん、昨日の事を、改めて皆に説明して貰えるかな？☆」

せ…赤龍帝ちゃん…だと!?

一言、文句言っただろうと思ったが、隣の男2人が「頼むから堪えてくれ！こーゆー人なんだ、察してくれ！」と目で必死に訴えかけてきた。

……………。

『こーゆー人』とやらは、さっきの漫才で、実は そんな気がしてたのだが…

うむ、支取先輩も大変だなあ…。

「それじゃ…初対面の人も居るので、改めて名乗らせて貰う。」

赤龍帝…『人間』、神崎孜劉だ。

悪魔とは縁あって現在、同盟…とも少し違うが、互いに有事には協力しあう関係に位置させて貰っている。」

「……………」

あ、生徒会の女子、何人かの顔付きが、少し変わった。

…と、というか、睨まれた。

俺が実は、転生悪魔でないと、初めて知ったのだろうか？

その上での「人間」に対する種族差別か？

それとも、いきなり下僕とか、従属や隷属を否定し、悪魔と…例えば魔王相手だろうと、『横』の繋がりをアピールしたのが気に入らなかったのか？

支取先輩…こういう大事な事は、きちんとっておかないと。

報連相は、大切ですよ？

因みに事情をきちんと理解しているオカ研の皆や匙は普通に…いや、木場と匙は苦笑いしている。



「皆、既に報せは聞いており、御存知なのを前提で話を進めさせて貰うが、昨夜…下校途中で堕天使に襲われ、結果、少しの間だが戦闘となった。」

「……………」

昨夜の堕天使との経緯を説明し始めるシリユー。

「紳士風な身成りをした、人間で云えば、40歳代くらいの男の堕天使だった。」

恐らく最初は、俺を何処かに…アジトにでも拉致ろうとしたのだろうが、最終的には、その場で戦闘。

だが、俺が発動させた神セイクリッド・ギア器を見た途端に、尻尾を巻いて逃げて行った。」

「ちよ…逃げたって神崎君、追う事は出来なかったの？」

此処で、生徒会の2年生の女子、巡巴柄が、まるで逃したのを咎め

るかの様に質問してくれた。

「ああ、追うと言うか、その場で仕留める事も出来た。」

「…だったら、何故?!」

「解らないのか?」

確かに今の俺は『人間』ではあるが、立ち位置的には一応、『悪魔』サイドに属しているんだ。

その俺が、いくら正当防衛成立しているからと言っても、他勢力の者を軽々しく始末するのは、芳しくないだろう?

三竦みの事は、リアス部長達から聞かされて知っている。

だからこそ、敢えて深追いはしなかつたんだが…これじゃ納得、出来ないかい?」

「~~~~~!!」

三竦み云々故と言うシリユーの発言に、巡は それ以上、何も言い返せなくなる。

「…続けさせて貰う。」

巡を黙らせた後、シリユーは その やり取りが最初から無かつたかの様に、話し続けた。

「奴等は俺の事を、赤龍帝だとは思っていないなかつた様だ。」

俺の神 セイクリッド・ギア 器を見て、驚いた位だからな。

だが逆に言えば、今回の件で向こう側に、俺という存在がバレた事になる。」

「ん? 赤龍帝ちゃん? キミは今、『奴等』と言ったけど、以前から声を掛けて来たって云う女の子達も、同じ堕天使だと睨んでいる訳?」

「ええ。この短期間に、そこまで複数の集団が一度に接触してくるなんて、有り得ないでしょう。」

何よりも、内側の人外の気配は、同一でしたからね。」

「成る程☆成る程…☆」

「それと、奴等は俺を、自分達の組織に引き入れようとする気は無かつたみたいだ。」

何しろ、いきなり殺しに来たくらいだからね。

どうやって知ったかは知らないが…恐らくは、俺が奴等や、この場

にいる皆を、人間でないと思っ抜いた感覚と同じだろうが、兎に角、神器持ちである俺を危険視して消そうとしたのだろう。」

「いえ、多分、それだけではないわ。」

「部長？」

「ここでリアスが口を開く。」

「シリュー…セイクリッド・ギア神器というのは、基本的には人間だけに宿る、先天的な物だけど、後から別の者が、それを奪い、自身に取り込む事は出来るの。」

別の人間だろうと、墮天使だろうと…悪魔でもね。」

「それは、初めて聞いたな。」

「そして、セイクリッド・ギア神器を奪われた人間は…例外無く死ぬわ。」

「成る程ね…」

リアスの説明を聞き、今迄の墮天使の接触到、改めて納得するシリュー。

「だが、俺が赤龍帝だと知った今、この先どう動いて来るかは予測不能だな。」

少なくとも昨日の奴は、俺の正体を知った途端に、怖れて逃げ出す様な雑魚だったからね。

もつと強い新手を送り込んで来るか、それとも不干渉を決め込むか…」

「お姉様、今後、赤龍帝と知っての上で、墮天使が神崎君に攻撃を仕掛けてくると思えますか？」

「このシリューの見解に、ソーナがセラフオールに意見を聞いてみると、

「あゝ☆それは流石に無いと思うよ？」

でも、墮天使総督なら、興味を持って、自らコンタクトしてくるかもね？」

「それは勘弁して貰いたいな…」

シリューからすれば、大迷惑な予測をしてくるセラフオール。

「まあ、赤龍帝ちゃんの報告は、こんなもんかな？じゃ、そろそろ本題☆」

「！！！！！！！！！！」

セラフオールの言葉に、その部屋の学生達の顔が、一気に引き締まる。

「サーゼクスちゃんが、今回の堕天使の件、堕天使の総督…アザゼルちゃんに確認して貰ったんだけど、アザゼルちゃんが言うには『俺は知らん。下の奴等が勝手に動いてるのだろう。』…らしいよ☆」  
「な…う…たった、それだけなのか!？」

四大魔王の1人、サーゼクス・ルシファーが得たという情報量に、シリューは不満を露わにする。

「ん…さつきも言ったけど、アザゼルちゃんにキミ…赤龍帝ちゃんの話をしたら、間違い無く人間界こっちに来て、それこそ話がややこしくなるのは確実だからね☆

詳しくは話せないし、何しろ基本的には、種族レベルで殺し合う程仲が悪いからね、込み入って聞き出せなかったらしいの♪」

「やれやれだな…」

「ん☆でも、裏を返せば、これは『そっちで勝手に始末しろ』って事だから…」

「次は殺つても、問題無いのだな？」

「そうなるね♪」

「……だったら!」

「リアスちゃん？」

「部長？」

「ここでリアスが立ち上がる。

「私達が管理している、この駒王町に勝手に入り込んでいただけでなく、シリューが…大切な仲間が攻撃を受けたのよ!」

これは もう、万死に値するわ…

居場所が判っているなら、迷わずに討って出るべきよ!

レヴィアタン様、この地を管理する、グレモリーの名に置いて、此処に宣言させていただきます。

「この町に潜む不埒な堕天使共を、私達が速やかに排除します!!」  
「ん☆ん♪リアスちゃんなら、そー言ってくれると思っていたよ☆」

リアスの発言に、満足気な笑みを浮かべるセラフオルー。

「ソーたん、そんな訳で、今回はリアスちゃん達に任せても良いかな？」

「はい、今回の被害者は、一応はグレモリー家に所属な形の神崎君ですし、何より、その神崎君が殺る気満々みたいですので…

…それと、お姉様？ソーたんは止めて下さい。」

「うゝゝ、ソーたんの いけず☆！」

「ああ、殺る気に否定はしない。」

ソーナの言葉に、シリユーは肯を示し、セラフオルーは項垂れる。

「それなら、先ずは墮天使の潜伏先を…」

「町外れの廃教会だよ。」

「「「「ええっ!?!」「」」」」

シリユーの その、答えを初めから知っていたかのような、リアスの言葉を待っていたかのような発言に、その場の全員が驚きの声を上げた。

「アナタ、何で知ってるの?」

「…何時から…ですか?」

「確認したのは、昨日の夜さ。」

小宇宙<sup>コスモ</sup>を高め、集中力を研ぎ澄ませば、奴等の気配を探る程度は容易い。」

「こすも…前にシリユー君が言ってた、独特の魔力と闘気みたいな物でしたわね…」

「ねえシリユー?その気配とやら、具体的な人数とかは判らないのかしら?」

「ああ、それも昨日の内に、確認していますよ。」

先ずは、墮天使が4人。

昨日の男と、以前から入れ替わりで声を掛けてきた、女が3人。

それと、信者みたいな奴でしょうか、普通の人間の気配が10人。

ただ、内1人の『気』<sup>チカラ</sup>は、かなり高い。」

「…本当に便利な能力だな、おい?!」

「あはは…神崎君が味方で、本当に良かったよ。」



シリユートの高性能サーチ能力に、匙は呆れると同時に驚き、木場はその頼もしさに、ほっと胸を撫で下ろす。

会議は、その後も続き、少し前に駒王町で起きた、少しばかり異質な殺人事件と、墮天使との関連の可能性を話し合ったり…

そして墮天使が潜むという、教会への立ち入りは、今夜、深夜0時と決定。

この時点で、会議は一先ず終了した。

…が、

「それにしても、赤龍帝ちゃん…シリユートちゃんって、本当に凄いわね☆！」

ねえ、あたしの眷属にならない？」

「はい？」

ソーナの会議終了の挨拶と同時に、何を思ったか、セラフオールがシリユートをスカウトの声を掛ける。

「な…？れれれ、レヴィアアタン様、何を、いきなり…？」

「ちよっ…？お姉様？」

「あたしの駒なら、シリユートちゃんでも転生出来ると思うんだ☆！」

そうだなあ…戦車ルークと騎士ナイト、どっちが向いてるかなあ？♪」

テンパるリアスを後目に、勝手に話を進めようとするセラフオール。

しかし、シリユートは、

「すまないが魔王レヴィアタンよ、以前、リアス部長達にも言った事だが、俺は人間を辞めるつもりは無い。

悪魔とは基本的には上下が無い、50：50を条件に、協調路線を組んだんだ。」

セラフオールの申し出を、あつさり一蹴する。

そして、

「そもそも俺は、赤龍帝である前に、女神アテナの聖闘士セイント。

俺が仕えるのは、アテナだけだ。」

「え!」「はい?」「え、えっ!」

次のシリユールの言葉に、会議室内の、3人の純血悪魔が目を丸くし、  
「し…シリユーちゃんて、ロ…○リコンだったの？」

「はああああああああああくっ!？」

◇シリユールside◇

「シリユール先輩、サイテーです。」

トーチカちゃんとお付き合っていたのは、ロリオンを誤魔化す為の、カムフラージュだったのですね？」

待て待て待て待て!!

違う！誤解だ!!

おい、匙と木場、お前達も、さり気に距離を空けて遠ざかろうとするな!!

レヴィアタンの誘いを断るのに、アテナの名前を出したのが失敗だった。

世界が変われば、理も変わるか…

リアス部長から説明して貰ったのだが、この世界に於けるアテナがまさか、『白いブラウスの上にクリーム色のベスト、紺色スカートな制服に、猫耳を模した様な青いニット帽を被った銀髪の、見た目が小猫より背が少しだけ高い程度なロリ女神』だったとは…

おかげで突如として沸いた、ロリ疑惑。

「…」

皆の視線が冷たい。

理論上、絶対零度以下の温度は存在しないと云われているが、それは嘘だ。

特に子猫と、先程、何やら言い掛かりを突けてきた巡を筆頭に、支取先輩と新羅先輩を除く、生徒会女子の視線が凄く痛い。

友よ…俺は今、正にお前以上の…絶対零度以下の凍気を体感しているぞ。

幸いにも この世界のアテナは、聖闘士や、それに似たような眷属を持つてはいなかった為、アテナはアテナでも、件のロリ神とは別の神だと、何とか無理矢理に納得して貰ったが…



「さあ、皆、準備は良いわね？」

「はい!!」

そして深夜0時、オカルト研究部の部室に転開された転移魔法陣の前に部員が集結。

その転移先は、堕天使が潜伏しているとされる、町外れの廃教会…。

## 墮天使

深夜0時過ぎ、駒王町の町外れにある、廃れた教会。

オカルト研究部部室より、転移魔法陣を用いて、その正面門に推参したオカ研メンバー。

「う、おおお…」

「か、神崎君、本当に大丈夫かい？」

「あらあらあら、シリユー君が悪魔でないからか、それとも、シリユー君自身の体質なのかしら？」

門の前で地面に蹲り、項垂れるシリユーの背中を、木場がさすっている。

「うくん、まさかの転移酔いとはね…」

◇シリユーside◇

「ちちリユー先輩、大丈夫ですか？」

目がクラクラですか？

頭がグラグラですか？orzですか？」

「うう…小猫、貴様、後で覚えてろ…！」

クツ！あの『アテナの聖闘士<sup>セイント</sup>発言で降って沸いたロリコン疑惑を、何とか払拭出来た代償に俺は、現在付き合っている彼女の容姿とも相成り、今度は少なくとも、オカ研と生徒会では、『きよぬー属性』と認定されてしまった。

いや、此方は あながち否定出来ないと言えは出来ないが、これだけは言っておく。

俺はトーカーとは別に、胸が大きいからと言う理由だけで、付き合っている訳では、断じてない！！

ま、まあ、要因の1つである事は、間違いないが…



シリユーにとっては初めての魔法陣転移。

悪魔ではないせいから：転移空間の中、如何に聖闘士セイントと云っても、その肉体自体は生身の人間と変わらないシリユーは思う様に身動きが取れず、木場に肩を借りる形で移動していた。

そして、視覚的にも体感的にも、上下左右の認識が出来ない歪んだ空間を進む中、その空間を抜け、現世に出た瞬間に、まるで乗り物酔いでも起こした様に、体調を崩してしまったのだった。

シリユー自身、正直に言つて、少しばかり舐めていたのは否めない。

嘗て『嘆きの壁』から『エリシオン』を目指した時と同じ様な感覚だと思つていたシリユー。

しかし、その実は全くの別物だった。

「…さあ、皆、改めて行くわよー！」

少しの時間が経ち、漸く快復。

このロスにより、オカルト研究部メンバーは、予定より約10分の遅れで、教会に突入する事になる。



「…で、部長、どうやって中に入るつもりですか？」

「そうねえ…とりあえず、ドアには鍵が掛かっているから…」

「正面突破!!」

ばきいっ!!

「!!!」

朱乃の「どうやって入る?」…の間に、リアスが思案している中、シリユーは惑う事無く施錠されている玄関の扉を蹴破り、突入。

「「「ななな…!?!」」」

「あらあらあらあら?」

呆気にとられながらも、リアス達が それに続いた。

「し…シリユーのお馬鹿ーっ!!」

あんなに派手に入ったりしたら、皆、起きちやうじやないの!!」

「…夜襲の意味が、ありません。」

「何を言っている！」

不意打ちなど、卑怯者のする事だ!!」

「お願いだから、卑怯者になって！」

墮天使の部屋を探し走りながら、シリユーに文句たらったらのリアス達。

バキッ

「…っ!?!」

そんな廊下を走っている中、あの派手な侵入の際の大音に、何事だと驚き起きてきた、寝間着を着た儘の男に対して、小猫が左ストレートを顎にお見舞いし、その場で再び眠らせる。

「なかなかのパワーだな…」

小柄な彼女からは、想像し難い場面を見せられ、思わず感心するシリユー。

「小猫に使った駒は戦車<sup>ルーク</sup>。」

その駒の特性で、あの娘は驚異的なパワーと防御力を得てるの。」

「へえ…?」

どたどたどたどた…

そして、この騒ぎを聞きつけ、

「部長、新手です！」

廃教会に、人知れず身を潜めていた、墮天使に従う信徒達が集団で押し寄せ、

「せえいー！」

シユタ…

「かはっ…っ!?!」

侵入者に対し、銀の棍鎚で殴り掛かってきた1人の男に、木場が一步前に歩み寄ると、次の瞬間、脇に携えていた剣で一閃、床に平伏させる。

「木場、殺ったのか?」

「いや、峰打ちさ。」

「成る程、戦車<sup>ルーク</sup>の小猫がパワーなら、騎士<sup>ナイト</sup>のお前はスピード特化という訳だ。」

「はは…よく言うよ、視えていた癖に。」

この攻防が引き金となり、教会の狭い廊下での、堕天使眷属とオカルト研究部との、戦闘が始まった。

…が、

「でやつー！」

「…えいつ!!」

「せいー！」

それはシリユー、子猫、木場により、瞬時に収束。

「あらあらあら？私の出番は、無かったみたいですね？」

バチ…

右手に帯びていた雷を消した朱乃が、少しだけ残念そうに呟いた。

「いや先輩、怖えーよ?!」

《《》》

「この先かしら…」

恐らくは教会の責任者…神父の部屋と思われる。

その異様に天井が高い部屋で、地下へと降りる、隠し階段を見つけたリアス。

「さあ、行きましょう。」

リアスを先頭に、その階段を降りようとした。その時、

「死ねっ!!」

「!!」「!!」「!!」

天井から、黒い翼を広げた1人の男が、光る槍を構えて襲い掛かってきた。

「危ない、部長!ブーステッド・ギア!!」

『Boost!!』

ガキイツ!

急降下しながら振りかざす、堕天使の光の槍を、シリユーが自身の  
セイクリッド・ギア  
ブーステッド・ギア  
神器、赤龍帝の籠手を発動させて受け止める。

「くっ…貴様、神崎孜劉?」

「また遭ったな…!」

その男は前日、シリユーを襲った堕天使。

「くくく…この寂れた教会に殴り込みを掛けた輩が来たかと思えば、まさか貴様だったとはな…！」

そして、その貴様が悪魔…しかも、グレモリーの者と、共に行動しているとは！

くつくく…面白い！」

「ふ…今日は逃げないのか？」

殺気を込めた不気味な…自信に溢れた笑い顔で語る堕天使に対し、シリューは不敵な顔で話し掛け、

ぼん…

「この おチビちゃんは、かなり強いぜ？」

「むう…？」

小猫の頭に手を置いて、シリューは更に言葉を続ける。

「昨夜は俺の正体を知った途端、ビビって逃げ出した奴が、今日は余裕だな？」

”おチビちゃん” 呼ばわりで少し頬を膨らませている子猫をスルーして、挑発じみた発言をするシリューに対し、堕天使の男は「えらい、黙れ黙れ！昨日は少しだけ、驚いたただけだ!!」

その不気味な笑顔を怒りの表情に一変、手に持った槍で襲い掛かってきた。

ガシイッ！

その攻撃を受け止めたのは木場。

その両手で持っているのは、先程の日本刀ではなく、黒い刀身から妖しい黒き光を放つ西洋剣。

シユウウ…

「な…これは…!？」

互いの武器が交わった瞬間、堕天使の光の槍は、木場の持つ剣の黒い闇に喰われる様に、小さくなる。

「…光 喰 剣。」

僕の剣は、光を喰らう！」

「ちいっ！…転生悪魔が！」

貴様も神器 遣い いか!!」



怒りを露わにする墮天使の槍を受け止めながら木場は、  
「部長、皆、この墮天使は、僕が引き受ける！」

皆は先に、下に降りて！」

この場は任せると、他のメンバーは先に進む様に促す。

「：分かったわ、祐斗。」

「お任せしますわ。」

「信じています…。」

「じゃ、後でな。」

木場に それぞれが声を掛けると、リアス達は、階段を駆け降りて  
いった。

》》》

「まさか、大人しく皆を進ませてくれるとは、思ってもみなかつたよ。」  
「フーン！ 貴様を殺した後、挟み撃ちにした方が、効率的だと思った迄よ  
!!」

ブウン…

そう言うのと墮天使は、光の槍を もう一本作り出し、木場に斬り掛  
かる。

タツ…

それをバックステップで躲し、改めて構えを取る木場。

「成る程、やっぱり あの下に、他の仲間が居る訳だ。」

「な…!?!」

「神崎君も言ってたけど、君って かなりチョロい墮天使みたいだね  
？」

「ななな…!?!」

恥ずかしさからか、一気に顔を赤くする墮天使。

「名乗らせて貰うよ。」

リアス・グレモリーが騎士<sup>ナイト</sup>、木場祐斗！

いざ、参る!!」

「ふっ、面白い、グレモリーの騎士<sup>ナイト</sup>よ！」

ならば俺も名乗ろう！

我が名はドーナシーク！

至高の墮天使にして、貴様を殺し、貴様の仲間を屠る者だ!!」

先程の気恥ずかしさを誤魔化す為か、木場の名乗りに便乗し、普段では絶対に張らない様な大見栄を張った墮天使：ドーナシークが、両手に光の槍を携え、目の前の敵に向かい、飛び掛かった。

《《《

タツタツタツタツ：

リアス達が階段を降りた先は、建物の正面玄関を開けた先にある礼拝堂よりは小振りだが、それでも それなりの広さを持った地下礼拝堂だった。

「ようこそ：グレモリーの皆さん。

そして：赤龍帝！」

そこに待ち構えていたのは4つの人影。

ボデイコンスーツを身に着けた蒼い髪の女。

ゴスロリファッションの金髪の女。

ボンテージ姿の黒髪の女。

皆、隠す事無く、墮天使の証である、黒い翼を曝し出している。

そして もう1人、白い礼服の上に黒い法衣を纏った、白髪の若い男。

どうやら この男は、人間の様だ。

「あらあらあら、皆さん、真夜中の訪問ですのに、揃って出迎え御苦勞様。」

皮肉を込めた朱乃の言葉に、

「馬っ鹿か！馬鹿なのか？」

っーか馬鹿だろ、オマエラ！

真夜中だっっーのに、あれだけ派手な音を立てて侵入された日にな、誰だっけ気付くっつての！

俺ちゃんの安眠、返しやがれ!!」

神父の格好をした、白髪の男が噛み付いてきた。

「大体、こんな時間帯に攻めてくるっつてオマエラ、いくら糞悪魔だからって、その辺りの常識も無いのかよ？

特に、そのこの2人！

その無駄に成長した、おおくつぶあくあい！…ばつかりに栄養が行っちゃって往つちやって逝つちやって、肝心な脳味噌の方は すっからかろん…ですかあ？

あ、そつちの おチビちゃんは…ん、何かゴメンね…って、おわつとお!？」

ガシャアン！

神父らしからぬ、下品な言葉を投げる白髪の人に、子猫がベンチを投げつける。

「あ…アつブねーなあ、いきなり何しやがるんだ、このチビ！

テメーも一応 学生なら『人の話は最後まで聞け』って習ってるだろーがあ!？」

ベンチを躲した神父が、子猫に怒鳴りつけた時、

「フリード、少し、黙れ。」

「へ…へい、カラ姐さん。」

ボデイコンの墮天使が、これを諫めた。

「…どうでも良いが、互いに殺る気は満々なんだ。

御託は良いから、さっさと始めようぜ？」

そして口煩い神父に呆れ顔のシリユーが、話を前に進めようと、切り出した。

「うふ…そうね、赤龍帝。

せっかく、此処まで来たんだから、もてなてあげないとね？」

ザツ…

以前 会った時は、他校の女学生の姿をしていた、今はボンテージを着込んでいる墮天使。

立ち位置からリーダー格と思われる、その女の墮天使が それに応え、その場の全員が、それぞれ戦闘の姿勢を構える。

「…あのウザイ男は、俺が戦ります。

リアス部長は あのボンテージ、姫島先輩はボデイコン、そして小猫は、あの ちんちくりんを「ちよつと待て！ちんちくりんって何っすか！

ひよつとして、ウチの事っすか!？」

このシリューの台詞に、金髪の墮天使が、顔を真っ赤にして怒り出す。

しかしシリューは、

「喧しい！貴様の他に、一体 誰が居ると…言う…のだ!!」

「…シリュー先輩、何故、言い躊躇ったんですか？誰か、想像しましたか？」

これを逆に怒鳴り散らす。

…小猫にジト目で睨まれながら。

「大体、レイナーレ姉様がボンテージでカラワーナがボディコンなら、ウチはゴスロリって表現するのが流れじゃないツスカ！

ウチが嫌いなんスか!？」

「あー、そうだよー!」

「なっ…!?何スカ、それ？」

ウチがアンタに、何かしたっスか!？」

「しただろー!」

「はあっ!？」

2人の言い争いは続く。

「そっちの2人は兎も角、貴様は よりによってデートしてる最中に、『好きッス。ウチと付き合って欲しいッス。』とか言ってきたやがって!

あの後、凄く修羅場たいへんだったんだからな!!」

「」「」「……………」

このシリューの言葉に、空間が まるで時が止まったかの様に、静寂に包まれた。

「あぁー、無いわー、ミッテルトちん。

流石に、そ・れ・わ・無いわー!」

コクコクコクコク…

白髪の神父、フリードの台詞に、リアス、朱乃、小猫、そして残る墮天使の2人も、無言で何度も首を縦に振る。

「な、何スカ、皆の その反応わ!？」

3人共、どっちの味方ツスカ?」

「いや、敵味方関係無く、正しい・正しくないのケジメは付けておくべ

きだ。」

「か…カラワナー…?!」

四面楚歌に陥り、半泣き顔となった ちんちくr…小柄なゴスロリ墮天使ミツテルトを諭そうとしているのは、リアスや朱乃にも決して劣らない体躯をボディコンに身を包んだ墮天使、カラワナー。

「赤龍帝よ…その件に対してだけは、何か部下の者が何と言うか、その…すまなかった。」

「レイナーレ姉様まで…?!」

カラワナーには劣るが、それでも世の健全な男を墮とすには、十分な肉体をボンテージで纏ったレイナーレも、この事だけはと謝罪する。

「おい、そのイカレ神父、貴様さつき、深夜の襲撃に対して常識云々といっていたが、そういう発言は、身内の常識を正してから謂うべきではないのか?」

「うう…しいまちえくん…」

「フリドオ…?!」

そしてシリユートの指摘に、敵ながら それは正論だと、フリードも素直に頭を下げる。

「そもそも俺は、お前みたいな女は好みじゃないから、あの時のアレは、無駄に修羅場つただけな行動だったがな。」

ピク…

「な、何スカ それは?胸ツスカ?

あの時の女みたいに、ぼいーんぼいんじやないと駄目とでも言いたいんスカ?

アンタはアレツスカ?

おっぱい星人ツスカ?!」

シリユートの台詞に、孤立化で凹んでいる、涙目なミツテルトが また顔を紅潮させて怒り出した。

「いえ、違います。」

シリユート先輩は、おっぱいドラゴンです。」

「…小猫、後で話がある。」

…どうぞやら小猫のフォローは、シリユートの  
お気には召さなかった  
様だ。

はぐれ悪魔祓い

》》

ガキイン!!

「ひゃっはーっ!!流っ石は赤龍帝く!

強いザンスねく(ガン!) うわらばっ!!」

祝福を受けた、聖火と聖水で鍛えられた、聖銀の短剣。

その刀身を媒介にした光の長剣を、フリードが振り翳すが、その一撃は赤い籠手に弾かれ、逆に今度は、シリユウのカウンターの拳を顔面に受けて、吹っ飛ばされてしまう。

先程の金髪墮天使を中心とした、コントさながらなやり取りが終わった後、一応は集団戦ではあるが、実質的には1vs1の戦いが4組、繰り広げられていた。

「約1名程、不安な人が居るのでな、早々に決めさせて貰うぞ!」

チラツと、墮天使と戦っている、他の仲間達の様子を見て、シリユウは宣言する。

》》

「何時まで逃げられるのかしらね?!

お前は『もう許して下さい、お姉様!!』って泣きながら許しを乞う迄、痛めつけてやるよ!

尤も その後、赦さずに殺すけどな!」

「くっ…!!」

カラワーナが仕掛ける、光の槍の鋭い突きの連打を紙一重で、朱乃は躲していく。

ずばあっ!!

「きゃあっ!?!」

しかし その槍が、遂に朱乃を捕らえた。

光の刃は、肌からこそ届きはしなかったが、制服の左半分を斬り裂き、文字通りの半裸状態となる朱乃。

「ぬっほほ〜〜〜いっ!!

見ろよ見ろよ見て見ろよ、赤龍帝え〜い!!

あのポニテな糞悪魔の お姉さん、左半分すっぽんぽくん♪だぜえ  
〜!

いやいやいや、後ろ振り向いた瞬間にい、ズツバアツ!…みたいな  
卑怯な真似は、しにやいからy(バキツ)どんきほーてっ!!」

紅い籠手と光の剣との鏢迫り合いをしていたフリードが、位置的に  
シリユーを挟み、正面に立っている朱乃の霰も無い姿を見ると鼻息を  
荒らげ、眼福とばかりに目を煌めかせる。

そして他意は無く、純粹に男として、目の前の自分に拳を向けてい  
る男にも、『あの素晴らしい艶姿に祝福を』とばかりに誘いを掛けてみ  
るが、その応えは渾身の右フックだった。

「またもや吹っ飛ばされてしまうフリード。」

「姫島先輩!」

「此処でシリユーが振り返ると、そこには朱乃の姿はない。」

「…姫島…先…輩?」

「あらあら、シリユー君?」

「私は此方ですわ♪」

「え?」

「声が聞こえたのは、部屋の上の方。」

「そこには、悪魔の翼を広げた朱乃が宙に浮いていた。」

「……………」

「制服半分を斬り裂かれた半裸状態…ではなく、白衣に緋袴、所謂巫  
女服を着用して。」

「…チッ!」

「誰にも聞かれない位の、小さな舌打ちをするシリユー。」

「何々、何ツスカ〜!」

「ウチに対抗して、コスプレッスか〜?!」

「コスプレ? あらあら、と〜んでもない。」

「これが私の、戦いの装束ですわ。」

「そして その姿に、金髪のごスロリ墮天使が何故か怒った顔で、指  
を差して叫ぶが、

「戦いの最中、余所見するのは良くないと思う…えいつ!!」



「きゃんっ!!」

相手をしていた小猫の前蹴りを、まともに浴びてしまう。

…スタツ

翼を閉じ、床に降りると、再びカラワーナと対峙する朱乃。

そんな朱乃にカラワーナは

「ふん！喚装がどうした！

そんなの、珍しくも何ともないわ！」

そう言いながら、またも、光の槍の連続突きを繰り出した。

》》

「どうした、リアス・グレモリー！」

どうやら接近戦は、苦手みたいね？

だったら この儘、大人しく殺られてしまいなさい!!」

「…このっ！」

「あは♪危ない危ない♪」

レイナーレの光の槍の猛攻を、辛うじて避けているリアス。

この墮天使の言う通り、リアスは接近戦：格闘戦が実は得意ではなかった。

遠距離から中距離の間合いで放つ、魔弾の攻撃：それが彼女の得意とする戦法。

それを承知しているレイナーレは、距離を空ける事無く、執拗に詰め寄っての攻撃を繰り返していく。

リアスも魔力を込めた、徒手での攻撃を仕掛けはするが、その付け焼き刃の拳は、目の前の墮天使には、決して当たる事は無かった。

》》

BANG!!

突如、地下礼拝堂に木霊する発砲音。

「き、貴様…」

「にゃっははははははははー！

やっぱし素手にゃ、飛び道具っしょく？

教会（裏）の祝福を受けた、聖銀の弾丸！

糞悪魔だけでなく、糞悪魔に味方したり、糞悪魔に頼み事したりする、糞人間だって、普通に殺せやすぜ〜い！」

何時の間にか、フリードの左手には、金と銀の装飾が施された、シルバーメタルの拳銃が握られていた。

ぼた：

シリユウの頭部から、血が流れ落ちる。

フリードが至近距離から不意に放った銃弾を、シリユウは辛うじて直撃は避ける事が出来るも、顛を掠めてしまう。

「銀の弾丸だと…貴様、まさか!？」

そしてシリユウの顔が、怒りの表情に変わる。

別に、いきなりの銃の使用に対して、卑怯者呼ばわりするつもりも、それによるダメージで、キレた訳でもない。

前日の生徒会との会議の中で話に上がった、数日前に駒王町で起きた殺人事件。

被害者は、アパートで一人暮らしをしていた、23歳のフリーターの男。

それは玄関や外側の窓等は鍵が掛けられた中の、密室状態での犯行。

両手を大きく広げた、まるで十字架を象る様に、天井ギリギリの高さで壁に張り突けにされた死体には、無数の刃物による刺し傷や斬り傷。

そして、直接の死因と思われるのは、眉間への銃撃。

ニユース曰わく、死体からは、その眉間だけでなく、合計5発の『純銀製の弾丸』が体から摘出されたと云う。

「あゝ、アレですか〜？」

そつおでーつす！アレは俺ちゃんが、犯人どえ〜つす!!」

悪びれる事も無く、あつさりと自分の犯行だと、フリードは認める。「だってだって、だあつ〜てよ、仕方無えじゃんよ?」

ありや、糞悪魔に お願いする糞人間だからよくお!

…殺されて、当然じゃね?…ってか、糞悪魔ぶつ殺すだけでなく、そーゆー輩に お仕置きしちゃうつてのも、俺ちんの仕事ですか

らーっ!!」

「ああ、その人が、悪魔と契約していたのは、俺も知っているよ。」

元々、近所との人付き合い等も良く、その周辺からも、明るい好青年と云うイメージを持たれていた被害者。

ちよつとした見栄を張った事により、近所に住む中学生の家庭教師を務める事になった被害者だが、高校卒業の学歴、しかも決して当ても優等生であった訳ではない彼がこなすのは、少し無理があった。

そんな彼が喚んだのは、ソーナの眷属の1人の大学生。

この人狼悪魔から、家庭教師に足りうる学力を持つべく、彼は毎晩の様に、先に勉強を教わっていたのだった。

「ん〜な事情なんか、知らねっつーの!」

どつちみち、糞悪魔に頼ってる時点で、アウトだろーがよ!ばきゅーん!!」

B A N G ! B A N G !

イカレ神父: その形容がピッタリな、舌をだしての歪んだ嗤い顔で、引き金を引くフリード。

しかしシリユーは、今度は完璧に銀の弾丸を躲すと、

「でえやあ!!」

ぶうん…

左手: ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手による拳の一撃を繰り出すが、

「いや〜ん、怖い〜!!」

それを巫山戯た口調ながら、ギリギリでフリードは躲す。

「あゝーっ!もう、まっぢ、意味不明なヤツだな!

糞悪魔と契約する様な糞人間殺って、何が悪いんですかあ〜?…だっつの!

納得出来る様、3行で説明しやがれ!!」

余りにも真面目過ぎ、自分とは対極の存在と感じられるシリユーに対し、フリードが鬱陶しそうに吠える。

「黙れ!俺には分かるぞ!

貴様は それを口実に、単に殺しを愉しんでいるだけだろうが!!」  
「にゃっは♪バレてた? (≡▽≡)ゝ」

悪魔祓いエックソシスト：『神』の名の下に、教会（表）から悪魔や、それに与する者を断罪するのが本来の役割。

だが、その断罪、即ち殺害行為そのものを好み遂行する異常性危険性により、教会を追放された者も少なくはない。

そして その者達の多くは このフリードの様に、墮天使サイドに身を寄せては”はぐれ悪魔祓い”として、正義と称して殺戮を愉しんでいた。

「をいおる、先に言つとくがな、俺っちは こー見えて、バンペー一般人にや、手エ出しちやいねゝぞ？」

で、もー回聞くがよ？糞人間殺って、何が悪いんだ？

結果的に世の為人の為、ついでに俺ちんの為になつちやってるだろ  
うがよ！」

「黙れ！結果的には どうであれ、仮に それが悪人だとしても、己の欲求と快楽の為に人の命を奪う等、それは決して許される事ではない  
！！」

バサア：

シリューの咆哮が地下礼拝堂に響くと共に、駒王学園の制服のブレザー、ワイシャツが宙を舞った。

「な…」

「ひいっ!!」

「あらあらあらあら…」

「へえ？」

「…ハア、またですか。」

「ぷはあっ！眼福眼福！」

脳内保存、脳内保存ツス!!」

その様を見て、様々な反応を表す、悪魔と墮天使の少女達。

そして、

「な…？おおお、オメー、何いきなり脱いじやってんの？

無いわーってか、引くわー。

もしかして露出狂の気でも あるんじゃねーのk（ドカツ）あ  
じやつぷわーツ!!」

シリュー怒りのハイキックが、フリードの側頭部にヒットした。

◇シリューside◇

「フリードオーードオーオっ!!」

バキツ!!

「ぎゃわん!!」

ダウンしたフリードに、俺は追い討ちを仕掛ける。

別に、あの『露出狂』という言葉にキレた訳では、断じてないぞ!

「部長!皆!!」

「木場?」

そこに、木場が駆けつけて来た。

「木場、あの墮天使は?」

「……!」

俺の質問に、木場は全身ボロボロになった制服の右脇腹部分を抑えながら、流血した跡があり、ボコボコになっている:最早”学園2大イケメン”の一角が形無しな良い顔で微笑みかけ、親指を上に向けてのサムズアップで返してきた。

かなり、苦戦したみたいだな。

スチャ…

「神崎君、助太刀するよ!」

黒い剣を構える木場だが、

「俺は大丈夫だ!少し休んでろ!!:と、言いたいが、お前は部長のサポートを頼む!」

正直、部長が相性的に、一番キツイ!」

ガイン!

光の剣と赤い籠手を交える俺が木場に指示を出すと、

「:分かった。また、後で!」

「ああ、後でな!」

木場は、墮天使と交戦しているリアス部長の許に向かって行った。

》》》

「…それにしても、神崎君は何故、上半身裸だったのかな？」

解き放て！ 龍（ドラゴン）の波動！！

「…えい！」

バタン！

「きゃああつ!？」

ゴスロリの金髪墮天使、ミッテルトの光の槍の投擲を躲した小猫。直後、その低い身を、更に低くした姿勢で一気に距離を詰めると、片足タツクルでダウンを奪い、マウントポジションを取る。

そして、制服のポケットから取り出したオープンフィンガーグローブを両手に嵌めると、

「…私は！アナタが死ぬまで！殴るのを止めません！」

冷たく言い放った。

「……………」

その静かな迫力に、顔を引き攣つらせるミッテルト。

「ええ〜とお、ギ、ギブは無しっスかあ？」

つて、ゆうかあ！ギブギブ！ 降参ッス！

ギブするッス!!」

「…だが、断ります。」

「い、いやああああ〜!!…ッス！」

》》》》

「雷よおっ!!」

バリイッ!

朱乃が天高く右手を掲げると、その右手に雷が落ち、その雷はその儘、まるで帯の様に朱乃の右手に纏わりついた。

朱乃は その手を、自分の目の前で跪いている墮天使、カラワーナに向ける。

「うふふ…さあ、覚悟は宜しいかしら？」

「あわわわわわ…ひいいっ!？」

身を包んでいたボディコンスーツは既にズタズタに引き裂かれ、見方を変えたら全裸以上に官能を誘う様な体躯を、恐怖に脅え、まるで自らを庇うかの様に抱き締め、ガタガタと震わせるカラワーナ。

「も、もう お許し下さい、お姉様!!」

既にプライドも何も無く、只単に、眼前の敵に惨めにも泣きながら命乞いをする、只の雌と成り下がった墮天使に、背中に悪魔の羽を生やした巫女装束の少女は、

「あらあらあらあら?」

もう お仕舞いのですの?」

もう少し、抗って欲しい物ですわあ?」

そ・れ・に・同じ事を言われた時、アナタは赦したり…す・る・の・か・し…ら?」

「ひいひいひいひいっ!!?」

バチバチバチ…」

迸る雷を帯びた右手は前に差し出した儘、悦に浸った妖艶な顔を、何か物足りなさそうな顔で、左手の人差し指と中指を舌嘗め摺りするのだった。

》》》》

ガアン!

「おいおい、あの糞悪魔の姉ちゃん、少し怖過ぎやしねーか?」

いくらグレモリーの女王だからってよお、キャラまで弩Sな女王様く!である必要性は無えだろうがよ、おい!?!」

シリユートの左拳を白銀色の拳銃でガードしたフリードが、まるで自分が、女王の責め苦を受けているのをイメージしたかの様な、今にも泣き出しそうな顔をして話す。

真剣に怖がっているのか、通常の巫山戯過ぎた口調と比べたら、かなりマトモな喋り方だ。

それに対してシリユートは、

「ああ、姫島先輩だけは、絶対に怒らせない様にしよう…」

やはり真剣に、そう言う他になかった。

》》》》

「死になさい、リアス・グレモリー!!」

「…!!」

ガキイイン!!



「…お待たせしました、部長!」

「ゆ、祐斗!」

レイナーレがリアスの脳天目掛け、光の槍を振り下ろした瞬間、突如として現れた木場が、2人の間に分け入り、光ホーリー・イレイザー 喰 剣で光の槍を受け止めた。

「ええ、助かったわ、祐斗…って、何、アナタ、傷だらけじゃないの、大丈夫?」

「すみません、あの堕天使、予想以上に手強った物ですから…」

「あ、あの堕天使って、まさか!」

貴様、ドーナシークを殺ったとでも言うのか?!」

既に全身ボロボロの体を押し、己の主の前に駆けつけた木場と、それを心底心配そうに気遣うリアス。

その2人の会話を聞いたレイナーレが、驚きの声を上げる。

「彼のシルクハットでも、持ってくれば良かったのかな?」

「ぎい…貴様…!!」

信じられないという顔のレイナーレに、微笑みながら木場が応えると、レイナーレは今度は顔を歪ませ、金髪の少年を睨み付ける。

「部長、僕が前衛に立ちます。」

部長は隙を突いて、『滅びの魔力』を!!」

「え、ええ、分かったわ!」

リアスが数歩、バックステップで後退すると同時に、木場がレイナーレにダッシュからの、闇を纏う剣での斬撃を仕掛ける。

例えば女だとしても、堕天使…敵に対して微塵の容赦の無い、鬼気迫る顔での猛追に、レイナーレは一瞬だが怯んでしまい、光の槍でのガード一辺倒となってしまう。

しかし、木場の持つ剣は光ホーリー・イレイザー 喰 剣。

互いの武器を交える度に、レイナーレの槍の光は木場の剣の闇に喰われ、徐々に小さくなっていく。

「ちい…」

たまらず黒い翼を展開し、空中に回避するレイナーレ。

小さくなった槍を木場に向かって投げつけると、己が魔力を集中さ

せ、先程より強大な光の槍を生成、反撃の構えを見せる。

…が、

チエツメイト

「…王手よ。」

「な…!?」

そのレイナーレに、リアスが右掌の前に作った、巨大な深紅の魔法陣を掲げていた。

「く、くそーあと数日後には、あの女がこの町に着いていたのに！  
そうすれば、そうすれば、私は至高の墮天使になれたと云うのに…

！

アザゼル様…シエムハザ様ああーっ!!

《《《

「まあ〜じえ〜っ?!?!姉さん達、全滅う?」

ドーナシークの旦那も、上で殺られてるみたいだし?!

シリユーと攻撃を交わしながら、思わず絶叫するフリード。

○子猫 v s ミツテルト ●

(マウントパンチ)

○朱乃 v s カラワーナ ●

(雷撃)

○リアス (&木場) v s レイナーレ ●

(滅びの魔弾)

○木場 v s ドーナシーク ●

(??)

既に一緒に戦っていた、3人の墮天使の姿は無く、只、地下礼拝堂の床には、無数の黒い羽根が散乱しているだけだった。

「お〜い、赤龍帝?」

ボスも殺られちゃったみたいだし、もう俺ちん達が殺り合う理由な  
ん

「この攷劉、貴様の様な外道を この儘放っておくつもりは無い!」  
「でっすよね〜っ?」

そーゆーと、思ってたよ!!」

後ろ盾を失った今、自分からすれば、これ以上の戦闘：殺し合いは無意味だと、休戦を持ち掛けるフリード。

だがシリューは どうあっても、この快樂殺人者を赦す心算は無く、これ以上の犠牲者を出さない為にも、この場で確実に斃し、決着させる気である。

事情が事情なだけに、普通に殺人犯として、警察に突き出したりする訳にはいく筈がないのだ。

「ちつくしよー、この糞露出魔があー！」

テメーが その気なら、俺ちんだって!!」

B A N G B A N G !

「きゃっ!?!」

「「ぶ、部長!」」

フリードの放った2発の弾丸は、礼拝堂奥中央の、キリスト像の心臓部、そしてリアスの足下に着弾する。

それぞれが請け負った相手を倒し、残るはフリード1人。

これを全員で一気に攻撃し、終わらせようとしていたリアス、オカ研メンバーだったが、シリューが基本的に1 v s 1を重んじる聖闘士セイントの性さがからか、それを拒否。

それに従い、その勝負の行く末を見守っていたリアスが不意に狙われ、その場の…シリューを含む全員の注意が、リアスに向けられた瞬間に、

「これ以上、やってられっかつの!」

フリードは懐から、ソフトボール程の大きさの球体を取り出し、

B O M B !!

「ケホッ…何なのですか、この煙は?」

その場で床に叩き付けると、小さな爆発音と共に、瞬く間に辺り一辺、濃い煙に覆われた。

タツタツタツタツ…

「じゃ〜あな、赤龍帝〜い！」

あばよ、ばいびー、しやいなら〜!!」

何者かが階段を駆け上る音が、出口の奥から聞こえたと思えば、既に、不本意ながら聞き慣れてしまった、巫山戯た口調の声が聞こえてきた。

実はシリューと交戦中も、いざとなれば直ぐに逃げられる様、部屋の出口近くで戦っていたフリード。

この男からすれば、それが功を奏した形となった。

「くっ…逃げがさん!!」

煙が立ち込める中、シリューも階段に向かおうとした時、

ぼと…ところろ…

階段の上側から、直径約3センチ、長さ約30センチの筒棒が転がり落ちてきた。

その先端に付いている線は、パチパチと小さな火花を散らし、

「い、いかん!!」

DOGOOOOHN!!

派手な爆音と共に、大爆発を起こした。それは周囲を破壊し、階段へ繋がる出口を完全に塞いでしまう。

「クッ、逃げられたか…まさか、ダイナマイト迄持っていたとは…」

未だ晴れぬ煙の中、シリューは悔しさと怒りを顔に隠す事無く、咳くのだった。

◇シリュー's i d e ◇

「…シリュー先輩、1人だけ誰も倒せなかったからって、凹まないで下さい。」

誰も、そんなの気にしてませんから。」

「犯〇ぞ?」

「トーカちゃんにチクリます。」

あと、カンちゃんにm

「すまん。」

小猫よ…彼女や従姉妹の名前を出すのは反則だぞ…

「はいはい、その2人、兄妹喧嘩は後にしなさい。

それからシリュー？」

「どうでも良いから、早く服を着なさい！」

正直、目の やり場に困るのよ!!」

いや部長、別に兄妹じゃないです。

服については…すいません。

…尚、俺が戦闘中に脱ぎ捨てた制服を拾って袖を通してる時、姫島先輩だけは名残惜しそうな顔でコツチを見ていたのは、気のせいだという事しておく。

いや、俺は何も見えていないし、何にも気づいていない。

そういう事しておく。

「…あの はぐれ悪魔祓いを逃したのは残念だけど、一応当初の目的であった、町に巣喰う墮天使の殲滅は果たせた事だし、今日は もう、帰りましょ。

皆、今夜は お疲れ様。」

俺が制服を着終えると、リアス部長は そう言って皆を労いながら、帰り支度とばかりに転移魔法陣を転開し始めた。

でも、俺は、

「…部長、俺はテレポーションで戻りますよ。」

「シリュー？」

もう転移酔いは、こりごりなんだよ。

「この魔法陣は元々、グレモリー家の者と、その眷属悪魔しかジャンプ出来ない仕様だから、その辺りで、きつと無理があったのね。」

部長…それ分かっていて、最初は同行させたんですか…？

「それじゃシリューは もう、直接自宅に飛んでも良いけど、どうする？」

「そうですね、それなら御言葉に甘えて、直帰させて頂きm（バギアツ!!）…!!?」

「わ…キリスト像が…!!」

「な、何なのですか？」



一段落着き、この廃協会を去ろうとしていたオカ研メンバー。

しかし、その時、礼拝堂のキリスト像が、いきなり大音を立てて崩れ落ち、その中から、黒に近い紫色の流動体が、ドロドロと流れ出てきた。

その流動体は赤紫に発光し、ブクブクと泡立たせると、そこから黒い靄のような物を吐き出しながら、まるで意志を持っているかの様に、リアス達の方向に流れ動く。

：いや、明らかに意思を持ち、オカ研メンバーを狙い、突如として動くスピードを上げ、常人と変わらぬ大きさのキリスト像の中に埋め込まれていたとは思えない、質量保存の法則無視な巨体が襲い掛かってきた。

ビチイツ

「…スライム…ですか？」

「ちい、あのイカレ神父の置き土産か!!」

フリードが逃げる直前の発砲の内の1つは、確かにキリスト像に命中していた。

単にリアス…或いは他のメンバーを狙った弾が外れたと思われた一撃は、実はキリスト像の中に潜んでいた、コレを突き付けたのだと理解するシリユール達。

「…このっ!!」

液状の身体の一部を弾く様に飛ばしながらの攻撃を避けながら、木場が反撃とばかりに己の剣の間合いに飛び込むが、

しゅわわ…

「うつく…!?!」

このスライムの体から出ている靄に触れた途端、その場で膝を着き、蹲ってしまおう。

「木場!」

この直後、木場は慌てて駆けつけたシリユールによって、回収される。

「皆、気を付けろ！あの靄は、猛毒だ!!」

「接近戦は危険ね。」

小猫、シリユー、あなた達は下がってて！

朱乃、2人掛かりで吹き飛ばすわよ!!」

「はあい部長……って、シリユー君?」

シリユーの言葉に、遠距離からの飛び道具：即ち魔法による攻撃がベストと判断したりアスが、朱乃とのコンビネーションで撃破を狙おうとした時、それよりも速く、シリユーが飛び出した。

小宇宙<sup>コスモ</sup>で身体全身にバリアを張り、猛毒の靄を物ともしないシリユーは

「でえいー!」

ズバア!

「ちい、駄目か!」

ブーステッド・ギア  
赤龍帝の籠手による、一撃を放つが このスライムの液状ボディには、全くと言って良い程 手応えを感じられない。

どうやら、普通の物理攻撃は、殆ど無意味な様だ。

寧ろ、このシリユーの場合、籠手にも小宇宙<sup>コスモ</sup>を纏わせていたから平気だったが、普通の生身での攻撃は、恐らくは酸性の物質で形成されているボディの前に、逆にダメージを受けてしまうだろう。

》》》》

「…絶対に あり得ません。」

スライムが こんなに強い訳ないです!!」

「ああ…全くだ!」

「2人共、ゲームの やり過ぎよ!」

言った当人達は至って大真面目な心算なのだが、端から聞いていると どう見てもボケているとしか思えない様な発言に、リアスが思わずツツコむ。

「そ、それにしても、私の滅びの力が効かないなんて!」

「私の雷撃も、効果がありませんわ!」

このスライムの特性なのか、恐らくは体全体から発してる赤紫の光が魔法の類の攻撃を緩和してるらしく、下級とは云え、堕天使を一瞬

にして消す程の力を秘めた、滅びの魔力が殆ど効果を成していない。全くのダメージ無効という訳ではないが、大幅にその威力を削られており、朱乃の雷撃は、既に問題外の域である。

「部長、祐斗先輩も心配です。」

「この場は撤退すべきでは？」

「この小猫の意見も、」

「駄目よ、今 私達が逃げたりしたら、コイツは外に出て、町が滅茶苦茶になるわ！」

「コイツの体なら、あの瓦礫の間も簡単に通り抜けられる！」

リアスがフリードのダイナマイトで破壊された、出口を指差しながら言う。

スライムの攻撃。

スライムは、体の一部を千切るかのように周囲に撒き散らし、オ力研メンバー全員にダメージを与えると同時に、

しゅわわああ…

「きやあ!？」

「あらあらあらあら？」

「む…?？」

「なあ!？」

そのスライムの欠片は何故か、女子部員だけの服を溶かしてゆく。

バサアツ

「と、とりあえず、部長達は下がってー！」

「え、ええ…」

「了解ですわ。」

「…はい。」

つい先程、着直したばかりのブレザーとワイシャツを脱ぎ捨てながら、少しだけ顔を赤くしたシリユーが目を逸らしながら、リアス達の前に立つ。

因みに木場は、まだ毒のダメージが抜けておらず、後方で待機状態の戦力外だ。

「スライムの分際で生意気です…」



下着姿の小柄な白髪の少女が、自身の慎ましい胸を両手で隠しながらボソツと呟く中、実質、動けるのが唯一自分のみとなったシリユーが、再び攻撃を仕掛けた。

「廬山龍飛翔!!」

龍を象る鬨気となった小宇宙<sup>コスモ</sup>を身体全身に纏い、まさしく龍そのものとなったシリユーが特攻。

ズサアツ!

この攻撃はスライムの巨体に自らの身体を埋めたかと思えば、次の瞬間、文字通りにスライム本体を突き抜ける。

グロロロロ…

「!!」

この攻撃で、今迄、リアス達の魔法攻撃を含めて、如何なる攻撃に対してもアクションの無かったスライムの体から、唸り声の様な音が立つ。

否、それは紛れもなく唸り声。

原生生物その儘な姿。

前後左右の概念が無い筈の体の中に、目の様な光が2つ灯り、無数の巨大な牙に口、そしてブラツクパープルの半透明な体の中に、様々な臓器の様な器官が形成されていく。

そして それは、シリユーを敵、或いは捕食対象と認識したのか、その巨体を まるで津波の様な形に変えて、覆い被さるかの様に襲い掛かった。

その大波に浚われ、包まれるシリユー。

「シリユーー!」

「シリユー君!」

「シリユー先輩!」

リアス達が叫ぶ中、スライムの体内でシリユーは、  
「パワーアップな心算だったのだろうか!」

普通の人間なら、摂り込まれた瞬間に消化されるのだろうか、小宇宙<sup>コスモ</sup>で身体をガードしている為、その身を溶かされる事はない。

そして その体の内から、目についた臓器の1つに、小宇宙コスモによる  
闘気弾を放つ。

『グロロロロロロロロロっ!!?』

内部からの攻撃だからなのか、魔力でなく小宇宙コスモによる攻撃なの  
か、明らかに苦しむかの様な、蠢き声を上げるスライム。

生物的には新たに臓器等を生成すると云うのは、確かに進化、パ  
ワーアップなのかも知れない。

だが、シリユーからすれば、それは弱点を公開した事と同義に、他  
ならなかった。

「フィニッシュだ！行くぞ、ドライグ！」

『おおつ、相棒！アレ”をやる気か！』

「ああ、ぶちかますぜ!!」

スライムの体内から抜け出したシリユーがフィニッシュ宣言と共に、  
自身の中に宿るドラゴン…赤龍帝ドライグに呼び掛ける。

『Boost!!』

それに対しドライグも、赤龍帝の籠手の能力の1つである、『倍化』  
を発動させて応えた。

シリユーが構えを取る。

両足を やや広く開き、右足を一步、前に踏み出し、左脇を引き締  
め、肘を曲げて前に向けた左拳に右掌を重ねた。

そして…

『Boost!!』

「ド…」

その姿勢から、小宇宙コスモと魔力を高め、集中させながら呟きだした。  
「ラ…」

カッ…

高めた小宇宙コスモと魔力に反応し、左手の籠手に嵌め込まれた碧の宝玉  
が輝きだす。

「ゴ…」

更には木場のブレザーを勝手に拝借した小猫が隣に立ち、同様な  
ポーズを見せて声を重ねていく。

これには思わず、吹き出しそうになってしまうシリユー。

「「??」」

因みにリアス達は、何が起きたのか、何が起ころのか解らない様な、啞然とした表情で、この2人を見ている。

「ン〜:」

そして最大級に溜まった小宇宙<sup>コスモ</sup>と魔力の全てを左手の赤い籠手に集中、左拳を被せていた右手で左手首を掴み、

『Boooooostおっ!!』

「波あっ!!」

左拳を思いつきり、前に突き出した。

カアツ!!

その瞬間、シリユーの拳から放たれる、聖闘士としての小宇宙<sup>コスモ</sup>と赤龍帝としての魔力が融合された、破壊のエネルギー波。

その光る波動が、目の前の巨大な異形の怪物に直撃すると、怪物は断末魔を揚げる間さえ無く、跡形も無く、その場から消えて無くなったのだった。

## ドラゴン波です

「な…何なのよ、今の？」

私の滅びの力とも、違うみたいだけど？」

シリューが放ったエネルギー波は、リアス達が斃した墮天使同様に、スライムを死骸すら残らずに消し去った。

その技の事を問い質すリアスに対し、

「ドラゴン波です。」

「え？今、何？」

「ドラゴン波です。」

シリューと小猫が、声を揃えて答える。

今から約30年前、少年漫画誌で連載され、アニメ化にもなった『ドラグ・ソボール』というコミック作品がある。

その迫力あるバトル描写とドラマ性に、連載が終了しても、未だに人気が衰える様子は無く、数多くのスピノフ作品が描かれ、アニメも幾度となく、再放送やリメイク版が放映されていた。

シリューや小猫は、所謂この再放送世代ではあるが、かなりこの作品を気に入っていた。

そしてドラゴン波とは、この作品の代名詞とも云える、主人公の必殺技である。

作中にて、主人公・空孫悟が体内の精神エネルギーを放ち、敵を倒していたのをシリューは模倣、小宇宙<sup>コスモ</sup>や魔力を用いて自己流にアレンジ、自身の技としていたのだった。

「…因みに私は、ツルリンとブッコロが大好きです。」

「いえ、そんなのは聞いてないから…」

シリューを差し置いて、技の説明と共に、作品について少しばかり熱く語る小猫に、少しばかり呆れるリアス。

「とりあえず部長、此処を出ましよう。」

祐斗君も心配ですし…」

そんなリアスに、朱乃が話し掛ける。

「そうね…シリユー、さつきは直接、家へ帰っても良いって言ったけど、やっぱり悪いけど…」

「了解。その制服、返して貰わないといけませんしね。」

「そ、そうね、そうよね…」

スライムの粘液によって服を溶かされ、ショーツ1枚だけの姿になったリアスはシリユーのブレザーを、そして巫女服の下には何も身に着けていなかった朱乃は、ワイシャツを羽織っているだけの状態だった。

「よいしょ…」

毒に侵され、未だ倒れている木場を小猫が お姫様抱っこし、リアスは魔法陣で部室に向かって転移する。

そしてシリユーも1人、テレポートで部室へと向かって行った。

《《

「部長、一先ず祐斗君は大丈夫ですわ。」

「ありがとうございます朱乃、御苦労様。」

「……………」

部室のソファーに横になり、静かに寝息を立てる木場。

戦闘の後、部室に戻ったオカ研メンバー。

女子部員は部室に常備してある、リアスの予備の制服に着替えた後、朱乃はソファーに寝かせていた木場の手を取り、指先に唇を添えると、直接に体内に侵されている毒を吸い出していた。

朱乃の言葉に、一安心という表情を見せるリアス。

「シリユー先輩、羨ましいとか思っていますか？」

「馬鹿者、別に何とも思っていない。」

朱乃が木場に施していた『治療』を、初めの一瞬、やや引いた感じで見ただ後は、それから視線を逸らしていたシリユー。

そんなシリユーに、リアスの…全然サイズが合っていない、ダボダボ感全開な制服を着た子猫が話し掛ける。

「あ、トーカちゃんに何時もして貰ってるんですね、シリユー先輩、不潔です。」

「大馬鹿者！トーカとは まだ、そこまでな関係には なってない!!」

この小猫の台詞に、顔を赤くして、必死に否定するシリユー。

「へ〜? そうなんだ〜? へ〜?」

「あらあらあらあら?」

此処に木場の容態の無事を確認し、余裕が出てきたリアスと朱乃が、会話に混ざってくるのだった。

…凄く悪い顔をして。

「じゃ、ドコまで進んでるのかしら?」

「興味ありますわ〜。」

絶対に○。ふぱふ位は、させて貰っている筈です。

何しろ ちちリユー先輩は、おっぱいドラゴンですから。」

「ま っ!」

「し、シリユー君、そうなんですの?」

「い…いい加減にしろ、貴様等ーっ!!」

》》》

「原子を破壊する?」

「ああ、それが聖闘士セイントの闘法の基本だ。」

一通り、シリユーの弄りを終えたリアス達は、先のスライムとの闘いについて話していた。

リアスの滅びの魔力でさえ、殆どダメージを受けなかったスライムに対して、有効打を与えていたシリユー。

あくまでも仮説だと前置きして、シリユーが説明する。

「部長の滅びの力というのを、俺は完全に理解している訳ではないが、所詮は強烈な破壊力を外からぶつけ、削っていくだけの物なのだろう。」

「二んんん。」

「しかし、聖闘士の技は、そんな表面的な物でなく、その物質を形成している原子を破壊する所にある。その違いだな。」

「…よく解りません。」

「実際、一番最初に放った普通の一撃は、俺も殆ど手応えを感じなかつ

た。」

シリュー曰わく、只単に拳を撃つのではなく、小宇宙<sup>コスモ</sup>を高める事で放つ一撃により、表面破壊でなく、その奥側、敵の身体を形成している原子その物を砕く…

その概念に基づく一撃が、今回の様な、半液状な肉体を持つスライムに対しても、物理的ダメージを与え、倒す事も可能である…と。

尤も、今回の決まり手は、魔力込みのエネルギー系の攻撃だったが。「小宇宙<sup>コスモ</sup>を燃やした聖闘士<sup>セイント</sup>の拳は、空を撃てば空を引き裂き、大地に放てば大地を崩す。

敵の身体が、個体な場合は勿論、液体だろうが気体だろうが関係ないんだ。

原子その物を破壊するんだからね。」

「つまり、シリューって、例えば霧<sup>ミスト</sup>系の魔物も、拳で倒せるって事なの?」

「ああ、所謂『小宇宙<sup>コスモ</sup>を燃やして物理で殴れ』ってヤツだ。」

「……………」

ぴゅ~~~~~~~~~~~~

部室内に、絶対零度の寒風が吹き荒んだ…様な錯覚に陥るリアス、朱乃、小猫。

「…先輩、滑りましたね。」

「嬉しい!!」



「ちよつと小猫ちゃん、起きなさいよ、もう直ぐ先生来るよ?」

「塔城さん、起きて?」

「ふみや…トーカーちゃん、カンちゃん、あと30時間…」

「…ダメだ、こりや。」

結局は殆ど夜が明ける迄、部室で話していたオカ研メンバー。リアスは木場の様子を見るという事で、その儘 部室に残り、残る3人は、一時帰宅して、殆ど その直後に改めて学校へ…と云った形になった。

教室に入り、自分の席に着いた途端にボタンキュー、眠りこける小





「くくく…腹筋割らせるなし…」

その2つ後ろの席で、腹を抱えて笑うのを我慢しているのは匙である。

▼▼▼

コンコン…

「シリュー、入って良い？」

放課後、オカルト研究部の部室の隣、既にシリューのトレーニングルームと化している部屋の扉を、リアスがノックする。

「部長？大丈夫ですけど？」

シリューは特に入室を拒否する理由もなく、リアスを入れようとするが、

「…シリュー？アナタ、きちんと上に、シャツが何か着てるでしょうね？」

「着ています!!」

やはり『前科持ち』は、信用が無い様だ。

》》》

「アシスタント…ですか？」

「ええ。小猫の お得意様なんだけど、貴方の事を話したら、貴方とも一度、話してみたいと言われたって今、メールが届いたの。」

この住所なんだけど、今すぐに飛べないかしら？」

そう言いながら、リアスが差し出すメモ紙を受け取るシリュー。

「この住所は…分かりますね。」

大丈夫、飛べますよ。」

そう言うとシリューは、部屋の窓を開けると、体を一筋の光に変えて、外に飛び出して行った。

》》》

駒王町内にある、とある2階立てアパートの駐車場に張られた、認識障害の結界の中に立つ、3つの人影。

「ドゥラ〜ゴ〜ン〜…波あつ!!」

ど〜おっ!

掛け声と共に、赤い籠手を纏った少年の左拳から放たれた光弾が、

夜空に浮かぶ三日月に吸い込まれた。

パチパチパチパチ：

「おおく…ブラボー…っ!!」

それを見て、髪の長い細身の男が、感動しながら拍手をする。

「凄いよ、神崎君！」

小猫ちゃんから話は聞いていたけど、期待以上だったよ！」

◇シリユースィde◇

「いや、本当に素晴らしい物を見せて貰ったよ！」

流石は、小猫ちゃんの先輩だ！」

「ははは…」

…この人は森沢さんと云って、子猫の契約者の1人である公務員だ。

この前は、ナントカつてアニメキャラの制服を子猫に着せて、お姫様抱っこをして貰ったらしい。

小猫が昨夜、廃教会から転移する際の、木場を抱きかかえた時の手慣れた感は、コレだったのか…。

そして今回、召喚に応じた子猫が、彼と今夜の依頼…格闘ゲーム【ドラグ・ソボールV覚醒の超ソイヤ人】の対戦プレイをしている時に、俺がドラゴン波を放てるみたいなのを話したら、「一度、見てみたい！」…な流れになり、俺の臨時出張と相成った訳だ。

俺や子猫みたいな再放送組と違い、リアル世代ド真ん中な森沢さん。

俺の、”生”ドラゴン波を見て、凄く感動していたよ。

因みに俺の事は、赤龍帝とか聖闘士とか言えば ややくしくなりそうなので、『諸事情で個人契約が所得出来ない悪魔』と云う風に、子猫が説明していた。

森沢さんも、「悪魔の社会も、大変なんだねえ」と、それで深くは聞く事無く、納得してくれた。

》》》》

「皇帝様、マジにカッコ良過ぎだよね。」

「うで先生、マジ神ですよね。」

「神崎君、キミは あの『神殺の処刑台』とかは出来ないのかい？」  
「あれはリアルじゃ、無理過ぎですよ。」

その後は俺も、対戦ゲームの相手をしたり、ドラグ・ソボールを始め、『コン葛マン』等、様々なゲームやコミック談議で盛り上がった。因みに コレ等は全て、小猫の評価に繋がるらしい。



「シリユー先輩、今日は いきなりで、すいませんでした。」  
「いや、俺も楽しめたから。」

依頼人の森沢と別れた後、小猫はシリユーに対して、突然の呼び掛けを謝るが、シリユーは それを全く気にしてない様子。

ㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿㇿ

「!!」

そんな時、小猫のガラケーが鳴る。

P i …

「しもし…あ、部長……………」

……………はい、先輩も、一緒にいます。

……………はい、分かりました。」

「…何かあったのか？」

どうやらリアスからの連絡らしく、何事かとシリユーが聞いてみる  
と、

「隣の倉庫街に、はぐれ悪魔が逃げ込んだらしく、朱乃先輩と祐斗先輩も、現場に向かうそうです。」

「…で、俺達も出向くと云う事か！」

「…はい。」

…と、云う事らしい。

「よし、それなら、一気に飛ぶぞ！」

がば…

「きやう?!」

そう言うと、いきなり小猫を お姫様抱っこするシリユー。

「……………急時なのは理解しますが、凄く慣れてる感じがするのですが？」

何時も誰かサンに、やっているとしたか思えません。」

「…敢えて否定はしない!!」

そう言うとシリューは、ジト目の小猫を抱えた儘、隣町を目指し飛び立った。

》》》

それから約1時間後、全長約3呎の紫色がベースの斑模様をした、五芒星を象った様な本体に、老人の顔を張り付けた様な異形の悪魔に、シリューのドラゴン波が炸裂するのだった。

シスター、拾いました！

あの墮天使との戦いから、4日が過ぎた。

しかし、オカルト研究部、そして生徒会の面々は、未だ緊張を解いていない。

墮天使レイナーレが、リアルに滅される際に、発した言葉…

くそ！あと数日後には、あの女が この町に着いていたのに！

そうすれば、そうすれば、私は至高の墮天使になれたと云うのに…

！

あの台詞からするに、そろそろ『あの女』と呼ばれた者が この駒王町に来るかも知れないのだ。

もしかしたら既に、町に潜んでいる可能性もある。

尤も、レイナーレ達の敗北により、町に来る事自体を取り止めたと云う線も、考えられるのだが。

》》》

「…只今、冥界の諜報部にも探って頂いておりますが、墮天使と繋がりがあると思われる者が、駒王町に入ったという報告は有りません。」

生徒会室にて、生徒会執行部とオカルト研究部が集まっている中、生徒会副会長の真羅椿姫が、現状を話す。

「積極的に見回りを…とは言いませんが、日常で もし、怪しいと思われる人物を見つけたら、私か椿姫、またはリアスに報告して下さい。

では、今日は、解散とします。

皆さん、お疲れ様でした。」

生徒会長の支取蒼那…ソーナ・シトリーの締め言葉により、周囲に張り巡らせていた、人払いの結界が解かれ、この日の会議は終了した。

この後、生徒会役員は それぞれの業務に就き、オカ研の面々も旧校舎の部室へと足を進めた。

》》》

「さて…と…」

部室隣のトレーニング室で、制服からジャージに着替え、軽く上体をストレッチするシリユー。

「部長、ちよつと町内一周してきます。」

「あー、はいはい。何時でも連絡だけは、取れる様にしててね。」

「了く解。」

リアスに一言告げると、シリユーはダツシユで校外へ飛び出して行った。

「金メダル、狙えるわね…」

2階の窓から その様子を見たリアスが、ボソツと呟く。

《《《

「ふう…少し飛ばし過ぎた…。」

小宇宙<sup>コスモ</sup>無しじゃ、こんな物か…

俺も、まだまだ未熟だな。」

数分後、学園から数<sup>キ</sup>離れた公園のベンチに腰掛け、汗を拭きながら、スポーツドリンクを飲むシリユー。

自身を未熟と言ってはいるが、陸上短距離選手並み…いや、それ以上のスピードを、何<sup>キ</sup>も保って走れる時点で、常人からは「人間か!」…と、ツツコミが飛び交うレベルではある。

「よし、そろそろ行きますか…と。」

立ち上がり、シリユーが再び走り始めようとした その時、

「きゃああっ!?!」

背後から若い女の叫び声。

「!?!」

何事か?…とが振り向いたシリユーの目にに写ったのは、

「な、な、な…」

捲れ上がったローブの下に隠されていた、純白のショーツ…

「うう…うん…な、何で転んでしまうのでしょうか…?」

…ではなく、

「お…おい、大丈夫か?」

「あ、ありがとうございます…。」

修道衣に身を包んだ、金髪の少女だった。



「はあ…シリユール？」

「ここは、ペットショップでも保健所でもないのよ？」

「いや、この娘は犬猫ですか？」

「はわわわ…あ、悪魔さん…ですか？」

…と、いう事は、神崎さんも悪魔さん？

ええ？もしかして私、悪魔さんの巣窟に連れ込まれた

「落ち着け！」

パシッ

「痛い?!」

部室の机に肘を突き、溜め息を零すリアスの前で、修道衣を着た金髪の美少女…アーシア・アルジェントと名乗る少女の頭上に、ハリセンが落ちた。

「…で、シリユール？アナタ、一体どういう心算で、このシスターをお持ち帰りした訳なん（バシイッ！）あ痛あつ!？」

「もう少し、言葉を選んで下さいよ！」

そして、リアスのド頭にもハリセンを落とす、意外にも女性に対しても、割かし容赦の無いシリユール。

まあ、このオカルト研究部の部室は、リアス・グレモリーとその眷属の、悪魔としての活動の拠点であるから、その様な場所に神の遣いであるシスターを、『お持ち帰り』という表現は兎も角、連れて来た事に対してのリアスの対応や、連れて来られたシスター…アーシアのテンパリ具合も理解に難しくはないのだが。

「うう…ソーナにしても そうだけど、何時も何処から取り出して何処に仕舞い込んでるのよ？そのハリセン!？」

涙目で頭を両手で抑えながら、ボヤくりアス。

…ツツコミ属性の者ならば、何時でも何処でも持ち出し収納可能な不思議武器…それが、ハリセンである!!

「いえ、走ってる最中に、迷子のシスターに逢いましてね、…で、赴任先の住所が書かれたメモを見てみたら…」

そう言つて、アーシアが持っていた、メモをシリューはリアスに渡す。

「こ、これはっ…!？」

その紙には、先日、リアス達が墮天使と戦闘を繰り広げた廃教会の住所が、手書きの周辺地図込みで、記されていた。

《《

「…そういう訳で、あの墮天使が口走っていた『あの女』と言うのは、彼女で間違い無いでしょう。」

「…あ、あの人達が、墮天使…?」

「ん、成る程ね。」

…でも、あの墮天使達は何故、その娘を呼んだのか

セイクリッド・ギア  
「神器。」

「…!!」

セイクリッド・ギア  
神器…その単語を聞き、リアスの表情が変わる。

「本当に…?」

「ええ…本当ですよ。」

リアスの問いに、何かを思い出したのか、急に不機嫌そうな顔になったシリューが答えた。

《《

あの公園で、小石も何も無い所でスツ転んでしまい、下着丸出しな尻餅状態のアーシアに手を差し伸べて起き上がらせた時、そのシスター然な格好に、『あの教会』との何かしらの関係を予感したシリュー。

どう見ても、日本に不慣れな外国人にしか見えない彼女に、然り気無く、その辺りを聞いてみると見事に予感的中。

明日付けで、あの廃教会にイタリアより赴任する事になった、シスターだと云う。

既に表向きは、運営放棄されている教会に派遣されたと言う時点で、墮天使と呼ばれている『あの女』というのが彼女であるのは、恐らくは間違い無い。

問題は、このアーシアが、どの位迄、その辺りの事情を知っている



かと云う事。

本人にすれば無礼な話だが、とても あの墮天使と共に、他の勢力と喧嘩が出来る様な戦闘力を持つているとは思えない。

レイナーレが言っていた、『至高の墮天使』という言葉と繋がる要素が皆無だった。

「何も知らずに呼び出され、何事かに利用されていたと云う可能性もあるか…

それとも、この娘とは また別に、『あの女』という人物が居るのか…?）」

「あの…神崎さん?」

「あ、すまない、少し考え事していた。」

…と、シリユーが その場で あれこれ思案していた時、2人の目の前を、元気そうな小学校低学年位の少年が走り抜け、

バタンツ

「う…うわわあああ〜ん!」

派手に転んだかと思えば、その場に座り込み、大声で泣きだした。

「!」

タツ…

アーシアは それを見ると、その少年の前に駆けつけ、

「ほら、大丈夫。

男の子なんだから、泣いたりしないの。」

そう言いながら、擦り剥いて血が出ている膝に両手を翳した。

「え?」

その光景を見て驚いたのは、アーシアより一步遅れて駆け寄ったシリユー。

アーシアの両手が薄い青の光を発すると、少年の傷口が、見る見る内に塞がれ、全くの無傷となった。

「ありがとう、お姉ちゃん!」

「???」

「<sup>あ</sup>Gr<sup>り</sup>az<sup>が</sup>ie<sup>と</sup>、だつてさ。」

「ああ…」

「…で、今のは？」

少年が手を振りながら走り去って行った後に、シリユーが その不可思議な能力について問うと、

「神様がくださった…素敵な力…です。」

アーシアは両手を合わせて祈る仕草を取り、本の一瞬だが表情を暗くすると、また微笑みながら、答えた。

セイクリッド・ギア  
「神器か…」

「!?!」

しかし直後、シリユーの言葉に驚きの表情を隠せないアーシア。

「俺のは少しばかり派手でね、この場で見せる訳にはいかないが、実は俺も、セイクリッド・ギア・ホルダー神器持ち ちなんだ。

あの、『誰も居ない、廃教会』へと赴任になった経緯、聞かせて貰えるかな？」

「え…ええ?!…は、はい…」

シリユーもセイクリッド・ギア神器を持っていると云う事、そして、自分の赴任先が無人の教会だと言う事…アーシアは二重の驚きを受けながらも、如何なる経緯で、あの教会へと出向く事になったかという事を話し出した。

《《《

元々アーシアは、生来からの孤児で、教会に拾われ、シスターとして生きていた。

5歳の時、万能の癒やしの能力を持つセイクリッド・ギア神器【トワイライト・ヒールリング聖母の微笑】を目覚めさせ、それ以降は教会で、深い信仰心と その神器を以て、怪我人や病人を癒やし『聖女』と呼ばれ敬われていた。

しかし ある日、重傷を負い、倒れていた悪魔をその場から正体知らずに癒やした事により、『悪魔すら癒やす異端の魔女』として、教会より神器毎、存在の全てを否定、追放されてしまう。

生来の孤児だった故に行き場が無く、路頭に迷っていた所に、日本に在るとされる件の教会…つまりは墮天使からのオファアがあり、藁をも縋る思いで それを受け、来日したのだと言う。

《《《

「ちっ…今迄 散々と聖女だと持ち上げていて、悪魔を治したら異端？ 魔女だ？ 巫山戯るなっ!!」

ガンツ!

「し、シリユー！ 落ち着いて！」

表情に隠す事無く、教会に対する怒りを顕わにし、座っていたソファアの前に置いてある、応接テーブルを叩きながら、怒鳴り散らすシリユー。

「ならば、そんな魔女とやらを祭り上げていた自分達は どうなんだ!?!」

まさか、『異端とは知りませんでした』とか抜かして逃げる心算か?!」

バキイツ!!

「ひいっ!?!」

そう言いながら、再びテーブルを思い切り叩き付けるシリユー。

それなりに手加減はしていただろうが、それでもテーブルは、真つ二つに割れ、砕けてしまう。

「シリユー！ 本当に少し落ち着きなさい！」

その娘も、怖がっているから!!」

余りに熱くなり過ぎているシリユーに、リアスも厳しい顔で戒める。

本当は決して安くはない、壊されたテーブルについても追求したいのだが、それ処ではなかった。

「す…すいません、部長…。」

アースアも、すまなかった…。」

「い、いえ…。」

「気持ちは、解らなくもないけどね…。」

リアスの一喝でクールダウン出来たのか、シリユーは目の前の2人に頭を下げる。

「兎に角、この娘にとっても私達にとっても、色んな意味で幸いだっただみたいね。」

「ああ、アースアが来るのが もう少し早かったら…或いは、俺達が行

動を起こさなかつたら…いや、そもそも、あの墮天使の男が、俺に攻撃を仕掛けて来なかつたら…多分、アジアは死んでいた。」

「ええっ?!」

シリユートの「死んでいた」発言に、目を大きく見開いて驚くアジア。

墮天使がアジアを日本に呼ぼうとした理由…それは、彼女のセイクリッド・ギアトワイライト・ヒーリング神器・聖母の微笑が狙いであったのは、最早明らか。

アジアの身体からその神器セイクリッド・ギアを抜き盗り、恐らくはレイナーレが自身の力として、摂り込もうとしていたのだろう。

そして、それが、消える間際に言っていた、『至高の墮天使』の意味であったのも、既に疑う余地が無かった。

「あははは…私に声を掛けてくださった、あの方達が墮天使だったなんて…」

しかも、それも私の神器いのちが目当てだったなんて…

私、私、もう…何を信じたら…」

レイナーレ達が既に、この世に居らず確認は出来ない為、推定混じりではあるが、厳しい現実を知らされ、自暴自棄に陥りそうになるアジアだが、

「大丈夫、その為に、この部屋に連れて来たんだ。」

「神崎さん?」

シリユートが優しく声を掛ける。

「リアス部長、いやリアス・グレモリー。」

『赤龍帝』として提案させて貰う。

トワイライト・ヒーリングこの聖母の微笑の所持者である、アジア・アルジエントを、保護の名目で、悪魔側に招き入れる事は出来ないだろうか?」

「え?」

《《

「し、シリユートさん、似合いますか?」

「ああ、似合う似合う。」

「うゝ、もつと感情込めて下さいよゝゝ!」

数日後…駒王学園の制服を纏ったアジアが、くると回転しながら

らシリユーに感想を求めるが、その素っ気無い返事に、頬を膨らませる。

結局、アーシアはグレモリー家預かり：ではなく、赤龍帝であるシリユーが保護：シリユーの部下という形で、『人間』として、悪魔側に席を置く事となった。

一応、リアスがイヴァイル・ピース悪魔の駒を使った転生の話も持ち掛けてはみたが、アーシアは「今の所は：」と、今後は未定とした上で、これを拒否。シリユーも本人の意志だと、それを尊重。

リアスの遠縁という『設定』で、1年間はホームステイの枠を使つて、2年生として駒王学園に編入。

3年生になったら、駒王町内にある、グレモリー家所有のマンションに移り住む事になった。

》》》

「アーシア・アルジェントさん：

ようこそ、駒王学園、そして、オカルト研究部へ！

私達は、貴女を歓迎するわ！」

正式な編入の前日、オカ研部室で、アーシアを歓迎する、囁かなパーティーが開かれた。

参加者は、シリユーを含むオカ研メンバー全員、そして生徒会からソーナ、椿姫、匙が やってきた。

「神崎君、魔王様から言伝です。

『彼女の事は、君に一任するから、我々の事情等を、よく教え込んで置いてくれ賜え。』：だ、そうです。」

「了解。あれだけ我が儘言ったんだ、それ位は やりますよ。

それにしても：はあ…」

ソーナと話し終えたシリユーが、オレンジジュースの入った紙コップを片手に、大きく溜め息を零す。

「アーシア先輩のホームステイ先が、まさかのトーカーちゃん家で、今後起こり得る、修羅場の心配をしてr（パシッ）痛いつ!？」

「違うっ！」

シリユートのハリセンが、小猫に炸裂した。

「まさか、編入先のクラスが、寄りによってD組とは…」

「おう、あのクラスには、兵藤達だけでなく、桐生も居るからな…」

学園内でも『変態3人衆』と呼ばれている3人に加え、その『女版』とも云える、1人の女生徒が在席する2年D組。

親バカか兄バカか、無垢な聖女<sup>アーシア</sup>が魔女を通り越して痴女になったりしないか、本気で心配しているシリユートに、匙も同調する。

「奴等が停学中の内に、クラスの女子に、お願いして、包囲網を固めなければ…」

木場、お前も協力してくれ！」

「ははは…別に良いけど…。」

更に言えば、シリユートは知らない。

件の3人組が明日、停学が解けて、久々に登校して来る事を。

「部長、此処は、俺と同じクラスな流れじゃないのですか？」

「仕方無いでしょ？」

私も本当は そうしたかったんだけど、そのクラスだけ、学年全体で人数が1人、少なかったんだから！」

シリユートの訴えを、正論?で躲すりアス。

そんな中、歓迎パーティーも闌となり、朱乃に促されて、アーシアが改めて挨拶。

「え…と、み、皆さん、今回は私の為に、こんな立派な歓迎会を開いてくれて、ありがとうございます！」

行き場を失った私に、居場所を与えてくれたシリユートさんや皆さん、そして、この縁を授けてくださった、主に感謝を…

「「きやあつ!」「うわっ?!」

「うげっ!」「痛いっ?!」

「「え????」

アーシアが、そこまで喋り、手を合わせて祈る仕草を見せた途端、シリユートを除いた全員が、頭痛でも起きたかの様に、頭を抑えだした。

「あ…アーシア…お願いだから、悪魔<sup>わたし</sup>達の前で、神への祈りは止めて…」

「あ……ごめんなさい〜!!」

涙目なりアスの訴えに、事を理解したアーシアが慌てて謝る。

そんな中、悪魔の様な笑みを浮かべる男が約1名。

「はは、なんだか孫悟空みたいだな。」

どれ、南無南無南無南無……」

「「「「「ヤメロー!!」「「「「「」

ガンツx7!!

「うおおっ!?!」

「し、シリューさん?!」

シリューに、無数のハリセンが直撃するのだった。

### 三日月が紡ぐ縁

アーシアの初登校の日がやってきた。

「おおっ！」「あら…」

「うわ〜…」「誰かしら？」

「へえ〜」「まあ…」

「う…何だか、凄く注目されてますう…」

「うふ…最初だけですよ。」

「ああ、直ぐに慣れるさ。」

校門を潜り、学園敷地内に入った途端、生徒達からすれば、リアスである程度は慣れていている筈な、外国人のアーシアに注目が集まってしまう。

恐縮畏縮なアーシアに、隣で一緒に歩いているシリューと、アーシアのホームステイ先の娘で、シリューの彼女でもあるトーカが、大丈夫だと元気付ける。

「いや、寧ろ…何だか俺に対する殺意みたいなのが半端ないのだが…」  
そう呟くシリューだが、『学園きよぬー四天王』の1人と、今日が登校初日な為、生徒達には認識されていない、『謎の金髪美少女』を両隣に意図せずとも侍らせての登校ならば、それは当然と謂えば当然である。

「クツッ、神崎のヤロ〜！」

「トーカちゃんだけでなく、あんな可愛い娘と仲良く一緒に歩きやがって〜!!」

「何で、アイツばっかし…」

「二有罪!!」  
ギルティ

…そう云った、嫉妬の炎に身を焦がし、血涙を流す一部の男子生徒から迸る殺気をスルーしながら、アーシアを職員室まで送り届けると、シリューとトーカはそれぞれの教室へと向かうのだった。



「やあ、神崎君。」

「よう。遅れてスマン。」



2—Cの教室の前で、シリユーを待っていたのは木場。

「じゃあ、行こうか。」

「ああ。」

2人は、アジアが編入されるD組へと向かった。

目的は…このクラス在籍の変態3人衆と呼ばれている男子生徒から、アジアを護る為の根回しだった。

》》》

ガラ…

「失礼するよ。」

「「「きゃあー！ーあ！！」

神崎君と木場きゅん!!!」

シリユーと木場がD組の扉を開けて、顔を出した瞬間に、教室内の女生徒達が騒ぎ出した。

そしてシリユーも挨拶しながら教室に入ろうとするが、

「失礼…って…げっ！お前等!!」

「な…人の顔を見た瞬間、何なんだよ、お前、そのリアクションは？」

「全く、本当に失礼なヤツだな!」

「…って、おい、神崎？」

「か、神崎君!」

「「「い、いやあーっ!!」

か、神崎君がorzってるう?!」

「「「ちよつとアンタ達!!神崎君に、一体何したのよ!」

「「「な、何も、してねーし!」

松田才蔵、元浜幹親、そして兵藤一誠。

学園にて、『変態3人衆』の悪名を持つ3人組。

その3人の顔を見た途端、両膝両掌を床に着き、ガクツと項垂れてしまうシリユー。

端から見たら、3人がシリユーに何かしら やらかした様にしか見え、教室内の女子から集中放火を浴びてしまう兵藤達。

「お前等…停学中じゃなかったのか…?」

「「「おう、昨日で解けて、今日、久し振りの登校だよ!!」

ガクツ：

「「いやあーっ?!?神崎君が、またorzった〜?!?」」

シリユーからすれば、アーシア登校初日と、変態3人衆の停学明けが重なったのは、正に大誤算。

当初の予定は、停学中の内に、外堀を固める心算だった。

それでも担任からアーシアが紹介されるであろう、ホームルームが始まる前に、木場と共に、D組の女生徒に「きゃーきゃー言われながらも、事情を説明。」

兎に角、変態3人衆+αから、色んな意味合いで、何も知らないアーシアを守って欲しいと「お願いする2人。」

『学園2大イケメン』からの直々の、頼み事に、D組女子達は快諾。

更には男子からは勿論、女生徒からの支持も高いリアスの遠縁という『設定』も幸いしたのか、「変態から汚さすまじ」と、団結の構えを見せる。

特に件の3人を、普段から蛇蝎の如く嫌っている剣道部所属の2人組が、異様に「やる気を出していた。」

途中、横で「此等の事を聞いていた兵藤達が、「どういう意味だ？」

俺達を何だと思ってるんだ!?!」…と、文句を言ってきたが、

「あゝ!?!」

「「(」。O。L)!!?」」

シリユーが、結構本気な殺気を込めた一睨みで、それを黙らせる。

「ちよつと、神崎君?兵藤達は兎も角、私まで危険視は酷くないかしら?」

「桐生…?」

そこに声を掛けてきたのは、長い髪を三つ編みにした、眼鏡の少女。桐生藍華。

女生徒からの評判や仲は決して悪くはないのだが、隙あらば下ネタ満載のオヤジ系エロトークを乱発する事から、『女版兵藤』の異名を持ち、その眼鏡は男子生徒の『下腹部の戦闘力(通常時)MAXのサイズ、及び持続力』を測る事が可能なスカウ〇ーとして、男子からは恐

れられている。

因みにシリューとは1年の時に同じクラスであり、当時、彼女がシリューの『戦闘力』を測ろうとした際、そのス○ウターにヒビが入り、粉々に破壊、『計測不能』と云わしめた出来事があった。

「ある意味、お前が一番心配なんだよ。」

先述した変態3人衆+ $\alpha$ …その『+ $\alpha$ 』の申し立てを軽く躲したシリュー。

「桐生、本当に頼むから、アールシアに変な事、吹き込んだりするなよ？」  
「へーい、へーい。」

そこまで言うと、シリューと木場は、各々の教室に戻っていった。

結果から言えば、事前にリアスが担任教師にも少し頼んでいたのも手伝い、席の配置も3人とは離れた場所に設け、休み時間に至っては、女子生徒の鉄壁のバリアの前に、兵藤達はアールシアに近付く事が出来なかった。

そして桐生は、余りのアールシアの『そっち系の専門知識』の無さに会話が成立せず、ドン引かれるのを恐れてか、その手の話をするのを断念したと云う。



ざわざわざわざわざわざわ…

アールシアが駒王学園に編入してから、1週間と数日が経った。

この日、土曜日の夜、アールシアのホームステイ先の矢田家にて、彼女の歓迎を兼ねた、本の少しだけ豪華なパーティーが開かれていた。しかしながら、パーティーのメインの主旨は別の事柄。

以前から病弱で入院中だった、今年で小学5年生になる この家の長男が、この度 完全に快復、退院したのだ。

彼の友人や、彼と面識のある、高校1年の姉の友人を招いての事だった。

そんな中、

「う…凄いプレッシャーなのだが…」

シリユートの姿も、其処にあつた。

「孜劉先輩？」

「シリユートさん？」

「トーカあ…きつきから お前の親父さんが、滅つ茶苦茶こつち睨んでるのだが…」

シリユートの ぎこちなさ、居心地の悪さを察したのか、この家の長女であり、シリユートの恋人でもある矢田桃花とアジアが、駆け寄ってきた。

「もう…父さんも仕方無いわねえ。

分かった、私から言つとくよ。」

「頼む…」

それは彼女の家に、のこのこと やつてきた男への、父親からの洗礼である。

》》》

「おお、本当に長身のイケメンだ！」

「矢田さん、優良物件捕まえた！」

「しかも、神崎さんの従兄弟！」

「あー、どうも…」

改めてトーカから「彼氏」だと、彼女の中学時代のクラスメートに紹介されたシリユート。

『学園2大イケメン』の二つ名は伊達でなく、あつという間に その場の殆どの女子に、取り囲まれてしまう。

「やっぱり矢田っちの胸に、釣られたんですか？」

「いや、違うから。」

それだけじゃないから。」

「あ、要因の1つでは、あるんだ！」

「う、しまった…!!」

何気に弄られしまうシリユート。

「…大丈夫なの？」

「信じてるもん♪」

「ふふ…余裕ですな♪」

「自分の彼氏が多くの人に囲われているのを見て、何も感じないのか？」  
…と、トーカに聞いてきたのは、シリユウの従兄弟で、トーカのクラ  
スメートでもある、神崎有希子。

トーカとは、中学時代からの友人であり、やはり彼女の弟とも面識  
があった。

彼女の問い掛けに対して、トーカはシリユウへの信頼と、自分に自  
信があるのか、余裕の表情を見せながら、その光景を温かく見守るの  
だった。

》》》

「アーシアさんて、本当に日本語、上手ですな〜？」

「は、はい！トーカさんやシリユウさんに、教えて貰っています！」

シリユウに続いては、イタリア人のアーシアに群がる女子達。

外国人の知り合いが全く居ない訳ではないのだが、それでも同年代  
のそれは居なく、積極的に会話に興じていた。

「やっぱしリアル金髪は凄い！」

キヤラの描き分けとか、ベタ塗るのが面倒くさいとかの黄色い髪と  
は、一味違う!!」

「え？ええ…っ?？」

「…悪かったわね!!」

…多少、メタな会話込みで。

因みに今更ではあるが、シリユウが一番最初にアーシアを部屋に連  
れて来た時は、リアスを含め、全員がイタリア語で会話していた。

》》》

「アーシア、ちょっと？」

「シリユウさん？」

トーカとユキコも混じっての女子トーク展開中の中、シリユウが  
アーシアを手招き。

庭先に出て、会話する2人。

「この前から、パーティーばかりな気がするな…」

「はい…でも、とても楽しいです!」

「まあ、今日のコレは、アーシアの お手柄だから。」

「いえ…そんな…」

病弱で入院していたトーカの弟。

アーシア編入初日の帰り、シリユーとトーカの3人で、トーカとしては弟に『新しい家族』を紹介する意味で、病院に見舞いに行っていた。

そして実は その日から、シリユーとアーシアは、夜な夜な トワイライト・ヒーリング この病室に人払いの結界を張って忍び込んで、【聖母の微笑】による治療をしていた。

いきなり全快復!…にしたたら怪しまれる可能性を考慮しての1週間、じっくり時間を掛けての治療だった。

「シリユーさん…」

「ん?」

「…私の能力<sup>チカラ</sup>って、決して異端なんかじゃありませんですよn(パチン!)

次に そんな台詞言ったら、マジに叩くからな?」

「う…:は、はい。シリユーさん、ありがとうございます。」

ハリセンで掌をパチパチと叩きながら話すシリユーに、ハリセンが痛かったのか、その言葉が嬉しかったのか…:アーシアは若干涙目になりながら、そう応えるのだった。

》》》

「あら?…トーカ、彼氏さんは?」

「今は弟達と一緒に、ゲームしてるよ。」

先程迄シリユーとアーシアが話していた庭先で、今度はアーシアを含む、トーカ達女子が話していた。

「全く…あんなイイオトコ、どうやって知り合ったのよ?」

「えくと、それは…」

「ほらトーカ、正直に吐きなさい!」

「え…?…ちよ…!?!」

ゆっさゆっさゆっさゆっさゆっさゆっさゆっさ…

「ひよえええっ?!」

1人の女子が、トーカの背後に回り込み、鷲掴みからの揺さぶりを仕掛ける。

「あわわわわ…」

その様を見たアーシアが顔を赤くし、

「分かった!言う、言うから!!」

この揺さぶりに屈し、トーカは観念して話し出す。

「別に、大した事じゃないよお…」

学校で、従姉妹の神崎さんに「よっ!」って感じで挨拶してきて、その時に…

「え?何々?もしかして、一目惚れ一目惚れ一目惚れ?」

「!!」

カアア…

凶星だったのか、一瞬にして顔を赤くし、黙り込んでしまうトーカ。

「…ちいつ! これ以上の追求は無理か…」

《《》》

「ねえ、所で…」

「ん?」

「あの人って、アイツに似てくない?」

「あー、それ、私も思っていた。」

「私も。神崎さんも、そう思うよね?」

「ん、私的には あの人が、劉兄さんに似てるのかな…って。」

「…まあね、確かに雰囲気とか、似てなくはないよね。」

彼女達の頭に浮かんだのは、中学3年の時のクラスメート。

当時のクラス内でも、頭1つ飛び抜けた行動力で、クラスのムードメーカーの1人となっていた男子生徒だった。

どうやら顔は兎も角、身に纏う雰囲気等はシリユーと似ているらしい。

「(…ん。露出癖まで そっくりなのは、黙っておこう。)」

「図らずも、同じ事を考えてしまう、トーカとユキコ。」

「あくウチの学校にも、あれ位のイイオトコって居ないもんかねえ?」

「あんだ、女子高でしょ?」

「そう言えば、メール届いてたでしょ?」

勿論 来週、皆 学校に行くんだよね?」

「まーねー。卒業してから、初めての『手入れ』だし。」  
「????」

この時点で既に、アーシアは半分、空気になっていた。

「あのクラス…」

「…トーカーちゃん?」

「あの『クラス』だったから私、駒王にも受ける事が出来たんだよね。」

「あー、確かに。」

あの『クラス』でなかったら、私等今頃、皆揃って、バカ学校に行っていたわー。」

夜空を見上げながら、話すトーカー達。

「だから、孜劉先輩にも逢えたし…。」

「……」

「はあ!? 結局は惚気かい? コノヤロー!!」

「リア充、爆裂しろおっ!!」

ゆっさゆっさゆっさゆっさゆっさゆっさ…

「ひええええっ!?!」

「はわわわわわ…?」

再び背後からの驚掴みから、揺さぶりを受けるトーカー。

》》》

「……………」

何をやっているのだ? あのコ達は?」

その様子を2階の部屋の窓から見ていたシリユーが、呆れ顔で呟く。

シリユーが見下ろす庭先、その上の夜空には、彼女達を微笑み見守るように優しく光る、三日月が浮かんでいた。



<br>学園壊滅のフェニックス  
メイドさん、やって来ました！

◇シリユースIDE◇

ある日の放課後の部室。

「だから、この場合は、先にコッチを代入した上でだな…」

「ふむふむ…成る程…」

俺は今、子猫の宿題の手伝いをしてやっている。

「はあ…」

「……………」

「え？そんなに美味しいんですかあ？」

「ええ、私の一押しですわ。」

今度、一緒に行ってますか？」

「はい！是非!!」

アーシアと姫島先輩は、何やらスイーツの店？に繰り出す相談をしている様子だ。

そう言えばアーシアは この前も、トーカと そっち系の店に行っていたとか話してたな。

まあ、アーシアって、少し前迄は教会勤めで かなり禁欲的な生活を送ってきたらしいし、ああいった女の子らしい？日常を過ごせる様になったのは、良い事だ。

それから小猫？

あの会話に参加したいのは解るが、とりあえずは目の前の宿題、片付けてからな？

「はああ…」

「……………」

因みに木場は現在、部活（しごと）で外に出ている。

「はあああ……………」

「……」

「はああく」

「リアス部長？」

「はい？」

「……えっと、『部長、何か あったんですか？』って聞いて欲しいんですか？」

「それなら そうだと言つて下さい。」

「な、ななな……！」

そんな中、職員室の教師でさえ使わない様な、見るからに役員御用達な高級デスクに着き、如何にも「私 今、凄く悩んでいます……」な感じで、さつきから何度となく溜め息を零しているリアス部長。

最初は皆、敢えてスルーしていたのだが、余りにもウザ過ぎ……失礼、気になり過ぎて、女子3人が、部室内現状唯一の男子の俺に対して「何とかしなさい！」……の様な、半ば脅す様な視線を浴びせかける。

仕方無く声を掛けみたら、リアス部長、顔真っ赤で動揺しまくり。

「……」

そして、ジト目で俺を見るアーシア達。

「あらあらあらあら？」

「し、シリユーさん、もう少し、ソフトに言つてあげても……ストレート過ぎますう……」

「……流石に今のアレは、有り得ません。」

「デリカシー無さ過ぎです。」

……何故だ、解せん。

「はあ……よ、よし!!ねえ、シリユー？」

この不条理な集中放火を浴びせられてる中、リアス部長が何やら意を決した様な顔で、俺に話し掛けてきた。

「お、お願いシリユー！私の恋人になつて

嫌です。」

「はあ……！」

《《《

「お、お願いシリユ〜っ!!」

「ええい! 脚を放せ、脚を!!」

半泣き顔で己の脚にしがみつくリアスを、何とか振り解こうとする、顰めっ面なシリユ。

そこには既に、オカ研の部長と部員の間の礼等は存在しない。

「其方の御家事情に、俺を巻き込もうとするな!」

「な、何故、判ったのよお?」

「解らいでか!!」

御家事情…その言葉で、まるで全てを見透かしている様なシリユに、驚愕するリアス。

「あくらあらあらあら?」

「はわわわわわわ…」

「…ふむ。」

その様子に、三者三様な反応を見せる、残りの女子部員達。

「どうせ、親同士が勝手に決めた、縁談を破棄したいから、俺に恋人役を演じて欲しい…そんな所でしょうが?」

「えー、そーよ! 全くその通りよっ!!」

完全な凶星に、泣き顔な逆ギレでリアスは応えるのだった。

《《《

「全く…そういう事なら、俺よりも木場の方が…」

「で、でも、祐斗は既に私の眷属として、それなりに顔が知れてるし、今更感が…」

「いやいや、『人間』であり『赤龍帝』である俺の方が、もっと ややこしくなるでしょうが…」

それに、それで俺と悪魔側の関係がギクシヤクするのは…違いますか?」

グレモリー家の次期当主候補筆頭殿?

大体 俺には、可愛い可愛い彼女が居るの、知ってるでしょ?」

部室の3人掛けソファアの真ん中に、悪人顔でハリセンを片手に、” でん!”と ふんぞり返って座り込むシリユ。

「あらあらあら?」

「最後のが、本音ですね。」

「…てゆーか、然氣に惚気ています。」

「うう…ゴメン、ナザイ…」

そして その前に置いてある応接テーブルの上で、まるでギャグマシンの補正が掛かったかの様な、大きな たんこぶを頭に作り、うるうる涙を流しながら正座しているリアス。

先程も触れたが、既に そこに、部長と部員の上下関係は無いに等しかった。

「…最初は私も、『好きな人が、付き合ってる人が居るから、結婚は無理!』…で、済ませようと思ったの。」

でも、『それなら どんな男か?』って、家の遣いの者が、私の『相手』を見に来るって話になってしまつて…」

「はあ…そんなの、普通に想定出来る展開じゃないですか?」

…で、部長? 見に来るって…それって、何時の話なんですか?」

「……………」

諦め顔なシリユウの質問に、リアスは壁に掛かっている時計を見ながら、

「きよ…今日の4時…」

恐る恐るな表情をしながらのリアスの応えに、シリユウが その時計を見てみると、時刻は既に3時58分を指していた。

「……………」

視線を時計からリアスに戻したシリユウは

「部長、知っていますか?」

達人は、只の布の鉢巻きに己の『氣』を通す事により、鋼の刃の如く扱うと言う…」

そう言つて、右手に持った張り扇を、天高々と掲げる。

「…いいいや…ゴメンナサイ、シリユウ、は、ハリセンは嫌あつ!!」  
すぱかーん!!

直後、部室内に澄み乾いた音が響き渡るのだった。

そして更に その直後、部屋に銀色の魔法陣が浮かび上がる。

「失礼します、リアスお嬢様。」

「グレイファイア…」

そこから姿を現したのは、見た目は20代前半の、メイド服を着た銀髪の美女。

カタツ：

リアスがシリューに説教されているのを茶請けにしながら、紅茶を啜りながら見ていた女子部員。

「??」

しかし、朱乃と子猫が、このリアスにグレイファイアと言われた女性を見ると、突然立ち上がり、一礼する。

アーシアだけは、何が起きたのかは判らず、単に その様子を見ているだけだった。

◇シリュー side ◇

「始めまして、赤龍帝様。」

…と、その御付きの方。

私、グレモリー家のメイド長を仰せつかっております、グレイファイア・ルキフグスと申します。以後、お見知り置きを。」

「赤龍帝…神崎孜劉だ。」

「ア、アーシア・アリちえっはう!？」

す、すいません、アーシア・アルジエントですう。」

リアス部長からの紹介で、初対面な俺達に、丁寧な挨拶をしてきたグレイファイアと名乗る女性。

それに対して、俺と、一応は俺の部下として、悪魔側にポジションしているアーシアも、簡潔ではあるが名乗り応えた。

アーシア噛みっ噛みで。

「それで、リアスお嬢様？」

貴女と懇意な殿方とは、どちらに？

見た所、この部屋に男性は、赤龍帝…神崎様しか居られませんか…!!まさか?」

「……………」

このメイドさん…グレイファイアさんが、此方に目を向ける。

…が、俺は敢えて、肯も否もしない。

余計な事は、何も喋らない。

この場を如何に上手く誤魔化し納めるか、リアス部長？アナタの王<sup>キング</sup>としての資質、拝見させて貰いますよ？

「そ、そうなのよ、グレイファイア…」

じ、実は私、そのシリユーとt

「はあく…神崎様…この度はリアスお嬢様が、大変御迷惑をお掛けしました。

グレモリー家の者として、お詫び申し上げます。」

「ちよ…グレイファイア!？」

…一瞬でバレた。

俺に対して、グレイファイアさんが深々と頭を下げる。

「…御付きのアーシア様にも、本当に申し訳ない事を致しました。

神崎様には、貴女のような素敵の方が傍らに居られるにも拘わらず、この様な茶番に巻き込んでしまいました…」

「え…？いえ、わわ私はシリユーさんとは、べ別に、しょんな関係ではなくて、しよの、ゑとIOS☆?・E%o(Ψ3Ψ)∞るΘE†・ヰφφ…」

「アーシア、落ち着け!」

更にはアーシアにも謝罪するが…と、同時に、何か物凄い勘違いをしてしまったみたいだ。

その辺りの誤解だけは、絶対に解いておかないと…

そう思いながら俺は、とりあえず目の前でテンパってる この金髪娘と、この一連の やり取りを茶請けに、ニヤニヤと ほくそ笑みながらながら紅茶を飲んでいる白髪のチビツ娘の頭に、一発ずつ御見舞いする事にした。

喧嘩、売買します！

◇シリュー side ◇

「シリュー君、紅茶の お代わりに、要りますか？」

「すみません姫島先輩、お願いします。」

今 俺は、姫島先輩の注いでくれた紅茶を飲みながら、

「お嬢様、いい加減に我が儘は……」

「グレイフィア：別に私は、グレモリー家を潰すつもりは無いわ。

婿養子だつて迎え入れるつもりよ。」

リアス部長とグレイフィアさん、この2人の やり取りを、黙って  
見ている。

何しろ、俺が一言も喋らない内に（尤も、リアス部長に全部丸投げ  
で、最初から黙りの心算だった）いきなりグレイフィアさんに似非  
恋人を看破されたから、既に出る幕が無いのだ。

「……でも、私は、私が良いと思つた男ひとと結婚する。」

そして それは、あの男なんかじゃ、断じてないわ！」

へえ？……リアス部長、言い切つた。

「……だ、そうだ。正直、余り覗かれたりするの、好きじゃないんだ。  
視ているんだろ？」

サツサと出て来たらどうだ？」

「……!!?」「……!!」

◆◆

『自分の相手は自分で決める』……そこ迄リアスが言つた所で、シリュー  
が部室の窓の外に顔を向けて話し出すと、先程グレイフィアが現れた  
場所に、今度は赤い……グレモリー家の夕闇を朱に染める様な紅ではな  
く、燃え盛る炎の如くな……否、炎そのものを巻き上げる赤い魔法陣が  
浮かび上がる。

「……!?!?」「……」

そして其処から、ダークワインレッドのスーツを着崩した、木場や  
シリューとは また別ベクトル側なイケメンの……ホストの様な風貌  
の、金髪の男が姿を現した。

「ふうふう…久し振りの人間界だ。」

…ふん、流石は赤龍帝殿…と云う所か。

因みに、何時から気付いていた？」

「グレイファイアさんが、この部屋に姿を現したのと、同じ位さ。」

窓の外、あの木に止まっていた、赤い鳥からの視線を感じたのはな。」

「参ったな。最初からじゃないか…。」

まさか、俺のサザンジュールの気配に気付くとはね…。」

金髪男の問いにシリユーが外を指差して答えると、やれやれと謂った表情で、男は掌の上に小さな魔法陣を作り、其処から赤と金の羽を持つ、まるでオウムと猛禽類を掛け合わせた様な鳥を召喚し、己の右肩に飛び乗らせた。

「使い魔…。」

それを見た、リアスが呟く。

「赤龍帝…神崎孜劉殿…だったかな。」

名乗らせて貰うぜ、俺の名はライザー・フェニックス。

其処のリアス・グレモリーの婚約者だ。

ヨロシクな。

それから、先程グレイファイア様も仰られたが、今回は俺とリアスの件で、アンタを下らん茶番に巻き込んでしまつて点に付いては、マジに申し訳なかったな。」

「フェニックス…？」

「はい、神崎様、ライザー様は純血の上級悪魔である、フェニックス家の御三男。」

そして、この方が、グレモリー家の次期当主で在らせられる、リアスお嬢様の婿殿に御座います。」

「成る程、フェニックス『家』…ね。」

『フェニックス』と云う言葉に、やや過敏に反応したシリユーに、グレイファイアが、このライザー・フェニックスについて、詳しく紹介する。

「…何の用なの、ライザー？」

私はアナタを、呼んだ覚えは無いわ。」



「つれないなあ、愛しのりい〜アスウ？」

お前に逢いに来たに決まってるだろ？」

明から様に招かざる客という対応のリアスに、ライザーは何処吹く風な態度を取る。

2人の会話は続く。

「私はアナタになんか、遭いたくもなかったわ。

ライザー、前にも言った筈よ、私はアナタとは、結婚なんてしない。」

「だがリアス〜？」

君の御家事情は、そんな我が儘が通用しない程、切羽詰まっていると思うのだが？」

「さっきのグレイファイアとの会話、聞いてたのでしょ？」

家を潰すつもりは無い。

婿養子だつて受け入れる。

…でも、アナタだけは、御免蒙るわ。」

「これは また、エライ嫌われ様だなあ？」

おいリアス〜、一体、俺の何処が気に入らないt

「女誑しな所よ。」

「……………」

そしてリアスの この一言に、一瞬ライザーは黙り込む。

◇シリユースide◇

「(ボソ…) 小猫、あのライザーとやら、そんなになのか？」

「(ボソ…) はい、面識は有りませんが、ライザー様の眷属は15人全て、女性で構成されていると聞いています。」

そして その女性達とライザー様は、所謂その…つまり…アレです…」

「(ボソ…) あー、分かった分かった。

無理して言わなくても良いから。

俺が悪かったよ。」

顔を赤らめ、言葉を詰まらせている小猫に、とりあえず俺は謝った。

それからアーシア？

何を妄想したかは察するが、一瞬に赤くならなくて良いから。

》》》

「…大体アナタは眷属だけでなく、昔から、少し可愛い女の子を見ると…

(中略)

…他にも小学s

「り、りくアス！ちよくつと落ち着こうか!？」

リアス部長の、このライザーとやらが如何に女誑しか、本人にぶちまける文句と云うよりか、半ば俺達に対する暴露と言って良い様なマシンガントークに対し、最初は武勇伝とばかりに余裕な涼しい顔で流していた金髪男だが、その途中、部長が余程、本人的にヤバいネタを言いそうになったのか、慌ててその言葉を遮った。

因みに、今までの暴露内容で、

「あくらあくらあくら？」

ほんのり赤くした頬に両手を当て、嬉しそうな顔をしてる人が1人、

「…サイテーですね。」

ジト目でドン引きしてる人が1人、

「はわわわわわ…」

そして、はわはわしてる人が1人。

「ど、何処に電話をしようとしている?!」

そして俺がスマホを取り出すと同時に、突っ込みに入る男が1人。恐らく今の俺は、小猫に近い表情を浮かべているであろうと思われる。その内容は、D組…アーシアのクラスメートの『あの3人』…特に兵藤の奴が聞けば、血涙を流しながら羨ましがる様な内容だった。



「…てゆーかりアス！」

何故お前が、その話を知ってるのだ？」

「ルヴアル様から聞いたのよ。」

「ルブ兄いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝつ!？」

ライザーの質問に、スマホを取り出し、にこやかな顔で答えるリアス。

そして その情報源であるフェニックス家長兄を、普段の呼び名で絶叫するライザー。

「大体 今回の縁談も、アナタでなくルヴアル様なら、もつと前向きに考えられたのにね。」

「馬鹿な事を！」

ルブ兄はウチを継ぐのが決まってるし、既に許嫁も居る！」

「ええ、親が勝手に決めたのではなく、相思相愛のね。」

「うくつ…!!」

「…御2人共、其処迄にして下さい。」

余りに会話が前に進まない2人の間に、グレイファイアが割って入った。

「グレイファイア…」

「…リアスお嬢様、最終確認です。」

お嬢様は どうあっても、ライザー様と御結婚する気は無いと、仰られるのですね？」

「ええ、何度でも言うわ。」

私は、ライザーとは結婚しない。」

「…判りました。」

お嬢様、ライザー様、旦那方も こうなるのは予想されておられました。

よって、決裂した場合の最終手段を仰せつかっております。」

「ほお…?」

「最終手段…:どういう事、グレイファイア?」

「お嬢様が それ程迄に御意志を貫き通したいならば…:ライザー様と、『レーティングゲーム』にて決着を…:と。」

「!!?」

「?!」

「…ふん!」

レーティングゲーム：グレイファイアの口から その単語が出た瞬間、リアス、朱乃、子猫の顔付きが変わる。

シリユーとアジアは、聞き覚えの無い言葉に多少の途惑いを見せ、

「くつくつく…」

あーっはっはっはっ！コイツは傑作だ!!」

ライザーは その言葉を聞いて、声高らかに笑い上げる。

「聞いたかりアス!」

結局の所、君の御両親も魔王様も、今回の縁談には乗り気なんだよ!!」

「……………!!」

◇シリユーside◇

「あの…シリユーさん?」

レーティングゲームって…?」

「ああ…姫島先輩、解説お願いします。」

「うふふ…了解ですわ。」

アジアの質問：俺も知らないし、尚且つ、俺も知りたかった事柄なので、その儘 姫島先輩に振ってみたが、

「レーティングゲームの事なら、その女王<sup>クイーン</sup>より、俺の方が詳しいぜ。

俺が説明してやるよ、赤龍帝殿。」

ライザーが横から、説明役を名乗り出た。

「レーティングゲームてのはな、簡単に言えば、我々悪魔社会の娯楽の1つだ。」

爵位持ちの悪魔が、自身と自分の下僕を含めた、1チーム最大16名同士が広大な疑似戦闘空間で戦い合う、極めて戦争に近い…まあ、スポーツみたいなもんだな。」

「16名…成る程、下僕をチェスの駒に見立ててるのは、そういう事か。」

「本当に流石だな、その通りだ。」

機動力の騎士、破壊力の戦車、それ等を兼ね揃えた女王…

その特性を完全に把握し、王が如何に上手く、その空間内で使役して勝つか…

そして その勝利が、王のステータスに繋がるって訳さ。」

「成る程ね…」



シリユーに、ゲームの簡単な説明をした後、ライザーはリアスに顔を向け、

「お前は色々な意味合いで、本来は まだ、ゲームに参加する資格は無い。」

人数的にも、全然な。

確か お前の眷属は、そこに居る女王と戦車、それで今は外に出張ってる騎士に、僧侶が もう1人…だったな？」

パチンツ

そう言うときライザーは指を弾き、部屋にカン高い音を響かせる。

すると先程、ライザーが姿を現した時と同じ、燃え盛る魔法陣と共に、総勢15人…何れ劣らぬ美女美少女達が姿を見せた。

「見ての通り、俺のチームはフルメンバーだ。」

そして このチームで、それなりの勝利実績もある。

解るか、リアス…お前達にとって、元から これは、無理ゲーなんだよ。

何ならハンデに、その赤龍帝殿と聖女さんも、メンバーとして認めてやろうか？」

「な…!?!」「はあ?」「ええっ?」

ライザーの発言に、3様の驚きの声を上げる、グレイファイア、シリユー、リアス。

「ちよっと、本気なの、ライザー!?!」

「ライザー様、そんな勝手は…」

「……………」

「ああ、本気も本気さ。」

言つたる？それくらいの手が、丁度良いつてね。」

シリユーが黙りとなる中、リアスとグレイファイアがライザーに詰め寄るが、ライザーは自信と余裕を崩そうとはしない。

「わ、分かりました。」

但し、この場で私一人の判断では決めかねますので、両家の旦那様方と魔王様に了承を得た上で、正式に神崎様とアルジェント様をリアス御嬢様のチームメンバーと決まった時点で、改めてゲームの日取り等を報告致します。」

「ちよつと待った。」

「シリユー？」

グレイファイアが 此処迄言つた時点で、シリユーが口を開いた。

「俺の意見は無視か？」

俺もアースアも、リアス部長のメンバーに入るなんて、一言も言つてないのだが？」

「シリユーさん！」

それじゃ、部長さんが…」

「黙つてろ、アースア！」

ここで、シリユーがリアスのアシストに否定的な発言。

「おおつとつとつと…」

そいつは残念だねえ、折角あの悪名高き、伝説の赤龍帝を宿す者と、手合わせが出来ると思っていたのだが…」

この発言にライザーは薄ら笑いを浮かべたかと思えば、

「今代の赤龍帝は、とんだ腑抜たヘタレの様だな!!」

何故、魔王様達が あんなにも、一目置いているのかが解らん！」

この部室に顔を出して依頼、初めての鋭い眼光で、シリユーを睨みつける。

「勘違いするな。」

単に俺が、リアス部長のチームに入る理由が無いだけだ。

俺もアースアも、オカ研に所属はしているが、別にリアス部長の下僕にもグレモリーの眷属にも、なった訳ではない。

『客』の立場から、悪魔社会の御家事情に不介入の姿勢を通して

けだ。」

「シリュー…」

「正直に言ったらどうだ？」

如何に赤龍帝と云えど、『人間』である俺の存在が、気に入らないんだろ？」

「…!!」

凶星を射抜かれ、黙り込むライザー。

「それも そうだ…」

赤龍帝だと云うだけで、悪魔側に受け入れられただけなら まだしも、ある程度は魔王と同等な立場を得られているのだからな。

面白く思っていない者が居ても、不思議は無いさ…。

それは支取先輩や真羅先輩、匙以外の生徒会を見たって判る事だ。」

「シリュー君…」「シリュー先輩…」

このシリューの言葉に、「自分達は違う」と云う顔をする、朱乃と小猫。

「…だから、このゲームを出汁にして、気に入らない俺を、多少なり痛めつけてやろうとか、そう考えているのだろう？」

だが、俺は やはり、リアス部長のチームに入る心算は無い。」

「シリュー…」

はつきり言って、シリューの言い分は正しいとリアスが思い、僅かな勝利の可能性を諦めた その時、

「…だが、ハッキリさせるべき事は、ハッキリさせるべきだ。

先程からの腑抜けだとかへタレだとかの、その安い挑発、敢えて買ってやる。

リアス部長と その眷属の代理として、このシリュー…

この赤龍帝がライザー・フェニックス！

貴様のチームとのレーティングゲームとやら、挑ませて貰おう!!」  
不参加からの一転、リアスの助っ人眷属でなく、あくまでも『赤龍帝』個人として、宣戦布告を言い放つのだった。

「はい?」「え?」「へ?」





「先程の あの男の台詞ではないが、その程度のハンデは必要だろうか？」

「無視?！」

シリューは全く、気にしていない。

「おいおい、赤龍帝…いくら何でも、そりや少し、舐め過ぎじゃないか？」

さつきも言ったが、俺はゲームを何度も経験してるし、勝ち星も多い。

素人の お前が、単独で どうにかなるってモンじゃないぞ？

おい、イル！ネル！」

「はくい、ライザー様あ♪」

ライザーに呼ばれて前に出てきたのは、見た目は小猫と そう大して変わらない年頃の、双子の少女。

「赤龍帝…この2人の攻撃を捌けたら、お前個人の代理参戦、認めてやるよ！」

何時の間にか、シリューを赤龍帝と呼び捨て且つ、お前呼ばわりのライザーが、

「イル、ネル、殺れ！」

「はあ~~~~い!!」

双子の少女を嚇けた。

ギユウーン!! ドツドツドツド…

「ばくらばら!ばくらばら!!」

イルとネル…Tシャツにスパッツという出で立ちの双子の少女の持つチェーンソーが、けたたましく唸りを上げ、シリューに襲い掛かる。

ズバアツ!

「…えいつ!!」

バキイツ!!

「きやあつ!!!?」

しかし、何の前触れも無く、シリューの前に立ち塞がった子猫が、双子の鳩尾に強力な掌打を放ち、2人を吹き飛ばした。

「子猫ちゃん！」

「…どうも。」

その際、制服の上着とブラウスを少し切り裂かれ、その裂け口から、ペールイエローのシルクの布地が露わになるが、即座にアジアが、自分の制服を羽織らせる。

「すいません、シリユー先輩、つい…」

「いや、サンキュな。」

ほん…

そう言つて、シリユーは子猫の頭に手を乗せて軽く叩く。

「…~~~~~!?!」

一瞬にして、顔を赤くする子猫。

…と、何故か一緒に赤くなるアジア。

「な…ふ、巫山戯るな!!」

今のは、そのチビが勝手に しゃしゃり出たのでノーカンだ！

「む…ちび?」

かなり気にしているのか、その単語に過剰な反応を示す小猫。

「ライザー様、勘違いしないで下さい。」

私が前に出なかつたら、その2人は再起不能に なっていたかも知れません。

シリユー先輩は、私の1.5倍は強いです。」

「微妙な数値だな、おいつ!?!」

「ちい！ユーベルーナ!!」

「…はい、ライザー様。」

ライザーの声に従い、今度は部屋に姿を見せた時から、己の主の傍らに付き添っていた、大きく胸元が開いた紫のドレスに、白いローブマントを羽織る、ウエーブの入った長い黒髪の美女が前に立つ。

「受けてみなさい!!」

ユーベルーナが右手を翳すと、その掌から、テニスボールサイズの黒い魔力弾が、シリユーに向かって放たれた。

「な…!?…こんな部屋で!!」

それに対してシリユーは、小宇宙<sup>コスモ</sup>で生成したオーラで、その魔力弾

を包み込む。

BOMB!!

そして そのオーラの中で、爆発を起こす魔力弾。

それはオーラで包んでいなければ、部室を吹き飛ばしかねない程の火力だった。

パンツパンツパンツ…

「ひゅ〜ひゅ〜ひゅ〜っ♪ 見事だ、赤龍帝！」

両手を叩きながら、ライザーがシリユーに話し掛ける。

「まさか、威力は抑えていたにせよ、ユーベルーナの爆裂魔法を、あの様な形で防ぐとはな!! 実に面白い！」

「良いだろう! 貴様のリアスの『代理』としての参戦、この俺が認めてやるよ!!」

そう言うところライザーは、グレイフィアに顔を向け、

「…と、いう訳です、グレイフィア様。

「両家と魔王への御報告、宜しく御願いますよ。」

「…宜しいですね?」

「……………(ニイツ)」

グレイフィアの言葉に、無言で不敵な笑みで返すと、

「おい、帰るぞ!!」

自分の眷属と共に、燃える魔法陣の中に、姿を消して行くのだった。

◇シリユーside◇

「…では、失礼致します、リアスお嬢様。

神崎様、レーティングゲームの日程や詳細な取り決めが決まりましたら、また お嬢様を通じて連絡すると思いますので、宜しく御願致します。」

ライザー・フェニックスが部室を去った少し後、グレイフィアさんも魔法陣を転開して冥界の、リアス部長の実家であろう屋敷に帰っていった。

「シリユー…その、ごめんなさい…。」

結局、私の為に、アナタを…」

「リアス部長? また、頭に大きな たんこぶ作りたいたいのですか?」

「ご…ごめんなさい、マジ、すいませんした。」

結果的に俺をグレモリー家の問題に巻き込んでしまったと思ひ込み、謝罪しようとしたリアス部長。

しかし、俺がハリセンを取り出した瞬間、涙目になって首を何度も横に振り、別の意味合いでの「ごめんなさい」に切り替えてきた。

俺自らが飛び込んだのだから、そこ迄気にする必要は無いのだが…正直な話、リアス部長の縁談を利用する形になるが、本当に良い機会だ。

未だ俺の事を芳しく思っていない悪魔…特に上層部の者に、赤龍帝…いや、このシリユウの力を示すのにな。

特に、ライザー・フェニックス…お前には、ハンデ扱いした俺の力、存分に見せてやるよ。

「兎に角、申し訳ないとか思っているなら、当日は応援して下さいよ。それだけで良いですから。」

「ん！当日は、皆でチアガールの衣装で応援する！」

「あらあら？私もですか？」

まあ、別に構いませんけど？」

「ははは…期待してますよ。」

「シリユウ先輩、心配しなくても、トーカちゃんにはチクってあげます。」

「いや、違うだろ!!」

「わ、私もチアガール、頑張ります！」

「いや、アシアは建て前上、俺の…『赤龍帝』の下僕というか、部下という立場だから、俺とゲーム参戦だよ。」

「えっ!?!…はい、頑張ります!!」

いきなり告げた、参戦という言葉にも物怖じせず、良い返事なアシア。

まあ、彼女の参戦は本当に形だけで、出番は殆ど無い予定だが。

そんな風に暗い雰囲気を払拭する如くな感じで話していたら、また部室内に、転移魔法陣が浮かび上がった。

「部長、今、戻りました。…って、何かあったんですか？」

「……。」「……」

あ、木場の事、完全に忘れてた。

眷属、募集します！

グレイファイア・ルキフグスとライザー・フェニックスが訪れてから、2日後の放課後。

「くつ、ライザー…あの男、分かってはいたつもりだったけど、とことん下種ね…」

「シリューさん…私…」

「いや、『俺』を相手にと考えた場合、ある意味、正当な要求さ。」

何しろ向こうは、自分の縁談取り消しをチップに…それ程のデメリットを背負うんだ、このレベルは想定内だ。」

リアスの縁談破棄を賭けた、『赤龍帝vsライザー・フェニックス』のレーティングゲームの実施が、正式に悪魔サイドにて認められた。

そして、その詳細が、昨日の夜、リアスの下に封書として届けられていた。

オカ研部室で その封書を開き、中に入っていた書面を見て憤慨するリアス。

「…でも、シリュー!!」

「大丈夫だ、勝てば関係ない。」

奴等は不死鳥フェニックスなだけに、死亡フラグという概念が無いだけさ。

…まあ、立っただけだな!!」

「シリューさん…」 「シリュー君…」

「シリュー先輩…」 「神崎君…」

※※※

赤龍帝vsライザー・フェニックス

レーティングゲーム詳細（一部抜粋）

◎開始日時

5月■日（日） PM10:00

▼赤龍帝は人間界駒王学園オカルト研究部部室、ライザー・フェニックスは冥界フェニックス邸自室にて、他参加者と待機

◎参加者

▼赤龍帝側に限り、チーム定員16名に達する迄、自身の下僕の他、

リアス・グレモリーの下僕の同伴を認める。

◎勝者報酬及び権利

▼賞金・2・000・000-

▼赤龍帝が勝利した場合、グレモリー家とフェニックス家との間で取り決めていた縁談の破棄を認める事とする。

▼ライザー・フェニックスが勝利した場合、赤龍帝は自身の下僕、部下全てをライザー・フェニックスに差し出す事とする。

※※※

「確かに、自分の結婚を賭けた勝負に、他の女を寄越せと言うのは、男として どうかと思う所は在るが…」

「まさかとは思っていたけど、アイツ、最初からアジアを狙っていたのよ！」

だから自分からハンデとか言って、シリューを引きずり出そうとしてたのよ!!」

「…シリュー君、やはり、私達もゲームには同行しますわ。」

「そうだよ神崎君、既にキミと部長だけの問題ではなくなってるんだ。」

「シリュー先輩、私達は役立たず

「ん？何か言ってるか？」

フルフルフルフル：

小猫がシリューに自分達の戦力の価値を問おうとするが、それを言い終わる前に、逆に質問で返される。

そして そのシリューが何処からか取り出した凶器（笑）を見た途端、小猫はトラウマでも有るのか、頭を庇うかの様に抑え、無言&涙目で首を横に振るのだった。

「部長も皆も、言いたい事は解るが、今回だけは俺だけで やらせて欲しいんだ。」

「これは、俺の意地だけじゃない。」

「シリュー？」

「魔王達が俺を悪魔サイドに招いた件：

今、冥界では その辺りで魔王に不信感を持つ者も、決して多くは

ないが、居るのだろうか？

だから、魔王達の判断が正しかった事を、俺の力を以て証明したい。少なくとも それで、俺への不満は兎も角、魔王に対する文句は消えるだろうか？

赤龍帝を悪魔サイドに取り込んだ判断は、戦力的に間違っではないな  
かった…と。」

◇シリユースide◇

「…新しい眷属ですか？」

「ええ、そうよ。」

ライザーとのレーティングゲームの詳細云々で話した後、今日は  
偶々、誰も夜迄 部活しごとでの出張が無かった為、その儘リアス部長指示  
の下、ミーティングが執り行われた。

御題は『新しい眷属』。

「今回はシリユースに丸投げな形になったけど、また、不意に非公式な  
レーティングゲームを戦る機会が無いとも限らないわ。

それにしても、私には下僕が少な過ぎる。

公式戦に参加出来る年齢になる迄、じっくりと人材を探し出し、焦  
る必要は無いと思っていたけど、この前のアレで、その気持ちは吹き  
飛んだの。」

…だ、そうだ。

あながち、間違っではないと思う。

部長と同年代である支取先輩も、手持ちの悪魔イヴァイル・ピリスの駒を既に殆ど消  
費して、それなりのメンバーを集めている。

「新メンバーは駒王の生徒でなくても良いし、年齢や種族にも拘らな  
いわ。

さしあたっては、コレよ！」

バツ!!

部長が自信満々で差し出したのは、部活しごとで使う、悪魔召喚用の魔法  
陣が描かれているビラ。

手にして読んでみると、



『アナタも悪魔に生まれ変わって、新しい人生を謳歌してみませんか？』

相談、承ります。』

…の文章が、一番下に書き加えてある。

「「「「……………」」」」

俺だけでない、アーシア含む、皆が言葉を失い、固まっているよ。

「さあ皆、使い魔を喚んで、このビラを町中に配って来て頂戴！」

……………」

駄目だ、この悪魔<sup>ひと</sup>…

早く、何とかしないと…

》》》》

あれから3日経った。

「進展あった？」

「いや、全然だよ。」

「大変ですね。」

放課後、オカ研2年生の3人で旧校舎の部室に向かう途中、木場に誰か『悪魔になりたい』と云う人が見つかったか？…と聞いてみたが、返ってきたのは やはりな答え。

当然な話だ。

余程、特殊で重い事情が無い限りは、悪魔に転生しようなんて考える人間は そう居る筈がない。

俺も昨日の夜、アーシアを連れて森沢さん宅で話してたのだが、

「悪魔に転生？」

神崎君、馬鹿な事を言うなよ。

ひ弱な人間である僕が、アーシアちゃんや子猫ちゃんみたいな悪魔の女の子を喚ぶ事に、意義があるんじゃないか！」

…な感じに力説された。

》》》》

ガラ：

「失礼します。」

「こんにちは」

シリユウ、アーシア、木場が部室の扉を開けて挨拶する。

「いらつしやいによ♪」

「Nooooooh!!? (「。O。L」)」

「あら、お客様?」

3人を出迎えたのは、身の丈推定6尺6寸、強靱な体躯をゴスロリに包んだ、某世紀末霸王な面構えの漢：否、乙漢<sup>おとめ</sup>だった。

未知との遭遇に、『あちら方面』の2人のファンが見たら、泣いて喜ぶ光景な如く、思わず身を抱き合つて悲鳴を上げるシリユウと木場。

そんな中、アーシアだけは、平常運転な受け応え。

「初めまして、アーシア・アルジエントと申しますう。」

「ミルたんによ!♪」

》》》》

「:魔法少女になれるなら、この際ついでに悪魔になるのも、構わないそうです。」

Orz

居た:『real』と書いて、『ガチ』に居た。

このミルたん(本名不詳)、聞いてみたら、子猫の昨日の部活<sup>しゅくと</sup>の依頼主で、魔法少女に憧れる漢の娘だそうだ。

昨日の夜、訪ねた時の依頼内容が、『ミルたんを、魔法少女にしてほしいによ!』だったらしく、それで子猫が試しに『悪魔になったら、魔法が使えます。』と言ってみたら、凄く乗り気になったそうだ。

そんな訳で今日、リアス部長を訪ねてきたとの事だそうだ。

因みに彼:女は旧校舎へ足を運ぶ前、律儀に学校の事務室を最初に訪れたらしく、来賓プレートを首からぶら下げていた。

事務室の人達も、ビックリしただろうな。

「オカ研に頼る前に、異世界に行くのを薦めるが:」

「もう異世界へは行ってみたけど、ダメだったそうです。」

「行ったのかよっ!」

部室隣のトレーニング室、ペンチプレスしながら、バイクマシンに跨がる小猫と会話している最中で発覚した事実。

…と言うよりか、異世界転移が出来たりする時点で、既に十分に魔法少女？である気もするのだが：

「…シリユー先輩。その辺りは、考えたら負けです。」

…うん。小猫も同じ事を思っていたか。

》》》

コンコン…

「シリユーさん、小猫ちゃん、部長さんが部室に来て下さいと。」

「はい。」「ああ、分かった。」

暫くすると、アーシアが呼びに来た。

子猫はトレーニング室の更に隣の空き教室で、俺は この場で汗を拭いて、制服に着替え、部室に向かった。

》》》

「さて…皆揃ったわね。」

ミルたんに対して、自分の下僕として人間を辞めて悪魔になる覚悟や、悪魔になった場合の制約：メリット以上にデメリットの是非を確認していたリアス。

そしてシリユーと子猫が部室に入った時、リアスの隣にはミルたんが立っていた。

それは、即ち…

「皆、今日最初に部室に入ってきた時に、一度挨拶は済ませているだろうけど、改めて紹介するわ。」

今日から私達の新しい仲間、<sup>ポイン</sup>兵士のミルたんよ!!」

リアスに、新しい下僕が誕生した事を意味していた。

「ミルたんだよ。」

先輩方、悪魔になったばかりで、分からない事が沢山ありますけど、よろしくお願いするによ！」

リアスの紹介で、部員達に新人として、以前、魔王少女がやってきた様なポーズを決めながら、挨拶するミルたん。

「ぼ…<sup>ポイン</sup>兵士って、部長、戦車でなくてですか？」

「ん、それがね…」

リアスが その件について話し出した。

要約すると、リアスも最初はミルたんを戦車にするつもりだったが、その戦車の駒を入れ込もうとしても、直ぐに弾き返してしまう…との事。

「残念だけど、今の私の力じゃ、このコを戦車の駒1ヶで悪魔に転生させる事が出来なかったの。」

逆に言えば、戦車の駒1ヶでは、悪魔に転生出来ない程の潜在能力を秘めた人間。

…ならばとリアスは、複数の兵士の駒を取り出し、

「6ヶ…ですか…?」

結果、ミルたんを転生させる為に、兵士の駒6ヶを消費したのだった。

「匙君が確か、駒4つ消費したって言ってたよね。」

「ミルたんの勝ちか…（笑）」

》》》

「それじゃ早速、彼女のチカラの御披露目と行こうかしら。ミルたん？」

「分かったによ。」

皆、外に出るから、付いて来るによ。」

ひゅん!!

「き、消えた!?!」

そう言うとミルたんは、瞬時に その場から姿を消した。

「おっい、早くによ〜!」

「!!?!」

そう思えば、外から部室に向かって呼び掛けている。

「今のは、瞬間移動…ですか?」

「いや、只の超スピードだ。」

「只のつて…僕が、全然反応出来なかったんだけど…」

「凄いですわね…本の数分前までは、只の?人間でしたのに…」

「ええ…あのコ、魔力の使い方を理解しているわ。」

「成る程!今のは駒の特性でなく、悪魔の駒イザイル・ピースによって得た魔力を利用した、加速魔法か!!」

「その通りよ。」

そういつた会話をしながら、オカ研メンバーも階段を降り、外に出て行った。

》》》》

「！！」……………「！！」

部長に連れられて外に出た俺達は、その儘、旧校舎脇の森の入り口に集まった。

そこにある一本の巨木の前で、既にミルたんがスタンバイしていた。

「じゃ、行くによ。」

俺達が注目する中、巨木を見据えたミルたんは、空手の様な構えを取って、魔力を集中させていく。

「！！？」

そうすると、背中から魔力が溢れ出し、それはミルたんよりももう2回り位大きな彼？彼女？の姿を象る様に具現化。

そして次の瞬間、

「これが、魔法少女ミルたんの必殺魔法！

マジカル・ドリーミング・エクスプロージョン！によーっ！！」

雄叫びと共に、2人のミルたんが、巨木に拳を打ち込んだ。

どっごーooooooooooooooooooooっん！！

「直接殴るんかいっ!?!」…と、ツツコミを入れる前に、その巨木は拳での一撃二撃によって、へし折られると同時に起こった爆発と共に、消し飛んでしまう。

「す…凄まじい破壊力ですわ…」

「あの打撃に、爆裂系の魔法効果を付加したと云うのか…」

「み、ミルたんさん、凄いですう！」

「…強い!!」

「予想以上だわ…」

その破壊力に、オカ研の皆が、驚きの顔と一緒に感想を述べる。

当然 俺も、驚いた。

「ありがとう、グレモリーさん…いや、リアス様！」

「ミルたん、おかげさまで、本当に魔法少女になれたによ!!」

「ぶんぶんぶん…」

そしてミルたんは感激の涙を零しながら、リアス部長の右手を両手で握り締め、振り回している。

「い、いえ…どういたしまして…」

「これから宜しくね…。」

「あれ、魔法って言っても良いのか?」

「…本人が喜んでるんだから、問題無いと思います。」

《《《

その後、部室でミルたんを加えての、軽いミーティングが行われた。

駒王学園の生徒ではないミルたんは、当然ながら『オカルト研究部』には所属せず、あくまでもリアスの下僕として、放課後の時間帯になると、直接部室に魔法陣転移する事になった。

なお、当面のミルたんの新人教育は、姫島先輩と木場が受け持つ事に決まる。

そして…

「ねえシリユー?今度のゲーム、アナタはアジアと2人で大丈夫と言っていたけど、やっぱりミルたんも、アナタのチームに加えて貰えないかしら?」

リアスがシリユーに、来週の日曜日に執り行われるレーティングゲームに、ミルたんの参戦を提案してきた。

使い魔、ゲツトだぜ！

◇シリュー side ◇

ミルたんがリアス部長の眷属になった翌日の夜。

「『使い魔?』」によ?」

「そう、使い魔ですわ。」

「使い魔は、悪魔とつては基本的。」

「主の手伝いから情報伝達、追跡調査にも使えるんだ。」

「そんな訳で いきなりで悪いけど、今から皆で冥界の『使い魔の森』へ行くわよ!」

俺とアシア、ミルたんの「使い魔?」の台詞に、軽く姫島先輩達が教えてくれたのだが…

本当に いきなりだ。

参考迄に、現時刻、21:23。

俺、アシア、ミルたんは たった今し方、森沢さん宅で『ケンツロウ』と『田縄ぷりえ』は どちらが強いか?を熱く、熱く語り終えて帰って来たばかりである。

「:リアス部長、そう云うのは、せめて前日、事前に報せるべきじゃないですか?」

報連相って言葉、知ってます?」

オカ研としての仕事を終え、帰る気満々だった俺が、ハリセンを高く掲げる。

「ひえっ?! ストロープ!」

シリュー、ハリセン ストロープ!!」

そんな俺に、必死な顔で待ったを求めるリアス部長。

「だ、だって、満月の夜でないと、使い魔は入手出来ないのよ!」  
…らしい。

聞けば、人間界と冥界の月の満ち欠けは殆ど同じ周期らしいが、人間界(こちら)の月は現在、去年の3月に原因不明の一部分爆発を起こし、常に三日月になっている。

それから約1年後の今年の3月になって、何の脈絡も無く、『実は宇

宙人の仕業でした』とか『その宇宙人が、今度は地球を爆破すると言っている』とか『その宇宙人が現在、都内の中学校にて生徒を人質に立て籠もり中』だとかニュースになったり。

しかも その人質の中学生というのが、当時中学卒業前のユキコやトーカのクラス全員でしたっていう、胡散臭さ満載な報道が乱れ飛んでいた。

結果、それからは何事も起きておらず、今に至っているのだが。

4月になって、当事者となっている本人達に人質等の件について聞いてみたら、「そんな訳ないじゃない！（笑）」と笑いながら言われてしまった。

話を戻すと、兎に角そんな訳で人間界では既に本来の満月のタイミングを掴む事は普通には出来ず、思い出した様に確認してみれば、実は今夜でしたってオチだそうさ。

「お願い！今夜をハズすと、また来月まで待たないといけないの！！

ミルさんの為にも！…ねっ？」

…やれやれだぜ。

》》》

「おお、う…」

「か、神崎君!？」

「シリユーたん、大丈夫によ?」

「くつく…だから、腹筋割らせるなし…」

リアスの転移魔法陣を使って、冥界の使い魔の森にジャンプしたオカ研メンバー。

…と、駒王学園生徒会長の支取蒼那…否、ソーナ・シトリーに、彼女の眷属である兵士ポインの匙元士郎。

匙も この度、使い魔を得る事をソーナから許され、オカ研と同行する事となった。

そして現在、シリユーが大絶賛転移酔い。

木場とミルたんが、蹲っている彼の背中をさすっており、そんな様を見ている匙が、蹲って腹を抑えて笑っている。

「アーシアちゃんは、大丈夫なの?」



「は、はい、私は特に…」

尚、今回のコレで、アーシアの聖母トワイライト・ヒーリングの微笑には、酔い覚ましの特性は無いのが判明した。

》》》

「この木の下の、約束だったんだけど…」

一行が今 居るのは、森を少し入った先にある、周りの木々に比べて一際高い、杉の様な木の下。

この場で、今回の使い魔入手に伴う、森のガイドとの落ち合う予定だったが、待ち合わせの時刻が近づいてきたにも拘わらず、一向に姿が見えない。

「…それにしても塔城さんは、凄い荷物だねえ？」

「備え在れば、憂い無しです。」

まるで某『迷宮探索での劇的な出逢いには是非を問う物語』に登場するキャラクターの1人である少女が背負う様な、巨大なりユックについて匙と子猫が話していたり…そうしている内に、遂に約束の時刻になった。

その時…

「ゲットだぜ!!」

「!!!!!!?!!!!!!!」

突然、木の上から聞こえる男の声に、シリユー以外の面々が驚きの顔を見せる。

皆が上を見上げると、木の天辺付近の枝の上に立つ人影が、満月の明かりに照らされていた。

「とうっ！」

…シユタツ

掛け声と共に、木から飛び降り、途中で一回転半捻りを加えつつ、男は地面に着地。

「俺の名はザトゥージ！」

使い魔マスターを指摘してるんだぜい!!」

キヤップを後ろ向きに被った半ズボンの悪魔は、自信に満ちた顔で名乗る。

「彼が、この森のガイドよ。」

ザトウージ、今回は宜しくね。」

「宜しく願います。」

「おうーこの俺様に掛ければ、強い、硬い、速いの、どんな使い魔だつて楽々ゲットだぜー！」

リアスとソーナの挨拶に、ザトウージはサムズアップで応える。

「どうでも良いが、こっちは少し前に揃っていたのに、時間ピッタリまで枝の茂みに隠れてなくても良かったのではないか？」

「うぐ…気づいていたのか…」

なかなかやるんだぜい…」

しかし、シリユートの言葉にタジタジになってしまふザトウージ。

《《《

「で、今回、使い魔をゲットしたいってのは、んぐ…そっちのデカイのとこっちの冴えない奴か。」

「凄いな…一見で見分けられるのか…」

「…冴えてなくて、悪かったな。」

一見で、使い魔を所持していない悪魔…ミルたんと匙を判別出来る、ザトウージの眼利きを賞賛するシリユート。

そのシリユートが、ザトウージに質問を投げかけた。

「なあ、ザトウージ、使い魔というのは、人間はゲットする事は出来ないのか？」

「んぐ、今迄、そう云う事例は無いが…」

使い魔ゲットするのに最終的に必要なのは、契約時の魔力だ。

如何に信用信頼を得ようが、或いは実力で屈伏させようが、最後の魔法陣を使つての契約には、本人の魔力が必要なんだぜ。

だから理屈の上じゃ、魔力を持つてさえいれば、種族関係無く、使い魔をゲットするのは可能なんだぜい！」

「…成る程。それなら俺やアジアが、使い魔を得る事も不可能では無い訳だ。」

「え？」「はい？」

シリユートの台詞に、アジアとザトウージが声を出す。

「神器持ちなら、魔力は持っている。」

「アーシア、俺達も使い魔とやらを得られるならば、入手するぞ。」

「は、はい！」

「へ、何で人間が、リアス嬢さんと一緒に居るのかと思っていたら、兄ちゃん達、神器持ちだったのかい？」

「それなら確かに、使い魔をゲット出来るかも知れないな。」

「顎に手を置き、品定めする様な目で、ザトウジは呟く。」

「俺としては、戦闘サポートしてくれる…そうだな、パワーよりスピード特化したタイプが欲しいな。」

「ほう…そうだな、自分の特性に合わせて、自分と似たタイプ、または自分に足りない部分を補ってくれるタイプ…」

「そういう点を考えて、使い魔を選ぶというのは基本なんだぜ！」

「お前さん、人間にしては、なかなか分かっているんだぜい!!」

「シリユウの発言に、ザトウジは思わず種族を問わずに感心する。」

「そして」

「俺は妖精とか、可愛い女の子系かな？」

「この匙の発言にザトウジが、」

「はあく…、分かってないんだぜい、コレだから素人は…」

「…と、苦虫を噛み締めた表情で、溜め息混じりに不満を零すが、」

「わ、私も、可愛い使い魔さんが欲しいですう…。駄目…なんですか？」

「ミルたんもによ!!」

「いや、やつぱり そうだよね〜！」

「どうせゲットするなら、可愛い使い魔のが良いよね〜!!♪」

「は…はい…」

「このアーシア（…とミルたん）の発言に、態度が一変。」

「アーシアの右手を両手で握手しながら、鼻の下を延ばしての会心の笑みで応えるのだった。」

「…殴って良いか？殴って良いよな？」

「…ってか、4〜50発、殴らせろ!!」

「さ、匙君、落ち着いて！」

「さあ、もう良いでしょ?。」

「そろそろ行きましょ?。」

「か、会長く?。」

《《》》

「頼むぞ、リバプール。」

何か居たら教えてくれよ。」

『ぐるぐる…』

使い魔を求めて森の中に踏み込んだリアス一行。

リアス達の前を歩く、ランタンを持ったザトウーシの更に前、先頭を進むのは、顎には2本の鋭い剣歯、眉間と顛に計3本の角、身体は赤と白の毛に覆われ金の鬘を持った、見た目は猫科の猛獣を想わせる、雷獅虎と呼ばれる魔獣…木場の使い魔である。

『…!!ぐるろろろーっ!』

「リバプール?。」

突然、その木場の使い魔リバプールが、目の前の木の上側に顔を向けて雄叫びを上げた。

その先には、

「あれは…。」

「ド、ドラゴン…。」

「…の子供?。」

木の上方の枝に止まっていたのは、紛れもなく、蒼と白の鱗を持った、小型のドラゴンだった。

「おう!あれは正しく、スプライト・ドラゴン蒼雷龍の幼生なんだぜい!

ドラゴンてのは成龍になると、他人の言う事なんざあ、まずは聞きやしないから、使い魔にするなら今の内なんだぜい!。」

このザトウージの説明に、

「シリユー、アナタ赤龍帝なんだから、相性良いんじゃないの?。」

使い魔、あのコにしなさいよ!。」

「いえ、それなら匙だって、ザリトラ黒邪龍を身に宿す者よ。

匙、なんとしてでも、あのドラゴンを使い魔にしなさい!。」

「なぬ?赤龍帝と黒邪龍だとお?。」

リアスとソーナが、本人そっちのけで、蒼雷龍ゲットに乗り気になり、その際にザトウージがシリユーと匙の持つ神器を知り、驚いたり。「ふう…だ、そうだが？」

どうする、匙？

お前が その気なら、譲るぜ？」

「お、おう…」

シリユーの言葉に、一瞬だけ迷う匙だが、「よし、スフライト・ドラゴン蒼雷龍！  
キミに、決めた!!」

そう言つて、木の上の龍族の幼生を指差し、連続ジャンプを駆使して枝を飛び移り、蒼雷龍が止まっている枝まで辿り着く。

しかし、

『キシャーツ!!』

バリバチイツ!!

「アガガ…ケカキツツツサンアヨハ!」

ゲットしようと手を差し伸べた瞬間に、強力な雷撃を浴びせられて  
しまい、

ひゅー~~~~~~~~~~~~…

ドンツ!!

悪魔の羽を展開する前に、地面まで真つ逆様、勢い良く落下してしまふ。

「さ、匙ーっ!？」

「匙君!？」

「アーシアさん、回復をお願いしますー!」

「は、はい!!」

慌てて駆け寄るシリユー達。

『…フン!!』

スフライト・ドラゴンそして蒼雷龍の幼生は、暫くの間その様を見てみると、興味を失ったのか、背中の羽を広げ、何処かに飛び去って行った。



「あく、大変な目に遭ったぜ…」

「おう、蒼雷スフライト・ドラゴン龍てのは、綺麗な心の持ち主にしか、心を許さないつて云うからな、兄ちゃんじゃ無理だったみたいだな！」

「早く言えよ！それ、早く言えよ!!」

…そんな会話を交えながら、更に森の奥を進む一行。  
ぴた…

「ん…？リバプール？」

先頭を歩いていたりバプールが、急に歩みを止める。

「…!!この気配、何かが居る！」

「がるるるる…!!」

先に潜む何かに、威嚇するように唸り声を上げるリバプール。

バシャアツ!!

茂みの中から現れたのは、幾本もの黄色い触手。

胴体…本体は確認出来ないが、その触手は まるで此方の様子を窺っている様に、うねうねと 不気味にくねらせている。

「ま、不味いぜ、アレは まだ、正体がハッキリしてないんだぜ！」

只、判っているのは、胸の大きな女の子を選び好んで襲うって事だけなんだぜ！」

「「はい？」」「「え？」」

「「ほえ？」」「「へ？」」

『はああっ!!?』

ザトウジの台詞に、その場の全員がハモった。

「お、おい、それって、ヤバくないか？」

「応…今この場には、『学園きよぬー四天王』の内、3人が居るんだぞ!!?」

「その呼び方は止めて!!」

この匙とシリユアのやり取りに、リアス、朱乃、ソーナの3人が声を揃えてクレームを付ける。

しかし、それが引き金になったのか、

シュツ…!!

「き、きやあああああっ?!」

遂に触手の群が、リアス達に襲い掛かってきたのだった。

## ソーナの秘密!!

シユルル!!

「ひええっ!?!」

「あらあらあらあら?」

「いやあっ!?!」

「会長おっ!?!」「部長!!」

突如、現れた幾本もの黄色い触手は、その身をピンク色へと変化させ、リアス、朱乃、ソーナに襲い掛かる。

触手の群は、先ずは彼女達の手足を拘束すると、その儘 空高く、その身体を持ち上げた。

「む…?」「きやああああああっ!?!」

同時に、ザトウーヅが言う処の、触手が好むと云う『きよぬー』以外の女子、子猫やアーシアは無論、残りの者達に対しても、

「な…!?!」「しまっ…!!」「うわっ!?!」

「うおっ?」「によ!?!」

邪魔立て無用とばかりに手足に巻き付き絡まり、身動き取れない様にする。

「しまった、油断した!

コイツ、想像以上に…速い!!」

「き、騎士である僕が…!?!」

油断があつたからとは云え、スピード特化の木場だけでなく、本気になれば、光速で動けるシリユードさえも驚愕のスピードで捕まえた触手。

「ふ、振り解けないによ!」

「…同じく。」

「ふみい、気持ち悪いですう〜!」

更にはオカ研入部後、シリユードやリアスに鍛えられ、漸く『人間』の平均女子高生並みの運動能力に達しつつあるアーシアは論外の事、戦車である小猫や『素』で戦車同等以上のパワーを持つミルたんでさえ



も、触手に完全に動きを封じられる。

「ぬおっ、身動き取れないんだぜい!？」

「会長おおおっ!!」

そして偶然か悪意か、或いは茶目つ気なのか、匙とザトウージは、手足と謂わず、手足諸共、身体全体をぐるぐる巻きに縛り付けての逆さ吊りの状態で、天高く持ち上げられた。

》》》

姫島朱乃、支取蒼那、リアス・グレモリー。

駒王学園男子生徒公式制定である『学園きよぬー四天王』と呼ばれる4人の女生徒の、その内でもトップ3とされている、現在拘束されている3人に対し、無数の触手は、これからは本番とばかりに胸元から或いは裾から制服の内側に侵入、

「ちよ…っ!？」

「あらあらあら?…」

「い、嫌あっ!!」

その身体…その ふくよかな胸を弄り始めた。

ヌルフフフフフフフフ…

触手の根元、恐らくは『本体』が隠れていると思われる茂みから、不気味な囁い声が響く。

「ちよ…だ、駄目…」

『ニユル…!?!』

びた…

そんな中、ソーナの胸元を弄くっていた触手が、その卑猥な動きを止める。

『……………』

スウ…

「…へ?…」

制服の中の触手を抜き出すと、まるでソーナは お気に召さなかつたかの様に、手足の拘束は解かない儘、ソーナを地上に静かに降ろす。

「な・なな…!?」

わなわなと、顔を赤くして震えるソーナ。

「うおおおおおっ!!」

『Boost!!』

ブチイツ

!

それと ほぼ同じタイミングで、縛られたと同時に赤龍帝の籠手を発動させ、小宇宙<sup>コスモ</sup>と魔力を、数度の倍化で増幅させていたシリユーが「ふう、やつとフリーになれたぜ!」

漸く自身の体の動きを封じていた、黄色の触手を千切る様に粉碎すると、

「ド・ラ・ゴ・ン…波あーっ!!」

透かさず茂みの中の触手の本体に向けて、必殺のエネルギー波を撃ち放った。

ドゴオツ!!

『にゅやー…にゅやー…にゅやー…?』

その一撃は見事に命中したらしく、奇妙な断末魔と共に、空中に捕らえていたリアスと朱乃の拘束を投げ捨てる様に解き放つと、この触手の本体は凄まじいスピードで、森の更に奥深くに逃げていった。

◇シリユーside◇

「ひええええくっ!?!」

「あらあらあらあら?」

「リアス様!」「朱乃先輩!」

空中で捨てられたリアス部長と姫島先輩は、地上激突前にミルたん  
と小猫が それぞれ お姫様抱っここの形でキャッチ、事無きを得た。

2人共に、先程の触手の『アレ』でテンパっていたのか、翼を展開させる余裕が無かった様だ。

「…それにしても あの触手、何で支取先輩だけ、先に解いたんだろうな?」

「ん、確かに違和感が有ったよね?」

「「「「「……………」」」」」」

俺と木場の何気ない呟きに、黙り込む女子達…と、匙。

「と、兎に角、皆 無事だったんだし？先を急ぎましょー!!」

そんな微妙な空気を誤魔化す様に、リアス部長がわざとらしく声を張り上げ、その場を締めた。

「その前に、この服って どうにかならないかしら？」

服の中、あの触手の粘液がベトベトで、気持ち悪いですわ…」

「うう…確かに…。」

そして改めて出発…しようとした時の姫島先輩の言葉に、リアス部長と支取先輩も、それに同調した。

アーシアも、同じ様な顔をしている。

まあ俺も、縛られた手足がベトついていいるから、気持ちは解るが。

「はい先輩、替えの制服です。」

「小猫？」

「塔城さん？」

「小猫ちゃん？」

すると小猫が、背負っていたリュックから、駒王の制服を取り出して部長達に渡す。

「「あ…ありがとう…。」」

予想外の準備の良さに、複雑な表情でリアス部長達は着替えを受け取った。

「何を沢山詰め込んでると思ったら…」

小猫、やるなあー！」

「…備え有れば憂い無しです。」

こんな事も在ろうかと、用意していて正解でした。」

…どんな事を想定していた？

「はい、シリュー先輩達も。」

手足が気持ち悪いでしょう？」

そう言いながら子猫は、残った皆にも一枚ずつタオルを配っていた。

いや、凄いや小猫、正直 見直した。

その巨大リュック、俺は てつきり、お菓子しか入ってないかと

思っていたぜ。

「当然、おやつも用意しています。」

はむ…

シリユー先輩、クッキー食べますか？」

…持つて来てるんかい…。

▼▼▼

「おお、皆、この泉には水の精霊、ウンディーネが住んでいるんだぜい！」

一行が森を掻き分けながら進んで行った先、其処にあつたのは透明感溢れる水面の泉だった。

「なぬ!?ウンディーネですと!」

ザトウージの言葉に、匙が鼻息を荒く立てて反応。

「あ!ひよつとして、アレですか?」

「え?」

皆がアーシアが指差した泉の中央を見ると、水面には大きな波紋が広がっており、その中心が柱を作るかの様に、次第に隆起。

やがて それは、徐々に人の形を成していった。

そして完全に人の形を整えた、正に水の化身と形容するに相応しい、澄んだ水の如きな透明度の高い その容姿は、

「二二み、ミルたん…?」

髪型がストレートロングな点と羽織コスチュームっている衣を除いては、面構えから身体付きまで、ミルたん其の物だった。

「ち…違〜う!!アレは断じて、ウンディーネなんかじゃあなあ〜いい!!」

orz…そのウンディーネを目にして、何をイメージして何を期待していたのか、両膝両掌を地に着け、まるで この世の終わりが来たかの様に項垂れる匙。

『……………。』

どんっ!

「うわあっ!?!」

「匙!!」

そんな匙に、ウンディーネの振りかざした拳から圧縮された水の塊  
：水の魔力弾が放たれ直撃、匙は吹っ飛ばされてしまう。

そしてウンディーネはリアスを達を凝視、泉を荒らす輩と判断したの  
か、連続して魔力弾を撃ち放ってきた。

「によっー！」

この攻撃を、ミルたんが その場の誰よりも素早く前に立ち出ると、炎を纏わせた拳で その全てを弾き飛ばす。

バシヤバシヤ

「ミルたん？」

そして感ずる何かが有ったのか、ミルたんが泉に足を踏み入れる。

魔力を使う事により、水面上を まるで地面の様に普通に歩き、泉  
中央のウンディーネに歩み寄っていくミルたん。

『……………。』

そんなミルたんに気付いたウンディーネも、その場で動じる事無  
く、自身に向かつてくる漢乙を刮目。

『……………。』

そして約2分の間合いで、無言で対峙するミルたんとうんディー  
ネ。

ガシイッ!!

「「ええっ!?!」」

「「な…?」」

「「おお!!」」

「数秒間の沈黙の後、両者は同じタイミングで動き出したかと思えば互  
いに組み合い、ロックアップの体勢を取る。

「このコはミルたんが、何とかしてみせるによ。皆は先に行くによー」  
筋骨隆々な水の精霊と力比べをしながら、仲間に先に進む様に薦め  
るミルたん。

「…でもっー！」

リアスが戸惑う中、2人は互いの腕を振り切り、数歩後退して距離  
を空ける。

ドガシャ!

その後、先に仕掛けたのはウンディーネ。

水面に豪快に己の その剛拳を撃ち付けると、その衝撃で泉の水面は まるで間欠泉が吹き上げたかの様に突起、それは その儘、無数の水の柱となってミルたんを襲い迫る。

「マジカル・ドリーミング・エクスプロージョン! によー!!」  
どっごおおっ!!

しかしミルたんは それを、背中に具現化させたもう一人のミルたんと共に、爆砕相殺させ、間髪入れずにスピードアップの魔法で一気に入合いを詰め、更には魔力で腕力強化した、渾身の右ストレートを撃ち放った。

バツキイ!! x 2  
「!!?」

しかしウンディーネも、同時に右ストレートで応戦、互いの右腕が交わり、互いの左頬に、互いの右拳が突き刺さった。

ガクツ…

体をよろめかせ、片膝を着く両者。

「さあ、早く行くによー!」

決して少なくないダメージの中、ミルたんは立ち上がり、再度、リアス達に先に進めと促すが、

「でも、アナタを置いては…」

仲間を置き去りにするのに、やはり躊躇するリアス。

「この場合は あのゴ? に任せて、先に行くんだぜ。」

既に何人足りとも、あの2人の間には割って入れないんだぜ。」

「……………分かったわ。」

朱乃、アナタは此処に残って。

ミルたんを、お願い。」

「はい、部長。」

それをザトウウジが諭し、その台詞に納得したりリアスが朱乃にこの場での待機を指示、朱乃は それに頷いた。

「…さあ皆、先に進むわよ。」

そして如何にも不安を無理矢理に隠していると云うのが丸分りな表情で、リアスは仲間に声を掛けるのだった。

しかし…

「部長、俺も最後まで見届けますよ。」

「ああ、こんな極上カード、ドームのメインでも簡単には御目に掛かれないぜ！」

「はい、シリュー先輩 匙先輩、ポップコーンとコーラです。」

「ありがとうございます。」

その場から動くのを渋るのが約3名。

「アンタ達、一体何しに この森に来てると思ってるのよ!!?」

スパカーン!! x3

「この○ばあつ?!?」

そんな3人のド頭に、リアスとソーナのハリセンが炸裂するのだった。

》》》

「きゃあああああ〜っ?!?」

「ま、不味いぜ!このスライムは、女の子の衣類だけを溶かすという、森の厄介者なんだぜ!

…てゆーか、目を塞がれて、何も見えないんだぜい!」

それは突然な事だった。

ミルたんとうンディーネのバトルの行く末を朱乃に任せて、使い魔を求めて森を進むリアス一行の前に突如立ちはだかった…いや、頭上の木から降ってきたのは、緑色の流動体、スライム。

「な…?」

「い、嫌あああ〜!」

「…えっちいです。」

「は、破廉恥なっ!」

リアス、アーシア、子猫、ソーナの女子に狙いを定めて その身に纏わり憑くと、徐々に着込んでいた衣類だけをドロドロと溶かしていくのだった。

「ちいーまさか、このシリューに気配を感じさせないとは!!」

「…と、取れない!？」

その個なのか はたまた群なのか…恐らくは個であり群なのであろう、判別に迷う程の大容量の それは、リアス達（の服）を襲うと同時に巨体の一部を分離、瞬く間にシリユー、木場、匙、ザトウージの目を塞ぐ様に へばりつく。

『ぐるろろ…!?!』

そして木場の使い魔である、雷獅虎リバプールも、身体全体を流動体に包まれ、動きを完全に封じ込められていた。

「まあ、コイツは、着ている物を溶かすだけで命を取られるとかの心配は無いので、問題は無いと言えは無いのだが…」

「…「大有りよっ!!」」

《《《

「こ、小猫、予備の制服って、まだ有るのかしら?」

「制服ではありませんが、予備の服なら用意しています。」

「…安心したわ!!」

シリユー達男衆の目が塞がれているのを改めて確認したリアスが、駒王の制服を溶かされ、深紫のショート1枚の姿で物怖じする事無く魔力を練り上げ、滅びの力が込められた魔力弾でスライムを駆逐していく。

「うう…リアス部長、頑張って下さい〜」

既に全てを溶かされ 木陰に隠れてしやがみ込んだアーシアが、完全な泣き顔でリアスを応援。

「…えい!」

ズバア…

更には辛うじて、水色の上下の下着だけは死守している子猫が拳を振るうが、

「…やっぱり物理は効果が無いです。」

スライムにはダメージを与える事が出来ない。

「もう、量数が在り過ぎると言うか、キリが無いわ!

ソーナ! アナタも手伝って!」



リアスが やはり、魔法で撃退出来る筈なソーナに援護を求めるが、

「う…む、無理です…」

リアス同様に、シヨーツ（白）1枚のみな姿となっていたソーナは、涙目で両手で胸を包み隠し、その場に しゃがんで動けないでいた。

《《》》

「うおおおおっ!!」

『Boost!!』

「も、もう少しだ、もう少しで このスライムを引き剥がせr(ガン!!)痛い?!

」と、取らなくて良ーから!

てゆーか、今は まだ、取るなー!!」

シリューが小宇宙<sup>コスモ</sup>を燃やし、顔に憑いたスライムを引き剥がそうとした時、それに気付いたリアスがハリセンを投げつけ、これを止める。「な、何故?」

「ちちリュー先輩、今、そのスライムを取ったら、私達の裸を見たって、トーカちゃんにチクリます。」

「そうだ神崎テメー、会長の裸見たらブツ殺すぞ!」

「お…応、わ、解った…」

最初は手助けを止められる意味が分からなかったが、小猫と匙の言葉で漸く理解するシリュー。

「…ならば!!」

『Boost!!』

「この儘で参戦すれば、問題無い!」

そう言いながら、目を塞がれた儘、シリューは小宇宙<sup>コスモ</sup>を纏わせた拳でスライムを撃破していく。

「…シリュー先輩、まさか、実は見えてるなんて事は、無いですよね?」

「し、視覚を失い、それでも戦う事には慣れている!!ほ、本当だ!信じろ!!」

このジト目な子猫の発言を、シリューは必死になって否定した。

◇シリュー side◇

ふう、目が見えないのは問題無い。

しかし このスライム、数が多いのか本体がデカイのか、本当にキリが無いぞ？

何だか知らんが、支取先輩は動けないみたいだし、子猫の攻撃は効かない：

俺と部長だけでは、正直、少しキツいな。

アーシアは元より非戦闘員。

ザトウージも問題外として、匙と木場も、目隠し状態でスライムの気配を探りながら戦うのは難しいか…。

せめて もう1人：姫島先輩かミルたんが居れば…

バチイッ!!

え？今の感覚は雷撃？

もしかして、姫島先輩が来たのか？

▼▼▼

シリューとリアスがスライムと戦っている中、前触れ無しに雷撃が迸った。

それはシリュー達をアシストするが如く、スライムを攻撃。

「あれは…？」

『……………』

リアスが その雷撃の出兵…木の上に目を向けると、其処には森に入って最初に出逢った、ドラゴンの子供…スライム：ドラゴン蒼雷龍の幼生が居た。

バチバチイッ!!

蒼雷龍は、続け様にスライムに向けて雷撃を放つ。

ぽと…

「あ、取れた…」

雷撃を苦手としているのか、種族的にドラゴン種を苦手としているのか、残ったスライムは、男衆の目を塞いでいた それを含めて、森の奥深くへ逃げて行った。

「部長、とりあえずは一安心ですね！」

「ごつち見んなーっ!!」

「このエロ龍帝えーんんんんんっ!!」

ガン!

「うわらばっ!!」

◇シリユースィde◇

「:ねえ、小猫?用意して貰っておいてアレだけど、もつと その:マトモな服って なかったのかしら?」

「うう:何で私が、こんな格好を:」

「似合ってますよ?♪」

「解ってるわよねアナタ達!!」

「コッチ見たりしたら、殺すわよ!」

「「いい、いえっさー:」」

スライム撃退後、子猫が巨大リユククから、また予備の服装(下着込み)を取り出して部長達に渡すのだが、何故か その服装と言うのが:」

リアス部長:バニーガール

アーシア:他校女子制服

小猫:体操服

ああ、アーシアのアレは、前に森沢さんから貰ったアニメのヤツだな。

そしてリアス部長:似合ってるな(笑)。

小猫も:ん:。

最後に

支取先輩:レヴィアたん☆

この前の会議の時、魔王少女が着てたヤツと同じコスプレじゃないか! (爆)

:にしても子猫、本当に一体、どんな事態を想定して、そんな服装をチョイスして用意した訳?

》》》》

「:わ、我、アーシア・アルジェントの名に於いて命ず:」

汝、我が使い魔となり、生涯を掛けて、我に仕えよ:汝が御銘は:

ラッシー！」

…あのドラゴンの子供は どういう訳か、アーシアに慣つてしま  
い、その儘、使い魔契約の運びとなった。

そもそも あのスライム撃退も、アーシアを助ける為に、この場に  
現れたと考えるべきなのかな？

「ドラゴンてのは、清らかな心の持ち主にしか、心を許さないと云う  
ぜ。

教会を追放された聖女の噂は聞いていた。…が、まさか それが、  
そつちの お嬢ちゃんだったとは、驚いたんだぜい！」

…とは、ザトウウジの弁。

自らの魔力で魔法陣を展開させて、使い魔契約を無事に終了させた  
アーシア。

…つて、ラッシー？

「はい！雷撃を操るといふのと、それと…シリユーさんの名前の一部  
を使わせて戴きました！」

…ま、別に良いけどね。

》》》

「皆、一度、さっきの泉に戻らない？」

ミルたんが どうなったか、心配だわ？」

「…そうですね。」

リアス部長の言葉に、皆が頷き、引き返す事になった時、  
むに…

「ん？」

踵を返しての一步、俺は何柔らかい何かを踏んだ。

「何だコレって…え、…?!」

何かと思ひ、摘み拾った、少しばかりスライムの粘液で溶かされて  
いるそれは、女性が胸を覆う下着に附着させる、所謂『詰め物』とい  
うヤツだった。

しかも、凄まじい迄のサイズな…

「だ、駄目えー！神崎君、返してー!!」

涙目で顔を真っ赤した、必死の形相な支取先輩が、まるで引つたく

る様に『それ』を奪う。

あ、よく見たら、今の先輩の胸、え…？

えーーーーーっ!?

》》》

トーカを含む、駒王学園きよぬー四天王。

姫島先輩に次いで、学園ランキング2位とされている支取先輩が、まさか実は、下から2番目だったとは…

『きよぬー』は『きよぬー』でも、支取先輩に限り、漢字で書くと『虚乳』の方だったとわ…

「…!!」

ふと匙に目をやると、俺に顔を向けた匙は、最初から全てを知っていたと言いたいが如く、目を瞑って首を降った。

この男、別に会長さんの胸に釣られて惚れた訳じゃないのか…

「あちやく、バレちゃったか〜」

リアス部長が小さく呟いた。

部長曰わく、実は男子生徒は知らない事だったが、少なくとも3年生中心に、女子生徒は殆どが周知だったとか。

因みに この事は木場も知らなかったらしく、驚いた顔をしている。

変態3人衆の兵藤達を筆頭に、男子生徒が「四天王」と持て囃す中、女子が何も言わなかったのは武士の情けだったのか…

「ソーナ様、忘れ物です。」

「けけけ、結構です!!」

ここで小猫が、これ見よがしに特注サイズなブラのパッドを両手に持って、渡そうとするが、顔を赤くして それを断と受け入れようとしない支取先輩。

そして先輩は、潤んだ瞳に尋常ではない殺気を込めると、俺と木場を睨み付け、

「こ、この事は、内緒ですよ?」

「は、はい…」

その迫力に俺達は、肯で返すしか選択肢が無いのだった。

この時、俺は誓った。

流石に大っぴらにする事は出来ないが…

とりあえず今日、家に帰ったら、自室に音声遮断の結界を張って、大声で こう叫んでやるんだ！…と。

「ソーナの胸は！パッド入り!!」

使い魔の森の魔獣！

◇シリユースide◇

「良いですかソーナ様、無表情の棒読みで言っても反応しません。可愛い顔で可愛い声で、可愛くポーズを決めないと、解呪されませんから。」

「うう…」

小猫が用意していた着替えの服。

支取先輩が着用していた、魔王セラフォル・レヴィアタンの正装コスチューム（笑）は、やはり耐えられない物が有ったらしく、結局は、また別の服に着替える事に。

しかし、このレヴィアたんコスが曲者。

特殊な呪いで、『特定キーワード』を発しないと脱げない仕様らしい。

何故、そんな服を先輩に？…って、小猫に聞いてみると、少し前に…

《《《《

「ねえ小猫ちゃん、これ、絶くつ対にソーたんに似合うと思うんだ☆何かの機会が在れば、ソーたんに着させてみてくれないかな？☆」

…な やり取りが甘処であり、その店自慢の餡蜜杏仁豆腐と一緒に、コスチュームを差し出され、

「任せて下さい、レヴィアタン様。」

》》》》

…つまり、スイーツに釣られた、と。

人、其れを買収と言う。

「あ、ソーナ様、その服、パスコードが認識されると、直ぐに文字通りぼろって脱げ落ちますから、気をつけて下さい。」

「はーん？？」

「…!! ほら、アンタ達！アツチ向いてなさい！」

「は、はい！」「了く解。」

その会話を聞いていたウサ耳バニーのリアス部長が、俺達男衆に、反対側に顔を向けるように促した。

因みに部長は このバニーのコスチューム、何気に気に入ったらしい。

駄目だ…痴女だ、この人…。

「…それでソーナ様？」

新しい着替えはナースとゴスロリ、それと他校の制服、どれが良いですか？」

「せ、制服でー！」

そして この やり取りの後、

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

♪みるるん みるみる すばいらるうく♪

眩い魔法で凶悪魔神を、たあつくさん消滅させちやうんどく☆もんっ♪！

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

背中越に支取先輩の、あの、支取先輩の、ノリノリで軽やかな声が夜の森に響いたのだった。

その数分後、リアス部長の許可を得て振り返ると、そこには黒い髪の毛の○バサ…ではなく、今日一番の涙目で、トリス○イン魔法学院の制服を着た、支取先輩が居た。

先輩の眼が語っている。

「この事は、内緒ですよ!!」…と。

「なあ神崎、会長って…」

「ああ、アレがアニメって、分かってないよな…」

「知ったら、更に泣きが入るな…」

》》》》

シャババババ…

ニヤガガー！

グロロロ…



「囲まれちゃったんだぜい…」

「あんた、冷静だな!？」

あの”変態スライム(支取先輩命名)”を退けた俺達は、ウンディーネと交戦しているであろう、ミルたんと同流すべく、使い魔の森の中、先程の泉に向かっていた。

その途中、使い魔の候補とでも云うべきか、夥しい程の魔獣の群に襲われ囲まれてしまった。

種類は様々、狼の様なヤツ、犀の様なヤツ、巨大な蛙に空中浮遊している深海魚？

木場の使い魔とは また違う猫科な、黒いサーベルタイガー。

ゴリラに猪、漆黒の孔雀に恐竜タイプ。

本当に様々だ。

ザトウジが言うには、体のサイズからして、全てが子供、或いは幼生らしい。

因みに、子供と幼生の違いは曰く、「子供ってのは、普通に成長と共に、体が大きくなり大人になる個体、幼生は脱皮、または繭や蛹からの孵化、或いは文字通り、いきなり変化して成獣になる個体の事を云うんだぜい!」…だとか。

『ぎゃんっ!?!』

その中の1匹、狼タイプの魔獣が襲い掛かっていたが、匙がこれを蹴りで撃退。

『『がるる……』』

その後は向こうも此方の様子を窺っているのか、威嚇するが如く、低い唸り声を鳴らしているが、飛び掛かろうとはしない。

「匙も神崎君も、今が使い魔を得るチャンスです!」

「シリユー、力でねじ伏せなさい!!」

己の力を魔獣に示すのよ!」

リアス部長と支取先輩が、如何にも「この場で使い魔ゲットしろ」とばかりに叫ぶ。

うゝむ、この中で使い魔にするなら、如何にもスピードタイプな、あの黒い孔雀みたいなヤツか…?」

ずずずず…

「ひいい!!」「ぬ?」「きゃあ!!」

そう考えていると、そんな魔獣の中にスライムが、さっきのヤツとは違うタイプ…恐らくはこの前、堕天使と廃教会で戦った時と同種のスライムが姿を現した。

黒紫の体から毒の靄を吐き出し、目や口に牙、臓器を持っているヤツだ。

「い、嫌ああつ!?

スライムは、スライムは嫌なお!!」

「…えっちいのは、嫌いです。」

先程のアレで、スライムに対して拒否感が半端無い女子達。

特に部長と支取先輩は、前の教会での戦闘や さっきのアレで、完全にトラウマになってるみたいだ。

「リアス、塔城さん、アルジェントさん、こっちに来て!」

ここで支取先輩が、即座に女子を集め、

「アイシクル・デイフェンダー!」

さながらクリスタルウォールとフリージングゴフィンを掛け合わせたかの様な、氷の障壁を自分達の四方に創り出した。

「おお!アレは正しく『ゲッドローポイズンスライム』!!

見た目はアレだが、戦闘力的に、一押しの一つだぜ!!」

「匙、分かってますよね!」

そんなの使い魔にしたら、眷属も生徒会もクビですよ!はぐれ認定ですよ!!」

「…いえ、しませんから!」

「シリユーもよ!ソイツと契約したりしたら、後で説教よ!!」

「トーカちゃんに、チクリます。」

「シリユーさん、信じてますから!」

ザトウジは推すのだが、やはり部長達女子には評判が悪い。

…てゆうか、何で俺がこのスライムを使い魔にしようとしているの、前提な訳?



「あく、もう！行くぜ、ドライグ!!」

『応よ相棒！Boost!』

「ドラゴン波あ（溜め無し）!!」

リアス達から勝手言われて少しだけ呆れ顔なシリユーが、  
ブーステッド・ギア  
赤龍帝の籠手を発動させ、ドラゴン波で この黒いスライムを吹き飛ばした。

『『『『キシャー!!』』』』』

それが戦闘開始の合図になったのか、残った魔獣の群も、一斉にシリユー達に襲い掛かる。

「木場、匙、行くぜー!」

「応ー!」 「うん!!」

それに対し、シリユー達も迎撃の構えを取る。

そして、

「ラツシー君、お願いー!」

『ぴきー!』

氷の障壁の中で手が出せない女子達、その中で唯一、戦闘型の使い魔を持つアジアが、先程使い魔の契約をしたばかりの蒼雷龍を召喚、戦いに参加させる。

「行くんだぜい、光宙!!」

『ぴっかー!』

そしてザトウジも、自分は戦えない代わりに、自身の使い魔の1体である、全身に雷を纏った、小型のネズミの様な魔獣を召喚。

シリユー、木場、匙、ラツシー、リバプール、光宙と、魔獣の群との集団バトルが始まった。

『びー!』 『ぐおーん!!』 『ぴっかー!』

どっどーん!!

アジア、木場、ザトウジの使い魔は偶然にも3匹共に、雷撃系の攻撃を得意としていた。

3匹の繰り出す雷が合わさる事で、その威力は単純な2倍3倍以上の破壊力となり、一度に複数匹の魔獣を消し飛ばす。

「でやあー!」「オラアツ!!」「それっ!」

シリユー達も体術や剣術、魔力弾での攻撃で、迫りくる魔獣達を各個撃破。

「ちい、会長は、この場で力を示して使い魔契約しろって言ってるけど!」

「ああ、そんな暇、無いな!!」

そう話しながらも戦闘を進めて行き、漸く残った魔獣も僅かとなって戦いに終わりが見えてきた時、

「新手か…?また数匹、来る!!」

シリユーは遠方から、猛スピードで近付いてくる、強力な気配を感じ取る。

そして、其れ等は直後、シリユー達が戦っている場に辿り着いた。

いや、正確には、シリユー達や、その場の魔獣の群は無視するかの様に、通り過ぎて行った。

「…!皆、この場は任せた!!」

「おい、神崎?」「か、神崎君?」

その疾風の如くな一群を見たシリユーは、何かを感じたかの様に、森の奥深くに追い掛けて行くのだった。

》》》

シリユーは見逃してはいなかった。

自分達が魔獣の群と戦っている中を、通り抜けていった一群。

ハッキリと姿を確認する事は出来なかったが、その者達もまた、争いを繰り広げながら移動していたのを。

「あれは…!!?」

そしてシリユーが其れ等に追いついたのは森の最深部、木々が生え茂らず、少し開けた場所。

其処には4体の魔獣が、距離を置いて対峙していた。

巨大な熊の様な魔獣、蟻螂と蜘蛛と蠍が合わさったかの様な異形の蟲、そして翼を持った双頭の蛇。

この3体は体の大きさからして、間違い無く成獣であろう。

そして もう1体…此等3体に囲われていたのは、鹿の様な身体は白い体毛と金銀の鱗に覆われ、頭は龍な如し。

恐らくは今迄の戦闘が原因で全身が傷だらけの、小型の魔獣だった。

「……………」

シリユーが様子を窺う1対3の状況の中、小型の魔獣が双頭の蛇に突撃を仕掛ける。

カッ…

身体全身から一瞬、目が眩む程の光を発したかと思えば、頭部の角から赤、青、黄、白、黒の5色の光弾を作り放ち、

ボアッ!

『グギャーッ?!』

その光で2本首の蛇を、瞬く間に燃やし尽くしたのだった。

汝が御銘は…

『クジャーツー!』『ブロロオ!!』

『……………』

仲間?を斃された、巨熊と異形の蟲が、鹿の様な、馬の様な、龍の様な…小さな魔獣に凶悪な爪と鎌を振りかざし、2体掛かりで襲い掛かる。

その様…鹿の胴に龍の頭と鱗…それを見て、シリユーは呟いた。

「あの姿は正しく…」

その小さき獣の姿は正しく、伝説にある聖獣、麒麟、其の物だった。

「……………」

シリユーは迷っていた。

先程、自分達が魔獣の群と戦っている中を通り過ぎていった時に、此等の獣が1対3の様相だったのは判っていた。

そして今も、その内の1体は撃破するも、1対2の不利な戦いを強いられている、麒麟?の幼生。

あの麒麟に助太刀するのは容易い。

しかし、それが本当に正しい行いかと、迷っている。

数の上でも、体躯の上でも不利な側に手を差し伸べる…

それは、問題無くに見えるが、実は違う。

この場は人間社会ではなく、使い魔の森。

この一見、不平等な争いも、この場の其れは、自然の摂理の一端、弱肉強食の理の1つに過ぎないのだ。

自身の自称・正々堂々主義の下に、不利な側に加勢して この場を収めたとしても、それは自然という大きな枠組みからすれば、只の自己満足に他ならない。

易々と介入して善くない事柄なのを、シリユーは理解していた。

「くっ…こういうのは解つてる心算だが、やはり、見ていて歯痒い!」  
例え、初見の際に その戦況を見抜き、考える前に体が動き、つい、

この獣の群を追い掛けてしまっていたとしても……だ。

《《》》

鋭い爪に鎌、針による攻撃を同時に受け、傷を負う劣勢の中、それでも要所で反撃をする白い麒麟。

先程、双頭の蛇を倒した五色の光は魔力が尽きたのか、それとも『溜め』が必要なのか、放とうとする気配が無い。

『……………』

額から生えている、細長い円錐状の角を、まるで日本刀の様に変形させ、体当たりと同時に熊に斬り掛かる麒麟。

『ゴバアアアアーツ!!』

『キシャー!』

『!!?』

凶熊に強烈な一撃を浴びせるも、同時に異形の蠅螂が、第2脚に位置する左右の缺でガツシリと麒麟を捕らえると、腹の先から粘着質の糸を吹き出し巻き付け、その身を雁字搦めにする。

『……………!!』

『ゴラアアアーツ!』『シャーツ!!』

地に藻掻き、動きが取れない麒麟を、その爪と鎌で斬り裂き貫かんと、腕を、第1脚を大きく高く掲げ、一気に振り降ろす2体の巨獣。

ガキイイツ!!

『シャツ?』『ゴアツ?』『……………?!?』

しかし その凶器は、麒麟の身体に届く事はなく、

「ちい、思わず飛び出してしまった…」

体が、勝手に動いてしまった…」

その場に飛び込んだ、シリユウの赤い籠手を纏った左腕に止められるのだった。

『キシャー!』

「でえいやあつ!!」

ドゴツ!

その後、招かれざる『乱入者』に対して、異形の蠅螂が蠍の針が付いた様な尾を振り回しながら、突き出し仕向けるが、シリユウはそ

れを躲すと、逆に前蹴りを一閃、攻撃者を吹き飛ばす。

それに追撃を試みるシリユーだが、蟻螂も吹き飛ばされる途中で体勢を立て直し、攻撃の構えを見せた。

それによりシリユーも、蟻螂の攻撃の間合い手前で一時立ち止まり、改めて戦闘体勢で対峙する。

バシユツ！

『グオツ!!』

同じタイミングで、麒麟が身体全身から魔力を解放する事で、自らを拘束していた糸を粉碎。

いや、それは魔力ではなく、

「今のは…小宇宙…だど？」

そう、聖闘士であるシリユーだからこそ、解つたのだが、麒麟が身体から放ち、そして今尚 身体中から発ち込めているのは、紛れもなく小宇宙であった。

バスウツ!!

『グワツ!!』

自由に動ける様になった麒麟は、シリユーの乱入で、動きが止まっていた熊型の魔獣に、再度 頭部の角で斬りつける。

此によつて、一時的に2組の、1対1の構図が出来上がった。

◇シリユーside◇

『シャツシャーッ!』

この蟻螂? 蠍? が、腕と云うか前脚と云うか、兎に角 巨大な鎌と鋏を振り翳しながら襲つて来た。

それを俺は、紙一重で避ける…つもりだったが、鎌の振り降ろしを横移動で躲した後、次に来た鋏の刺突をバックステップで去なしたと思つたら、いきなり その腕の関節部が鋭い速度で延び、その伸びた分だけ避けきれずに

ズシャーッ!

制服のブレザーとワイシャツを引き裂かれ、極々浅くではあるが、右肩口から左脇腹辺りまで、斬りつけられた!

…つて、ななな…何と云う事を…



この制服、どうしてくれる訳？

これ帰った後、母親に何て言い訳すれば良い訳？

仮に「刀を持った893と戦り合った」とか言ったら、母さん倒れるぜ？

身に負った傷は、薄皮一枚切られただけで、致命傷でも何でも無い。アーシアに頼めば、傷痕も残らず治して貰える。

でも こっちの制服は再起不能だろ？

きつと高レベルな裁縫スキル持ちの姫島先輩でも、お手上げのレベルだぜ？…これ。

こうなったら小猫が、男物の制服の予備も、用意してくれているのに期待するしかないのだが、とりあえず…

バサアツ!!

「邪魔！」

俺はズタボロの制服を、脱ぎ捨てた。



「廬山龍戟閃！」

巨大な蠚螂に、全身が浅くではあるが、斬り傷だらけになっている、シリユーの小宇宙<sup>コスモ</sup>を込めた膝蹴りが炸裂。

「!!?」

その小宇宙<sup>コスモ</sup>に、巨熊と交戦中の麒麟が反応、

一瞬だけ、少し驚きの顔を浮かばせ、シリユーを刮目するが、直ぐに目の前の敵に意識を集中させる。

今迄の戦闘ダメージの蓄積に加え、この膝蹴りが予想以上に効いたのか、蠚螂の動きが明らかに鈍くなった。

それを確認したシリユーが、小宇宙<sup>コスモ</sup>と魔力を、左腕の赤龍帝<sup>ブラステッド・ギア</sup>の籠手に集中させていく。

「ド・ラ・ゴ・ン…(Boost!!)…波あつ!!」

そして左拳から放たれた、エネルギー波が蠚螂の頭を消し飛ばし、その頭部を喪った巨体は、その場に崩れ落ち、その後は動く事は無かった。

◇シリユーside◇

予想外に手子摺った蠅螂を下した後、俺は熊と戦っている麒麟に目を向けると、

『……………!!』

殺気こそ込めてはいないが、明ら様に、「これ以上、余計な真似はするな」と言いたげな目で睨まれた。

「良いだろう！この先は1対1の、只の喧嘩だ！手出しはしないで見届けてやる!!」

俺が そう言うと、麒麟は一瞬だが口元を緩め、ニヤリと笑った：様な気がした。

そして小さな獣は巨獣に攻撃を仕掛けていくのだった。

麒麟も熊も、双方が爪や角や牙による攻撃で、俺以上に全身傷だらけになっている。

出血具合から見て、決して浅くない傷も両者にある。

『BOWAAAAAAAAAAAAAH!!』

『!!』「!?」

その後の幾度かの攻防の後、距離を空けた熊が、大音量の雄叫びを上げる。

質量を持った音の衝撃波が、麒麟と 其の後方、直線上に位置していた俺を襲った。

：例えば：ゲーム風に例えるなら、ダメージにプラスして、その大声で竦み上がらせての『1ターン休み』な効果を与えそうな その攻撃を、俺は身体全身に小宇宙<sup>コスモ</sup>を張り巡らせてのクロスガードで凌ぐ。

そして麒麟は：やはり大音量の叫びに臆する事無く、そして体に受けるダメージも お構い無しに特攻、体当たりからの角での斬撃を浴びせると、あの2つ首の蛇に放った、魔力を練った：否、小宇宙<sup>コスモ</sup>を燃やす事で作り出した、5色の光の弾を撃ち放つのだった。

▼▼▼

横になって動かなくなった熊の傍、ダメージが大きいのか、その場でしゃがむ様に伏せる麒麟の幼生。

シリユーも麒麟の目の前まで歩み立つと、その場で腰を落とし、胡座を搔いて座る。

「余計な真似をして、済まなかったな……」

『……………』  
麒麟は逃げるでもなく、そんなシリューを只単に、『自分に関わるな』と言わんばかりに睨み付ける。

「派手にやられたな…傷は大丈夫か？」

『……………』

麒麟の表情を察した上でか、それとも気付いていないのか、尚もシリューは麒麟に話しかける。

「俺の仲間に、治癒のスペシャリストが居る。今も、この森と一緒に来ているんだ。

俺もホレ、見ての通り、全身傷だらけだしな、一緒に治して貰うか？」

『……………』

麒麟が やや、困惑の顔を浮かべる。

『先程から この人間は魔獣の自分に対して一体、何を言っているのだ？』…そんな表情である。

『俺と一緒に来い…』

俺の使い魔に、ならないか？」

『……………!!』

リアス達が自分にした様に、誤魔化す事無く、敢えてストレートに自分の要求だけを言うシリューに、麒麟の目の色が変わり、決してダメージの少なくない体を、無理に震わせながら起き上がると、身体全身から小宇宙<sup>コスモ</sup>を発散して、威嚇するが如くシリューを睨み付けた。

その顔は、正しく『自分を使い魔としたいなら、実力を示せ』と語っているかの様だった。

「ふっ…逃げないっていう事は、少しは脈アリと思っても良いのかな？」

それに対して、地面に胡座を掻いて座っていたシリューも立ち上がると、小宇宙<sup>コスモ</sup>を燃焼させての臨戦態勢を取るのだった。

《《》》

一方その頃、最初に魔獣の群に囲まれ、襲撃を受けていたリアス達

も、匙や木場、使い魔達で それを撃退、再びミルたんとうんディーネが戦っている筈の、森の泉を指して進んでいた。

「結局は戻って来なかったけど、神崎のヤロー、一体、どうしたんだ？」

「まあまあ匙君、神崎君にも、何か考えがあったんだよ……多分。」

「……あの凄いスピードで通り抜けて行った獣の群に、何か感じる物があつたのでしょ……多分。」

「し、シリューさんは、理由も無く、その場を無責任に放棄する様な人ではないですから……多分。」

「多分多分……って、アナタ達、そこは もう少し、信用してやりなさいよ！」

まあ、何となく気持ちは分かるけど……。」

「リアス……それ、フオローになつていませんよ？」

「さて……と、あのド迫力バトル、決着は付いているのかねい？」

》》》》

そんな会話が進む中、ランタンを片手に、森を掻き分けて進むザトゥージを先頭に、一行が泉に辿り着いて目にしたのは、

「アンタも なかなか、やるによ！」

『……………♪』

「……………。」

互いに顔面ボロボコな状態で、互いに肩を組み合い笑い合っている、ミルたんとうんディーネだった。

「あ、部長、戻ってきたのですね……て、ぷぷつ……な、何ですの、貴女達の格好!？」

「う、どーでも良ーでしょ!そんなの!？」

泣きながら笑いを堪えている朱乃の言葉に、ミニスカートな婦警スタイルのリアスが、目に涙を浮かべながら叫ぶ。

実は あの後、この泉に着く前に、また『あのスライム』と同種の魔獣に襲われていたリアス達。

それは木場と匙が辛くも撃退した物の、その代償として、

リアス……婦警さん（ミニスカート）

アーシア……ナース服（やはりミニスカート）

小猫：モリ○ン（…とゆーより、○リス）

ソーナ：空琉○遊亭○京

…な、出で立ちとなっていた。

尚、木場、匙、ザトウージの3人の両頬に、何故か真っ赤な紅葉が刻まれているのは、別の話である。

「そ、それで姫島さん、アレは一体…？」

「それが…」

ソーナがミルたん達を指差して、朱乃に説明を求めろが、拳で語り合って、そして解り合った…て所でしよう？」

「た、多分、それで合っています…。」

現状を解析した匙が、代わりに答えた。

この後、ウンディーネは魔法陣契約により、『アクア』の名前と共に、正式にミルたんの使い魔となる。

「くっそ〜！やっぱし この2人のバトル、見たかったぜ…。」

「気持ちは分かりますが、次はシリユー先輩を探しましょう。」

《《《

「うっわ…。」

「あらあらあら？」

「はわわわ…。」

「むう…。」

「ひえっ!？」

リアス達がシリユーの気配を辿って着いた先には、全身を血塗れにして倒れているシリユーと、それを護っているかの様に、やはり身体全身を傷で被われて血塗れとなっている、小さな魔獣が居た。

「炎駒？」

その姿に、思わず自分の兄の下僕…眷属の名を口にするリアス。

シリユーが大ダメージで…血塗れでダウンしているという、予想外の光景を目の当たりにして、驚愕するリアス達。

自分達が居ない間に一体何があったのか、普段からあれだけ説教してるのに、またしても懲りずに上半身真っ赤になっっているシリユー

に対して色々と言うリアスだが、その負傷具合に今回は 其所ではなかった。

「あ…部長達…？」

アーシア、来た早々で悪いが、回復、頼めるか？」

『……………』

「は、はい…!!」

リアス達に気付いたシリユーがアーシアに呼び掛け、それに応えて慌て駆け寄り、自身の神セイクリッド・ギア・器トワイライト・ヒーリング・聖母の微笑を展開するアーシア。

「俺は後で良い…先に、麒麟こいつの治療をしてやってくれ…」

『……………』

「これは正しく麒麟…しかも幼生つてのは、俺も、初めて見たんだぜ…」

ザトウジも驚きながら呟く。

ザトウジが言うには、麒麟は その独特な魔力コスモを基とした戦闘力の高さから、森の魔獣にも危険視されて、幼生の内に潰される事が多く、それが『幻』と云われる程に、生存数が少ない由縁らしい。

「それが、多くの魔獣に追われていた理由か…」

その説明に納得するシリユー。

そんな時、

「シリユーさん、この子の治療、終わりました…でも…」

麒麟の傷を癒やしていた、アーシアがシリユーに話し掛ける。

「その…ごめんなさい…この子の古い傷は、治せませんでした。」

そう言つて、謝るアーシア。

今回の戦闘で負った傷は痕も残さずに治療できたが、過去の戦いで出来た古傷は治せなかったとの事。

過去の戦いを物語る身体中の傷痕。

特に額の…角の下にある、大きな斜めの十字傷が痛々しい。

「別にアーシアが悪い訳じゃないや…」

それよりか、俺の治療もして貰えたら、嬉しいのだが…？」

「は…はい…」



「…我、神崎孜劉の名に於いて命ずる。

汝、我が使い魔となり、我が劍、我が盾、我が目、我が耳、我が脚となり、我と共に生きよ！

汝が御銘<sup>な</sup>は…エックス!!」

契約用の魔法陣を転開すると、シリユーは その名を額に残った傷痕の形に因んでX<sup>エックス</sup>とし、麒麟の幼生との使い魔契約を交わす。

カアツ…

「な…!？」

その契約が終わったと同時に突然、エックスの身体全身が眩く煌めき、辺りは強烈な光に包まれた。

その場に居る者全てが、その眩しさに目を手で覆い隠す。

そして やがて光が収まった時、その場に立っていたのは、ラブラドルの成犬程度な体の大きさ…ではなく、競走馬並みの体躯な、白い毛並みと金と銀の鱗を持った麒麟だった。

「こ、コイツは更に驚いた…

まさか、リアルに成獣に進化する直前の個体だったとはな…

麒麟の変化に立ち会えるなんて…俺達は運が良いんだぜい…!!」

「す、凄いい…」

「綺麗…」

◇シリユーside◇

「…さて、これで皆、使い魔を得た事だし、そろそろ帰りましょー!」

エックスとの契約の際の、予想外なイベントに、俺を含む皆が一通り驚いた後、リアス部長が撤収を呼び掛けてきた。

…って、え？匙は？

「ああ、俺なら…」

そう言つて匙は、角を含めて全長約40センチの…ヘラクレスとアトラスと深山鋏形を足した様な、カブトムシ型の使い魔を喚び出してみせた。

何それ？凄くカッコいいんですけど？

「コイツが俺の使い魔、ジョースターだ。」

お前が途中で抜けた、魔獣の群とのバトルの後で、ミルたんと合流する途中で契約したんだよ。

お前が抜・け・た・バトルの後で…な！」

「いや、それは悪かったから！」

う…もう少し、ソフトに言ってくれると有り難いのだが…

しかし、それにしても…

「なあ、ザトウージ、あのカブトムシ？って、まだ森に居るか分かるかい？」

俺は何気無しに、ザトウージに匙の使い魔のカブトムシについて聞いてみた。

「あん？あのギルガメツシユ・ビートルは、確かに珍しい個体ではあるが、探せば、それなりに見つかると思うが…

まさか お前さん、アレも自分の使い魔にするって言うのかい？」

「いや、捕まえて、ヤ○オクに出展する。

あのカブトムシなら間違い無く高額買い取りで、ウハウハ間違い無しだ。」

「ウハウハ…そんな素晴らしい響きの日本語があったとわ…!!」

「はい、シリユー先輩匙先輩。

虫取り網です。」

「ありがとうございます。」

俺の台詞に、匙と小猫が賛同してくれた。

「だ・か・ら！アンタ達は何をしに、この森に来たと思っているのよ!!？」

すはかーん!! x3

「「ぎゃぴりーん!!」「」

同時に、リアス部長と支取先輩のハリセンも炸裂した。

「全く…お馬鹿な事 言つてないで、さっさと帰るわよ!!」

「ええ。夜も明けてきましたし…」

う…残念…。夜が明けたなら、仕方無い。

学校に行かないと いけないからな。

ん？夜が明けた？今から学校…だと？



全然、寝てないんですけどー！ーっ!?



ゴン！x2

「ギャーツス?!」

「ん？神崎に匙？」

私の読む、枕草子は子守歌だったか？」

その日の1時間目の授業、爆睡していたシリユーと匙の頭上に、担任教師の持つ出席簿の『角』が墜ちてきた。

そして、

「オマエラフタリ、アトデ、シヨクインシツニ コイ…ナ？」

「は…はひ…」

全く目が笑ってない担任教師の笑顔での誘いに、2人は声を震わせ、泣きながら首を縦に振るのだった。

## 開戦！シリューVSライザー！！

5月■日（日）。

ついに、ライザー・フェニックスとシリューとの間で行われる、レーティングゲームの日が やって来た。

ガラ：

「やあ。」

「シリュー、遅いわよ！」

「な…!? まだ、30分前ではないか？」

時刻はAM9:30。

シリューがオカ研部室に顔を出した時、既にアジアを含む部員が勢揃い、

「シリューたん、遅いによ。」

駒王の生徒ではないので部員ではないが、数日前にリアスの眷属となったミルたんも、きつちりと部室に来ている。

そして、

「お待ちしております、神崎様。」

「グレイファイアさん…」

今日のゲームの進行責任を、魔王から任されている、グレイファイア・ルキフグスの他にも、

「よっ、応援に来てやったぜ！」

「神崎君、今日は赤龍帝の お手並み、拝見させて貰いますね。」

駒王学園高等部生徒会長の支取蒼那…ソーナ・シトリーが、自身の女王である真羅椿姫や兵士ポーンの匙元士郎等、生徒会役員を中心とした眷属全員を引き連れ、部室に来ていた。

◇シリューside◇

「…では、私達は、これで失礼します。」

時間が来たら、転移魔法陣が現れますので、それに入って下さい。ゲームのスタート地点…赤龍帝チームの本陣にジャンプしますの  
で。」

オカ研の皆や匙、支取先輩に新羅先輩と、色々と話していると、やが

てグレイファイアさんが それを締める様に話し掛けてきた。

…ていうか、また魔法陣で転移か…

「安心して下さい、転移酔いはしない仕様には調整しています。」

おお、俺の不安を見事に払拭してくれる。

この辺りは流石はメイドさん、至れり尽くせりとは、この事を云うのだろうか。

「…多分。」

…をあっ!?俺の感心、返せ!

「それじゃ、シリユー、頑張つてね。」

ミルたんとアーシアも。

…てゆうか、絶対に勝ちなさいよ!

信用してるからね!!」

「任せろ!」

リアス部長が退室前に激励。

彼女からしたら自分の縁談破談が賭かっているだけあり、多少なり目が血走っている物の、凄く顔が、真面目になっている。

あんな真面目な顔の部長、初めて見たかもしれないな。

「相手は不死身のフェニックス。」

油断は禁物だよ。」

「大丈夫。シリユー君達なら、きつと勝てますわ。」

木場や姫島先輩も、笑顔で声を掛けてくれる。

「シリユー先輩、勝てたら御褒美に、トーカーちゃんには内緒でスイーツ食べ歩きデートしてあげます (すぱーん!) あ痛あっ!?!」

「ははは…ありがとな。」

でも悪い、俺、トーカー一筋なんだ。」

まあ、気持ちだけは有り難く受け取っておくよ。

そう思いながら俺は、場を和ませようとボケてくれた このチビツ娘に、笑いながら感謝の気持ちを込め、軽く張扇<sup>ツッコミ</sup>をくれてやった。

…って、そのスイーツとやらの代金は、誰の財布から出る予定だったのだ?

「神崎君、今回のゲーム、椿姫や匙は兎も角、他の生徒会の皆に、貴方

の実力を示すチャンスです。

見事な戦いを、期待しています。」

そして支取先輩の、この言葉。

確かに俺は、先輩方や匙を除く、生徒会の面々からは信用されないと思うか、認められてないと云うか、嫌われてると云うか…

先輩曰わく、連中は、如何に赤龍帝と言っても、所詮は悪魔ではなく『人間』と思っっているらしい。

全く…自分達も少し前迄は、その『人間』だっただろうに、人を棄て、力を得た途端、優越感からの種族差別か…

尤も…それは、以前の会議の時から感じてはいた事だが、

「「「……………」」」」

何か言いた気な顔で残りの連中…先輩の眷属で、大学生である人狼サン以外の奴等が、俺の顔を見てると云うか、睨んでいると云うか…まあ、俺としては、派手に暴れさせて貰うとするさ。

精々、ドン引かない様に、注意しとくんだね。

「最後に神崎様…いえ、赤龍帝殿。

此の度のゲーム、グレモリーとフェニックス。

両家の家族の皆様は勿論、魔王様や元老院の皆様も、観戦される予定になっております。

皆様方、伝説の赤龍帝の名に相応しい戦いを、期待している…との事です。

それでは…御武運を…」

グレイフィアさんの この言葉と共に、リアス部長達も部屋を出て行き、部室には俺、アーシア、ミルたんの3人だけとなった。

》》》

「来たみたいによ…」

それから少しして、部室に転移用の魔法陣が、効果音も無く現れた。

「よし、行くぞ!!」

「は、はいー!」「によー!」

俺達は、その魔法陣の上に立ち、戦場へと転移するのだった。

》》》

「ここは…」

「部室…によ?」

「もしかして、転移に失敗したのでしょうか?」

「転移した…と思えば、その先は また部室だった。」

「いや2人共、窓の外、空を見るよ。」

「…によ!」「こ、これは…?」

俺達が見た窓の外の景色、それは何時もの旧校舎から見る、何時もの学園の風景。

しかし 空だけが、今日の朝からの快晴の空でなく、何も無い…雲も、星も、太陽も無い真っ白な空…

何の ざわめきも聞こえない、まるで時が止まったかの様な静寂の空間だった。

『…ライザー・フェニックス様、神崎孜劉様、聞こえていますね?』  
「!!」

この時、グレイファイアさんの<sup>アナウンス</sup>声が、学園内?に響き渡った。



『本日のレーティング・ゲームの舞台は、<sup>フィールド</sup>リアスお嬢様の学び舎である、駒王学園を模した空間で行われます。』

ライザー様の本陣は本校舎の生徒会役員室、神崎様の本陣は旧校舎、オカルト研究部部室とします。

此より約1時間、戦略の打ち合わせや自陣にトラップを仕掛ける準備時間とします。

各部屋のテーブルに、学園の地図が置かれている筈ですが、ゲームスタート迄は、その地図内でライン分けされている、相手陣営の侵入は禁じます。

AM11:00に、ゲームスタートとします。

尚、その開始時刻前には、両チームは それぞれの本陣で待機して いて下さい。

ゲームスタート時に、本陣にフルメンバーでない場合、即座に失格となりますので、注意して下さい。』

グレイファイアのアナウンスが終わった後のオカ研部室（仮）では、

「…だ、そうだ。」

「はあ…」

「それじゃ早速、作戦タイムによ。」

「いや、この人数で向こうのフルメンバー相手に今更、作戦も何も無い  
だろ?」

「はあ?」「によ!」

アーシアとミルたんが やや驚きの声を上げた先には、明ら様に何  
やら企んでますと言わんばかりな、凄く悪い顔よしているシリユーがい  
た。

》》》

一方その頃、旧校舎を発ったオカ研と生徒会の面々は、ゲーム進行  
と審判の役目のあるグレイファイアと分かれた後、ゲームの観戦用モニ  
ターが設置されている、生徒会役員室へと足を運んでいた。

カチャ…

役員室の扉を開くと、

「やあ、リアス。久し振りだね。」

ソーナさんも、久し振り。」

部屋には先客。

紅色の髪を長くした優男が居た。

「おおお、お兄様?!」

「さ、サーゼクス様?」

「魔王様が、何故?」

その男を見た途端、慌てながらも一礼する、オカ研と生徒会の一同。

魔王サーゼクス・ルシファー。

冥界悪魔陣営、四大魔王の1人。

そして、リアスの実兄である。

因みにグレイファイアの旦那さんでもある。

ついでにシスコン。

「…それで、お兄様? 一体どうして?」

何をしに、此処迄来られたのですか?」

「はっはっはー…連れなないありアスは。

今日のゲーム、可愛い妹と一緒に観ようと思ったに決まってるじゃないか。」

「…ま、魔王様方は、冥界で元老院の皆様と御一緒に観戦すると伺いましてが…？」

「ああ、御老人の相手なら、アジユカとファビウムの2人に、押し付k…コホン、任せて来たよ。」

「お義姉さま…グレイフィアは、この事を知ってるのですか？」

「ああ、既にバレてるよ。」

先程、『後で、お仕置き』ってメールが届いたよ。ああ、怖い怖い♪  
「お兄様…」

はあ~~~~~

このサーゼクスの、余りにも魔王らしからぬ無責任さに呆れ返り、ガツクリと肩を落とし、深い溜め息を吐くりアス。

「ははは…」「あらあら？」「クス…」

その やり取りに、サーゼクスの『リーアたん大好きっぷり』をよく知っているオカ研メンバーが、思わず笑みを零す。

事情を詳しく知らない、生徒会メンバーも、この兄妹の微笑ましいやり取りに顔を綻ばしている。

そう、1人を除いて。

ソーナ・シトリー。

この和やかな雰囲気の中、彼女だけが1人、緊張感漂う表情を崩そうとしない。



先程、サーゼクス様は、何と仰られた？

確かに 此の御方は謂われた。

『御老人の相手なら、アジユカとファビウムの2人に、押し付けた』…と。

そう、アジユカ様とファビウム様の、2人…と!!

そもそも、このシズク…いえいえ、この妹思いなサーゼクス様が此の場に来られていて、あの人が大人しく、あの老害共…コホン、元老院の方々の御相手をしているなんて、絶くつ対に有り得ません!!…ならば!!



そう思考を張り巡らせ、眼鏡をキツラーン☆と妖しく光らせながら、天井を見据えるソーナの頭上に、

「ソくたくん☆!会いたかったよ☆!!」

「…や、やつぱり!」

アニメの魔法少女のコスチュームを着込んだ、黒髪ツインテールの女性がダイヴしてきた。

すつかぱーん!!

「あああうつ!」

しかし、それは、何処から取り出したのか、ハリセンを手にしたソーナの、カウンターでのフルスイングで迎撃される。



「痛ひ…(T|T)」

「自業自得です!!いきなり何をしてくれてるんですか、お姉様わ!」

真つ赤になった鼻を押さえ、うるうると涙を流す魔王の1人、セラフォル・レヴィアタンに、ハリセンを持ったソーナが、先程のリアス同様に呆れながら話す。

「…で、一応聞いてみますが、何故、此方に?魔王様?」

眼鏡の下の目を、じとくつとした目つきで問い質すソーナ。

「う、だって、ソータンに会いたかったんだもん…それに…」

「…それに?」

「どうせ観戦するなら、シリューちゃんのことを、よく知っているリアスちゃん達の解説を聞きながらの方が、より深く観戦出来るかな?つて☆

あ、お爺ちゃん達の お守りなら、アジユカちゃん達に押し付けて来たから大丈夫、問題無いよ!☆」

(((((いよいよ、有り過ぎるだろ!!))))))



その場のサーゼクスを除く全員が、心の中で、この魔法少女にツツ  
コむのだった。

◇シリユースide◇

「さて、とりあえずは、ゲームのルールや流れの お温習いだ。」  
作戦不要…と言ったら、涙目なアールシアと怒氣を孕んだ眼のミルた  
んに、思いつきり睨まれた。

仕方無く、俺が考えている、粗方の説明をする事に。

皆でソファアに座ると、テーブルの上の学園地図を指差しながら、  
「普通、このフィールドなら…ミルたん、どういう戦略を取ると思っ  
た？」

「にゅ…？ 先ずは旧校舎を囲む森に、<sup>トラップ</sup>罠を仕掛けて防御を固めた上  
で、運動場を…いや、先に体育館を占拠して、新校舎へのルートを確  
保するによ。」

「ん。正解だ。…普通ならな。」

「え？シリユースさん、駄目なんですか？」

「確かに互いにフルメンバーなら、この体育館を拠点というのが、戦況  
の要になるのは間違い無い。」

しかし俺達は、その戦略を実行するには、余りにも人数が少な過ぎ  
る。

3対16…ミルたんの『駒』の価値で修正しても、8対16だ。」

「……………」

「それに相手は既に、何度もゲームを経験しているチームだ。」

公式の記録は8勝2敗。

だが、リアス部長曰わく、その2敗と云うのは所謂接待プレイだっ  
たらしい。」

「……………」

「ゲームの記録映像は見たよな？」

各駒の特性を十分に活かし、理詰めの戦術を執るかと思えば、敢え  
て戦車を囿にして、兵士で討つと云う、<sup>トリッキー</sup>変則な方法も仕出かす。」

「いきなり、あのライザーさんが飛び出して、無双してたゲームも あ  
りました。」

「ああ、そうだ。」

不死身のフェニックスだからこそ、実行出来る戦法だ。そんな、様々な戦り方を執るチームに、この人数で執れる作戦なんて、限られている。

だからこそ、考えるんだ。

相手は、どんな作戦で来るかってね：

そして俺達は、その上に行く!!」

≡≡≡

「……なんて事を、今頃は考えているんだろうねえ、あの赤龍帝君は。」  
本校舎のフェニックス本陣で、不敵に笑うライザー。

「それで、ライザー様あ？」

「今回、私達は どう動くんですかあ？」

そんなライザーに、丈の短いスカートなセーラー服を着た、2人の猫耳少女が尋ねた。

「待っていいれば良いのさ。」

この人数差だ、セオリー通りなら、あの森に小賢しいトラップを仕掛けて、攻めてきた此方の数を削る、少なくとも消耗させた上で仕留めようとするか……」

「……3人揃って本校舎こちちの裏口から突撃、或いは正面と裏との二手に別れての奇襲くらいしか、思い浮かびませんわ。」

ライザーの台詞に、女王クイーンのユーベルナが言葉を添える。

「その通りだ。」

わざわざ此方から出向いて、トラップの相手をしてやる義理も無い。

あのゴツい新米の兵士ポーンを仕留めたら、回復役の聖女を赤龍帝と引き離す。

後は：俺がサシで勝負してやるよ。

如何に赤龍帝と云えども、所詮は転生もしていない人間だ。  
不死身の俺が、負ける要素は何一つ無い。

魔王様達に：そしてリアスに、俺の実力を示してやるさ。  
そうすれば、リアスも納得するだろ？」

「……って、考えているのだろうか、あのライザー・フェニックスは。自分の読みを、アジアとミルたんに話すシリュー。」

「だったら、どうする心算によ？」

「そうだな、とりあえずは……」

パタ：

そう言うとしリューは部室の窓を開け、遠くに見える、ライザー側の本陣のある本校舎を見据えるのだった。

》》

AM10:50

『ゲーム開始10分前となりました。』

双方、そろそろ準備を終え、各本陣での待機をお願いします。』

レプリカの学園空間に、グレイファイアのアナウンスが渡り響き、そして……

AM11:00

キーンコーンカーンコーン……

『ライザー・フェニックス対赤龍帝、レーティング・ゲーム、スタートします！』

ゲーム開始の予鈴ゴングが鳴り響いた。

》》

「さて、赤龍帝は、どう動く？」

今回は貴様が学生だからと云う理由で、制限時間が明日の朝、7時迄なんだぜ？」

今回のゲーム、制限時間内に決着が着かなかった場合、判定等は無く、引き分けに終わる。

つまりそれは、リアスとライザーの婚約は破棄されない事を意味している。

「ふ……」

余裕と自信を隠す気が無い顔で、携帯式の双眼鏡を手にするライザーが旧校舎オカ研の部室の様子を伺おうと、その双眼鏡を覗き込む。

そして、その眼に写ったのは…

「…な?」

右手を左手首に添え、赤い籠手に覆われた左拳を自分達に向けて立っている、シリユートの姿だった。

「ま、マズい!お前等、この部屋…いや、この建物から出るぞ!」

「「「「えっ?!」」」」」

「「「「はい?」」」」」

しかし、このライザーの指示は少し遅く…

「ドラゴン波!改め…(Boost!!)」

…廬山漆星龍珠!!」

旧校舎、オカルト研究部の部室の窓から放たれた、魔力と小宇宙が融合された破壊のエネルギー波が本校舎目指して一直線、森を、体育館を吹き飛ばしながら直撃、その儘校舎を完全に崩壊させたのだった。

『ら、ライザー・フェニックス様の…』

ポーン 兵士8名、ナイト 騎士、ルック 戦車各1名、戦闘不能《リタイア》です…』

## 魔法少女☆ミルたん！

「「な…？」「」」

「「はあ!」「」」

「くつくくく…派手過ぎるっつの!」

「これが…赤龍帝…」

「…強い!!」

「あらあらあら?」

「あははは…」

「…ふむ。」

「よ…良っし…!!」

「おおお〜っ!!」

「へえ…」

現実世界の生徒会役員室、ゲーム開始早々のシリユウの繰り出した一撃を見た、オカルト研究部の面々、生徒会メンバー、そして2人の魔王が様々な反応を示す。

》》》》

「な、何という凄まじい破壊力だ…」

「まさか、此程迄とは…」

「これが、今代の赤龍帝…」

「ふあ…目が覚めたし…」

「「……………!!?」「」」

「これは魔王様達が、あれ程迄に必死に悪魔陣営に引き込もうとしたのも…」

「ふむ、納得…ですな…」

それは冥界でゲームを観ていた、残る2人の魔王や元老院に属する上級悪魔貴族、そしてグレモリー家とフェニックス家の現当主達…即ち今回、リアスとライザーの婚約を決めた、2人の家族達も同様。

赤龍帝の力に ある者は驚きの声を上げ、ある者は、驚きに言葉を失う。

》》》》

「…馬鹿な…？」

「あ、有り得ませんわ…!!」

「く…まさか、いきなり本陣から本陣へ、直接仕掛けてくるとは…!」  
そして、これを一番驚いているのは当然、直接に、この攻撃を受けた、ライザー・フェニックスと、辛くも難を逃れた眷属達である。

本陣のある本校舎が壊滅。

ライザーは此方が動かなければ、何れ敵は痺れを切らし、フルメンバーで本校舎に突撃を仕掛けて来ると予測。

そうしないと今回のレーティング・ゲーム、例え自分達は最後まで不動による引き分けでも構わないが、『絶対勝利』を課せられているリアスの『代理チーム』は、そういう訳にもいかない。

それを踏まえて校舎内の至る所に…それは、もう、刻○館も吃驚なレベルな程にトラップを仕込んでいた。

ベタな落とし穴から虎鋏、槍を仕組んだ床に圧迫する壁、墮ちてくる天井…階段を転がり落ちる鉄球に鉄砲水、更には金タライに三角○馬…突撃してきたシリユー達が、ありとあらゆるトラップの連続コンボに引っ掛かり苦悶する様を、その為にだけ本陣に設置したモニターで、下僕達と乳繰り合いながら腹を抱えて嗤い観る予定が、一瞬にして瓦解してしまった形である。

「クソが…」

「ライザー様…？」

あくまでも怒りの感情は、内面に留めておく心算なライザーだったが、結局は、それを隠しきる事は出来ず、その余りの…今迄、下僕の誰一人、見たことも無かった鬼気溢れる形相に、十二単を着た黒髪の少女が、そして女王のユーベルーナが心配そうな表情を浮かべながら、ライザーに声を掛け、

「ちい…なかなか面白い事、やってくれるじゃねえか!あ…の…赤龍帝があああっ!!」

ぶおおおおおっ!!

「落ち着いて下さい、ライザー様!」

顔の半分を仮面で隠した少女が、軽装鎧のバンダナ少女が、やや冷静さを欠き、身体全身から憤怒の炎を噴き出している自分の『王』を宥める。

》》》

「お兄様、落ち着きました?」

「ああ、済まなかったな…。」

少し、熱くなり過ぎたみたいだ。」

少しの時間が経ち、漸くクールダウンしたライザー。

この男を『兄』と呼んだ、ピンクと白を基調としたドレスに身を包んだ、金髪ドリルヘアの少女は、体育館や森等の遮蔽物が無くなり更地となり、丸見えとなった相手側本陣の旧校舎に目を向けながら、

「…どうやら、少しばかり、悔り過ぎていたみたいですね。」

如何に『人間』と云えども、流石は伝説にある『赤龍帝』と言った所…ですか。」

興味深げに呟いた。

》》》

「はわわわわ…」

「す、凄いによ…!!」

一方、旧校舎では、やはりゲーム開始早々にシリユーが放った一撃を間近で見た、アーシアとミルたんが また、それぞれ驚きのリアクション。

「半分も残したか…」

あの、ライザーとやらと女王以外は、全て片付けたかったのだが…」

「いえいえいえいえ!」

何処までオーバーキルする心算だったんですか、あなたわ!」

「十分だによ!ミルたんの魅せ場が無くなるによ!!」

しかし、それに、シリユー自身は納得のいかない顔を見せると、それは贅沢だと、チームメイト2人にツッコまれる。

特にミルたんは、リアスが自分の新しい眷属として、冥界から観戦しているであろう、身内に対しての御披露目な意味を込めて、半ば無理矢理に頼んでの助っ人参戦だけあり、多少は戦わないと立場が無

い。

「分かった、分かったから!!」

ボスト、あのクイーン以外は、ミルたんにに任せるから!だから、近い近い近い!!」

使い魔である水精ウンディーネのアクアと共に、弩アツプで迫るミルたんに、たじろぎながら約束するシリユー。

「それに、シリユーさん1人で終わらせたりしたら、後で部長さんに、また お説教されますよ?」

「ああ…分かってる…。」

このアーシアの言葉に、精神的に げっそりと疲れきった顔なシリユーが頷いた。

「赤龍帝!」

そして、その配下の者達よ!!」

「?!?!」

その時、外から部室内のシリユー達を何者かが大声で呼ぶ。

「あの人達は…?」

「ん?」「によ?」

アーシア達が窓から外を見ると、其処には4人の少女が旧校舎玄関前で立っている。

「表に出ろ!!」

小細工抜きの勝負を所望する!!」

2階の窓から様子を窺うシリユー達に、軽装鎧の少女が剣を向けて、勝負を要請。

「…計画通り…かな?」

それを見たシリユーの口から、笑みが零れ落ちた。

シリユーの計画…

先程も少し説明したが、仮に、両者共に動きが無く、決着が着かなかった場合、ゲームは引き分けでも、婚約云々を賭けた勝負に於いてはライザーの勝ちと言っても過言ではない。

…と、なると、シリユー達には攻めの一択しか無いのも事実。

そうだからこそ、敵本陣のトラップ新校舎は、罠だらけになっている事は、



容易に想像出来た。

故にシリューが最初に執った策は、『先ずは自陣から不動で攻める』だった。

それで決着が着けば、それで善し、そうでなくとも、罨を取り除き、見通しを良くした上で敵の数を削り減らせれば、後は互いに正面からぶつかるのみ…。

「しかし、まさか、彼方から出向いて来てくれるとは、思わなかったけどね。」

「…でも、真正面過ぎなのは、ゲームの特性上、どうかと思うによ?」  
「まあ、言うなよ。あーゆー真っ直ぐなヤツは、俺は嫌いじゃないぜ?」

そう言いながら3人は、外に出るべく、階段を降りていった。

◇シリュー side ◇

「はっはっはっは!」

堂々と真正面から出てくるとはな!

お前達のような戦士が居てくれて、嬉しく思うぞ!!

私は、そういうバカが、大好きだ!」

……………。

お前が言うなよ…。

前言撤回。

俺は、こんな頭の痛い娘、苦手だ。

「改めて名乗らせて貰おう!」

私はライザー様に使える騎士<sup>ナイト</sup>、カーラマイン!

…で、コツチの陰が薄くて暗<sup>モラ</sup>そうなのが僧侶<sup>ビショップ</sup>の美南風、こつちの脳筋っぽいのが、戦車<sup>ルーク</sup>のイザベラだ!」

「モ…モブって何ですか!?!」

「だ…誰が脳筋だ、誰が!?!」

お前にだけは、言われたくはないぞ!!」

モブ扱いされた十二単と脳筋呼ばわりされた仮面サンが、カーラマインという女に非難轟々を浴びせるが、この騎士<sup>ナイト</sup>は、それをスルーし、

「そして、此方の御方が、レイヴェル・フェニックス様に在らせられる！」

残った…1人だけ別格の雰囲気醸し出しているドリルロールの金髪を紹介した。

…つて、フェニックス？

「ふっ…気が付いたか…」

察しの通り、この御方は、ライザー様の実の妹君だ。」

「……………」

「はあ？実の妹だと？」

俺が思った疑問に、脳k…イザベラと紹介された女が答えてくれた。

「ああ、ライザー様曰わく…」

ほれ、世間では妹萌え…だったか？

居るだろ？そーゆーのに憧れたり、羨ましがったりする奴等？

まあ、俺は別に妹萌えじゃないが、下僕に各属性を揃えたいっていう拘りは持っているからな。

そう云う意味では、レイヴェルはツンデレ属性も兼ね揃えているからな、正しくプレミアム！

1粒で2度オイシイってヤツさ!!

…だ、そうだ。」

あ、阿呆かーっ!!

あの男は一体、何を考えて眷属を集めているのだ?!  
そう思いながらも、

「…ならば、此方も名乗らせて貰う！」

赤龍帝…神崎孜劉だ!!」

「リアス様の兵士、魔法少女・ミルたんだによ!!」

俺に続き、ネコ耳カチューシャに何時かのセラフォル・レヴィアタンとお揃い（色違い）な装備のミルたんが、何処から取り出したのか、マジカル・プリンセス・ロッド魔導姫 棍を豪快にぶんぶんと振り回した後、横チエキ

ポーズを決め、最後に

「わ、我が名は あーしあ・あるじえんと！」

お、堕ちた聖女にして、赤龍帝様の傍らに寄り添い、毎晩、(ごごご)、御奉仕プレイする者な r (すぱーん!) 痛あい！」

何やら お馬鹿な口上を…恐らくは白髪の ちんちくりんに要らぬ事を拭き込まれたのであろう、多少テンパリながらポーズを取るシスター服を着た金髪少女の後頭部に、思いつきハリセンをくれてやった。

「な…あ、貴方は自分の下僕に、何を仕込んでおられますの？」

「あー、今のは流石に ないわー…。」

「さ…最低で最悪だな…」

キミ、イケメンが台無しだぞ?。」

「…きも。」

「ちよつと待て！」

今のは断じて、俺ではない!!

それとアーシアは体面上、俺の部下となっているが、別に下僕とかでもない！」

しかし、これで向こうの4人が何を勘違いしたのか、俺をまるで汚物を見る様な目で見始めた。

大体、それを言うなら、ライザーのハーレム至上な趣味は、どうなのだ!?

…因みにミルたん的には これは『アリ』だった様で、特にツッコミも引きも しなかったが…とりあえず小猫、後でOHANASHIだ!。」

》》》》

「コホン…ま、まあ、赤龍帝は代々、変わり者が多かったと聞き存じております。

…ですので、貴方の様な趣味も、赤龍帝ならば仕方が有ります

「いや、だから、違うと言っている！」

一連の やり取りの後、何やら納得したかの様に話すレイヴェル・フェニックスの言葉を、全力でシリユーが否定。

「ふっ…まあ、レイヴエル様？」

「こんな お喋りは此処迄にしましょう。」

「おい、その兵士<sup>ポーン</sup>！」

「貴様 先程、自らを魔法少女と名乗ったな？」

「ならば、此方は美南風！」

「お前の魔術で相手をしてやれ！」

「…何故、貴女が仕切っているのですか？」

「まあ、良いでしょう…。」

「スッ…」

「カーラマインをジト目で見つめながら、十二単を纏った黒髪の僧侶<sup>ビショップ</sup>、美南風が一步、前に歩み出た。」

「指名によ。行ってくるによ。」

「そしてミルたんも、前に出る。」

「…分かってますわね、神崎様？」

「手出しは無用ですわよ？」

「ふっ…其処迄、無粋じゃないさ。」

《《《

「覇あああ…っ!!」

「先制を掛けたのは美南風。」

「魔力を練り上げ、火球、氷塊、石塊、鎌鼬を同時に作り出し、其れ等を一度にミルたん目掛けて撃ち放つ。」

「によおっ！」

「バシイッ！」

「しかしミルたんは、魔力を纏わせた拳で、それ等を悉く撃ち弾いた。「な？バカな？」」

「次は、ミルたんのターンによ！」

「有り得ないと言いた気な顔の美南風に、加速魔法を駆使して、一気に距離を詰めるミルたん。」

「ひいっ!？」

「バツ…」

「その迫力に、思わず顔を引き攣らせ、思わず羽をげて後方に回避し

ようとした美南風だが、

ガシィッ：

「!!?」

「捕まえたによー！」

それは少し遅かった様で、右の足首を掴まれ、捕まってしまう。

そしてミルたんは尚も空中に逃げようと もがく相手を、自分の両肩に担ぎ、仰向けの姿勢で固定、腿と顎を掴むと

「ミルたん・アルゼンチン・バックブリーカー!!によー！」

ボキィッ!!

「きゃあああああああああつ!!」

強力過ぎる背骨折りを披露するのだった。

『ライザー・フェニックス様の僧侶1名、戦線離脱です。』

そして場内に渡り響く、グレイファイアのアナウンスと共に、美南風は その姿を消す。

「な・なな…何なのだ、貴様は？」

「いきなりプロレス技を出して、一体その何処が、魔法少女と言うのだ!!」

ミルたんは剣を向け、クレームを物申すカーラマイン。…と、イザ

ベェ?

「:??」

しかし、そんな彼女達にミルたんは、何処が、何が違うと云うのか、本気で解らずに首を傾げ、きよとんとした顔をしつつも、

「肉体言語は、魔法少女の嗜みによ☆」

「はああ!!」

その後は事も無げに、只単に普通に…当然な事とばかりに言い放つのだった。

《《

「ううう…☆ す、凄い、凄過ぎる!!★」

「お、お姉様?」

そして その様を、現実世界（リアル）の生徒会役員室から観戦していた、魔王の1人が戦慄。

「ら、ライバル認定してあげるわ…!」

どうやら魔王少女的にも、サブミッション肉体言語は『アリ』だった様だ。

「…良っし!」

「あゝらあらあら?」

「ミルたん、やるなあ!」

「クス…叙情的に露製拳銃で、皆・殺・し★…ですね?」

「いや、塔城さん、怖いから!!」

「あれがリアス様の、新しい兵士…ですか…。」

「あつははははは!リアスも なかなか、面白い人材を見つけ出した物だね!」

そして同室でゲームを観ていた、他の面々も、それぞれが感想を零す。

》》》

「…ならば!」

ダツ…

美南風が戦闘不能による強制転移。

「次は、このカーラメインが!!」

その仇を撃つべく、カーラメインが騎士ナイトの特性を活かしたスピードでミルたんを攻め寄り、己の間合いに入ると同時に

「せええいやああつ!!」

ボウ…

手にしていた鋼の刃に炎を纏わせての斬撃を繰り出すが、

「んによっ!」

ギシ…

「な…?」

それをミルたんは拳で受け止めると

「によっ!!」

ガンッ!

「くはあつ!」

カーラメインの顔面…鼻っ柱目掛け、頭突きをヒットさせた。

「ちいっ…」

痛々しく鼻を押さえ、たまらず距離を開けようとするカーラマインだが、

「…遅いによー！ふんっ!!」

ミルたんは それを逃す事無く距離を詰め、追撃からの掌底突きを繰り出す。

「くっ!!」

これを辛うじて躲すカーラマイン。

《《》》

「な…何なのですか?」

神崎様、あの方は、ポイン兵士ではなかったのですか?」

「あのカーラマインのスピードを、全く問題としていないぞ?!」

レイヴェルとイザベラが、シリユーに説明を求むが如く、詰め寄る。

「簡単な話さ。」

ナイト騎士の駒の特性より、ミルたんの加速魔法の効果が上だった。

…只、それだけだよ。」

「はい?」「な…何だと?」

それに対して、自分が知っている範疇で、応えるシリユー。

「フィニッシュによー!」

このタイミングでミルたんが魔力を集中、自身の背後に、『もう一人』のミルたんを具現化させる。

「…さっきの僧侶ピシヨップみたいに、飛び道具が如く魔力を弾にして放つだけが、魔法じゃない。」

ミルたんは自分自身に魔法を掛けて己を強化、接近戦で戦うスタイルなんだ。

だから…」

「マジカル・ドリーミング・エクスプロージョン!!によーっ!!」

どっごおおおん!!

「い、いやあああっ!!」

そして その『もう一人のミルたん』の、爆裂系魔法を附加させた剛拳の一撃が、カーラマインを直撃。

『ライザー・フェニックス様の騎士ナイト1名、戦線離脱リタイアです。』





中に一度、自分の兄が陣取っている新校舎…の跡地に目をやると再びシリューに目を向けて、

「…まだ兄に、勝てる気でいらっしやるなら、御案内いたしますわ。」  
不敵に微笑むのだった。

## 赤龍帝の鎧！

「とりあえずアーシアは、ミルたんの回復を頼む。」

「は、はい！」

「レイヴェル・フェニックスだったか？」

ライザーの居場所迄、案内して貰おう。」

「…承知しましたわ。」

それから赤龍帝様、フルネームで呼ばれるのは余り好きではありません。

私の事は、レイヴェルで構いませんわ。」

「神埼…仔劉だ。」

「分かりました、神埼様。」



イザベラとの戦いで、派手な殴り合いを繰り広げ、勝てはした物の顔と云わず、全身がボコボコになっているミルたん。

シリユー達はレイヴェルにライザーの居る場所迄案内して貰うと同時に、歩きながらアーシアがミルたんを回復。

そして…

「よう、待っていたぜ、赤龍帝。」

フェニックス側本陣、瓦礫と化した本校舎跡…でなく、学園の正面校門側の前庭、水が抜かれた噴水の石段枠に腰掛けいる、ライザー・フェニックスと対峙。

当然、その隣には、女王クイーンのユーベルーナが控えている。

「貴様には色々と言いたい事があるが、今更それを言った所で、どうこうなるって訳でもない。」

面倒な口上は抜きだ。

「さあ、さっさと始めようぜ。」

「……………」

自分の妹が傍らに走り寄ったと同時に立ち上がり、戦闘の姿勢を取った金髪男の　その言葉に、シスター服の少女、の魔法少女衣装の

乙漢、そして薄紫の功夫服の少年が身構える。

》》》》

「きゃ?!」

「アーシアー!」 「アーシアたん?!」

最初にアクションを起こしたのは、ユーベルーナだった。

アーシアを指差し、その指先を一瞬 光らせると、アーシアの足元に魔法陣が展開、外周を覆う様に光る障壁が立ち上がり、その動きを封じ込める。

「悪いな、回復能力が脅威なのは、フェニックスである俺が、よく知っている。

其方の聖女さんの回復は厄介だからな、真っ先に封じさせて貰ったぜ。」

「心配なさらずに、赤龍帝様。

その封印の内からは動けない故、それ以上の攻撃をする心算は有りませんわ。

ライザー様から、その方は極力、傷付けない様に云われておりますし。」

「更に付け加えるなら神埼様、このゲーム、私も元から非戦闘要員ですから、人数的には未だ五分ですわ。」

余裕からか、不敵な笑みを零す、フェニックス陣営の3人。

「シリューさん…!」

「大丈夫だ、アーシア。

そこで じつとしてろ。

ミルたん、ライザーは俺が戦る!

あの女王は任せたぞ!」

「任されたによ!!」

ダツ…

シリューの指示で、ユーベルーナに突撃を仕掛けるミルたんだが、

「…クストツ」

「によ…っ?!」

直後、アーシア同様に魔法陣に捕らわれてしまう。

「こんな もによー！」

ガイン!!

「……!!」

内側から、魔力を帯びた拳を障壁に打ち放ち、脱出を試みるも、その赤い光の壁は、びくともしない。

「無駄な抵抗は、お勧めしませんわ、新米兵士ポーンさん？」

左の掌をミルたんに向けた、ユーベルーナが冷たい笑みを浮かべながら話す。

「その魔法陣の障壁は、内側からの破壊や脱出…あらゆる干渉を拒絶するのですよ。」

そう、内側からは…」

そう言うと彼女は、差し出した掌から、黒く光る魔力の弾を撃つ。それは以前、オカ研部室にて、シリユーに向けて放った。それと同質、但し威力は比べ物にならない程の、強力な魔力弾。

「にょっ？」

それは光の障壁外側に衝突するかと思えば すり抜け、魔法陣の内側、ミルたんの顔前で停滞する。

「撃破テイク！」

BOMB!!

そして、障壁内で起こる大爆発。

狭い密閉された空間で起きた それは、魔法陣の軌跡を象る様に、天高く、炎と爆煙を立ち上げる。

その爆発の直撃を受けたミルたんは、ダメージから完全に意識を失ってしまい、

『赤龍帝チームの兵士ポーン1名、戦線離脱リタイアです。』

グレイファイアのアナウンスと共に、その場から姿を消した。

「いやあっ?!ミルたんさん?」

顔を青くして叫ぶ少女に、

「大丈夫だ、事前に説明は受けただろ?」

ゲームで戦闘不能になった者は、即座に医療施設に強制転移される…と。」

心配は無用と話すシリュー。

そして その次の瞬間、

Boo o o h w a !!

「…!!」

真紅の業火が襲ってきた。

それをギリギリでシリューは躲す。

「ふっ…これで、其方は実質アンター1人だな、赤龍帝！

たった1人で、この俺とユーベルーナを相手に出来るかな？」

炎を放ったライザーが挑発混じりに言い放つ。

「大丈夫だ、問題無い。

ルール上、王を倒せば、それで終わりなのだからな!!」

その台詞に対して、ユーベルーナは眼中無しとばかり、ライザーに向けて特攻するシリュー。

「でえいやあ!!」

左の拳から魔力弾を連発で放つが、ライザーは それを悉く躲していく。

それでも尚、魔力の弾を撃ちながら、シリューは距離を詰めていく。

「でえいー!」

バキイツ!!

「うが…っ!?!」

そう、連発した魔力弾は<sup>フエイク</sup>囷。

そしてライザーの右脇腹に、本命である、赤龍帝の籠手を装った拳をヒットさせる。

その一撃に、確かな手応えを感じ取るシリュー。

「…痛たタ…成る程な、確かに少しばかり、油断し過ぎていたみたいだな…!」

B o w …

「な…それは…?!」

だが脇腹を抑え、苦悶の顔を浮かべるライザーは、その抑えている左手から繰り出す炎で一瞬、脇腹を燃やしたかと思えば、直ぐに余裕の表情でニヤリと笑みを零す。

「それが、フェニックスの再生能力か…  
確実に肋を砕いた筈だったのだが…」

「ふははははは!!その通りだ!」

「この能力が有る限り、俺は、フェニックスは無敵なのだ!!」

声高らかに笑うライザー。

「成る程…俺の方も、フェニックスの特性を少し、舐め過ぎていたみたいだ…」

そして、予想の上を行っていた能力に、シリューは改めて顔を引き締める。

BOMB!!

「うわっ!」

「私の存在を忘れては困りますよ、赤龍帝様?」

「ナイスだ、ユーベルーナ!」

更に、そこに、ライザーの女王が、爆裂魔法で己の王のサポートに入る。  
クイーン

「この私をモブ扱いした代償、決して安くはなくてよ!!」

BOMB!! BOMB!! BOMB!! BOMB!! BOMB!!

「うおおっ!」

自分を無視してライザーに攻撃を仕掛けたのが余程 頭にキていたのか、執拗に爆裂系の魔力が込められた黒い魔弾を連続で撃ち放つユーベルーナだが、シリューは、さの全てを冷静に見切っていく。

「ちい、ちよこまかとー…ならばっ!!」

BOMB!!

飛び交う無数の魔弾から、空中にジャンプで逃げたシリューが、再び着地した時、

von…

「な…!」

足元に赤い魔法陣が浮かび上がる。

「ええーっと、こーゆー時はアレだ、確か、『足下が お留守になつてますよ?』…だったかな?」

「くっ…!」

それは未だアールシアを足止めしており、ミルたんを撃破する時にも用いられた『拘束の魔法陣』。

とあるコミックにて使われていた名台詞をドヤ顔で言うライザーに対し、そのコミックの、結構なファンであるシリューが顔を歪める。「ふっ…どちらにしても、そうだったら『詰み』<sup>チェックメイト</sup>だ。

…が、赤龍帝、どうせアంతは投了<sup>リサイン</sup>する心算は無いのだろうか？

…殺れ、ユールーナ。

「はい…ライザー様。」

ライザーの言葉に、ユールーナが己の掌を、魔法陣に捕らわれているシリューに向ける。

そして放たれるのは、数多くの黒く光る、魔力の弾。

ミルたんの時は1つだけだった爆裂魔法の弾が、今度は無数に魔法陣の障壁の中に入り込む。

「撃破<sup>テイク</sup>!!」

DOGGOOOOOhN!!

凄まじい爆発音と共に、魔法障壁の内側で、爆炎と爆煙と爆風が、天に向かって立ち上る。

「シリュー…さん…」

「はぁっはっはっはっはっはっはっはっはっはっ!!」

これで終わりだ!

リアスも、そして あの聖女も、この俺のモンだ!!」

その光景をみて、へなへなと膝を落とすアールシアを後目に、己の勝利を確信し、高笑いするライザー。

しかし…

「ん? グレイフィア様のアナウンスは まだか?」

何時迄経っても、赤龍帝の戦闘<sup>リタイア</sup>不能と、それに伴うライザーの勝利を告げる、グレイフィアのアナウンスは鳴り響かない。

「まさか!?!」

そんな馬鹿な事が…そう思いながらも、改めて魔法陣に捕らわれているシリューの方に目を向ける、ライザーとユールーナ。

『Boost!!』

「!!?」

その時に聞こえた、明らかにシリユウの声ではない、電子音の様な声。

障壁の内側は、未だ爆煙が立ち籠もり、中の様子はハッキリとは窺えないが、僅かに：煙の中から、幾つかの赤と緑の小さな光が、そして人の形が確認出来る様になる。

そして、内部の煙が全て消えた時、2人の目に映ったのは、

『Welsh Dragon Balance breaker!!』

正しく龍を象ったかの様な、真紅の全身鎧に身を固めた：シリユウの姿だった。

「鎧…ですって?」

「まさか、赤龍帝の力を、鎧に具現化させたとも言うのか!？」

その姿に、驚きを隠せない2人だが、

「だ、大丈夫ですわ、ライザー様！」

如何に赤龍帝と云えども、あの障壁は破る事等、出来たりはしない筈！」

動揺しながらも、自分の術式は完璧だと、己に自信付けようと言いついて聞かせる様に、ユーベルーナが言つてのける。

「パリン…」

「!!?」

しかしながら、そんな淡い望みは、障壁内から打たれた、シリユウの拳で障壁諸共、ガラスの様に粉々に砕かれた。

『…コレも数年振りだなあ、相棒!』

「懐かしむのは後だ、ドライグ!」

「フツ、違くない!! さあ、見せてやろう!

この目の前の奴等に、そして この茶番を観ているであろう悪魔共に…この俺達の、赤龍帝の”チカラ”を!!』

魔法陣の跡から抜け出し、一步一步、前に歩きながら、左手甲の碧の宝玉と会話しているシリユウ。

「よし、飛ばすぞ、ドライグ!」

『応よ、相棒! Boost!!』



そして その会話が一段落着くと、一気に加速し、ライザー達に突撃する。

「ひいーく、来るな!!」

その迫力に、怯み後退しながら、ユーベルーナが爆裂魔弾を連続で放つが、

BOMB!! BOMB!! BOMB!! BOMB!! BOMB!!

生身の時は、確かに躲していた魔弾。

「そんな薄っぺらな弾幕で、何をやっている心算だ!!」

しかし今は大爆発が起きている中、何事も無いかの如く その爆炎の中を突き進み、シリューは追撃の勢いを緩める事は無い。

そして魔力弾を潜り抜け、ユーベルーナの前に立ったシリューは、至近距離からの、

「廬山漆星龍珠!!」

ドツゴオオオオ!

「きやああああああ!!」

ゲーム開始早々に放った、魔力と小宇宙コスモが融合された破壊のエネルギー弾を撃ち放つのだった。

『ライザー・フェニックス様の女王クイーン、戦闘不能リタイアです。』

》》》》

「ちい、逃げるか、ライザー!」

「貴様の様な化け物相手、バカ正直に正面から挑むヤツが居るか!」  
実質、1対1の様相となったゲーム。

「お兄様…」

「シリューさん…」

ユーベルーナが倒れた事で、魔法陣の拘束が解けたアーシアが、レイヴェルと並んで、最後の戦いの行く末を見守っていた。

「でやあ!!」

「がふっ…!」

展開は一見、シリューが有利。

しかし、その実、如何にシリューが有効打を放つも、即座にライザーは回復してしまう。

そして、

「おらあつ！死ねやあつ!!」

ピシィ…

「!!?」

ライザーの背から具現化した炎の翼が、シリユウの赤い兜を掠めると、その部分にヒビが入った。

『気を付けろ、相棒！フェニックスの炎はドラゴンの鱗にもダメージを与える！』

この禁手バランス・ブレイカーの鎧でも、マトモに喰らうのは危険だ!!』

「了解だ、ドライグ。…ならば!!」

このドライグの助言に、シリユウは

「この鎧など不要の長物！赤き龍帝の力、防御を棄て、それを攻撃に換えるまで！」

『いや、待て相棒！それは少し違うぞ?!』

内に宿る龍の想定とは違う闘法、結論に至ったらしく、

「龍鎧解装!!」

バサアツ！

「え…?ええええーっ!!」

「はわわわわわわ…」

「…へ?」

『ハア…』

掛け声と共に、赤龍帝の鎧、兜を含む上半身のパーツを左腕の部位だけ残して全て、身体から外して周囲に飛散させる。

そして飛び散ったパーツは粒子状となり、左手甲の碧の宝玉に吸収されていた。

「さあ、ライザー・フェニックス！」

このシリユウ、今より改めて、本気を出させて貰うぞ!!」

「ああ…う、うん、はい…」

2人の金髪少女が顔を真っ赤にしている中、下半身は紅い装甲を纏った儘だが、上半身は左腕の赤い籠手以外は真っ裸まっぼとなった少年が、やはり予想外の出来事に啞然とした顔の金髪男に対して、戦闘の

姿勢を見せるのだった。

## 決着！ドラゴンVSフェニックス!!

「な・ななな?!?!」

「あわわわ…」

「…!!」

「ひえっ?!」

「……………」

「あゝらあゝらあゝら?」

「あはははは…」

「はあ…また やりやがりました…。」

「くつく…だから、腹筋割らせるなし…」

「はあゝゝゝゝゝ…」

「へえ?」

「おおおおおゝゝゝゝゝっ☆!!」

現実世界の生徒会室、レーティングゲームを観戦していたオカ研部員、生徒会役員、そして2人の魔王は いきなり龍の鎧を脱ぎ捨てたシリューに対して、それぞれが様々な反応を示していた。

「凄いや凄いや凄いや凄いや☆!!」

シリューちゃん、凄いや身体してるよ!

ソーたんも そう思うよね?!」

「の、ノーコメントです!!」

瞳を輝かせてモニターをガン見する者に、顔を赤らめ、モニターから目を逸らす者。

「……………」

パタン…

「っ、翼沙あ?!」

男の裸体に免疫が無く、オーバキルで倒れる者に、その介抱に回る者。

「はわわわわわわわ…」

「あ…あああ…!!」

やはり男の裸体に耐性が無く、はわわ状態になる者、顔を赤くしながらも、モニターを刮目する者。

「……………」

ノーリアクションな者。

「……!!」

きつらーん!!と掛け直した眼鏡を怪しく光らせ、改めてモニターを凝視する者。

「くくくくくくくくく…」

「あっはっははは!!」

シリユー君、やるなあ!」

床に蹲り、腹を抑えて必死に笑いを堪える者に、椅子に座った儘腹を抱え、周りを気にせずには大笑いする者。

「くす…シリユー君ですから。」

「神崎君だからね。」

「…まあ、シリユー先輩ですから、今日もいつか脱やるとは思ってたけど。」

慣れた光景、想定内と受け流す者。

…そして、

「後で、説教…!!」

ゲームの勝敗関係無く、部長として先輩として、部員…後輩の悪癖を戒める決意をする者。

▼▼▼

「あああ、アーシアさん?もしかして神崎様は、何時もあんな感じなのですか!?!」

「はうう、何だかスイマセン…」

金髪ドリルヘアの少女が真っ赤な顔を両手で覆いながらも、その指の隙間からちゃっかりと半裸の男をマジマジとガン見しつつ、自分の隣に立っている、やはりはわわしている金髪ストレートの少女に、あの慣れてる感全開な遠慮無い脱ぎっぷりについて問い質す。

すると少女は、決して自身が悪い訳ではないのに、まるで自分の事のように謝罪。



「な、何なのだ貴様わ!？」

戦いの最中、いきなり鎧を脱ぎ捨てるとは、何の心算だ?!」

多少なり動揺しながらも、触れたらなら それだけで その身が消し炭になりかねない程の、強烈な炎を放つライザー。

それに対してシリューは

「この攷劉、過去の戦いに置いて『鎧』を着ているという安心感から油断が生じ、隙が出来てしまう事が多々あった。

ならば、そんな甘えを拭い去る事で自身を追い込み、己を高める…

それが俺の流儀!

この攷劉からすれば鎧等、無用の長物!!」

そう、言つてのけた。

遙か昔の神話の時代、戦いの女神アテナは自分の眷属である聖闘士セイイントと呼ばれる少年達が、生身で戦い傷付くのを憂い、海皇ポセイドンの眷属が身に纏っていた鱗衣スケイルを参考に、聖衣クロスと呼ばれる鎧を創つたと云われている。

そんなアテナの想いを全否定、嘗ては聖闘士、しかも その最高峰に迄上り詰めた男の発言とは思えない言葉を口に出す、上半身真マツつ裸バ男。

『甘えつて…相棒よ、俺の鎧を枷扱いするのは止めてくれないか?!』

「いや、ドライブ、決して そんな訳では…」



「でえいやあつ!」

SHU!

「うはっ!? 怖え怖え!」

「ちいっ!!」

ゲームは泥仕合の展開となる。

ライザーが放つ炎を躲しつつ、シリューも拳を放ち、直撃ヒットさせるが、不死身フェニックスを名乗る男は、その通常ならば致命傷となっているであろう負

傷箇所を燃え上がらせると、即座に回復。

「諦めろ赤龍帝！」

貴様がドラゴンの力を…そして その身に それ以外の能力を  
持っているとしても、不死身の俺には通じないんだよ！」

「生憎と『不死身』を名乗る者との戦いは、初めてではないのでね！」

お前の不死身が、何処迄本物か、試してやるさ!!」

「抜かせ！その前に、俺の炎で焼き尽くして終わらせてやる!!」

》》》

ドツゴオオオオツ!!!

「きやああつ!?!」

2人の攻防の余波は既に、学園を模した戦闘空間全域を更地に：  
ゲーム開始早々に瓦解した本校舎は無論、シリユー側の拠点であった  
旧校舎も、完全に影も形も無くなっている。

2人の戦いの巻き添えを避ける為、レイヴェルがアーシアを招き入  
れ防御結界を張っていたが、その防壁も限界に迫っていた。

「これは もう…仕方ありませんわね…」

そう呟くとレイヴェルは、真つ白な上空を見上げると、

「グレイファイア様！聞こえてますよね？」

私と、此方のアーシア・アルジエントさんは、戦線離脱致しますわ  
!

てゆーか早く！この場から避難させて下さいまし！」

「お、お願いします〜！」

アーシアと共に、グレイファイアに助けを求める。

『…ライザー・フェニックス様の僧侶1名、及びに赤龍帝様のメン  
バー1名、戦線離脱です。』

その『泣き』を受け入れたのか、本来なら戦闘不能になった時に、  
自動で発動するリタイア機能が、ダメージを負ってないにも拘わら  
ず、恐らくは今回のゲームマスターであるグレイファイアの手動によ  
る行使か、2人の金髪少女は戦場ら姿を消した。

◆◆  
「ハッ！レイヴェル、よい判断だ!!」

2人が戦場から離脱したのを確認したライザーが、背中から羽…通常の悪魔の様な、

蝙蝠型ではなく、フェニックス独特の、炎の翼を展開、その翼が更に左右に大きく広がり、シリューを2方向から襲う。

「…!?!」

…事は無く、ライザーの背中から分離した、長く延びた炎の帯は、シリューの遙か背後で繋がり、2人を包むかの様な巨大な輪を作る。

そして今度は上方にも広がりを見せ、それは炎の壁となり、やがて上空をも覆い、最終的には巨大な焰のドームを作り出した。

「これは…?」

「はっはっは！…どうだ！赤龍帝!!」

もう、逃げられはせんぞ!!

この炎の結界の中、人間の貴様が、何時迄保つかない?

…戦闘空間に残った2人を、その灼熱の中に、閉じ込める様に。

◆◆

ガン！バシユツ!!

「シリューとライザーが、あの中に…」

「あれでは外からじゃ、どうなってるか分かりませんわ…。」

炎のドームに包まれ、その内部で戦っているであろう2人の様子が分からなくなり、それでも互いに技を繰り出している様な音がする映像を見て、リアスと朱乃が呟く。

「ねえ、サーゼクスちゃん？」

あの中に、カメラは入れないのかしら？」

「ん、カメラの耐久性よりも、ライザー君の炎のが、強いだろうからね。」

あのドームの壁に当たって燃え尽きるか、仮にあの壁を突き抜けたとしても、恐らくは内部の熱には耐えられないさ。」

「お姉様、そもそも先程から、何度か映像が乱れています。」

恐らくは、グレイフィア様がカメラを操作して、あの中に入り込ま



せようとしているのでしようが…」

「おいおい、グレイファイア？」

カメラだつて、安くは無いだよ?」

「む~~~~~☆☆」

そしてサーゼクスが、内部の映像を撮るのは難しいと説明。

「しかし、これって、神崎の方が、不利ですよ?」

「うん、確かに、そうかも知れないね。」

如何に、神崎君が赤き龍の宿主と云つても、所詮は生身の人間。

しかも赤龍帝の鎧は、さつき自ら脱ぎ捨てている。

そして、あのドーム内部は、灼熱地獄と化しているだろうからねえ…。

生身では、かなりキツイと思うよ?」

「だ・か・ら・普段から、無闇矢鱈に脱ぐなって言ってるのに！」

あ・の::露出狂があ~~~~~っ!!」

「全く::ドラゴンの耳に念仏です。」

「部長?小猫ちゃん?」

今回は、少し違うと思いますが?」

シリユウの悪癖に、怒おことなったりアス、ジト目諦め顔の小猫に、木場が苦笑気味の顔で指摘。

「兎に角、あの炎熱のドームの中、何処迄耐えられるか::ですね。」

「シリユウ…」



ドツドツドツド…

ドーム内、天井から、まるで流星の如く、炎の雨が降り注ぐ。

「どうだ、赤龍帝!!」

このフレイム・レイン、何時迄避けていられるかな?」

「ちい!!」

その悉くを辛くも、ギリギリで躲していくシリユウ。

この炎の雨は無差別、ライザーにも直撃はしているのだが、不死鳥フェニックスを名乗るのは伊達では無く、その体に躲す事無く、炎を受け入れるライザー。

そして その燃え盛る炎は、ライザーの身を焦がす事無く、体内に吸収されるが如く、消えていく。

「ひゃあっほーっいい!!」

そして その度、心なしか、元気になって往くライザー。

それは所謂RPG的な、『炎属性の敵キャラには、炎系の攻撃は利かない』を、そのまんま表現しているかの様。

「何だか それ、卑怯じゃないか!?おい!!」

「ふはははははは!!」

これが、種族特性と云う物だ!人間!!」

そう言いながらライザーは、シリユーとの距離を詰めると、自らの掌を燃え上がらせてからの手刀を横薙ぎに放つが、シリユーは其れをも躲す。

「か…は…!?!」

しかし それと同時に、シリユーの背後から炎の槍が襲い掛かる。

天井からでなく、壁の部分から延びた、一筋の炎。

これもシリユーはその存在に気付き、前方から迫る炎の手刀と同じに捌こうとするが、槍は一直線の動きから、蛇が地を這うかの様に身をくねらせ、変則的な動きにチェンジ。

それでも其の動きにすら反応するシリユーだが、完璧に避けきる事は出来ず、遂に炎の刃を身に掠めたのだった。

「今が、チャアツーーーーーンス!!」

如何に聖闘士、そして赤龍帝だとしても、転生悪魔でもない その体は、かなり鍛え上げられているだけで、生身の人間と変わらないシリユー。

掠めただけとは云え、魔力で創り上げた炎の一撃を喰らって只で済む訳がない。

背中への一撃を喰い、膝を着いたシリユーを見て、ライザーはこの機を逃さず一気に勝負を決めようと、天井から壁から全方位から放たれる無数の炎の雨と槍を、自身共々にシリユーに浴びせる。

しかし当然、炎の化身たるライザーは、ノーダメージ。

そして、

「うおおおおおお!?」

シリューの全身に、回避不可の攻撃が直撃、その身を業火が包み込んだ。

「はあ…ハア…」

「多少は防御、出来た様だな…」

流星に消し炭には、ならない、か…」

全身を炎で包まれるも、小宇宙<sup>コスモ</sup>と魔力のシールドで、ダメージを最小限に抑えるが、それでもライザーとは違い、ノーダメージとは往かず、身体の所々、大小の火傷を負ってしまうシリュー。

息を荒げ、それでも倒れる事は無く、活きた眼で、目の前の敵を見据える。

「ふん…その眼は知っているぞ?」

この俺が、最も厄介と思っている、”しぶとい”類の奴が持っている眼だ。

しかし、何やら息苦しそうだな?

まあ、当然な話だ。

この密閉されて、燃烧し続けている空間、何時迄も、酸素が在る訳がない!」

「くっ…」

「ついでに…赤龍帝、気付いてるか?」

この空間の壁と天井が、徐々に狭り、ひくくなっている事に!」

完全に自分のホームグラウンドな空間の中、所謂、油断とは別の次元の、余裕を持った表情で話し続けるライザー。

「お前が窒息みたいな、間抜けな負け方をする訳ないのは、既に理解出来ている心算だ。

だから、一気に決めさせて貰うぞ!

この、”デスドーム”を使った、最大技でな!」

ボオウウ!!

そう言うところライザーは、その身を、正しく不死鳥が如く、全身を鳥を象った焰に変え、真上に飛び上がると、其の儘ドーム天井の炎と同

化。

「ふははははは！解るか？赤龍帝えい！！

今 俺は、このドームと一体化となった！

このドーム自体が、俺自身だ！！」

「…くっ！！」

炎の結界内部に、声が響くと同時に、天井が壁が、シリューを潰さんと落ち迫る。

それは ゆっくりと迫り、標的に絶望と恐怖を味わわせる様な物ではない。

直径20呎は有ったドームは一瞬にして、直径2呎程に圧縮収縮。その代わり、このゲームの為に擬似的に創った空間、その天に迄届かんとばかり、巨大な火柱が高く聳え建った。

◆◆◆

「ドームが…」

「火の柱…に…？」

「何が あったのよ!？」

「あの火柱は多分、ライザー君が変化した物だね？」

「え？じゃあ、神崎は…？」

「まさか…!？」

「恐らく…あの火柱の中でしょう…」

「シリュー先輩…!!」

ドームが炎の柱に…

漸く外から見ても分かる変化が起き、モニターを観ながら、現状の分析をする、魔王、生徒会、そしてオカルト研究部。

業々と燃える炎は次第に収束して、人一人の大きさ、人の形となる。

「ライザー…シリュー…!!」

それを見て、思わず眩くりアス。

炎が消え、その場に残ったのは、

「何故だ…?!」

目の前に居る男を見て、それが信じられない光景とでも言いたげな、緊張感の中にも驚きの表情を隠しきれないと云った表情のライ

ザーと、

「ふっ…何とか凌いでみせたぞ!」

辛くも その攻撃に耐えきり、限界ギリギリの中、それが虚勢なのはバレているのを前提で、挑発じみた余裕な笑みを浮かばせるシリューだった。

》》》》

「馬鹿な?」

今のは俺の、超必殺の1つだぞ?!

それなのに、何で生きてんだ、テメー!?

ライザーが炎を纏った拳で殴り掛かるが、

「簡単な事だ!」

このシリュー、今の炎より、強力な炎を知っている…

過去の戦いで、より強力な炎を受けた事がある…只、それだけの事だ!!」

ドスツ!

「ぐわはあっ?!」

それを躲したシリューが、ドラゴンの魔力を込めた左ストレートを、ライザーの鳩尾に撃ち込む。

「ふ、巫山戯るな!!」

俺はライザー・フェニックス!

風と炎を司る、フェニックスだぞ!!

ううっ…がああああああ〜っ!!」

ぶおわっ!!

再び背中から、巨大な炎の翼を広げたライザーが、両手に魔力を集中させる。

そして その魔力は焰となり、焰はライザーの腕の上で、巨大な猛禽の形となる。

「不死鳥の羽撃き、受けてみる赤龍帝!

行くぜ! 『T o r m e n t a d e P h o e n i x !!』」

ビュオオオン…

掛け声と共に、ライザーの腕から放たれた炎熱の巨鳥が暴風と共に

一直線、シリューを直撃するが、

「貴様の最大は、その程度か！」

「な…!？」

暴風に体を吹き飛ばされる事無く、そして炎に身を焼き焦がされる事も無く、赤龍帝の籠手に纏われた左拳を前面に突き出すと、

「廬山漆星龍珠!!」

ドゴオン!

「ぐはあっ！」

そこから小宇宙と魔力が融合されたエネルギー波を放出、これがライザーに直撃、逆に吹き飛ばす。

ライザーの その奥義であろう技を正面から受け切る為、小宇宙を最大限に迄高めていたシリュー。

左腕の籠手と、未だ下半身には装着された儘の紅い龍の甲冑が黄金の光を放ち、背中には天を翔ける龍が、くつきりと浮かび上がった。

「な…ななな…!?!？」

「今のが、フェニックスの羽撃きだど？」

巫山戯るな！まるで、微風だ!!」

漆星龍珠を受けてダウンした儘、信じられない光景を見ている様な顔をしているライザーに、険しい顔のシリューが吼えた。

「嘗て、俺の前世の友に、鳳凰星座を名乗る男が居た！」

その男の繰り出す炎や風の方が、ライザー・フェニックス！

貴様の それよりも、遥かに熱く、そして強かった!!」

遥か前世、共に戦いの時代を生き抜いた友の顔を思い浮かべながら、シリューは語る。

「でえええい！」

そして、体勢を立て直して構えたライザーに詰め寄ると、右の拳を繰り出す。

「ちいっ！」

ボウツ…

その攻撃を嫌がったライザーは、ダメージを回避しようと、再び身

体を炎に変化。

しかしシリューは迷わず、籠手を纏っていない方の、生身である方の右拳を、このライザーである、炎の中に突き刺した。

バシィッ!

「ぐぎやああああっ?!」

そして、響く呻き声。

人型に戻ったライザーが、胸を抑えて顔を歪め、シリューを睨む。

「貴様…今のは何だ?」

一体、何をした?!

答える!!炎と化した俺の体に何故、単なるパンチが、物理ダメージが通る?!

この日、この戦い、何度目となるか分からない、納得不能理解不能だと云う表情のライザーがシリューに問い詰める。

「良いだろう、教えてやる!」

そしてシリューが、戦闘の構えをした儘、それに応じた。

「先ず俺は、そもそも赤龍帝で有る前に、聖闘士だ!」

「聖闘士…だと?」

初めて耳にする単語に、やや困惑気味になるライザー。

それをお構い無しに、シリューは話し続ける。

「そうだ…そして聖闘士<sup>セイント</sup>の拳は、天を撃てば天を裂き、地に放てば地を砕く!

そして その真髄は、単に万物の表面破壊を目的にするに非ず。

聖闘士の拳は、あらゆる物の、原子を破壊するのを前提としている。

故に、破壊対象が原子で構成されている限り、例え其れが固体ならば無論、液体だろうが気体であろうが、ダメージが通るのは、至極当然の事!!」

「馬鹿な…そんな真似が、本当に…」

炎状態である体でも、聖闘士<sup>セイント</sup>の拳はダメージを与えると云うシリューの解説に、動揺の顔を見せるライザー。

》》》》

「廬山龍戟閃!」

バキッ!

「ぐ…ッ?」

「さあ、決着の時だ、決めさせて貰うぞ!

ライザー・フェニックス!!」

その後も、激しい攻防が繰り広げられる中、強烈な膝蹴りを顔面にクリーンヒットさせたシリューが勝負所と判断するが、

「ふん、抜かせ! 貴様とて、何だかんだで一杯一杯だろうに!

簡単には終わらさん!

そして最後に立つのは、この俺だ!!」

ライザーも抗戦の姿勢を取る。

互いにバックステップで距離を開け、それぞれが魔力を、小宇宙<sup>コスモ</sup>を集中させて高める両者。

「はあああああああああああああ…」

「クオオオオオオオオオオオオオオオオオ…」

炎の翼と共に、両手を左右に大きく広げたた、仁王立ちの様な構えのライザー。

そして、己の守護星座を両手で描き象るかの様な、独特の構えを見せるシリュー。

「俺の勝ちだ! 赤龍帝!」

先に魔力の集中を済ませ、仕掛けたのはライザーだった。

ゴオオオオオオ…!!

再び身体を焰の塊とすると、高く、そして広範囲な、巨大な竜巻の様な形に姿を変え、シリューを その中に巻き込み呑み込まんとばかりに襲い迫る。

しかし、

「いや、勝のは俺だ!!

燃え上がれ! そして轟け!!

我が、小宇宙<sup>コスモ</sup>よ!!」

シリューは その瞬間に目を見開き、目の前の、自身を覆い呑み込もうとしている炎の竜巻を刮目すると、



「廬山昇龍覇——————!!」

DOGGOOHHHHNN!!!

「ぐわあああああ——っ!!?」

自身の代名詞と言っても良い、小宇宙<sup>コスモ</sup>を最大限に宿したアツパークットを、ライザーの化身である炎の塊に向けて、天高く撃ち上げたのだった。

ドシャツ!!

「がはあっ!!」

昇龍覇の衝撃で吹き飛ばされたライザーの体は、空中で炎の状態から人の形に戻り、頭から垂直に落下し、地面に激突。

「ク……ッソがあ……まだだ!」

まだ、終わらせ……ねえ……

お、俺は……不死……身……の、フェニツ……クスだ……ぞ……!」

ガタツ……

それでも最後の気力を振り絞り、尚も立ち上がろうとするライザーだが、その途中で体勢を崩して前のめりに倒れ込み、

「っ……」

そして遂に、気を失ってしまう。

『ライザー・フェニックス様、戦闘続行不能確認。』

王<sup>キング</sup>であるライザー様が倒れた為、この度の変則レーティングゲーム、赤龍帝……神崎孜劉様の勝利と致します!!』

そして その直後、ゲーム終了を告げるグレイファイアのアナウンスが、激闘の末に完全に更地となった、駒王学園を模していた空間に鳴り響いた。

## 赤龍帝の逆鱗!!

「な、何と云う事だ…?」

「あの、フェニックスの三男が…!?」

「ふあ…」

「流石は赤龍帝ですか…」

「…」

「…」

「…」

「…」

「赤龍帝…か…」

冥界。

シリユーとライザーの戦いを観ていた、2人の魔王と悪魔陣営上層部の面々が、その結果に ある者は感嘆し、ある者は予想外だと驚き、ある者は無感情に単に結果の1つとして、そして ある者は、興味津々に受け止めていた。

「…ふむ、グレモリー卿、この度の勝負、あの赤龍帝…強いては、リアス嬢の勝利…ですか?」

そんな中、長い金髪をオールバックに固め、カイゼル髭、そしてモノクルを掛けた貴族然とした男が、紅の長い髪と顎髭な、やはり貴族な出で立ちの男に話し掛ける。

「今回の件…私の愚息の暴走が招いた結果だが…」

「…仕方ありませんな、フェニックス卿。」

今回のゲーム、その意義も公表されている故に…この度の縁談は、破談…ですな。」

「赤龍帝…ライザーからすれば、転生もしていない、高が人間が冥界にて、魔王様から同等の立場を与えられ事に不満…そのメッキを剥がそうとしたらしいが…」

「時が移り、依り代が変わっても、忌まわしい存在に変わりなかったのを、逆に証明してしまつた。」

いや、今代の赤龍帝は、史上最強かも知れませんか。

魔王様…いや、サーゼクスがアレを我々の側に迎え入れたのは、ファインプレイとしか言い様が有るまい。」

「全く…彼が、天界や墮天使と手を組んだと思うと、恐ろしさに身が震

える…」

リアスとライザー、両者の父親は、互いに今回の婚約話を正式に白紙にする事を確認すると同時に、大昔の戦争で目の当たりにした赤い龍の恐ろしさを改めて思い出す。

…今代の赤龍帝が、自分達の側に就いてくれた事に、幸運を感じながら。

◇シリユースide◇

「ふう…」

ゲーム終了後、今回のゲームマスターであるグレイファイアさんの転移魔法で、「現実世界」のオカ研部室に戻り、ゲームの最中に上半身裸となった身形を整えるべく、鞆から着替えの服を取り出ししている最中、

♪♪♪♪♯♪♪

スマホから、メールの着音が鳴った。

「ん？」

それは部長からの、『生徒会室で待っている』というメッセージ。

》》》》

ガラ…

「シリューちゃん！おめでとーっ!!」

スパカーン！

「きやいいん!？」

「……………」

いきなり何をしてくるんだ？貴女は？」

「しよ…勝利を祝う はぐをほう…（ガクツ）」

「お、お姉様あ!？」

「セラフオール様?!」

生徒会室の扉を開けた瞬間、魔王少女が抱きつこうと飛びついてきたので、ハリセンで迎撃して、改めて入室。

ギリギリ迄、気配を感じさせなかった不意打ちだったので、反射的に多少、小宇宙<sup>コスモ</sup>を込めての一撃。

リアス部長と支取先輩が慌てて このダウンした魔王少女に駆け

寄るが、まあ、一応は魔王の一角だ、死にはしないだろう。

…というか、来ていたのか、この人。

「やあ、シリユー君、とりあえずはおめでとう。」

「どうも。でも、それはリアス部長に言うべきでしょうか？サーゼクスさん。」

…ですよ？この度は婚約破談、おめでどう御座います、部長。」

「うふふ…ありがとうね、シリユー♪」

…あの魔王少女が人間界に来ていたと云う事は…と思っていたら、やはりアンタも来ていたか…な、もう一人のシスコンと一言二言な会話の後、部長に話し掛けると、本当に嬉しかったのか、凄く優しい笑顔で礼を言われた。

聞けば、本当に数分前に、冥界から正式に婚約白紙の報告があったとか。

「やりましたね、シリユーさん！」

「シリユーたん、お疲れによ。」

俺より一足先に、ゲーム運営サイドの医療施設から直接転移してきたのであろう、アーシアとミルたんが、

「流石でしたわね、シリユー君。」

「まあ、負ける心配はしていませんでしたが。」

「やったね、神崎君！」

更にはオカ研の皆が、

「神崎君、赤龍帝の実力、確と拝見させて頂きました。」

「見事でした。」

「神崎、やったな!!」

そして支取先輩に新羅先輩、匙も劳いや祝いの声を掛けてきてくれた。

「「「「「いっえーい!!」」」」」

「ばちいっ！」

「「「「「……………」」」」」」

…で、男子3人でハイタッチする中、残りの支取先輩の眷属は…無視ですか、ああ、そうですか。

「……………」

あの戦車である、大学生の人狼サンは、それほど面識無いから絡み辛いつてもあるだろうが、残りの生徒会モブ達、幾ら「高が人間如き」な俺を嫌ってるからって、其処迄露骨に目を逸らさなくても…ねえ？

「いや…ありや、お前が悪いから…」

え…？

▼▼

その後、オカ研部員一同とミルたん、ソーナ、椿姫、匙、そして2人の魔王は、旧校舎のオカ研部室へ。

「…えくと、部長？」

せつかく部長の為に、必死に戦い抜いた俺に、こんな仕打ちは…」「それは、それ、これは、これよ！」

ハリセンを持った腕を組んでの仁王立ちなりアスの前、ギャグ補正が利いた大きな たんこぶを頭部に作り、床に正座しているシリユー。

「率直に聞くわ？ライザーとの戦いの途中、あの鎧を脱ぎ捨てる行為、あれは絶対に必要な事だったのかしら？」

「え…と、それは…」

「全くアタワ！」

何で何時も何時も何時も！

何の意味も無く、直ぐに真つ裸ばになりたがる訳?!

今回のゲーム、冥界の上層部の方々も御覧になっていたのよ!!

少しは自重しなさい！」

「ひいつ!？」

そう、OHANASHIの始まりである。

「ソーナちゃんと椿姫ちゃんも、眼鏡☆きつらーん☆で、輝かせてガン見してたんだよ〜!☆」

「な…!?!れ、レヴィアタン様?!」

「お、お姉様!?!、私はガン見なんて、していません!あれは椿姫だけです!!」

「会長~~~~っ!!」

「医務室でも、あのライザー様の下僕の子達、モニターを見ながら阿鼻叫喚な大歓声を上げてたによ。」

「悲鳴でなくて歓声??」

「はい。皆さん…特に この前、小猫ちゃんに吹っ飛ばされた双子さんと、お団子頭の女の子が、目をキラキラうるうるしていました。」

「…何だか評判、良いじゃないですか?」

俺、何か悪い事、してます?

何か皆、喜んでないですか?」

「お黙りなさい!!」

すばかーん!

「あじやぱーっ?!」

…この後、紅髪の魔王と、クラスメートの生徒会役員が腹を抑えて嗤ってる中、延々と部長による、後輩部員の悪癖を戒めんとする説教は続いた。

但し、それで其の悪癖が正せるのか?…は、全く別の話である。



翌日。

「…で、報酬みたいのは?」

「ゲームのファイトマネーとやらを、運営サイドからの正規な形で払いたいから、人間界こちらで振り込み用の口座、作ってくれって言われたよ。」

「口座って、まちかよ?!

もしかして、かなりな額かよ?」

「まあ…な…一応は、アジアとミルたんに分ける形な。」

尤もミルたんは兎も角、アジアは、今はトーカー家に世話になってる身だから、不用意に口座とか作れないから、とりあえずは部長に管理をお願いする心算だよ。」

…そんな他愛の無い会話が教室で交わされる中、時は放課後となる。



ガラ：

「うう〜つす…」

「こんにちわ〜」

シリユーとアーシアが、旧校舎の部室に顔を出した時、それを待ち受けていたのは、

「あ、シリユー…？これは一体、どーゆー事なのかしら？」

「え？」

何やら、少し戸惑い気味に怒っている感じなりアス。

「うぐわおをうも〜っ!!」

…そして、魔力の、否、小宇宙コスモで生成された枷で手足を拘束され、やはり小宇宙コスモで創られた猿轡モで、口の自由を奪われ、床に伏せている男…の悪魔だった。

「シリユー？これ、アナタの仕業よね？」

この枷、アナタの『こすも』ってヤツで作られているわよね？」

「…その質問の前に、どうして、こういう事態になったのか、本人に聞くのが先じゃないですか？」

「この悪魔、喋れないでしょ!!」

小宇宙コスモ製猿轡モを指差し、突っ込むリアス。

「…そりゃ、御尤もで。」

仕方無い、纏めて説明したいから、サーゼクスさんでもセラフオルーでも…1人で良いから、誰か、魔王をこの部室に呼んで貰えますか？」

「え？何言ってるのよ？」

そ、そんな、急に出来る訳が…」

「魔王を喚べと言っているのだ！リアス・グレモリー!!」

「…!!」

「ふんがもまつ!?!」

それは普段の先輩後輩、部長部員の会話でなく、魔王と ほぼ同格の地位を与えられている悪魔陣営の『客』と、単なる上級悪魔貴族の時期当主候補との会話。

それを察したりアスは、慌てて魔王の1人である、兄・サーゼクス・

ルシファーに、自分以上に慌てふためいている、縛られた悪魔の男を尻目に連絡を入れる。

「ブワアツ!!」

「むごうぐぬぬゆ〜っ!!?」

「!!?」

直後、部室の床に魔法陣が展開し、やはり小宇宙<sup>コスモ</sup>の枷で身体の自由を封じられた悪魔…の、今度は女が、転移してきた。

「…やれやれだぜ。」

▼▼▼

「…彼は確か、カミジン家の、そして こっちの彼女は、アバドン家に仕える転生悪魔だね。」

拘束された2人を見て、慎重な面持ちで話すのは、リアスからの呼び出しに、ほいほいと業務すつぽかしてやってきた、シスコン魔王・サーゼクス・ルシファー。

「…で、シリユー君、どうして2人は?」

まじまじと2人を見た後、シリユーに顔を向けると、

「それは本人に、話して貰いましょう。」

パチイン…

シリユーは指を弾き、2人の口を封じていた猿轡を消す。

「さて…貴様等、どういう過程を経て こうなったのか、この場で正直に話して貰おうか!!」

「!!」

そして、シリユーの怒声が部室に鳴り響いた。

》》》

「はあ~~~~~~~~~~~~」

全く、何て事をしてくれたんだよ…」

蒼い縦線が数本、スウーつと顔に入り、頭痛が凄く痛そうな表情で頭を抱え込む紅髪の魔王。

「…も、申し訳ありません、魔王様!」

そんなサーゼクスに、未だ縛られた状態の儘、只管に謝る2人の転



生悪魔。

「あ、主に命じられて、仕方無く！」

「わ、私もです!!」

要約すると この2人、それぞれの主に命じられて、シリユウの家族を、そしてシリユウの恋人である矢田桃花を拉致ろうとして、それぞれの家に侵入。

しかし、シリユウが両家に予め仕掛けておいた罠トラップに見事に引っ掛かり、捕縛&強制転移を喰らったのだった。

何故、シリユウの家族や親しい者を捉えようとしたのか…

それは、レーティングゲームでのシリユウの実力を見て、人質を以てして己が眷属としようかと企たか、或いは それでも『人間如き』が自陣での今の待遇を快く思わず、威圧しようとした他には考えられなかった。

「これは どういう事だ、サーゼクス・ルシファー！」

これは悪魔とは、同盟決裂と判断して良いのか?!

「ちよ…シリユウ君、落ち着いて！」

「自らの欲望の為に、何の落ち度の無い者を巻き込むが悪魔と云うならば このシリユウ、地上の平和を護る 聖闘士セイントとして、その悪魔という種を人に害為す邪悪と見なして滅する迄!!」

「ご、ごめん、ケジメは着けるから！」

マジに落ち着こ?ね?ね?」

ボツワア!!

完全にキレて、小宇宙コスモ全開なシリユウを、必死に魔王が宥める。

》》》》

「不味い…本当に不っ味いわ…」

シリユウ、マジにキレてるし…。

下手すりゃ本当に私達悪魔、純血転生関係無しに、皆殺しにされるかも…」

因みに この時、リアスとアジアは既に旧校舎から退避、朱乃や小猫、木場にミルたんと、遅れてやってきた関係者に現状を説明、外で待機していた。

「全く、何処の御方ですか？」

そんな傍迷惑な死亡フラグ、立ててくださったのわ?!」

「はわわわわ…シリユーさん、凄く怖かったですう…」

「気のせいかな、校舎が揺れてるによ？」

「ん、確かに揺れてるね。」

「倒壊するかも…」

「…って、それ、凄く拙いじゃない!？」

祐斗、小猫！直ぐにギヤスパーを無理矢理にでも、外こちに引つ張り出してきてー!」

「は、はい!」「…はい。」



「幸い…と言うのは少し違う気もするけど、両家とも現当主でなく、その三男、及びに次男の孫…殆ど当主を継ぐ可能性が皆無な2人だ。」

今回は当主や家に関係無く、その2人が自分の欲で、勝手に暴走してやった事。

家を取り壊すでなく、当人を肅清するだけ、それで済むなら、それが最良だと、僕個人は思っている。」

冥界に戻ったサーゼクスは急遽、残る3人の魔王や それに次ぐ権力を持つ元老院の面々を無理矢理に自分の城に召集させ、その一室で今回の騒動について話していた。

「しかし、サーゼクス様？」

いくらなんでも、極刑と言うのは…」

「只でさえ、純血悪魔は、その数が少ないのですぞ?」

「高が人間如きとの約定の為に…」

当人の命を以て償わせ、シリユーに…赤龍帝に誠意を見せると云うサーゼクスの案に、難色を示す老人達。

「あのね、そんなに『高が人間如き』とか言ってるならさ、おじーちゃん達自らが、シリユーちゃん処に行つて、お話してみなよ? ☆別に止めたりは、しないよ? ☆

じゃ☆行つてらっしやくい☆!」

「……!!?」

しかし、セラフォル・レヴィアタンの一言で黙り込む。

「悪魔にとって、契約と信用は絶対。」

今回の騒ぎは、それを破らんとした行為に他ならない。

厳罰は当然な事です。

何よりも、彼等是我々、魔王の決定した事に背き、我々魔王の『友人』、そして彼の大事な存在に手を掛けようとした…。

その面からしても、万死に値します。」

「ふわあ〜…もう、死刑で良いじゃん？」

だつて面倒だし…」

「……」

更には残る2人の魔王も、サーゼクスの考えを推す姿勢を見せる。  
「仮にシリユー君と…赤龍帝と事を構えらるとなつたとする…。」

確かに今なら、数の暴力で彼を討ち取るのは可能かも知れない。

しかし その時は、我々悪魔も、純血悪魔2人が命を落とす程度では済まないよ？

赤龍帝の力…あの戦争を忘れたのかい？」

「更には その騒ぎに乗じて、ミカエルやアザゼルが彼に着いたりでもしたら、尚の事…本当に我々は滅んでしまうかも知れません。」

「……」

2人の魔王の言葉に、完全に老害は黙り込んだ。

》》》

そして この後 直ぐ、2人の純血悪魔の公開処刑が執行され、冥界…悪魔領全土が震えるのだった。

「それから…シリユー君は敢えて今迄の事は目を瞑ると言ってくれたけど、今後は眷属を作る際に、直接に脅すとか、身内を人質に捕つて無理矢理にとか、そういうのは魔王の名の下、完全に禁止にするから。」

これ、死亡処か、本当に冗談抜き、滅亡のフラグだからね。」

▼▼▼

「…そんな訳で この度、リアス・グレモリー様の『僧侶』となりまし

た、レイヴェル・フェニックスですわ。

皆様、宜しく御願います。」

数日後の放課後、オカルト研究部部室にて、グレモリー眷属+αに丁寧<sup>α</sup>に頭を下げる金髪ドリルな少女が1人。

「…どんな訳です？部・長？」

『そんな訳で…』…この言葉から場面が始まった場合、既に其の経緯は説明されていると云う様式美を完全破壊しての質問をするシリユー。

「ええ〜つと…私とライザーの婚約話は流れたけど、それでも両方の家が、グレモリーとフェニックスのパイプは欲しいと言う理由でね、『駒』のトレードってヤツをね…」

「シクシク…所謂、人身御供と呼ばれるヤツですわ。シクシクシクシク…」

「トレード…ですか…」

よく、あのライザーが了承したなあ…」

「す、するー？」

レイヴェルなりの、渾身の嘘泣<sup>ボケ</sup>を無視して、頭に浮かんだ疑問をストレートに口にするシリユー。

「そ、それはですねシリユー様、先に私のお母様と兄様が、（無理矢理に）駒の等価交換をして、その後、お母様とリアス様が更に交換…と言う流れですわ。」

内心、突っ込み待ちだったが、直ぐに気を持ち直し、事情を説明するレイヴェル。

因みに、小猫と同じクラスに編入したらしい。

「成る程…ね…」

「あら？何か御不満が？」

「いや、俺は気にしてないけど、君は正直な処、どうなんだい？」

俺は、君の兄の縁談を破壊した、張本人なんだぜ？

俺は別に、グレモリー眷属じゃないけど、同じオカ研部員として共に行動するのに、抵抗とかは無いかい？」

「あ、そつち…、いえ、全然…ですわ♪

ついでに言えば、両親も、『あの不死身ひゃつはー！…な、アホ天狗

の鼻を、よくぞ完璧に折ってくれた！（原文其の儘）と、シリユー様には怒みは愚か、感謝していただきましたわ。」

「ああ…そうですか…」

自身としては、かなり真剣だった疑問に、あつけらかなと、しかも家族の見解の補足付きで答えられ、若干 拍子抜けするシリユー。

「それから、塔城さんの仲介で、トーカさんとユキコさんとも、早速お友達になれましたわ。」

今後あの2人は、冥界では…自分で言うのもアレですが、フェニックス家令嬢の友人と云う位置付けになります。

それだけで、魔王様の御達し以上に、不躰な輩から狙われる心配は、更に減ると思いますが。」

ガシイ！

「レイヴェルさん、今後ともアイツ等と、仲良くしてやって下さい！

よろしくお願いします！」

その台詞を聞いたシリユー、透かさずレイヴェルの右手を取り、両手で握手。

「レイヴェル…で、構いませんわ、シリユー…先…輩♪」



時は、少し巻き戻る。

『ライザー・フェニックス様、戦闘続行不能確認。』

<sup>キング</sup>王であるライザー様が倒れた為、この度の変則レーティングゲーム、赤龍帝…神崎孜劉様の勝利と致します!!』

其処は単に白…単に果てしなく、白いだけの空間。

そんな空間の中、シリユーvsライザーのレーティングゲーム決着の映像を映すのは、霧の鏡。

「…どうですか？」

アレが、俺が話していた、シリユーと云う男です。」

「…うん。強いね。」

それを観ているのは、白髪が混じった金髪の初老の男と、銀髪の少

女。

本来ならば このゲーム、運営サイドが用意したカメラでの中継で、関係者しか観戦出来ない筈。

だが この2人は、明らかに それ以外の『眼』で、このゲームを観ていた。

「彼は…仲間になってくれる?」

「正直、難しいですね。」

仮に今、貴女がヤツの前に姿を見せて誘ったとしても、簡単に鞍替えする男では有りません。

何しろ、あの男、昔から硬物に手足が生えている様な男ですから。「ん、逆に安心した。」

簡単に移り変わる者は、信用出来ない。

ならば…妾の方が、彼の仲間になるなら?」

「それならば、多少の可能性は…」

「だったら、そちらの方向で…方法は貴方に任せる。」

「…御意に。」

少女の前で膝を着いて一礼した男は、その儘、その場から姿を消した。

「ん…頼むぞ、ベッコ・カンクロ…」

<br>一刀両断のエクスカリバー  
行け！駒王学園オカルト研究部！！

タツタツタツタツ：

「ハア…ハア…」

夜の駒王町。

三日月の光が僅かに差し込む路地裏に、息を切らしながら走る男が居た。

所々が斬りつけられたかの様に破れ、何度か地を這った様に白汚れた黒い法衣に胸元には金のロザリオ。

見るからに聖職者な服装の、側頭部辺りからも血を流しているこの中年男は、何かから逃げているかの様に時折、後方を振り向きながらひた走る。

ドスツ：

「……!!?」

しかし、次に後ろを振り向いたその時、身体の正面、脇腹に銀色に光る刃が突き刺さった。

「カツハ…!?!」

何が起きたのか理解出来ない表情で、口から血を吐いた男は、地面に両膝を着き、その儘崩れ倒れ、

「……………」

身体に刺さった剣を抜いた人物は、目の前の男が、息をしていないのを確認すると、その場から立ち去る様、路地裏の奥、闇の彼方に消えて行った。

「くっくっくっく…」

くけけけけけけけけけ…

ひゃあくはっはっはっはあくくっいつ!!!」

不気味な嗤い声を響かせながら。



「悪羅悪羅悪羅悪羅悪羅悪羅悪羅あ!!」

キーン…

「ひいえええつ?!」

翌日、放課後の駒王学園。

旧校舎前のグラウンドでは、まるで893その儘な口調で、ミルたんからトスされたボールを、金属バットで『撃』っているのはシリユー。オカ研一同は、この日、シリユーの、この、鬼畜ノックを受けていた。

「コラー!ノックでボールから逃げるヤツが居るか!?!」

「ひええつ?!だ、だって、怖いですう!」

そして、その金属バットの向けられた先、鬼の様なボールを受け止めている…でなく逃げているのは、ブラチナ・ブロンド白金髪のボブカットの小柄な少女…でなくて少年。

ギヤスパパー・ヴラディ。

小猫とクラスメートだが、数日前迄、旧校舎に絶賛引き籠もり中、休学中だった HALFVUANPIYA。

そして、リアス・グレモリーの【僧侶】である。

引き籠もりと言っても、リアス眷属としての活動は、旧校舎からパソコンのネット回線を活用して、実績トップを誇る、謂わば稼ぎ頭でもあった。

先日の神崎家及び、矢田桃花誘拐未遂事件に伴う、旧校舎倒壊未遂騒動の際、その瓦礫の下に埋もれる前に数ヶ月振り、外の世界に引っぱり出した後、サーゼクスの「ついでだから…」の一言で、其の儘外で生活させる事に。

今迄は生来の、同族からすら危険視された能力、そして本人自身のコミュ症故に、封印イコール引き籠もりと云う、本人と『保護者』であるサーゼクスの利害の一致だったのだが、建物か壊れる程の地震(犯人はシリユー)の中、木場と小猫が無理矢理に、それこそ拉致するが如く外に引き摺り出し、其の儘復学させる形で、今に至る。

》》》》

コオン…!



「ひゃああつ?!」

「だ・か・ら!」

逃げんなつってんだろが、ゴラ、アツ!!」

「神崎君、スパルタだなあ…」

「ギャスパー! キチンとボールの正面に立って、身を屈めて捕るの!」

「だ、だって、怖いですう!」

「…へたれヴァンパイア。」

「うわあああん!」

小猫ちゃんが、いじめるう!!」

尚、何故に此奴は、野球部の真似事をしているかと言うと…

《《《《

「部活對抗球技大会…?」

「…ですか?」

「ええ、そーよ!」

部活對抗球技大会。

それは、近日に行われる学園イベント。

文系運動系問わず、各クラブ、そして各委員会に同好会、果てには生徒会迄もがチームとして参加する、スポーツイベントである。

因みに競技種目は公平を来す意味で、当日まで秘密とされている。

知っているのは、イベントを取り仕切る教諭陣だけであった。

「リアス部長と朱乃先輩、それと木場が先生に色仕掛けで、何の競技が聞き出せたら、かなり練習面で有r…:…いえ、何でもありません!」ぐはあつもないですから そのハリセン、仕舞ってくd(スパーン!)ぐはあつ!?!」

》》》》

…そんな訳でオカ研一同は週間前から その日毎に、違う種目の練習をしていた。

因みに この日は練習メニューはソフトボールであり、シリユウの鬼のノックが続いていた。

「そら!!」

キーン…!

「…つとー!」

パシ…

「よし、良いぞ、レイヴェル!」

「どーも…ですわ♪」

「じゃ、次はアーシア、行くぞ〜!」

「ははは…はい!」

「…と、思わせといて、木場あ!!」

「コオン!」

「わあ…つたつたあ!?!」

パス…

「ちい、捕りやがったか…!」

「ちよ…シリユー?」

「アナタ、何で悔しがってんのよ!?!」

》》》》

そして数日後、球技大会の当日が やってきた!!

◆◆

「…ドツチボール…ですか…!」

「練習、していませんわ。」

トーナメント表を見ながら呟くオカルト研究部。

種目はドツチボール。

それは、オカ研が練習していなかった競技だった。

「練習してないのを、悔やんでも仕方が無いわ!…さあ皆、勝つわよ!」

「…!」「…!」「…!」「…!」

「…シリユー先輩、間違っても、手を抜いたりしたら、駄目ですからね。」

「大丈夫だ、信用しろ!」

オカ研の初戦の相手はバレーボール部。

「孜劉先輩♪…信じていますからね?」

「うう…!」

但し男女混合チーム、シリユーの彼女であり、【学園きよぬー四天王】の一角を成している、矢田桃花が所属しているチームだった。

「シリユー?」「神崎君?」

「シリユー君?」「シリユーさん…?」

「シリユー先…輩…?」「」

「分かっているから!少しは信用しろ!!」

◆◆◆

「…えいつ」

ドゴオツ!

「ぐええつ!?!」

試合はオカ研ペースで進む。

特に小猫、シリユーの男子部員への情け容赦無い投球が、猛威を振るっていた。

「ええ〜い!」

「きやんつ!」

ぷるん…

ギヤスパアの投げたボールがトーカに迫るが、推定Fな胸を大きく揺らしながら、それを避けるトーカ。

「「「「「うおおおおおおおおくつ!!!」「「「「「」」」」」」

そして、それを見て湧き上がる、見学席の男子生徒達。

ぷち…

「か…神崎…君?」「シリユー…先輩?」

「木場、小猫。次 ボール来たら、俺に寄越せ…な?」

「ら…らじゃ…」

しかしながら その盛り上がりは、赤き龍帝の逆鱗に他ならなかった。

》》》》

「でえいやあああつ!!!」

びゅん!!

「おわっ!?!」「きやあつ?!」

物凄い勢いで男子バレー部員の真横をすり抜けた、シリユーの投げたボールは、外野で受け取る構えだったリアスも本能的に避ける程な、殺人的な物。

そして その、受け手が不在となったボールは…  
ズガアンツ!!!

「あじゃぱーっ?!?!」

「ひ、兵藤おっ?!?!」

トーカの胸の揺れを、眼福とばかりに鼻の下を延ばし、スケベ面丸出しで見学していた1人の男子生徒の顔面に直撃、この生徒は負傷退場となり、

「うぎやあっ?!」「ぬわああっ?!」

更に直後、男子生徒2人が同様に退場。

その後はシリユートの身体から迸る殺気を観衆も感じ取ったのか、水を打った様な静かな盛り上がりとなり、

「うう…：孜劉先輩の…：鬼畜…：」

「誤解を招くような発言は止める!!」

オカルト研究部がバレーボール部を下し、2回戦に駒を進めた。

◇シリユースide◇

俺達オカ研の快進撃は止まらない。

順調に勝ちを重ねた俺達は、準決勝で

「う…：劉兄さんの、鬼畜…：」

「だ・か・ら!その表現は止めるおっ!!」

従姉のユキコの所属する、サバイバルゲーム同好会を下し、決勝へ。

そして決勝で待ち受けていたのは…

「やはり勝ち上がってきたわね、リアス!

それでこそ、この私のライバル!!

今日こそは長年の決着、この場で着けてあげるわ!」

「ええ!望む所よ、ソーナ!

さあ、掛かってきなさい!!」

「神崎い!木場あ!!お前達は、この俺が、倒ーーーーーつす  
!!」

「上等だぜ!匙い!!」

「その言葉、着払いで返してあげるよ。」

支取先輩率いる、生徒会の皆さんだった。

…つて、木場。

お前も言う時は言うんだなw

》》》》

「あら？ソーナ？貴女、あれだけ啖呵切っておいて、いきなり外野なの？

何か、派手に動けない理由でも あるのかしら？ww」

「う…うるさいわねえ！」

ゲーム開始直後、ボールを持ったリアス部長が支取先輩を挑発。

駒王学園高校男子生徒制定

【学園きよぬー四天王】

- ・ 姫島朱乃
- ・ 支取蒼那
- ・ リアス・グレモリー
- ・ 矢田桃花

(生徒間で、”大きい”とされている順)

しかしながら、支取先輩に限っては、きよぬーはきよぬーでも、実は”虚乳”。

そう、一見、完熟なメロンに見えるアレ、実は”詰め物”なのだ。

そして その事実を、3年生を中心とした女子の大半、そして2年生男子3人が知っているだけ。

それが広まらないのは、女子は『武士の情け』的なヤツ、男子に至っては、内1人は先輩と主従関係にあるだけでなく、それを気にしない程の特別な感情を持っており、口外する気が無いから。

そして残り2人については、OHANASHIの末に硬く口止めされている故だ。

…あの時の支取先輩の顔、凄く怖かったよなあ、木場。

兎も角、朱乃先輩に次ぐ、学園No.2とされているが、実は学園内で下から2番m：ちよ…、小猫？ガチな膝かつくんは止める。閑話休題。

▼▼▼

「うおらっ!!」「だりやつ！」

オカ研vs生徒会のぶつかり合い。

気が付けば、互いに内野に1人残すのみにまで、ゲームは進んでいた。

「や…やるぢやねーか、神崎！」

「お…お前もな、匙！」

シリユーと匙。

互いに外野にボールを廻すと云う発想は無く、飛んできたボールを受け止めると、その儘に投げ返す…端からみれば、結構ガチなキャッチボールをしている様に見えなくもない…そんな展開となっていた。

「しぶといヤローだな…さつきと諦めて、試合終了しやがれ!!」

バシイッ!

「テメーこそ、俺が諦めるのを諦めろ！」

ビシイッ!

「シリユー…」 「匙…」

「シリユーさん…」 「元ちゃん…」

互いの仲間が見守る中、半ば意地な如くにボールをぶつけ合う2人。

同じ展開が20ターン近く続いた時に、遂に流れは変わった。

「…(チラツ)」 「…! (コクン)」

匙に向かってボールを投げたシリユーが、アジアにアイコンタクト。

そして、それに頷くアジア。

しかし、それは匙にも気付かれる。

受けたボールをシリユーに投げ返す匙。

神崎：気付かれない心算だったか？

次に お前は、フェイントでアルジェントさんにパスするんだろ？

そー言えばアルジェントさん、このゲームだけでなく、今迄見たゲームの中でも、投げるは愚か、全然ボールに触ってなかったよな？

まさか、この展開を想定しての秘密兵器だったか？

残念だったな!

アルジェントさんからのボールを取ったら、今度は俺が、フェイントで会長にパスして、それで終わらせてやるよ!!

頭の中での高速思考。

匙は身体はシリューを正面にしながら、目線を僅かに自身の向かって右側に流すと、外野位置で、如何にも「ボール、受け取ります!」な、気合いが入った顔で立ち構えているアーシアを注視。

だからアルジェントさん、そんな顔じゃ、バレバレなんだって!

キイン…!!

「んぐべいつ!!?」

しかし、ボールが飛んできたのは、自身から向かって左側。

シリューが かなり本気で投げたボールを、小猫が正拳突きでダイレクトに打ち返し、そのボールは殺人的スピードで匙の下腹部に直撃。

…テンテンテン

「あが・が…」

パタン…

「さささ、匙いく!!?」「げ、元ちゃん?!」

ボールが小さく数バウンドした後、匙は顔を青くし、前のめりにダウンしてしまう。

ざわざわざわざわざわ…

この時、見学席では、その光景を見た男子生徒は皆 青冷めた顔で、まるで自身が あの直撃を喰らったかの様に、その部位を庇う様に両手で抑えて屈み込み、女生徒達は何故だか嬉しそうに、顔を赤らめ、両の頬を抑えていた。

◇シリューside◇

「(ここ)、小猫く、お、お前は何てゆう事を…」

「ぶいつ!作戦通り!!(どやあ!)」

いやいや、「ぶい」でわない!!

確かに、アーシアへのアイコンタクトは、お前へのパスのサインだったし、結果、匙は見事に引つ掛かってくれた訳だが!?

「匙さん…:でしたかしら?」

あの方、随分と派手に倒れましたけど、大丈夫でしょうか?」

「当たり前が悪かったんですかねえ?」

悪かった処じゃないし、大丈夫でもない!

「あらあらあら……:……:……:♪」

はい、その朱乃先輩、嬉しそうな顔をしない!!

:こうして、ドン引きと大湧きが入り乱れるカオスな空気の中、部活対抗球技大会は、我等がオカルト研究部の優勝で、幕を閉じたのだった。

部活対抗球技大会

種目 : ドツヂボール

優勝 : オカルト研究部

準優勝 : 生徒会執行部

3位 : アニソン研究会

MVP : 塔城小猫 (オカルト研究部)

敢闘賞 : 神崎有希子 (サブゲー同好会)

特別賞 : 矢田桃花 (バレーボール部)

御愁賞 : 匙元士郎 (生徒会執行部)



## 教会からの使者

ざわざわざわざわ…

この日の放課後、駒王学園の校門を、2人の少女が通り抜けた。

1人は、前髪に一筋の緑のメッシュが入った、蒼い髪のリョートカット。

そして もう1人は、茶色の髪をツインテールに結っている。

宗教関係者であろう、首から金のロザリオを下げ、白い法衣を纏った この2人、蒼い髪の少女は布で包んだ：外から確認出来る形状からして巨大な十字架であろうか、その身の丈より長い荷物を抱き抱えている。

ざわざわざわざわ…

「うざい…斬るか?」

「お止めなさい!」

前庭の噴水の前で、誰かを待つかの様に立っている、明らかに学園の生徒ではない格好な外様の美少女2人、その口から小さく発せられる物騒な発言を余所に、学生達の注目が集まっていた。

》》》

「わあ〜あおう!」

そこの美少女さん達、ウチの学校に何か用ですか?」

「職員室か事務室の場所が分からないなら、案内しますよ?」

「…で、用事が済んだら、俺達とデート…いやいや、お茶でも どうですか?」

「へ?」「は?」

そんな2人に遠慮する事無く臆する事無く、3人の男子生徒が声を掛ける…というか、ナンパしてきた。

「ささ、職員室は、正面の校舎の…」

「ちよ…ちよつと待ってよ、…ってゆーか、キミって…?」

ナンパ男の1人がツインテ少女の手を取った その時、

「何をやっているか!」

「この、変態3人衆が!!」

ガンツ x 3!

「あべし!」「たわば!」「ひでぶ!」

その後ろから怒声と共に、3人の頭頂に拳骨が落ちた。

「痛ててて…ツメー、神崎!」

「お前、いきなり何をするんだ!?!」

「この前のドッチボールと言い、お前、俺達に何か怨みでも有るのかよ?!」

「喧しいわっ!!」

この2人は、ウチの客だから迎えに来てみたら、貴様等が阿呆な真似をしてかしていたのだろうか!」

「「きや…客う!?!」」

「アンタ等2人、………の関係者だな?」

リアス・グレモリーの使いで来た。」

「あ…うん…」………。

そこに現れたのは、何故だか仏頂面な神崎孜劉。

「どうやら この2人は、リアスに何やら用事があり、学園を訪れた様だった。」

「…案内する。」

「オカ研の部室は、アッチ側だ。」

》》》》

「ねえキミ?…さっきの男の子ってさ…」

「気にしないでくれ…」

「ありや、学園の恥部だ…。」

2人を案内しながら、旧校舎へと続く森を進むシリユウ。

「(ボソ…) ねえねえゼノヴィア、あの人って、………だけど、結構イケメンだよな?」

「…興味無い。」

「はあ…アンタっさ、何でも『興味無い』だけど、一体、何に興味有るのよ?」

「…剣?」

「…ダメだ こりや。」

そのシリューに聞かれない様、2人の少女は小声で会話しながら、3人は

コンコン…

「部室、連れて参りました。」

「ご苦労様、シリュー。」

オカルト研究部部室へと到着した。



コト…

「どうぞ、お紅茶ですわ。」

「…毒は入ってないだろうな？」

「ちよ…ゼノヴィア!？」

部室の応接室に通された2人に、朱乃が紅茶を差し出すも、蒼髪の：相方のツインテ茶髪の少女から、ゼノヴィアと呼ばれた少女が、それこそ毒を巻くが如くな言葉を吐き散らす。

「うふふ…まさか そんな、主の顔に泥を塗る様な真似は、いたしませんわ…。」

ぷつくう…

そう にこやかに答えながらも、朱乃の顛には、ず太い血管が浮かんでいる。

「(ボソ…) 朱乃先輩、かーなーり、キレイていますわね…」

「(ボソ…) 私なら、とつくに あの面に、グーパン喰らわせてる自信があります。」

「(ボソ…) うう…朱乃先輩、凄く優しい笑顔ですけど、瞳が笑ってないですう…」

その様子を見て、部室の角で小声で話すのは、オカ研1年3人組。

「…で、何の用事なの？」

昨日、お兄様まおから、教会の使いが訪ねてくるというのは聞いていたけど、もしかして、天界は悪魔側に、ケンカを売りに来たのかしら？」

そして やはり、先程の『毒』発言を快く思っていない、アームチェアに座っているリアスが口を開く。

その後ろ、王と女王を護る様に立っているのは、未だに仏頂面を崩

していないシリューと、それを更に酷くした、ファンが それを見た  
らショックで気絶するかの様な、輩の如くな表情の木場祐斗。

教会に思う所があるアジアは、やはり小猫達と共に部屋の角で様  
子を見ている、ミルさんの背後に身を隠していた。

そして朱乃がリアスの隣の席に座ると、ツインテールの少女が、  
ティーカップに一口付けた後、話し始める。

「先日、教会が保管 管理していた、3本の聖 エクスカリバー 剣が奪われました。」  
「え!?!」「なっ?」「:!!」「:??」

ツインテールの少女:紫藤イリナが言うには、正教会、カトリック、  
プロテスタントが各2本ずつ保有していた聖剣が、各宗派から1本ず  
つ奪われ、駒王町に持ち込まれたらしい。

「エクスカリバーって、そんなにも有るによ?」

「オンリー1だと思ってたかい?」

俺も、魔王からの又聞きだけど、大昔の戦争時にだn

「おい お前、聖剣の蘊蓄は、後にして貰えるか?」

「:それもそうだな、失礼した。」

…で、教会のザル警備を潜り抜け、見事に聖剣強奪成功したのは誰  
だが、分かっているのかい?」

「ぎ、ザル警備だとおっ!?!」

お前は教会に、喧嘩を売っているのか?!」

「ゼノヴィア!」

「シリューも!」

「ふん!」

「失礼:で、その賊は誰なんだい?」

「聖剣強奪の首謀者は墮天使:【神の子<sup>ッ</sup>を見張る者<sup>ッ</sup>】の幹部:コカビエ  
ルです。」

「( )?」「か?」「び?」「え:??」

.....。

「「「「「つるーーっ!?!」「」」」」」

その名を聞き、盛大にハモる、オカ研の皆さん。

「馬鹿な？コカビエルと云えば、聖書にも名を記している、あの、コカビエルか？」

「ええ、そう思つて間違ひは無いわね。」

「ハア…てゆうか、また墮天使ですか？」

まさかなVIPな名前の登場に、驚きを隠せないシリユー。

そして、またもや墮天使の起こした騒動と知り、呆れ顔な小猫。

「…話を進めるぞ？」

私達が こんな所に迄、わざわざ足を運んだ理由…

それは お前達に忠告しに来たのだ。

この度 墮天使が起こした この事件は、我々教会側だけで片付ける。

故に、『お前達 悪魔は今回の騒動に関わるな』…これを言いに来た。」

冷めた目で、きつぱりと言うゼノヴィア。

かちん…

「そ…それは随分な物言いね？」

私達が墮天使と手を組む…とでも？」

その発言に口元を上方に引き揚げながらも、あくまでもソフトな口調で応対するリアスだが、

「何だ？ 違つていたのかwww？」

「なな…何ですって！」

私は墮天使等とは手を組まないわ！

グレモリーの名に賭けて!!」

「なあアンタ…さつきから本当に、もしかして俺達に喧嘩売つてるのかい？」

「だったら、部長の代わり、俺が買つてやっても良いぜ？」

「ちよ…ゼノヴィアは もう喋らないで！」

キミも！頼むから、少し落ち着いてよ!!」

その相手の余りにも不遜な言葉使いに、遂には後ろに控えていた仏

頂面1号と一緒にキレてしまい、慌ててイリナが両者を宥めに入  
た。

「と、兎に角、貴方達 悪魔は今回の件、不介入を主に誓って下さい！」

「私達、神に祈りを捧げたりしたら、ダメーシ受けるんだけど？」

「もく、あー言えば こー言う！」

それなら魔王…は流石に立場上 勧められないから、閻魔様にでも  
誓って頂戴！

話は お終いです！

さあ、帰るわよ、ゼノヴィア!!

紅茶、ご馳走様でした！」

「あらあら？もう帰られますの？」

せつかく紅茶、入れ直しましたのに…」

「う…け、結構です…。」

差し出された紅茶が、実は かなりな味だった為、正直、お代わり  
したい気は有ったイリナだが、隣に座っているパートナーが、一切口  
を付けていないのも有り、気不味く、名残惜しそうに席を立ち、

「…ゼノヴィア、帰るよ？」

改めてゼノヴィアに声を掛け、部室を去ろうとする。

あゝ、やれやれ、何とか平和に？話を終わらせる事が出来たわく。  
後は もう、要らないトラブルに巻き込まれる前に、この学校から  
立ち去るだけよ！

イリナが そう思いながら、安堵の息を吐き、部屋の扉を開こうと  
した時、

「…さつきから 気になっていたのだが、お前もしかして、『魔女』ア  
シア・アルジエントか？」  
「え…う？」「はああくあつ?!?!?!」

ゼノヴィアが部屋の角で!目立たぬ様に振る舞っていた、アシアに  
声を掛ける。

それは彼女からすれば、どう考えても要らないトラブルへのフラグ

にしか見えなかった。

…が、

「あ…貴女が一時期、内部で噂になっていた、『元・聖女』さん？  
追放されて、何処かに流れたとは聞いていたけど、まさか、悪魔に  
なつてるとは思わなかったわ。」

「…あの…私は…」

フラグな筈が、アーシアを認識した途端、無自覚なのか、自らそ  
れを、強固な方向に持つて行つてしまう。

ぷち…

「し…シリュー…？」

仏頂面の男の顛に、先程の朱乃以上の、太い血管が浮かび上がつて  
いるのにも、気付かずに。

「大丈夫、この事は、上には報告しないでおくわ。」

『聖女』アーシアの周囲に居た人達に、今の貴女の状況を伝えたら、そ  
れこそショックで倒れてしまうでしょうから…。」

「……………」

イリナとしては、善意で、決して悪意は無く、他言の意志は無い様  
に言っている心算だが、その発言に、アーシアは俯き、黙り込んでし  
まう。

「ふん…しかし悪魔…か。」

嘗ては人々に『聖女』とまで呼ばれ崇められた人間が、堕ちる処迄  
堕ちた物だ。」

更に其処に、ゼノヴィアが言葉を続ける。

……………。

「…(わ、分かっているわね、貴方達！

いざという時は全員で、シリューを取り抑えるわよ！)」

「「「「…(ら、らじゃ！)」」」」」

その やり取りに完全にキレかかっているのが丸分かりなシ

リユーを見て、リアスが部員達にアイコンタクトで指示。

「ふん：お前、それでも まだ我等の神を、信じているのか？」

「ちよつと：悪魔になった彼女が、主を信仰していて？」

それに：リアス達の厳戒も、そしてシリユーの心理状態も気付かずに、会話を続ける教会2人組。

「：いや、背信行為をする輩でも、偶に その罪の意識を感じながら、信仰心を忘れない者が居るんだ。

それを、今のコイツからは感じ取れる。」

「：捨て切れて、ないだけです。」

ずつと、信じていたのですから：」

冷たい視線から、顔を逸らす様に答えるアーシア。

「そうか：：ならば、今直ぐに、私達に斬られるが善いだろう。」

そう言つて、ゼノヴィアは手にしていた長い荷物の包みを解く。

その聖刻が刺繍された布に包まれていた荷物：

それは、手に持つ柄以外、鏢の部分さえも刃の造りになっている、巨大な剣だった。

「今、神の名の下、断罪してやろう。」

如何に罪深い異端の魔女であれ、我等の神は、救いの手を差し伸べてくださる筈だからな。」

そう言つて、その刃の先をアーシアに向けた時、

「：ストップだ。」

その間に、シリユーが割つて入る。

その顔は決して、怒りの形相ではないが、鋭く厳しい物。

「アーシアは今、あくまでも形上だが、この俺の部下に位置している。

その彼女に刃を向けた以上、それは、教会：いや、天界は、この俺に刃を向けた：

即ち、この孜劉に喧嘩を売つた：

そう判断して善いのだな？

尤も：：今更撤回は認めないがな！」

：此処に、イリナが言う処の、要らぬ筈なトラブルのフラグが今、完全に成立した。





唸る聖剣！エクスカリバー！！

「そもそもアーシアの能力を見て、それで貴様達で勝手に『聖女』とやらに仕立てておきながら、それが悪魔ですら癒やすとなると、異端扱いの掌返しかな？」

巫山戯るな！！」

怒りの形相となり、シリユーが吼える。

「悪魔ですら癒やす能力を、我々 教会が異端と見なして、何が悪い！当然だろうな話ではないか?!」

これにゼノヴィアも言い返すが、

「…ならばーそのアーシアの能力を異端と見抜けず、10年近く聖女として祭り上げた者も当然、何らかの責任を取らされているのだろうか？」

まさか、彼女を追放しただけで、終わりでは在るまい?」

「ん、言われてみれば、その通りだし、そー言えば、責任とか処罰とかがって、そーゆー話って、聞いてないわよね?」

「お、お前も余計な事は言うなあ!!」

シリユーの言葉に対して肯を示す相方に、罰が悪そうに顔を顔を赤くして、ゼノヴィアが声を張り上げる。

「ふっ…所詮、宗教とは そんなもんさ。」

都合の悪い存在は、蜥蜴の尻尾の如く、正しくアーシアの様に切り捨て、都合の悪い事実は闇に隠蔽で事無きに持つて行く。

その上で、常に世間に対しては、自分達が絶対的に正しい存在だと、綺麗事だけを並べてアピールだ。

そして それを傲りと自覚せず、自分達だけが正義と勘違いして増長する…それが、教会の本性だ!」

「(ボソ…) あ…不味った…」

「(ボソ…) 部長?」

「(ボソ…) シリユー、アーシアの件で教会とかが大嫌いなもの、すっかり忘れてた…」

「(ボソ…) え、…?それでシリユー君、今日は ずっと ご機嫌斜め

な顔だったのね？

祐斗君は解るにしても…」

「(ボソ…) 何故、部長は よりによって、シリユー先輩を、あの2人の迎えに遣わせたのですの？」

「(ボソ…) だ・か・ら…忘れてたって言うてるでしょ!!」

留まる事を知らないシリユーの教会非難を見て、思い出したかの様に頭を抱え込むリアス。

失敗した…シリユー(…とアジアと祐斗)は、席を外させるべきだった…と悔やむが、それは既に遅かった。

「ちよつとキミ！」

そんな言い方は、ないんじゃない？

神と悪魔よ？どー考えてても、正義は私達に在るのは、明白じゃない?!」

シリユーの発言に、イリナが反論するが、

「神が正義…笑わせるな!!」

少なくとも『この世界』に於ける神と悪魔など、単なる種族違いではない筈だ!

今の一般的な価値観は、偶々、貴様達の遙か昔の先達による刷り込みが浸透しているだけに過ぎない!!」

「なあつ!!」

其れをシリユーは更に反論。

「そもそも貴様等、何様の心算だ？」

此処へは、教会からの意向を伝令しに来ただけではないのか？

悪魔側に位置している者を、斬り棄てようとした その軽はずみな態度、本当に天界は悪魔側に布告、貴様等は さしあたっての刺客と解釈されても、文句は言えんぞ!!

例え、この場で この俺に、返り討ちにされたとしてもな！」

「ちよつとシリユー！」

貴男が更に、場を掻き乱して どーする心算なのよ？」

「黙っているー！リアス・グレモリー!!」

「!!」

場を鎮めようと、リアスはシリューを窘めようとするが、その普段とは違う名の呼ばれ方にハツとする。

既にシリューはオカルト研究部の部員でなく、冥界の、魔王の『客』である、赤龍帝として、教会の寄越した使者と応対している事に気付く。

「(ボソ…) 止めないによ?」

「(ボソ…) 自殺願望があるなら、敢えて止めるの止めたりしないわ…」

「(ボソ…) 止めるの止めとくによ…」

「(ボソ…) 放任ですの?」

「(ボソ…) た、だって、仕方無いじゃないのよ!! (T|T)」

先程の、「いざとなったら全員で…」のアイコンタクトは何処へやら。

徐々に殺伐としていく空気の中、リアス達は少なくともシリューに對しては もう、何も出来ず、黙って見守るしかない中、

「シリューさん、私なら、平気ですから! 気にしていませんから! …だから!!」

アジアが勇気を出して、声を掛けるも

「…本当にアジアは優しいな。」

だが既に、アジアだけの問題では無い!

この孜劉、当人の心情がどうであれ、自分の下の者に刃を向けられ、それで黙っていられる程、腑抜けてはいない!!」

シリューには通じない。

「ふん…! 部下思いなのも結構だがな、返り討ちは大きく出過ぎじゃないか?」

気付いてないのか? この剣は、其処等辺の数打ちとは訳が違うぞ!

先の大戦にて砕かれた、エクスカリバーの破片を錬金術を以ってして鍛え直された7本の聖剣の1つ、【破壊の聖剣(エクスカリバー・デストラクション)】だぞ!

下級な転生悪魔如きで、どうにか出来る代物では無いぞ!」

「え…? 転s…ひいつ?」

改めてシリューに、聖剣の切っ先を向けるゼノヴィアの発した『転生悪魔』という単語にギヤスパーが反応、何かを眩こうとした時、893の眼光で睨まれ、その眩きは途中で止まってしまふ。

「成る程…そんな玩具（オモチャ）を与えられたから、それを自分の力と勘違いして、そんな自分だけが絶対正義の如くな、大きな態度に出られていた訳だ。まるで子供だな。」

尤も、そんな玩具が俺に通用するとは、思えないけどな。」

先程からの言葉の売買で、完全に頭に血が登っているであろうゼノヴィアの発言に対し、逆にガチギレ直前な状態からクールダウンに努めながらも、その内容自体は常に挑発的だったシリューの言葉に、

「き…貴様あー！人が大人しくしていれば、よくもヌケヌケと!!」

良いだろう、其処迄言うなら、表に出ろ！

貴様も、その魔女と一緒に断罪してやる！

この【破壊の聖剣（エクスカリバー・デストラクション）】でなあつ!!!」

「はあ…この脳筋（バカ）…」

脳筋（バカ）が1匹釣れた。

そして、

ボワアツ!!

「「「「「!!!」」」」」」

「ねえ、神崎君？」

その喧嘩、僕に譲ってくれないかな？」

「木…場…?」

今迄、ずっと教会からの2人を睨み付けているだけだった…その教会の者に対する感情から成る表情は隠せないも、殺気だけは必死に押し留め、沈黙を貫いていた木場が、その殺気を一気に解放、口を開く。「いきなり横から…何なのだ？お前は？」

「君達の先輩だよ…」

尤も僕は…失敗作らしいけどね…」



「はあ…何で、私迄…」

「うるさい！あの先輩とやらが、どうしても言うのだから、仕方無いだろ！」

旧校舎外のグラウンドで対峙する、教会の2人とシリュー…と木場。入り込んでいる顔のゼノヴィアの隣で、とほほ…な面持ちで溜め息を吐くイリナ。

衝突已む無しな空間に割って入ってきた、先輩を名乗る木場を見て、それならばと（ゼノヴィアの勝手な仕切りで）、2 v s 2の勝負の運びとなる。

「もう、仕方無いわね！」

そう言って、イリナが左腕に結んでいた紐を解くと、それは日本刀を思わせる剣へと形を変えた。

「じゃくん！これが私の、【擬態の聖剣（エクスカリバー・ミミック）よ！」

そう言って、先程の やる気の無さが嘘な如く、ノリ気な表情を見せ、聖剣を構えるイリナ。

どうやら彼女は、武器を手にすると、スイッチが入るタイプな様だった。

「おい、リアス・グレモリー。」

これは私的な決闘で、教会も悪魔側も関知しない。

我々は事を大きくする心算は無いし、お前達も同じ認識という事で良いな…」

「あゝ、はいはい…」

自分から喧嘩売っておいて、よく言うわ…

その台詞を我慢し、もう勝手にしろ…とばかりな、呆れ顔でリアスは応える。

寧ろ心配なのは、

「え…と、シリュー…さん？」

あんまり、怪我させないように…ね？

それから祐斗も、無茶しては駄目よ！」

「了解ですよ、リアス部長。」



「きゃっ!?!」

刀身から炎が吹き出る剣を木場が振るうが、それは冷静さを失っている大振り故か、イリナはバックステップで簡単に回避。

そして それと同時に、

「シュッ!」

距離の空いた位置から、自身の聖剣を大きく振るう。

S H A A A A !!

「何っ!?!」

すると その刀身が長く延び、鞭の如く蛇の如く、或いは新体操のリボンの如く、撓りながら木場に迫ってきた。

バシイッ!

「っ…!!」

この攻撃を炎の剣で受け止めるが、その衝撃で剣を手放してしまう木場。

「どくう?これが私の聖剣、【擬態の聖剣(エクスカリバー・ミミック)】よ!

どんな形にでも、ある程度は自由自在!

どうする?降参する…って、その顔、そんな気は無いみたいね?

それなら、イケメン悪魔2号君?

神の名の下、この聖剣に滅されなさい!

アーーーーメン!!」

S H A A A A !!

イリナの口上と祈りの前、丸腰となった木場に再び、【擬態の聖剣(エクスカリバー・ミミック)】の刃が波を描く様に襲い掛かってきた。

ガシイッ

「へ?」

それは木場の手の中で新たに作られた、氷の剣に受け止められる。

「炎の次は氷の剣い!?!」

キミって、複数の神器持ちだった訳?」

驚きの表情なイリナに、木場が答える。





「きいっつ貴様あつ!!巫山戯るのも大概にしろおおつ!!」

聖剣を横向きに構え、怒りの形相からのダツシユで間合いを詰めるゼノヴィアに、

「巫山戯ているのは どっちだ!？」

そんな、鈍（なまくら）な玩具がエクスカリバーだと？

貴様こそ、巫山戯るのは大概にしろ!!」

ポケットから両手を出し、この決闘、初めて戦闘の構えを見せたシリユーが吼える。

「死いいねえええええつ!!」

斬!!

ドサアツ!

ゼノヴィアの、気合いの入った掛け声と共に、破壊の刃がシリユー目掛け、勢い良く振り降ろされるが、

「な…う…ば、馬鹿な…!?」

その次の瞬間、【破壊の聖剣（エクスカリバー・デストラクション）の刀身は根元から、シリユーの繰り出した右の手刀によって断ち斬られ、重い音と共に地面に落ちるのだった。

唸る聖剣！エクスカリバー！！②（仮）

「ばばば…バカな!？」

聖剣だぞ？エクスカリバーだぞ?!

下級の転生悪魔如きが、生身で どうこう出来る代物では無いんだぞ?！」

刃を徒手で斬り落とされ、柄だけとなった「破壊の聖剣（エクスカリバー・デストラクション）」を握り締め、それをわなわなと見ながら、狼狽えるゼノヴィアに、

「余所見をしてる暇が有るのか?！」

ドガアツ!

「うぐがっ!!」

シリユートの追撃の右の拳が、鳩尾に炸裂する。

「かほっ…かほかほ…」

膝を着き、咳き込むゼノヴィアに対し、

「立て！教会の、聖剣の使い手様とやらは、その程度か?!」

女相手にも一切、攻撃の手を緩めない（一応、手加減は している）シリユートの猛追は終わらない。

バゴツ!

「うつわああっ!!」

今度は顔面への掌打を撃ち放つ。

その威力で、吹き飛ばされ、校舎の壁に打ち付けられるゼノヴィア。

「う…う…う…」

馬鹿な…私は、教会の戦士…だぞ?!

あんな、下級悪魔如きに…」

既に実力差は明白。

それでも それを否定するかの様に、フラフラと立ち上がりながら、

「うがああああああっ!!」

そんな事が赦されて、たまるかああ!!!」

ゼノヴィアは改めて憎悪剥き出しで、シリユートの姿を刮目すると、



そう…お前が振りかざして満足している玩具とは違う、真のエクスカリバーがな!!」

ゼノヴィアの疑問にシリューは、嘗て互いの信じる正義の下に敵として戦い、そして共通の正義の下に共に戦った男の事を少しだけ語ると、

「お喋りは お終いだ!」

今度は此方の番とばかり、ダツシユからの回し蹴りで、先程、「破壊の聖剣（エクスカリバー・デストラクション）」で穿かれたクレーターの中心部にゼノヴィアを吹き飛ばし、追撃とばかりに更なるダツシユ。

それに対してゼノヴィアは、素手の…ボクサー系の構えで迎撃姿勢を取る。

…が、

「今迄、聖剣という玩具を与えられ、それに頼っていた者が今更、俺に素手で太刀打ち出来るとでも思っているのか!

そして この攷劉、あの様な玩具に頼らずとも…でええいやあああつ!!!」

DOGGOOOOOOOOHN!!

シリューは相手の身体…ではなく、その足下に拳を放つ。

「うわあああつ!!」

その一撃は地を砕き、先のクレーターを消してしまう程の、巨大なクレーターを上書きする様に作り上げた。

「な…何ですの?!」

「前にシリュー君が言っていた、『せいんとの拳は地を砕く』って、あれは比喩なんかでは なかったのね…」

「す…凄いですう!!」

「…によ!」

その破壊力には、身内も驚愕。

「逃がさん!」

そしてシリューは、その衝撃で上空に打ち飛ばされたゼノヴィアを追う様に跳躍。

背後を捕り、相手の両脇の下に足の爪先を引っ掛けると、その場、空中でのバク転の動きから繰り出される投げ技を放った。

どん!!

「きやああっ?!」「うわっ!!」

そしてゼノヴィアは、木場と鏢迫り合いをしていたイリナと激突。

「あ痛たた：：な、何やってんのよ!」

「う、うるさい!」

【擬態の聖剣（エクスカリバー・ミミック）の糸状の刀身を、蛇の様に動かして木場を牽制しながら、ゼノヴィアに詰め寄るイリナ。

しかし、目の前の敵から視線を逸らしたのは、結果から言えば失敗だった。

「覇ああっ!!」

「しまっ：：!?!」

パリン…

騎士（ナイト）の加速を最大限に活かした、木場の速攻。

不規則に蠢く聖剣の刃を交い潜り、手にした黒い刃が、聖剣の柄に埋め込まれている緋色の水晶の様な宝玉を破壊。

それによって、空中で生物の様に動いていた刃は、ダラリと地面に落ち、動かなくなる。

「木い場あつ!!」

一気に決めるぞ!ぶちかましてやれ!!」

（Boost!!）

「神崎くん?ん：：分かった!」

其処に、何時の間にか、左腕に赤い籠手を纏わせたシリユーも飛び込む。

「はあ!?あ、あれは、まさか…」

「赤龍帝の籠手?…って、赤龍帝!!!」

その籠手を見て、完全に動きと思考が止まる、教会の戦士達。

「【赤龍帝からの贈り物（ブーステッドギア・ギフト）!」

（Transfer!）

「【魔剣創造（ソードバース）!」

2人並び、それぞれが地面に籠手を当て、魔剣を突き刺し、魔力を解放。

赤龍帝の籠手の特性の1つである『譲渡』の作用が働き、これにより強化された木場の神器は、グランド一面に剣山の如く、無数の魔剣の刃を創り出す。

「ぎゃあああああつ!!」

そして武器を失い、守る術も逃げ場も喪ったゼノヴィアとイリナは、その身を巨大な漆黒の刃に貫かれた。

「す…ストップ!」

其処迄よ、勝負在った!!」



「うう…」「くつ…」

「大袈裟だなあ…急所は外してあげたのに…」

「伝言も終え、オマケの茶番も終わったんだ、さっさと帰ったらどうだ?」

血塗れになって蹲る2人に、騎士と赤龍帝が冷たく言葉を浴びせる。

タツ…

そんな2人にアジアが駆け寄るが、

「待てアジア!何をやる心算だ?」

「!?!」

シリユーが それを制止。

「え…と…2人の…治療を…」

「駄目だ。」「えっ?!」「…?!」

自分の神器、【聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）】による治療すると言うアジアだが、シリユーが止めた。

ザツ…

そしてシリユーが代わりに、教会の2人の目の前に立ち、

「…さて、この赤龍帝の部下であるアジアが、君達の傷を癒やすと言っているが、どうする?」

君達は受け入れるかい?

正義な教会様（笑）が追放レベルに異端視した、アクマノキズサエモカイフクサセル、マジヨノホドコシヲ？」

最大限の皮肉を込めて尋ねてみた。

「ふっ巫山戯るな！誰が、魔女からの情けを…っうっ…!!」

「…だ、そうだ、アジア。」

「……………」

それに対して痛みを我慢してるのが丸分かりな表情で、ゼノヴィアが怒鳴り散らす。

そして無理矢理に体を起こすと、

「か…帰るぞ…イリナ…」

「う…ん…」

やはり、ボロボロとなった体を無理に起こしたイリナと、その場を去ろうとするが、

「戻ったら忘れずに、トップに伝えておけよ？」

悪魔とは関係無く、教会…天界は、この赤龍帝の敵となった…とな  
！」

「な…?!」

其処にシリユーが、更なる追い打ちな言葉を投げかける。

「ど…どうして…?」

「自分達で原因を作っておいて、忘れたとでも言うのか？」

アジアに刃を向けた…それは、この赤龍帝に刃を向けたに等しい行為だろ？」

「そ、それは…キミ…貴方が赤龍帝だったって知らなかったし、貴方だって名乗らなかつたから…」

「名乗る必要も無ければ、知らなかつたで済む問題でも無い！」

在るのは教会の者である貴様達が、この赤龍帝の目の前で、俺の部下であるアジアに刃を向け、貶めた事実だけだ!!」

元々、アジアが教会を追放された経緯を知った時から、教会…天界に良い印象を持っていなかったシリユー。

今回の2人の態度で、それが矯正不可となってしまうたシリユーは、このイリナの言い訳じめた言葉を、完全に遮断する。



「俺が赤龍帝を名乗ってれば、アーシアが赤龍帝の部下と知っていたら、あんな非礼は働かなかつたとしても言いたいのか？」

それが通用すると思うのか？」

「そ…それは…」

「おい、ゼノヴィア…だったか？」

貴様は先程、自慢の玩具を見せた時に、それが聖剣だと見抜けないのか云々と言っていたが、貴様も俺を、部長の下僕の転生悪魔だと勝手に思い込み、その内面を見抜けなかった…

残念だが俺は…アーシアもだが、常人の持たぬ能力を持つてはいるが、一応は まだ『人間』なんだよ。

自分は偉いと勘違いしたか、自分は強いと勘違いしたかは興味は無いが、目の前の相手の正体や力量を測り損ない見抜けなかった、お前達の自業自得だ。」

「~~~~~!!」



パシイン…!

「……………」

イリナとゼノヴィアが学園から去った直後、怒りに奮える涙顔なアーシアの右手が、シリューの左頬を打ち抜き、それを敢えて避ける事無く、シリューは受け入れた。

「シリューさん、いくら何でも、あの態度は酷すぎです!!」

「……………」

あの子の、2人揃って土下座しての許しの懇願も、「下っ端の謝罪は話にならない」とばかりに、冷たく撥ね退けたシリュー。

「アーシアちゃん…シリュー君は、アーシアちゃんの事を思っ…」

「…それでも…」

「……………」

朱乃のフォローも、アーシアは聞き入れられない。

自分の為…それは、充分過ぎる位に理解出来ているのだが、それでも それを納得出来ない程に、この聖女は優し過ぎた。



それなら、お任せします。

それと、今後の指示も、直ぐに請うべきですね。

あの2人が、教会に、まともに報告しない可能性もありますし、仮に報告を受けたとしても、その後に教会が、適切な対応をするとは思えない。

そもそも、聖書に名が記されている程の墮天使の対処に、あの程度なレベルの者しか寄越さない組織ですからね。」

「何気に教会、デイスってるわね…」

一通りの お話とOHANASHIの後、部室内で改めて、リアス達と今回の件について話していたシリュー。

「そう言えば、木場が、あの2人に先輩って名乗っていたけど…」

「あ…それは…」

シリューの振りに、リアスは若干困り顔で、木場に目を向けると、コクン…

木場は無言で頷く。

「ん、まあ、本人の許可も降りたなら言うけど…」

シリュー？ 貴方、教会の聖剣計画については…わ…分かった…知ってるのは分かったから、思い出したかのように、不機嫌全開な怖い顔するのは止めて…」

「僕は…その計画の、生き残りなんだ…」

「「「「「」」」」」」

この木場の言葉に、リアスと朱乃以外の、計画そのものを知っている者が、驚きの顔を見せる。

「しかし、あの計画の被験者は、全員処分されたって…?」

「私も、その様に伺っていましたわ。」

「ん…それなんだけどね…」

「部長、この先は僕の口から、話させて下さい。」

「祐斗、良いの?」

「ええ、良い機会だし、やっぱり皆には…ちゃんと知っておいて欲しいんだ…」

## 聖劍計画

聖劍計画…

それは天界陣営が秘密裏に行っていた、聖劍に適応した者を、人工的に輩出しようとした計画。

大昔、悪魔、天使、墮天使の3大勢力の衝突で起きた戦争の時に折れてしまった、聖劍エクスカリバーの破片を集め、錬金術により新たに造られた、7本の聖劍を扱える能力者を作り出す計画。

「…結局は、当時集められた者は皆、処分されたよ。」

『失敗作』と云う烙印を押されてね。」

「木場…」

「被験者は、剣に通ずる才能や、僕みたいな【剣】系の神器を持った子供達だった。」

特別な存在になれると言う言葉を信じて、毎日の辛く非人道的な、過酷な訓練や実験にも、皆、耐えていたんだ。

皆で励まし合い、訓練が終わった後の事を、皆で夢見ながら話していたんだ。

(中略)

…その結果が、処分だよ？

皆…皆、死んだ。

当時の僕よりも、幼い子も居た。

女の子だつて居たんだ。

それが皆、神に仕える者に、神の名を語る者に殺された…。

ははは…『聖劍に適応出来ない失敗作』。

たった、それだけの理由でね!」

「木場きゅん?」「祐斗先輩?」

「僕だけが、他の被験者に守られ…皆から、『自分達は駄目だから、君(ぼく)だけでも生きて』って助けられて、研究機関から逃げ延びて…それでも既に瀕死だった僕を拾って…救ってくれたのが、リアス部長なんだ。」

皮肉な話だよ…救ってくれたのは、神様なんかじゃなくて、悪



「だから、OHANASHI…です。」

「ミルたん・セントエルモスファイヤー!によー!!」

「あつー……!!?」



「そんな…信じられません…」

教会が まさか、そんな酷い事をしていたなんて…」

木場の聖剣計画に関する話を聞き、一番驚いているのは、やはり  
アジアだった。

「仕方無いですわ…察するに、アジア先輩は、追放される迄、教会の  
綺麗な部分しか見ていない、いえ、見せられてなかったんですから。」  
「うう…僕達悪魔よりも、悪魔な所業ですう…」

前から計画の事は知っていたレイヴェル、そして、アジア同様に  
初めて計画の存在を知らされたギヤスパーも、顔を歪める。



「とりあえず聖剣やコカビエルの件は、シリユーが教会とトラブった  
件も含めて、お兄…魔王様に報告したから。」

さしあたっては指示待ちね。」

「「「「「はい。」」」」」」

「それじゃ、今日は もう、解散にしましょ。皆、お疲れ様。」

リアスの一言で、今日の部活は お開きになったが、  
「……………」

「シリユー先輩?まだキレてますの?」

肉体言語によるOHANASHIから、漸く復帰したシリユーが、  
再び仏頂面になっていた。

「ん、キレてるって言うか、思い出し笑いの怒り版みたいな…」

「…つまり、キレてるんですのね?」

「あ、く、スツキリしねー!」

バツティングセンターにでも寄って、憂さ晴らすか?」

「シリユー先輩、お供します。」

実は私も、ぶっ放したい気分なんです。」

「それ、僕も御一緒しても、良いかな?」



「は…はい！特に、喋ってる途中で、興奮した余りに口が滑ってしまい、被験者の中に初恋の女の子が居た話とか、絶対に誰にも言ったりしませんから!!」

「あ…うん…アーシアさん、本当にお問い合わせするね…ははは…」

木場が語っていた、計画の凄惨さとは別枠な、当時の同僚達との交友の話の思い出し、顔を僅かに赤くしたアーシアに、木場は苦笑しながら念を押す。



そして、翌日の放課後、

「木い場あく！お、お前も凄く辛い思いをしてきたんだな〜!!」

「木場君、寂しくなんてないからね！」

オカルト研究部だけでなく、生徒会の皆も、君の味方だから!!」

「今迄お前の事、苦勞知らずのイケメン野郎って、そんな印象しか持っていなかった俺が恥ずかしいぜ！」

「え？」

「何か困った事があつたら、何時でも言つてね！何でも協力してあげるから!!」

「そんな お前に、俺の野望（ゆめ）を教えてやるぜ！」

「え？ええ??」

部室へと向かっている木場に、匙と生徒会副会長の新羅椿姫が、号泣しながら一気に喋り掛けてきた。

「ちよ…匙君？新羅先輩？それ、誰から聞いたの？…それと、何処迄聞いたの？」



この後、オカ研部室に、

ガラッ…!!

「か、神崎君っ!!」

それと、小猫ちゃんは居るかいつ!!？」

「ゆ、祐斗?」「あ〜らあらあら?」

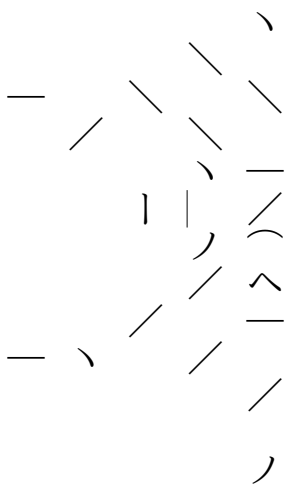


「あわわわ…シリユ―先輩と小猫ちゃんなら、アーシア先輩と一緒に、森沢さん家に仕事（あそび）に行きましたあ…。」  
「きょ、今日は3人共、部室には戻らず、其の儘直帰するって言ってきたわ…。」

両の手には勿論、背中にも無数の魔剣を携え、先日 教会の使いが訪ねてきた時以上の修羅な形相を真つ赤にさせた木場が、姿を見せたと云う。







「……………」。

あゝ、行きたくねえゝゝつ!!」



ガラ：

「ゝつす。……………!?!」

翌日、シリユーが部室の扉を開けた時、真っ先に眼に映ったのは

「ふみや…(〽〽〽)」

ギャグマンガみたいな大きな たんこぶを頭に作り、うるうるな半泣き顔で床に正座している小猫と、

「やあ、おはよー、神崎君。」

とりあえず君も、正座しようか？」

ハリセンを片手に、闇を孕んだ、優しく爽やかな笑顔で話し掛けてきた木場だった。

「……………(。O。L)……………!?!」

助けを乞うように、既に来ている部員達に目を向けてみるが、

「……………( ? | ? )……………」

その全員…アシア迄もが、我関せず、或いは、自分を巻き込むなとばかり、視線を逸らす。

そして その数秒後、

すぱかー！ー！ーん!!

「ぐはあっ!!」

甲高く乾いた音が、旧校舎に鳴り響いた。



「…そんな訳で、天界からの返事は まだ来ていませんが、もう天界の不介入要請は無視して、悪魔（わたしたち）は私達で、コカビエルや

それに与する者、そして奪われたと云う聖剣の捜索に着手せよと、魔王様から正式に指令が下りました。

オカルト研究部、生徒会が連携して町を探索、互いに連絡しあい、何か有れば、私かりアスに報告して下さい。」

「……はい！」

一緒に部室に集合していた生徒会執行部、会長ソーナの号令の下、オカ研と生徒会メンバーは3〜4人のグループに分かれ、町中に情報収集へと繰り出して行った。



「やはり先輩の予想通り、あの2人、上には報告してないみたいですね。」

「ちい…報連相すら、碌に出来ないのか？アイツ等は!!？」

只でさえ雑魚の癖に、得物も無いのに、どうにか出来る心算なのか?!」

「……………」

「よーし、神崎〜？落つ着け〜？」

「はい先輩、ちくわパンあげますから、機嫌直して下さい。」

ぶちキレ気味な男を宥めながら、町内を見回っているのは、匙、アジア、小猫、そしてシリユーのグループ。

「そりや、『赤龍帝に喧嘩売って、天界毎敵に回してしまい、ついでに聖剣も、再生不能レベルに破壊されました』…なんて、言えないわな…」

「…と、なると、教会にも戻らず、雲隠れしか無いだろうが…」

「…少なくとも、この町からはもう、出て行ってるでしょう。」

「…ですよねー。」「……………」

まだ、町に居ようものなら、敵として捕まえ、知っている情報を搾り出すのも有りだが、もう自分は兎も角、アジアに あの2人を遭わせたたくないとも考えていたシリユー。

この町から消えてくれたのなら、それはそれで、好都合だったのだが…

「…あ」「え…」「ん？」「へ？」

「……………」

「よ…よお、アーシアに小猫ちゃんに…神崎と匙？」

あ、こっちのイリナはさ、実は俺の幼馴染みで…」

昼食でも取ろうかと、偶々 目の前に在ったファミレスに入ってみると、アーシアのクラスメートの男子が、件の2人と同じテーブルに着いていたのだった。

「……………」

「さつき、ばったりと会ってさ、飯でもって誘つて…神崎…？」

「……………」

罰の悪そうな顔の2人を見て、苦虫1000匹噛み締めた様な顔になるシリユー。

「ほれ、神崎、行くぞ。

あ、店員さん、アツチの奥のテーブル、4人座りますね。」

「さ、さあ、シリユーさん！」

「ごっちですよ。」

「お…応…」

この場合は気不味い雰囲気を感じた匙達、シリユーの背中を押す様に、店の奥に連れ出して事無きを得る。

《—————》

「神崎い…お前、ホントに機嫌直せよ？」

ほれ、唐揚げ1ヶ、やるからよ？」

「シリユー先輩、私もオムライス、分けてあげますから。はい、あくん？」

食事しながら、不機嫌モード全開なシリユーを何とか宥めようとする、匙と小猫。

「いや…別に、もうキレてないから。」

そんな2人に対し、大丈夫だと切り返すシリユー。

「あ…あの…」

「「「？」」「」」」

この やり取りの中、紫藤イリナがやってきて、声を掛けてきた。 「…私達に、何か用ですか？」

私達には事に介入するとか言って於きながら、そっちから声を掛けてくるなんて、とんだブーマランですね。」

「う……」

それに応じたのは小猫。

恐らくはシリユーに対応させると、尚更に場が拗れるだろうから、その前に自分との判断だろうが、その話し口は痛烈其の物。

「その…謝り…に…」

「何に…ですか？」

「…そちらの赤龍帝さんに、非礼な真似をした事に、ついて…」  
ぷち…

その台詞に、小猫が弾ける。

「何ですか、それは?!」

先に、アーシア先輩に対しての無礼を謝罪すべきではないのですか?!

それとも そっちの方は、未だに謝る必要性が無いとでも言いたいのですか?!」

「そ…それは…その…」

小猫の迫力有る問い詰めに、たじろぎ、何も言えなくなるイリナ。

「こ、小猫ちゃん、もう良いから!」

「いえ、言わせて下さい、アーシア先輩。」

この前は、シリユー先輩と祐斗先輩が暴走したので敢えて黙っていましたが、私だって大切な仲間を、大好きな先輩を貶められて、凄く悔しかったんですから!」

「こ…小猫ちゃん…」

このアーシアの制止も跳ね返し、小猫の口撃は止まらない。

「大体 何故、アナタ達は、こんな所で昔の お友達とやらと、呑気に食事なんかしてるんですか？」

アナタ達に与えられた指令は、そんなに緩い物なんですか？

そもそも、あれから2日も経っているのに何故、まだ この町に居るんですか？

自慢のエクスカリバー（笑）を喪った今、アナタ達は戦力的に役立

たずな筈。

それでも何とか出来ると言うなら、さっさと任務完了させて、出来ないのなら後続に任せて、この町から去るべきじゃ、ないんですか？  
とゆうか とりあえず、今直ぐに目の前から消えて下さい。」

「な…何よ、悪魔の癖n…!？」

「悪魔の癖に…何だ？」

「…!!」

小猫の齒に衣着せぬ言葉責めに、言い返そうとしたイリナだが、同じ席に着いていた約1名の身体全体から急遽迸る、凶悪な殺気を感じすると その言葉を慌てて途中で飲み込み、泣きそうな顔になり、

「こ、ごめんなさい!!」

一言だけ残すと、走り去って行った。

「全く…火に油の天才だな…」



「「あ…」「」「あ…」」

食事の後、シリユーが墮天使と云えば…と、思い付いた様に、以前、墮天使レイナーレ達と戦った、町外れの廃教会に向かってみると、木場、ギヤスパ、そして椿姫のグループと鉢合わせた。

「お前達も…かよ…」

「うん。元は墮天使が活動拠点にしていた場所だからね。」

何か手掛かりが…と違ってね。」



ギィイ…

重い音を発て、廃教会正面の大扉が開く。

そして その奥に、合流したシリユーと木場のグループは入り込んで行った。

「まさか、また此処に入り込むとはね…」

「賊が潜むには、打って付けですね。」

「灯りは無いのでしょうか？」

窓も無く、照明の無い建物の奥、その中を突き進む7人の少年少女。

「うう…何だか怖いですう…」



「…へたれヴァンパイア。」

ギャー君、怖いなら帰っても良いですよ?…此処から1人で。」

「うわあああん!小猫ちゃん、いぢめるう!!」

地上階を一通り見回り、隠し階段からの地下フロアへと足を運び、進んで行く中、小猫とギヤスパアの普段のやり取りが行われる最中で突如、異変は起きた。

「…ひゃつはー!ー!ー!ー!ー!ー!!」

糞悪魔御一行様、発つ見んくくく!!!」

「!?!?!?!」

ぶうん!

暗闇の中、響く奇声と共に、先頭を歩いていた木場に、銀色に光る刃が襲い掛かってきたのだった。

ガキイツ!

「く…っ!!」

「ほっおっう、よく受け止めたああ〜!」

咄嗟に魔剣を創り出し、それをガードする木場。

「お…お前は確かか?!」

「おっつとつとつとおっい!」

俺っちの事、覚えていてくれた?

嬉っしいくねえ〜!!」

「確か、フリード…だったかな…?」

「そ…のっ、通おーっり!!」

こ…の・俺が・フリード・ゼルデン様よ〜!

余りにも嬉しいから、お札にぶっ…殺してやるよ〜!!

なあ?赤龍帝えくえい!!」

## B e l l o ・ C a n c r o

「その剣…まさか…聖剣か？」

「いいぐざくとうりい〜い！」

「そうでえ〜す！」

ボスと一緒に教会からパクっちゃった、聖剣・エえっクスクわあり  
ブワ〜あ！様にて御座いま〜すでっすう！！」

フリードの持つ、白銀の剣から発する【氣】に、本能的に不快を感じた木場が質問すると、それに勿体振る事無く、且つ、人を虚仮にしているとしか思えない口調で、聖剣だと答えるフリード。

「あひやひやひやひやひや！」

廃教会（ここ）に居りや、その内に糞教会の奴等か糞悪魔が釣れる  
とは思って張ってたが、まっさかソレが、この前のテメー等…しっ  
かーも！糞赤龍帝も一緒とわなあ！

俺っちツイてるう！！

一部、知らないヤツも、混ぜってまっすけっどお？」

「っ…!!」

キーン…

絶叫しながらのフリードの白銀の刃と木場の漆黒の刃が、再び交差  
する。

「木場、気を付けろ！」

その聖剣、悪魔（オマエ）達は掠っただけで、大ダメージだぞ!!」

「木場！」「木場さん！」

「木場君!!」「祐斗先輩！」

「皆、手助けは無用！下がってて！」

加勢しようとする一同に、それは不要だと制する木場。

尤も、加勢しようにも、場は狭い通路。

多人数での太刀回りが出来る広さは無い。

「ライン！」

…故に、助太刀の方法は、限られていた。

匙が左手に発動、具現化させた黒い蜥蜴を象るかのような手甲型の神

器の先端から、やはり蜥蜴の舌を連想させるパーツが鞭の様に伸び、シユル…

「な、何ですかあ？これわああ!?!」

それがフリードの、剣を持っていた右手に巻き付き、動きを封じる。直ぐ様に剣を左手に持ち替え、この『舌』を切断しようとするフリードだが、

カシッ

「…って、斬れないし?」

「残念！ソイツは ちよつとやそつとじゃ斬れないぜ！

木場！お前も正々堂々とか拘ってんな！

良ーから早く、殺っちまえ!!」

「仕方無い…そして、有り難い！」

予想以上に硬かったのか、それは適わず、苦笑する木場に絶好の隙を与えてしまう。

しかし、

「遅っせえ!!」

キーン…

「な…?」

木場の、【騎士（ナイト）】の駒の特性を活かした高速の斬撃を、フリードは容易く受け止める。

「くきやきやきや！『速さ』で勝てるんでも思ったってか？糞悪魔あつ!!」

この【天閃の聖剣（エクスカリバー・ラピッドリイ）】になあ!!」  
斬！

「うつく…!?!」

「木場あつ!!」 「祐斗先輩！」

遂に その聖なる刃が、木場の胸元を横一文字に掠め、膝を着かせ、  
「邪あ魔っ!!」

スパッ…

「あっ?!」

匙の左手から伸びていた、神器の舌も、精神を集中させ、剣に宿る

【聖氣】を解放する事により斬り裂いた。

「トつドメくえいえい!!」

「…!!」

そして聖剣を両手持ちで頭上高く構えたフリードは、目の前に倒れている木場の脳天目掛け、一気に振り降ろすが、

ガン!

「…でっすよね〜?」

そうじゃないかと、思っていましたあく〜!

「そりや…どーも!!」

(Boost!!)

シュツ!

「おわつとおう!!?」

間髪入れずに両者の間に入り込んだシリューが、左腕の赤い籠手で、その刃をブロック、続け様にサイドキックを放つが、これはバツクステップで躲かれてしまう。

「しやつああおう!!」

ダツ!

だが、その次の瞬間には、狂気に歪んだ嗤い顔で、フリードはシリューを新たな獲物と認識したかの様に、突撃を仕掛ける。

「ひやはは〜い!」

俺っちの剣の才能と、この【天閃の聖剣（エクスカリバー・ラピツドリイ）】による加速!

それ即ち! MU・TE・KI・なんだよ!!

おうら赤龍帝えい! 腸ぶち蒔けて、死ねさせやあ!!」

そう言いながらフリードはシリューに対し、右からの斬り上げを狙う。

斬!! カラーン…

「な…何ですとおくつ?!」

「あ…うん…だ、よね…」

「…はい。」

「そんな風になる予感は、してました。」「僕もですう。」

「おおぅう!! (パチパチパチパチ)」

「す…凄いい!!」

…が、【天閃の聖剣（エクスカリバー・ラピッドドリイ）の一撃は、カウンター気味に放たれた、シリユウの右の手刀で、呆気無く斬り落とされた。

残された柄を見ながら、信じられない顔のフリード。

それを驚く事無く、想定内として平然なオカ研部員。

そして、事前に予備知識として聞いてはいた為、改めて それをリアルに見て、感嘆と喝采な生徒会メンバー。

「おっ前えく、オカシクねーか?」

お前っ今、聖剣を叩き折ったでなくて、斬っただろ?

左手の籠手でつてなら まだ納得出来るが、普通通りの生身の素手チョップでコレって、ちよつと有り得ねーぞ?!」

ビシイッ!

柄だけとなつた聖剣を向けながら、シリユウに問い詰めるフリードだが、

「単に その玩具の斬れ味よりも、俺の手刀が勝っていた。只、それだけだ!!」

バキッ!

「ぐへへー!!」

ダツシユで間合いを詰められたシリユウに、その返答と共に右の拳を顔面に浴び、その場にダウンしてしまう。

それに追い打ちを仕掛けるシリユウだが、

プツシユワーっ!!

「うお?!」

「えっ?!」

「汚っ!!」

「おおっ?!」

「な…?」

どうやらフリードは、先程の右拳で口の中を切っていたらしく、立

ち上がり様に、口内に溜まった血をシリュー目掛けて毒霧の如く噴射、その予想外の攻撃により、怯んだ一瞬の隙に距離を取り、

「…ならば お次は、この『夢幻の聖剣（エクスカリバー・ナイトメア）』で、今度つこそ首ちよんばしてやっからよ〜!!」

スチャ…

脇に携えていた、もう1本の聖剣を構え、戦闘続行の意思を見せた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「あの時の、はぐれ悪魔祓い…ねえ…」

「すいません。せつかくのの手掛かりだったのに、逃がしてしまいました。」

「いいえ、皆が無事で良かったわ。」

…その後、フリードの2本目の聖剣も俺が速攻で斬り落とし、更に取り出した3本目の聖剣の登場と共に、バトルは仕切り直しになるかと思えば、あの狂神父、距離を開けた睨み合いの中、懐から取り出した煙玉を炸裂。

自身の真横の位置にあった隠し通路…即ち抜け道から撤退、あの戦闘中毒者（バトルジャンキー）も、流星に不利だと判断したのだろう、俺達からすれば、まんまと逃げられた形となってしまった。

木場の負傷をアーシアが治癒した後に、廃教会の外に出た俺達は、リアス部長に成り行きを報告、直後に部屋に戻る事に。

「…その前に、これも偶々ですが、あの教会の2人組とも会いましたが、教会本部にはシリュー先輩とのやり取りの報告もせず、任務放棄している感がありました。」

「ん〜、お兄…魔王様からも、その件について、天界サイドからは何も言っていないって言うてるし…どうする気かしら？」

もしかして、本当にシリュー…赤龍帝を敵として見る心算なのかしら？

「まあ、報されてないなら仕方無い。」

教会の…特に戦闘要員は知らない儘に、敵として死んで貰うとするかな?」

「ちよ…シリユー?」

「…冗談ですよ。」

「本当に…? (?!?)」

何ですか? その目は? 信用して下さいよ。

…理由、経緯をきちんと説明した上で再起不能手前迄に痛めつけて、改めて あの2人の代わりに、『天界は赤龍帝の敵になった』とメッセンジャーに なって貰うさ。

一番最初の奴だけはね。

…と云うのは、部長に言っていると、また話が ややくしくなるから、黙っておく。

…その後の話し合いで、あの廃教会も放置するのは芳しくないとして、グレモリー家が不動産業者を介して買い取り、建物の外から地下から、一度、全てを完全に取り壊す事に決定。

その後、来年の3月には高等部を卒業する部長や朱乃先輩の為に、オカ研…というか、リアス・グレモリー眷属の第2拠点的な建物を建てる運びとなった。

教会跡地に悪魔の拠点…ですか…

この日は、他の戻ってきたメンバーからの一通りの報告の後、明日も今日と同じ時間に この場所に集合と決定した後、解散となった。



その日の夜。

「この店…か…」

シリユーはロングコートにシルクハット、あの墮天使ドーナシークの様な格好に、更にマスクとサングラスな、結構 胡散臭さ満載な出で立ちで、駒王町の駅前にある、1軒のバーの前に立っていた。

「全く…高校生を、こんな店に呼び出すなよ…」

6月下旬にしては、やや季節外れな格好でボヤキつつ、店内に入っていくシリユー。

前日の夜、シリユー宛てとして森沢を介して受け取った、悪魔契約

者からと思われる手紙。

それには、この時間帯、この店で待つという内容が書かれていた。日付が書かれてなかったのは恐らく、この手紙の主は、毎日この店に通っているのだろう。

「ベッコ・カンクロ…何者だ？」

手紙本文の最後に記されてあった、差出人の名前：Bellio・Cancroという名前には、まるで心当たりが無い。

しかし、間違い無く自分を知っている人物という確信だけは有る。何故なら この手紙の文章は、ギリシア語で書かれていたからだ。

「俺を、聖闘士だと知っているとしか思えん…一体、何者なのだ？」

ギイ…

扉を開けてみると、それなりに小綺麗な店の作り、場所的にも時間帯から、それなりに客で賑わっているもおかしくないのだが、店内には扉正面のカウンター席に1人、背の高い、白髪混じりの金髪の男が座っているだけだった。

「ふう…漸く来たか…」

「……………」

扉を開ける前から、店内には誰も居ないのは、実は予測出来ていたシリユー。

常人ならば、無意識に足を遠ざける、人払いの結界が張られていたから。

最初から店内に居たのであろう、カウンターの内側の店員は、まるで催眠状態の様な虚ろな眼をしている。

クイ…

そしてカウンター席の男は、手にしていたグラスの酒を飲み干すと、椅子をクルリと回転させ、シリユーに顔を向ける。

この、鋭い目をした初老の男は、シリユーの顔を見るとニヤリと笑い、話し掛ける。

「久しぶりだな紫龍…いや、今は、孜劉…だったかな？」

「な…お前は…まさか…?!」











「……………」

「だから、やがて訪れる平和の為ならと、汚れた仕事も、自ら進んでやっていったんだ…俺達自身が信じた、正義の為に…」

まさか、サガが教皇を殺害して、成り代わっていたとは思わなかった。

ましてやサガに裏の人格が有り、ソイツが地上支配を目論んでいたなんてな。

…それが分かっていたら、お前達が聖域（サンクチュアリ）に乗り込む前に、黄金聖闘士全員で、アイツをぶっ殺していたさ。

それだけは、信じて欲しい…うつぶ…!!」

「わ、分かった、信じる、信じるから!」

今夜は もう止めとけ、なっ?」

リバーズしそうな酔っ払いの背中をさすりながら、宥め賺す俺。

正直な話、この男に関しては、確かに初めて会った時から暫くは、色々と良くない感情を持つていたのも事実だが、あの時の、『嘆きの壁での一件』以後は、少なくとも俺の方からは確執は無い心算でいる。

「本当に大丈夫かよ? 家族には、見せられん姿に なってるぞ?」

ピク…

「…!! 家…族…?」

この『家族』という言葉に反応したかの様に、ほんの数秒前迄、「うーうー」言いながら蹲っていた酔っ払いの動きが止まった。

やば… 『家族』は地雷だったか?

「紫い龍う~~~~~~~~~~~~つ!!」

「は、はいっ?!」

凄い迫力な顔で此方を見る、黄金聖闘士の先輩。

しまった…

考えてみたら、俺同様に、小宇宙（コスモ）や記憶を其の儘に、転生してきたのだ。

幸いにも俺は、少なくとも数ヶ月前迄は、極々普通な、平和な世界の住人として生きてきたが、この男も そうだとは限らなかった。

その能力故、平和な日常とは かけ離れた世界で、家族とは無縁な

世界で生きてきたとしても疑問は無い。

ぶっっちゃけ、殴られても仕方無い。

…そう思っているよ、

「そうだ！家族だ!!」

よくぞ言った、紫龍!!」

「へ…?」

そう言いながら、上着のポケットから、スマホを取り出しましたよ？この人。

「これが俺のカミさんでな、これが娘で、そして この子が、孫娘だー!!」

そして次々と…昔は かなりの美人だったんだろうと思わせる初老の女性、その面影のある、20代後半な金髪女性、そして それを受け継ぐ、将来の絶対勝利が約束された顔立ちの、黒髪少女の画像を次々と見せてきた。

「ふっふっふ…実は日本に来た最大の目的はな、この孫娘に会う事なのだ!」

悪人面を崩し、幸せそうに にやけながら話す男。

しまった…

この男、『家族』は別ベクトルで、地雷だった。

その後も延々、約30分の間、家族自慢を聞かされたり、孫との2ショット写真を見せられたり…

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「ん、天使や堕天使の勢力でないなら、大丈夫だよ。」

シリユー君の知り合いなんだろ？

悪魔（ぼくたち）の方が優先だったら、問題無いから。」

……………。

そして漸く店を出る前、結果を取り払うと同時に『人払いによる営業妨害の詫び代込み』だと、カウンターに大勢の諭吉さんを置いていった男と別れた後、早速 魔王ルシファーに事の経緯を報告すると、あっさりと同盟契約OKの返事をくれた。

即答は有り難いのだが、そんなに簡単にOKして良いのか？それで

良いのか？魔王？

## 頑張れ天界勢

『…いや、僕だつてね、本当は如何に電話越しとは云え、君の声なんか、聞きたくも無いんだよ？』

別に君達が滅びようが、知った事ではないけどね、それで僕の友達が、不要な怪我をしたりするのは避けたい…それだけの話だよ。』

『僕から教える心算は無いね。』

てゆうーか、本当に君達、内部の伝達とか、きちんと出来てないでしょ？

報連相つて言葉、知らないの？

他にも、幾ら敵対勢力相手だからって、外交の際は、其れなりの、上辺だけでもな作法つて在るよね？

そういうの、全然伝えてないでしょ？

僕からすれば、君が下の者に、常日頃から他勢力に対しては、「天界様EEEEEEEE!!」…な姿勢で接しろって指示してると思えないんだけど？』

『さあ？僕は知らないよ？』

君達と、彼…そしてオリンポス（…の1部勢力）と喧嘩になつても。』

『だくかくら、其処迄話す義務も義理も、僕には無いね。』

そつちの心当たりある人物に、直接聞いてみたら？

これは僕の予想だけど、そつちに約2名程、音信不通になっている人物がいるんじゃないの？』

『いや、僕等は そんな真似は しないさ。』

そつちが勝手に任務放棄、してるだけでしょ？』

『さあね？ただ、一言だけ…彼は今、「本当」と書いて「ガチ」に激怒



（おこ）な状態だから。じゃ、そういう事で。』 p.i...

それは冥界の、とある巨大な城の一室、その城の主と、ある人物との、スマホを通じた会話であった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ガラ：

「おはようございまあ...うわああ!!?」

現在AM9:45

部室に顔を出した早々に、挨拶の途中でいきなり悲鳴を上げたのはギャー君です。

まあ、無理も無いですけどね。

何しろ今の部室には、893屋さんが2人も居るのですから。

「.....」

「.....」

学園にて、2大イケメンと呼ばれている先輩方が揃って輩みたいな顔で、部室の3人掛けの応接ソファーに座ってる、1人の男性に、睨み付けて凄んでいます。

男の人、余りの迫力に縮細ってます。

その顔、学内に拡散させたら、ファンの女の子達、本当にショックで寝込んでいますよ？

「「う、うくん...木場きゅんが、木場きゅんが893になったあ...」」

事実、生徒会副会長の新羅先輩他、数人の生徒会役員の人は、既に倒れて斃されています。

「はわわわわわ...」 「:によく」

アｰシア先輩やミルたんも、どうリアクションすれば良いのか分からない様な、困った顔をしています。

「皆、揃ってるわね？」

シリユーと朱乃以外は、別室で打合せをするから、こっちに来て頂戴。...祐斗も！」

「...はい。」

「ほら、椿姫も、何時までも現実逃避してないで！」

「あははははは……木場きゅんは やっぱり、笑顔が1番……」

「副会長お!?」

そんな中、リアス部長の一言で、集合していたオカ研と生徒会の皆は、隣の部屋へ。

今から この部屋で、シリュー先輩と あの、如何にも教会の使いで来ました……という、聖職者な服装な男の人とで、OHANASHIが始まるんでしょうね。

それ、凄く見てみたいのですが？

恐らく朱乃先輩は、シリュー先輩が暴走した際のストッパー役なのでしょう。

出来れば その役、変わって欲しいです。

「小猫、アナタも早く!」

「は、はい……!」

……………チツ

◆◆◆◆◆  
「…で、朝から教会の下っ端が、俺に何の用だ？」

教会の使い……これだけで、893 mode全開なシリューが、見た目は30後半〜40前半な、牧師に話掛ける。

「…此の度は、赤龍帝殿に、先日、我々の送った使いが無礼を働いた事について

の、謝罪にk「巫山戯るな!」ひえっ!」

シリューの問い掛けに答える途中で その発言を怒声で遮られ、驚きの声を上げる教会の使い。

「この前の使いとやら同様に、敢えて増長した上で言わせて貰おう…。貴様達は悪魔陣営に於いて魔王と同格である、この赤龍帝に無礼を働いたのだぞ？」

それに対して、貴様の様な雑魚が謝罪に出向いただど？

それも、今頃に なって!!

天界は この俺を舐めているのか？」

「い……いえ……決して、そんな訳では……」

何分、事情を確認出来たのが、昨日……いや、今日の深夜でしたので

…」

「そんなのが理由になるとでも思っているのか!!?」

「ひいいいっ!?!?」

この牧師としても、真夜中に突然、上の位置に立つ者から寝ている処を叩き起こされ事情を聞かされ、慌てて駒王町に出向いた訳だが、時刻的にも当然、オカ研関係者にはアポ無し。

それも手伝い、正しく893…いや、893が天使マジ天使に見える程な、教会天界に対する嫌悪感が天元突破しているシリューの、悪魔の様な怒涛な応対に牧師は怖れ慄き、同席している、悪魔である朱乃に対し、まるで助けを求めるかの様な顔を向けるが、

「……………(ニコニコ)。」

その朱乃は無言で ただ、微笑むだけ。

寧ろ頬をやや赤くした その顔は、「もつとやれ」と言っている様。「冥界のトップと同格な俺に謝罪する意思が有るなら、其方は天界のトップである、『神』が出張るのが筋ではないのか？」

『ネ・申』がな!!」

「…!!」

止まる気配の無い、シリューの怒号。

そんな中、シリューの発した、何か含みを持たせたかの様な『神』と云う言葉に、牧師は一瞬だが顔を強張らせるが、直ぐに怒れる赤き龍帝の迫力に屈してしまう。

(Boost!!)

「今直ぐに貴様の首を撥ね飛ばし、それを改めて布告かわりに、教会陣営に着払いで送り届けても構わんだぞ!!」

「そ…それは…」

「本当に貴様等は天才だな…」

この赤龍帝の逆鱗に、触れる事に関してだけはなあ!!」

【赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）】を展開させると眼前ギリギリまで龍の爪を突き付け、単なる警告でなく、本気で殺りかねない殺気を放出させるシリュー。

「…其処迄よ、シリュー君?」

このタイミングで漸く、朱乃が止めに入った。

「赤龍帝様の仰る通り、貴方では全く話になりませんわ。

この部室を、貴方如きの血で汚したくは ありません。

今日の処は早々に消え失せ、それでも まだ抗争を避け、話し合いたいのであれば、事前連絡をした上で、天界トップである『神』をこの部屋に寄越すべきです。

シリユー君も…この部室をこの様な者の血で汚した日には、部長から後でOHANASHIでは、済まなくてよ?」

「う…」

一見 丁寧だが、何気に毒と棘の有る言葉で神父に今日は帰る様に促し、シリユーにも部室内の流血沙汰は御法度と諭す。

「……………失礼します。」

結果、牧師は去るしか選択肢は残されていなかった。

くつ…何故 私が、こんな損な役回りを?

そもそも あのバカ娘共が、要らぬ真似をしでかすから…

いや、仮に やらかしたにしても、直ぐに其の事を報せていれば、此方も直ぐに動いて、まだ穏便に話が済んだ可能性も在ったろうに…

『神』を連れてこい?

『神』でなければ、話に応じない?

そんなの、無理に決まっているではないか…

最後に この牧師は、外から旧校舎を見上げると、ブツブツと不平不満を呟きながら、学園を去って行った。



「ひいひい!?!」

「さあ、知っている事、全て話すによ。」

「…ですわ。」

「近い…近い近い近い近いから!?!」

昼中の路地裏で、神父とシスターの2人組を尋問しているのは、巡、由良、レイヴェル、そしてミルたんのチーム。

街中を歩いていていた神父達を見て、今回の騒動に関連して駒王町にやってきたと睨んだレイヴェル達は、気配を消して尾行、タイムリングを見計らい、攫う様に2人を路地裏に引き摺り込む。

既に この時には、何時の間にか悪魔陣営と手を結んでいた赤龍帝（シリユー）が、今回の騒動が発端で、教会を敵と認識し懸けているのが伝わっているのも手伝い、教会の2人はミルトンの弩アツプでの尋問の前に、あっさりと屈してしまう。

【得た情報】

・自分達は教会本部からの派遣

「だから何？興味無いし。」

・既に秘密裏に送り出していた教会本部の聖戦士や戦闘神父が何人も返り討ちに遭っている

「ふくん、それで？」

・騒動の黒幕は墮天使コカビエル

「知っていますわ。」

・他の主だったメンバーは、はぐれ悪魔祓いのフリード・ゼルデン「それも知ってるによ。」

・あと、聖剣計画創設者の、パルパー・ガリレイ元司教（追放済）

「へへ、他には？」

・教会本部に残っていた、もう1本の聖剣も昨日、いきなり襲ってきたコカビエルに奪われた

「「「ざまあw」」ですわ。」によ。」

・コカビエル一派の狙いは、エクスカリバーの統合・再生

「え!?!」「そんな事したら…」

「でもエクスカリバーなら既に、シリユー先輩が何本も再生不能レベルに破壊していますわよね？」

「実質、昨日奪われたと言うの含めて、今 残っているのは、後2本な筈によ?。」

「ああ、そう言えば そうよね。」

「せ…聖剣を、破壊したくっつ!!???!!」

ガクツ…

神父とシスターはorzった！



「全く…お前達は何をやっているのだ…」

イリナも…ゼノヴィア君も…」

場所は変わって、とあるデパート屋上のラウンジカフェ。

シリューに怒鳴り散らされてたあの牧師が、紫藤イリナとゼノヴィア・クアルタに対して説教の真っ最中だった。

「…面目も在りません。」

「うう…ごめんなさい、いゝ、パパ〜！」

シリューからは雑魚呼ばわりされたが、2人の聖剣使いを一方的に叱りつける…イリナから父親呼ばわりされたこの男、一応はそれなりの地位と実力を持っている様だった。

「そもそも お前達は教会を発つ前に、この町の悪魔関係者に対して、一切の攻撃を加えないと、神に誓ったのではないのか？」

それが よりによって、知らなかったとは云え、赤龍帝の部下に刃を向けるとは…

お前達は主の顔に、泥を塗ったという自覚は有るのか？」

「……………」

「この儘では本当に、悪魔本隊は介入しないとしても、天界と赤龍帝との間で戦争が起こるぞ…」

「……………!!」

自分自身も、シリューには雑魚扱いで全く取り次いで貰えなかった事は罰が悪いのか、伏せて喋る牧師だが、2人は それ程迄に事が大きくなっていく事を知り、改めて絶句する。

「…しかし、いくらなんでも…赤龍帝でも、単身で教会…天界と喧嘩するなんて…」

「明らかな負け戦では…」

「馬鹿者！それは あくまでも、赤龍帝単身だった時の話だ!!」

上が言うには、その時に冥界の魔王が大人しく傍観するなんて事は、まず有り得ないそうだ!!

更に言えば、あの赤龍帝はオリンポスの、少なくとも1柱とも、同盟を結んでいるらしいぞ!!」

「なっ!?」「オリン…ポス…だと?!」

「…そうだ。一度、事が起きたら両者共に只では済まないだろう。

それだけでは無い。

その争いの匂いに惹かれ、2天龍の片割れも姿を見せる可能性もある。

そうならば、堕天使側も静観は出来ないであろうし、結果、全ての陣営が、只では済まぬ事になる。」

「それぞれ、そんな…」

「どど…どうすれば…話し合いとか、出来ないの?」

「赤龍帝曰わく、自分は冥界のトップと同格なのだから、天界のトップ以外とは、話すに値しないと云っている。」

「そんな?!」「何様の心算だ!」

「それも曰わく、お前達の私様な増長っ振りに、敢えて合わせているとの事だが?」

「うう…」

自業自得、身から出た錆、そして詰み。

少なくとも自分達が原因で引き起こした災厄事が、自分達では既にどうする事も出来ないのを悟り、完全に無言となる悪魔祓いの少女達。

「兎に角、お前達2人には既に、帰還命令が降りている。

今から主の下に戻り、改めて処罰が下される事になるだろう。」

「そ…そんな…」

「パパ、お願い!」

もう一度だけ、チャンスを頂戴!

きちんと赤龍帝に謝ってみせるから!」

「大馬鹿者!!お前達如きでは、今更それが通用しないレベルになっている事も、理解出来ていないのか!!!」

足掻く2人に大声で怒鳴りつける牧師。

…とは云え、事前に人払いの結界を張っていたので周囲には誰も居

らず、今迄の会話等が漏れる心配を含め、周りをする必要は無い。

「全く、その通り…だな。」

「!!!?」

…そう、一般人に対しては。

「ななな…」 「せ、赤龍帝…さん？」

「何故、此処が…？」

その場に現れたのは、シリユー、そしてリアス、朱乃、ソーナの4人。

「何故って言っても…ねえ？」

「あんなにハッキリと、結界を張っていたりしたら…」

「普通は怪しみます。」

…らしい。

「ち…てつきり昨日の腐れ神父でも居るのかと思えば…」

「……………」

苦虫を噛み締めた様な顔で皮肉るシリユーに対して、目線を逸らして黙り込む教会の3人。

更にシリユーが悪態を吐こうとした時、

「くつくつく…コレは、面白い場面に遭遇したモノだな。」

「!!!!!!?!」

突如、頭上 遙か上空から掛けられた声に、その場の全員が上を向く。

「初めまして…かな？」

サーゼクスとセラフォルの妹に赤龍帝、そして、バラキエルの娘よ…」

其処に居たのは、長いウェーブの入った黒髪の男。

背中から生やした5対10枚の黒い翼を、大きく広げた墮天使。

「コカビエル…か…？」



コカビエル！戦を望む墮天使！！

バツサアツ！

10枚の黒い翼を、誇示する様に大きく広げてみせる男。  
コカビエル。

聖書にも、その名が記されている程の、上級墮天使。

「……………！！」

いきなりの大物人物の登場に、その場に居る者達の顔に緊張が走る。

「な、何故、此処に？」

「ん？脆弱な結界は張られているので、何事かと思つてな？」

牧師の質問に、コカビエルは そう答える。

この場に姿を見せたのは、どうやらシリユー達と同じ理由らしい。  
説教の為に張った結界が、悪魔とドラゴン、そして墮天使を この  
場に呼び寄せた事になる。

「コカビエル！盗んだ聖剣を今直ぐ返せ！

そもそも、聖剣を盗んだりして、何をする心算だ!？」

イリナの父親でもある牧師・紫藤トウジが、声を荒げるが、

カツ… ドシユツ!!

「ぐわあっ!？」

その答え代わりなのか、コカビエルは指先を光らせると、小さな光  
の槍を作り出して投擲、牧師の左脚を貫いた。

「いやあっ?!ぱ、パパあっ!?!」

「黙っている、教会の犬が。」

「……………!!」

教会の3人を睨み付けた後、リアス達に顔を向けたコカビエルは  
「この町の とある場所を中心に、大暴れさそて貫おうと思ついる。

そうなれば、この町を管理している貴様達の兄と姉…魔王共も  
黙ってはいないだろう?」

「ば、馬鹿な真似を…!？」

「アナタは3勢力の戦争を、再び勃発させる心算なのですか?」

「ふはははは!!正しく その通りだ、バラキエルの娘よ!」

「その名前で、私を呼ぶな!!」

嗤いながら、自身の目的を語り出した。

「まずは手始めにと、教会からエクスカリバーでも盗めば、ミカエルが戦争を仕掛けてくれると思っていたのだが、何を血迷ったか、寄越すのは其処に居る様な雑魚ばかりだ!!」

「雑魚…だと!?!」

シュ…

「止めておけ、雑魚なのは事実だ。」

「なあっ?!」

「貴方、どちらの味方なのよ?」

「少なくとも、貴様等の味方ではないのだけは、確かだ。」

「う…」

怒り顔で、聖剣ではなく、祝福を受けただけの銀の短剣を抜こうとするゼノヴィアを、シリユーが制す。

「…つまらん!実に、つまらん!!」

だからこそ、ミカエルが駄目ならば、次は冥界の魔王なのだよ!

魔王の妹が管理している土地で、事を起こすとなれば、今度こそ…」

「チィ…戦争狂が…」

戦争を望むと言うコカビエルに対するシリユーの舌打ちに、墮天使は皮肉る様に喋り続ける。

「戦争狂…ああ、その通りだ!」

俺は戦争が大好きだ!!

電撃戦が好きだ 殲滅戦が好きだ 打撃戦が好きだ 防 e 「こそ、

それ以上は言うな…」

その演説の途中、色々な意味でヤバいと思った、シリユー、リアス、イリナが思わず止めに入る。

「ふん…」

最後迄言いたかった…そんな不満気な顔なコカビエルは、尚も話し続ける。

「兎に角 俺は、三つ巴の戦争が終わってからは退屈で退屈で仕方が

無かった！

アザゼルもシエムハザも、戦争には消極的でな！

しかもアザゼルに至っては、神器等と云う 下らん研究に没頭する  
始末だ!!

だからこそ…あの腑抜け共の目を覚まさせる為に、俺が動いたのだ  
よ。

…ならば、戦争だ!…とな。」

「狂っているわ…」

「それは誉め言葉と受け取るぞ？」

サーゼクスの妹よ。

どちらにしろ、俺は この貴様等の縄張りで、事を起こさせて貰う  
ぞ。

ルシファアとレヴィアタンの妹が管理している土地だ、さぞかし魔  
力の波動が轟めいていて、渾沌が楽しめそうだ！

エクスカリバーの解放にも最適だ。

戦場には丁度良い！」

「エクスカリバーの解放？」

それは どういう意味なのですか？コカビエル！」

スウ…

「くくく…知りたくば、止めに来るが良い、レヴィアタンの妹よ。

さあ、戦争だ、戦争をしよう！

魔王の妹達、そして赤龍帝よ！」

「ま、待ちなさい！」

戦争をしよう…この言葉と共に、コカビエルは その姿を消して  
いった。

『止めに来るが良い』…つて、町の何処なのか、場所くらい言いなさ  
いよ…」

コカビエルが居なくなつた後、その口調を真似ながらボヤくりアス  
だが、

「部長、考える迄も無いさ。

俺達を待ち受けるのに、そして派手に暴れ回るのに、皮肉込みでも最適な場所…と云えば、1つしか無いでしょ？」

シリユールは今居るデパートの屋上から、日が殆ど落ちている、西の方向を指し示す。

「まさか、学校…駒王学園ですか？」

「ええ。コカビエルはエクスカリバーの解放と言った。

恐らくは何らかの儀式を行うと、考えて良いでしょう。

…だとすれば この町で、最も其れに適した魔力に溢れている場所と言えば、俺達のホームと言っても良い、あの場所以外は考えられない。」

「…朱乃、ソーナも直ぐに、皆に大至急、学園に集まる様に連絡して！シリユールも、分かっているわよね？」

私達の学園は、絶対に私達で守るわよ!!」

「ええー!」「はい!」「承知!」

リアスの呼び掛けに、応える3人。

「わ、我々も協力するぞー!」「うん!」

「あ?!」

其処にゼノヴィアとイリナが、共闘を申し出るが、

「いえ、結構よ。」

「遠慮しておきます。」

「邪魔、しないで下さるかしら?」

「戦場で一番厄介なのは、手強い敵でなく、無能な味方だ。

身代わりにも捨て駒にも成らない様な雑魚は、本当に不要だ。」

それを心底 嫌そうな顔で、「要らね」とばかりに断るリアス達。

「な、何だと?!」

この物言いに、顔を真っ赤にして言い返そうとするゼノヴィアだが、

「気付いてないのか?」

コカビエルは既に、貴様等を眼中に入れてなかったのを。

そもそも貴様等、自慢の玩具(笑)も無い状態で、どうやってあの墮天使と渡り合う心算なのだ?

自分が雑魚だと云うのを自覚出来ない雑魚は、本当に下の下だ。」  
「う…」

シリューに完全に言い包められてしまう。

「先日、アナタ達は、堕天使が起こした騒動に、一切の介入をするなど言ってきたわよね？」

ならば、私もグレモリーとして今、アナタ達に告げるわ。

今から始まるコカビエルとの戦争に、天界勢は一切介入するな…と。」

「…ついでに俺も言わせて貰おう。

俺が介入行為と判断した時、この赤龍帝は、天界を完全に敵と見なす…とな！

それを望まぬなら、さっさと この町から消え失せる!!

それとも今直ぐ この場で、この世から消え失せるか？」

「「…?!」」

更に続くリアスとシリューからの要請…半ば脅しに近い命令に、この教会からの3人は、駒王町を去る以外に、選択肢が残されていなかった。

「神崎君…本当に良かったのですか？」

「はい？」

ガツクリと甲垂れて立ち去る、イリナ達の後ろ姿を見ながら、ソーナは尋ねる。

「彼女等との共闘拒否に、異存は有りませんが、彼処迄な対応をしなくとも…」

「あの類の者は、あれくらいししないと、引っ込んでくれませんかから。」

…俺が暴虐なイメージを背負うだけで、それで無駄な巻き添えが無くなるなら、安いモノですよ。

まあ、俺が連中を良く思っていないのも、それに邪魔だったのも、事実でしょ?」

「神崎君…」



『なあ〜…』

学園の正面校門に集まった、オカルト研究部（withミルたん）と生徒会執行部の前に、白い仔猫が ゆらゆらと宙に浮きながら近寄り、小猫の胸に飛び込んで来た。

それを受け止めた小猫が笑みを浮かべながら この白猫の頭を撫でると、仔猫は嬉しそうな表情の儘、その腕の中で姿を消した。

「…シロの瞳（め）を通して視ましたが、コカビエルらしき墮天使、そして何時かの神父と、バルパー・ガリレイと思われる人間が、校庭の真ん中で魔法陣を展開、何らかの儀式の準備に入っているみたいで  
す。」

使い魔の偵察から得た情報を話す小猫。

「…最終確認だ。」

一先ず支取先輩達生徒会が、防御結界を張り、学園外への被害を抑える。」

「はい。」

ですが正直言つて、あのコカビエルが本気を出せば、学園のみならず この街程度、簡単に崩壊するでしょう。」

「大丈夫よ。そうなる前に私達が、片を付けてみせる！」

「魔王サーゼクスとレヴィアタンには、既に協力を要請している。」

あと1時間で、加勢が到着する予定だ。」

「ええっ?!」

突入前の役割確認の最中のシリユウの発言に、リアスとソーナが驚きの声を上げ、

「ししし、シリユウ…」

「かかか、神崎君…」

「何で、そんな勝手な事を!?!」

「俺には墮天使の幹部とやらが、如何程な力量かは、まだ理解出来ていない。」

しかし、生半可なレベルではないのは確かな筈だ。

身内に迷惑を掛けたくないのも解るが、既に つまらない意地を張る場面では無いのも、解っているのでは?。」



嘗て、教会本部で聖剣計画を立案、実行するも、当時の被験者達全員、『失敗作』として『処分』した事により、異端として追放された、通称『皆殺しの大司教』。

「ほほう…小僧、もしかしたら あの時の生き残り…が、居たのか？  
悪魔となつて、生き長らえたか？」

「くっ…！」

木場の、自分に向ける憎悪の顔で、その素姓を察したバルパーが、ますます挑発じみた嗤い顔を見せる。

「ふん…あの生き残りならば、丁度良い！」

再び死ぬ前に、見届けるが良いわ！

貴様等による実験の最終成果！

この、2本のエクスカリバーが1つになる瞬間をな!!」

「な…!？」

下卑た笑顔から発せられた言葉に、驚きを隠せない木場。

「くっくっく…本来ならば、もう数本のエクスカリバーも統合する予定だったのだが、完全破壊してしまったのでは、仕方無い…のう？  
フリードよ。」

スツ

「ケケケ…あゝいとういまでえくん！♪」

皆殺しの大司教が壁際に植えてある雑木に目を向けると、その陰から狂神父が姿を見せ、何時もの巫山戯た口調で、全く反省の欠片も無い、上辺だけの謝罪を口にする。

「バルパーよ、あと、どの位だ？」

そして校庭の魔法陣の上空、宙に展開された別の魔法陣、その中央に詠えられた、玉座の様な椅子に腰掛けるコカビエルの問いに、

「5分も要らんよ。」

自信に満ちた にやけ顔で、バルパーは応える。

「ふ…そうか…」

…で、グレモリーの娘、サーゼクスは来るのか？それとも、セラフオルーか？」

コカビエルはバルパーからの答えに満足な笑みを見せると、今度は





GGOOHN!!

それぞれが体術に剣術、魔力、そして小宇宙（コスモ）を駆使した技でケルベロスに攻撃を仕掛けるが、巨体に比例した生命力は、簡単にその全てを削り落とす事は出来ず、

「うわわああっ?!?!」

こつちに1匹、来ましたあ!?!」

「ちい、新手か?」

その隙を突くかの様に、新たに魔法陣から召喚された魔獣が、ギヤスパー達に襲い掛かる。

「燃え尽きなさい!」

Boww!

「レイヴェルさん!」

これを、リアスの指示で、ギヤスパー、アーシアと共に後方に控えていたレイヴェルが、フェニックスを象徴する炎の翼を展開させると、その翼から無数の炎の羽根を飛ばしての攻撃。

しかし、

『『ぐろろろーっん!!』』

「な…効いていない!」

紅蓮の炎に全身を包まれながらも、このケルベロスは その儘、突撃を止めずにレイヴェルに対し、鋭い前脚の爪を突き付けてきた。

「……………っ!!」

フェニックス故に死ぬ事は無いが、それでも自分の後ろに控えるアーシアとギヤスパーの壁になるが如く動かず、ダメージを覚悟するレイヴェル。

『『ぎゅわおおーん!!』』

「え…う?」「え?」「ええっ?!」

しかし その凶爪は、レイヴェルには届く事は無く、魔獣を包んでいた炎は その色が突然、赤から蒼に変わる。

そして その次の瞬間には、ケルベロスは骨すら残らず燃え尽き、地面に黒い焼け跡と、プスプスと肉が焦げた様な匂いが残るだけだった。

「大丈夫だったかい？お嬢ちゃん？」

「は、はい…：貴方が助けてくださったのですね？あ…ありがとうございます  
います…：」

レイヴェルの前に現れたのは、鋭い目つきな白髪混じりの金髪の、  
長身の初老の男。

「お、お前、何故、この場に…：」

「フツ…：大変そうだな、紫龍？」

押し掛けで、助っ人に来てやったぜ？」



「…完成だ。」

バルパー・ガリレイが、狂気な笑みを浮かべて呟く。

「2本のエクスカリバーは統合され、1本となり、術式は完成した。」

ふん：聖剣たった2本での統合だが、それでも力を解放すれば、あと20分程で、この町は崩壊するだろう。

くくく：術式を解除したくば、コカビエルを倒す他無いぞ？」

「「な…!?!」」

「20分?!?そんな…お兄様の加勢を待つ時間も、無いじゃないの!」

魔法陣の中心に浮かぶ、1本の聖剣を満足気に見つめながら話すバルパーの言葉に、リアス達は驚愕。

「フリード。」

「はいよ〜♪」

それを見たコカビエルが、フリードに話し掛ける。

「そのエクスカリバーで、其奴等を殺してみせろ。」

「いえっさ〜!」

全一つく、ボスは人使い荒くね？

そーゆーの、ブラックって言うんですぜ？ブラック!」

やれやれだぜ：そんな顔を浮かべながら、魔法陣内に入ったフリードは統合されたエクスカリバーを手に取ると

「でもでもでも〜、ちよ〜素敵仕様になったエクスカリバーちゃんを使えるなんて、光栄の極み？」

満更でも無い表情となり、

「うひひっ!」

んじや ちよつくら、其処の糞悪魔その他数名、首ちよんぱってますかね〜!」

ぶうん!

その聖剣の切っ先を、リアス達に向けた。

「バルパー・ガリレイ!」

木場が、『来るんなら来いや』とばかりに剣を構えるフリードの横に立っている、バルパーに向かって叫ぶ。

「僕は、アナタの察した通り、あの『聖剣計画』の生き残り：いや、正

確にはアナタに殺され、悪魔に転生した事で、今を生きている。」

「……………」

「貴方に問う。」

何故、あんな真似をした？」

「ほくう？やはり、あの計画の生き残りだったか…」

良いだろう…ならば、教えてやる。」

木場の問い掛けに、薄ら笑いを浮かべた元・大司教が語り始めた。

曰わく、バルパー・ガリレイは、幼い頃から聖剣に憧れていた。

教会に所属したのも、何時かは自分も聖剣の使い手とならんと思つた為。

だからこそ、自身に聖剣使いの適性が無いと判明した時、絶望に打ち拉がれた。

…そして その後は、自分では使えないからこそ、使える者に憧れる様になる。

その想いは高まり、聖剣の使い手を人工的に創り出す研究に没頭する事となった。

「…そして、完成したのだよ。」

君達の御陰様でな。」

「完成？馬鹿な?!」

僕達を失敗作と断じて、処分したじゃないか!!」

完成という言葉に、怒りと驚きの顔を隠さない木場が、更に問い詰めると、バルパーは また、得意気に語り出した。

…バルパーが言うには、聖剣を扱う為には、その者が内に持ち宿す『聖なる因子』が必要。

その事に気付いたバルパーは、その因子を数値化する事で、適性を調べた。

ただ、木場を含む当時の被験者達は、因子自体は持ち合わせていたが、聖剣を扱える数値には至っていなかったと言う。

「…そして私は、1つの結論に達した。」

体内から聖なる因子のみを抽出し、集める事は出来ないか？…とな

「？」

「…！まさか…完成したと言うのは？」

「その通りだ！聖なる因子を抜き取り、結晶化するのに成功したのだよ！

ほれ、こんな風にな!!」

カサ：

そう言っつてバルパーは、懐から掌サイズの青紫の水晶体を取り出し、木場に見せつける。

「ふはははは！コレを祝福と称して、教会の戦士の体内に入れ込めば、それだけで聖剣使いの完成だ！」

「馬鹿な?!」「そんなに…簡単に…?」

この発言に、木場、そしてシリユーが疑問の声を上げるが、

「にやはは♪それが、出来てしまつちやうんだよな〜！」

この、俺つちの様にい〜…つとお!!」

ドガアツ！

「!!?」

その疑問に答えたのは、エクスカリバーを振り翳しながら襲つてきたフリード。

シリユー達に向け、不意打ちの聖なる刃を振り下ろすが、それは躲され、地面を打ち付ける。

「クツソ！避けんぢやねーよ、テメー等！」

今度こそ、その首ちよんぱねつてやつからよお、赤龍帝い〜！」

「ちいー！」

体勢を整え直し、再度シリユーに斬り掛かるが、

バカアツ！

「おわつとう!?!」

それは逆に、瞬時に その合間に入り込んだ男のカウンターの拳を喰らい、吹き飛ばされてしまう。

「痛てて…いっきなり何しやがるんではない?」

このオツサンわよう?!」

「余計な真似を…」





しかし直後、その卑しい嗤い声を掻き消す様な、怒声が鳴り響く。  
その声の主は木場。

そしてシリユーと…

「何を言っているんだ…テメーわよう…」

先程まで、フリードと戦っていた…

恐らくは、その最中に天高く吹き飛ばされた後に、其の儘 垂直に頭部から地面に激突、上半身が地中に埋まりピクリとも動かない…所謂『犬神家』な状態のフリードの隣に立っている、デスマスクだった。  
「テメーに教えてやる！」

どんなに小さくたつてなあ、世の中に死んで良い命なんて、有りやしないんだよ！」

怒りのデスマスクが、バルパーに掛かろうとするが、

「待て…」

クイ…

「くびいっ!?!」

すぐ隣に立っていたシリユーが、Yシャツの襟首を後ろから掴んで引き寄せ、それを止める。

「いきなり何しやがるんだ、テメーわ!?!」

「ヤツは、木場の仇、木場の敵だ。」

「…ちい、それを言われたら仕方無え。」

今回は、あの小僧に譲ってやるよ!」

その行為に対して、シリユーに喰って掛かるデスマスクだが、簡潔な説明を受けると それに しぶしぶと納得、矛を納める。

「憎いか?この儂が憎いか?」

しかし小僧、この儂だけを憎むのは、お門違いだぞ?」

「何だど?」

「気付いてないのか?」

教会の奴等は、儂を異端として排除しておきながら、研究結果だけは『使える』とばかりに隠蔽処か活用し、恐らくは儂の後任に研究を引き継がせているのだぞ?」

今の教会に属する聖剣使い共の存在が、その証拠よ!

神め…儂だけを断罪しておいてな…」

「流石は教会…だな…チィ」

「おい、紫龍、お前…?」

バルパーの口上途中で、何となく其れを察していたシリユーが、改めて事実を聞かされ、舌打ち混じりに呟く。

「…だからこそ、儂を断罪した愚かな神に天使、信徒共に、儂の真の研究成果を見せ付けてやるのだよ!」

「そんな事で…そんな事が、コカビエルに加担した理由だと言うのかあ!?!」

「そんな事?」

研究者にとつては、研究と その結果が何より大事な事柄だ。

それを否定する者より、受け入れる者の下に就くのは当然だろう?」

木場が叫ぶが、片や命、片や成果を優先させる者の会話は、交差する事は無く、

「ふん…そんなに仲間が大事だったか?」

ならば、これは貴様に くれてやろう。

貴様の同志とやらの、成れの果てだ。」

ポイ…

そう言つて、バルパーは因子の結晶を、木場の足下に投げ捨てた。………。」

跪き、それを無言で拾う木場。

「皆…ごめん…」

そして、掌の中の結晶を見つめ、大粒の涙を流しながら、嘗ての同志達に謝罪の言葉を発した時、

バアツ…

その結晶は、光強く輝いた。

「これは…」

次の瞬間、木場は確かに見る。

何も無い…只、白いだけの空間の中で、嘗ての同志、聖剣計画の同期被験者達が、自分の周りに立っているのを。

「皆……！僕は……僕は！」

その彼等、彼女等に、木場は今にも泣き出しそうな顔で話し出す。「ずっと……ずっと思っていたんだ……」

僕が……僕だけが、生き残って……生きていて良いのか……って……うう……」

そして喋る途中、何時しか涙を流してしまうが、それでも木場は話し続ける。

「僕より夢を持っていた子がいた。

僕よりも生きたがっていた子がいた……。

僕だけが、平和に過ごして良いのかって、何時も、何時も……え……え……?!」

しかし その途中、木場の正面に立っていた、髪の高い少女が……当時の木場より年上で、まるで実の姉弟のように一番仲の良かった、そして今の木場と同年代に見える少女……その彼女が、木場を優しく抱き締め、偽りの無い優しい笑顔で話し掛ける。

《私達の事は、もう良いから……生きて……》

「え……」

そして この少女だけでなく、他の少年少女達も木場に話す。

《確かに俺達は一人では駄目だった……》

《でも……》

《皆が集まれば、きっと大丈夫……》

《大丈夫……怖くなんてないよ……》

《そう、大丈夫……》

《聖剣を受け入れるんだ……》

《譬え神が、見ていなくても……》

《僕達の……》

《私達の心は何時だって……》

……1つだ。

…その言葉により、迷いの色が木場の顔から消えた時、奇跡は起る。

パアアアツ!!

手の中の結晶が再び輝き、粒子となって木場の体内に入り込んだと思うと、その身体から溢れるばかりの強大な魔力を放出させる木場。

「な…何が起きたのよ!?!」

「祐斗君?」

リアス達からすれば、バルパーの投げた結晶を木場が拾ってから、僅か数秒にも満たぬ時間…

見ただけで感じられる、パワーアップに、味方であるリアス達も驚く。

「ドライグ…これは…」

(応、相棒…あの【騎士(ナイト)】は至った。)

「は? シリユー?」

貴方、アレが何なのか、知ってるの?」

「え…は、はい…」

「『説明、お願いします。』」

「は…はあ…」

そんな中、冷静なシリユーに、リアス達は説明を要求。

「…【神器(セイクリッドギア)】は、所有者の想いを糧にして、進化…強くなっていく。

でも、それとは別次元の領域があるんだ。

想いや願いが、世界に漂う『流れ』に逆らう程の、劇的な転じ方をした時に、【神器(セイクリッドギア)】は至る。

それこそが…禁手(バランス・ブレイカー)と呼ばれる進化だ!」



この際、目の前に立っている人物が何者かなんて、どうでもよかつた。

「…たす…けて…」

僕の命を 僕の仲間を 僕の人生を

僕の願いを 僕の才能を…

「僕は…生きたい…」



「…悪魔として生きる。」

それが、我が主の願いであり、僕僕の願いでめあつた。

けれど、聖剣への憎悪と同志達の無念だけは、決して忘れる事はなかつた。」

シユウ…

禁手（バランス・ブレイカー）の発動により、木場の体内から放出された、吹き荒ぶが如く溢れ返る魔力は やがて、再び木場の身体に吸収され、静まっていくな。

「…でも、同志達は僕に、『生きる』と言ってくれた。

決して、復讐を望んでなんかは いなかつたんだ。」

「ふん…」

「しかし、それで全てが、終わった訳じゃない。

第2第3の僕達を…これ以上、僕達の様な犠牲者を生まない為に！

バルパー・ガリレイ！今、この場で あなたを滅ぼす！」

ペア…

木場が右手に魔力、そして左手に、本来なら有り得ない、悪魔ならば持ち合わせていない筈の、聖氣を練り上げる。

「馬鹿な…コレは…？」

それを見たバルパーが信じられない光景を見る様な顔をする中、木場は更に魔力と聖氣を集中させ、

「さあ同志達よ、共に越えよう！」

あの時 果たせなかつた、想いを！願いを！

僕は剣に、仲間達の剣となる！  
今こそ僕の想いに応えてくれ：

…【魔剣創造（ソード・バアアース）】っ!!」  
ヴォウンッ！

神器を発動させた木場の両手に、刀身に漆黒の闇を纏うと同時に、  
輝かしい光を放つ、一振りの大剣が握られ、

「―禁手（バランス・ブレイカー）【双覇の聖魔剣（ソード・オブ・ビ  
トレイヤー）】!!

魔と聖を有する剣の力、その身で受け止めろ!!」

その刃の切っ先が、皆殺しの大司教に向けられた。

「ううぐ…ふ、フリード！」

貴様、何時まで埋まっている心算だ!?

さっさと起き上がり、この小僧を始末せんか!!」

木場の聖魔剣に脅威を感じたのか、バルパーは慌ててフリードを睨  
けるが、

……………

フリードからは返事が無く、

「…返事が無い…只の屍の様だ。」

「あゝ、無理無理。」

コイツ、既に体から魂が抜けてる…つまり、死んでるから。」

「何い!?!」

す〇きよなフリードの横に立っている小猫とデスマスクが、それは  
無理だと説明。

「ば…馬鹿な…」

へな…

絶望的な顔で、その場に両膝を着き、へたり込むバルパー。

しかし、ならばと空を見上げ、上空の魔法陣に座しているコカビエ  
ルに向け、何やら助けを求めるように、眼で訴えかけるが、

「…知らん。」

貴様も俺と行動を共にしたいならば、その程度、自力で何とかして  
みせろ。」

今回の聖剣騒動の元凶である墮天使の幹部は、それを冷たく突き放す。

「そ…そんな…」

「もう、良いかい？」

「さあ、覚悟を決めろ、バルパー。」

再び、この世の終わりが来た様な顔をするバルパーの前に、聖魔剣を携えた騎士が歩み詰める。

「ま、待ってくれ！ 儂は只の研究者であり、戦う力は持っていないんだ！

！ お前は丸腰の人間を、手に搔けるのか？」

「言った筈だ。これ以上、僕たちの様な犠牲者は生ませない！」

それに残念だが僕は、お前を斬るのに、何の躊躇いも罪悪感も無い！

その必死の命乞いも、木場には通用せず、

「受け入れるバルパー・ガリレイ！」

これは決して、怨みの刃では無い！

これは、お前の犯した罪に対する、裁きの刃だ!!」

「や、止めてくれええっ!!」

斬！

「ぐわやああああっ!!」

バタ…

「皆、見ていてくれたかい…？」

これで、不条理な犠牲者は、出る事が無いだろう…」

聖魔剣がバルパーの体を、左脇腹から斜め上に、右の胸元迄斬り裂き、バルパーは木場の足下に、うつ伏せに倒れる。

「う…助け…其処の魔女なら、この傷も、治せる筈だ…

ドスウツ！

その斬撃は致命傷となり、それでも尚、這いながら助命を求めるバルパーの背中、心臓の真上に、聖魔剣が突き刺さった。

「……………」

完全に動かなくなったバルパーを見て、木場はボツリと呟く。



「訂正する。さっきの斬撃は、ほんの僅かだが、怨みが籠もっていた。それでも…」

其処迄言うと、気持ちを切り替え引き締める様に、残る1人の敵…未だ上空で座するコカビエルを見据えるのだった。

「…つて、ちよつと待てよ おい？」

おかしくないか？」

「デスマスク？」

この時、木場の聖魔剣を見たデスマスクが、不意に疑問を浮かべた。  
「聖魔剣…」

聖と魔…反発しあう、2つの属性が混じり合うなんて、まず有り得ねー…」

「……………」

「まさか…紫龍、お前、もしかして、知っているのか？」

これは仮に、聖と魔、其れ等を司る存在のバランスが、大きく崩れているってなら、辻褃は合う！

つまり、先の大戦とやらで死んだのは、魔王だけでなく、かm（バズ）…うわつとお!？」

自身の立てた仮説を話す途中、デスマスクに、光の槍が空から襲ってきた。

それは間一髪で躲し、

「てっめえ…!!」

デスマスクは その槍を投げつけた墮天使を睨み付ける。

「ふっ…何者かは知らんが、なかなかのキレ者な様だな。」

それに対し、何時の間にか、上空で座していた魔法陣を消し、自らの10枚の翼で宙に浮いているコカビエルが、また巨大な光の槍を形成しながら話し出した。

「正解だ人間！教えてやるよ！」

次の瞬間、不適に笑うコカビエルの口から、驚愕の真実が語られた。

神は、死んだ。

「……?!?」

それを聞き、その場のリアスをはじめ、シリユー以外の全員が、驚きの顔と共に、言葉を失う。

「フハハハハハ！」

その顔、赤龍帝以外は知らなかったか？

流石に貴様等 下々に迄は、真相は語られていなかったみたいだな！

もう一度 言つてやろう、神は死んだ！

先の三つ巴の大戦で死んだのは、悪魔陣営の4大魔王だけじゃないかっただよー！」

悪魔陣営と盟約を交わしたしてから少し経った後、サーゼクスからあくまでも機密事項として教えられていたシリユー。

しかし その事實は、リアスでさえ、知らされていない事だった。

茫然としたリアス達の反応を楽しむかの様に、コカビエルは話し続ける。

「人間共の信仰心や対価に依存しなければならぬ程に疲弊した3大勢力だ。

故に、その事を人間に知られるのは、都合が悪い。だから、隠蔽した。

この事実を知っているのは、各勢力のトップ：更に その一部だけだったのだが、どうやら その男は気付いたみたいだな。

大した人間だ。」

「へっ……そりゃ、どーも。」

墮天使からの褒め言葉に、デスマスクは苦笑する。

「…神が…居ない…だと?」

「主は…主は死んで…いる?」

「だったら僕達は、何を信じて あの施設で過ごしていたと云うんだよ…?」

「そ、それでは、私達に与えられていた愛は…?」

そして嘗ては教会に所属していた、木場とアジアは、更に動揺。

「くはははは!」

その様な物が、在る訳が無いぞ、小娘!

神は既に存在しないのだからな!

尤も、神が残したシステムが機能していれば、祝福も悪魔祓いの力も、ある程度は働くのだろう。

だが、神が生きていた頃に比べると、その加護を受けられる者は格段に減ったがな。

小僧、お前が その聖魔剣を創り出せたのも、神と魔王が居なくなり、聖と魔のパワーバランスが崩れているせいだ。」

「嗚…呼あ…」

ガクツ…

「アジアたん?」「アジア先輩!」

次から次と、コカビエルの口から放たれる真実に、アジアはショックで倒れ崩れてしまう。

それは物心着いた幼い頃から ほんの1ヶ月前迄、その人生を『神』に捧げていた事を考えれば、無理も無い事だった。

「さあ、お喋りの時間は お終いだ!」

お前を血祭りに上げ、その首を手土産に、我々墮天使が最強だと、ルシファーやミカエル…そしてアザゼルにも教えてやる!!」

ブウン!

そう言つて、遂にコカビエルが、先程から手にしていた光の槍を、再び地上のシリユー達目掛けて投擲。

「ちい…! 部長! デスマスク!」

「ええ!」「応よ!」

グラウンドに直撃すれば、巨大なクレーターを作ると同時に、その場に居る者が全滅必至な槍を、シリユー、リアス、デスマスクが魔力と

小宇宙（コスモ）から成るシールドで防御。

それでも構わず、コカビエルは上空からの連続攻撃を仕掛ける。

「あのヤロー、地上（こっち）に降りず、空（うえ）からガンガン喰らわす心算だぜ！」

「仕方無い…部長とデスマスクは、この儘、シールドを維持して行くれ！」

朱乃先輩、木場、レイヴェル、ミルたん！

ガンガンぶつ放すぞ！！

小猫とギヤスパーは、アーシアを頼む！」

「「はい！」ですわ！」

「「ええ！」」「「了解！」」によ！」

シリユートの指示に、それぞれが応える。

バサッ

悪魔の羽を広げ、上空のコカビエルに向かって飛び立つ朱乃達。

「…で、お前は どーすんだ？」

「当然、討つて出る！」

ボウン…

デスマスクの問い掛けに答えると、シリユートは地面に掌を着けて魔法陣を展開、

「神崎孜劉の名に於いて命ずる！」

出よ、エックス！！」

カアッ！

その喚び声に魔法陣が反応して光り、その中から姿を現したのは、競走馬の様な体躯に金銀の鱗と純白の体毛と鬣、額に1本の角が生えているその顔立ちが龍の如し。

それはシリユートの使い魔である、麒麟・エックス。

「よし、行くぞエックス！」

…そして、ドライブグ！」

（応よ、相棒！）

「禁手（バランス・ブレイク）！！」

(Welsh Dragon over booster!!)

Balance breaker:

Boosted gear・Scale Mail!!)

真紅の龍を象った全身鎧を纏ったシリユーがエックスに跨がり、そして主を乗せた麒麟は空に居る堕天使を敵として認識、コカビエルに向かい、天を翔け、突き進んでいった。





「マジカル・オーロラ・エクスキューション!!によー!」  
新必殺魔法を披露。

「くつくつ…紫龍のヤツ、あのコ?に何を仕込んでんだ?

ありや、カミユの技じゃねーか! w w w」

それを地上から見たデスマスクが、威力は兎も角、その見た目はどう見ても、嘗ての同胞の必殺技にしか見えない。それを見て、懐かしそうに苦笑する。

「フハハハハハ!面白い!面白いぞ!!」

雷・炎・氷の3属性同時攻撃。

しかし、その攻撃も、コカビエルは臆する事無く、炎と氷を翼でガード、そして落雷を掌で受け止め、その儘 上方に弾き返す。

「でええいやあ!!」

直後、シリユーと木場が、拳と剣での連携を繰り出す。コカビエルは、これも巧みに腕と翼でブロック。

更には瞬時に創った光の短剣で、シリユーを乗せているエックスに斬り掛かるが、

『……………!』

ガキイツ!

これをエックスは、頭の角で跳ね返す。

ドゴオン…!

そして其処に、再び雷撃が落ちるが、やはり先程のリプレイの如く、コカビエルは、それを掌で受け止めると、

バシィッ!

「ぎゃあっ!」

地上で防御シールドを展開しているリアスに向けて、弾き落としした。

「どうした、バラキエルの娘よ?

「こんな『只の』雷撃で、この俺が斃せるとでも思っているのか?」

「…!!」

この挑発に、朱乃が顔を顰める中、





れるシリュー。

(……………)

「ぶ、部長のOHANASHIは、もう懲り懲りなんだよ!!」  
(…それが本音かw)

…しかし真面目な話、空中戦は不利だな。  
どうにかして、地上戦に持ち込まないと…

「エックス、どうにかして、ヤツの背後に回り込めないか？」

『……………!』

シリューの言葉にエックスが反応、一度 距離を空けてコカビエルの正面に立つと、猛スピードで一直線に特攻。

「おおい、ちよ…待…?」

少し慌てるシリューに お構い無く、直進するエックスは、コカビエルの攻撃の間合いギリギリで急ブレーキ、同時に後ろ半身を大きく跳ね上げ、

「おわわ…!!」

その反動でシリューは、自分の使い魔の背中から、更には上空に吹き飛ばされる。

「ん?何なの…(bomb!) だっ!!」

その様を、今イチ理解不能な呆れ顔で見っていたコカビエルに、隙アリとばかり、爆裂魔法が放たれるが、それも やはり掌でガードされ、ブオン!

「によ…っ?!」

お返しとばかり、術者の魔法少女?に光の槍の一撃。  
どすんっ!

「み、ミルたん?!」

右の肩口と一緒に羽を貫かれ、そのショックで頭から落下したミルたん。

「によ…?」

t w i n k l e t w i n k l e : p i y o p i y o p i y

o p i y o :

先程の木場とは逆に、地面にマトモに頭部を痛打したダメージで、頭の周りにクルクルと星をヒヨコを巡らせながら、目を回してダウンしてしまう。

「捕ったあー!」

「な…?!」

しかし この直後、エックスに飛ばされた筈のシリユーが、コカビエルの背後を捕り、羽交い締め体勢で、

「でえええいゃ!!」

その儘 猛スピードの錐揉みで落下。

…嘗て、シリユーの前世(むかし)の友に、数々の闘いを経て、後々に『神殺し』の二つ名を得た少年が居た。

その少年の得意技の1つに、相手を羽交い締めにつえて飛翔、旋回急降下から、敵の頭部を大地に叩き付ける技があった。

…今、シリユーが繰り出したのは、その技を自己流にアレンジした

：

「廬山龍旋爆!!」

ドッゴオオッソ!!

羽交い締めにつえた時点で、小宇宙(コスモ)の枷で自身の身体毎拘束、より強力な小宇宙(コスモ)を用いて枷を壊す以外は、脱出不可能の技を受け、コカビエルは脳天を地面に激突。

「貴…様…薄汚いドラゴン風情があ…!」

譬え墮天使と云えども、『ヒト』の外観であるコカビエルは、明らかに苦悶の表情を浮かべて痛打した頭頂部を抑え、シリユーを睨み付ける。

「嘗めるな!小僧があっ!!」

S h u l t u n S h u l t u n !

「なっ?!」

「きゃ!?!」

「うっ!?!」

「ひい?!」

「うげ!!」

そして、それでも戦意は衰えず、光の槍を、そして体を回転させながら背に生えた10枚の翼の羽根を刃の様に飛ばし、全方位、その場の者全員へ攻撃するコカビエル。

「まだ終わらんぞ!」

俺を斃してみろ殺してみろ滅ぼしてみろ!

赤龍帝!魔王の妹!

「わ…解らないわ!」

そもそも何故アナタは、そんなに迄、戦争に固執するの?

さつき自分でも言っていた筈よ?

前の大戦で3大勢力は、人間の信仰心に依存しなければいけない位に疲弊したと?!

今更、戦争を始めて、何の意味が有るの?」

ここでリアスが、改めて戦争狂に問い掛ける。

「ふん!決まっておる!」

それに対して墮天使の幹部は、自己の考えを語り始める。

「…確かに、どの勢力も先の戦争で泣きを見た。

アザゼルもシエムハザもビビったのか、『2度目の戦争は無い』と宣言する始末だ!

耐え難い!実に耐え難い!!

確かに、もう大きな戦争等、故意に企てない限り、起きないだろう

!

だから、この俺が起こしてやるんだよ!!

信仰心?対価?それが、どうした?

我等墮天使が勝利さえすれば、人間等に頼る必要も無いだろうに

!!

「ちい…狂ってやがるぜ…」

その歪んだ信念に、デスマスクが舌打ちしながら呟く。

「戦争狂が…」

「赤龍帝！その言葉は、褒め言葉と言った筈だぞ！」

そして続くシリユウの眩きに、コカビエルは嗤いながら、またも両手に光の剣を創り出して攻撃を仕掛けてきた。

（相棒、油断するなよ？）

ヤツは既に捨て身だ。

ああいうヤツが、一番厄介だ。）

「ああ、解っているさ、ドライグ。」

…ならば、一気に片をつけてやる！

アレをやるぞ！ドライグ！」

（え、!? 相棒、『アレ』って まさか？

ちよ…おま…）

それを見て、ドライグがシリユウに注意を呼び掛けると、シリユウも勝負所と判断したか、それを承諾。

但し、ドライグが求め期待した闘法と、シリユウの選択した戦法は、少し違っていたらしく…

「龍鎧解装（アーマーブレイク）!!」

バサアツ！

「ぬ?!」

（ハア…）

ドライグの溜め息の中、赤い龍の鎧は、兜を含む上半身のパーツを左腕の部位だけ残して全て、身体から外れて上空に飛散。

そして飛び散ったパーツは、それぞれが変形していき、最終的には剣、槍、トンファー、双節棍、三節棍、円盾が2つずつ、12の武器へと形を変える。

「はわわわ…」

「…やっぱりですか？」

「あらあらあら？」

「うううっわあ…」

「にょ…」

「はあ…」

「はははは…」



エル。

血を吐きながらも、それでも種族としての生命力の強さ故か、未だ死んではない。

しかし流石に、その身に敗北は受け入れ、生き恥を晒すのを善しとしないコカビエルはシリューに、自身の息の根を止める様に促す。

それは敗れはしたが、派手な戦闘が出来たからなのか、一切の迷いや後悔の念の無い、満足気な笑みを浮かべた顔だった。

しかし…

そのトドメ、少し、待って貰おうか？

『「!?」?』

しかし! その時、いきなり、空から それを止めようとする声が響いたかと思えば、

スウツ

その声の主と思われる人物が、天空から舞い降りてきた。

「お…お前は…」

「シリュー先輩と同じ…」

「白い…鎧…?」

『……………。』

それは、シリューの「赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）」の禁手（バランス・ブレイク）である、赤龍帝の鎧と そっくりな造型の、やはりドラゴンを象ったかのような、真っ白な全身鎧を纏った男だった。

## 白き龍！バニシングドラゴン・白龍皇！！



遙か大昔：

神、墮天使、悪魔の3勢力が戦争をしていた頃の話。

当時、様々な存在：

妖精、精霊、東西の妖魔、そして人間：

其れ等も それぞれの勢力に、手を貸していた。

だがドラゴンだけは、『個』として何れかの勢力に加担した者は居たが、『種』としては、どの勢力にも手を貸す事は無かった。

本来ドラゴンとは、力の塊であり、自由気まぐれ我が儘な存在。

その殆どが、戦争等我関せずの姿勢。

しかし そんな中：

戦争の最中の ある日、2匹のドラゴンが大喧嘩を始める。

この2匹はドラゴンの中でも最強と云わしめる存在であり、その戦闘力は神や魔王に匹敵する物であった。

喧嘩の理由は定かでは無いが、それは些細な事柄だとも云われている。

この2匹は戦争等知った事では無いと、場所を選ばず、3勢力の戦場の中でも、神、墮天使、悪魔の軍勢を蹴散らしながら、激しくぶつかり合っていた。

それを、善しとしなかったのは3大勢力。

この2匹の喧嘩は、自分達の戦争からすれば、邪魔者以外の何者でも無い。

『この儘では、戦争処では ありません。』

『…だな。先に、殺っちまうか？』

『貴様等と手を組むのは不本意だが、仕方有るまい。』

こうして争いの真っ只中であつた3大勢力は、やはり喧嘩の真っ只中である、2匹のドラゴンを協力して始末するべく、一時休戦、手を





て帰るように言われたんだが…

だから、トドメを刺すのは出来れば止めて欲しいんだけどね？」

「あ…アザゼルだと？」

白龍皇、貴様?!何時から？」

「…結構…な、前からだが？」

コカビエル、アンタは少しばかり、勝手が過ぎた様だ。」

「アザゼルウーッ!!」

白龍皇が墮天使に付いていた：【神の子を見張る者（グリゴリ）】の幹部である自分が知らなかった事実。

白龍皇を自分の回収役として寄越して来た事以上に、その白龍皇の存在を自分に教えなかった事に、コカビエルはこの場に居ない墮天使総督の名を、怒りながら叫ぶ。

しかしながら、身体を斬り裂かれたコカビエルの叫びは、虚しく夜空に吸い込まれるだけ。

「それと…」

そんなコカビエルを無視した白龍皇は、

「そこに埋まってる、フリードの回収も命じられていたのだが…そっちは遅かったみたいだな。」

臍の位置から上、上半身が綺麗に地中に埋まっているフリードの死体に目を向けて、白龍皇は呟くが、

「あく、コイツなら まだ、何とかなるぜ〜?」

「何?」

ずぼ…

そう言つて脚を掴み、土の中からフリードを引っ張り出したデスマスクが、

パチイン…

…右の親指で中指を弾くと、

「ん〜?へ…?」

まるで寝起きの様なリアクションで、フリードは息を吹き返し、

「う…うわああああ!?!」

じ…爺い!お前、一体俺つちに何を…?



「……………」

(ほう…それは奇遇だな?)

俺も この相棒を、史上最強だと思っっているぞ? 白いの。)

この会話の後、白龍皇は光膜の翼を広げ、飛び去って往った。

「…で、結局アレは、どうしますか?」

「ん〜…」

空に消えた白龍皇を見届けた後、シリユーがバルパーの死体を指差しながら、リアスに尋ねるが、彼女も処理の仕様に悩んでいるようだ。

「山中に埋めるによ?」

「普通にゴミ捨て場に棄てれば…」

「クール便着払いで、適当な教会に送り付けましょう。」

「俺達が関わった痕跡(あしあと)を完全に消した上で、手近な派出所にでも、投げ入れよう。」

後は、教会関係者に丸投げだ。」

「お前も大概に なったな! w」

「ところで…始めから ずっと気になっていたんですが…」

「小猫?」

バルパーの死体の処理について、どうするか話してる中、小猫が話題を変えるかの様に話し出した。

デスマスクに顔を向け、

「貴方は誰なんですか?」

とりあえず、シリユー先輩の知り合いだと云うのは分かるのですが?

コクコクコクコク…

小猫の問い掛けに同意する様に、数人が首を縦に振る。

「「あ…」」

如何にも「忘れてた…」な顔をする、リアス、シリユー、デスマスク。

どうやら戦闘どころで、(自己) 紹介する暇は無かった様だ。





破壊されたエクスカリバーを見ながら、木場は心の中で呟いた。

ボオン…

「「「!?」」」

その時、リアス達の前に、真紅の魔法陣が展開された。

「リアス様、シリュー様、遅ればせながら、援軍に参じました。」

「「……………」」

そして、その中からはメイド服を着た、銀髪の美女と武装された悪魔の兵士達、そして…

「リアス、シリュー君、眷属の皆、無事だったんだね！」

僕が来たからには、もう大丈夫！

「コカビエルは何処だい？……って、2人共、そのハリセンは、何なのかな？？」

紅髪の優男が、姿を見せた。



翌日の放課後の部室。

「…結局は、教会が引き取りましたか。」

「ん、てつきり『知らない』で通して、身元不明になると思ってたんだけどね。」

「また赤龍帝（オレ）に、責任逃れ云々とか糾弾されるのを恐れたのでしよう。」

テレビのニュースを観ながら、話すシリュー達。

結局、バルパーの死体は、シリュー考案の「最寄りの派出所に死体を投棄」を実行。

結果、『神父惨殺死体、交番に投棄事件』として、全国に報じられる形となり、バルパーの着ていた法衣故、(一般の)教会関係が真っ先に怪しまれ、警察に呼びつけられた(事情を知ってる)牧師がバルパーの身元を確認、身受け人となり、事情聴取されるが、当然ながら一連の聖剣騒動等は公に話せる筈も無く。

「まあ、単なる猟奇殺人事件として捜査されるだろうが、真相は手掛かりに掠りもせず、闇の中に消える事になるだろうね。」

なお、深夜の派出所に、いきなり斬殺死体が投げ入れられ、それを見た当直警官が慌てふためいたりしたのは、また別の話。

♪Y Y Y Y Y Y ♪

「あら？ソーナからだわ？」

そう話している中、リアスのスマホに着信が入った。

「…ん、分かった。」

pi…

「皆、今から生徒会室に向かうわよ。」



生徒会室にやってきたリアス達。

そこで待っていたのは当然、生徒会長の支取蒼那を筆頭とする、生徒会役員の面々。

否、ソーナ・シトリーと、その眷属の一同だった。

「よく来てくれました、リアス。」

そして神崎君。

つい先程、私の下に、魔王様より連絡が入りました。」

ソーナと生徒会副会長の新羅椿姫の進行により、今回の一連の騒動の、事後報告会が始まった。

それによると…

・教会側が悪魔側…魔王に『堕天使の動きが不透明不誠実の為、連絡を取り合いたい』と打診

・更にはバルパーについて、過去に追放処分で終わらせた事が、今回の事件に繋がった要因とし、自分達にも非が有る事を認め、謝罪。

・堕天使側からは、今回の騒ぎはエクスカリパー強奪及び、バルパーとフリードの懐柔その他諸々、コカビエルの単独行為で、他のトップ陣は知らなかったとの事。

…並びに、コカビエルは教会急襲や戦争画策等の罪より、『地獄最下層（コキユートス）』で永久冷凍の刑を執行。

…等々、等々。

「……………」

「神崎く？ 『それだけか?!ゴラア?!』 な顔は、止めとけく？」

「別に…」

墮天使側は兎も角、天界側の対応に、やや不満足だ…明らかに そう謂った表情をしているシリユを匙が窘める中、ソーナの説明は続いて行く。

「コホン…それで、最初に言った、『連絡を取り合いたい』ですが、近い内に…期末試験の前後の時期になると思いますが、3勢力の代表が、会議を開くらしいです。

その場で墮天使側から、何か提言があるそうですが…

我々も、その場に召集されます。

そこで改めて、事件の報告をしなければなりません。

それから、神崎君…」

「え？まだ、何か有るんですか？」

「教会側のトップである、天使長のミカエルが、3勢力が集まる前に、改めて今回の件で謝罪したいとの事です。

場所や日時は、其方に一任すると…」



## 天使長ミカエルの受難

長い階段を登ると、巨大な鳥居が。  
神社である。

一直線に敷かれた石畳の先には、本殿が。

「此処か……」

「……………」

コカビエルを退けた6日後の土曜日の昼過ぎ、シリユーとアーシアは、駒王町の神社を訪れていた。

サツサツサツ…

そして その前庭にて、紅白の巫女服に身を包んだ1人の女性が、箒を手に取り、掃除をしていた。

「あ、シリユー君、アーシアちゃん。」

「どうも、朱乃先輩。」

「お、お邪魔しますう〜。」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇朱乃先輩（あくま）が神を祀る神社に居る（しかも掃除してる）というのは、本来は有り得ない事だが、この神社は少し例外である。

元々は『姫島家』の管理下だったのだが、とある事件が きっかけで、朱乃先輩以外の『姫島』は既に絶えており、本殿に祀ってあった御神体も既に、余所の地に取り払われている。

謂わば、なんちゃって神社。

既に、文字通りの『神』不在（聖書の神とは別物）な建物となったこの場所は、グレモリーの管轄となっており、裏手には、朱乃先輩の自宅も有る。

神不在だからこそ、悪魔な朱乃先輩でも、普通に住める訳だ。

そして何故、俺とアーシアが、この場を訪ねたかと言えば…

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「…初めてまして…ですね。」

赤龍帝、神崎孜劉殿。

そして、アーシア・アルジェント。」

「は…ははは、はいー」

「……………」

あらあらあら…

アーシアちゃん、凄く緊張していますね。

そしてシリユー君は、能面の様な無表情。

本当は苦虫噛み潰した863屋さんみたいな顔をしたいのを、一生懸命我慢しているのが、ヒシヒシと伝わって来ていますわ。

そして、この2人に話し掛けているのは、天界に於けるトップ中のトップ、天使長のミカエル…チツ…殿。

一連の騒ぎの際、学園を訪れた2人の聖剣使いによって、赤龍帝（しりゆうくん）を怒らせ、赤龍帝と天界が敵対関係と成りかねない事態になった件で、天界のトップが謝罪に来たと、云う訳です。

それが何故、私の家かと言いますと、その辺りが話された報告会の時点で、時と場所についてはシリユー君は「明日の放課後、部室で良いですよ」と言ったのですが、それにリアス、そしてソーナ様が難色。

近い内に会議を開く為、3大勢力が集まる際は、魔王様公認だから、しぶしぶと了承してましたが、それでも、その他の事で他勢力、しかもトップを学園、それも部室に呼ぶのは…と、種族感情丸出しな、凄く嫌そうな顔。

…かと言って まさか、其処等辺の喫茶店やファミレスなんかを対談させる訳にも往かず、仕方無いので、私の神社（いえ）を、対談場所として提供したのです。

当然、対価は戴きましたわ。

翌日の火曜日から金曜日まで、学食のスイーツを毎日、リアスに奢って貰いました。

小猫ちゃんにアーシアちゃん、ギヤスパー君やレイヴエルさんが何時も、「学食のマンゴープリンは最強！」と揃って言っていた理由が解りました。

でも、少しばかり大変 美味しく戴き過ぎて、体重計に乗るのが怖いです。

あ…話が逸れましたね…。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

はとう…

みみみ、ミカエル様です！

私の目の前に、生ミカエル様が立つておられます!!

朱乃先輩に連れられて、3人で本堂に入った瞬間、部屋の奥の祭壇が眩く光ったかと思えば、其処には優しい顔をした男の人が立っていました。

背中から見える6対12枚の白い翼、頭の上には、正しくTHE・天使の環!…な輪冠が浮いています。

一目見て、この御方がミカエル様だと分かりました。

「……………」

そして、そのミカエル様を見たシリューさんは…この前、小猫ちゃんから借りたマンガに出てきた、『主役の男の子が、らっきーすけべで彼女のさんのお友達のスカートの中に頭を突っ込んだ場面を目撃した時の彼女(ヒロイン)』の様に、或いは『主役の男の子が知り合いの女の子にロツカールームで押し倒され、「さあ、子作りしよう!」っておっぱい丸出して迫られてる場面に遭遇した恋人(ヒロイン)』の様に、瞳から光が消えて、冷めた表情になっていきます!

こ、この後、『しゅらば』が始まってしまいうのですか!? (「。〇。L」)

何だか背中から、『(ゴゴゴゴ)』って文字が見えてる私は、眼科さんに行かないといけないのでしょうか!?

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「…まずは、この度、教会から派遣した者が、貴方に非礼な発言や不適な態度を執り、不快な思いをさせてしまった事につきまして、我々上層部の指示指導が行き届いていなかった事を、お詫びします。」

ペコリ…

天界の天使長が、赤龍帝に頭を下げて謝罪するが、

「……………」

シリューは無言無表情の姿勢を崩さない。

そんなシリューに対し、ミカエルは続けて低姿勢で、今回の騒動を

発端とした、教会内部の処分内容を話し出した。

曰わく、

※ 紫藤イリナとゼノヴィア・クアルタは、戦闘能力を完全封印した上で、それぞれ、日本の東北地方と四国の寺院へ尼僧として派遣済み。

もう死ぬまで一生、寺院の外に、足を踏み出す事は無い。

※ バルパー以降、聖剣計画に携わった研究者や指導者は、その計画内の立ち位置、実績に関係無く、全員が その地位を最降格、今後、昇格は一切無い。

※ 『計画によって生まれた聖剣使い』は、それによって得た能力を完全封印。

※ 更にはアーシアを『魔女』と見抜けず、長年、聖女として祭り上げていた教会関係者も、降格処分済み。

※ 尚、今回の処分者で出奔者がでた場合、理由、経緯を問わず、『はぐれ』として、迅速に処分とする。

等々等々…

「それと、これは お詫びの印として…」

「…!!」

そう言つて、ミカエルが煌びやかな造りの長剣をシリユーに差し出した瞬間、能面男の眼付きが鋭くなり、そして その眼に光が宿ったかと思えば、

斬！

その剣の刀身を、素手の…生身の手刀で根元から断ち斬った。

「な…ななな…？」

「ミカエルよ…貴様は不山戯ているのか？」

それとも、俺を舐めているのか？

この俺の機嫌を そんな物で、鈍（ナマクラ）なガラクタで釣れるとでも思っていたのか？

その心算ならば、せめて この孜劉のエクスカリバーよりも、切れ味の有る武器を持ち出して来い！

どの道、俺は物では釣れないがな！」

そして戦慄くミカエルに、893 顔男が怒鳴り散らす。  
悪手。

ミカエルとしては、天界が所持している最高峰の武器の1つ、竜討の聖剣・アスカロンを謙譲する事で誠意を見せる心算だったのだが、言い方は悪いがこの堅物に、物で釣って機嫌を探ろうとする行為…それは正しく悪手以外の何物でもなかった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

あらあらあら…

正直、一通りの説明報告を終えた時点で、もう1回、頭を下げて切り上げたら、それでシリユー君も、一応は納得…は、しないでしようが、とりあえず矛は納めたかもしれないませんでしたの…

最後のアレは、流石にアウトでしたわ。

このミカエル殿(笑)、流石は天界トップらしく、先日の上人以上にシリユー君を怒らせる事に関しては、本当に天才的ですね。

これって、天界勢の固有スキルですか？

「そもそも処分と言っても、結局それは計画に係わった『人間』だけで、貴様等『上』は、何の責任も取らない心算か!？」

「いえ…それは…」

焼け木杭にガソリン投入な、シリユー君の怒号は終わりません。

…でもシリユー君？

アーシアちゃんが また、はわわわな困り顔になっているから、ほどほどに しておきましょうね？

私個人としては、鬼怒の顔で、ミカエル(もう こんな、呼び捨てで おけーですよ?)を責め立てるシリユー君を、もつと見ていたいのですが♪

「ふん…所詮は貴様等、その程度の存在だろう?」

何しろバルパー追放後も、計画その物は『使える』として、研究続行を、犠牲者の因子の使用を容認しているのだからな!!

表は聖人ぶっていて、その裏では、悪魔と変わらん!…いや、その

悪魔でさえも、『悪魔以上の所業』と謂わしめる行為を平然と行っている！」

「う……そr……」

シリユー君の言葉に対して、何か言おうとして、慌てた様に、途中でその言葉を飲み込んだミカエル。

恐らくは『それも人間達が勝手に……』みたいな、何処かの政治家の様な発言をしようとしたのでしようが、それは尚更、赤龍帝の逆鱗と直ぐに気付いたのでしよう。

チイツ、惜しかったですわ。

それでもシリユー君の言っている事は、かなり正論と云うか事実です。ので、ミカエルは何も言い返せません。

「アーシアにしても、そうだ!!」

「?!」

そして話は、アーシアちゃんの事に迄 及んでいきます。

いいぞ、もっと やれですわ。



「アーシアの神器の【聖母の微笑み（トワイライト・ヒーリング）】。

それも貴様なら最初から、悪魔すら癒せる……貴様等天界の基準から云えば、異端の神器だと判っていた筈！

ならば何故、直ぐに異端と断し、追放なりの処理をしなかった？

結局は聖剣計画同様に、『使える』として、異端発覚迄は、利用するだけ利用する心算だったのだろうか？」

「……………」

「……………」

何も…下手に言い訳すると、更なる追及をされると判断したか、何も言い返さず、黙り込むミカエルと、事前にシリユーから、余程間違った事では無い限り、多少言い過ぎであろうと、口出し無用と言われており、黙っているアーシア。

ミカエルからしたら、異端の神器云々の打算でなく、純粹にアーシアの信心深さ故に、天界…教会から追放させる心算は無く、まさか、本当に悪魔を癒してしまうと云う、その様なシチュエーションに目撃者

付きで居合わす事になるのは想定外。

彼女自身、その者が悪魔だったと知らなかったのも有るが…いや、アーシアなら、傷付いている者なら、それが例え悪魔だろうが、普通に癒しかねないだろう。

仮に、教会が神器を持っているのを確認した時点で、ある程度の『戦士』としての教育を施し、ゼノヴィアの様な…いや、あそこ迄 私様でなくとも、少し位は「天界EEEEEE!!」な意識を植え付けていけば…全ては既に「たられば」である。

「…神器に関係無く、アーシアの様な信仰心ある献身な信徒は、出来る事なら手放したくはなかった…と、云うのだけでも、信じては貰えないでしょうか？」

「…ならばー！」

ミカエルの、止むを得ず…と言う主張も、シリューには通用しない。「ならば何故、追放した後 直ぐに、教会とは関係無く、救いの手を差し伸べようと、しなかった？」

貴様なら、教会の人間には知られない様、住む場所や生活費用の援助等、容易かつたろうに！

結果、アーシアは路頭に迷い、墮天使に利用されて命を落とす事になつていたかも知れなかったのだぞ？

偶々 俺達が そうなる前に、その墮天使を始末したから！

偶々 俺が、迷子のシスターを拾ったから！

…だから今、アーシア・アルジェントは、この場所に居るんだ！」「……。」

またも、黙り込むミカエル。

成す事言う事が、悉く赤龍帝の逆鱗に触れる行為となり、完全に手詰まりとなる。

天使長が、魔王でも墮天使総督でもない、只の…偶々 神器を持っており、偶々 過酷な鍛錬の末に、超人的な能力を持っているだけの、只の『人間』に、話術で屈してしまう。

では仮に その『人間』に、この場で『力』を行使、『力』で無理矢

理に解決しようとしたら、どうなるか？

：この話し合いの場を設ける際、ミカエルはサーゼクスから、このシリューこそ、墮天使幹部のコカビエルを圧倒的实力で打倒したのは知らされていた。

そして これはサーゼクスも知らぬ事、即ちミカエルも知る筈の無い事だが、紫龍は前世にて、主神の加護を授かり、そして数人掛かりとは云え、ギリシア系列の3大神の1柱、冥王の側近の『眠りの神』を打倒している。

如何に『長』の肩書きを持つとは云え、『神』の僕である『天使』如きが、敵と成る筈が無い。

：尤も これは、前世と今生の、『神』の実力が同等であるなら、話ではあるが：

更に言えば、今この場で赤龍帝を討てたとしても、それは多少、言葉は荒いが、赤龍帝の『正論』に、天使長が逆ギレを起こしたと、この場の立会人となっている朱乃が魔王に報告する事になる。

ならば今度は、3大勢力が集う会議の前に、天界と悪魔陣営の衝突が待った無し、しかも その経緯を知れば、墮天使陣営も悪魔側に味方する事になるだろう。

だからこそ、ミカエルは迂闊な行動が出来ずにいたのだ。

結局アシアの件は、この場の話し合いの主題では無いとし、それ以上語られる事は無く、今回の発端となった、最初にオカルト研究部を訪ねてきた、2人の聖剣使いの非礼な言動についても、機嫌取りの為に取り出した聖剣とは別件で、その前に述べた処罰で、シリューは1000歩譲って一応の納得をする。

そして最後、心底 気まずそうな、そして罰が悪そうな顔をして去ろうとする天使長に、一言。

「まさか、アシアの他にも、教会基準で異端認定の神器所有者を、『利用出来る』という理由で飼育殺しの末に、異端発覚と同時に、蜥蜴の尻尾の如く切り棄てる様な真似は、現在進行形込みで、していないだろうな？」









カの友達が、遠慮無く、コッチのテーブルと同じ、G I G Aプリンパ  
フェを注文しやがった!!

## 停止空間のヴァンパイア

それは、ライザー・フェニックスとのレーティングゲームが終わった後の話。

赤龍帝の、シリユートの強さを目の当たりにした、とある悪魔が、シリユートを眷属として欲し、家族及び恋人を人質に捕り、脅迫しようと画策するも、それは既に その様な展開を想定していた、シリユートの仕込みにより失敗。

この件で喚び出したサーゼクスに対して、事情説明を要請、全開となったシリユートの怒りの魔力と小宇宙（コスモ）、そして殺気が、旧校舎を包み込んだ時の話。



「不味い…本当に不っ味いわ…」

シリユート、マジにキレてるし…。

下手すりゃ本当に私達悪魔、純血転生関係無しに、皆殺しにされるかも…」

この時、リアスとアーシアは既に旧校舎から退避、朱乃や小猫、木場にミルたん、遅れてやってきた関係者に現状を説明、外で待機していた。

「全く、何処の御方ですか？」

そんな傍迷惑な死亡フラグ、立ててくださったのわ?!」

「はわわわわ…シリユートさん、凄く怖かったですう…」

「気のせいかな、校舎が揺れてるによ?」

「ん、確かに揺れてるね。」

「倒壊するかも…」

「…って、それ、凄く拙いじゃない!」

祐斗、小猫!直ぐにギヤスパを無理矢理にでも、外（コッチ）に引っ張り出してきて!」

「は、は…」「…はい。」



リアスに命じられ、木場、小猫、そしてミルたんが、地震の様に揺れる旧校舎内を走り、1F最奥の教室の前で立ち止まる。

「…扉を開けます。」

下がって下さい。」

バキッ!!

『keep out』のテープが貼られ、更には魔法施錠の封印が施されていた扉を、小猫が物理で破壊。

暗幕のカーテンで外の光が遮断されている、暗い教室内に3人が入ると、其処には5人分の生徒用デスクが室内中央に、繋げて並ばれていた。

そして その上には、パソコン等の機材が天板狭しと載っている。

他に、教室内には何も無い。

ガタガタガタガタガタガタ：

「こよう？」

…いや、もう1つ：教室角に、約60センチ角の、ダンボール箱が、小刻みに震えていた。

パサツ

「ギヤスパー君、大丈夫かい？」

「ふえっふえ…ゆ、祐斗先輩い…？」

木場が箱の蓋を開けると、その中には駒王の女子制服を着た、小柄なプラチナブロンドのボブカットの少女…否、少年が、ガタガタと、涙を流しながら脅え震えていた。

ギヤスパー・ヴラディ。

リアス眷属の「僧侶（ビショップ）」で、元・ハーフヴァンパイアの転生悪魔である。

「ここは危険だから、外に避難するよ！」

「へ？嫌あ！お外、怖いっつ!!」

「…へたれヴァンパイア。」

「うわああああああん！」

小猫ちゃんが、いぢめる〜！」

この校舎が倒壊しかねない、大地震の様な危険が非常に危ない揺れの中、それでも校舎外は愚か、ダンボールの中からも出ようとするらしいギヤスパー。

「…仕方有りません。」

先生、お願いします。」

「によー！」

ひよい…

「う、うわわわわわわわ!!?」

そんなギヤスパーを、ミルたんが箱毎 肩に担ぎ、一同は無事、何時 倒壊（はかい）されてもおかしくない、旧校舎から脱出したのだった。



「リアス！何なの？この尋常でない魔力と殺気は？」

「ソーナ！」

「ひいいつ!?ソーナ様と、知らない人が また、沢山来ましたあ!？」

そして、旧校舎から溢れ出る魔力と殺気に気付いた（小宇宙（コスモ）は気付いてない）、支取蒼那…ソーナ・シトリーを筆頭とする生徒会執行部が駆け付ける。

「斯々然々！」

「「「はあああ!?!」「」」」

そしてリアスの説明を聞き、驚きの声を上げる生徒会一同。

「な…何て云う事を…」

「全つく、何やってんだ！連中は馬鹿か？馬鹿なのか？…ってゆーか、馬鹿だろ!!」

「…って、これって、神崎君1人の魔力…な訳？」

呆れ、怒り、慄き…事情を知り、様々な反応を見せる中、次第にこの強烈な魔力と殺気（と小宇宙（コスモ））は納まって行き、

「!!…ルシファー様！」

「神崎！」

校舎の中から、サーゼクスとシリユーが姿を現した。

「ん？支取先輩？匙？」

「や、やあ、ソーナさん。」

「「「「「……………」」」」」」

完全に顔から角が取れているシリューと、まだ少し、顔に青い縦線が残っているサーゼクス。

どうやら一応は、シリューの納得逝く形で、OHANASHIは終わった様だ。



「…で、誰？この少…年んん!?!」

「え?!」

初めて見る顔…ギヤスパを初見で、男の娘と見抜いたシリューが、リアスに尋ね、

「あ…この子はね…」

リアスが とりあえず簡単に、何故、この場に居るのかの説明を含めて紹介。

「え?そんなに揺れていたんですか?」

「本当に、校舎が壊滅するんじゃないかって思ったわよ!!」

ガク…

「嗚呼…諸行は、無常だあ…」

「お前は何を、やっているのだ?」

そしてギヤスパを『男』だと知り、何故かorzっている、生徒会唯一の男子生徒。

「成る程ね、引き籠もりの(元)ハーフ・ヴァンパイアか…」

「うう…」

シリューが目を向けると、リアスの背後に隠れ込むギヤスパ。

「ついでに見ての通り、極度の人見知り…と云うか、対人恐怖症なの。」

「…みたいですね。」

「う、うう…」

決して、不機嫌時の分かり易い893顔をしている訳でもないにも拘わらず、初対面のシリューに対して、真っ直ぐと顔を合わせる事の出来ないギヤスパ。

シリユーだけでなく、アーシア、ミルたん、レイヴェル、ソーナを除く生徒会役員と、知らない顔が勢揃いな中、先程の大地震のショックと併せて完全にパニック、リアスを盾にして、前に出ようとしめない。「やあ、ギヤスパ―君、久し振りだね。」

「さ、サーゼクス様あ…」

サーゼクスが声を掛けるも、ギヤスパ―はリアスの影から出ようとしめない。

それでもサーゼクスは微笑みながら、

「どうだい？そろそろ君も、外で活動してみたら…？」

…と、提案。

「勿論の君の、ネットを介しての実績は理解している心算だが、何時迄も教室に引き攣る訳には、いかないだろう？」

リアスも来年の春には卒業だし、その再来年は、君も卒業予定だ。そうになると どの道、学園からは、今の教室からは出る事になるんだ。

今の内に、外に慣れて行った方が良い。

リアスの下僕としての君自身の為にも、君と云う個人の為にも…」

「ううう…」

相手が悪魔にとって絶対的存在の魔王である故に逆らえない以上に、サーゼクスの言う事は理解出来ているので、反対は出来ないが、それでも この引き籠もり少年にとって、外に出るのは かなりの覚悟が必要な様で、「はい、分かりました」とは なかなか言い出せない。「いやいや、今直ぐに、どうかしようと言っている訳じゃないんだ。少しずつ少しずつ…な、リアス？」

きっかけはアレだったけど、折角、外に出て来たんだし…」

「そーねえ…ギヤスパ―？」

貴方も、何時迄も そんなじゃ駄目だって、それは解ってるわよね？」

「ううう…は、はいい…」

自分の主と、その主の兄である魔王に言われ、漸く了解の返事をするギヤスパ―。



「それと…シリユー君、今のタイミングで、君に頼み事をするのも、アレなんだが、君も、ギヤスパー君の立ち直りに協力してくれないかな？」

「勿論、対価は払うよ。」

「いや、俺は別に、構いませんよ。」

オカ研の後輩を調教（つよく）するのは、先輩の役目ですから。但し…俺は、厳しいですよ？」

サーゼクスの この頼みに、シリユーは嫌な顔をせず、普通に二つ返事で応える。

「お、お兄さんて、オカ研の先輩サンなんですか？」

でも、悪魔でなくて、普通の人間みたいなんですけど…？」

「ん…、確かにシリユーは、人間だけだね、」

「ギヤー君、シリユー先輩は、今代の赤龍帝です。」

「え？せせせ…赤龍帝い…!??!

う…う…ん…（パタン）

「ぎや、ギヤスパーあ…!!」

…いきなり目の前に居た初対面な男が、実は赤龍帝でした…な事實は、彼にとってはオーバーキルだった様だ。



「悪羅悪羅悪羅悪羅…っ!!」

バシイっ!!

「ひ、ひえ…っ!!」

翌日から、シリユーはギヤスパーを徹底的に鍛える、コーチ的役割に就いていた。

この日は体育館にて、バレーボール部の練習終了後、撤収前のネットの後片付けと体育館床のモップ掻きを条件に その儘、バレー部さながらの特訓を施していた。

「こら、ギヤスパー!」

ボールから逃げるなあ!!」

「ひいつ!?だ、だって、怖いですう!」

「神崎君、スパルタだなあ…」



「今回のギヤスパ―君の指導って、結局は魔王様から赤龍帝への、正式依頼ってなつたと聞いたけど?」

「ああ、後輩の指導ってのは、部活の一環だからって依頼でなくても実行するし、対価も不要と言ったんだが、サーゼクスさんも真面目と云うか、律儀と云うか…」

「…と、言う事は、やはり対価と云うか報酬を貰ったのですね?」

何か、奢って下さい。

餡蜜とかケーキとかパフェとかアイスクリーム（すぱーん!）あ痛あつ!?!」

「…、小猫ちゃん!?!」

ギヤスパ―弄りを終え、会話に参加してきた小猫のド頭に、ハリセーンが炸裂。

「大馬鹿者、今回の対価は金じゃない。」

此の度の誘拐拉致未遂騒動の賠償で、高校生としては勿論、普通の日本に生活する者として、3世代位迄なら、余程の豪遊をしない限りは、ニートでも死ぬ迄生活出来る程の金額を悪魔サイドから受け取っているシリユー。

ぶっちゃけた話、今更 現金は…だった。

「じゃ、じゃあ、今回の対価って、何なのですか?」

「あの悪魔（ひと）ってさ、学園の校長や理事なんかにも、色々強権発言が出来る立場だろ?」

あわよくば、自分も便乗してスイーツを御馳走して貰おうとか考えつつ、「自分は言わなくて良かった」と、内心安堵なア―シアの質問に、シリユーは自分の後ろ髪に手を当てながら、答えるのだった。

「…だから、校則、『男子のロン毛もアリ』にしてもらったよ。」

## 停止空間のヴァンパイア②

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「♪〜ラノベ マンガ、買い過ぎて 狭くなってきた、家えーがー!!  
♪」

小猫、熱唱中。

今日は土曜日。

俺達はギヤスパアの対人恐怖症克服の一環として、ボーリング場を経て、ゲーセン、そしてカラオケボックスに…決して遊んでいる訳ではないからな!…に来ている。

メンバーは、俺、アーシア、小猫、ギヤスパア、レイヴェル…それから、俺のクラスメートの…

「小猫っちゃーっん!!♪」

…モブ1号&2号。

「誰がモブだ、誰が!?!」

おい、ナレーションに突っ込むな。

…の、草薙と反町だ。

…ギヤスパアの訓練という事で、オカ研メンバー以外のメンツ…それも、ギヤスパアが全く知らない顔が欲しかったので、普段から教室で、匙と一緒に よく話す2人に声を掛けてみたら、二つ返事でOKの返事。

ついでに言えば、匙やトーカ、ユキコも誘ってみたのだが、

《《《《

「生徒会（ウチ）はボーリングとかカラオケとかゲーセンとか…そーゆーの、全面禁止なんだよ。」（T―T）」

「いや、バレなきや大丈夫だろ?」

それにバレても、ギヤスパアの訓練の協力って言えば…」

「バっカヤロ、通用しないって!」

お前ん所の部長さんは、厳しいながらも優しいだろうがな、ウチの会長は厳しい上に、厳しくて厳しくて厳しいんだぞ!!

バレたりした日にゃ、お尻100叩き（魔力込み）確定だぞ!」

「…それって、お前からすれば、GOHOURIなんじゃ…問題無くね？」

「大バカヤローっ!!」

》》》

…らしく、更にはトーカは部活、ユキコは彼氏クンとデートらしく、NGだと言われた。

彼氏クン…ね。

野球少年らしく、会う度にしよっちゅう惚気てくれてるけど、最終的には実際に会った上で、人と形を見極めない限りは、この劉お兄さん、認めませんよ。

俺は、伯父さん以上に厳しいよ。

閑話休題！

「ねえ、ギヤスパパーちゃん、次は俺と一緒に歌わね?」

「いや、俺と一緒に!」

「はう…はわわわ…」

何気にギヤスパパー人気。

…因みにコイツ等には当然、ギヤスパパーが『♂』というのは黙っている(笑)。

「ギヤスパパー君、大人気ですね。」

「何気に、負けた感が半端無いのは、気のせいでしょうか?」

「気にするな。」

したら、それこそ負けだぞww」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「凄く、楽しかったですわ♪」

ギヤスパパー復学から3日後に、リアスの眷属として新たに、オカ研部員となったレイヴェル・フェニックス。

冥界には若者向けの娯楽が殆ど無いのか、この日のボーリングくらオケで、一番楽しんでいたのは、実は彼女だったりした。

カラオケの後、解散、クラスメートやオカ研女子部員と別れたシリユー、そしてギヤスパパーは、学園に向かっていた。

ガラ：

「失礼します。」

「お疲れ様、シリユーとギヤスパー。」

待っていたわよ。」

部室に顔を出すと、伊達眼鏡を搔けて：曰わく、頭が冴える気がするらしい：何やら分厚い魔導書の様な本を読んでいたリアスが居た。

「じゃ、早速、始めますか。」



「よし、行くぞ。」

「は、はいっ！」

オカ研部室隣の教室。

何時の頃からか、『シリユージム』と呼ばれる様になった部屋で、合い十分な顔を見せ、身構えるギヤスパー。

そんなギヤスパーの前で、シリユーは手に持った小さな箱から、3つの小さなボールを取り出して、床に叩き付けた。

カンツ x 3

勢い良く弾むボール。

「えやああっ!!」

ギヤスパーは その3つの卓球（ピンポン）球を刮目（ガン見）する。

ピタ…

「…!!」

すると、3つの内の2つ：確かに2つのピンポン球が、1秒に満たぬ時間ではあるが、確かに空中で静止した。

「ハアハア…出来…ました…?」

ギヤスパーの神器、【停止世界の邪眼（フォービドウン・バロール・ビュー）】。

その能力は、『視界に写る空間を、一定時間停止させる』事。

その能力を発動させ、床を弾む球を停めてみたのだが…

「まだまだだな。とりあえず、3つのボール、全てを一度に、誰の目で

も判る様に、最低でも数秒間は停めないと、合格には…次のステップには進めんどぞ。」

「う〜…」

ギヤスパーとしては会心の結果な心算だったが、教官役のシリューは辛口採点。

「俺は、同様な技能は持ち合わせてないので、具体的なコツ等を教える事は出来ん。」

お前自身が訓練繰り返しで、それを掴むしか方法が無いし、俺達はそのサポートしか出来ない。」

「は、はい！頑張ります！」

「…ふ〜ん？」

「??」

その遣り取りを見て、リアスは感心したかの様に呟く。

「部長？」

「いえ、ごめんなさい。」

シリューって、鬼畜教官みたいな真似しか出来ないと思っていたら、案外マトモにコーチしてr…ごめんなさい！失言でした！

だから、ハリセンは止めてえっ!!」

パシパシ…

「全く…次、何か下らん事を言ったら、学食にてファンの前で、カレ〜うどんをホースで吸って食べて貰いますよ？」

「そ、それも嫌ああっ!!」

凶器（ハリセン）に怯え震える、泣き顔リアスの余りに心外な発言に、少しだけ893modeを発動させるシリュー。

一応 前世では、実子や養子を基、数多くの聖闘士を育て上げてきた実績が有り、後陣の育成には定評が有ったのだ。

「とりあえずは動いてる標的を全て、ある程度迄は止められる様にしてないとな。」

「は、はい！」

因みに今回、シリューの頭の中に描いた とりあえずの最終的な理想は5色以上、合計30ヶ以上のピンポン球を一度に弾ませ、指定し





…が、過去に受けた虐待に加え、自身の持つ神器の危険性を理解していたギヤスパ―は対人恐怖症を拗らせ、引き籠もりに。

学園も、小猫と同じクラスとなるが、入学早々に休学扱いとなっていた。

…そして今回の騒動で外に出たついでに、サーゼクスから脱・引き籠もり及び、神器のコントロールを課せられたギヤスパ―だが、神器の制御は牛歩ながらの進展は見受けられるが、対人恐怖症克服の方は、まだまだ前途多難な様だ。

## <br>校庭崩壊の白龍皇

はぐれ悪魔討伐任務（但しシリユー抜き）

「この廃屋…ね…」

…ぶっちゃけ、リアスは かなり、焦り苛立っていた。

この最近の、彼女の周りに起きた、大きなイベント。

ライザーとのレーティングゲーム。

コカビエルの聖剣騒動。

コカビエル襲来は、相手が伝説（レジェンド）級なので仕方無いとしても、その前の、自分の婚約破棄を賭けたレーティングゲーム、その経緯は兎も角、その結果は悪魔社会（よのなか）の目からは、赤龍帝（シリユー）に負んぶに抱つこな風に見られていた。

一応、自分の眷属である兵士（ミルたん）が、駒の価値からすれば格上である、僧侶、騎士、戦車を撃破しているから、多少のフォローは出来るが、もしも あのゲームにシリユーが参戦せず、リアスを【王】とした、純眷属だけで戦ったとしたら？

そして、今のリアス・グレモリーに、ライザー・フェニックスが下せたか？…となると、疑問符しか浮かばない。

故に、実績が欲しい。

別に、大金星でなくても良い、兎に角、悪魔社会の風評を吹き飛ばす程の実績が。

コカビエル襲来の後、『本来なら脳味噌に行くべき栄養が全て胸（バスト）に逝ってしまった、紅髪の駄肉姫』だのと、褒め言葉な…否、不名誉な二つ名が冥界に徐々に浸透しつつある事実が、彼女の焦りに拍車を駆けていた。

「絶っ対に見つけ出し、OHANASHIしてやるんだから!!」

怒り浸透のリアスが、最初に この銘を附けた張本人を、自身の下僕だけでなく、グレモリー家の使用人さえも動員して捜し出そうとするも、手懸かりさえも掴めず。

「もしかすると、これは冥界の外の者の仕業やも知れませぬな」…と



「けっ！何が貴族様だ！

雑魚い分際で、生まれだけで偉そうにしてるんじゃねーよ！」

グレモリーの名を聞いても、はぐれ悪魔：ドラム口は臆する事は無い。

「消し飛びなさい!!」

そんな態度にカチンと来たのか、リアスが前に踏み出し、問答無用で巨大な魔力弾を撃ち放つが、ドラム口は見た目からは想像出来ない様な素早さで、これを回避。

ボゴツ！

標的に躲された滅びの力は壁に着弾、綺麗な真円の大穴を作る。

そしてドラム口は、その回避のスピードを攻撃に転換、両手の爪を鋭く延ばし、リアスに向けて一直線に襲い掛かるが、

「…えい」

どん！ズバアツ！

【王（キング）】を護るべく、前に立った小猫が、カウンターの一撃を浴びせる。

「ヤツは【騎士（ナイト）】なのか？」

「いや、報告では、アイツは【戦車（ルーク）】だった筈だよ！」

「それじゃ、あの素早さは『素』なのか？」

…つてアーシア？」

「シリューさんは、見ちゃ駄目です！」

しかし、小猫が拳を繰り出したと同時に、ドラム口も鍵爪の斬撃を放っており、それはリアスの盾となっていた小猫の制服を斬り裂いた。

それにより右側の小さな丘が露わとなると、透かさずアーシアがシリューの背後に回り込み、背伸びして、両手でシリューの両目を覆い隠すのだった。

「痛つてーだろうが、この弩チビ！」

「む…どちび…」

パサ…

台詞の割には効いた素振りの見せないドラム口は、背中から悪魔の

羽、そして薄い透明の、昆虫の様な羽を広げると低空滑空し、再度、リ  
アス達に突撃を仕掛ける。

「させないよー!」「によー!」

その前に立って迎え撃つのは、木場とミルたん。

更には、

「雷よおっ!」

カツ!

朱乃が その後方から雷撃での援護射撃。

「せいやあっ!」

斬!

間髪入れず、木場が魔剣を創り出して斬り付けるが、

「今、何か、したのか?」

ドガツ!

「うわあっ?!」

ドラムロは その剣を右腕で受け止めると、その勢いの儘、強烈な  
裏拳を騎士の顔面に叩き込み、吹き飛ばした。

どん!

「ぎやあっ?」

そして木場は その儘、朱乃に激突。

「終わりかあ?この雑魚があ!!」

雄叫びと共に、ドラムロの浅黒かった肌が、更にドス黒く変色。

同時に身体も二回り近く大きくなり、着ていた衣服が引き千切れる  
と、その下からは まるで甲虫をイメージしたかの様な、鎧の様な地  
肌が剥き出しとなり、額からも、1本の硬そうな角が生える。

「ベースは昆虫系の妖魔か…」

「はっ!その通りよ!人間!」

シリユーの眩きに、はぐれ悪魔は肯で応える。

「俺は元々ガタイには自信があったがな、更なるパワーを得られるつ  
てゆーから、悪魔に転生してやってみたら、やれ上級悪魔に対する礼  
儀だの、やれ眷属としての嗜みだの、雁字搦めぢやねーか!

俺は そんな、お行儀を学ぶ為に、悪魔になった訳じゃねー!!」

「力を欲して力に呑まれた、典型的なタイプですね…。」

「力！力！力！！ その、何が悪いのだ?！」

力が無い雑魚の分際で、偉っそうに下僕なんざ拵えて、偉っそうに指図するから、その下僕に殺されるんだろーがよー！」

レイヴェルの言葉にも、その何が悪いとばかりなドラム口が、次の獲物とばかりに目を向けたのは、当然レイヴェル。

「やれやれだな…」

この時のドラム口の台詞に、シリユートの目が冷めた物となる。

はぐれ悪魔…その殆どは、与えられた力に溺れ、場合によつては主を殺害しての出奔だ。

しかし、主人の横暴な振る舞いに耐えきれず、やはり時には主に手を掛けての逃亡な場合もある。

その場合、身内や恋人等を人質に捕られ、無理矢理に転生させられた者も、少なくないと云う。

少し前、シリユー自身が、そういうパターンに陥りかけた際にサーゼクスにOHANASHIして、今後、そういう者は出奔時の主殺しは不問とした上で、それ以外の罪を犯していない者は保護、或いは悪魔側の敵対勢力に就いたり、人間界で悪さをしないと約束するならば解放するという仕組みを作り上げていた。

因みに保護された者は、シリユーが悪魔側と同盟を結んだ際に受け渡された、グレモリー領とシトリー領の一部、両領地の境部分に新たに制定された、シリユートの領地に住むようになる。

また、現在の上級悪魔の眷属となっている転生悪魔に対しても、無理矢理に転生させられた者は、はぐれ認定とせずの出奔を認めさせると、決して少なくない人数が、シリユートの領地に移住したり、冥界を去ったりしていた。閑話休題。

シリユーからすれば、無理矢理に転生させられ者ならば、頃合いを見て戦闘途中に横から入り込み、話し合う事も有ったが（断じてOHANASHIに非ず）、力に溺れた者ならば、話は別。

今回…今は最初にリアスに言われて、手を出す心算は無いが、既に途中で「待った」を掛ける考えは失せていた。

「燃えなさい！」

ぼわあっ!!

そしてドラムロにターゲットにされたレイヴェルも、大人しく攻撃を受ける心算は無く、翳した掌から、炎の球を投げ飛ばす。

「熱ちちり!」

先程の朱乃の雷撃は、大した効果を得られなかったが、この炎の攻撃は有効だったのか、嫌がる様にガードするドラムロ。

「隙あり！」

斬!

「うげや!」

このタイミングで、木場が背後に回り込み、生来の虫の羽と転生で得た悪魔の羽、4枚の羽を炎の魔剣で斬り落とす。

「体は固くても、羽の付け根は そうでもないんだね？」

「が…ガキイ…!!」

ドラムロが木場を怨めしそうに睨み付ける中、リアス眷属のターンは終わらない。

「アクアたん、 出番によ！」

バシヤアツ!

ミルたんが床に魔法陣を展開させると、其処の中心から彼女?の使い魔である、水精（ウンディーネ）のアクアが姿を現し、

「せーによっ!!」

ドガアツ x 2 !!

そして2人揃って、魔力を込めた拳を床に打ち付けると、

「」「」「きやああっ!」「」「」

「うわわっ!」

「うをゐっ?!」

「ぬわおっ!!」

その衝撃から立つのも儘ならぬ程の震動が生まれ、ドラムロだけでなく、シリユーを含むオカ研メンバーも、体勢を崩してしまい、アシアとギヤスパーに至っては、その場に へたり込んでしまう。

ドボン…

そしてアクアは、まるで水の中に潜り込む様に、床下に姿を消すと、バキィッ！

「ぐべっ！」

やはり水面から飛び跳ねるが如く、ドラムロの足下から姿を現し、その勢いの儘、強烈なジャンピングアッパー…ドルフィンブローを放ち、はぐれ悪魔を天井まで吹き飛ばした。

「によっ！」

そして それを追う様に、ミルたんとアクアがジャンプ。

空中で2人掛かり、ドラムロの両手両足、首を完全ロツクした儘落下からの、

「ミルたん・NIKU⇒LAP、によー!!」

DOGAH!!

本人曰わく、魔法少女の嗜みらしい、ツープラトンでの肉体言語を炸裂させた。

「ぐ…ぐべびぶ…べぼ…ほわ…」

打撃や斬撃、雷撃には耐性が有っても、肉体言語には耐性が無かったのか、それとも この攻撃自体が、防御耐性を上回っていたのか、意識朦朧、虚ろな表情で それでも覚束無い足取りで、フラフラと起ち上がるドラムロ。

「ガ…キィ…」

戦意こそ喪つてはいない様だが、其れ等の佇まいは『効いたフリ』な演技でない限り、既に勝敗は決しており、

「コホン…改めて、消し飛びなさい!!」

ドシュッ!!

最後はリアスの滅びの一撃で、ドラムロの肉体は跡形もなく、此の世から消滅したのだった。

「ふう…皆、お疲れ様。」

前髪を掻き上げながら、リアスが自分の下僕に労いの言葉を懸ける。

その笑顔はシリユー抜きでの討伐任務達成、その戦果に充分満足している様だった。



「さあ、部室に戻って、お茶でも飲みましょ。」

「ええ、部長。」

でも、その前に…反省会ですね。」

「え??？」

ピシイ…

しかし、そんな御機嫌顔も、僅かながらに怒っている感じな赤龍帝（シリユウ）の顔と言葉に、まるで石化したかの様に、硬直してしまうのだった。

## 躊躇いと覚悟

はぐれ悪魔ドラム口を討伐した後、オカ研部室に戻ったりアス一行。

「……………」

ぶっちゃけ、リアスはカーナリー、焦っていた。

眷属数人が多少のダメージを受けたとは云え、全体的に見れば、会心の戦闘内容だったと言える程の自信が有る。

…にも拘わらず、わざわざ「反省会」と銘打って今から行われる、シリユー主導のミーティング。

「……………」

シリユーの結構マジな顔に、リアスだけでなく、眷属全員が緊張していた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「先ずは皆、今回の勝利その物は、見事だったと思う。

これで少しは、部長に対する悪魔社会（せけん）の目も、良い方向に修正されて行けば…ですよね、部長？」

「そ、そうね…」

…ちよ、いきなり褒め言葉？

『反省会』とか言っておきながら、先に そーゆー風な発言されるって、尚更 何を言われるのか、凄く怖いんですけど？

「……………」

ほら、他の下僕達（みんな）も、表情（かお）が引く攣（こわ）んでいるわよ？

ついでに何故か、反省会には関係無い筈の、アーシアも！

「…だが、先ずは、リアス部長！」

「ひゃ、ひゃい！？」

はい、いきなり私、キターーーー！！

「部長は一応は【王（キング）】でしょうに？」

いきなり一番前に出て、ぶつ放してんじゃないですよ！

バカですか？バカなんですか？

しかも その一撃も、見事に外してるし！

王なら王らしく、最初は後方で控えて前衛に指示を出していたらどうですか?!

まさか本当に、脳味噌に届くべき養分が、無駄に胸に集中してるんじゃないでしょうか?!

リアルに駄肉ですか?!」

「かはあつ!!」

「二ぶ、部長お?!」

止めて！私のMP（メンタル）は、もう0よ!!

後、駄肉言ーなあ！

「次は木場！」

「は、はい！」

…で、次は祐斗ね。



「何故、聖魔剣を使わない？」

つい この前、禁手（バランス・ブレイカー）に至ってばかりなのに早速、切り札温存を気取っている心算か？

そういう考えは、聖魔剣を十全に使いこなせる様になってからだ！

兎に角 今は、訓練や実戦でガンガン使用して、感覚を掴むのが最優先だ。

それを踏まえれば今回の敵は、最適な練習相手だった筈だぞ？」

「うん…そんな風に言われると、何も言い返せないよ…」

「そして次は、ミルたん！」

「によによっ!」

シリユウのマシガントークな駄目出しは終わらない。

「最後のプロレス技？は特に問題無いが、最初に使い魔と一緒に放った、地震攻撃擬きは、完全にアウトだぞ！」

あんな味方も巻き込む様な無差別な攻撃は、封印すべきだ。」

「うゝ、面目無いによ…(´・ω・´)」

しよぼーんとなるミルたん。

「レイヴェルは、まあ…可も無く不可も無くだったが、ギヤスパー？」



と云う表情をしながら口を開く。

「実は前々から、何時か言おうと思っていた事だが…2人とも、強くなるうという心算はあるのか？」

「…!!」

余りにもストレートな問い掛けに、言葉を飲み込む2人。

「小猫は最初、部長を護る為に前に立った時の一撃、駒の特性を活かしただけの、只の馬鹿力なパンチだったな？」

「…!!」

「そして、朱乃先輩の放った雷撃は、本当に只の『雷』だけの攻撃だった。」

「……………」

この言葉で、シリユーが何を言いたいのか察した2人は、俯くと、まします無口になってしまう。

「小猫が あの時、繰り出す拳に仙術で練った『氣』を纏わせて放っていたら、もっとダメージが通っていたかも知れない。」

「……………」

「朱乃先輩も そう。」

あの雷撃が、『光』を織り込んだ『雷光』だったら、今回の戦いはずっと有利に進められていたかも知れない。」

「……………?!」

確かに、最初にシリユーは言った。

『リアス部長から、ある程度は聞いている』…と。

2人が、この『ある程度』が、どの程度まで聞いており、逆に自分達の事を何処迄知っているのかを、更にはリアスが何処迄話したのかを問い質したくなるが、シリユーの厳しい顔は、それを赦そうとしない。

「小猫、昔は どうだったかは知らないが、ギヤスパは今、自分の神器を怖れず、制御して使いこなそうと努力している。」

普段、アイツを『へたれ』扱いしているお前は、自分の中の仙術（チカラ）を畏れて、逃げた儘で終わらせるのか？」

「そ、それは…」

シリユールの言葉で、更に黙り込む小猫。

「朱乃先輩も、自分の中に流れる『血筋』故の力を忌みてるのは解る。

…でも、それも結局は小さく下らない、個人の我が侷に過ぎない。」

「な…し、シリユール君に、私の何が解っていると云うの?!」

そして小猫とは逆に、自分にとって それは余程禁忌な事だったのか、朱乃は大声で反発する。

「解るさ…。少なくとも、自分の持っている能力(チカラ)を、単に自分の好き嫌いだけで使わないって事位はね…。」

「なっ…?」

「正直、こういうのは言いたくは無かったが、自分の中に流れる血を怨むのは御門違いですよ。

強いて言うなら、怨みを ぶつけるべきは、母方の血族じゃないのですか?」

その対象が一切存在しなくなったからって、残った父親に筋違いな怨みを当てて、その血の繋がり故の力を否定して、それで無理矢理に自分を納得させて、終わらせる心算ですか?」

「そ、それは…!」

しかし本音を…核心を突かれ、小猫同様に、朱乃は何も言い返せなくなってしまう。

「し、シリユール?」

もう少し、ソフトに言っても…」

実際には シリユールの言っている事そのまま其の通りなのだが、余りにも遠慮も容赦も無い口っ振りに、今迄ずっと静観していたリアスがフオローしようとするが、

「何を言っているんですか!」

そもそも部長? こういうのは本来、俺が言うのではなく、部長が主として、論じて行くべき事でしょう?」

「う…」

「グレモリーは慈悲深いので評判らしいですが、如何にデリケートな問題だからって、部長の様に全く触れずにいるのは、慈悲なんかじゃない、只、過保護で無責任なだけです。」

「うう…!？」

それに対して待っていたのは、痛烈なカウンターの口撃だった。

「…聖闘士には、主神であるアテナが、その使用を禁じた技がある。」

「シリュー君?」

そして不意に、シリューは聖闘士の事を話し出す。

いきなりの話題の切り替えに、戸惑う朱乃達。

「それは、破壊力も然る事ながら、その技の行使自体が、聖闘士として有るまじき行為に他ならないからだ。

一度使用するだけで、その者達は聖闘士の称号を剥奪されると共に、未来永劫、外道の烙印を押され、蔑まれる事となる。」

「……………?」

「…しかし、死して尚、アテナの為、そして地上の正義と平和の為、敢えて、その汚名を被るのを承知で、その技を断行した男達を、俺は知っている。

彼等の覚悟に比べたら、朱乃先輩や小猫の躊躇いなんて、本当に只の我が侬以外の何物でも無いですよ、俺からすればね。」

「……………。」

シリューは其処迄話すと、

「…俺が言えるのは、此処迄ですよ。

後は、自分自身が一步前に踏み出すかどうか…そして、そのフォー、背中を押すのは、部長の仕事ですよ。」

ソファアールから立ち上がり、部屋の扉の前迄歩くと、

「折角の勝利ムードを、ぶち壊したという自覚は有ります。

…でも、今日の皆の戦い方を見て、どうしても言っておきたかったのも、理解して欲しい。

今日は、もう、お茶って空気じゃないでしょうか、解散で良いでしょう?」

パタン…

「ちよ…シリュー?」

それだけ言うと、応接室を出て行った。



『ああ、確かに、そんな出来事も有ったよな。』

…あの後は結局、シリューの言う通り解散となり、部室に1人残ったリアスは、スマホを取り出し、シリューの話していた事柄を知っているとと思われる人物に連絡を取っていた。

「…ベツロさん、本当の事だったのね?」

「あの堅物が、そんな嘘を言う様に見えるかい? リアス嬢ちゃん?」

「じよ…?!」

その電話の遣り取りの途中、相手の自分の呼び方に、リアスは言葉を詰まらせた。

ベツロ・カンクロ。

この世界線に於ける、ギリシア・オリンポスの1柱である女神アテナの眷属であり、嘗てはシリューと同じ前世にて、最強と謳われた12人の黄金聖闘士(ゴールドセイント)の1人、蟹座(キャンサー)のデスマスクである。

「…そつちで何が有ったかは、俺が立ち入るべきじゃないから、詳しく聴く心算は無いが…あの紫龍が…そういう話をするって事は、余程な事じゃないのかい?」

…察するに、あの猫っ娘のおチビちゃんや、ポニーテールのお嬢ちゃんが自分の内側(なか)の力を使う事の躊躇に対する、覚悟不足の指摘でも したのかい?」

「なあ!? あ、貴方もしかして、こつちの現場、覗いてたんじゃあないでしようね?」

余りにもピンポイント過ぎる予測分析に、リアスは顔を赤くして、デスマスクを問い質す。

「いやいや、その辺りは、俺も この前の墮天使との戦闘で感じていたからね。」

何故、自分の持ち得る能力(チカラ)を活用しない?…ってね。

アイツも、同じ考えなんだろうよ。」

「はあ…分かったわ。」

ありがとう、ベツロさん。

こんな夜に、電話して ごめんなさい。



それじゃ…」

そう言つて、電話を切ろうとするリアス。

「ああ〜つと、リアス嬢ちゃん、物の序でだ、最後に1つだけ…」

「はい?」

しかし、デスマスクが それを止めて、話し始めた。

「紫龍が話していたって人物な、3人居るんだが…」

「ええ、具体的には どんな技かは話さなかったけど、その話し方から、複数人で繰り出す技と云うのは、何となくだけど分かっていたわ。

それでも『死して尚』とか、訳解んなくて、聴きたい事は、他にも沢山有るけど…

それと、私の事は呼び捨てで構わないから、嬢ちゃんは止めて。」

「その内の1人は、アイツの右腕にエクスカリバーを託した人物だ。」

「え…?」

「アイツ等の覚悟を知っているから、そつちに どんな事情が有るかは知らないが、力の出し惜しみが許せなかったんだろう。」

それが、道ずれ系の自爆技とかなら、また話は違ってくるだろうかな…」

「ん、分かったわ。」

シリユーにも言われたけど、後は私が何とかするから。」

「ああ。じゃあな、リアスちゃん。」

Pi…ツーツー…

「…結局『ちゃん』付けかい!!?」



翌日の放課後。

ガラ…

「…ちわつす。」

「こんにちは〜。」

「あら、シリユー君にアーシアちゃん、こんにちは。」

部室に顔を出したシリユーとアーシアに、朱乃が笑顔で応える。

「小猫は?」

「小猫ちゃんなら もう、ギヤスパー君と仕事に行っていますわ。」









ぼわあっ!!

「貴様…一体 何者だ!?!」

思い出したかの様に小宇宙（コスモ）を全開、威嚇する様に、質問を投げ掛けた。

「おいをゐ、ちったあ落ち着けよ。」

別に俺は、お前達と事を荒げる心算は無いぜ? ん? 赤龍帝?」

「なに?!」「え?」

初対面な筈のシリユーに対して、『赤龍帝』と呼んだ男に、シリユーだけでなく、小猫とギヤスパーも、驚きの顔を見せる。

バサ:

そして男は、背中から6対12枚の漆黒の翼を広げて、名乗るのだった。

「初めまして…だな。」

赤龍帝と、サーゼクスの妹の眷属達よ。

俺の名はアザゼル。

【神の子を見張る者（グリゴリ）】の総督をやっている者だ。」

「……………」

その名前を聞いた瞬間、シリユー達の思考は一瞬停まり、ぽつくぽつくぽつくぽつく ちーん…

そして脳内フリーズが解除された時、

「え、ええー……ええーっ!?!」

小猫とギヤスパーは先程以上に驚き、

【赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）】!

(Boost!!)

シリユーは自らの神器を発動させ、戦闘の構えを見せる。

「だーかーら、待ってって?」

別に、お前等とバトる心算は無いって言ってるだろ?」

そんなシリユーに対して、両手を上げ、戦意無しポーズを見せる







した」…な報告を受けたりアスは、机を叩きながら大声で ぶち撒けた。

「まあまあ、今迄、結構儲けさせて貰った訳だし…」

「それでも…」

「さつき報告してみたら、サーゼクスさんも言ってたじゃないですか？

アザゼルは、昔から あーゆー男だから、気にしたら負けだって。」

激怒（おこ）状態なりアスを、笑いながら宥めるのはシリユー。

「あわわわ…」

その後ろでは、今回の対価である、パウロだかヨハネだかな聖人が描かれた…一見は素人の落書きにしか見えない絵画を持って、あわわわしているギヤスパート、

「…早く お話、終わらせて、お茶…」

対価その2…というか、お土産として貰った、ケーキの詰め合わせな箱を両手で持っている小猫が、2人の遣り取りを見守っている。

「ゴカビエルや白龍皇については、何も話さなかったの？」

「一応、話は振ってみたけど、曰わく『今度の会談で、纏めて話す』…と。」

「…に、しても、正体明かした後も、楽しくゲームしてるなんて…」

「いや、負けツパは悔しくて…でなく、一応は依頼人だし、本人も戦る気0でしたし、あの場で下手にバトったりして、周辺壊滅させる訳にも逝かないでしょう？」

「…あの儘、普通に接してるのがベターだと思いました。」

…この後、オカ研メンバー全員のミーティングにて、レザザ・ユダヤ…墮天使総督アザゼルは、グレモリー眷属顧客のブラックリストに登録されたのであった。



「…で、小猫？」

付いて来て欲しいって、一体 何事だ？」

「……………」。

後で、話します。」

ミーティングも終わり、部活解散後、帰宅しようとしたシリユーを小猫が「用事がある」と捕まえ、2人が足を運んだ先は、学園から少し外れた場所にある公園。

シリユーとアジアが初めて逢った、その公園内は既に時間帯が時間帯なので、内部には人1人居ないであろう。

「……!!」

「……………」。

そして、その敷地内に足を踏み入れた瞬間に、シリユーは違和を感じる。

既に過去、何度も感じた事のある違和感、それは『人払いの結界』。

「…先輩、こつちです。」

「お…おう…」

最初から結界の存在が分かっていた様な顔の小猫が、その儘 公園奥にシリユーを連れ出すと、遊歩道の脇に設置されたベンチには1人の人影が。

「……………」

そのベンチに座っていた人物もシリユー達の存在に気付くと立ち上がり、凄まじい勢いで駆け寄って来ると、

がはっ!!

「しゅろねくえ!

『会って話したい事がある』って連絡してくるなんて、お姉ちゃん嬉しいにゃ〜!!」

ジャンピングダイブで、小猫に抱き付くのだった。

「お、お姉ちゃん??」

「……………」。

「ん?お前、誰にゃ?」



ドラゴン…って、赤龍帝にや?!」



黒歌。

小猫の実姉の妖怪・猫又の上位種族である、猫道からの転生悪魔。但し、その体内（うち）に溢れる仙術の力に自我を奪われ溺れ、主である上級悪魔を殺害した後に逃亡。

悪魔サイドは その戦闘能力から、SS級はぐれ悪魔と認定して行方を追っていたが、冥界出奔からの消息は、終ぞ掴めていなかった。

「はあ?!にや…何にやの、それ?!」

捏造だにや…っ!!」

シリユーから冥界に於ける、自身の立ち位置を聞かされ、心外だとはばかりに絶叫する黒歌。

今は真夜中。結界内でなかったら、とんだ近所迷惑である。

そして、自身の潔白を訴える様に、弁明し始める黒歌。

曰わく、主である悪魔（妻子持ち）が、自分を手籠めにしようとした処、正当防衛の名の下に成敗、振り返りにしたのは良いが、確かに殺り過ぎた感も否めず。

何れにせよ、主殺しは大罪故に、冥界には自分の居場所は既に無い…そう判断した黒歌は、気懸かりながらも、まだ幼い妹の白音…つまり小猫を連れ出す暇も無く、単身で冥界を去った…と云う。

「あの時は女王（クイーン）以下、他の眷属悪魔達も一緒だった筈にや!」

何でアタシが、仙術の力に溺れて暴走してないとイケないにや!!?」



冥界での定説を聞かされ、かなり御立腹な小猫の姉。

確かに、恐らくは天然であろう その口調には若干の…いや、かなりなイタさを感じるが、能力（チカラ）に酔いしれて暴走している様には思えない。

俺がリアス部長から聞いていた情報とは、全くと言って良い程に印象が違う。

「…と、すると、他の眷属が其の当たりを黙っていたか、或いは『家』



と。

「そのグループから抜けないと、保護は難しいかも知れないな。」

それと、そのグループの情報というのは、今此の場で話せるか？」

「基本的、『去る者追わず』だし、妹の事は話した事あるから、その当たりを話せば問題無い筈にや。」

後、この先、敵対するならまだしも、簡単に仲間は売れないにや。」

御尤もな意見で。

そういう会話をしていると、

♪ヤヤヤ♪ヤヤヤ♪

スマホに着信。

相手は…サーゼクスさんだ。

「…了解。」

彼女には、俺から伝えとくから、そっちの処理は、ヨロシク。」

Pi…

俺はスマホをポケットに仕舞い、

「魔王ルシファーからの報告が届いた。」

たった今、リアス・グレモリーが眷属、塔城小猫の姉にして、SS級はぐれ悪魔・黒歌の潔白が認められ、正式にはぐれ認定が解除された。」

「!!」

「身柄は暫定的に、赤龍帝である、俺の預かりとなるが、どうする？」

冥界に戻り、俺の管轄する地に住むも好し、悪魔陣営に敵対しないを条件に、現状に落ち着くも好しだが？」

「それなら、白音と一緒に暮らすにや!」

「え?」

とりあえずの処遇報告をして、今後の身の振り方を聞いてみると、何となく想定通り（小猫からすれば、まさか）な応え。

「これからは、ずっと一緒にや〜♪」

がばっ!!

「え、?ちよ…姉…様…?」







が、同時炸裂したのだった。

嵐の前の ほんのぼの？

トントントントン…

「神崎君、野菜、切ったよ。」

ジャツジャ…

「応。それじゃ、次は…」

7月初めの週末。

とあるマンションのキッチンにて、駒王の制服の上にエプロンという出で立ちの男が2人、台所で調理中。

シリューは この日、木場の助っ人として、木場の顧客の1人である、外資系OLの下に馳せ参じていた。

仕事内容は夜食調理。

何時も週末は、帰宅が夜遅くなる彼女に変わり、食事の準備をするのが仕事だ。

普段は特にメニューを指定しないのだが、この日は「兎に角、がつつり食べたい！食材は冷蔵庫に沢山ある！」と言うので、木場がシリューに援軍を依頼したのだった。

因みに この日のメニューは『孜劉特製焼き餃子』、別名『ギヤスパー・キラー』と『肉と野菜たっぷりな中華風・餡掛け硬揚げ蕎麦（擬き）』。

「ん〜♪美味しい〜！」

それは、依頼人（クライアント）からも大絶賛の2品だった。



「只今、戻りました。」

「同じく。」

「はい、祐斗にシリュー、お疲れ様。」

部室に戻った2人に、部長のリアスが労いの声を掛ける。

「部長、小猫は？」

「黒歌と一緒に、仙術修行してるわよ。」

小猫の実姉、黒歌は学園編と同時に、オカルト研究部に入部していた。



「二プール？」」

オカ研メンバーが全員、部活（しごと）や特訓を終え、解散の前に、土日の予定を話すリアス。

「部長、日曜日にプールで何か有るんですか？」

「実は、生徒会（ソーナ）から、プールの清掃を頼まれてね？」

「ふわあつつ？そんなの、美化委員か水泳部の仕事でしようが？」

何故にオカ研（おれたち）が!？」

「実はね、掃除が終わったら、一足先にプールを好きに使って良いって、ソーナ様に言われたんですの。」

What's? なシリューに朱乃が解説。

「安い対価だな…」

「べ、別に良いでしょ？」

私達美少女の水着姿、堪能出来るし、シリューだって、プールなら上半身真っぱになっても、誰も文句言ったりしないわよ？」

「どういう意味ですか？」

…多分、リアスからすれば、そのまんまな意味である。

「それから、自分で美少女（笑）、とか言うなし。」

「う、うっさいわね！」

兎に角、日曜日はジャージとかの汚れても大丈夫な服装と、勝負水着持参の事！

それじゃあ解散！

「何なんだ？『勝負水着』って…？」

因みにミルさんは、リアス眷属ではあるが、オカ研部員以前に、駒王の生徒ではないので、普通に お休みとなった。

「バイトのシフト、入れてたによ。」



翌日の土曜日の昼過ぎ。

「……………」

朱乃は自宅神社の庭で、自ら張った、『人払いの結界』の中、精神と魔力を集中、研ぎ澄ませていた。

「…雷よお!!」

カッ!…ドゴオツ!!

右手を天高く翳し、天空から呼び寄せた雷は石畳を直撃、以前、ゼノヴィア・クアルタが「破壊の聖剣（エクスカリバー・デストラクション）」で作り上げたクレーターと、同等の物を作り出した。

「……………」。

そして数秒間、思い詰める様に そのクレーターを見据えると、

「…雷光よおつ!!」

ピカッ!!ドツガアアツ!!!

先程の それとは明らかに違う、閃光を纏った雷が同じ場所に直撃、やはり以前、シリユーが見せた、己の拳で穿ったクレーターには劣るが、先のクレーターを掻き消す程の巨大なクレーターを、上書きするかの様に作るのだった。

「…私だって、やろうと思えば…」

でも…この力は……………母様…私は…」



そして日曜日。

「あら?シリユーは まだ、来てないの?」

「あ、あの…」

「アーシアちゃん?何か心当たりが?」

「朝食の時、トーカさんが今日は昼前からデートだって言っていましたから、多分…」

「あゝの鬼畜ドラゴン、さてはブツチしやがったにや!」

「まゝ!明日は、OHANASHIですわ!!」

「ははは…」

「はう…皆、怖いですう…」

「…私に良い考えが有ります…!!」



「…と、ゆう訳で、罰として、今から部長と朱乃先輩と黒歌姉様の『ぴー』な画像を送ると同時に、トーカちゃんにチクってあげます。』

『R18指定だにや!!』

「よおーし、小猫さん、黒歌さん？」

此処は1つ、穩便に少し話し合おうじゃあないか！」

結果からすれば、プール清掃から逃げた代償は、余りにも大き過ぎた。

デートの最中に掛かってきた、木場を除くプール清掃に出向いていたオカ研メンバー：リアス、朱乃、黒歌の痴女一歩手前な布が少な過ぎる水着、レイヴェルの清楚系ワンピース、そして残る3人の お揃いな学校指定スクール水着の画像を送り付ける&、即座に彼女（トカ）に報告という脅しに屈したシリューは、翌月曜日から1週間、オカ研女子部員に、学食にてデザートを御馳走する羽目になったと云う。











「そうだろ？ほら、類友ってヤツだよ。」

いや、サーゼクスさん、あんなのと類友って、それは流石に白龍皇に失礼だよ……？

「…って、アンタ！何時から居んだ？」

「「「「「あーっ!?!」「」」」」」

皆、吃驚。

気が付けば、何時の間にか魔王1人とメイドさんが1人、部室に居て然り気無く会話に混ざっていた。

「ほ、本当に何時の間に…」

…ってゆーか、お兄様、何故 此处に？」

「総大将（ぬらりひよん）並みの、然り気無さだにや…」

「はっはっは！」

そんなの決まっているじゃないか！

リーアさんの驚く顔が見たいからだよ。」

「ハア…」

平常魔王に溜め息を零すリーアさんとメイドさん。

「…で、本当の理由は何なのですか？」

魔王ルシファー？」

話す気力が喪われた部長に代わり、俺が この、グレイファイアさんにシバかかっているシスコンに聞いてみると、

「いやいや、嘘偽り無く、リアスに会いに来たんだよ。」

ついでに、既に街に住み着いてるアザゼルや、今、話に上がっていた白龍皇じゃないけど、今度 対談が行われる、この学校の下見にもね。」

いや、下見を本命にしるよ。

ほれ見ろ？

グレイファイアさん、またジト目で溜め息吐いてるぞ？

「ああ、それと更に ついでだけど、明日の授業参観、僕も出席するから。」

「はあああ!?!」

「大丈夫、父上も きちんと来るから。」

「そーじゃなくて!!?」

部長、うるさいです。

静かにしましょう。



そして翌日の、授業参観当日。

「あゝ、精神的に疲れた。」

「お疲々wwww…つと?」

来校した母親のプレッシャーに押し潰されながら、尚且つ睡魔と戦いながら、辛うじて この日の2時限に渡る公開授業を乗り越えたシリュー。

それを、身内が来ていない匙が、笑いながら、メール着信したスマホを見る。

「…やれやれだな。」

「どうした?」

「会長からだよ。」

体育館で、男子生徒（ヤロー）共が何やら騒いでるから、収めて来いってさ。」

「ああ、もしかしてアレかしら?」

「ん?」

その会話に入ってきたのは、シリューの隣の席の、水沢香純。

「水沢、アレって何だ?」

「え?生徒会には知らされてなかったの?」

少し前から、今日、授業の後に、魔法少女の撮影会があるって話。」

「ま…魔法少女?!」

『魔法少女』という単語に反応して、見事なハモリを見せる匙とシリュー。

「え?もしかしてアンタ達2人も、そう云うのに興味有るとか?」

うつわあ…

神崎、ファンが知ったら引くわよ?」

「違う!!」

再びハモリ、必死に否定する2人。



「ぶう~~~~~☆☆！」

ちよつとお☆、匙君もシリユーちゃんも、非道くない？

「せつかくの撮影会だったのにく〜！☆」

はあ…だ・か・ら・言つたら？

俺の勘…

特に悪い予感、よく当たってるって。

神崎と一緒に付いて来て貰って、本当に良かったぜ。

俺は立場上、この人に兎や角言えないので、後は頼んだぜ。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「全く…授業参観だぞ、授業参観？」

アンタも父兄として学園に来たのなら、それなりに場に合わせた衣装つてのがあるだろうに？」

「えー？だつてシリユーちゃん、これが私の正装なんだよ！☆

みるるん☆みるみる☆すばいらる〜♪☆」……………

(怒)。

すばかーん!!

「はああう?! (∨∨∨)」

とりあえず、この巫山戯た事をほぎきやがる、魔法少女のコスプレをした魔王少女のド頭に、本気の一撃くれてやったとしても、俺は絶対に悪くないと思う。

「うろうう…あ…頭が…」

…さてと、コスプレ撮影会の騒ぎは絶った事だし、匙？俺達も撤収しようぜ？

「いやいやいや！レヴィアタン様、この儘つて訳にも いかないだら

？

…つて言ーかオマエ、本当に女性でも魔王様にでも、容赦無ーな…??」

…教室に戻ろうとすると、頭を抱えて しゃがみ込み、「うーうー☆」唸ってるセラフォルを放置する気か？…と、匙に呼び止められた。

仕方無い、支取先輩ん処に持って行こう。



ガラ：

「し、失礼します。」

「あら匙？ 体育館の騒ぎは、片付きましたか？」

「い、いえ…その事なんですけど…」

「…？」

「こんにちは。」

グレモリー軒デリバリーサービスでーす！

体育館の騒ぎの元凶の、魔王少女をお届けに参りましたー。」

「や…やつほー…ソーたあん…☆」

「へ？ 神崎君？…て、お、お姉様?!」



「ほら！ 見てみて！ ☆ソーたんが先生に指名されて、答えてるの！ ☆」

「止めて〜！」

「やはははははは!!」

今 部室では、レヴィアタンが隠し撮りしてた、ソーナの授業風景の公開（処刑w）の真っ最中だにや！

映像自体は余り面白く無やいけど、それを観てるソーナが慌てふためく姿は、凄く面白いにや！

「大体お姉様、何故 今日の参観日の事を？」

「こっちは黙っていたのに…」

「ん？ それはね、サーゼクスちゃんとグレイファイアちゃんから聞いたんだよ☆？」

「ルシファー様…」

「あははは…何だかゴメンね。」

涙目ジト目のソーナにサーゼクスが笑いながら謝ってるけど あ  
の顔は、絶対に全然悪いって思ってたにやい顔だにや。

「それでね、ソーたんを後で びっくりさせようと思っ、授業中は気  
配を完全に消していたのだ〜！ ☆（どやあ☆）」

「ぜ…全然、気が付かなかった…（ガクッ）」

あ、ソーナがorzつたにや。

「因みに私は、セラフオールが来てるのは、気付いてたにや。」  
「嘘っ☆!?!」

「くくく、黒歌さん?! どうして教えてくれなかったのですか!?!」  
カククンガククン…

「あわわ…揺らすにや揺らすにや!

何となくだけど、黙ってたのが面白そうだったに決まってるにや  
!」

「あ…貴女は…」

ソーナが両肩をガシツと掴んでガクガクと揺すりながら、涙目ジト  
目でコツチを睨んできたけどスルーだにや。

「ならば次は、私の撮影した…?」

「い嫌ああああああああつ!!!」

ソーナの映像の次は、リアス!<sup>!</sup>パパが撮影した、リアスが授業受けて  
る映像を観てるけど、リアスもソーナと同じ様なリアクションしてる  
にや!

…つて、ゆーか、お腹が痛い!

アーシアとミルたんは、純粹に微笑ましく観てるって感じだけど、  
「くつくつくつく…:w:w:w」

リシューは腹を抱えて蹲って、大笑いするの我慢してるし、白音、  
ゆーと、朱乃ん、レイヴェル、ギャー子、椿姫、げんしろーも、必死  
に笑うのを耐えてるのが見え見えだにや!!

「くっぶぶぶぶ…も、もう、らめえ…」

「ふ、腹筋が割れる…」

「いい加減になさい!」

笑い過ぎなのよ! アナタ達わ!!」

「あと、お前わ脱ごうとするなーっ!!」

すばかーん!! x2

「ギャアアアアアアツス!!」



…そして数日経ち、1学期終業式が終わった日の夜、学園には結界  
が張られ、その上空には、悪魔、天使、墮天使の軍勢が一触即発な空



気の中、互いに牽制するかの様に睨み合う。

「二」……………。「三」

そんな中、学園の会議室ではサーゼクス、セラフォル、アザゼル、そしてミカエルが、1つのテーブルを囲う形で、無言で席に着く。

3 勢力のトップ会談が、間もなく始まるうとしていた。



ギヤスパーは自身の神器である「停止世界の邪眼（フォービドゥン・バロール・ビュール）」を、まだ完全に使いこなせてないので、万が一、力が暴走して…まあ、それでも魔王や墮天使総督、天使長の動きを停められるとは思えないが…を想定の為、留守番。

1人じゃ寂しいだろうからと、ミルたんにも『護衛（おもりW）』を兼ねて、一緒に部室に残って貰う事になった。

最初は小猫か黒歌に任せようと思ったのだが、何だかコイツ等はギヤスパーを放つほつといて、お菓子ばかり食べてる画が浮かんだので、ミルたんに頼んだのだ。

その点ミルたんなら大丈夫、2人でアニメ談議に花を咲かせる事だろう。

そして残るメンバーで、本校舎へと向かった。

》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》カチャリ…

「失礼します。」

会議室へ入ると、其処にはサーゼクスさんにグレイファイアさん、セラフォルーに生徒会の皆さん、墮天使総督アザゼルに白龍皇、天使長ミカエルと…秘書天使っぽいのが既に待機していた。

どうやら俺達オカ研が、最後の様だ。

「よくお、あの日以来だな、少しはゲームの腕、上達したか？ん？赤龍帝？」

「……………！」

そして入室早々、軽い口調で声を掛けてきた墮天使総督。

…分かってる。解っているのだ、この男は　こーゆー性格で、悪気は微塵程度にしか持ってない事は。

この程度の言葉で、ムツとしていたら　キリが無い。

最初にデスマスクは所用で同席出来ない事を魔王達に報告して、俺達も用意された席に着いた。

「此処に居る者達は皆、最重要禁則事項である、『神の不在』を認知している…

それを前提として、話を進める。」

そして、暫定的に魔王ルシファーが進行を務める形で、3大勢力の会談が始まった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「…と、云う様に、我々天界は——」

「…その通りだ。」

「この儘では確実に滅びの道を——」

「ぶっっちゃけるぜ？」

「そもそも俺はだな——」

和気藹々とは程遠い雰囲気だけど、会談自体は順調な様だ。

「ふわあ…」

いや、黒歌さん？寝ちやダメだからね？

「…では次に、先日の事件について、話して貰おうかな。」

ガタツ

「…はい。」「…承知した。」

サーゼクス様の言葉に、部長とソーナ様、神崎君が起立して、ココカビエルが起こした聖剣事件の件を話し出した。

「…幸いにも結果、一般人には何ら被害は無かった様だが——」

アザゼルは兎も角、ミカエルは神崎君の報告、その天界側の対応の内容に、凄く罰の悪そうな顔をしている。

「良いよ、もっ言ってやって！」

「…最終的には、其方の白龍皇殿が、ココカビエルとはぐれ悪魔祓いを回収…」

(中略)

…その後ココカビエルは「神の子を見張る者(グリゴリ)」によって、処罰されたと伺っています。…以上です。」

「御苦労、座ってくれたまえ。」



ふん、最低で悪かったな、堅物天使。

ま、自覚は してるがね。

「ああ、俺もシエムハザも、戦争にや興味無いし、もう1人の戦馬鹿も、自分から喧嘩を売る心算は無いだよ。」

戦争なんかより、俺は神器の研究してたり、女と乳繰り合ってたりにしてるのが良いんでね。」

『『『『『』』』』』』

おお、急にセラフォルにグレイフィア、そして、その他小娘達が集団で、『地獄の最下層（コキユートス）』も真つ青な、絶対零度のジト目で睨み付けてきたぜ。

…って、ミカエルにサーゼクスに赤龍帝、お前達もかよ!?

「…アザゼル、君が女と乳繰り合うのは、この際どうでも良いよ。」

だが、1つ、訊いて良いかい?

この数十年…神器の所有者をかき集めているのは…何故だい?」

…サーゼクスよ、それこそ、どうでも良い話だが、前半の台詞を真顔で謂うな。

後ろの嫁（グレイフィア）が、更にジト目になったぞ?

「それは、私も問おうと思っていました。」

最初は神器所有者を集めて戦力増強を図り、我々が冥界に戦争を仕掛けるのではないかと危惧していました。

ましてや今回の騒動で、墮天使サイドに白龍皇が居たと知った時は

…

同時に悪魔側にも、赤龍帝が与みしていると分かった時も、驚かされましたが…」

「…さっきも言ったが、別に戦力集めて喧嘩吹っ掛ける心算なんざ、無えよ。」

今更お前達に、俺の研究者気質を説明する必要は無いだろ?

単なる趣味で納得しろよ。

何だったら、お前等ん処に研究資料（レポート）、送ってやろうか?」

…着払いでなw w w

「兎に角 俺は今の世界には、十分満足してるんだ。

特に日本のサブカルチャーは最高だぜ？」「あ☆、それは解る☆  
！」

よし、セラフオール、握手だ。

「…下の奴等にも『人間界の政治や宗教には介入するな』って、普段からキツク言ってるし、悪魔の業界（シェア）にも邪魔する心算は無い。いや寧ろ、つい この間迄は大いに貢献していた筈だが？」

「……………」

くつくつく…

そうだろう？リアス・グレモリー。

「もう！そんなんだから、キミの言う事だけは信用出来ないのよ！」

「おいおい、俺の信用は3竦みの中でも最低みたいな言い方は止めろよ？」

「その通りだが？」

「そうですよ？」

「え？知らなかったの☆？」

非っ道え！あんまりだー！ー！ー！っ！！

「…ったく、神や先代魔王共よりかは幾分マシだと思ってたが、お前等はお前等で充分に面倒い奴等だぜ。」

「自業自得だよ☆」

（怒） 喧（怒） し（怒） い（怒） わ!!（怒）

「ちい…分あったよ。」

神器についても、コレ以上こそこそ研究すんのも性に合わねえし限界だとも思っていたし…

この会合…今回、お前等を喚んだ、一番の目的に切り出すか…

尤も、お前達も大方の予想はしてただろうが…

—— 和平を結ぼうぜ。

## テロリスト襲来!



和平——

墮天使総督の発した この言葉に、2人の魔王と天使長が、驚きの顔を見せる。

「私も悪魔側とグリゴリに和平を呼び掛ける予定でした。」

しかし、それも僅かな時。

アザゼルに同調する様に、ミカエルも和平と云う言葉を口にした。

「…同じく。」

「でも まさか、一番最初にアザゼルちゃんの口から その言葉が飛び出すなんて、びっくりだよ☆」

「をる!？」

そして更には悪魔側も、その心算だったとか。

これには俺も驚いた。

聞けば、「殺し合う位に仲が悪い」らしい3竦みの代表が、揃って和平を結ぶと言ってるのだから。

「これ以上 3竦みの関係が続けていても、世界の害にしなければならない。

天使長である、私が謂うのも何ですが…

…戦争の大本である神と魔王は既に消滅しているのですから…。

…失った物は、確かに大きい。

しかし、在不在の者を何時までも求め続けても、仕方が有りません。」

「おいおい、大丈夫かよ?」

その発言は『墮ち』やしねーか?

…って、『システム』は お前が受け継いだんだったよな。

良い世界に なったもんだな?

俺が『墮ちた』頃とは全然違うぜ。」

そして和平の意義をミカエルが真面目に話し始めるのだが…この男は、何時も真面目に話せないのか?

「な…?…何を言っているのですか!？」

貴方が『墮ちた』理由は、人間の女人と乳繰り合ったからでしょう



に！

現行の『システム』でも それをすれば、普通に『堕ち』ますよ！  
この、【閃光と暗黒の龍絶剣（ブレイザー・シャイニング・オア・ダー  
クネス・ブレード）!!】

「そ、その呼び名は止めろおっ!!?」

ミカエルが顔を赤くして大声で呼ぶ名前に、それ以上の赤い顔で、  
慌てふためくアザゼル。

…って、何なの？その厨二全開な名前？

「くつく…ｗｗｗ」

「……………プツ！」

「きゃははははは☆!!」

そして やはり、その名前を聞き、何やら思い出したかの様に笑う  
魔王達。

あのグレイファイアさんですら、完全に笑うのを抑えられてない。

よし、どういう経緯でアザゼルが【閃光と暗黒の龍絶剣（ブレイ  
ザー・シャイニング・オア・ダークネス・ブレード）】になったのか、  
後でセラフォルーに聞いてみよう。

「…コホン、と、兎に角！」

そして再び、話し始めるミカエル。

「…神の子を見守り、先導していくのが、我等の使命なのだ、私達  
熾天使（セラフ）の意見も一致しています。」

「我等も同じです。」

種を存続させる為、悪魔も先に進まねばならない。」

ミカエルの言葉に続き、魔王少女…否、今はトップ会談の場に相応  
しい、ダークブルーのレディースフォーマルを着こなした、魔王セラ  
フォルー・レヴィアタンが、普段の…今迄のイメージを打ち消す様な  
真面目な面持ちと口調で語り、

「戦争は我等も望むべき事柄では無い。」

また戦争をすれば、悪魔は滅ぶ。」

サーゼクスさんが更に言葉を続けた。

「そうだ、悪魔だけじゃねえ。」

そして、アザゼル。

本人にすれば失礼な話だろうが、やはり初対面時から先程迄の対談のイメージが強いからか、とてもじゃないが想像出来ない様な、真摯な顔で話し始めた。

「次、戦争を起こせば、3棘みは間違い無く共倒れだ。

それは人間界にも影響を大きく与え、イコール、世界は終わる。

俺達は戦争をもう起こせない。

起こしては いけないんだ。」

「……………」

この堕天使総督の言葉に、天使長と魔王2人は無言で頷いた。

「シリユー君…いや、赤龍帝殿？」

「？」

そして此の場で、サーゼクスさんが不意に、俺に話を振った。

「君自身は…この和平については、どう思っているかな？」

「どうとは…どういう意味かな？」

「……………」

質問に質問で返すと、魔王は無言で一瞬、天使長の顔を窺う様に見ると、また俺の方に顔を向けた。

あ、そういう意味か。

「どうも何も、今の俺に、冥界トップの組織レベルの決定に、反対出来る権利は持っていない。

馴れ合う心算は無いが、不必要に進んで敵対する事も無いだろう。」

「そうか…ありがとう。」

いや、サーゼクスさん、考え過ぎです。

とりあえずミカエルとは、この前きつちりとOHANASHIした上で、一応は終わらせているから。

流星に此の場で それを蒸し返し、公開処刑する趣味は持っていない心算でいる。

尤も、和平した後も、天界勢と仲良くする気は微塵も無いけど。

「赤龍帝は、あー言ってるが、ヴァーリ、お前は どーなんだ？」

赤龍帝（オレ）の考えを聞いた後、今度はアザゼルが、白龍皇ヴァーリに同様な問いを掛けた。

「勝手にすれば良いさ。」

俺は、強い奴と戦う事にしか興味が無い。

和平成立後も、その時は堕天使所属でなく、俺個人として勝手に動かさせて貰うさ。

例えば…仮に、互いに同盟勢力に席を置いていたとしても、宿命の対決だけは別枠で決着を着けないと駄目だろう。

なあ？赤龍帝？」

…最悪だな、この男！戦う気満々かよ!?

ドライグには悪いのだが、俺自身は…んな宿命なんて、興味無いのだぞ！

コカビエルが戦争狂なら、コイツは戦闘狂だな！

放って置いたらコイツ、魔王にも喧嘩売りがねんぞ!?

「…お前達…天龍、自覚してるかは知らんが、お前達は世界を揺るがすだけの力を秘めた者の1人なんだ。」

お前達の選択1つで、俺をはじめ、各勢力が動きづらくなるんだよ。

…和平に異存は無いのだな？

白龍皇？赤龍帝？」

「……………（コクン）……………!?!」

「…「な…?!」」

「…これは…!?!」

俺とヴァーリが頷いた。その時、会議室が異様な違和感に包まれた。

人払いの結界とも違う、今迄感じた事も無い違和感…

「し、白音！白音!?!」

「アーシア先輩？朱乃先輩？」

「つ、椿姫!?!」

「おい、草下？花戒？ルガルルさん？」

「皆、落ち着いて!」

そして騒ぐ黒歌達。

見れば、小猫、アーシア、木場、朱乃先輩、更には支取先輩と匙を除く、シトリー眷属、そしてミカエルの御付きだった、秘書天使が硬直している。

まるで当人だけ、その時間の流れを止められた様に…?!

…って、まさか!?

「部長！これは!？」

「…ええ。これは間違い無く、ギヤスパアの力ね。」

「何者かが、あのハーフヴァンパイアを捉えて、ヤツの神器を強制的に禁手（バランスブレイカー）状態にさせているんだろう。」

「アザゼル！何者かがって…（ピカッ）…?？」

ズドン！

「な…!？」

言っている最中に、外が激しく光ったと思えば、校庭から魔力の弾が、会議室に向かって飛んできた。

しかし その魔弾は、校舎に直撃はしたが、壁も窓も破壊する事無く霧散した。



「テロだよ。」

「アザゼル?」

「何時の時代もな、そんなに平和が嫌いなのか、こんな風に特定の勢力同士が和平を結ぼうとした時には、邪魔してくる輩が居るんモンだよ。」

外、見てみ?」

「……………?」

アザゼルの言う儘に、シリユーが窓から外を窺うと、校庭に約100人程の、フード付きの黒いローブを纏った人影が。

「奴等は…?」

「所謂『魔法使い』ってヤツだ。」

「幸い、彼等の火力では、僕達が張った防御結界を破る事は、不可能だけど…」

「おかげで私達も、此の場からは動けないね。」

天使長、墮天使総督、魔王2人の4人掛かりでの結界は確かに強固だが、それは4人の動きを封じた事に繋がっていた。

「ならば、残りの者で、討つて出るしか無いでしょう!」

「待て待て黒龍?」

間違つては無いが、闇雲に出りや、良いって訳じゃないぞ?」

先に、旧校舎のハーフヴァンパイアをどうにかするのが先だつての。」

「う…」

会議室を飛び出そうとした匙を、アザゼルが呼び止め、  
「それにしても、本当に厄介な能力だぜ。」

その気になれば、視界に映した内側に居る者に迄、効果を及ぼしちまうとはな…大した潜在能力だ。

尤も、俺達を停めるには、出力不足だったみたいだが。」

ギヤスパーの能力の高さを、改めて評価。

「ギヤスパー君の力を無理矢理に利用しているなんて…?!」

「この場で力を暴走させない様に、アツチで留守番させてたのが裏目に出たにや!」

「上空で待機していた、各軍勢も停まっているみたいだな。」

「…ギヤスパーをテロリストの武器にされている…これ程の屈辱は無いわ!」

リアスが声を荒げる。

「部長、落ち着いて!」

とりあえず俺が、旧校舎迄強行突破して、ギヤスパーを救い出す。

反撃は その後だ。」

「…だったら、私が行く!」

私の下僕は、私が責任を持って救い出してみせる!」

「はあ!」

シリユーが諭すが、それはリアスに取っては逆効果。

「何を言ってるんだ、この駄肉姫!」

【王(キング)】は無闇に動くなつて、この前に言ったばかりでしょうが!」

「駄肉ゆうなあー!!」

あんたこそ強行突破なんて、脳筋思考しか無い訳？」

「の…脳筋ん!？」

「おいバカップル、痴話喧嘩なら終わってからにしろ。」

「違う!!」

何やら言い合い始めた2人に対する、アザゼルの仲裁の台詞に、駄肉姫と脳筋が息を揃えて言い返す。

「旧校舎（むこう）には、未使用の戦車（ルーク）の駒が有るから、それを使うのよ！」

「成る程、キャスリングか。」

「……??」

キャスリング…本来はチェスに於いて、盤上の「王（キング）」と「城兵（ルーク）」の駒の位置を、一手で瞬時に入れ替える技法。

…それに習い、主にはレーティングゲームにて活用されるが、「王（キング）」である悪魔と、その下僕である「悪魔の駒（イーヴィル・ピース）」で転生した「戦車（ルーク）」は、幾つかの条件も在るが、瞬時にその居場所を入れ替わる事も出来ていた。

そしてそれは、まだ転生に使われていない、『駒』の儘でも適用される。

…つまり、リアスは旧校舎に保管されていると云う「戦車（ルーク）」の駒との入れ替わりにより、瞬時にギヤスパーの本に飛ぶのが可能だったのだ。

「確かに それならば、敵の虚を突けるが、それでも1人では危険だ。

グレイファイア、君の魔力方式で、一度に複数名を、『キャスリング』で飛ばせる事が、出来るかい？」

「お嬢様と もう1人ならば…」

「ならば、俺が行こう。」

「ん、シリユー君…頼んだ。」



ブレイク!」

(Vanishing Dragon Balance Breaker!!!)

ドゴオツ!

そして白龍皇の鎧を纏ったヴァーリが、校庭内の魔法使いの集団を一掃。

しかし、

「うげ?!また出てきやがったぜ!」

「キリが無やいにや!」

「……………」

屍が転がる校庭に、無数の魔方陣が浮かび上がると、其処からまた新たに転移してきた魔法使いの一団が、攻撃を仕掛けてくるのだつた。



ガシヤアン!

「ギヤスパー!!」「無事か!」

「はあ?リアス・グレモリーと…赤龍帝…だとお!」

「馬鹿な?!転移は出来ない筈!」

キヤスリングにより、旧校舎オカ研部室へと転移したりアスとシリューは、間違い無くギヤスパーが捕らわれているであろう、新校舎を窓越しに はつきりと見渡せる部屋…即ち、3F廊下中央の教室へ、扉を蹴破つて突入した。

「ぶ、部長!シリュー先輩!」

「リアス様!シリューたん!」

読み通り…

その部屋には、椅子にローブで縛られ、新校舎を正面に見据える様に座らされているギヤスパーと、やはり身動き出来ぬ様に拘束され、床に転がらされているミルたん、そして数人の黒ローブの魔法使いと覚しき人間達。

他にも、恐らくはミルたんが倒したのだろう、数人の魔法使いが蹲っていた。



「ギヤスパ―！ミルたんも！」

良かった、無事だったのね！」

「ごめんなさいによ…ギヤ―たんを守りきれなかったによ…」

とりあえずギヤスパ―達が無事なのを確認出来たリアスが、安堵の笑みを浮かべる中、ミルたんは申し訳無さそうに謝罪。

「気にするな、テロリストの襲来自体が予想外だったんだ。」

それに対しては、シリユーがフオロー。

「ごめんなさい部長…ごめんなさい…。」

僕は皆に迷惑ばかり掛けて…」

「ギヤスパ―？」

「部長…先輩…お願いです…」

しかし、続けてギヤスパ―が涙を流しながら、リアス達に発した言葉は

僕を、殺して下さい。

## 禍の団（カオス・ブリゲード）

「何を言ってるのよ、ギヤスパー！」

—殺して下さい—

ギヤスパーの訴えに、リアスは馬鹿な考えは止めろと諫めるが、嫌だ！僕は死んだ方が良いんです…

この目のせいで、今だって皆さんに迷惑ばかりで…誰とも仲良くなんて、出来ないんですう…」

ギヤスパーの覚悟、決意は変わらない。

「…嫌よ、ギヤスパー。」

私は あなたを絶対に見捨てたりは、しないわよ？

覚えてる？あなたを眷属に転生させた時、私は言ったわよね？

——私の為に生きなさい。

そして自分が満足出来る生き方を見つけなさい——と。」

しかし、リアスも退く事は無く、ギヤスパーを諭し続ける。

「…でも、結局は まだ、見つかってないし、迷惑掛けてまで、生きる価値なんて、僕には…」

「ギヤスパー！誰も お前を迷惑なんて思っていないぞ！」

「シリュー先輩？」

「誰とも仲良く出来ない？」

そんな事は無いだろう！

この前のボーリングやカラオケ、確かに最初は戸惑い気味だったが、初対面の草薙や反町とも、最後辺りは仲良く話せてたじゃないか！

それでも全てを諦めている様なギヤスパーに対して、シリューも口を開いた。

「自分を諦めるな！自信を持って！」

それでも まだ、お前を邪魔だとか迷惑だとか言うヤツが居るなら、ソイツは俺が ぶっ飛ばしてやる！」

「せ…先輩い…」

「ふん…愚かな…」

「何!？」

このシリユートの口上の途中、ギヤスパアの傍らで、彼の首筋にナイフを向けて立っていた、年配の魔法使いの男が口を挟む。

「早々に洗脳でもして、道具として扱っておれば疾うの昔に、もっと有効活用出来ていたものを…」

「きやはは…確かに〜!」

馬つ鹿じゃないの〜? w w w

そして その隣の魔法使い…此方は若い女も、便乗して煽る様に罵った。

「御生憎様ね、私は自分の下僕を大切にするのよ。」

「はあ? ちよつとちよつとお、仲良しこよしで、下僕を扱う気なの?」

「ふん…アイツ等の言った通りだな。」

グレモリーは情愛が深く、力が溢れている割には、頭が悪い様だ。

「きやははは…噂通り、本当に脳味噌に行くべき養分が、みくんなの。その おっぱいに往き届いてるのかしら?」

……滅つ茶苦茶ム力つくんですけど!？」

「はああ?! 何んつですってえ!!」

互いに皮肉り嫌み合いながら、言葉の売買を交わしてる途中、身の丈はリアスと変わらないが、纏ったローブの上からでも、明らかに慎ましいと判る女魔法使いが、不意に ややベクトルがズレた怒りをリアスにぶちまける。

その事柄は、普段のリアスならば、「羨ましいかw」とばかりに冷静に且つ、誇らし気に切り返す処だが、ここ最近の彼女にとつて それは、最大禁句で有ったらしく、負けじと大炎上する駄肉姫。

「ギヤスパア!」

それでも直ぐに、平静さを取り戻し、再度ギヤスパアに話し掛ける。

「私に もっと迷惑を掛けて頂戴!」

何度でも叱ってあげる、慰めてあげる。

私は決してアナタを離したりは しない!」

「そうだ、ギヤスパー。」

全てが片付いたら、今の弱気な発言について、早速 説教だ！」

「部長お…先輩い…僕は、僕は…っ」

2人の言葉を聞き、またも大粒の涙を流すギヤスパー。

しかし、それは、先程迄の自分自身の不甲斐無さからの涙でなく、自分の事を、真剣に思っている存在を知った事による、喜びの涙。

そんなギヤスパーに、シリューは続けて言い放つ。

「ギヤスパーアツ！」

何時迄 縛られている気だ？

そんなローブ、さっさと抜けてしまえ！」

「え？シリュー先輩？」

そう言いながらシリューは、左手のドラゴンの爪で、右掌を引っ掻き、一筋の傷を付ける。

ヒュツ…

「な？」「うわ!」「あ…」

そして、その傷から滴り流れる血を、周りの魔法使い共々、ギヤスパーに浴びせ掛け、

「お前自身、本当に変わりたいと思っっているなら、自分から動いてみる！」

そうでないと、何も始まらんぞ！

お前が心底に、そう思っているなら、俺が背中を押してやる！

俺の中に流れるドラゴンの血、それを飲むんだ!!」

自らの血を飲むよう、ギヤスパーに呼び掛けた。

「シリュー…先輩…でも、僕は血は…」

それでも、吸血鬼でありながら、生の血液を取り込むのに躊躇うギヤスパーに、

「逃げるな！恐れるな、ギヤスパー！」

お前だって立派な【ぴーー!!】、持ってるだろうがあっ!!」

「…」

「なあ!?!…ち、ちち、ちんp…??∩ffss∴(∂▽∂♂♂)(／／( )・⇄  
†⊙…?」

シリユートの半ば、ハラスメントな檄にリアスが赤面でテンパる中、ギヤスパアの頬に伝う紅は口に届き、その檄に応える様、それを口内に含んだ時、

ドクン：

明らかに其れ迄とは違う心音と共に、ギヤスパアの瞳が妖しく光る。

ぼんっ！ パタタタタ：

「きゃっ！」「うぬっ!!？」

その次の瞬間、その身を幾匹もの小さな蝙蝠に変化すると自身を縛っていたローブから すり抜け、天井付近で再び、元の人型の身に姿を戻し、悪魔の羽を広げ、空中で静止。

「せっーによっ!!」

ぶちいっ!!

同時にミルたんも、己が身を拘束していたローブを腕のパワーだけで引き千切り、

「ギャーたんが自由になれたのなら、大人しく縛られている理由も無いによ！」

「ふっ…い！」

ダッ：

シリユートと共に、恐らくはこの集団の中ではリーダー格であろう、男女の魔法使い2人に突撃。

「ちい！」

これに対して、2人も迎撃せんと、魔力の弾を放とうとするが、

「【停止世界の邪眼（フォービドウン・バロール・ビュー）！】」  
びた：

このタイミングで天井で浮遊しているギヤスパアが、その瞳に宿している時間停止の神器を発動させ、僅か1秒足らずの時間に過ぎなかったが、この部屋に居る、全ての魔法使いの動きを封じ込める。

しかし その僅かの時も、シリユートとミルたんからすれば、十分過ぎる足止めで、

「廬山龍戟閃！」

バキイツ!

「うぐべっ?!」

老魔法使いの男に、赤龍帝の小宇宙(コスモ)を込めた膝蹴りが炸裂し、

「ちい!死ねっ!!」

bon!

「によっ!」

パアン!

「な…?」

女魔法使いが放った魔弾は、ミルたんの魔力を纏わせた拳で碎散された後、

「ミルたん・無欠雁字搦め!!によーっ!!」

べきいっ!!

「いきやああああああああっ?!」

魔法少女?の肉体言語…エグ過ぎる変形の卍固めがガツチリと極まった。

「ぼ、僕だって…僕だってえっ!!」

ぼんっ!!

更には この2人の戦闘姿勢に触発されたのか、再び無数の蝙蝠に変化したギヤスパーが、天井付近を飛び回る。

それによって床に映る無数の影から、漆黒の闇の手が生え出で、

「な…これは、血を吸っているのか?」

「ち、血だけじゃ無い!魔力…も…!」

それはハーフとは云えヴァンパイアの真骨頂か、それ等は残る魔法使い達に纏わり憑き、身体に貼り付いた掌から、血と魔力を吸い取っていく、

「でえい!!」「によっ!」

ドガアツ! バチイツ!

「おぴゃー!」「ぎゃぴりーん!!」

それにより身動きの取れなくなった者達は、各々が小宇宙(コスモ)、または魔力の込められたら拳で葬られて逝ったのだった。



つい今し方、戦争を否定して平和を持ち掛けたばかりなのに、不安を煽る物言いをしますね。」

アザゼルの返答に、ミカエルも追う様に質問する。

「はああく…頼むから、少し位は信用してくれよお…。」

言つたる？お前等相手に戦争はしない。

それでも、自衛の手段は必要だ。」

「自衛って…私達でなければ、それじゃ、何に対しての自衛ってゆーの？」

「……………」

そしてセラフォルの問い掛け、数秒の沈黙の後、墮天使総督は応えた。

「——『禍の団（カオス・ブリゲード）』。」

…と。

「カオス…ブリゲード？」

「…何それ？」

「組織名やら何やらが、はつきり判つたのは、本当に つい最近の事だ。」

奴等は3大勢力にとっての危険分子を集めている。

中には禁手（バランス・ブレイカー）に至った神器持ちや、『神滅具（ロンギヌス）』の遣い手も数人確認出来るぜ。」

「…目的は？」

「破壊と混乱…。」

この世界の平和が気に入らないんだとき。

…つたく、性質（たち）の悪い、テロリストだよ。

しかし一番厄介なのは、奴等の頭だ。」

「それって一体…？」

パアアアアア…

「……………」

アザゼルが話すテロ組織の説明、そのトップの話となり、セラフォルが「それは誰だ」と聞こうとした瞬間、突如として部屋の床に転移の魔法陣が浮かび上がり、



ふふふ…我等の頭目…

それは『無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）』…  
オーフィス！

「！！！！？」

その魔法陣から、女の声が響いた。

「この紋様…」

そうか、今回のテロの黒幕は…！」

「ふふ…その通り。」

御機嫌よう、現ルシファー殿？」

そして魔法陣の中からは、褐色の肌に暗い金髪の、眼鏡を掛けた女が姿を現す。

「やはり、君だったのか…」

「カテレア…ちゃん？」

## 2人のレヴィアタン！魔王VS魔王少女！！

カテレア・レヴィアタン。

魔法陣から現れた女は、今では旧魔王と呼ばれるが1人、先代レヴィアタンの血を引き継ぐ者だった。

先の永きに渡った大戦…

天使、墮天使と同様、その儘 戦争を続ければ、種の存続も危うい程に、悪魔達は疲弊しきっていた。

しかし旧魔王の一族は最後迄 徹底抗戦の姿勢を貫いた為、サーゼクスを基とする親魔王…新政権の者達により、冥界の最果てに追いやられていた。

「カテレア…」

君が…このテロの首謀者なのかい？」

「まさか、旧魔王の1人が、テロリストになってるなんてな…」

「カテレアちゃん…」

「ふ…私だけでは無い。」

旧魔王…いえ！正統なる、真の魔王派の者達は、殆どが『禍の団（カオス・ブリゲード）』に加入しました。

今日は、その報告に伺ったのですよ。」

「!!!?」

和平協定の場に襲撃した中心人物が、袂を別った者達とは云え、まさかの同族（あくま）だった事に、驚きを隠せないサーゼクス。

何かの間違いだと、現実逃避に近い問い掛けをするが、カテレアの口から出たのは、更に上を行く、最悪とも言って良い言葉。

カテレアだけでなく、旧魔王派の殆どが、テロ組織に加入した…サーゼクスだけでなく、それを聞いたセラフォルーやグレイファイアも驚愕し、言葉を失ってしまう。

「ふん…テメー等の親玉が無限の龍神だったって聞いたのは、本当につい先日の話なのだが…解せねえな。」

お前等がテロに入るのは兎も角、オーフィスがテロ組織を起ち上げ

るなんて、想像付かないんだが?」

その代わりに、皮肉を込めた にやけ顔で、アザゼルが尋ねる。

「オーフィスは単に、力の象徴として祀っているだけですよ。」

世界中の、まだ見ぬ同志達が集結する きっかけの…ね。

そして集った力で、一度この世界を滅ぼし、もう一度創世します。

死んだ『神』に変わり、私達が新世界の神となるのです!」

「カッ! オーフィスは なんちゃってボスカよ?」

「…尤もオーフィスも元々は、ある『目的』の為に人員を集めていたのですけどね。」

私達がオーフィスの目的に協力する代わりに、オーフィスは私達に力を貸し与える。

解りますか?

これは等価交換 (ギブ&テイク) なのですよ。」

「カトレアちゃん…: どうして?!」

お願い! 馬鹿な真似は止めて!!」

酔いしれた様に構想を語るカトレアに、セラフオールが諫めようとするが、

「黙れセラフオール!」

この私から『レヴィアタン』の座を奪った分際で、よくも ぬけぬけと謂う!!」

「カトレアちゃん…: そんな…: 私、は…:」

カトレアは それを聞く耳は持たず、

「今日、この場で貴女を殺し、私が魔王レヴィアタンを名乗ります!

そしてオーフィスを旗頭として、私達が新たな世界の秩序を構築する…:」

サーゼクス! セラフオール! 貴方達の時代は、終えて貰います!!」  
改めての抹殺宣言。

「くっ…: くっくっくっ…:」

「…?」

「キっヒっヒヒヒ…:」

ギャワーハッハッハッハッハッハッハあい!」 「な、何が可笑しい?!」

「そ、そりゃあ お前え…」

だが、これを聞いたアザゼルが大爆笑。

カテレアの怒声に、薄ら涙を浮かべたアザゼルが応える。

「世界の改革？御託並べてんなよ？」

お前等、唯単に『お前等クライ！自分達が一番偉くなきゃ嫌だあゝ

！』ってゆー、御子ちやま思想なだけだろ？ w w w

…何っ処の野党だよ？」

「き、貴様！我々を愚弄する気か？」

嗤いながら話すアザゼル。

それを半分以上は凶星、核心を突かれたのか、顔を赤くしたカテレアが、凡そ女性が絶対にしては いけない表情を浮かべて、墮天使の総督に、魔力で召喚した鋭角的な造形の杖の先を突き付けた。

「ケツ…上等だ。やってやるよ。」

おい お前等？ 絶対に手え出すなよ？」

それに対してアザゼルも、光の剣を創り出して構えるが、

クイ…

「…嫌だよ☆」

「くびいつ!？」

それをセラフオールが後ろから、アザゼルの着ていた上着、その大きな縦の襟首を後ろから引つ張り後方に下げると、自らが前に出た。

「カテレアちゃん…どうしても退く心算は無いんだね？」

「当然です。セラフオール、確かに貴女は良い魔王だったかも知れませんが、最高の魔王では無かった。

それはサーゼクス、貴男方も然り。

だからこそ、私達が新しい、最高の魔王として、世界を統べるのです。」

「そう…だったら、私が相手、する…。」

ソーたん、レイヴェルちゃん、私の代わりに結界の維持、お願いね？」

「は…はい…」

この言葉と共に、やはり愛用の杖を召喚して戦闘の構えを見せるセ

ラファオルー。

パライン…!」

会議室の窓を破り、羽を広げて外に飛び立った、新旧の女性魔王2人が激突した。



「むっ…!」

「あれは…?」

「セラフオルーと…誰にや?」

飛び出した魔王達に、既に外で戦闘を繰り広げていた者達も、当然の様に反応。

「あれは…旧魔王の末裔、カテレア・レヴィアタン。」

「はあ? 旧魔王?」

「それが、このテロのボスにや?」

「…その辺は、後でアザゼル辺りが詳しく話してくれるだろう。」

チィ…どうやらカテレアの相手は、セラフオルー・レヴィアタンがするみたいだな。

ならば俺達は今は、この雑魚共を片付けるのに集中するぞ。」

「お…応!」 「了解にや!!」



ビリイツ!

「きゃあああつ!!」

2人のレヴィアタンの攻防の最中、カテレアの刃の如く研ぎ澄まされた杖が、セラフオルーのスーツを引き裂いた。

それにより、『虚』な妹の それと違い、撓わに実った果実の様な『巨』の房が、その先端の桃色さえも露わになり、

『』『』『うおおお!! (T▽T)』『』『』そして それを見た、戦闘を繰り広げていた校庭内の殆どの者が、敵味方問わず、歓喜の雄叫びを上げる。

「ふん…戦闘中に余所見をして、戦いを忘れるとは大した余裕だな?」

グシヤア!

「うぎや!」

そんな中、我興味示さずとばかり、その隙だらけの敵に対し、只の



「嘘を憑くなあー………!!」

セラフホルーの台詞に怒り顔のカテレアが杖の先から、無数の黒い”蛇”を生み出すと、それを目の前の魔法少女…否、魔王少女に撃ち放つが、

「……!? えいつ☆!」

その攻撃に一瞬、驚いた顔のセラフホルーも、杖から氷の魔弾を放ち、迎撃相殺。

「カテレアちゃん…その…力は…?」

「あはははは! その通りよ!!」

この”蛇”こそが、オーフィスから与えられた、新しい私の力!

消えなさい! セラフホルー・シトリー!

オーフィスの”蛇”。

それを見たセラフホルーが、改めて顔に動揺を見せる。

それに対してカテレアは、そのテロ組織加入により、新たに得た力を誇らし気に披露、先程以上の数の”蛇”を、セラフホルーにぶつけるが、

「えい…☆!!」

セラフホルーも巨大な氷の盾を造り出し、それを防御。

ピシイイン…

「「「「「…?」」」」」

そして…!! この時、この校庭に居合わせていた者達全てが、この戦闘空間に漂う違和を感じとった。

いや、それは正確に云えば、今迄 学園を被っていた違和感が払拭された感覚。

「レヴィアタン様、御無事で!」

「セラフホルー様!!」

「黒歌姉様!」

「匙君!」「元ちゃん!!」

「白音?」「お、お前等…」「……。」

そして校舎からは、自身の時の流れを止められていた筈の、小猫達  
リアスの眷属が、そしてソーナの眷属達が外に出て来た。

「白音！もう大丈夫にや？」

「…心配、お掛けしました。」

「遅えんだよ、このイケメンが！」

「ははは…ゴメン。【魔剣創造（ソード・バース）…禁手化（バランス・ブレイク）！」

【双覇の聖魔剣（ソード・オブ・ビトレイヤー）！！】

「さつさと終わらせるわよ！」

「…はい！」

小猫が、木場が、椿姫を筆頭とする生徒会の面々が、戦闘に参加する。

それは、リアス達がギヤスパ―救出に成功した事を表していた。

「ふん！雑魚共がゾロゾロと！」

それを上空から見たカテレアは、更に上方へ飛翔し、セラフオル―を含む、視界に入る校庭全体に居る者達全てに向けて、

「死いねえっ!!」

オーフィスから借り受けたと云う、無数の”蛇”を投下する。

ドツドツドツドツ…

「…うぎやあつ!!」

「…ぐはあつ!」

それは無差別に、味方である筈の魔法使い達にも襲い掛かる。

「…やれやれだな。」

「副会長!」「匙君?」

「つつ…イツテエ…!」

「わ…私は、何とか大丈夫…」

「白音、白音え…!」

「うう…辛うじて、急所は外しました…」

「…これはアーシアさん、後で大忙し…だね…」

その攻撃は、ヴァーリ以外の殆どの者達が、大小のダメージを受け、少なくとも、悪魔等に転生した訳でもない、身体自体は普通の人間と



それ程変わらない魔法使い達は、”蛇”の直撃を受けた者は悉く即死、運良く被弾しなかった僅かな者を残し、全滅状態となる。

「ちい…肝心の奴等は、皆 生きているか…」

流石に転生悪魔とは云え、『G』の様に しぶとい…」

その様子を見て舌打ちし、吐き捨てる様に呟くカテレア。

「カテレアちゃん…どうして?」

「んあ?」

そして そんな彼女に対し、信じられない物を見る様な目をして話し掛けるセラフオール。

「どうして?」

敵である私達だけを狙うなら解るけど!

あの魔法使い達は、仲間なんですよ?

どうして一緒に攻撃を受ける様な、仲間迄殺してしまう様な、そんな手段を?」

「…仲間?アイツ等がか?」

くつくつく…

あつーはっはっはっはっは!!」

魔王少女の問い掛け、その真剣な顔に、旧魔王の女は嗤いながら、言葉繋げる。

「知れた事よ!

私は最初から、奴等を仲間とは思っていないだけの事!

人間なんて、替えは幾らでも居る!

使い捨ての『駒』扱いで十分であろう!」

「カテレアちゃん…」

その単なる種族の違いで無く、正しく一般の人間がイメージするであろう、悪魔らしい発言に、セラフオールは哀しみの表情を浮かべ、  
「カテレアちゃん…それは違う…」

キミは、間違っているよ…」

「な…?周りの空気が…この魔力は?!」今迄、殆ど防御の為にしか使わなかった魔力を一気に解放、校庭上空、2人のレヴィアタン周辺の気温を、一気に押し下げる。

「…本当に、出来れば本当にさ、『普通』の話し合いで、済ませたかったんだよ?」

「…!!」

バサツ!

その魔力と、普段のセラフオールからは想像の付かない様な、殺気を含んだ顔で睨まれ、危険と判断したカテレアが、距離を空けようと飛び立とうとするが、

カピイイン…

「…コレは!!?」

「逃がさないよ…」

凹み気味の顔を見られたくないのか、顔を俯けてセラフオールが喋る中、魔力によつて、マイナスに迄 下がった周辺の大気が渦を巻き、まるで水中に居ると錯覚させる様に、質量を持って纏わり憑く。

「…あのね、私だって、伊達なんかで魔王の名を…レヴィアタンを受け継いだ訳じゃ、無いんだよ?」

「うう?!」

それは浮遊効果迄奪われ、地上に落下する事は無いが、完全に空中で動きを封じられた状態。

「敵を斃す為とは言え、仲間迄巻き添えに、しかも諸共殺してしまうのを前提な真似は、絶対に やっちゃいけない…。

もう一度言うよカテレアちゃん…

キミは、間違っている。…だから、

「うう…だ、黙れえ…!?!」

未だ止まらず周辺気温が下がる中、顔を起こすと、暗く、光が消えた瞳をカテレアに向け、哀しそうな顔で魔王少女は呟く。

「…少し…頭冷やそうか…?」

キイイイイン…

「セ、セラフオールウウウウツ!!?」

その台詞と共に、カテレア周囲の空気が一瞬で氷結、カテレアは氷の匣に閉じ込められ、それは その儘、静かに ゆっくりと、校庭の真ん中に降り立った。

「大丈夫…ちゃんと手加減してあげてるから、死んだりしないよ…。」



「おっい！」

「あ、部長！」

「ギャー君…シリユー先輩！」

リアスとシリユー、ギャスパーとミルたんが、この場に戻って来たのは、この直後だった。









「ん…手加減は、したから…」

このセラフオールの本来、『相手は死ぬ』な攻撃を受けていても、手加減により死んでないらしいカテレア。

「とりあえずは【禍の団（カオス・ブリゲード）】だったっけ？」

その集団について、色々と教えて貰わないとね。」

「…だな。おいセラフオール、解凍だ。」

「ん…分かった…。」

パチイン…

魔王少女が指を小さく弾くと、旧魔王を閉じ込めていた氷が 見る見る内に蒸発して消えて往く。

「カハアツ…：セ、セラフオール!!」

「カテレアちゃん…」

そして その中に居たカテレアが、ダメージと疲労からか、膝を着きながらも、現・レヴィアタンを怨めしく睨みつける。

「カテレア・レヴィアタン…色々と言いたい事は分かるが、それは後で聞くよ。」

君が属している、テロ集団の情報と一緒に…ね…」

既に他のテロ連中は片付けたし、もう この場には、お前しか居ねー。

大人しく捕まっちゃうのが、ベストだと思うぜ？」

「グレイフィア、頼む。」

「はい。」

サーゼクスとアザゼルが、一步前に歩み寄り、カテレアに話し掛けた後、その傍らに居たグレイフィアが魔力の枷を精製、今回のテロ集団の首謀者を拘束。

「くつくつくつく…」

「んあ？」

しかし、手足を封じられた状態でも、カテレアは まだ余裕が有るのか、嗤いを零す。

「オメー、何が おかしんだ？」

「…忘れたのですか？」



あの場に現れた時、最初に言った筈です。

旧魔王……いいえ、真の魔王の血を引く者達は、〔禍の団（カオス・ブリゲード）〕に協力する事を決めた……と！」

「ど、どーゆー意味……」

「さあ、何をやっているのです！」

早く、この拘束を破りなさい！」

偽りの魔王達、そして それと組もうとしている愚か者を、共に滅ぼしましょう！」

ヴァーリ・ルシファー!!」

「な?」「は?」「へ?」「え?」

「……………」

カテレアの台詞……その『ルシファー』という言葉に、その場の者達は素っ頓狂な声を出し、ルシファーと呼ばれた純白の全身鎧を着込んだ男に注目した。

「あはははははは!」

どうやらアザゼル以外は、知らなかったみたいですわね!

その白龍皇は、先代ルシファーの孫と、人間との間に生まれ (ゴツ)ぐはあっ!!」

「……黙れ。」

「……………」

明らかに不利な状況の中、まだ自分達には『札』は有るとばかりに勝ち誇った様に話すカテレアに、魔力弾を浴びせたのは、彼女からすれば、その『札』で在る筈のヴァーリ。

「……………」

その無表情からの躊躇無い一撃で、カテレアは事切れてしまった。

「これは……」

「アザゼル、一体……」

「あつー!俺が聞きてーよ!?!」

おい、ヴァーリ!一体、どーゆー心算だ?

オメー、テロ集団の誘いは蹴ったって言ったじゃねーか?」

一番最初に和平を持ち掛けていながら、まさか その自分の下に位

置する者が、それを邪魔立てしてきたテロ組織に通じていたという事実。

サーゼクスやミカエルに疑惑の表情を向けられて、罰の悪そうな顔で、アザゼルはヴァーリを問い詰める。

「…確かに、旧魔王達からの誘いには興味が沸かなかつたから断つたさ。」

しかし先日、オーフィス直々に、改めて依頼を受けてね。

それで旧魔王共は勝手に、俺達が自分達の仲間になったと思ひ込んでみただが…」

「違うってのか？」

「オーフィスが言うには、『コイツ等は蛇(チカラ)を求めるだけで、一向に私の願いを叶えてくれない』…だそうで、その役立たずの処理を、俺達に依頼してきたんだ。」

「フン…内部の始末屋か。」

事も無げに話すヴァーリに、アザゼルは呆れた顔を見せる。

「…と、言いますか、アザゼルがテロ組織の名前等を知っていたのは、彼からの情報だったのですね…。」

「ああ、まあな…。」

…それにしても、だ。

お前は俺が今日、コイツ等と平和を結ぼうとしたのを知っていて、それを象徴で…」

「さっきも言っただろう？アザゼル。」

俺は強いヤツと戦えれば、それで良いと。

誰と誰が仲良く手を組もうが、或いは敵対しようが、俺には関係無い事なんだ。

だから、あの時に断りも入れていたぞ。

3 竦みが手を結ぼうが、赤と白の対決は、別枠だと…。なあ、赤龍帝？」

「……………!!」

アザゼルと話す中、シリユーに視線を向けるヴァーリ。

「丁度良い具合に、この場は結界も張られている。」

君にとつても、それは好都合なんだろう？

良い頃合いじゃないか。

さあ、赤と白の宿命…今、この場で決着させようぜ？赤龍帝…神崎  
孜劉！」

チヨイチヨイと挑発する様に手招きするヴァーリに対してシ  
リユーは、

「…正直な話、ドライグには悪いが、俺は2天龍の対決なんて、興味は  
無かった。

しかしながら、其方が戦える気満々で避けられない戦いならば…ドラ  
イグ！」

(応よ…相棒!!)

Welsh Dragon over booster!

Balance breaker…

Boosted gear・Scale Mail!!)

シリユーの呼び掛けに、赤龍帝の籠手に宿る赤き龍が応え、籠手か  
ら電子音的な雄叫びが発せられると同時に、シリユーの身体は赤い全  
身鎧に包まれる。

「皆、手出しは無用だ！」

白龍皇は、俺が倒す!!」

「ふっ…当然だ！」

俺達の勝負に、何人たりとも割って入る真似は許さん!!」

この言葉と同時に、2人はダツシユして互いに間合いを詰め、  
「皆、本当に危険だから後ろに下がって！」

グレイファイア、セラフォル！」

…他の皆も、防護結界の術式が使える人は、結界を！」

「「「「「はいー」「「「「「

サーゼクスの呼び掛けで、その場の者達が皆一步退き、  
ゴッ！」

周囲に被害が及ばぬ様に張られた結界の中、赤と白の腕が、拳が交  
差した。

この宿命の対決に決着を！

バキイツ！

シリユーとヴァーリが幾度となく拳を放ち合い、互いのマスクを破壊、両者の素顔が露わになる。

「流石だな、神崎孜劉！」

「それでこそ、俺の宿命のライバルだ!!」

「生憎だが俺は別に、そんな風には思っていない！」

シユ：ドゴツ！

そして即座に互いにマスクを再生、そのマスクの裏で、片や嬉しうな、片や心底嫌そうな顔をして、再び拳をぶつけ合う。



「ねえ、アザゼルちゃん？」

「ああ？」

二天龍が激突している中、セラフオルがアザゼルに話し掛けた。「キミは、知っていたの？」

あの白龍皇：ヴァーリって子が、先代ルシファアの血を引いているのを…」

「まあな…」

アザゼルは その場に居る者達に、ヴァーリの事を話し出す。

「アイツは…：さつきカテレアも言っていたが、先代ルシファアの孫と、人間の女との間に生まれた子供だ。」

其処のハーヴヴァンパイア同様に、人間の血を半分持っていた故に神器を…：しかも神滅器である【白龍皇の光翼（ディバイン・ディバイディング）】を宿した、今代の白龍皇として生まれたんだよ。」

「彼は、先代ルシファアの曾孫ですか…」

「でも、どうして そんな子を、アザゼルちゃんが？」

「簡単に言えば、身内がヤツの力を恐れて虐待の果てに消そうとしてな、それで逃げ出したアイツを、俺が保護したのさ。」

「悪魔の…：魔王の血を引くものを保護…：ですか…」

「ぶつちやけ、最初はヤツの神器に興味があったのが大きかった

のも、確かに事実だがな。

：兎に角アイツは、ルシファアの血族でありながら、同時に持っていた人間の血から、神器も得ていた。

それも白龍皇って云う、謂わば奇跡を通り越した、ギャグみたいな存在だ。

歴代の、そして この先の未来を見越しても、最強の白龍皇だよ。

神崎孜劉：今代の赤龍帝も、あの戦争狂（コカビエル）を圧倒したらしいが…

さて…どつちが上かな？」

「シリューちゃん…」



「神崎孜劉、君の事は、少し調べさせて貰ったよ。」

「何？」

激しい攻防の中、ヴァーリがシリューに話し掛ける。

「極々普通の家庭に生まれ、極々普通に育ってきた…。」

この春、グレモリーと接触するまでは、本当に所謂『裏』との関わりは、確認出来なかった。」

「ストーカーか、貴様は!？」

「…それなのに、キミの尋常では無い その強さは何だ？」

幼い頃、身に宿す赤い龍の存在を認識して、人が見ない所で鍛錬していたとしても、その強さは異常過ぎる。

例え、天武の才が在ったとしても、普段日常は平凡な、平和な生活を過ごしてきた人間が得られる強さじゃあないんだよ。

教えてくれよ…キミの その強さの秘密は、一体何なのだい？」

「通常の1秒間が、1年の速度で流れる不思議空間で修行していたんだよ！」

「俺は、真面目に聞いているのだがな…」

ヴァーリの質問に対して、まさか生まれた時から前世の記憶と小宇宙（チカラ）を其の儘継承している…等と、正直に言える筈も無く、自身が お気に入りなコミック『ドラグ・ソボール』のエピソードの1つを持ち出しながら、惚けて答えるシリュー。

しかしヴァーリは当然、納得はしない。

『(Divide!)』

ガツ

「……、これは……?!」

白龍皇の鎧から発せられる電子音と共に繰り出されるヴァーリの拳が、シリューに胸元にヒット。

それと同時に、身体に原因不明の脱力感、そんな違和を感じるシリュー。

『(Boost!!) 気をつけろ、相棒!』

それが白龍皇の……アルビオンの最たる特徴、半減の能力だ!!』

「半減……だど?」

『そうだ、ヤツは俺の能力(チカラ)とは真逆、敵の能力を半減させる事が出来る!』

「そういうのは一番最初に教えろ!」

暢気に? 解説するドライグに、少し本気でシリューは突っ込む。

『半減された力は、俺の倍加の力で元に戻せるので問題無い。』

だが厄介なのは、ヤツはその減った分の力を、自分の力として取り込む事が出来る事だ!』

「……成る程な、ならば!!」

『待て、話は終わってないぞ相棒!』

ヤツを よく見てみる……』

「……? あれは……?」

ドライグの言う通り、改めてヴァーリに目を向けると、鎧の背部に附いている光翼から、光の粒子が零れ出ている。

『解るか? ああやってヤツは、最大容量以上の力は放出しているのだ……』

ワザと力を吸わせた上の、暴飲暴食による自爆は狙えんぞ。』

「ちい……つまりヤツは常に、MAX状態で居られるって事か……!」

ドツドツドツド……

『?!』

そんなシリューとドライグの遣り取りの中、ヴァーリは左手を右手

首に添えた構えで、右の掌から蒼白い魔力弾を、逃げ場を作らせないかの様に、広範囲に連続で撃ち放つ。

ガイイン!!

「「きやああつ!!」」

その魔力の弾の一部は、邪魔にならない様に退がって2人の戦いを黙って見ていた、リアス達が展開していた防御結界に着弾、結界の一部を破壊、

「はああつ!!」「てやつ!☆」

これを透かさず、最強メイドと魔王少女が修復する。

「ヴァアーリイイツ!!」

そして 関係無い者を巻き込む攻撃に憤ったのか、怒声と同時に、ヴァーリとは左右逆の構えを見せるシリユー。

その左の拳から放たれるのは、

『(Boost!!)』「廬山漆星龍珠!」

倍加され強化された、魔力と小宇宙(コスモ)が融合した、碧色の破壊のエネルギー弾。

ジギユウウウウウウ…

「む…」

それに対してヴァーリは、右掌から放つ無数の魔力弾での迎撃相殺を試みるが、その破壊力はシリユーの撃ったエネルギー波の方が遥かに上だった模様。

「ちいつ…!」

自身が放った魔力の弾を蹴散らしながら迫る破壊のエネルギー波に対し、迎撃する心算だった故に、既に回避は不可能と分析したヴァーリは、

「Half Dimension!」

ガン!

「何いつ!?!」

襲い掛かってきた漆星龍珠を、パワーだけでなく、そのエネルギー波の大きさ其の物を『半分』にして、アッパー気味に拳で打ち上げる様に、上空へと弾き飛ばした。

これにはシリューも、驚いてしまう。

「な…何なのよ、今のは？」

「シリュー先輩のドラゴン波が、半分になりました…？」

そして驚いているのは、シリューだけではなかった。

何度となく目の当たりにして、その威力は充分に知っている心算である、シリューの決め技を弾く事ではなく、その前の それを『半分』にした能力に驚くりアス達。

「あのヤロー、アレを使うとはな…」

「あれは、どういう技なんだい？」

これを冷静に観ているアザゼルに、サーゼクスが訪ねる。

「アイツの能力は『力』を半分にするだけじゃあ無いんだよ。

極限に迄高まった力は次元を歪め、周囲の ありとあらゆる物を、物理的に半分にしてしまうんだよ。」

「周囲を半分…？」

「つまり、それって…」

「よく分かんないによ…？」

アザゼルの説明が いまいち理解出来ず、頭の上に疑問符を浮かべるリアスとソーナ、そして その眷属達。

「つまり、ヴァーリが本気（マジ）になったら、リアス・グレモリー…

いや、リアス嬢だけでない、お前等の乳（バスト）が皆、半分になるって事だ。」

「「「「「はあ？」「」「」」」」」

この、真剣な顔での巫山戯ているとしか思えない発言に、殆どの女性陣が どん引き顔となり、

「な…何て恐ろしい能力なのでしょう…」

小猫が わなわなと戦慄し、

「ば、バッカヤロー、巫山戯んなよ！

半分になったりしたら、まるつきり無くなっちゃうのと同じじゃねーか！」



誰の胸（バスト）を想像（イメージ）したのか、匙が怒りを ぶちまける。

「い、嫌だー！」

グレイファイアが咲○さんに なっちやうなんて…そんなの絶対に嫌だーあっ!!」

…更には紅髪の魔王が、血涙を流しながら、慟哭の悲鳴を上げるのだった。

ドコオツ!!

「くっ…!!」

そんな外野の場違いな騒ぎには気にも留めず…いや、全く気付かずに ぶつかり合う二天龍の2人。

シリユウの蹴りで、ヴァーリのマスクが飛ばされ、ヴァーリの肘打ちで、シリユウの鎧、ボディパーツの前面が碎かれる。

「まっ!!」

「なっ…!!」

「ひえっ?!」

「あらあらあら?」

「ハア…」

「……………!!」

「「「キヤーーーーっ!!」」」

「「「ぎゃあーーーーっあ!!」」」

「「「おおおおおっ!!☆」」」

その露わになった、鍛え上げられた胸元と腹筋を見た女性陣が、悲鳴や歓声を上げ、或いは溜め息を吐き、そして ある者は、無言で刮目する。

「さ、サーゼクス様?」

「グレイファイア、君は見ては駄目だ!」

そんな中、サーゼクスは御付きのメイドに背後から目隠しをして、

「みみみ、ミカエル様!?!」

「キミも、ガン見したりしない!」

「堕ち掛けてるから!!」

そしてミカエルも、同行していた女性秘書天使の翼が白黒に点滅しているのを見て、慌てて彼女に目隠し。

ヒュン…

この攻防で接近戦は分が悪いと思ったか、再度マスクを復元させたヴァーリが光翼を広げ、空中へ移動。

「逃がさん!」

「「「チイ…ツ!」」」

それに対してシリユーも、鎧を再生した事による、一部女子の舌打ちをスルーしながら、鎧の背部から龍翼を展開して飛翔、ヴァーリを追尾する。

だが、空中戦での直線移動…それは敵からすれば、絶好的でもあり、

「滅べーバースト・ストリーム!!」

ボワアツ!

「ぐっわ…!!」

両手を重ね、龍の顎を象ったかのような構えから、その両掌の中で錬られ圧縮された、高密度の魔力弾の直撃を浴びてしまう。

ドシヤア!

小宇宙（コスモ）の有無を除けば、恐らくはシリユーの漆星龍珠と同質な技をまともに受け、地面に激突してしまうシリユー。

「う…くっ…」

「まだだ!!」

ぶん…!

跪くシリユーに向けて、ヴァーリは背中に附いていた龍尾型のパーツを手に取り振り翳し、それを鞭の様に空中から打ち放つ。

グリップの付け根からパーツが追加される様に延びながら迫る鞭。

ガキイツ!

それをシリユーは左腕でブロックして巻き付け、

「でえい!」

ぐい…





成層圏を抜け出そうとする時点で、ヴァーリが無駄な事だとシリューに話し掛けた。

「ああ、それは解っているさ。だから…」

クル…

「な…!?」

体勢を上下反転させたシリューは、上昇の勢いを其の儘下降に換えて、錐揉みしながら地表を…最初に飛び立ったグランドを目指す。



キラーン…

「あ、あれって もしかして…」

「し、シリューさん…?」

あの後、ずっと2人が消えた空を見上げていたりアス達。

小猫が不意に赤く光り、そして徐々に大きく、まるで此方に向かって墜ちて来る様な星を指差した。

「……………!!?」

ま、まずいぞ! 皆、結界だ結界! 思いつきり本気なヤツを!!」

「二「は…はい!」二」

それを見たサーゼクスが顔を青くして、防御結界を創り出せる者達に、それを要請。

当然、自身も術式を繰り出して結界を創り出す。

そうしてる間にも、燃える様に赤く光る星は駒王学園のグランド中央を指すが如く接近。

「二「き、来た…!!」二」

そして その赤い光の正体とは、当然…

「廬山龍旋爆…!!」

ドツゴオオオ…!!

旋回急降下で、頭から墜ちて来たヴァーリとシリュー。

その激突の衝撃は、グランド全体を穿つ程の巨大で深いクレーターを作り上げ、その中央には、ボロボロに砕けた赤と白の鎧を着込む、2人の人影。

「ふっ…まさか、此程迄とはな…!」

アルビオンよ……この神崎孜劉ならば、白龍皇の【覇龍（ジャガーノートドライブ）】を見せてやる価値が在るよな？」

技のダメージにより動きながらも不敵な笑みを零すヴァーリが、鎧を再生しながら、自身に宿る白き龍に話し掛ける。

『ヴァーリ……今の状況での それは、良い選択とは言えぬぞ？』

無闇に【覇龍（ジャガーノートドライブ）】となれば、それに呼応して、ドライブの呪縛が解けるやも知れぬぞー！』

「それは、願ったりだよ……」

………我 目覚めるは、覇の理に……」

『止せ、ヴァーリイツ!!』

我が力に吞まれるが、お前の望みか!？」

立ち上がると、アルビオンが自制を求めるも それを無視して魔力を集中、術式を唱えるヴァーリ。

「ドライブ、あれは……？」

『そうだ相棒、あれこそが【覇龍（ジャガーノートドライブ）】を発動させる言霊だ。』

アレを完成させられると、今のお前でも、勝てるかは判らなくなるぞー！』

「了解だドライブ！

ならば今一度、燃え轟け！

我が小宇宙（コスモ）よ!!」

ドライブの言葉に、シリユーも小宇宙（コスモ）を燃焼させ、

「うおおお~~~~~~~~おっ!!」

【紅珠黄金龍（ルビーゴールドドライブ）!!』

この雄叫びと共に、再生された鎧の色が、通常の『赤』より より煌めく『紅』に変化し、全身から眩い黄金の光を輝き放つ。

【紅珠黄金龍（ルビーゴールドドライブ）】……それは以前、ドライブから【覇龍（ジャガーノートドライブ）】の事を聞かされたシリユーが、それとは別の……自我を保った儘の進化を模作した末に得た、今代の赤龍帝だけの、オリジナルの戦闘形態。

籠手の宝珠に、自らの『黄金の血』を与えた事により、小宇宙（コ

スモ)の燃焼を鍵とする事で、更に一段進化、強化された赤龍帝の鎧。外観的には通常の鎧に、額の部分に龍の頭を、両肩に龍の爪を象つたかの様な造形が、そして左腕に円盾が追加装備された以外は、大した変わりはない。

「何いつ…?!あれは…?」

そして その進化に驚き、思わず覇の言霊の詠唱を止めてしまうヴァーリ。

そして先に次なる攻撃姿勢を完了させたシリューが、一気に近接距離に詰め寄ると

「これで終わりだ、ヴァーリ！」

今こそ受けよ！このシリュー最大の拳!!」

この台詞と共に、最大限に小宇宙(コスモ)が宿った右拳を、ヴァーリに向けて撃ち放つ。

「廬山昇龍覇—————っ!!!」

D o K o o o o o o o o o o H N !!

「ぐはあっ!!」

このアツパーカットの一撃で、ヴァーリの体は天高く舞い上がり、ドシヤア!!

そして垂直に頭部から地面に落下、激突。

「うう…」

だが白龍皇の鎧の防御力か、それでも尚、ボロボロになりながらも起き上がろうとするヴァーリ。

「…昇龍覇を耐えるとはな！」

それを見たシリューが追撃を仕掛けようとした時、

「其処迄です！既に勝負、在りました！」

「!!!」

何処がらか 男の声が この場に響き渡り、直後にグラウンド跡の地面に、直径約3呎程の魔法陣が出現する。

その中には4人の男女の姿が。

「はあくあ…ヴァーリ、貴方は一体、何をやっているのですか？」

そして その内の1人：脇に2本の長剣を携えた、スーツ姿に眼鏡を掛けた青年が、心底呆れ果てた様な顔をして、ヴァーリに話し掛けた。



## 無限の龍神（ウロボロス・ドラゴン）オーフィス！

「派手にヤラレちまつてるなあ？ w w w」

「だ、大丈夫ですか？」

「……ヴァーリ・ルシファー……」

眼鏡を搔けたスーツ姿の青年。

古代中国の武人な出で立ちの青年。

縁の広い三角帽子を被った金髪の少女。

そして黒髪のごスロリ少女。

シリューとヴァーリの戦いを止めに入った眼鏡の青年に続き、魔法陣から姿を見せた者達が、ボロボロの状態で腰を着いているヴァーリに次々と話し掛ける。

「あ、アーサー？ 美猴？ ルフェイ？

……と、誰にや？」

「あ、黒歌さくん、久し振りですう。」

その顔ぶれに、黒歌も驚く。

どうやら1人を除いては、知っている人物の様だった。

「……で、貴方は何故……其方の方は赤龍帝ですね？……と、こんなにも派手にやらかしているのですか？」

「(？3?) …… (フー……フー……)」

眼鏡男の質問に、ヴァーリは気不味そうな顔を明後日の方向に逸らし、鳴らない口笛を吹きながら、黙秘権を行使するかのように黙り込む。

「はあ……」

駄目だコイツ……とばかりに、深い溜め息を1つ吐いた青年は、シリューに顔を向けると

「貴方が今代の赤龍帝ですね？」

私は、アーサー・ペンドラゴンと申します。

何故、このような事態に陥ってしまったか、出来れば説明して頂きたいのですが？」

「……………」

このアーサーと名乗る男の、敵意の無い、あくまでも状況を把握し

たい素振りに、少し戸惑いながらも、シリューは口を開く。

「…赤龍帝、神崎孜劉だ。」

説明の前に、1つ確認しておきたい。

あんた達は以前、黒歌が所属していたという、このヴァーリをリーダーとしたグループの者だな？」

「はい、そうですが。」

自分からの質問に肯で答えたアーサー。

それに対し、シリューも

「単純に言えば、赤と白の対決が為されたとしたか、言い様が無いのだが

…

…それで貴様等は どうする？

ヴァーリを回収して退くのか？

それとも この場で続けるか？

【禍の団（カオス・ブリゲード）!!】

「はい?」「へ?」「え?」「……。」

最初のアーサーの質問に有りの俣に答え、その後その儘、戦闘の構えを見せる。

それに対して…自分達を「禍の団（カオス・ブリゲード）」と呼んだ事に対して、やや困惑気味な表情を浮かべるアーサー達。

「神崎孜劉殿…何やら少し、勘違いと言いますか、誤解が有る様ですが

…

…ヴァーリ?」

「(? 3?) …………… (フー!フー!)」

ジト目なアーサーの問いに、先程以上に鳴らない口笛を吹こうと努力しながら、明明後日の方向を向くヴァーリ。

「おいおい赤龍帝?俺達は、テロリストなんかじゃあ、無いんだぜい?」

「はいですう!」

「…コイツが、赤龍帝……。」

シリューに対して、古代中国風な青年・美猴と、先程襲撃してきた魔法使いと似た様な格好…と言うよりか、魔女っ娘という表現の方が

似合いそうな三角帽子の少女・ルフエイが、自分達がテロである事を否定。

無表情なゴスロリ少女は、ややベクトル違いな反応を見せる。

「確かに我々は此方のオーフィスから、【禍の団(カオス・ブリゲード)】の殲滅アシストの依頼を受けましたが、決してテロ集団に加入した訳では、無いのですか?」

「「お・お……オーフィスうう?!?!」」

「ま……まさか……」

「そ……その娘☆……が……?」

「ん……。我、オーフィス。」

続くアーサーの説明に、そのテロリスト否定の内容でなく、然り気に紹介されたゴスロリ少女が、この騒動の元凶のテロリスト集団【禍の団(カオス・ブリゲード)】の頭目とされている、【無限の龍神(ウロボロス・ドラゴン)】で有る事の方に驚く、3勢力トップ達。

「おい、ヴァーリィ……コイツは一体どーゆー訳なのか、マジに きつちりと、話して貰うぜ?」

「う……アザゼル……」



「クツソ! 神崎のヤロー、派手に やらかしやがって!!」

「この前の体育館と云い……やつぱり あの人は、好きになれません!」

「神崎きゆんの胸板と腹筋……ハアハア……」

「ふ、副会長?」

「そこ、喋ってないで! 夜が明ける前に、どうにか直すわよ!」

ソーナ指揮の下、生徒会の面々は、何やら色々と ぶつぶつ言いながら、シリユウの廬山龍旋爆……別名『大気圏突入式・旋回型飛龍原爆固め』により、巨大クレーターと化した校庭の修復に勤しんでいた。

尚 前回、体育館を破壊したのはシリユウではなく、コカビエルである。

そして その頃、サーゼクスをはじめとする各勢力のトップに、リアス達、更にはヴァーリィチームの面々は……

「……さて、全て話して貰おうか?」





いきなり姿を見せたのは、其方に居る、黒歌の妹さんよりも小柄な少女。

私の妹のルフエイが、不思議そうな顔をしながら、応じます。当然な話です。

私達の拠点（アジト）は、普通に歩いて、偶々迷子になって辿り着いてしまう様な場所では無いのですから。

しかも、わざわざ白龍皇（ヴァーリ）を訪ねて、アジトに やって来たのですから、この少女が単なる迷い子では無い以上に、只者で無い訳が有りません。

「我、オーフィス。」

白龍皇に お願いに来た。」

「!!」「??」

オーフィスと名乗った彼女に、私、美猴、ヴァーリの顔が瞬時に変わります。

何しろ先日、ヴァーリが加入の誘いを蹴ったと云うテロリスト集団、【禍の団（カオス・ブリゲード）】の頭目とされている人物の登場ですから。

ルフエイには まだ、無限の龍神の事は教えていなかったもので、『??』な顔をしています。

甲羅やバナナの投げ合い仕掛け合いで、ガチギレしている場合では無くなりました。

「おいヴァーリ、このガキ…」

「ああ、間違い無い。

この内側から感じる、龍の気…

どうやら、本物の様だ。」

同じく伝説のドラゴンをその身に宿す者だからこそ、解るのでしょうか。

美猴も私も、とりあえずは只の人間では無いと直感は していたのですが、本当に目の前の少女は、無限の龍神だった様です。

「…それで、俺に何の用だ？」

アンタの作ったテロ集団には興味が無いと、この前 声を掛けてき

た悪魔（ヤツ）に、そう伝えろと言ったと思うが？」

「フルボッコにしてなwwww」

「…違う。アレはアイツ等が、勝手に名乗っているだけ。」

我も せかいせいふくには興味が無い。」

瞳に全く光の灯っていない、無表情な少女は語り出しました。

曰わく、偶々同じく時期に、旧魔王の派閥の者や、人間界にて異形異端として認識されている者達、或いは3竦みや、その他の勢力から出奔した者達が皆こぞって、今の世界を自分達の都合の好い風に魔改革したいと、オーフィスに助力を求めて集まって来たとか。

そして、その者達が結託して出来上がったのが、オーフィスを勝手に旗頭とした件のテロリスト集団「禍の団（カオス・ブリゲード）」だとか。

当然ながら、オーフィスも只で彼等に自分の力を貸したりする事は有りません。

彼女の生まれ故郷である、次元の狭間。

其処で静かに暮らして往くに辺り、非常に邪魔な存在である、『真なる赤龍神帝・グレートレッド』の打倒を条件に、自らの蛇（チカラ）を分け与えていた様ですが、

「…アイツ等は我に蛇（チカラ）を求めるだけで、一向に願いを叶えてくれない。」

何時迄経つても、グレートレッドを斃しに行かない。」

…らしいです。

まあ、それは当然な話でしょう。

何しろ相手は、あの『真なる赤龍神帝』ですよ？

あんな最狂ドラゴンに、自ら喧嘩を売ろうと考える人物なんて、私は1人しか思い浮かびません。

誠に お気の毒ですが、無知…失礼、無垢な彼女は、好い様に騙され利用されているとしか考えられません。

「……………」

しかし、それをストレートに教えて善い物なのか、教えるにしても、言葉を選ばねばと思案している中、





「ん、おいしい…」

「………。」

ヴァーリが作ったインスタントラーメンを啜るオフィス。

やれやれ…何とか機嫌は、収まったみたいですね。

「…それでオフィス？」

貴女は何やら、ヴァーリに用事が有って、この場に來たみたいですが…」

「…プリンは？」

「………。」

結局その後、冷蔵庫に仕舞っておいたプリンにケーキ、アイスクリーム等のスイーツは、全部オフィスの お腹の中に。

それにより、今度は妹(ルフェイ)が うるうるとなりましたが、そんなのは大事を回避した故の小事です。

「我、白龍皇に、グレートレッドを斃す手伝いを頼みに來た。」

「良いよ。」

「「うおおおえい?!」」

そして やつと、オフィスが我々のアジトにやって來た本題を切り出しましたが、即答ですか!?

∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞

「…まあ、この様な経緯が有った訳でして…」

「「「「………。」」」」」

アーサーの説明に、啞然となる一同。

「しかしながら当然、今の我々では、グレートレッドを打倒するのは不可能。」

…かと言って、彼女の『蛇』を、身に受け入れる心算も無く。」

「それで とりあえず、今の『蛇』を取るだけな、働かない連中の肅清を先に殺つちまわね?…つて話になつてな…」

「この学校に、一部の者が襲撃を仕掛けるのは、オフィスちゃんから聞いたので、その人達は、最初から会談に出席予定だったヴァーリさんに任せて、」

「残りは、オフィスを含む我々で、カテレア・レヴィアタンが学園を

襲撃するタイミングと併せて、決行する流れに なったのです。」

「ふっ…そうゆう事だ。」

「やかましいわ！おい、赤龍帝!!」

「……………どうぞ。」

すばかーん!!

「ありすてらっ!!」

更に順々に、予め段取っていた様に台詞を繋ぎ、最後にドヤ顔で締めたヴァーリに、保護者ポジションである、墮天使総督の一撃が炸裂した。

「お前、とりあえず来月の小遣いは、無しだからな!!」

「ドイヒー!?! (。D。Ⅲ)」

「ちよつと待つてよ?」

それじゃ もしかして、【禍の団(カオス・ブリゲード)】って…?」

「ええ。実質、壊滅ですね。」

この親子漫才をスルーして、リアスがアーサーに訪ねると、あつさり壊滅と言つてのけるアーサー。

「旧魔王派閥…レヴィアタンはヴァーリが、残るベルゼブブとアスモデウスや、その他の人間が中心となつている派閥は、オフィスと私達が…少なくとも各幹部クラスは皆、討ち取りましたね。」

「下っ端の雑魚は少し逃がしちゃったが、既に後ろ盾も無いし、もう今回みたいなのは出来なと思うぜい?」

完全な殲滅掃討とは往かなかつたが、とりあえずの脅威は無くなつたと断言するアーサーと美猴。

「ははは…マジかよ…」

それを聞き、【禍の団(カオス・ブリゲード)】の危険性を話した上で、和平交渉に切り出す心算だったアザセルは、苦笑いするしかなかった。



なりました。

最初は皆、誰も喋らずな沈黙の空間だったのですが、黒歌姉様の

「ふにゃーっ!!」

静か過ぎなのは耐えられないにゃ!

ほら、リアス達もヴァーリ達も、とりあえず名乗りあつて、何か話すにゃ!!」

…の一言で、最初に やれやれ顔なシリユール先輩が、それに続けと祐斗先輩、そうになると、あちら側も改めて自己紹介していき、全員名乗り終えた後は、ギクシヤクしながらも、色々と自分達の事とかを話し始めました。

姉様が元々、向こうのチームに入っていたのが、上手い具合に橋渡しになった感じです。

因みにルフエイちゃんとオーフィス：オーちゃんとは、アジア先輩やレイヴェルさん、ギャー君共に、仲良くなれました。

スイーツ好きの子に、悪い人は居ません。

今度 皆で、スイーツ巡りに繰り出す約束もしちゃいました。

勿論シリユール先輩にも、財布：コホン、女子だけでは不安なので(ギャー君は女子枠です)、ボディーガードとして：ボディーガードとして、同行して貰う予定です。

そんな徐々に和気藹々に なってきた中、簡単に平和に収まってくれないのが この世界の常。

あの頭に金色の輪っかを填めている、美猴って男の人。

この人、あの空孫悟…でなくて、あの孫悟空の お孫さんらしいのですが、何気に色々と会話している途中で、どうやら この人が、少し前から冥界で話題になっていたリアス部長の二つ名、”駄肉姫”の名付け親である事が判り、部長、激(怒)です。

部屋の中で、滅びの魔力、放ってます。

「あらあらあらあらあら?」

「ちよ…部長、落ち着いてー! w w w」

朱乃先輩やシリユール先輩が止めに入ってますが、シリユール先輩?…真剣じゃないですよね?



恐らくはグレイフィアさんの迫力に屈したのか、魔王少女コスから、また女性用のフォーマルスーツに着替えている。

「分かりました。さ、皆 行きましよ。」

「「「「「はい。」」」」」」

リアス部長の声に頷き、席を立ち、退室する俺達。

「ちよ…ちよつと待て神崎孜劉！」

俺を、この儘にしておく心算か!!？」

「お…俺つちも、足が…」

あー、正座させてる2人、忘れてた。

パチイン…

仕方無いので、小宇宙（コスモ）の枷を解除してやるが、

「あ…足が…」

完全に足が痺れているらしく、立ち上がれないヴァーリ。

情けないな…高々、あの戦闘の後、会議室にて事情聴取から今迄の、

ほんの2時間程度の正座で、その様とは。

俺は2ヶ月程度なら、余裕で平気だぞ？

「ちよつとキミ☆、大丈夫？」

これを見かねたセラフォルーが、ヴァーリの手を取り、立ち上がる

のを手伝ってやろうとするが、その時、

ずるっ…

「あ…」「お♪」

「……………」

バランスを崩したヴァーリが、セラフォルーのスカートをずり降りし、薄い水色のショーツが丸見えになり、

「きやあああああああああああつ!？」

数秒のフリーズ後、再起動と共に乙女な悲鳴を上げるセラフォルー

…って、アーシア？

「シリューさんは、見ちゃ駄目ですう！」

「あらあらあら？はい、祐斗君も、向こうを向きましようね♪」

「ルフェイ？眼鏡を返してくれないか？」



を介して）アテナ経由で説明する事が決まった。

「それと俺は暫くはこの儘、この街に滞在する事にしたからな。

それで…だ、聖魔剣使いとハーフヴァンパイア、それと今、校庭で作業している黒龍は、俺が神器の遣い方をきっちりと仕込んでやる。

先に言つとくが コレは、サーゼクスから正式に要請を受けているからな、お前等に拒否権は無いぞ？」

「「ええええっ?!」「」

このアザゼルのいきなりの発言に、大声で驚く木場とギヤスパ…と、リアス。

「…でだ、そっちの聖女も、一緒に神器の遣い方を教えようと思ってるのだが…」

赤龍帝、こっちは お前さんの許可が要ると思うが？」

「ああ、よろしく頼む。」

アーシア、良いな？」

「は…:はい!」

「決まりだな。対価…授業料は、サーゼクスさんに請求してくれ。」

「し、シリユー君？」

ま、まあ良いけど…:…。」

こうして…

西暦20XX年7月2X日―

・天界代表：天使長ミカエル

・墮天使中枢組織『神の子を見張る者（グリゴリ）』：総督アザゼル

・冥界代表：魔王サーゼクス・ルシファー

以上、3大勢力各代表の下、和平協定が調印された。

それに伴い、3大勢力の争いは禁止事項とされ、協調体制へ。

この和平協定は、その舞台となった学園に由来して、『駒王協定』と称される事になった。





幼い時、物心付いたと共に蘇った前世の記憶。

俺が何者であつたか、それを思い出すと同時に認識出来た、己の内側に宿る存在。

ウエルシユ・ドラゴン、ドライグ。

『この世界』に於いて『裏』では伝説のドラゴンと謂われている、今は魂だけの存在となつた。その龍が、俺に教えてくれた。

悪魔：と云つても、この世界で。それは、決して人に害為す邪悪な存在と言う訳ではなく、寧ろ人間に対し、『契約』と『対価』と云つた形で依存している面の方が。やや強いらしい。

生まれ変わって15年、確かに生まれ育つた。この街で、その類の者の気配を何度か感じた事は有つた。

ドライグから。そういう『種族』だと教えられていたのも有り、敢えてスルーしていたが、実際に『本物』を目の前にするのは初めてだった。

『ふっ：相棒よ、この小僧だけでないぞ？』

教室全体を霊視して視ろ。

なかなか面白いクラスだぞ？』

……？

言われた儘にクラス全体を見渡すと：成る程、この木場とやらと同じく、悪魔が女子に2人、そして木場の2つ後ろの席：何やら此方を睨み付けている（何故だか知らんが。この時。既に、教室中の男子が、俺と木場を睨んでいるのだが）、目つきの悪い男：コイツは悪魔では無い様だが：

「(ドライグ、ヤツは：？)」

『気付いたか？あの小僧は相棒と同じくドラゴンを：黒邪龍ヴリトラを宿しているみたいだな。』

「(あいつも『神器』持ちか？)」

『(そうだ。尤も奴は、俺達と違って会話が出来る迄には、至ってない様だが：)』

「(俺の正体に、気付いたりした訳では、無いよな？)」

『(それは無いぞ。俺の、いや、相棒の、俺の気配を消す術は完璧だ。』

自分からチカラを解放したりするなら兎も角、相手が余程な存在でない限りは、バレる事は無いさ。

少なくとも このクラス…いや、この学校で、気付く者は居ないさ。』

「(この学校?)」

『(くくく…なかなか魔窟だぞ?この学び舎は…)』

……………。



「おいおい2人共…」

入学早々、モテモテだな? 悪羅あ?!

「羨ましいんだよ、このヤロー!」

「え?」 「はい?」

この金髪の悪魔の少年…木場祐斗と、彼に声を掛けられていた、内に宿るドラゴンと脳内で会話していたシリユーに、後ろ側の席に座っていた2人の男子生徒が、「リア充死すべし!」…な表情で絡んできた。

1人は極々普通の人間だが、もう1人は、シリユーが やはり体内にドラゴンを宿していると見抜いた生徒だ。

「…ちよつと待て。モテモテなのは、こつちの木場クンだ。俺は違うぞ。」

「喧しいわ! お前、嫌味か? 天然か?」

「どう見ても、お前も侍らせているぢやねーか!」

「はい?」

シリユーの言葉に、キレ気味に突っ込む2人の男子生徒。

気付けば、シリユーの周りにも、結構な女子生徒が集っていた。

「何よ! 自分がモテないからって、僻むんじゃないわよ!」

「!」「そーよそーよ!!」「!」「!」

「うぐぐ!!」「!」

そして この因縁? を付けてきた2人に対して、シリユーと木場を護るべく、鉄壁のバリアを張る女生徒達。

その余りの迫力に、半泣きで退いてしまう男子2人。



を得ている。

この2人…いや、3人目も含めて、確かにスタイルも抜群で美人ではあるのだが…

「悪魔…だしな…」

「神崎？」

「い、いや、何でもない。」

どうも あの2人、好みから少し、ズレてるんだよな？」

「お前、きよぬー好きって言ってたじゃねーか？」

「それだけじゃ、無いんだよ。」

因みに匙は、もう1人の お姉様、2年の支取先輩が、好きなタイプらしい。

尤も本人は口には しないし、自覚も無いのだろうが、あの人が見界に入った時の反応で、皆にはバレバレだ。

支取蒼那。

去年の生徒会長選挙にて、グレモリー先輩の応援も有ったからだろうが、当時1年生にして、全校生徒から圧倒的な支持を得て、生徒会長座を勝ち獲った先輩だ。

…ただし、あの女（ひと）も、悪魔なんだよな。

…てゆーか、このクラスの巡と花戒を含む、生徒会役員全員が悪魔。匙は気付いているのか？

それにしても…

2年のグレモリー先輩、姫島先輩、支取先輩、新羅先輩。

3年の…すいません、名前知らない、やっぱり生徒会の先輩。

ウチのクラスに、木場、花戒、巡。

それと他の1年の教室にも、あと数人程…

ドライグが言っていたが、本当に悪魔、多過ぎだな！

それから、木場がグレモリー先輩と一緒に登校してるのは、（本人から確認を取った訳では無いが）どうやら彼女とは、悪魔的に、主従関係に在るらしい。

ついでに言えば生徒会も、生徒会長の支取先輩をトップとして、副会長である新羅先輩が其の儘No.2な、グレモリー先輩とは別の派



「ん、木場君で、確かにカツコイイし、ちよつと良いかも?…とは思  
うけどさ、あんなアイドルの追っ掛けみたいなミーハー行為、何だか  
違うんだよね?」

アンタ達がグレモリー先輩見て、ひやはっししないのと、同じみた  
いなもんよ。」

「いや、俺は別に、冷静系ファンな心算も無いぞ。

あと、匙はグレモリー先輩でなくて、支取先P「わああああっ?!」  
うんがううっ!」

…俺の台詞は、顔を真っ赤にした匙に口を押さえられ、最後迄言え  
なかった。



「「ひいえ〜〜〜っ!!」」

どたどたどたどた…

「ん?」

その日の放課後、校舎を出ようとしたシリユーの正面に、3人の男  
子生徒が何かに脅えながら、必死な顔で走ってきた。

1人は天然な茶髪。

1人は坊主頭。

1人は眼鏡。

「「待てーっ!この、女の敵!!」」

どどどどどど…

そして その後ろからは、数人の女子生徒が、木刀やら竹刀やら…  
何やら物騒な得物を手にして、かなり お怒りな顔で追い掛けてい  
る。

「わわわっ!其処、どいてくれ!」

一番前を走っていた茶髪な男が、シリユーに道を空ける様に声を掛  
けるが、

「あつ、神崎!そいつ等捕まえて!」

「水沢?」

その直後、話し掛けてきたのは、木刀を振り翳しながら走っている  
剣道衣を着た女子…クラスメートの水沢香純。

「……………」

この男子生徒達と直接の面識は無いが、彼等の悪評は既に色々：女子に対するセクハラ行為等を聞いているシリュー。

故に「どいてくれ」と「捕まえてくれ」：どちらの言葉に従うかと云えば…

「悪いな。この先は、通行止めだ。」

当然、クラスメートの言葉を優先、両手を大きく広げて立ち塞がる。

「甘い！」

しかし、それを、茶髪男は避ける様に身を屈め、腕の下を潜り抜ける様に、校舎内へと逃走を試みるが、

「そっちがな!!」

パタン!

「へぶらっ?!」

最初から、その動作を想定、いや、その動きを誘導していたシリューが、わざと一歩だけ、自分を越えた男に対して後ろから襟口を掴むと、其の儘、引き倒して床に尻餅を搗かせ、

「わわっ?」「バカッ：イツセ…」

どどん!

後ろの坊主頭とメガネは、この茶髪男に、ぶつかり、倒れ込む。

「天誅—————っ!!」

バキィッ!

「「うぎや—————っ?!」」

そして3人の脳天に、ぶち撒けよとばかりに炸裂する、水沢の木刀。

「「死ね!死ね!死ね!」」

バギッ!デゴッ!ドガッ…

「うわらばー!」

「ぬわーっ!」

「うぐぺ。ぺ。ぺ。っ!」

その後も他の…恐らくは剣道部員と思われる女子生徒達から、竹刀やら木刀やら刺バットやらで、滅多打ちにされる3人。





当時から教室でエロトークしてたり、エロ本見てたり…セクハラな発言や行動は、日常茶飯事だったわよ。」

「それ程なのか?」

「最悪だな…」

「最っ低…。やっぱリトドメ、刺しとくべきだったわ…!!」

どん引き呆れ、そして思い出した様に怒る俺、匙、水沢。

「成る程…変態は変態を知るってかw?」

「あゝ?!」

そして、草薙の一言。

この一言に、桐生の表情が変わる。

「ちよつと待て。」

確かに私はエロい自覚は有るが、変態な覚えは無いわよ。」

俺的には「どう違う?」…なのだが、彼女の的には、かなり大きな違いらしい。

「少なくとも私はアイツ等と違って、特定個人を直接にハラズメントする様な事はしないぞ?」

尤も、望みと有らば…だが?」

「へ〜?例えば?」

男子の着替えでも、覗くのか?」

この草薙の台詞に桐生は、

「ふっふっふ…」

私の眼鏡は、オトコの『アレ』の戦闘力…即ち、通常〜MAXのサイズ、硬度、1回時の持久力にトータルのスタミナを測る事が出来るのよ♪」

とんでもない事を、抜かしやがった。

「「ス〇ウターかよっ!?!」」

眼鏡をクイツとしながら、鋭い眼光で笑う桐生に、戦慄する俺達。

「草薙は…ほう…」

サイズB、硬度B、持久力B、総合スタミナB…」

「止めれー!」(。O。L)「ー!?!」

「まあ、本っ当に普通だね。」

「可もなく不可も無く。」

そして勝手に『戦闘力』を計測する桐生に、顔がムンクになって、絶叫する草薙。

「次、匙は…」

「をいつ!?!」

「サイズB、硬度A、持久力…E…どんまい…。スタミナC…

…ん、マジ、どんまい。

…てゆーか、ごめん…」

「ノツ…ノオオオオオ〜（。O。L）〜?!」

そして匙も…ん、どんまい…:w:w

ああ、そうだ俺、急用を思いついたから…

ガシツ…

「…匙?草薙?」

「神崎テフメー!何、逃げようとしてやがる?!」

「お前も晒されやがれ!!」

そして次の餌食になる前に、その場を去ろうとしたら、匙と草薙のヤロー、がっしりと肩と腕をロックしやがった。

「やれ桐生!やっちまえ!!」

「らじや〜♪」

「や、止めろ〜?!」

気付けば一連の会話を聞きつけたのか、クラスの殆どの女子が赤面しながら集まってる中、桐生の眼鏡がキツラーツン!…と妖しく光り、

「ふっふっふ…じゃ、いくよ〜?♪」

神崎…サイズ…:s:s:sう!?! 硬度:s:s:s…って、本当に?…持久力

…:s:s:s、スタミナ:s:s:sえ（ピシイッ!）うぎやっ!?!」

計測が完全に終了する前に、そのスカ○ターは罅が入ると同時に碎け散り、（既に殆ど晒された気もするが）それ以上の計測は不可能となった。

「き、桐生?大丈夫?」

「う…目が、目があ…ついでに鼻血が…って、神崎い!あ…アンタは化



なんでな。

もう一度聞こう、貴様は何者だ？」

この台詞に女は、

「ふふふ…さつきから全然眠らないから おかしいとは思っていたけど、只の人間じゃあ、なかった訳だ…」

再び余裕を思わせる笑顔を浮かべながら、喋り出す。

「眠る？そうか…何やら貴様の眼から、不気味な視線を感じたので、咄嗟に小宇宙（コスモ）のバリアを張っていたのだが、催眠効果の魔力か何かを放っていたのか…」

「こそすも…？」

ふん！大人しく眠っていたら、恐怖を感じる事無く、死んでいた物を!!」

ズバァッ！

そう言うと女は、それまでの笑顔とは別の、歪んだ嗤い顔を見せると、左右の顛から細く鋭い螺旋の角を生やし、着ていた衣服を弾き飛ばすと、両腕は猛禽類を思わせる翼を、下半身も同じく、猛禽類の身体 の如く変化させ、更には背中に蝙蝠の様な羽を生やし、シリューに襲い掛かる。

「少しばかり筋肉が固そうだが、我慢して喰ってやるよ!!」

「…!!」



「ど…どーゆー事なのよ、これ？」

「………………」

静けさが戻った公園の遊歩道で、長い紅髪の少女が呟く。

目の前には、鋭い刃の様な物で縦真つ二つに斬り裂かれた、半鳥半人と形容するが相応しい異形の者の屍。

「ハーピーベースの転生悪魔…」

「討伐指令が為されていた、はぐれ悪魔に間違いないみたいですわね。」

「誰かが先に、始末した…？」



只単に、逃げ込んだ公園で偶々出会した、通りすがりの餌くらいとしか、思つてなかつた筈だ。

あの小娘達も、相棒の存在には、微塵も気付いてない様だしな。』

「そうか…それなら良かったが…」

『ふっ…しかしドラゴンは、騒動を呼ぶ存在だ。』

今回は上手く行つたが、何時迄も誤魔化しきれるとは限らんとぞ、相棒?』

「巻き込まれるの確定かよ!?!」

シリユーはドライグの台詞に呆れながら突っ込み、

「どうなるのかねえ…?」

約1ヶ月前、原因不明の爆発により、文字通りの三日月の形状となつた、夜空に浮かぶ月を見上げながら、眩くのだった。





俺の机に群がってた皆と、色々と話していると、外が何やらざわついてきた。

何かと草薙が、2Fの窓から指差した外を見てみると…

「きゃー、グレモリー先輩！」

「木場きゅん!!」

「朱乃お姉様！」

グレモリー先輩達が、登校してきたみたいで、姫島先輩と木場を連れ立って、前庭を歩いている。

その周囲は勿論、隣や上下の教室からも、歓声が湧きに湧き出した。相変わらずの人気だ。

「…で、誰だ？あの子。」

「一緒に歩いているから、先輩の友達だとは、思うが…？」

それと、何時ものメンバーに1人、増えている。

小柄な白髪の子。

確か1年前、はぐれ悪魔を斃した後に やってきた、グレモリー先輩の仲間の1人に居たな。

新入生か。

「木場きゅん」「木場きゅん」「木場きゅん」「木場きゅん」「木場きゅん」

「木場きゅん」「木場きゅん」「木場きゅん」

そして この時点で、さつき迄は「神崎君」「神崎きゅん」と言っていた、周りの女子達の興味が、全部木場に向けられた。

「どんまいwww」

此処で草薙と反町が、凄く嬉しそうな顔で、肩ポンしてきた。

いや、マジに悔しいとか思っただけ？

愉快的勘違いとかされるのは、それは其れで困るが、俺は女に全く興味が無いと云う訳じゃない。

寧ろ、結構な女好きな自覚は有る。

しかし、あーゆーミーハーなのは、まじ勘弁なだけだ。

俺の好みは、清楚系で、胸も大きい方が…うゝむ、しかし春麗（まえのよめ）も、どっちかと言えば、慎ましいを通り越して、残念系だっ





「バカヤロ！俺だよ！」

「……………」

何やら此方を見て、にこやかに手を振っている、髪の毛の長い女子。  
「おっ？こっち来たぜ？」

そして このストリートな黒髪の下級生は、微笑みを絶やさず、廊下側窓際の俺（達）の目の前まで やってくる

「こ・ん・に・ち・は♪

お久し振りね、劉兄・さ・ん？」

「よ♪久し振り。」

「へ？」「劉兄さん？」

にっこりと微笑みながら、挨拶してきた。

「かかか…神崎、劉兄さんて、何だよ？」「もしかして、お前の妹？」

「二」一体、どーゆー事だよ?!」

「いや、実はな…」

まさかの知り合いでした…なオチに、草薙&反町、そして周辺の  
その他大勢が驚きふためく。

神崎有希子。

1つ年下の、父方の従妹だ。

「ユキコお前…駒王、受けてたのか…」

「驚いた？叔父さんや叔母さんには、内緒にして貰ってたの。」

「でも お前…お前が通ってた中学も、確かエスカレーター式だった  
んじゃ…」

「ん…色々と…有って…ね…」

そう言って顔を背け、言葉を濁すユキコ。

何が有ったかは知らないが、何やら色々有ったみたいだな。

ん。劉兄さんは別に鈍感系じゃないから、話したくもない事を、し  
つこく聞いたりほしくないぞ。



「神崎、おま…あの神崎さんと従兄妹だったのかよ!？」

「苗字が同じだから、まさかとは思っていたが…」







「」「まぢつつすか…」「」

経緯を話す俺。

「いや、ちよつと待てよ!？」

会長を前にした時のリアクションで、何なんだよ!？」

其処に匙が、何やら別な事柄で突っ込んで来たが、無視。

そもそも お前、あの態度って、支取先輩本人を除けば、皆にバレバレだからな。

「いや、聞けよ?!おい!？」

「クツソ…お前を無理矢理に、あの教室に連れて行ったのが、裏目に出たか…」

「あの時は正直、面倒臭いと思っていたが、今は感謝してるぞ?心の友よwww」

「喧しいわつ!!」

本気で後悔している、草薙&反町。

「それにしても神崎、今回は あっさりとOKしたんだね?」

「ん、ん。神崎君で、普段から あれだけ女の子にキヤーキヤー言われてるのに、彼女とかの話、全然だから。」

そして今度は、水沢をはじめ、数人の女子が話し掛けてきた。

「…直接に告られたのは、昨日が生まれて初めてなのだが?」

「」「ええーっ!!」「」…そんなに驚く事か?

「彼女いない歴イコール、まさかの年齢だったのかよ、お前?」  
煩い、悪かったな。

「それに あれは アイドルの追っ掛けみたいなもの、恋愛なんかとは別枠だろ?」

悪いが俺は、そういうのは対象の外だったただけだ。」

「あゝ、確かに言われてみたら、神崎は あーゆるーのは苦手っぽいからね。」

「何なの?この手遅れな失敗した感…」

「でも、少し安心した。」

神崎君で、『あっち』側の人かも…って噂も有ったから…」

「ちよつと待て!それは俺、初耳だぞ?!」





【変態3人衆】

兵藤一誠（2年）

松田才蔵（2年）

元浜幹親（2年）

…等々。

……………。

いや、ちよつと待てwww

ユキコが大和撫子ってのは、どう考えても おかしい。

皆、騙されているぞ？（笑）

それから、マスコットとやらの塔城小猫…確か、桃花と同じクラスに居た…

あの、グレモリー先輩と一緒に登校していた子だったな。

あの時、内側の気配を探らせて貰ったが（ハラスメントな意味に非ず）、やはり人間では無かったが…

尚、そういう事を考えている中、何故か号泣しながら襲撃してきた変態3人衆を軽く返り討ちにしたのは、別の話だ。



シリューは所謂 帰宅部である。

学園入学早々、体育の授業にて、その常識外れな運動神経を披露(当人は自重した心算だった)、それは直ぐに学園内に広まる事となった。数年前に男女共学となったばかりで まだ実績の無い この学園の各運動部からすれば、それは是が非でも欲しい逸材。

「一緒に甲子園を目指そう!」

「いや、国立を!」

「いやいや、花園を!」

「…すいません。」

しかし此等の誘いを、シリューは悉く断ってきた。

前世の能力(チカラ)を殆ど引き継いだ儘、今の世に生まれたシリュー。

その前世で培われてきた、聖闘士としての運動能力をフル活用すれば、個人集団問わず、如何な競技でも(自分と同類が居ない限りは)頂点に立つ自信が在る。

…が、それは『自分は生まれた時、既に他者よりも多くの(鍛錬の)時間を過ごしてきた。故に自分には、如何なる競技にも出場する資格は無い』と考える程に、この男は堅物過ぎた。

ならば、その力を多少なり抑えてのプレイをすれば?

それは、チームメイトや対戦相手への不敬不遜へと繋がるという理由で、尚の事アウトという考えに至る程に、この男は超堅物過ぎていた。

…かと云って、文系の部活に所属する心算も無く。

「ちよつと神崎く、あんたの彼女、凄いらしいじゃん?

バレー部、入部早々にレギュラー確定だとか。ねえ、こずえ?」

「うん…全く運動神経の塊だったわ。」

チツ…あんな重そうな脂肪の塊 持っていて、何で あんなにも動けるのよ?」

「泣くな泣くな。どうせなら、レギュラー奪われた方で泣け(笑)



場を立ち去った。

しかし…

「へ〜？アイツ、神器も使わずに、膝蹴りとチョップ！だけで、あの悪魔を斃したつすよ？」

「いや、只の人間が、仮にも低級の はぐれ相手だとしても、単なる素手で どうにか出来る訳が無いぞ？」

「でも、魔力は感じられなかったわ？」

「ん…しかし、何かの神器を使ったのは、間違い無いと思うわ。

只の素手の手刀で、それこそ刀を使ったみたいに真つ二つに出来る訳が無い。」

その戦いは、シリユーが その気配や視線に気付く事も無い遙か離れた場所から、数人の男女に一部始終を目撃されていた。

「あつ、悪魔達が やって来たつす。」

「あの紅い髪…グレモリー家の者ね。」

「きやははは！見て見て！

アイツ等、『え？自分達が倒しに来た筈の はぐれが、もう死んでるし？』…って顔してるつすよ〜！www」

「成る程…つまりは あの人間は、悪魔とは関係を持っていない事になるな。

何らかの繋がりが有るのなら、報せるだろうからな。」

「そうね…。先程も、あの場を何から逃げる様に急いで去って行ったし…

どうやら奴は自分と云う存在を、我々や悪魔共の様な、人に非ずな者に知られたくは無いのでしょう。」

「きやはは、ウチ達にもう、バレバレつすけどね。ww」

「何れにしても、あの人間が神器持ちならば、放つては置けないわね。」  
「とりあえずは あの人間の身元を割り出して…それからよ。」

「それにしても、これは思わぬ拾い物かも知れませぬな。」

「ええ…。あの女を招く為に遣って来た この街に、まさか それとは別に、神器持ちが1人、居たなんてね…」

「いや、神崎君？」

「どうして君だけ、あんなにもモテモテなんですかね？」

「モテ期か？モテ期なのか？固羅あ!!」

「羨ま死ね！このヤロー！（泣）」

「いや、俺に言われても、本当に知らんのだが…」

「…あれから数日後の金曜日の朝、シリューはクラスメートの男子一同から、あたかも尋問の如く、問い詰められていた。

「お前には矢田さんが居るってのに…」

「付き合い始めたばかりで、浮気は どうかと思うぞ？」

「だ・か・ら！丁重に断つたと言っているだろうが！」

3日前、放課後の帰り際の校門にて、他校の制服を着た少女から告白&交際の申し込みを、そして昨日は大学生風な女から所謂 逆ナン的な誘いを受けていたシリュー。

当然だがシリューは孰れも「彼女が居る」の一言で…それと もう1つの、別の要因で断っていたが、其れ等は下校中、多くの一般生徒達が見ている前での出来事。

クラス内に その話が届くのも早く、級友達もシリューの人柄（まじめっぷり）は既に或る程度は理解しているので、初めは半分位は、冗談混じりな問い詰めだった。

…が、流石に其れが連続となると、例え本人に その気が無かったにしても赦せる状況では無いらしく、その瞳に紅蓮に燃える嫉妬の炎を宿した集団に、かなりマジな取り調べを受けていた。

「…で神崎？彼女には それ、きちんと言ったりしてるの？」

その途中、会話に参加し、質問してきたのは水沢。

「ああ。言ったら言ったで、面白くない顔をするだろうが、黙っていたら それで知られた時に、もっと面倒な事に なるだろうからな。

その日の夜に、電話で話したよ。

流石に2回目となると、ブーブー言われたが…」

「「「「「ざまあ w w w」」」」」

「尤も最後は、『モテるのは分かっているから仕方無いし、信じてる』っ

て言つて貰えたがな。」

「「「「ちつくしよーっ!!」

爆死しやがれ!! (号泣)「「「「」

それに対してシリユーは、最終的には然気無い(?) 惚気で切り返し、結果、教室内は嫉妬の炎で大炎上するのだった。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

「…そんな訳で水沢。」

明日、午後から桃花とデートなのが…」

「はあ!?!…あんた、私にリア充自慢して、どーすんのよ?」

昼休み、水沢に明日はデートだと、パンを食べながら話し掛けるシリユー。

それに対して弁当を食べながらの水沢は、「何言つてんの? コイツ?」…な顔で、シリユーを見ている。

「いや、別に そんな心算は無くてな、俺自身、こういうのは初めてだからな…」

「成る程…それで、彼氏持ちの私に、アドバイスを求めると…」

「いぐざくとりい。」

「仕方無いわね。」

まあ、あんたの周りの男に そーゆーの相談出来る奴って、確かに居ないからね?」

「「悪かったな!」

悪戯っぽい視線を向けられ、匙、草薙、反町がハモらせて突っ込みを入れた。

「とりあえず、午後からって…それで、お昼御飯は どうするの?」

「午前中は部活の練習が有るらしくてな、その後に駅前で待ち合わせなのだが…」

まさか初めてのデートの食事で、小西屋の うどんトップिंग全部

盛り…な訳も往かないだろうし…」

「「「「当つたり前だ!」

一斉に突っ込みを受けるシリユー。

「…かと云つて、俺は外での食事は疎くてな…中華料理の店なら、多少

は知っているのだが…」

「そ…それも、高校生がデートで食事するには微妙だわね…」

「だから、水沢！（パシイン！）」

お前の基準で良いから、食事する店込みな、コースのアドバイス、よろしく頼む！」

両手を合わせて お願いするシリユウに、水沢も やれやれと息を吐きながら、

「これで安心！香純ちゃんのお、絶対対にスベらない、デート講座あ！！」

「二「おおく！（パチパチパチパチ）」」

自身のデートの体験を元に、少しだけ嬉しそうに、そしてノリノリでアドバイスを始める。

そして それを何故か、一緒に聞き入る男が数名程。

「…でも、食事も良いけど神崎？」

あんたの彼女ちゃん、それまで、バレエ部の練習で汗だくなんじゃないの？」

「いや、それは普通に学校のシャワールーム使うだろ？」

「ちっちゃ…これだから素人は…」

其処は敢えて、『とりあえずは汗、流そうか』って言ってホテルに入り、2人で汗流した後、思いつき汗を掻くのが王道でしょうに？

その後も、『ついだから もう少し休んでいこうか？』って言いながら、全然休まないみたいn（スコーン！）にゆわっ!!」

「ええい、阿呆か?!」

…ってゆーか桐生、貴様は何時の間に、会話に参加していたのだ?!」  
何時の間にか、隣の教室から入り込み、会話に参加していた桐生の頭に、丸めたノートによる一撃が炸裂した。

因みに何時の間に…と謂えば、『小西屋の うどん』の件辺りからである。

「あ痛たたたたた…」

こ、この男は乙女の頭を躊躇無く…」

「喧しいわ！誰が乙女だ!!？」







時刻は既に日付が変わろうとしていた頃、距離にして約20数km先にて、強烈な魔力のぶつかり合う波動を感じたシリユー。

「これは…何者かが戦っているのか？」

…だとしたら、一体 誰が？」

『大方、グレモリーかシトリの小娘と その眷属共が、はぐれ悪魔とでも戦り合っているのだろう。』

シリユーの台詞にドライグが解説するかの様に応える。

「……………」

『どうするんだ？』

今回は いきなり自分が襲われた訳でも無ければ、既に管理者（あくま）が出張っているから無視しておくか？」

「…またも、はぐれ悪魔が街に現れたかも知れない。」

但し今回は、この街の管理者の悪魔が既に、その処理に動いていると云うドライグの言葉に、干渉するかを考え込むシリユー。

『…どちらを選択するにしても、俺は相棒、お前の考えや行動を支持するが？』

「……………」

その遣り取りは、実質には数秒足らずの時間だが、その間に様々な事を思案したシリユーは、

「…よしー」

何やら決意をした顔で、周りに自分への視線が無いのを確認すると、その身を一筋の光と変え、先程から感じていた魔力が沸き出てる場所へと飛び立って行くのだった。



其処は、町外れの廃工場の内部。

「雷よおッ!!」

カアッ!!

白襟緋袴の御子服を着た、ポニーテールの黒髪の少女が、掲げた手の先から、雷撃を迸った。

「うげやあっ!?!」

それが、絡んだ荊が羽を持つ蛇の形を成したかの様な、異形の者に

直撃。

この一撃で、荊の蛇は、消し炭となった。

「せえいやあつー！」

ガキイン！

金髪の少年が振り翳した、燃える刀身の剣を、鉄兜に鉄の鎧、そして左腕を鉄の盾で身を固めた男が、右手に持っていた鉄製の銛で受け止める。

その装備から、中世西洋の戦士を想わせる男。

しかしながら、それは人間に非ず。

背中からは蝙蝠の様な羽を生やし、鉄製で固めた上半身とは裏腹に、下半身は赤い8本の触手が、海洋の軟体動物の如く蠢いている。

「カカカ！」

ドスツ

「う…?!」

燃える斬撃を捌いた鎧の男は、不気味な嗤い声と笑顔を見せると、反撃とばかりに少年の腹に銛を突き衝けた。

「…えいつー！」

ドスツ！

小柄な白髪の少女が、頭頂の深緑な部位を除けば全身が黄色い肌の、獣顔な鬼と形容すべきな生物の腹部に、小さな掛け声と共に正拳突きを炸裂させた。

「ぐへへ…！」

「…!?!」

しかし その攻撃は脂肪と云う名の壁に阻まれ、肥満体の鬼の体の芯までには伝わらず

「ぎやおらつー！」

バキイツ！

「ぎやあつー！」

反撃とばかりに振り払われた、段平と呼ばれる幅広な刀の一撃をま

ともに受けて、少女は吹き飛ばされる。

「こっの……滅びなさい！レオネツサ!!」

ポウワツ!!

長い紅髪少女が、掌に黒い魔力の弾を生成して撃ち放つ。

「あはは♪流石の私も、それだけは喰う訳には往かないからねえ！」

「くっ……!」

そう言いながら それを躲すのは、巨大な雌ライオンの身体、その首が在るべき部分から人間の……裸女の上半身を有し、その背中には蝙蝠の羽を生やしている、半獣半人の悪魔レオネツサ。

「リアスー」

カアツ!!

其処に4人の内で現状唯一、自身が担当した敵を斃したポニーテールの少女が、援護とばかりに雷撃を放つ。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

『どうした相棒？参加しないのか？』

……………。

魔力を辿って着いた先は、町外れの廃工場だった。

そして其処では、リアス・グレモリー先輩と、その眷属達が、はぐれ悪魔と戦闘を繰り返していた。

その様子を、物陰から気配を消して見ている俺に、ドライブグが尋ねてきた。

「しかしドライブグ、こんなに一度に何体もの はぐれ悪魔が現れるとは……俺は そっちの方に吃惊なのだが？」

『ああ、恐らくは同じ『家』からの同時出奔だろう。』

余程 横暴だったか将来性皆無だったかな、アホ王（キング）の下僕だったのだろうか？

何れにせよ、『はぐれ』を出すつてのは、悪魔社会じゃ在る意味『家』の恥だ。

こんな一度に大量の はぐれ悪魔を出したんじや、例え奴等の王（キング）が『家』の当主とかで無く、次男三男だったとしても、その

『家』は もう お終いだろうよ。』

ドライグが俺の疑問に、補足込みで説明。

『…で、俺も もう一度聞くが、相棒は見てるだけなのか?』

「そうだな…」

偶々グレモリー先輩達と、はぐれ悪魔の数が同じだったからか、1 vs 1が4組の形で戦闘が行われていたみたいだが…

木場は…アイツはスピードは まあ、それなりに大した感が有るが、スピード特化のスタイルのせいかな、攻撃が軽い。

ましてや あの鎧鎧とでも呼べば良いのか?

戦士としての資質は、あっちの方が上だ。

次に あの桃花と同じクラスのチビっ娘。

確か、塔城子猫…だったか?

あの子は素手の接近戦を得意としている様だが、アレは あの敵とは、相性が悪い。

単なる殴打主体の戦法では、あの分厚い脂肪の体には、ダメージが通らないだろう。

あの拳に、プラスαの要素が入れば、また話は変わってくるが、基本的に あのタイプに有効なのは斬撃。

アイツは、木場が相手をすべきだった。

姫島先輩は、相手との相性が良かったのだろう、難無く敵を片付けて、既にグレモリー先輩の加勢に入っているか。

そして その、グレモリー先輩。

……………

何処から突っ込んだら善いのか…

どうやら破壊力は抜群な様だが、只 魔力の弾をぽんぽん放つても、それも当たらなければ意味が無い。

もう少し、足止めするとかして…援護に入った姫島先輩の雷撃も、あの…ケンタウロスのライオン版?には、効果が薄い様だ…

「うわっ?!」

「「きゃああああっ?!」」

…って、何いつ!?



戦況は突如として動いた。

木場と戦っていた蛸型の悪魔が、口から黒い墨の様な液体を、目眩ましの如く顔面に浴びせ、1本の太い蛸脚を、鞭の様に撓らせて撃ち放つ。

それにより、木場を壁まで吹き飛ばした蛸型悪魔は、手にしていた鍔と盾を床に置き捨て、人の形を成していた両腕を無数の蛸脚の様な触手に変形させた。

そしてリアス達に視線を向けると、その無数の触手を鋭く速く延ばし、

「「きゃあああああつ!!」「」

リアス、朱乃、小猫の体を縛り付けと同時に、宙に持ち上げ、身動きを封じたのだった。

うねうねうねうねうねうねうねうねうね…

「きゃああ?!とどと、どこに触手(て)を突っ込んでるのよ?」

「は、はしたないですわあ…」

「え…えっちいです…」

そして その触手は、リアス達の体を引き千切ろうと締め付けると同時に、制服の内側に入り込み、身体を弄り始める。

それによつて、苦悶に喘ぐリアス達。

「きゃはは!良いぞ、スフイーロッド!

其の儘、殺っちゃいな!」

「カカカカ…承知!」

レオネツサが煽り、スフイーロッドと呼ばれた蛸型の悪魔が、それに応える様に、下卑た嗤い声と共に、更に締める力を強めていく。

「きゃあああああつ!!」

「ああああ…」

「く…つううう…」

「部長!朱乃先輩!小猫ちゃん!」

ダツ…

それを見た木場が体勢を立て直し、救出に向かおうとするが、

「ぐへへ…」

「!!」

先程迄、小猫と戦っていた はぐれ悪魔が立ち塞がった。  
「邪魔するなあ!!」

これに対し、木場が炎の魔剣で斬り掛かるが、獣魔は手に持っていた刀で、それを受け止め、その勢いの儘に吹き飛ばし、

ガン!

「くあっ!?!」

再び壁に、体を痛打する木場。

「きやは!ギエロ、ソイツは任せたよ!」「レオネツサよ…何時からお前が仕切る様になった?ふん…まあ良い…。」

ザツ…

「!!」

ザツ…

「!!」

腰を抑えながら跪いている木場の前に、レオネツサの指示に従う様に、はぐれ悪魔ギエロが立ちはだかる。

「ぐへへ…とりあえず、死ねや。」

「くっ…!此処迄か?!」

刀を両手持ちにして、頭上に大きく振り上げた構えに、未だ立ち上がれない木場は、無念ながら覚悟を決めた表情を浮かべる。

「先ずは、1人目えーい!!」

「ゆ、祐斗お!」

「祐斗君?」

「祐斗先輩!」

ぶうん…

「……………!!」

拘束された儘のリアス達が叫ぶ中、勢い良く、ギエロの刀は木場の脳天目掛け、一刀両断するが如く振り降ろされた。

ガキイ…

「な…?」



「え…？えええつ？」

しかし その刃は木場に届く事は無く、

「間髪だったな！」（Boost!!）

「か…神崎…君？」

その場に飛び出した、シリユウの左腕の赤い籠手によって止められたのだった。

「え…だ、誰？」

「あの人 確か、ウチの2年生の…」

「…トーカーちゃんの、彼氏さん？」

その いきなりの乱入者に、仲間が助かったと云う安堵以上に驚くリアス達。

「…つて、あれ、もしかして【赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）】じゃないのよ!？」

…て事は、あのコ、今代の赤龍帝？」

そしてシリユウの左腕の籠手を見て、更に驚くリアス。

「神崎君…キミは…？」

「話は後だ！…でえいつ！」

ドゴツ

そして現状に理解が追い付かない木場の前に立ち、ギエロのどてつ腹に前蹴りを浴びせて吹き飛ばし、

「覇あつ!!」

今度は右の手刀で、空を斬る様なアクションを見せると、

斬！

「ひえつ？」「あら…」「…む」

それによって生じた衝撃波の刃がリアス達を捉えていたスフィードロッドの触手を断ち切り、その呪縛から解放。

「グレモリー先輩、こっちへ！」

「え…ええ！朱乃、小猫！」

タタツ…

シリユウの呼び声に応え、その下にリアス達が駆け寄る。

「あ、ありがとう…なのよね？」



「「ぎやあああああーっ!!」」

そして その百から成る龍の群は、3体の はぐれ悪魔達を一度に引き裂き、貫き、喰らい尽くしたのだった。



「…とりあえず、お礼は言うわよ。」

はぐれ悪魔討伐の協力、並びに私達の危機を救ってくれた事に、感謝するわ。

ありがとう、今代の赤龍帝殿。」

ペコリ…

そう言つて、シリユーに頭を下げ、礼を言うリアス。

「それにしても…神崎君が赤龍帝だったなんて…全然、気が付かなかつたよ…」

「そういう風に してきたからな。」

因みに俺は、木場や先輩達が悪魔だと云う事は最初から…駒王に入學した時から気付いていたぜ。

支取先輩達、生徒会の皆を含めてな。」

「「嘘っ!?!」」

まさかの『バレてました』発言に、またまた驚くリアス達。

「ま…まあ それは、貴方も自分が赤龍帝つて事を知られたくないから、余り触れずにいたのよね…」

額の汗を拭きながら、引き攣った笑顔を誤魔化す様に、リアスが話す。

「…ところで少し、それとは別に、貴方に聞きたい事が出来ただけです。」

「はい。」

その直後、凜とした顔で、リアスがシリユーに改めて話し掛けた。

「先日の住宅街の路地裏で、はぐれ悪魔を斃したのは貴方ね?」

「……………」

「そして約1年前、学園の近くの公園で、やはり はぐれを斃したのも…貴方で間違い無いわね?」

「……………」

「ハア…やっぱり そうなのね？」

この場合の沈黙は、『肯』と受け取るわよ？

…大丈夫。今更その事について、あれこれ言ったりする心算は無いわ。

寧ろ、これも お礼を言うべき事だもの。

…それよりも、貴方…」

やれやれと溜め息を1つ吐いた後、リアスは微笑みながら、シリユーに最後の問い掛けをした。

「ねえ、貴方…悪魔に なってみない？」  
「…はい？」

∴  
T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
『神崎孜劉』

<br>嗚呼 夏休み

冥界に逝こう!!

「冥界?」

「そう、冥界。」

夏休みの2日目、あの熾烈な戦いの翌々日の正午、オカ研一同（withミルたん）は部室に集合していた。

「部長の眷属の皆は解るが、俺やアーシアも行くんですか?」

「一応は、部活の合宿って名目なのよ。」

「いくら部活の合宿と言っても、そんなに長い間、家を空けられないでしょう。」

特にアーシアは、ホームステイ先を何日も空けるのは…」

「私は、白音と一緒に居られるなら、そっちの方が良いにゃ♪」

夏休み、冥界に里帰りするリアス。

朱乃達眷属は、当然同行する形になるが、部には所属しているも、リアスの下僕でも無いシリユーも、夏休みの殆どを冥界で過ごすと言う日程に、少し難色を示す。

「アーシアについては、合宿のついでに、里帰りって事にしておけば大丈夫よ。」

それを想定して、合宿先はイタリアって『設定』にしてるから。」

「え?」

「実際に初日は、アライバイ作成の為のイタリア観光を、予定しているしね。」

「転移を繰り返して、イタリア各地の心霊スポットを巡ったりとかして、如何にも数日間、イタリアに滞在した様に見せかけるんですの。」

「何故、心霊スポット?」

「オカルト研究部だからよ!」

それにシリユー?」

貴方は魔王様から、絶対に連れて来いって言われてるの。」

赤龍帝として、魔王様をはじめとする、冥界のトップ達が集う話し

合いの席に、出て欲しいらしいわ。」

「マジに面倒臭いな!!」

本当に、凄く嫌そうな顔をするシリユウ。

「こっちも夏休みの予定、色々起きていたのに…」

「へえ…? 例えば？」

どんな予定なんだ、赤龍帝？」

「トーカと海でデートとか、それと、ユキコの彼氏くんが甲子園に出るとかで、それに皆で応援に行く事になってるし…

…つて、アザゼル!？」

「「「「え…?」」」」

「よっ♪」

「「「「なあっ?!」」」」

部室には、何時かのサーゼクスの様に何時の間にか、墮天使の総督が居た。

「あ、貴方、一体 何時の間に?」

「ん、『冥界? そう、冥界。』…の辺りからか?」

「殆ど最初からだによ…」

「何故、墮天使総督殿が…」

「サーゼクスからの要請で、リアス・グレモリーの里帰りに、俺も同行して冥界入りする事になったんだ、よろしくな。」

「「「「はああっ?!」」」」

「俺も、お話し合いつてヤツに、参加するんだとよ。」

ミカエルや、他の神話勢力からも、誰か来るらしいぜ?」



7月2X日(木) PM6:00

旧校舎オカルト研究部部室。

「皆、揃ってるかしら?」

「黒歌、居るか?」

「来てるにゃ。」

「よし部長、全員揃ってますよ。」

「どーゆー意味にゃ!？」







そしてスマホを取り出して、小猫やギヤスパー達と、一緒に写っている写真を見せるレイヴェル。

「うおっ！可愛い娘じゃねーか!!」

「うっか、乳でっけーな、おい！」

おい赤龍帝、お前、この娘とわ もうヤツちまつて（ゴンツ！）あべしっ!!」

何やら巫山戯た事を言う この男に、結構マジなヘッドバットを喰らわしても、俺は悪くない。

「まだ、してはいない！」

「え？シリユー先輩、まだなんですか？」

小猫、お前もか？

「でもトーカちゃん、この前シリユー先輩に、”また”スカートの中に頭を突っ込まれたって言っていました。」

「あ、それ、私も聞きましたわ。」

「あらあらあら？」

「いや待て、あれは事故なんだ！」

…って、トーカあ！

お前は何故、一番喋っては駄目な奴に話している?!

それから朱乃先輩、嬉しそうに顔を赤くしないで下さい。

「…否定はしないのね…。」

「それと少なくとも ぱふぱふと、お姫様抱っこは かなりの回数、しています。」

「まっ!!」

「まだ ぱふぱふは、やってはいない!!  
すばかーん！」

「ひにやあっ?! (V V V)」

えい、その話を蒸し返すのも止めろ！

それとリアス部長？顔、赤くし過ぎです。

「シリユー先輩…お姫様抱っこの方は、否定されないのですね…」

「う〜…」

涙目になり、脳天を押しさえるを小猫が、コツチを恨めしく見ながら、

「…ボソ…温泉旅行…」

「え…?…」

この御猫さんは今、何と仰られた?

「夏休みの最後の週末、トーカちゃんと お泊まりの温泉旅行に行くんですよね?」

…2人つきりで。」

「ちよ…ちよと待ていつ?」

何故、お前が知ってる?」

「トーカちゃん、家族には女の子の友達と行くと話してるみたいで、私とレイヴェルさんとカンちゃんに、口裏合わせの協力を頼んでいきます。」

「そういう事ですわ♪」

と…トーカあつ!!

だから何故に お前は、一番話しては駄目な奴に、協力を求めている!?

…つて、ユキコも知ってるのか?!

「はわわわ…シリユーさん…」

「あゝらあゝらあゝら?」

「エロエロおっぱいドラゴンだにや!」

「し、シリユー先輩い…」

「によ…」

「ししし、シリユー?こ、高校生で そーゆーのは まだ、良くないと  
思る☆▽◎Ψδπφ@ℑA ♂⇄♀ (:):ゞ≡?ゑΦ全と…」

「あはは…」

「ぎゃーっはっはっはっはー!」

赤D帝も、この夏、遂に卒業か!!」

これを聞いた皆が、様々な反応。

どうやらアーシアは、知らされてなかったみたいだな。…バレてしまったが。

それとリアス部長?テンパリ過ぎです。





…その身長差故に、少年の顔前には部長の駄にk：コホン、胸元が弩アツプに迫っており、所謂ばふばふの一步手前状態なのだが、少年には無垢さは在っても邪な氣が感じられないせいか、不思議とエロさは無い。

だがしかし、これが羨まけしやらん画には変わり無く。

…つまりは何が言いたいかと云えば、おい少年、そのポジション、この俺と代われs（すばかーん！）ふに、やああつ!!?

…己は何を勝手に人のナレーションに入り込んで、心情を捏造（かた）っている!?!（怒）

「…この子は？」

「はい！赤龍帝様、初めまして！」

ミリキヤス・グレモリーです！

白髪の ちんちくりんに教育的指導（物理）を施しながらの俺の質問に対し、元気に応えるミリキヤス少年。

「ミリキヤスはね、お兄様の子供なのよ。」

つまりは私の甥っ子ね。」

「ああ、サーゼクスさんの御子息かあ。」

更にはリアス部長が補足。

成る程、言われてみれば、サーゼクスさんを幼くした感じが有る。

…ん。サーゼクスさん（&グレイフィアさん）の息子と云う事は即ち、本人は『お姉様』と呼ばせてはいるが、リアス部長は このミリキヤス君のオバチャm：すいません、何でも無いです。

何でも無いですから部長、そんな夜叉みたいな形相で睨まないで下

さい…。 m（――） m

…つて、何で考えてる事、判ったのだ!?!

「あ、あの…赤龍帝様…」

「ああ、シリユードで良いよ。」

何やら顔を少し赤くして、もじもじしているミリキヤス。

何事だ?…と思っていたら、

「さ、サイン、貰っても良いですか？」

「え、!？」

いきなり色紙と油性マジックを、俺の前に差し出したよ？この少年。

「クス：ミリキヤスは神崎様の、大ファンですから。」

そう言いながら現れたのは、銀髪のメイドさん。

「お帰りなさいませ、リアスお嬢様。」

そして ようこそグレモリー城へ。

眷属の皆様。

そして赤龍帝様と、その御付きの皆様。」

グレイフィアさんだ。

…て、ファン？

「はい、実は…（中略）…な訳です。」

…要約すれば、あのライザー・フェニックスとのレーティングゲーム。

グレモリーとフェニックスの両親と魔王、それと冥界の一部の偉いさん等の関係者だけが観戦していた筈の非公式ゲームだった画像が、何故か冥界全土に流出。

そして その戦いを観た冥界中の ちびっ子の多くが、俺のファンになったとか。

「伝説のドラゴンと云うだけで、小さな子供からすれば十分に憧れの対象になるのですが、それに加え、あのライザー様を倒したのが、大きな要因かと。」

…らしい。

ついでに言えば、そのライザーとのバトル内容で、何やら一部の『マニアックな趣味』を持つ悪魔女性にも…それこそ まだ幼い少女から貴婦人（マダム）迄幅広く、俺のファンが出来ているとか。

む…少し解せんな？

女性限定で受けの良い…そんな、特別な戦闘スタイルを執った心算は無いのだが？

…って、出迎えのメイドさん数人が、俺と視線を合わせた時に、顔

を赤くしていたのが、もしかして それだったのか？

更に ついでに言えば あのゲームにより、ミルたんにも、それなりの数のファンが既に出来ているとか。

「この子が『魔王様より赤龍帝の方が断然カッコイイ』と言った時には、サーゼクス様は血の涙を流しながら、神崎様に決闘を仕掛けようと、業務を投げ出して、人間界に乗り込もうとした位ですから。」

サーゼクスさん：アナタわ…

「あ、御安心を。その時は当然、この私が全力を以てして、めて止めましたので。」

怖いわ!!

「それは兎も角だな。…俺、サインなんて、した事は無いのだが？」

話はサインの件に戻る。

如何せん初めてな事なので、多少 戸惑っていると、

「あら、良かったわね？ミリキヤス。

赤龍帝（シリユウ）のサイン、貴方が一番最初に貰える事になるわよ。」

「はい。」

……………。

部長、凄く嬉しそうですね？

ミリキヤス君へ 赤龍帝 神崎孜劉

結局は、以前に貰ったグラビアアイドルのサインの字形に習って、それらしく書いてみたのだが、それで当人は喜んでくれた様で、何よりだ。

…そのサイン色紙を嬉しそうに抱きしめているミリキヤスを、廊下で整理している、数人のメイドさんが羨ましそうな顔をしているのは、気のせいだと思いたい。

「よしシリユウ、今からサイン会にや！」

1枚1、500円（税込）で売り出すにや！」

「はい皆さん、裸ドラゴン先輩のサインが欲しい人は、一列に並んで下





「……………」

彼女を見た俺とアーシアの言葉に、微妙な表情をするリアス部長。「あらあら、妹とか女の子だなんて、赤龍帝さんと そちらの お嬢さんは、嬉しい事を仰いますのね。」

そして こちらの少女は嬉しそうに、少し頬を赤くして喜んでいるけど、妹…じゃないのか？

「…ボソ…お…あ様よ…」

はい？口の中で小声で もごもご言われても、よく聞き取れないのですが？

「…だ・か・ら！この人は、私の お母様なのよ!!」

…はいい？

「お…お母様?」

「お母様?」

「お母様によ?」

「お母様によ?」

部長の台詞に、初対面である、俺、アーシア、黒歌、ミルたんが鵜返しの様に『お母様? (疑問形)』を連呼、そして最後に

「お母様♪」

その お母様とやらが、それを肯する様に、両の頬を人差し指で突ついて、満面の笑みで応えてくれた。

「二「ええええくくくつ!!」二」

そして それに当然な様に?驚きの声を上げる俺達。

見れば、木場や朱乃先輩は、「でつすよねー」と言いた気な、困った様な笑みを浮かべている。

「悪魔は歳を経れば、魔力で見た目を自由に出来るのよ。

お母様は普段は 何時も、あの年格好の お姿で過ごされているの。ハア…」

そして溜め息混じりに、説明してくれるリアス部長。

「初めまして、赤龍帝殿。リアスの母、ヴェネラナ・グレモリーですわ。

以後、お見知り置きを。」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇



顔付きで、部長さんや朱乃先輩達に注意を促します。

「おいおいヴェネラナ、今は食事中だぞ？」

そういう話は、後で改めてでも……」

「A・NA・TA？」

「いや……そうだよね。」

確かにケジメは、大切だよね……。」

「食事中だから堅い事は言わずに……」と場を和ませようとしたジオテイクス様も、ヴェネラナ様の一言と一睨みで、その言葉を途中で途絶え、縮こまってしまいました。

「……ボソ……し、シリユーさん……様、ヴェネラナ様、怖いですう……。」

「……ボソ……お、応、グレモリー卿、完全に敷かれてるな……。」

何だかシリユーさん……いえ、シリユー様も、その迫力に気圧されている感じでした。

こうして、オカルト研究部の合宿……冥界の1日目は、終わるのでした。

# 悪魔貴族とのO☆H A☆N A☆S H I☆

冥界2日目

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

あゝ、もう！

白音達リアス眷属は、今日はグレモリー領の観光だつていうのに、  
何で私は、エライキゾクサマの家を巡らにやいとイケないにや!?

…つてゆるーか！睡い!!

まだ朝の9：30だにや！

「貴様は何時迄 寝てる心算だつたのだ？」

つて、仕方有るまい。

黒歌は：ア－シアもだが、リアス嬢の眷属では無く、一応は俺の部下な位置付けなのだからな。

今回のO☆H A☆N A☆S H I☆行脚、俺と同行するのは当然だろう。」

そー言っているのはシリュー。

O☆H A☆N A☆S H I☆行脚：そう、今日の赤龍帝(シリュー)の予定は、5月のレーティングゲーム後の誘拐未遂事件の件で、その加害者である『家』の当主に、被害者として改めてO H A N A S H I する為に、直々に来邸する事にやのだ。

因みに昨日のリアスママの、リアスや白音達眷属、更にはリアスパパに向けた あの睨みが怖かったのか、シリュー自身も、この冥界では赤龍帝として：普段の『部長』呼びなんかでなく、『リアス嬢』と、あくまでも冥界の客：魔王と同格の者として接すると、決めてるみたいにや。

ん：気持ちは、凄く解るにや。

あの時のリアスママの顔、凄く怖かったにやゝ！（「。O。L」）

：そんな訳で、グレモリー邸の中庭にセットされているテーブル席に着いて、メイドが淹れた紅茶を飲んでみると、

ぶおんうゝ おんおんおんおん：

ぶるおおおおおおゝ：キツキキイツ!!

「!!?」

けたたましいエンジン音を鳴り響かせながら、真つ赤な自動車が庭内に突入、ドリフトかまししながら、私達の目の前で停まったにや!!  
「カウんタツクのリムジン…だとう?」

そして それを見たシリユーの目が、何かの琴線に触れたのか、一気にキラキラと輝きを放ち始めたにや。

んん。赤龍帝と云っても その辺り、やっぱり男の子。

こーゆーのは大好きみたいだにゃ〜! ww w

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

2連4枚のガルウイングドアに、後輪は2列4本、前後合計6輪の…如何にも多人数に乗せる為にカスタマイズされた、リムジン仕様のカウんタツクが現れた。

ベース車は恐らく、LP―500S/Wolf…か?

何て言うか…ヤツベ! っつけーっっっ!!

カチャ…

そして その運転席から降りてきたのは、ノーネクタイのカジュアルなサマースーツを着て、サングラスを搔けた紅髪の優男。

「やあ、皆、おはよう。待たせたね。」

サーゼクス・ルシファー。

「…お、おはよう、(´▽`;)ざい…ます…」にや…」

スーツは兎も角、全つ然似合わないサングラスを何処かの某・赤い人の様に、カツコ付け(てる心算で)ながら外して挨拶する魔王に、やや引きして挨拶を返す俺達。

「それにしても まさか、馬車でなく、冥界でスポーツカーとはね…」

「ふっふっふ…驚いたかい?」

「因みに、ベース車は?」

「ふっ…オダ○ドー・モデルさ!」

その呼び方は辞めろ!

ウルフで良いだろ? ウルフで!!?

だいたい悪魔的に、そっちの名前を出すのはアリなのか?

…あ、もしかしてアレは、生臭和尚だから、アリだったりするのか



しているのとは、別の領内へ。

市街地となると、やはり遠慮が有るのか、それなりなスピードで走行しています。

…が、私も黒歌さんも、先程迄のサーゼクス様の暴走っぷりに、既にぐったりです。

「あの程度で へばったのか?」

「絶叫系アトラクション慣れしてるシリユーさんと、一緒にしないで下さい!」

「好きで慣れた訳じゃないぞ?」

文句はトーカーに言ってくれ。」

「然り気に惚気るにや!この おっぱいドラゴンが!!」

そんな会話をしている内に、このCountach (クンタツシ)は、この領内の主さんの お城へ到着です。

「こ、これはルシファア様、そして赤龍帝殿!よよよ、よくぞ我が城へ!」

領主の方でしょうか? 歓迎の為に並んだ、大勢のメイドさんや執事さんを押しのけて、少し お年を召した方が、恐縮しながら出迎え下さいました。



カミジン家。

この家の当主の三男は、シリユーとライザーとのレーティングゲームを観た際、その赤龍帝の実力を見初め、己が眷属に せんと、結果は失敗に終わったのだが、自分の眷属悪魔を遣ってシリユーの家族を質に捕ろうとした罪により、魔王の名の下に処刑されていた。

「せ…先日は赤龍帝殿に至っては、当家の愚息が、その、大変な ごと、御迷惑を…」

顔 (おもて) にこそ出してはいないが、正直な処、この当主の胸中は穏やかでは無かった。

何しろ『家』とは関係無い、本人の自業自得な独断行動とは云え、自分の息子が裁かれた元凶な男に…駒による転生すらしていない、人間如きに…頭を下げないとならないのだから。



それは、本人からすれば、屈辱以外の何物でも無く。

しかし、「そんなに『人間如き』とか言うなら、シリユー君と直接に、遣り取りしてみるかい？セラフォルも言ってたけど、其処迄『人間如き』と言うなら、無理矢理に力で、どうこうする事だつて出来ると云う事だろう？それならそれで僕達は、別に止めたりはしないよ。どうするんだい？相手は『人間如き』だよ？」と言うサーゼクスの言葉に従える筈も無く。

リアスが：最終判断はサーゼクスが推した事だが、赤龍帝を悪魔サイドに引き入れたのは、確かに戦力増強的な意味ではファインプレーだった。

しかし結果から見れば、その赤龍帝を『人間』の儘に招いたのは、普段から人間を見下している傲慢な悪魔貴族達からすれば、今後は下手に人間に手出しする事が出来ない、『余計な事』でも有つたのだ。

「……………」

苦虫を噛み潰した様な顔…を我慢して、シリユーを見るカミジン家当主。

「……………♪(？△?)」

それに対し、その心境を察したシリユーは口には発さずも、その表情は正に、「ねえ？今、どんな気持ち？wwww」と語っている。

学生である身故に学業を優先させ、夏休みに入り、漸く誘拐未遂を起こした者の『家』へと訪れ、その当主に対して赤龍帝として、「今後、この様な事は絶対に無い様に」と、『被害者』として改めて直接に釘を刺すシリユー。

その背後に控える、実は借りる必要性の全く無い、魔王の威を借りドラゴンに、カミジン家当主は何も反論出来ずに肯の意を示し、頷く事しか出来なかった。

その後も、伝説のドラゴンと魔王ルシファーによる口撃は暫く続き、

「兎に角だ、君の『家』に限った訳じゃないけど、迂闊な真似は控える様にね。

公個人は兎も角、『家』としては、既に前科持ちに なっているのだ











ガンツ!!

ソファアールから立ち上げると床に平伏して、DOG EZAするナベリウス家当主。

やはり俺の最初の読み通り、真実其の儘に伝えるのは『家』の恥として、尚且つ、当人不在を善い事に、更には当時ははぐれ悪魔は問答無用で即処分とされる事から、自分達に都合良く歪曲して、上層部に報告した…と云うのが真相だった。

「…それで、私1人を悪い風に仕立て上げるだけなら兎も角、何の暴走の危険の無い白音を、対面の為に如何にも危険視して、全ての責任を押し付けて、処分しようとしたにや!!?」

「ひえっ!?!」

そして今度は それを聞いた黒歌が大激怒。

その身体から迸る魔力を直に感じ、完全に腰が引けてしまう貴族悪魔。

「確かに あの時、白音を一緒に連れて逃げなかった自分にも落ち度が在った自覚は有るにや。

それでも…幸いにも、その時にサーゼクスが割って入り、グレモリー家に迎え招かれたから、結果、白音は無事だったけど…」

「く、黒歌ちゃん、落ち着いて!」

「黒歌!」

これは流石にヤバいと判断し、俺が黒歌を止めに入ろうとした時、セラフオールが先に慌て宥めに入った。

「…でも、黒歌ちゃんの気持ちも解るし、何よりも魔王(わたし)達に嘘を憑き続けてきた事は、赦される事では無いよね?」

普段の台詞の途中や語尾に『☆』が附く様な口調で無く、完全に魔法少女なんかでは無い、魔王然とした口調なセラフオール。

「人間の1人2人…下級妖怪の1匹や2匹、不当な扱いをしても、何の問題も無いと思っっているのか?」

上級悪魔の貴族様は?

その高慢不遜な思考が、要らぬ火種を招くという発想は無いのか??!





ほっ：x2

グレイフィアちゃんの言葉に、安堵な溜め息をアーシアちゃんと黒歌ちゃんが零す横で、シリユーちゃんは何だか物足りなさ気な表情を浮かべている。

「セラフオール様は、助手席で宜しいですか？」

そう言うところグレイフィアちゃんは、私の返事も聞かずに後部トランクのハッチを開けて、その中に簀巻きサーゼクスちゃんを放り込み、シリユーちゃん達を後部座席に通すと、

「さあ、出発します。」

私が助手席に座ってドアを閉めたと同時に、普段より少し大きめの魔法陣を展開、カウンタック毎、アバドン邸へと「あっ！」と言う間に転位移動完了。

アーシアちゃんと黒歌ちゃんが、凄く嬉しそうな顔をしてる中、「何かが違う」：と、『コレじゃない感』全開な顔をしているシリユーちゃん。

：ねえ、シリユーちゃん？

サーゼクスちゃんの運転って、そんなに酷かったの？

「ん？確かに少し、スピードは出していた様だが？」

「多少処じゃ無い!!」



アバドン家。

シリユーとライザーとのゲームを観た際、この『家』の当主の次男の孫が、シリユーを眷属として欲し、『YES』と言わしめる為に恋人である矢田桃花の誘拐を画策。

結果は その様な事態を予測していたシリユーの魔力感知のトラップにより、仕向けられた眷属悪魔が逆に捕らえられ、事が明るみになると同時に、この赤龍帝の逆鱗に触れた当主の曾孫に当たる男は、魔王の名の下に断じられていた。

「それじゃ、早速だけど…」

「……………」

赤龍帝、そして2人の魔王が来邸となり、多分に漏れずな盛大な歓

迎を受けた後、グレイフィア、アーシア、黒歌の3人は別室で待機の上で、邸の応接間で話し始める魔王2人、シリユー、そしてアバドン家当主。

その会話の内容自体は、カミジン家の其れと大差なかった。

…が、先程迄のグレイフィアのシバきから漸く解放されたサーゼクス、半ば八つ当たりな問い詰めにより、先の2家よりも苛烈なO☆HA☆NA☆SHI☆となり、そのOHANA☆SHI終了後、やはりグレイフィアの転位移動（うんてん）で、シリユー達はグレモリー邸に帰還するのだった。

「絶対に二度と、サーゼクスの運転する車には乗らないにや!!」

## 若手悪魔集結！

冥界3日目。

リアス眷属並びにシリユー達はグレモリー邸から転移魔法で、冥界の旧王都ルシファード…の中心地に聳え建つ巨大且つ強固な城、ルシファール城に来ていた。

その名で察せる通り、四大魔王が1人、サーゼクス・ルシファールの居城である。

そろそろそろ…

「皆、これから若手悪魔との顔合わせよ。

良〜い？何が起きても平常心で居るのよ。

この先に居るのは、将来の私達のライバル達。

無様な姿は見せられないわ！」

リアスを先頭に、駒王の制服、そしてメイド服…否、滅威弩服を着た眷属達、その後ろに着崩した黒い和服を、青基調のシスター服を、そして薄紫の中国衣を着た若い男女が廊下を進む。

この日、この城では、次代を代表する若手悪魔達と、魔王や元老院の歴々との顔合わせが予定されていた。

「そう言えば、ソーナ嬢も生徒会(けんぞく)の皆を引き連れて里帰りしてるとか。

昨日、匙からメールが届きましたね。」

「はい。ソーナはシトリ一家の次期当主ですから、当然、この城にも来ています。」

学内でなく冥界故に、その喋り方は普段の先輩後輩な口調でなく、一介の上級悪魔と魔王の『客』である赤龍帝として会話を交わしていたのだが、

「はあ…部長…それと皆も、普段通りな喋りにしません？」

ヴェネラナ殿も居ないし…」

「ん。ソー言ってくれると、有り難いわ。

お母様の言う事も解るけど、正直、精神的に疲れるのよね。」

「確かにだにや〜♪」



よ。」

その質問に応えたのはサイラオーグ。

「下らない？」

それにリアスとシリユーが声をハモらせ、鸚鵡返しのように受け答えた時、

ドツガツ!!

「「おわくっ!?!」」

「「!?!?!」」

目の前の大扉、そして数名の悪魔が、眩い閃光、爆音爆発と共に、部屋の内側から吹き飛ばされた。

「ケホ…ななな…何なのよ、これ?!」

立ち込める煙の中、不意の出来事に たじろぐリアス。

「実は着いた早々、コイツ等の主である、ゼファードルがな…」

「…あの、グラシヤラボラスの問題児が？」

今度は一体、何を…」

サイラオーグから、ゼファードル・グラシヤラボラスなる人物の名を聞いた途端、「またか…」とばかりに呆れかえる表情を浮かべるリアス。

そして その直後に、

「ゼファードル、アナタ死にたいの？てゆうか死ぬ？いえ寧ろ、今直ぐ

この場で腹かつ捌いて死んで頂戴。」

「ケツ…せっかく、この俺様が、男が全く近寄らない、処女姫様の開通式やってやるつつてんだから、素直に喜んで受け入れろや、瓶底お!!」

「ちよ…シーグヴァイラもゼファードルも、少し落ち着いて！」

此処は穩便に…ね?ね?」

部屋の中から聞こえたのは、何やら言い争っている男女の声。

そして煙が晴れてきた中で、確認出来たのは、互いの眷属を引き連れ、睨み合っている男女と、それを止めようとしている1人の男。

1人は褐色肌の顔に白い稲妻ラインのタトゥーを施している、青髪  
のチンピラ風、且つ その風貌に似合う下品な台詞を飛ばす若い男。

1人は そのチンピラ風な男と言い争っている、かなり度のキツそ

うな…所謂『瓶底眼鏡』を搔け、その口調から察するに、性格もかなりキツそうな、長いプラチナブロンドの少女。

1人は その2人の諍いをおろおろとしながら止めようと努めている、目の細い…と言うより糸目と云う表現が似合う、黒髪の少年。

「下品なヤツだ…」

「ヤンキーだよ。」

「うわ…気の強そうな女だなあ…」

「あら？あの悪魔（ひと）、何処かで…？」

その3人を見て、様々な印象を持つシリユー達。

「…一応、教えておくわ。」

あのチンピラっぽいのが、ゼファードル・グラシヤラボラス。

眼鏡の娘が、シーグヴァイラ・アガレス。

そして、その2人の間で おろおろしてるのが、ディオドラ・アスタロトよ。」

そんな彼等に初めて会うシリユー達に、リアスが説明。

「ふん！そもそも お前の様な祖※※が、この私の御相手する等、ギャグにも成らないわよ（笑）」

「…つんだと、ゴラッ アっ!!」

だだだ、誰が祖※んだ、テメー?!

見た事無い癖に、テキトー言ってるな!?!」

そんなリアス達を後目に、言い合いを終わらせる気配の無い、ゼファードルとシーグヴァイラ。

「ふっ…其処迄言うなら、望み通り、見定めてやろう。」クイ…

シーグヴァイラは そう言うと、眼鏡のズレを戻し、その眼鏡をキツラーン…と妖しく光らせ、ゼファードルの下半身を刮目。

「ふむふむ…サイズD 硬度C 持久力E 総合スタミナD…」

「やっ、止めろー！ー！ー！っ!!?」

「桐生かよっ?!」

まさかの戦闘力(笑)測定に驚愕する、ゼファードル…と、シリユーと匙。

「退いてろ、ディオドラ。」



「う……が……」

リアス達の前で、殴られた顔を抑えた儘、まだ起き上がれないゼファードル。

「……………」

それを、何だか可哀想な物を見る目で居る、駒王学園の皆さんだが、「何、見てやがるんだ、テメー等あ?!」

その視線に気付いたゼファードルが、顔を真っ赤、怒りの形相で起き上がり、

「あ!?!何だ? オメー?」

その中の1人にターゲットを絞り、八つ当たり気味に因縁を振っ掛けてきた。

「テメー……悪魔じゃねえな、人間か?」

何で人間如きが、冥界に居んだ、コラ?」

ササササツ……

この時点で其の場に居合わせていた、絡まれた当人を除く、オカ研&生徒会の皆さんは、要らぬ巻き添えを恐れ、距離を置く様に離れるのだが、

「何 黙ってたんだ? お前わっ!!」

その殺伐とした空気を察せないゼファードルは、構わずに目の前の男の顔面目掛け、拳を打ち込むが、

ずん!

「かっ……ほ……?」

それは標的には届かず、代わりに自らの鳩尾に、痛烈な一撃を赦してしまう。

「くはっ……ゲホッ……」

顔面蒼白、息を詰まらせ、拳を埋められた腹を抑えながら、両膝を床に着くゼファードル。

「て……テツメエ……!」

そして その姿勢その儘で、自分の 土手っ腹に一撃を喰らわせた男……シリユウを睨み付けると、

「テメエ、解っているのか?」



俺はグラシヤラボラスの、次期当主だぞ!?

高が人間の分際で、こんな巫山戯た真似しやがって、只で済むと思っっているのか?」

自分の『家』を名乗り上げ、優位に立とうとするが、  
「成る程、つまり先の行動は、貴様個人で無く、グラシヤラボラス家として、この俺に弓引いた…そう解釈して良い訳だな?」

その程度の脅しが、この男に通じる筈も無く。

「お、おい お前等!何、ぼおくと見てやがるんだ!?

お前等全員で、この生意気な人間、殺っちまえ!!」

『家』の権威で圧してみても、動じる様子の無いシリユーに、今度は自分の眷属達を使い、数の暴力で、斃そうとするゼファードル。

「「「「「「……。」」」」」」」

ザザツ…

その言葉に従う様に彼の眷属達が、事の最初、シーグヴァイラの一撃で部屋の大扉毎吹き飛ばされた者も一緒になり、シリユーの前に揃い立つ。

そして…

かばあっ!

「「「「「「すすす…すいませんでしたああっ!!」」」」」」」

「…はい?」

「来るなら来い!」とばかり、戦闘姿勢を構えるシリユーに、全員で土下座。

これにはシリユーも、少し拍子抜け。

「申し訳有りません!」

「ウチの大将、凄く頭が悪いんです!」

「情弱なんです!」

「根っからの『俺様EEEEEE!』なんです!」

「我々から、よくよく言っただけで、御家取り壊しだけは、どうか御堪忍を!!」

「何卒、何卒、怒りをお鎮め下さい!」

更には次々と、謝罪の言葉を繋げるゼファードル眷属達。

「な…お前等、一体…?」

「ふっ…頭が無能な分、下の眷属達は　しつかりと、しているみたいね。」

「はあ!?」

何が起きているのか、理解が追いつかないゼファードルに、シーグヴァイラが話し掛ける。

「ゼファードル、お前は　まだ、あの方が誰なのか、気付けないのか？」

お前の言っている只の人間とやらが、冥界に…ましてや、まかり間違っても魔王様の居城に、のこのこと足を踏み入れられる訳が在るまい。

その時点で、普通の者ならば、此方の御方が只の人間では無い事程度は、容易に想像が点く。

そして　その人間が、リアスと…グレモリー家の者と一緒に居るとなると、自ずと答えは1つに絞られる。」

「ふっ…大公家の令嬢は、なかなか聡明だな。」

このシーグヴァイラの解説に、シリューは称賛の意。

「ま、まさか…」

そして　この時点で漸く、自分が絡んだ人間が何者たのか察したゼファードルに対し、

「【赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）】！」

(Boost!!)

シリューも神器を発動させ、

「…これなら、貴様も　この俺が何者なのか、理解出来るだろう?」

それを名刺代わりに、自分が何者かをアピール。

「せ…せっせっせ…(ガクッ)」

「た、大将お?」

「若あ?!」

そして、それを見て、完全に理解したゼファードルは、その後　結局立ち上がる事は無く、自分が喧嘩を売った男の正体に恐れ慄き、ズボンと床を濡らすと同時に気を失ってしまうのだった。

「どーでも良いけど、この前からDOGGEZAが多い気がするにや。」





い、いきなり何をするんですか？

如何に貴方と云えど、不条理な暴力は控えて載きたいのですが?!」  
涙目で後頭部を押さえながら、シリユーに物申すディオドラだか、  
「喧しいわー!

いきなり女子の前で衣服をはだけるとは、貴様は一体、何を考えて  
いるのだ?!」

「ううっ!?!」

逆に、正論な…至極尤もな、正論で斬り返される。

「「「「「……………」」」」」」

尚、その言葉を聞いたリアス達が、何やら突っ込みたいのを必死に  
我慢していたのは、謂う迄も無く。



セラフオールの解説に、思わずシリューは苦笑する。

「それから赤龍帝…神崎殿にも伝えておきますが…」

アジユカが前日、この城にて行われた、魔王と墮天使総督アザゼルとの、会談内容の報告を始めた。

「…」

「…成る程、でも それは、最初から或る程度は想定された事だったのでは？」

「確かに、そうですね…」

アジユカの説明によると、悪魔、天使、墮天使の3勢力が和平協定を結び、一見3者の中では平穏が訪れたかに見えたが、それは別の問題を起こす種でもあった。

和平…即ち、悪魔、天使、墮天使が手を取り合う事を、それを好しとせず不満とする者が、各勢力に多かれ少なかれ存在するらしいのだ。

悪魔側には現時点で明ら様に その様な意思を見せる者の確認は出来ては いないが、天使、墮天使の側では それぞれの組織を出て行く者が存在していた。

尤も今の処、敵対行動を示してきた者は居ないのだが…

「アザゼルは『そんな時や構わねー。遠慮無く殺ってくれ。』と、言っています…」

「ミカエルは何と?…」

「アザゼルちゃんから聞いた話だけどね、ミカエルちゃんも、似た様な事を言ってるらしいよ☆」

「…出奔者の受け皿に成りかねない、あのテロ集団を白龍皇達が潰してくれたのは、本当にファインプレイだったな。」

…近い内に もう一度 改めて、トップを集めて話し合う必要性が有りますね。」

「当然、その心算です。」

そして その時は神崎殿、貴方も出席、お願いします。」  
「…了解した。」



「…俺が　この様な位置に座しても、大丈夫なのか？」

「気にしない☆気にしない☆」

会合の間。

多段状に椅子が並んでいるフロア。

その一番上の段：通常は4人の魔王が座る4つ並んだ椅子の横、特別に用意された椅子にシリユールが座る。

「しかしな、下の御老t…失礼、元老院の方々がな…」

「気にしない☆気にしない☆」

その下の段に座る元老院の悪魔達が、不機嫌不快そうにシリユールを見ており、「あの赤龍帝（ニンゲン）、魔王様と同じ高さの席に…」と云う空気が　ひしひしと伝わってくる。

隣に座っているセラフォールは「気にするな」と言っているが、その視線に遠慮がち…には　ならないが、それを煩わしく感じるシリユール。

そんな中、この部屋の正面大扉が開き、

ぞろ…

6人の次代を担う若手悪魔が入室、魔王達の前に整列した。



「この度は　よくぞ集まってくれた。

冥界の次代を担う者達よ。

今回の会合は、貴殿等を見定める為に開いたのだが…」

「早速、やってくれた様だな…」

横一列に並んだりアス達若手悪魔に、元老院の老悪魔達が話し掛ける。

「…チイツー」

その言葉に正面から見て右端、未だ左頬の腫れが引いていないゼファードルが、小さく舌打ち。

「君達6名は、家柄、実力共に申し分無い、次代の悪魔だ。

だからこそ、デビュー前に競い合い、互いに力を高めて貰おうと思っている。」

「それは、私達若手で、レーティングゲーム…と云う事ですか？」



サーゼクスの言葉に察したかのように、眼鏡を鋭く光らせ、質問を投げかけたのはシーグヴァイラ。

「…そうだ。」

エキシビジョン形式で予定している。

これには天界や【神の子を見張る者（グリゴリ）】、そして それ以外の神話勢力からも、何名か識者を招き、観戦して貰う事でレーティングゲームの有効性をアピールするという側面も有る。」

「それ以外の神話勢力…ですか？」

「…そうだ。」

北欧のアスガルド、そして此方の赤龍帝殿の繋がりで、ギリシヤのオリンポスからは、既に招聘が決まっている。」

『それ以外の神話勢力』という言葉に反応したディオドラに、アジュカ・ベルゼブブが具体的に説明。

「各界が手を取り合い、敵となる勢力に対抗する力を得る為の、足掛かりとなるだろう。」

「敵…？あの【禍の団（カオス・ブリゲード）】の、残党の事を言っているのですか？」

「それも含めて…だね。」

続く『敵』という言葉に、過敏に反応をしめたのはサイラオーグ。

「我々も、テロリスト達との戦に加われるのですね？」

「いや、敢えて断言は しないが、可能な限り、若い悪魔達は戦場には投入したくないと云うのが、此の場に居る者達全員の考えだ。」

「な、何故ですか？」

我々が まだ若い未熟者だから…とでも、言いたいのですか？

確かに若いとは云え、我等とて悪魔の一端を担います。

十分に戦えます！」

魔王と元老院の総意に、臆する事無く納得往かずの姿勢を見せるサイラオーグだが、

「その勇気は認めよう。」

しかし、もしも成長途中の君達を喪う事になれば、それは悪魔界にとって損失は計り知れない。

それだけ君達は、我々にとって大事な宝なのだよ。

その事は、理解して欲しい。」

「…解りました。」

サーゼクスの言葉に、理解はしたが、納得は出来ないと言いた気な顔のサイラオーグは、とりあえず言葉の矛を収めた。

「さ・て…それじゃあ次は、君達の今後の目標を聞かせて貰いたい。」

「まずは、一番左端（コッチ）の、サイラオーグちゃんからだね☆」

「…はい。」

セラフホルーの指名に、サイラオーグは頷き、口を開く。

「俺は…魔王になるのが夢です。」

「ほう…」

「大王家から魔王が選ばれるとしたら、それは前代未聞だな。」

その発言は想定外だったのか、元老院達は多少の戸惑いを見せながらも、感心の表情を浮かべる。

「俺しか居ない…冥界の民が感じれば、そうなるでしょう。」

それに…」

「それに？」

「今 俺は、バアル家次期当主として此の場に居ますが、恐らく現当主である俺の父上は、俺に『家』を継がせる気は無いでしょう。」

何しろ俺は、古き伝統を重んじるバアル家では、出来損ないなのですから。」

「「「「「……………」」」」」」

サイラオーグの言う『出来損ない』の意味を理解している元老院達は、思わず沈黙。

「(ボソ…)セラフホルー? そう云えば さっき、あのゼファードルとやらも、彼の事を出来損ない呼ばわりして殴り飛ばされたのだが…?」

「(ボソ…) 後で教えてあげるよ…」

シリユーとセラフホルーがヒソヒソと会話する中、次はリアスが、「私はグレモリーの当主として生き、レーティングゲームの各大会で優勝を重ねて行く事が、現在の目標ですわ。」

「ふむ！」

「ほお☆流石はリアスちゃん☆

次はソーさんの番だね☆」

自身の語る目標に、2人のシスコンが満足気に感心する中、ソーナの番となる。

「冥界にレーティングゲームの学校を建てる事です。」

「む?」「は?」「んん?」

このソーナの発言に、疑問符を浮かべる元老院達。

「:レーティングゲームを学ぶ場所ならば、既に在る筈だが?」

「それは上級悪魔と一部の特権階級の悪魔のみにしか、通う事が許されていません。」

私が建てたいのは、下級悪魔、転生悪魔も通う事の出来る、分け隔ての無い学び舎です。」

「うん、うん!☆」

「ほう…」

初老の悪魔の男が発した質問に、毅然と応じるソーナに、感心、或いは誇らし気な表情を浮かべる、2人のシスコン魔王。

「」「」「はっはっはっはっはっはっはっはっはっは」

しかし、その場全体は、嗤い声の渦に包まれる。

「それは無理だ!」

「傑作ですな!」

「成る程成る程、夢見る乙女:と云う訳ですな!!」

「シトリ一家次期当主と有ろう者が、此の様な場所で其の様な夢を語るとは…」

「此処がデビュー前の顔合わせの場で、本当に良かった。」

そして、一様にソーナの語る夢を、正しく夢現とばかりに完全否定。

「私は本気です!」

それでも退く事無く、凜とした面持ちで言い張るソーナに、

「良いか?ソーナ・シトリ殿…」

ゲームに参加出来る様な下級悪魔や転生悪魔は上級悪魔たる主に仕え、才能を見出されるのが常なのだよ。」

「如何に悪魔の世界が変革期に入りつつあると云えど、有象無象の輩に分け隔て無く教える等…と…!?」

元老院の席に座る老いた悪魔達が揃って、まるで世間知らずのお嬢様を諭す様に説き伏せようとしている途中、突然に上の席から発せられた強烈な殺気…冷気が、それを途切らせた。

「はつくし!」「くしゅん!」

その冷気は瞬く間に、部屋全体を包み込み、室温を氷点下迄落とす込む。

「そんなに…其処迄、可笑しな事を言ってるのかな…?」

「!!!?!」

そして この現象を作り出した本人が、口を開いた。

セラフオール・レヴィアタンである。

「ねえ…そんなに可笑しい事…?」

「お姉さま…レヴィアタン様…?」

「!!!」

「それなら…ソーたんがゲームで勝ち続けて行けば、誰も文句、無いでしょ?」

ゲームで結果を出せば、叶えられる事柄だっただいんだし…」

俯き、瞳から光が完全に消えた眼で、老人達に静かな口調で問い質すセラフオール。

それは彼女を知る者からすれば、完全にキレているサインなのは既知な事柄であり、迂闊な台詞は喋れないと、言葉を詰まらせる元老院の面々。

若手悪魔達も その殺気に、サイラオーグでさえ戦慄している。

そして残る魔王と赤龍帝は、さしあたっては何も言わずな傍観の姿勢。

「おじーちゃん達がウチのソーたんを寄って集って虐めるのなら…」

私だって、我慢の限界が在るんだよ?

あんまり虐めてると、今度は私が、おじーちゃん達を虐めちゃうよ?

…とりあえず、少し頭、冷やそうか?

4〜5000年位。」

しーん…

殺気を孕んだ魔力を全開で解き放つセラフオールに恐怖を感じ、老人達はいよいよ以て、完全に黙り込んでしまう。

よくよく考えてみれば、この魔王少女の前で その妹を嘲笑するのは、紛れも無く『死亡フラグが立ちました!』なのに、何故それを忘れていたのか…

誰もが この死亡フラグを折ろうと、何とか穏便に済ませようと、取り繕う台詞を脳内で模索していた。

「ふっ…下らんな…。」

「!!!?!?」

そんな時が凍った様な空気の中、それを打ち破るかの如くに声を発する男が1人。

「神崎ク…様…?」

「シ…リユ…ちゃん?」

シリユである。

今迄座っているだけで、ずっと（ヒソヒソ話を除けば）沈黙していた男の発言に、場内は再び、より静寂に包まれた。

「ふ…ふん…どうだ、ソーナ殿?」

赤龍帝殿も、そなたの夢とやらを、下らないと申されておるぞ?」

「流石は赤龍帝殿! 現実と謂う物を、解っている!」

「ソーナ殿も…そしてレヴィアタン殿も、もつと現実をだな…」

「シ…シリユ…ちゃん? ど…どうして?」

しかし直後、老いた悪魔の男達が、確かに気に入らない存在では有るが、一応は強力な賛同者を得たとばかり、したり顔で更に捲くし立てる。

そして まさかの『あちら側』とも受け取れる発言に、涙ぐむセラフオール。

「はあ? 何か勘違いしてないか?」

今程、『下らん』と言ったのは御老体、貴方達に対しての発言なのだが?」

「「な…何と!?!」」

しかし、シリユートの口から発せられていたのは、ソーナに対してではなく、

「下らん！そんなに自分が実現不能な事柄は、他人にも不可だと思っ込んでいる、その目出度くも古い脳味噌から成る思考が下らな過ぎると、俺は言っているのだ!!」

「シリユートちゃん！」

元老院の者達に対しての言葉だった。

「前世（むかし）の友の言葉を借りる事になるが…御老体方、まさか夢とは不可能と同じ意味だと思っっているのでは あるまいな？」

夢、イコール不可能だと考えるのは、それは もはや、人生を諦めた…正しく貴方が今の容姿な如くの老人に等しい。」

「「な…!?!」」

「支取s…コホン、ソーナ嬢の語る、何人でも通える、レーティングゲームの学び舎。」

良いではないか。俺は、素晴らしい夢だと思うが？」

「神崎…君…」

「シリユート…」

ソーナが、そしてリアスが、自分の夢、自分の親友の夢を非と思わせていて一転、シリユートの肯とする言葉に顔を綻ばせる。

「ふん…！そもそも俺には、上級悪魔とやらが、そんなにも優れた存在とは思えぬのだがな！」

高が、偶々に貴族の家に生まれたと云うだけで、自分自身は見合つた実力も、何の功績さえも持たず、己の祖の偉業をまるで、自分の実績と勘違いして偉そうに振る舞う…それが今の、冥界…悪魔社会の貴族ではないのか？」

「え？」「は？」「な？」「へ？」

そして、シリユートの口撃は終わらない。

「な…せ、赤龍帝殿！」

それは聊か言葉が過ぎぬのでは、なさらぬか？」

1人の老悪魔が、シリユートのマシンガントークを窘める様に止めに

入るが、

「ふっ…貴方達の、ソーナ嬢に対する発言を聞くに、古き伝統に縛られ、新たな可能性を見出そうとしない姿勢を見て、そう改めて感じたのだが？」

それでも赤龍帝の舌は、止まる事を知らない。

「それとも何か？」

ソーナ嬢が提唱する学び舎を建てた結果、其処より自分達より身分の低い者が才能を発揮して、台頭するのを恐れている故の、否定的発言か？

何しろ、上級悪魔と云っても…」

「?!」

ここでシリユーは一瞬、ゼファードルに目を向けると、

「自らが『出来損ない』呼ばわりした者には圧倒され、更には目の前の相手が人間と云う『種族』だけで、其の力量を見切る事すら出来ず、考え無しに牙を向ける…敢えて謂うなら『無能』な者が、未来を背負う立場として、この場に居るのだからな！」

「うっ…」

「加えて言えば、聞くに其の事の起こりは、そのゼファードル殿が、其方のアガレス家の令嬢に、貴族に在るまじきな下卑た話を持ち掛けた事らしいが？」

「いや、それは、その…」

「(ボソ…な…何だか、ゼファードルの公開処刑になってきてるわね…)」

「(ボソ…因縁吹っ掛けられたの、地味に引き摺っていますね。)」

「そもそもだな…」

リアスの言葉通り、先程のゼファードルの貴族らしからぬ言動を引き合いに、更に言葉を繋げて往く。

「な…ななな…」

赤龍帝殿！いい加減に為され！」

このシリユーの一連の発言に、ゼファードル云々は兎も角、その前  
の下位の悪魔達の台頭を恐れている云々に対して、完全に頭に血を登

らせて顔を真っ赤にした老いた悪魔が怒鳴り散らした。

「貴公は我々悪魔と、同盟を結んだのであろう？」

余りにも貶め過ぎる発言は、控えるべきでは？」

「俺は別に、貶めている訳では無い！戒めているのだ！」

それとも何か？

貴方は、所謂イエスマンの発言しか、受け入れられないとでも言う心算か？」

『『『『『………』』』』』』』

本来ならば若手悪魔達と魔王、元老院の面々が顔を合わせ、語らう筈の此の場が、何時の間にか、赤龍帝と元老院の歴々が言い争う場に変化。

しかし、古きからの現状を良しとする老人と、新たな可能性を唱える若者？の話は交わる事は無い。

その状況を、或る者は内心で溜め息混じりに、また或る者は興味深く。

そして また或る者は、自分に話が飛び火して来ないか恐れ、更に また或る者は、大笑いしたいのを我慢しながら、それぞれが それぞれの感情、思惑を秘め、無言で見守っている。

「ま、魔王様方も、何時迄黙って見ておられるのですか？」

赤龍帝殿…いや、この人間、此処迄 我々悪魔を貶めているのですぞ!？」

「そ、そうじゃ！魔王様の手で、この痴れ者に裁きの鉄槌を！」

「さあ、魔王様！」

「はい？」「へ？」「え？」「ふあ？」

口では…当然ながら、あのコカビエルを一蹴した者に、力でも…勝てないと思っただか、今度は老人は、ずっと傍観者となっていた魔王達に、シリユーをどうにかするように呼び掛けるが、

「…僕は、別に彼は、其処迄悪魔を貶めている様には見えないんだけど…？」

「え…?!」

「同じく。外様として、我々とは別の視点から、遠慮無く上の立場の者



に意見してくれるのは、非常に有り難い存在である…と、私は感じている。

確かに多少、耳が痛いのも事実だが…」

「…でしたら、尚の事…」

「…いや、だから それを力で黙らせると云うのは、それは彼…赤龍帝殿の言葉を全肯定するのと同じだよ？」

「なっ…？」

「ふぁ…面倒いし…」

そんな無理矢理に黙らせたのなら、自分達で やれば…？」

「うっ…！」

「私はソーさんの味方になってくれた、シリユーちゃんの味方だよ？」

☆

シリユーちゃんを相手にするなら、レヴィアたんも相手になっちゃうよ…？☆

「ううっ?!」

しかし魔王達は、様々な理由で その気は無く。

「まあ、此の場の主役は、君達でなく、彼等若手なのだから、何時迄も言い争うのも好ろしくないだろう。

ほら、彼等も どうしたら良いのか判らない…そんな表情になって  
いるからね？」

「「「「……………」」」」」

尤もアジュカには、この諍いを終わらせる気は有ったらしく、リアス達の存在を呼び水に、それを終わらせる様に努める。

「「うう…アジュカ様…？」」

「…確かに。」

アジュカ殿の言う通りだな。

それなら、最後に一言だけ…」

カタツ…

アジュカの言葉に、黙り込む老人達。

それに対してシリユーは席を立つと、

「…事の始まりとなった、貴方方が嗤い飛ばしたソーナ嬢の夢の件だ

が、自分達が出来ない、やろうともしない事を、それをイコール基準として、誰にも不可能であると決めつける様な発想は改めるべきだ。」

タンタンタン…

「ゆつくりと階段を降りながら話していく。」

「何よりも、ソーナ嬢には…」

「？」

そして若手達…ソーナの横を通り過ぎると、この会合の間の正面入口である大扉の前に立ち、

「彼女の夢を実現すべくアシストしてくれる、立派な眷属達が居る！」

カチャ…

その扉を開くと、

「わわわっ!？」

「「きやあつ?!」「」

「「ひええっ?!」「」

廊下側から聞き耳を立てる様に扉にへばり付いていたのか、匙、椿姫を基とした、ソーナの眷属達が倒れ込む様に入ってきたのだっ  
た。

「あ、アナタ達…?!」

「ど、ども会チヨ…ソーナ様…魔王様方…」

それを見て、目を丸くして驚くソーナ。

そして何だか、氣拙い雰囲気や誤魔化す様に、硬い笑顔で挨拶する  
匙達。

「全く…立ち聞きは芳しく無いぞ? 匙?」

「う…モウシワケ…アリマセン…」

対面的に『赤龍帝』として、呆れ顔で、尚且つ笑いたいのを我慢している様な顔で話すシリユーに対して、匙も普段のクラスメイトとしてで無く、下の立場の者として、馴れない敬語で受け答え。

「(ボソ…どうせなら、先輩が嗤われてる時に、怒鳴り込んで来いよ?)

そしたら少なくとも、俺とセラフォルは、此の場は兎も角、後で『よくやったー!』って、内緒で誉めてやったぜ?

ついでに支取先輩も感動の余り、『ありがとう、匙?』って頬ちゅー



## Dの悲劇（仮）

「はああ〜……」

ルシファアー城の一室。

若手悪魔と若くない悪魔との顔合わせが終わった後、宛行われた部屋にてデイオドラ・アスタロトは、思いつ切りの溜め息を零しながら凹んでいた。

「まさか……彼女を保護する前に、寄りによって赤龍帝に拾われるなんて……」

……そうなのである。

実は、アーシアが教会を追われる原因となった、彼女に癒やしを受けたと云う負傷していた悪魔……

何を隠そう、コイツである。

しかも その傷は、自分の指示で、己の眷属達に、傷付けさせた物。

……かと言って、別に彼は真性の『M』な訳では無い。

彼は、とある計画を練っていたのだ。

〽〽

眷属達に頼んで、ある程度なダメージに負傷させて貰う。

←

その状態で、聖女・アーシアたんの前に姿を見せる。

←

すると心優しい、『天使マジ天使』なアーシアたんは、自分が何者であろうが、神器によって、傷を治してくれる。

←

しかし、その現場を見た教会関係者は、そんなアーシアたんを異端だの魔女だの言っただけで追放するに決まってる。

←

路頭に迷うアーシアたん。

←

其処に僕が、偶然を装い声を掛けて事情を聞き、「行く場所が無いなら、僕の処に来ないかい？……そうなってしまったのも、僕が原因みたら、

いだし、責任を取らせてくれないかい？」

← その台詞に、大粒の涙を流しながら、無言で笑顔で頷くアーシアたん。  
ん。

← 晴れてアーシアたんは、僕の眷属に！

← 目出度し目出度し。

〈〈

「…な、筈だったのに…ハア…」

「ちよつと！何を黄昏てんのよ?!

早く紅茶！全く、気が利かないわね！」

「あ、ボクも〜！」

「うむ。私も貰おうか。」

「は…はい！た、只今!!」

アーシアたんは私の母に…もとい、眷属となる女性だった…とか思  
いながら、またも溜め息を吐く中、自身の眷属達へ給仕をするデイオ  
ドラ。

「…どうして、こんな…orz」

しかし現実は…

〈〈

眷属達に、ある程度処か、尋常でわ無い大ダメージを負わされた。

← アーシアたんの前に、姿を見せてみた。

← 余りなスプラッターに、どん引いてしまうアーシアたん。

← それでも必死に、今にも死にそうな演技（半分はマジ）で、神器に  
よる癒やしを施して貰った。

← タイミング良く、教会関係者に、その現場を抑えられた。

← 『悪魔を癒やす異端の魔女』として、教会を追放され、路頭に迷うアシアたん。

←  
そして いぎ、彼女に声を掛けようとして人間界へ向かおうとした  
その時、

「ちよつと！何処に行こうとしてるの？」

「今日はグレモリー領で新しくオープンしたスイーツの店へ、皆で行くわよって言ったでしょ？」

「え…？いや、今日は、その…」

「」「あゝ つあん!? 返事は『はい!』…でしょ?」「」「」

「」「それとも『Yes』?」「」「」

「よ…喜んで…(T「T)」

← この間に、墮天使一派に接触されてしまうアシアたん。

←  
そして最終的には、赤龍帝(いちばんアカンやつ)の保護の下に、落ち着きましたとき。

←  
BAD END

「はああああ~~~~~~~~~……」

← 宿主の決まっていない、兵士の駒を見ながら再び、深い溜め息を零すディオドラ。

「今度こそは、アシアさんみたいな、大人しい眷属が欲しかったのに…」

← そうなのである。

この男、巷で聖女とか清楚とか可憐等と噂される、或いは一国の姫君で且つ、眷属足るに相応しい実力を併せ持つ美少女達に言葉巧みに声を掛けては眷属としてきたが、噂と現実は大間違い。

「ゲーキー！」



赤龍帝から、「貴様は露出狂の変態か!」と、張扇（ぶつり）込みの注意を受けてしまう。

その件で自分の眷属達に、容赦無く弄られるディオドラ。

そう、彼女達の殆どは、清楚や可憐な要素は欠片も無い、所謂『弩S』だった。

今も、自分達に それぞれに用意された部屋にて控える事も無く、ディオドラの部屋を、まるでヤン〇〇の溜まり場とするかの如く、屯っていた。

「…で、どーするの?」

あの聖女ちゃん、諦めるの?」

「うう…だって、仕方無いだろ?」

アーシアさんは あの、赤龍帝の女（モノ）になったんだから…  
いくら僕でも、伝説のドラゴンに喧嘩をする様な、そんな真似はしないよ…」

「…ヘタレ王（キング） w w w。」

「五月蠅い！ウルサイ！煩い！」

もう、僕の事は放つといってくれよお!!」

眼鏡を掛けた瞳は鋭く、銀の髪はアップに纏め、その躰はリアス・グレモリーの女王（クイーン）である、姫島朱乃にも勝るとも劣らない、グラマラスな肉体を誇る少女。

このディオドラの女王（クイーン）の一言で、赤龍帝と聖女の関係を少し勘違いしているヘタレ王（キング）は、涙目で部屋の角に駆け出し、眷属達に背を向けて、体育座りしてしまった。

「あくららっ?」

「もしかして、完璧に凹んじやった?」

「…ちよつと、弄り過ぎたかしら?」

「ずずくん…」

何だか背中に、ブラックホールの様な物を背負い（イメージ）、指先で床に『の』の字を書くディオドラを見て、若干 気拙くなる眷属の少女達。

「ちよつとメイコ、何とかしなさい!」



「へ？私？何で？」

「「あんたがトドメ、刺したんでしようが！」」

「仕方無いわねえ…」

皆に責め立てられ、そう言いながらディオドラに近付くのは、先程、トドメな一言を放った女王（クイーン）。

「…ディオドラ様？」

私達が悪かったから、機嫌直して、皆で お茶飲みましょ？ね？」

「「ディオドラ様〜♪」」

「「こつちこつち〜！」」

「「美味しいよ〜？」」

「……………」

背中から優しく抱き付き、耳元で話し掛ける女王（クイーン）に続き、他の眷属達も声を掛けるが、完全に塞ぎ込んでいる彼女等の主は、只の屍の様に返事が無い。

…本当に仕方無い。最終手段ね。

フウ…♪

「ひゃい!？」

不意に、耳元に艶めかしく息を吹きかけられ、思わず声を上げてしまふディオドラに、女王（クイーン）が追撃の一言を囁く。

ぐい…

「…何時迄も そんなだと、もう おっぱい、触らせてあげないぞ？」

「（ビクウツ!）……………っ!??」

背中に胸を強く押し当てると同時に発した その言葉に反応、思わず肩を大きく飛び上がらせるディオドラ。

「うむ、私もだな！」

「ちゅーも、ダメだからね！」

「もう一緒に お風呂、入ってやんないし〜♪」

「吸わせないぞ〜？」

「挟んでもあげないからね〜♪」



眷属総出で慰めて？あげたとか。

## パーティー（仮）

冥界4日目。

◇シリユースィde◇

「しかし、アンタ達も来てたとはな…」

「はい。我々も この度、正式に…ではなく、あくまでもアザゼル殿の私設になりますが、【神の子を見張る者】に加入致しましたので。

それで今回はアザゼル殿の護衛という形で、冥界入りという訳です。」

「成る程…ね。」

ルシファアー城で催されているパーティー。

あの会合に出席した若手悪魔に元老院ろうがいの皆さんと その眷属や、その他グレモリー卿を基とする、悪魔の貴族さん達に その眷属。

更には件の和平交渉の関係で、天界からはミカエルが、【神の子を見張る者】からも、アザゼルと墮天使No. 2の、シエムハザ殿が。

そして、他の神話勢力からも、数名のビッグネームが お供を連れて、この広い…本当に無駄に広過ぎる大広間での、立食バイキング形式のパーティーに参加していた。

「…で、アンタは、その護衛とやらは、しなくても良いのか?」

「はい。今はアザゼル殿とシエムハザ殿には、ヴァーリと美猴の2人が付いていますから。」

その会場の片隅にて、片やソフトドリンク、片やワインを手にして、俺はアーサー・ペンドラゴンと話していた。

アーサーが言うには、あの和平調停の後、ヴァーリのグループは、【神の子を見張る者】に取り込まれたそうだ。

主だった理由としてアザゼル曰わく、前回みたいに、あの白龍皇ヴァーリ・ルシファアの馬鹿馬鹿しい暴走行為の類を、『親』として監視する必要を感じたとか何とか。他のメンバーも、良い迷惑だよな。

「まあ、悪い話では無かったですよ?」

アザゼル殿のポケットマネーからです、メンバー全員に きちん

と給与が支払われる事に：謂わば、きちんとした職に就けた様な物ですから。

其れ迄は日雇いのバイトや、所謂『裏』の武術大会等で、生活費を稼いでいましたからね。」

「地味にリアルだな、それ!？」

「それに、監視されているのは実質、前回色々やってくれたヴァーリだけ：みたいな物ですから。」

それは とても良い事で。 w w w

「処で、貴方は飲まないのですか？」

「俺は、学生の身だ。」

此処でアーサーが、俺に『酒は飲まないのか?』：と話を振ってきた。

学生：というのもあるが、俺は前世むかしから下戸：老酒は何かイケるが、ビールやワインなんかは本当にダメダメなんだよ。

それと…

「ついでに言えば、俺達 駒王勢がくえんは、怖い恐い生徒会長せんぱい様が、目を光らせてるのでね。：あれ、見てみ？」

「ふむ? 黒歌：と、グレモリー家の令嬢殿が正座して、ハリセンを持ったシトリー家の令嬢殿に、何やら説教されている様に見受けられますが?」

まあ、そういう事だよ。(笑)

◇小猫 side ◇

「パクパク：ん、美味しい：。」

「つですね〜♪」

「はい〜!」

「によ!」

今、私はアジア先輩、レイヴェルさん、ギヤール君、ミルたん、それとルフェイちゃんとオーちゃんと一緒になって、ケーキにアイスクリームにシュークリームにプリン：スイーツのハシゴです。

はむ：この餡蜜杏仁豆腐、最強です。

このスイーツのブースには、私達だけでなく、沢山の女性が。：と

言うか この一角、女性で占領しています。

会場にはスイーツ大好きな男性も居るでしょうが、とてもじゃないですが、近寄れる雰囲気では無いですね。

「レイヴェル様〜！」

「聖女さんも居るし〜！」

「リアス様ん処の戦車さんだ！」

「ミ〜ルた〜くん♪」

おや？ 私達に誰か、声を掛けてきました。

誰かと思えば…

「あら、お久し振りですわ♪」

「お久し振りです〜。」

「によ〜♪」

「ひいっ!? 知らない人が沢山っ?!」

おお、ライザー様の眷属の…

ええ〜つと、この前、私が吹っ飛ばした双子さんと…それと、モブ子さん1号2号3号ですね。

「誰がモブ子さんだ！ 誰が!?!」

「イルよ〜」「ネルだよ!!」

…そうでした。

ライザー様眷属の、戦車のイザベラさんと雪欄さん、それと、兵士のイルネルミラ…でしたっけ？

「何か、その一纏めした様な呼び方、止めてくれる?」

…我が儘ですね。

》》》》

「…で、赤龍帝さんて、何処に居るか知らない〜?」

はい？

ケーキを食べながら、皆さんで少しガールズトークしてる途中、双子さんがハモリながら、シリユー先輩の居場所を聞いてきました。

「ライザー様の眷属の半分は、シリユーさんのファンだによ。」

ミルたん、解説ありがとうございます。

シリユー先輩、何気にモテモテですね？

トーカーちゃんにチクリますよ？

「あ、シリューさんなら、あの隅で…」

ここでアーシア先輩が、会場の隅っこ、ルフエイちゃんのお兄さんである、アーサーさんと何やら話しているシリュー先輩を指差すと、

「よし！行くわよー！」

「「おーっ!!」」

…雪欄さん、イルちゃんネルちゃんミラちゃんは、意気揚々と沢山盛られたプリンやアイスの皿を持った儘、シリュー先輩の下へと向かって行きました。

「実は あの子達、あの時のゲームの…その…シリュー先輩のアレ…を見て…それで…です…ね…」

はい、お顔が真っ赤になってるレイヴェルさん、無理しなくても良いですよ？

もう解りましたから。

本っ当にモテモテですね！

あの、裸ドラゴン先輩わ!!

これは もう、絶対にトーカーちゃんにチクってあげるしかないしよ  
う。

「…お…おい、ちよつと、良いかな？」

「はいっ…」

そして、1人残ったイザベラさん。

「あ、あの赤龍帝殿と話している、眼鏡の殿方は…」

「あ、私の お兄ちゃんです。」

「っ…何…だどっ!!?」

イザベラさんの質問に応えたのは、ルフエイちゃん。

…つて、イザベラさん？

ガシッ…

「そ、そうか！こ、これからは私の事を、お義姉さんと呼んでも、構わんぞー！」

「は…はひ?!」

スタスタスタ：

そして、イザベラさんも：ルフェイちゃんの両肩を掴んで そう言った後：最終的にはフェニックスの皆さん、皆、シリュー先輩の方に行ってしまった。

だからギャー君？

もう、ミルたんの後ろに隠れてなくても大丈夫ですよ？

◇シリュー side ◇

「はあ~~~~~」

アーサーと色々と話していたら、あのライザー・フェニックスの眷属数名が、俺とアーサーに何やら話し掛けてきた。

尤も この双子達、普段の学園にて、俺や木場に群がる女子よりかは遥かに程度が軽い物で、握手やらサインやらスマホでの2ショット撮影やら、適当に対応していた。

：が、あのミルたんと凄絶な殴り合いを展開した仮面の戦車と、少し遅れたタイミングで やってきた、やはりミルたんを背骨を折られた十二単の僧侶は何やら鬼気迫る様な雰囲気ですアーサーに言い寄ってきて、アーサーどん引き。

終いには当人無視で勝手に『アーサー争奪戦』みたいな乱闘をやり始めたので（笑）、慌てて2人で止めたり。

そのイザベラと美南風：だったかな？の2人を何とか宥めまし、穏便に少し お話（断じてOHANASHIに非ず）した後、そろそろ他のVIPの相手をしないといけないから：と適当に理由付けて、お引き取り戴いた。

はあ~~~~~：本当に疲れた：。

なあ？アーサー？

それから、彼女達から聞いたのだが、ライザーは俺に負けたショットとやらで、只今絶賛引き籠もり中だとか。

：って、あれから既に2ヶ月経っているのだが？

尚、彼女達ライザー眷属は今回、フェニックス卿夫妻に付き添って、この会場にやって来たらしい。

》》》



「くつくつくつく…」

「ふっ…」

「ほっほっほっほ…」

「……………」

「……。」

「ぎゃーっはっはっはっ (すばかーん!) あじやばあーっ!?」

…この後、本当にVIP達が、こっちにやってきた。

墮天使総督と、そのガードである、銀髪の若い男。

神々しいローブを纏い、長い髭を生やした隻眼の老人と、その護衛であろう、グレーのスーツを着込んだ、長い銀髪の女性。

猫耳を模した様な青いニット帽を被り、白いブラウスの上にクリーム色のベスト、紺色スカートな制服に銀髪の、小猫より背が少しだけ高い少女。

その後ろには、ダークシルバーのスーツにダークブルーのカッター、ゴールドのネクタイを締めた、目つきの悪…鋭い、白髪混じりの金髪の初老の男。

先程迄のライザー眷属との遣り取りを遠目で見ていたのか、数名程顔がニヤついている…と云うか、普通に笑ってやがる。

少しだけイラついたので、一番遠慮無く大笑いしていた、この男を張り斃したとしても、俺は全然、悪くないと思う。

「ひ、非道くない?! (T「T)」

強化フラグが立ちました！



「あ痛たたた…紫いゝ龍うっ!!」

オツメー、会った早々いきなりに、人様の顔面にハリセンかますのは、人として どーよ?!」

「喧しいわっ、この孫バカが!!」

会った早々に、人の顔を見て馬鹿笑いする奴にだけは、言われたくは無いぞ!!」

涙を浮かべながら鼻を抑える、この悪人面の物言いを一蹴した俺は、アザゼルと一緒に やってきた、明らかに人の其れでは無い強大な”力”を己の内側に抑えながらも、それでも感じられる者には、ひしひしと其れを感じさせる老人と少女に挨拶。

「初めまして…」

今代の赤龍帝、神崎孜劉だ。

アースガルド主神、オーティン殿。

そして…



「「……………」」

バルコニーに佇む、3人の男女。

1人はシリユー。

1人は白髪混じりの金髪、鋭い目付きの初老の男。

今はベツロ・カンクロと名乗っている、元・蟹座（キャンサー）の黄金聖闘士デスマスク。

そして もう1人。

猫耳ニットを被った銀髪の少女。

今のデスマスクの主であり、ギリシャ、オリンポスからの代表として このルシファアー城に来訪した、戦いの女神…『この世界』のアテナである。

「…それでアテナ…殿? 話というのは?」「妾の事はアテナ…呼び捨て

で良い。」

アザゼルに連れられて、北欧神話勢の主神、オーディンと共にシリューの前に現れたアテナ。

シリューは「この2柱に挨拶、そして一通りの話を済ませた後、アテナから「個人的に話がある」と、パーティー会場の外に喚ばれていた。

「先ずは赤龍帝…カンザキシリュウ…だったか…。

ベツロ・カンクロを介しての、妾との同盟承諾、改めて感謝する。」  
ペコリ…

そうやって、御辞儀するアテナ。

「…気にする必要は無い。

貴女との同盟…有事には冥界（あくま）側を優先する、…という前提であるし。

それに、此方こそ先日、同盟を交わした矢先のコカビエルとの戦い、ベツロ…デスマスクの協力は、非常に助かった。

今回の件、頭を下げるのは、冥界側（おれたち）の方だ。」

「…それでも…だ。」

シリューの「気にするな」の言葉に対しても、再度、アテナは改めて頭を下げた。

「参ったな…」

「ああ、前回のバトルなら、マジに気にする必要は余り無いぞ？

先程も、魔王達から正式に謝礼を受け取ったからな。」

それに どうリアクションしたら良いのか、やれやれ顔なシリューに、デスマスクがフオローするかのような台詞を投げ掛ける。

「それで…本題に入ろう。」

此の場に貴方を喚んだのは、ベツロ・カンクロから聴いた話や報告資料だけでなく、実際に貴方の力を見たくなったから。

此の場で、伝説のドラゴンの力を妾に見せて貰えないか？」

「はい。」

いきなりのアテナの「力を見せろ」の台詞に、目を点にするシ

リユー。

気付けばデスマスクの仕業なのか、バルコニーには認識阻害の結界が張られている。

「まさか貴女は、この場でデスマスクと戦り合え…とでも言う心算なのか?」

「いや…。噂に聞く、貴方に宿っている神滅具を見せて貰えば、それで良い。」

自分の眷属との模擬戦…嘗ての十二宮、そして黄泉比良坂での再戦を強要されると思えば、単に【赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）】を見たら満足だと言うアテナ。

「ふっ…俺は別に、バトつても構わねーんだけどな?」  
「……………」

【赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）!!】  
（Boost!!）

やや黒く、不敵な微笑を浮かべるデスマスクを余所に、シリユーは自身の神器を左腕に具現化させ、更には

（Welsh Dragon over booster!!）  
Balance breaker…  
Boosted gear・Scale Mail!!）

その神器を禁手化、龍を象った赤い全身鎧を纏い、  
「覇あああああつ!!」

身体全身から、魔力、そして小宇宙（コスモ）を漲らせる。

「ひゅー♪」

迸る その力に、思わず感嘆の意味を込めた口笛を鳴らすデスマスク。

「…脱ぐなよ?」

「脱ぐかつ!」

貴様は俺の事を、一体何だと思っているr

「露出狂おっぱいドラゴンwww」

「…デスマスク、後で少し話そうか。」

そして、既知と成りつつある様式美（おやくそく）を、真剣に止め

に入ったり。

.....チツ.....

尚、その遣り取りの際に誰にも聞き取れない程の、小さな舌打ちをした少女が居たのは、別の話である。

「...でも、それで終わりじゃねえ。」

その先に、もう1つ、在るんだろ？」

「.....」

赤龍帝の鎧を纏ったシリュー。

アテナのリクエストである、己に宿る、赤き龍帝の”力”を見せたシリューに、デスマスクの更なる一言。

「本当に参ったね...」

アザゼルからの情報だと云う、本来ならば在り得ない筈の、禁手化（バランス・ブレイク）の更に一歩先。

それを示してみろと言わんばかりのデスマスク、そして夢見る幼子の様に瞳を輝かせ、じいー...っと期待大な表情を浮かべているアテナに苦笑しながら、シリューは更に小宇宙（コスモ）を高める。

「...紅珠黄金龍（ルビーゴールドドライブ）!!」

この掛け声と共に、赤龍帝の鎧は その色を赤から より鮮やかな紅へ、額には龍の頭を、両肩には龍の爪を思わせる造形の装飾が、左腕には円盾が加わり、そして全身からは眩い黄金の光を放つ。

「おおおっ!!」

「...凄い。」

神器の『核』である左手甲の宝珠に、小宇宙（コスモ）を高めた黄金聖闘士としての血を与えた事により、更なる進化を遂げた神滅具【赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）】。

その話に聞いた、現状の最終形態を実際に目の当たりにしたオリンポス勢の2人は、1人はストレートに大きく、そして もう1人は静かに、それぞれが驚きと感心のリアクション。

「これで、満足かい？」









り、そしてデスマスクの4人が揃って、如何にも「やつちまったなあ  
…」な顔をしている。

恐らくは あの乳繰り総督辺りが、ハラメントな発言や行為に及  
んだのだろう。

後でヴァーリに何が起きたのか、話を聞いてみよう。

『おお〜い！☆若い悪魔（ひと）達、隣の部屋に、集合だよ☆!!』  
「「「「:??」」」」

そして更に そのO☆H☆A☆N☆A☆S☆H☆I☆の最中、今度は魔王少  
女が拡声器を使って、若手悪魔達に呼び掛けてきた。

「さあ☆、シリニューちゃんも、だよ☆！

「こつちこつち！☆」

お、俺も？ 一体、何事だ!?

## 魔王遊戯

どん!!

追い詰められたかの様に、壁を背にするシーグヴァイラ・アガレス。そこに迫り寄るはシリユウ。

殆ど0（ゼロ）距離となるまで間合いを詰めると逃げ道を塞ぐかのように、彼女の右肩の上、顔の真横の壁に勢い良く手を突き、派手な音を打ち鳴らした。

「……………」

そして2人は その後10数秒、無言で見つめ合う。

「はい☆、15秒経過☆」

「ふう〜…思ってた以上に、これは照れるもんだな…」

「…ドキドキしました。」

そしてセラフオルーの一言で、両者は その状態を解き、

「[[[[ひゅーひゅー♪]]]]」

「[[[[ぴーぴー♪]]]]」

同時に煽り囃すかの様な、多人数の口笛の合奏が、部屋に鳴り渡る。

「じゃ、次の”魔王様”は誰かなく☆?」

「…俺です。」

その沸きが静まった後、魔王少女の呼び掛けに名乗りを上げたのは、サイラオーグ・バアルである。

パーティー会場に居た若い世代の者達は、魔王セラフオルー・レヴィアタンの一言で会場隣の大広間に集結。

この魔王少女の『若手同士、もっと親睦を深めよう☆!』という考えの基、冥界の若者世代にて それなりに浸透している、”魔王様ゲーム”なる遊戯に興じていた。

最初は殆どの者達が『魔王様の誘いだから仕方無く』な考えで参加していたのだが、気付けば その場の殆どがノリノリとなっていた。

【魔王様ゲームの基本ルール】

複数名の男女が集まり、各々に番号を振り当てると、基本は1番と  
なった者から順番に”魔王様”となり、「甲が乙に〇〇〇〇をする」  
等と宣言した後、ダイスを2回振る。

そしてダイスの示した数字に予め振り当てられていた者達が、その  
魔王様の命令を実行する…。

※補足

・命令内容の制限は魔王様、或いは予め決めていたゲームマスター  
の裁量に依る。

・ダイスが同じ数字を出した場合、振り直し。

・出た数字が、その時の魔王様であった場合、甲乙関係無く、魔王  
様本人も その命令に従わなくてはならない。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

セラフォル様の呼び掛けで、始まったこの魔王様ゲーム。

この大広間に、若手悪魔と その眷属達、若い悪魔(ひと)達等、総  
勢約100名が集まっています。

恐らくはセラフォル様、此の場の思い付きではなく、最初から  
このゲームを企画していた様で、殆ど球状な…100面のダイスを用  
意していました。

参考迄に、サイラオーグ様の前の魔王様(モブさんです)が出した  
御題は『壁どん』。

結果それは、シリユウ先輩とシーグヴァイラ様に当たったのでし  
た。

「はわわ…見ていてドキドキしました…」

「…てゆうかシリユウ先輩、やり慣れてる感が半端ないのですが？

アレは普段から、誰かさんに やっているとしたかと思えません。」

「…ですわね。これは新学期、トーカさんに問い詰める必要が有りますわ！

…温泉旅行の報告と一緒に!!」

はい。レイヴェルさんの言う通り、これは是非とも、温泉旅行の件  
共々に、トーカちゃんに聞き出す必要が有ります。

これは家族に対するアライ協力してあげるのですから、当然の権









「うう…違う、何かが違うんですけど…」

「あわわわ…何だか すいませんん〜!!」

「……………」

話に乗っていた銀髪の美女が涙目になり、はわはわしてるオカ研（ウチ）の金髪ボブカットの男の娘を、お姫様抱っこをしていた。



「おーい、セラフォル〜?」

そろそろパーティー締めるから、皆と こっち、来てくれるかい〜?」

恐らくは普通に使用人を寄越しても、絶対に言う事を聞いてくれな  
いと予測したのか、魔王であるサーゼクスが この”魔王様ゲーム”  
の会場に皆を呼びにやってきた。

「え〜〜〜〜〜つ☆?!」

「いや、え〜☆?じゃ、ないから!」

ほら、皆も!!」

ぞろぞろぞろぞろぞろぞろぞろ…

本ま物の魔王様に謂われたのでは仕方在るまいとばかり、若手達は  
ゲームを終え、パーティー会場である隣の部屋に集団移動。



その後、サーゼクスの締めにより、パーティーは終了。

そして同時に、若手達によるレーティングゲームの第1回戦の組み  
合わせと、その日程が発表されたのだった。

※※若手悪魔レーティングゲーム日程※※

8月27日 PM0:00〜

サイラオーグ・バアル

vs

ゼファードル・グラシヤラボラス

8月28日 PM0:00〜

リアス・グレモリー



v s

ディオドラ・アスタロト

8月29日 PM 0:00

ソーナ・シトリ

v s

シーグヴァイラ・アガレス



だからこそ、「やる気の無い者は去れ」と、先に言ってみたが、とりあえずは本当にそれで立ち去る者は、居なかった。

…が、

「一応、君達の能力等は、この資料（レポート）で把握した心算だ。

それを踏まえた、特訓メニューを作らせて貰った。」

「「「……………!!?」」」

そう言つて、ゼファードルとその眷属達に、プログラムを書き込んだ用紙を渡すと、此奴等の顔付きが豹変。

「ふっふふ…巫山戯てるのか？これわ？」

「何なんスカ？この、悪魔でさえも思い浮かばない様な、鬼畜プログラムわ?!」

「「「無ー理！無理無理無理無理無理 絶対無ー理!!」」」

…鬼畜とは失礼な。

単純に、人間と悪魔の体の頑丈さの違いを考慮した上で、俺が前世（いぜん）、五老峰にて修行した内容を少し…ほんの少しだけハードル上げたけなのに。

恐らくはデスマスクも、このゼファードルの今回の対戦相手であるサイラオーグ達に、同レベルかそれ以上の、コイツ等の言う鬼畜メニューを施すであろうと云うのに。

この前の乱闘から察するに、現状で間違い無く劣っていると云うのに…

良いのか？ 此の儘じゃ絶対に勝てないぞ？

「まじで無理ですって！」

「ゲームの前に、潰れるっスよ!!」

「大体 俺は、其処のメイド服から昨日 受けたダメージが、まだ抜けてないんだからな!!」

「もしかして この前、若が喧嘩売ってきたの、まだ根に持っているんですか?!」

あゝ、煩い。

やつてもないのに、無理とか決めつけるんじゃない。

まあ、ミルさんの肉体言語のダメージが消えてないと云うのは、解らんでもないが…

まあ、とりあえず…

燃えろ！我が小宇宙（コスモ）よ！！

「Brats—Don't—Get—Flurried!!」

バシィッ!!

「「うっぎやあぁーっ?!?!」」

聖域（サンクチュアリ）にて代々、教皇のみに伝えられる奥義でこの、狼狽えている小僧共を天高く迄吹き飛ばし、黙らせる事にした。因みに俺も この技は、過去に一度だけ、シオン教皇から喰らった事がある。

仮に「もう二度と貰いたくない技」のランク付けをするなら文句無く、ぶっちぎりでトップ1に入る荒技だ。閑話休題。

ドシャアッ!!

「「ぐぺらあっ?!?!」」

そして吹っ飛ばされたゼファードル達は、万有引力に逆らう事無く、地面に（顔面から垂直に）落下激突。

「「うぐぐぐ…」」

「「「ぺぺぺ…」」」

「ほら、さっさと立てー！」

兎に角 真剣に勝ちたいなら、この最低ラインのメニュー程度はこなさないと、話にならないぞ?」

のたうち回るゼファードル達に、話し掛ける俺。

「これが最低ラインかよ?!」

当然。こんなのは謂わば、前菜だ。

「それから今後、俺に対しての返事は、『はい』か『是的』か『Na』以外は認めんからな。」

「「「暴君だー!!」」」

「ほう?今一度、さっスキの技を貰いたいのか?」

「うう…お、お前等、腕立て1000回100セット、始めっぞ、おらあ!! (T—T)」

「「「「「つす！（TOT）いくち！いくち！すわあ〜ん：」「」」」」



「…まあ、大体、こんな感じだな。」

それと…、くだい様だが匙元士郎、このチームの要は、お前だ。

お前が自身の中に宿す黒邪龍（ヴリトラ）をどれだけ活かせるか…  
それで、このチームの戦力は、大きく変わるからな。

ゲーム迄の1ヶ月で、禁手化（バランス・ブレイク）に至れるか…  
それが鍵だな。」

「…はい！」

シリユウがゼファードル達を指導している頃、アザゼルは生徒会…  
即ちソーナ・シトリーと其の眷属達に、各自の訓練内容をレクチャー  
していた。

「それから何人かは、この訓練の成果次第で、俺の開発した特製・人工  
神器を渡そうと思う。」

これはサーゼクス達から、きちんと許可を得てるから、余計な心配  
は、しなくても良いぞ？」

「何？アザゼル、まさか、あの、【閃光と暗黒の龍絶剣（ブレイザー・  
シャイニング・オア・ダークネス・ブレード）】を遂に完成させたのか  
？」

「むっ殺すぞ、テメー!!」

そこに話し掛けてきたのはシリユウ。

それは丁度、ゼファードル達の訓練を粗方見た後、今後のトレーニ  
ング内容を話し合おうかと、アザゼルの下に足を運んだタイミング  
だった。

「と、処で…オメー、『アレ』について、どれくらい聞いた？」

若干引き攣り顔のアザゼルが、先程シリユウが口にした【閃光と暗  
（…以下略）】について問い質すと、

「多分、全部？」

「…因みに、誰から？セラフオルーか？」

「サーゼクスさん、グレイフィアさん、セラフオルー、ミカエル…それ  
から、シエムハザ氏。」

「あ…アイツ等あ…orz」

当人からすれば、最悪とも云える応えが返ってきた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「…以上だ。」

では各々、渡したメニューに従い、訓練に入れ。」

「「「はいー！」」」によ！」

「はっはいいいー！」「…はいい…」

生徒会…支取先輩達の次は、我等がオカ研、リアス部長達へ指示を出しているアザゼル・先・生（笑）。

俺は昨日の夜、この墮天使総督殿と、3人の若き王（キング）と其の眷属、全員分のトレーニングメニューを作っていた。

リアス部長は攻防等、例えばゲームみたいに そのステータスを数字で表すとしたら、その数値・だ・け・ならば、既に戦力として申し分無い。

問題は、王（キング）でありながら、真っ先に敵に特攻（ぶっこみ）仕掛ける脳筋っぷり。

この頭に届くべき養分が、全てバストに行き渡ってしまっている駄肉姫には、過去のレーティングゲームの記録等を参考として、戦略術を鍛えて貰う事に。

たればでは有るが、部長の火力に、支取先輩の頭脳がミックスされたら、本当に最強だと思ふ。

ん。支取先輩は、部長と真逆で、多少なり胸に届けるべき栄養分でさえ、脳味噌に取り込んでしまったんだろうな。

ミルたんとレイヴェルは戦闘思考に至っては、自分の能力と併せて、その駒の特製をほぼ理解しており、己に合った戦闘スタイルを既に確立させている。

だから部長とは逆に、少しアドバイスした後は、所謂ステータスの数値をアップさせるのをメインの目的とした、訓練メニューを作成。

木場は、神器の禁手化状態である、聖魔剣を十全に使いこなすと云うテーマがある。

その辺りも含め、サーゼクスさんの騎士であり、自身の剣の師匠で

あると云う人物に、鍛え直して貰うとか。

しかし、その剣の師匠つてのが、まさか『あの人』だったとは…  
サイン、貰えないだろうか？

小猫は夏休み前から変わらさず引き続き、黒歌から仙術の手解きを受けける方向。

ギヤスパーは…とりあえずは引き籠もりの対人恐怖症を治す処から、始める事に。

そして最後…アザゼルの指示に、元気良くでもなく、テンパーでもなく、只単に、活気の無い返事をした朱乃先輩。

朱乃先輩の訓練のテーマは、小猫同様に、自分の中に流れる、『血(チカラ)』から逃げず、それを受け入れる事。

アザゼルが普段、ぶっ放している『雷』でなく、それに『光』を加えた『雷光』の修得を奨める。

確かに『光』を組み合わせた攻撃なら、木場の聖魔剣と並び、対『悪魔』…少なくともレーティングゲームでは、大きなアドバンテージと成り得る。

リアス・グレモリーのチームは現状、他の若手チームと比べても、1歩2歩、前に抜き出る事になるだろう。

「…そんな力に頼らなくとも!!」

それに少なくとも、墮天使の貴方にだけは、言われたくない!

しかし、朱乃先輩は、それを受け入れようとせず、

バッ…

右手、人差し指を高々と空に向けると、

「…雷光よおっ!!」

カッ…ドツゴオオooooooooooooッン!!

「!!?」

普段、戦闘等で ぶっ放している『雷』でなく、正しく それに『光』を乗せた、『雷光』を俺達の目の前に落とし、巨大なクレーターを作り上げた。

「この程度、やろうと思えば!」





「そうだ。」

アザゼル曰わく、アシアの治癒能力自体は完成されていると言っても過言では無いそうだが、それを行使するには、その対象：負傷者の下に赴く必要があり、しかも回復中は無防備になってしまうと云う問題が有る：らしい。

成る程：言われてみれば、その通りだな。

「だから俺も、最初は範囲回復…」

本人を中心に、回復の力をサークル状に展開して離れた相手、しかもその範囲内なら、複数人同時回復も可能となる。

まあ、卓上の理論だがな。」

ベホ○ラー、或いは○者の石だな。

「だが、それも問題が有る。」

「範囲回復は、敵味方の区別が利かない：か。」

「ああ。その通りだ。」

しかもアシアは性格的に、間違い無く そうなるだろうな。

仮に戦場で負傷者を認識したら、そいつが敵であろうが、回復してあげたい等と心の奥では思ってしまうだろうからな。

只でさえSLGのマップ兵器な如く、敵味方を完璧に判別するのも難しい技術なのに：な。」

「確かに敵も一緒に回復して、振り出しに戻る：じゃ、意味が無いか。」

「そーゆーこった。」

言っちゃあ何だが、優し過ぎるんだよ。」

「……………」

天使まじ天使なアシアの優しさが裏目とは、皮肉だな。

「…だから、飛おばあすうう〜！…ですか？」

……………。

俺の漆屋龍珠のアクションを取りながら、アシアが質問。

「…まあ、そんなイメージだ。」

飛び道具だな、飛び道具。

多少は回復効果は落ちるかも知れんが、それでも遠距離から回復可能となれば、それだけで戦略に幅が出来る。









「てゆうか、字が何か違ってなかったですか?!

「……無一理! 無理無理無理無理無理無理 絶対無一理!!」  
非難囂々なゼファードル達。

「……………」

「……ひいいつ?」

そんな彼等にシリユーは、無言で殺気を込めた微笑みを向けて黙らせる。

バサア…

着ていた中国衣の上着を脱ぎ捨てると滝の下に立ち、

「…廬山! 昇龍覇………あ!!!」

ドガガアアアアツ!!!

滝に向けて、小宇宙（コスモ）を燃やした拳でのアッパーカット一閃。

瞬間、その何トンもの落ちてくる水は逆流し、正しく龍を象ったかのような渦を巻く水の柱となり、空に向かって消えて往く。

そして その滝の水の裏に在る、岩壁が露わになった。

「……」。O。L!!」

その光景に、声を出す事無く、驚愕するゼファードル達。

ザババアアアアアアツ!!!

「……!!」

そして やがて水龍となって空の彼方に消えた大量の水は、滝壺に落ち還る。

必然的瞬間的に落ちる水の量が約2倍となり、その凄まじい水飛沫により、ずぶ濡れとなるゼファードル達。

「…さて、それでは改めて、滝業3時間、張り切って逝ってみよう!!」

「……チツクショオーオツ!! (TOT)」

凄く悪（よ）い笑顔のシリユーに、あの昇龍覇（アッパー）を見せ付けられたゼファードル達は逆らえる筈も無く、各々が泣きながら上着を脱ぎ捨ては、滝の中に足を踏み入れて逝く。

当然、その時間が増えている事には全員が気付いているが、それに突っ込める勇者も、誰一人として居なかった。



「…そうか。くっくくくくく…」

シリユーが姿を消して数分、自分の下僕の言葉に、会心の笑みをゼファードルは浮かべると、

「「「「ひゃあつはあぁ〜っつあい!!」「「「「」

「けっ!!誰が、ん〜なキツイトレーニングなんか、するかつつの!」

「「「「でっすよね〜!」「「「」

「大体、この前は不意打ち喰っただけで、あんな魔法力なんか欠片しか持ち合わせてない雑魚なんか、少しマジになっただけで、瞬殺だつての!!」

「「「「そーだそーだ!!」「「「」

「ついでに、あの瓶底眼鏡や駄肉や頭デツカチの偽乳女や糸目のヘタレ小僧も、俺の敵じゃ無つての!!」

「ちよ…若…それ、言い過ぎ…www」

「…つてか、偽乳つて…」

「ああん?お前等、気付いてないのか?

あのソーナのアレ、どー見ても、”詰め物”ぢやねーか!!www」

「ま…まぢつすか…」

眷属達と、好き勝手言い始めた。

「…ほう?」

「「「「!?!?!」「「「「」

しかし!世の中には様式美(おやくそく)なる物が在る。

「……………」

不意に後方から聞こえた声。

その方向に、恐る恐るゼファードルが首を回して その声の主を確認すれば、

「…成る程、貴様等の心根は、充〜分に、良く解つた。」

「「「「の、ノオオオオオ〜っ〜っ〜っ!!!」「。〇。

「「「「」其処には紛れも無く、赤龍帝(いま、いちばんあいたくないやつ)が、最高に黒(あかる)い笑顔で、立っていたのだった。

「ななな…何で…?」

「気配も魔力も、全然だったのに…」









さん紹介。

・長身で頭頂部に触角みたいな癖っ毛のある…認めたくはないが、爽やか系のイケメン君。

・そのイケメン君に釣り合う様に背の高い、凛とした顔な女子。

多分、このイケメン君と付き合っている。

・チャラ男。

・以前、トーカの弟の全快祝いにも来ていた、ショートカットなスポーツ系女子。

アーシアを見て、やたらと話し掛けてきたチャラ男に、ドロップキックやらハイキックやら炸裂させてシバいてたけど、そういう技はミニスカートを履いている時は、控えた方が好いと思うよ、縞々さん？…な発言は、俺も一緒にシバかれる映像（ビジョン）が脳裏に浮かんだので、止めておいた。

・高そうなプロ仕様なカメラを持った、短髪の男。

…この顔、何となく、殴りたくなる衝動に駆られるのは、何故だろうか？

ああ、身に纏う雰囲気、松田と同じだからだな。

・以前、ミカエルとのOHANASHIが原因で、怒（おこ）になったアーシアを宥める為に甘味屋に連れて行った際、店内で鉢合わせしたトーカ達にスーツを御馳走した時に一緒に居た、小柄で緑髪の子インテ女子。

・小柄。水色の髪を後ろ側で結っている、ボーイッシュな服装な子インテ女子。

緑髪のコと、何か雰囲気は…

もしかして貴女達、百合百合さんですか？

…後で、トーカに聞いてみるか…。

…以上、7名。

これに、俺、アーシア、トーカ、ユキコを加えた11人の団体さん…ん、何気に大人数だな。

因みに彼等彼女等、トーカやユキコの中学クラスメイトだと云う事は、中高一貫の学校に通ってたと云う事だが、トーカ同様にやはり







イケメン君が解説してくれた。

”ぬるぬる曲がる”：そんな形容が相応しい変化球でスギノクン、2者連続で、瓦工の打者を三振に仕留めたよ。

「へへっ…バッチリ収めてやったぜ。」

一眼レフを構えた松田2号が呟いた。

そうだ。

貴様の そのカメラは、彼の姿を撮る為に持参したのだから？

先程も警告はしたが、次、トーカ、ユキコ、アーシアの胸元や脚元にレンズを向けた時は、それ、貴様の頭と共に破壊してやるからな。



「ジーーーーーイザス!!」

舐めて掛かるな！あの球、目の前だと更に想像以上に曲がるぞ！

「了解すすよ、本多クン。」

三球三振に倒れた瓦工部員がベンチに戻る途中、ネクストサークルから打席に向かう打者と擦れ違い様に助言。

カアーーーーーイーンツ!!

「!!!!!!?!!!!!!」

その助言に従ってか、次のバッターは杉野の変化球との勝負は避け、二球目にきたストレートをジャストミートでフルスイング、そのボールはセンター前へ。

更に次のバッターがタイムリーを打つも、その次のバッターを杉野は内野ゴロに仕留め、5回表が終わった。



「7点差！

兎に角 塁に出るしか、打つしか無いぞ！

まだ満塁ホームラン2回で逆転出来る！」

「!!!!!!はいっ!!!!!!」

二子玉川の監督の、この やや無茶振りな激に、やはり まだ試合を棄てていない選手達が応え、この回のトップバッターが、打席に向かって行く。



|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
|   |   | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 |
| 瓦 | 5 | 2 | 2 | 3 | 2 | 0 | 4 | 0 | 1 | 1 |
| 二 | 2 | 1 | 1 | 3 | 1 | 2 | 0 | 0 | 2 | 1 |
|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   | 2 |

「杉野…負けちゃったね…」

「ん…」

緑色の髪の少女と、水色の髪の“少年”が、俯いて呟いた。

試合終了。

ユキコ達が応援していた、嘗てのクラスメート…ユキコの恋人が在籍する、二子玉川学園高校は、初戦敗退となった。

尚、この高校に勝利した瓦崎工業高校は、この次の試合以降も猛打を爆発させ、ベスト4迄勝ち進むのだが、それは別の話。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「……………」

帰りの新幹線。

応援していたチームが襪負け…になるのかな？…したからか、皆、表情が暗く、硬い。

そもそも二桁得点取っていて敗れるって、かなり珍しい（両チーム二桁得点というのが、かなり珍しい）パターンだよな。

「か…神崎さん、元氣…出して？」

「ん。ありがとう…。でも、私は大丈夫だから。」

ユキコの友人の、背の高い女の子…片岡さん…だったかな？…の氣遣いも、自分は平気だと、振る舞うユキコ。

「で、でもさ、杉野、先発ピッチャーと比べたら、よく抑えてたじゃん！

仮にアイツが最初から出ていたと仮定して、5回からの点の入りを見れば単純に計算してみると…」

ここでフォローする様に、チャラ男が話し出した。

只のチャラ男と思っていたけど、良い心配り、出来ているじゃない

か。

何気にユキコ、友人に恵まれているな。

「あ…6対5…」

…って、結局スギノクン、負けてるじゃないか!!?

空気が微妙になつたぞ!?

「お前…後でめる!」

「ひいっ!?!」

チャラ男君、後でめられるの決定。w w w

「…で、神崎先輩？」

杉野は 結局、神崎先輩から見て、どうだったんですか?」

そして このタイミングで、今度は緑髪のツインテ少女が話し掛け  
てきた。

「ん、努力家と云うのは何えるが、やはり…」

やはり、直接会ってみて話さないと、何とも言えないな。

それよりも…

「ねえキミ、この前プリン奢つた時以前にも、何処かで会つた事無い?

いや、別にナンパとかじゃないよ?

俺にはトーカーが居るし。」

「え、えっ!?!…いや、気のせいじゃないですか?アハ…アハハハ…」

そ、そうか?

いや、何だか見覚えのある顔なんだよな?

ん、思い出せない…

「杉野も、凹んでいるだろうな?」

「そうだね…」

でも、大丈夫…杉野君は私が直接、慰めてあげる…から…!!」

「…おっ…おお…」

ユキコの言葉に、女子達が何かを察したのか、顔を赤くして、少し  
だけ上擦った歓声を上げるが、

「…ちよつと待てい!!」

それで何も察せない程、この劉兄さんは、鈍感じゃないぞ!!

そうゆう【ぴー!!】な行為は まだ、断じて この俺が認め…おい、今「このイトコンめ!!」…とか思ったヤツ、前に出ろ。

「劉…兄…さ…ん?」  
ん?

ここでユキコが、静かに微笑みながら話してきた。

「劉兄さんは、そういうの、言える権利って、無いと思うの。」

今月の終わり、トーカさんと温泉旅行に、行く…ん…だ…よ…ね…2人つきりです?」

「…な、何だつてーっ!!」

この発言に、数名が喰い憑き、大声を上げて驚く。

「ややや…矢田さん、本当なの?」

「矢田つち、ヤツるう〜!」

「いや…だからね…」

そして、トーカに群がる女子達。

「ここら、車輛内では静かにしないと…っとか言っている場合でわない!!」

「…このタイミングで それを言うのか? お前わ!!」

「…そうよ、有希子お…」

動揺しまくりな俺とトーカ。

「…ぶふああっ!!」

「おい、しつかりしろ!」

そして何を妄想したのか、松田弟（※違います）が いきなり鼻血を出してダウンした。

…コイツは何を脳内に妄想（イメージ）したのか、後で きつちりOHANASHIして問い詰める必要性があるな。

「兎に角、私と杉野君の事は、下手な干渉は しないで欲しいの…」

解るでしょ? 劉…兄さん?」

そして笑顔で、俺に話し掛けるユキコ。

それは正に、有“鬼”子さんの、殺気を孕んだ黒い笑み。

イカン…小さい頃から、この笑顔の時は、逆らわぬが吉なのが、様式美（おやくそく）となっている。

「「「」……………」」」」」

それは既に周知なのか、元クラスメイトさん達も多少、引いていらっしやる。

「うう…分かった…まあ、アレだ…節度を持ってだな…お互いに…」

「はい。」

結局は、無理矢理に丸く納められてしまった。

クツソーツ！

今度 月末に冥界に行った時、小猫にチクってやる!!

新学期早々、事情聴取受けやがれ！



「えと…友人君、この人、従兄の劉兄さん…孜劉さんで…」

「あ…ああ、あの…」

「……………」

トモヒトクン？ユキコ お前、ついこの前迄『杉野君』呼びだったよな？

「あ…どうも…初めまして…」

どうやら このスギノクンも、俺の事はユキコから、何かしら聞かされてはいた様で、ぎこちない挨拶をしてきた。

「ゆ…有希子さんと、お付き合いさせて貰っている、杉野と言います。」

「…知ってるよ。」

この前は、残念だったな。」

「は…はい、どうも…」

俺の事をユキコから どの様に聞いているのか、かなり緊張しているスギノクン。

そして この時点で、ユキコに彼氏が居るのを知ったのか、反町草薙が何だかorzしているが、それは知った事では無い。

「付き合っている…ねえ…?」

「?!」

仮に この世界がギャグマンガのそれならば、それこそ背中からリアス部長達の様な、羽を生やした様な、若干、殺気を込めた笑顔で微笑む俺。

「は、はいっ!!…年相応に、健全な…」

ほう？スギノクン、もしかして この俺の今の殺気を感じ取れたのか？

「……………!？」

…って、ユキコも？

基本的、『殺気』てのは、ある程度の力量（レベル）な者でないと、素人では微塵も感じ取れない代物なのだが？

「……………」

『健全に…』…その言葉に何か陰を感じた俺は、更に少し殺気を強め、睨むでも微笑むでもなく、無言無表情でスギノクンの目を確と刮目、







「もしかして、俺が最後ですか？」

「いや、オーディン殿が、まだ来ていない。」

城の使用人に案内された部屋、其処には既に、サーゼクスさん、セラフォル、ミカエル、アザゼル：そしてデスマスクが居た。

そしてサーゼクスさんやミカエル、アザゼルにはグレイファイアさんをはじめ、護衛がの者がそれぞれ就いている。

その部屋の中央の円卓、2つ空いた席の内の1つに、俺は着いた。

「ん？デスマスク？」

アテナは今日は、来てないのか？」

「応。今回の話し合い、元々ギリシャ勢は参加する予定じゃなかったからな。」

俺は偶々、お前に頼まれて小僧共を鍛える為に冥界に居た処を、其方の魔王さんに誘われたんだよ。」

「誘ったんだよ☆！」

そして とりあえず、隣に座っていた この男や魔王少女と話している、

「おおい、神崎くい？」

墮天使総督アザゼルが、手招きしながら こつちを呼んできた。

「どーも。」

「……………」

今回の墮天使総督の付き添いなのか、髭を蓄え武人然とした、厳つい顔の墮天使に一声掛けた後、

「まあ、オメーは途中で、人間界に戻ったからなく？」

実質、俺1人で あの餓鬼んちよ共を、見て回ったからなく？」

「言うなよ…仕方無いだろ。」

それに俺も、エックスの眼を通して、細目にチェックは入っていたぞ？」

アザゼルの脇に付き、自分達が修行担当した若手達の成長具合を話す。

「ま、お前は、人生初めての大勝負に出たんだからな！」

確かに仕方無い!!がっはっはっはっは！」

バンバン!

そう言って笑いながら、俺の背中を叩くアザゼル。…って、痛いんだよ!

「…で、どーだったんだ?

あの、乳のデツカい、ポニーテールの姉ちゃんとの温泉旅行、きつちりと決められたのか?

”男”に成れたか? ん?」

お、大声で言うな!!

「はわわわ…若い男女が温泉…混浴? お泊まりいい?!

」き、キミー! 気を確かに持って!!」

ほら見ろ! またミカエルの付き添いの秘書天使さん、何を妄想したのか、翼が白黒に点滅して、墮天使しかかかってるぞ?!

…って、殺気!!?

「せ…赤龍帝殿…その、一緒に温泉に行つたと云う、乳の大きい、ポニーテールの娘とは一体、だ、誰の事なのかな?」

…はい?

見れば、アザゼルの護衛として出張っていた墮天使の男が、凄まじい程の殺気を身体全身から迸らせ、俺に向けて放っている。

「ちよ…待…バラキエル?

お前、ちよつと勘違いしてるからな?」

何が起きたのか悟つたアザゼルが、この墮天使幹部…バラキエルを必死に宥めようとするが、

「ん…? お…紫龍? 胸の大つきいポニテってーと、あの巫女さんか?」

あれ、お前の彼女だったんか?」

「ええーっ!!? そ、そーなの?」

シリユーちゃん、朱乃ちゃんと付き合つてて、もう そーゆー関係になつてたの?」

違ーーーーーっう!!

しかし、このデスマスクとセラフォルの台詞で、この墮天使…バラキエルが何を思ったのか漸く理解。

「ええ〜い！」

3 大勢力の和平が崩れようが構わん！

この男だけは絶対に赦さん!!

この儂が、この儂があっ!!」

「いや…だ〜か〜ら〜! 落っ着けって!」

「そりや、娘と温泉に行っただって男が目の前に現れたら、普通はキレるよな。」

俺だって、孫娘に そんな男が現れたら、迷う事無く、積尸気だぜ。」

黙れ孫バカ!!

カチャ…

「いや〜、遅れてしまっって申し訳無い。

少し身内で、ゴタゴタが…っって…

ん? お取り込み中かのう?」

…この後、親父(ギャグ)補正が憑いて攻撃力が大幅アップした、朱乃先輩の父親である、墮天使幹部・バラキエルの誤解を解くのに結構な時間を費やした。

悪神ロキ！北欧のトリックスター！！

「珍しいな爺さん？今日は1人なのか？」

「ほえ？」

それはリアス達、次代の若手悪魔によるレーティングゲームを翌日に控えての、3大勢力首脳+αの話し合いの会場。

墮天使総督アザゼルの護衛として出向いていた、[神の子を見張る者(グリゴリ)]の幹部の1人：朱乃の父親でもあるバラキエルによる、愉快的(シリユーからすれば洒落にならない)勘違いからなる漸く騒動も収まり、改めて出席予定の者が全員席に着いた時、アザゼルが護衛も連れずに1人で来訪したオーデインに投げ掛けた台詞。

「ん、ん~~~~~?」

その言葉に、長い髭を撫でながら、何かを思い出そうとする様に、天井を見上げる北欧の最高神。

ぽんっ！

「お~！ロスヴァイセ、連れて来るのを忘れおったわい。ほっほっほっほ…」

ガツタガタガタタっ!!!

掌を叩きながらの その台詞に、その場の全員がコケた。

「…い、今頃ロスヴァイセさん、ワルハラの入りに口で、ぽつんと1人、『うわああ〜あん!置いてかれた〜!』とか、大泣きしてるんじゃないのか?」



∴その頃の北欧はアースガルド、ヴァルハラ宮では、

「うわあああああああん!」

オーデイン様に、置いていかれたあ〜!!

護衛を連れずに1人で行くつて、どんだけボケてるんですかあ〜?

オーデイン様あ〜~~~~~っ!!」

その正門前で、スーツケースを両脇に置いた長い銀髪の美少女が1人、泣き崩れていたと云ふ。

シリユー、正解。



「…以上が我が主、アテナがゼウスより伝えられたオリンポスサイドの見解…だ、そうだ。」

「…解りました。」

ベツロ殿…お座り下さい。」

3大勢力+αの会談。

先ずは半ば飛び入りの形で、オリンポスの代表的な位置で参加したベツロ・カンクロ…デスマスクが、アテナより聞いた、現状のオリンポスの見解を話した。

オリンポスからすれば、天使・墮天使・悪魔の争いは、所詮は『聖書』という枠の中での内輪揉めとしか見ていなかった様で、今の処は互いに不可侵不干涉のスタンスを取りたいとの事。

但し、アテナ個人（個神）は、赤龍帝であるシリユーにのみ、互いに有事には協力し合う姿勢でいたいとか。

「…では、次は墮天使総督、アザゼル…」

「あく、サーゼクスには既に話してるが、実は昨日つてか今日な…」  
ルシファア城で行われている会談故、必然的に議長役となっているサーゼクスの呼び掛けに、アザゼルが凄く、ぼつの悪そうな顔で話し出した。

その内容は、以前、3大勢力和平に不満を抱き、「神の子を見張る者（グリゴリ）」を抜けた者達が、遂に明から様に敵対と受け取れる行動を起こしたという事。

今迄 敵対者、或いは反逆者として捕らえていた者達の收容施設を本日の深夜に強襲、その者達を解放、または懐柔したとか

そして その中には、あのフリード・セルデンも入っているらしい。  
流星に『地獄の最下層（コキユートス）』に閉じ込められている、コカビエルに迄は手を出せなかった様だが…

「アザゼル、それは、本当なのですか？」

「ミカエル、落ち着いて…」

その墮天使の施設強襲に、過剰な反応を見せたのはミカエル。

サーゼクスに諭され、その儘に、今度は天界代表として話し始めた。

「実は…この深夜、地上に在る、我々天界の施設も数カ所、”白い翼”を持った者達の指揮する集団に襲われました。」

「!!?!」

この報告に、やはり事前に知らされていたサーゼクス以外の者の、目の色顔の色が変わった。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「それって、もしかして天使なの？」

”墮天”しないで天界の施設を襲撃か…」

「はい…」

ミカエルが言うには、天界を出奔した者達から言えば、神の死を隠蔽していただけでは無く、悪魔や墮天使と和平を結んだ天界トップである熾天使達、そして其れに賛同した者達こそが異端だ…と主張しているようだ。

そして死んだとは云え、その信仰は棄てていない…熾天使でなく…あくまでも『神』への忠誠は不変故に、天界の…神が作った『システム』にチエツクされる事無く、墮天しないらしい。

「…彼等の、”神”に対する信仰、忠誠は本物です。」

出来れば、話し合いで解決したい…。」

「でもよ、彼方さんは、話す心算なんて無いんだろ？」

「…その時は、私達が、前に立ちます。」

「だーかーらー！一人（じぶんたち）だけで背負うなんての！」

気持ちには解らんでもないが、その為の同盟だろうがよー！」

「…ありがとう…アザゼル…」

自分達の処から出た反乱分子に、複雑な感情を持つミカエルを気遣う様に、アザゼルが話す。

3 トップの中で、あくまでも見かけは最年長に見えるアザゼル。

この辺りは、訓練開始時からのオカ研や生徒会（ついでにゼファー・ドル達）への対応からも窺えたが、一応は組織のトップに相応しい、面倒見の良さは持ち合わせている様だ。

「因みに その賊、天使でなく、人間は どの様な構成なんだ？」

「…!!!」

アザゼルのフォローで、若干和らいだミカエルの顔が、この俺の質問で、またもや硬くなる。

「その様な質問をしている時点で、既に赤龍帝殿は察していると思えますが……」

「聖剣計画の関係者か。」

「……はい。」

……そんな気は、していた。

確かに……特に天使達の中には、悪魔や墮天使と組むを好しとせず、それこそ上役である熾天使を異端視して、己の信念、正義の下に天界を離叛しようとする、頭の硬い者が居たとしても、それは不思議では無い。

そして、その下の人間の信徒。

“天使や悪魔等の”人に非ずな者”の存在を知っている、所謂『裏』に……3大勢力の事情に精通している者達だ。

確かに天使同様な石頭も居るだろうが、中には現状に不満を持ち、此幸いとばかりに便乗しての出奔者も居る事だろう。

俺の頭に浮かんだ、その最たるが、聖剣計画の関係者。

コカビエルが起こした聖剣騒ぎが発端で、最終的には、人工的に聖剣の遣い手を生み出すと云う、この計画は凍結。

バルパー・ガレイの所業と比べたら、幾分マシでは在るが、それでも非・人道的に値する実験が明らかになり、関わった計画技術者達は、計画内の立ち位置に関係無く組織内の地位最降格。

被験者である戦士達も全員、与えられた、聖剣を使いこなす為の要素……『因子』を体内から取り除かれ、聖戦士から単なる教会戦士の座に戻った。

確かに、これでは、不満の有る者が続出したとしても、仕方が無い。

そして、この時点で、俺が気に掛かった事が2つ。

1つは

「ミカエル、聞きたいのだが、今後は、そうだな、”はぐれ天使”……とでも言うべきか……が襲撃を仕掛けたと云う、天界の施設というのは……」





を知って、タイミングを合わせて自分達も動いた…と考えるのが、自然ですね。」

「…だとしてもよ、そのどっちかとやらは、どうやってその情報を得たんだ？」

シリユウの…皆が抱いていた疑問に、話している中、

「ふむ…心当たりが有るのう…」

「爺さん？」

「オーデイン殿？」

オーデインが、何かを知っている様な発言、その場の全員が注目する。

「この部屋に入った時に言ったじやろ？」

『身内のゴタゴタで遅れた』…と。

「あく☆、そう言えば、言ってたね。」

「ま、あん時は、それ処じゃ無かったからなあ。なあ？バラキー？ww  
w」

「うぐ…その呼び方は止める！」

「ほっほっほ…雷光が飛び交っておったのう…」

墮天使総督が、自分の護衛として此の場に居る男を茶化す中、オーデインは話し始めた。

「簡単に言えば、貴奴等同様に、儂等北欧の中にも、3大勢力(おぬし)等と仲良くすのを快く思っていない者が、僅かながら居るのじやよ。」

「ロキ…か……………ああ???!」

オーデインの言葉に、シリユウとデスマスクが声を重ねて呟き、

「な…真似してんなよ、オメー！」

「そっちこそハモんな！この孫バカ!!」

「はあ!」「あ?!」

「ちよ…もう☆、シリユウちゃんもベツちゃんも、そんな事で喧嘩しないの！」

「ふん!」「ケツ!!」

それが互いに何となく嫌だったのか、軽く諍う2人を、セラフオルーが間に入る。

…御明察だよ。

「！！！！！！」

そんな中、いきなり室内に、低い声が響き渡る。

ボウ：

そして、シリユードが囲む円卓の上に、青銀の魔法陣が浮かび上がり、その中心から、白いローブを纏う、長く蒼い髪の毛、鋭く端正な顔付きの男が姿を見せた。

「ロキ…」

「御機嫌よう、オーデイン殿…」

その男を見て、隻眼の老神が忌々し気に、その名を呼ぶ。

「貴様、いきなり此の場に姿を現したりして、一体、何の心算だ？」

「ふっ…知れた事を…挨拶ですよ。」

他の勢力と馴れ合う様な、不拔けた我等が主神様に目を覚まして貰う為に、近日中に、この様な思念体映像（ヴィジョン）ではなく、正式に冥界に お邪魔する前に…ね。」

「…つまり それは、宣戦布告と受け取って良いのかい？悪神ロキ殿？」

「ああ、それで構わんよ、魔王。」

近い未来の来訪（しゅうげき）を、不適な笑みを浮かべてサーゼクスに告げるロキ。

「ふん…！」

はぐれの天使か墮天使か、どちらが先に襲撃を計画したかは知らんが、それを もう片方に教え、やはり襲撃を唆したのは貴様だな?!悪神！」

「んく、それは少し違うな、人間。」

「何!？」

正式に自ら『敵』と宣言したロキに、デスマスクが睨みながら問うが、悪神は見下した嗤い顔で、応える。

「ふははははははははは—」



しかし まさか、この世界でも また悪神ロキと、対峙する事になるなんてなあ…

## 黄金の獅子!!

8月27日。

先日のロキの布告は、その名前を伏せた上でテロリストとして、はぐれ天使、はぐれ堕天使による人間界の寺院襲撃と合わせて、冥界中に発表された。

冥界に緊張感が走る中、若手悪魔によるレーティングゲーム：サーゼクスによつて【Next Generation Cup】と銘打たれた第1戦が、開始されようとしていた。

「いよいよ…だね。」

「そうですね。」

VIPルームでは、4人の魔王、ミカエル、アザゼル、シリユウ、オーディン、デスマスクの面々。

「ね☆、グレイファイアちゃんもバラキーちゃんも、立ってないでこつち座つたら☆? ☆」

「そうだよグレイファイア?」

「こつちこつち☆」

「……………」

それにグレイファイアにバラキエルと云つた、自分の主の護衛として参じている者達が、もう直ぐゲームが中継されるであろう、巨大なモニター画面に注目していた。

「痛い痛い! グレイファイア、痛いよ!」

「肩甲骨固め(オモプラッタ)はマジに止めて!!」

その際、自分の腿をぱんぱんと叩き、まるでその上に座れとアピールしていた様な赤髪の優男が、メイド服姿の銀髪の美女にシバかれていたのは、御愛嬌。

「なあ紫龍よ、どう思う?」

「そうだな…俺がロキだとしたら…」

その光景を茶請けにしながら話しているのは、シリユウとデスマスク。その内容は言わずもがな、昨日、宣戦布告してきたロキが、何時の

タイミングで攻めてくるかな件。

「…しかし、その裏を搔いて…：…なパターンも有り得ないか？」

「トリックスターだからなあ…」

あの時にロキの言った、『近日中』とは一体 何時の事なのか？

昨日の今日で、いきなり攻めて来る可能性も有れば、先日襲撃を仕掛けたという、はぐれの天使墮天使が再び行動を起こした時に便乗して来る可能性も。

兎に角、予測不可能な相手で、あらゆる想定をしておく必要性が有った。

「一番ムカつくのは、昨日のアレは実はハツタリで、厳戒態勢を敷かせただけ敷かせてを、緊張している俺達を見て嗤ってるだけの…」

「止めるデスマスク！本当に そんな気がしてきたぞ！」

トントン…

そんな会話をしている時、部屋の扉がノックされた。

カチャ…

「し…失礼しますう…」

入って来たのは、シスター服を着た、金髪の美少女と、

「お、おおお…オーデイン様あゝっ!!」

スーツ姿の銀髪の美少女。

「オーデイン様！昨日は、朝の7：00に宮殿の正面門で待ち合わせじゃなかったのですかあゝ?!」

聞けば、いきなり自室から転移した…って、貴方はアホですかあゝ

ゝゝゝあつ?!」

「いやゝ、すまんすまん。

儂も、何か忘れとるなく？…とは、思っておったんじやよゝ。ほっ

ほっほ…」

「あのゝ、あれは…?」

「…気にするな。」

それはロキ襲来に備えて、最初は人間界で留守番だったが、急遽喚び出されたアーシアと、やはり（置き去りにされた ついでに）待機予定だったが、同様に改めて喚び出されたロスヴァイセだった。



☆。」

「それ、るーる説明の為の、めた台詞？」

「「「「……………」」」」

「オーフィスちゃん？頭で思っても、口に出しちゃいけない事ってるんだよ？」



ゴオオオオオオオン！

そしてゲームのステージに、戦闘（ゲーム）開始を告げる銅鑼の音が鳴り響いた。

「…行け！」／「オー！行ってこいや！」

『「「「「応!!」」」』

それぞれの王（キング）の号令の下、両陣営共に、女王（クイーン）と数名の下僕悪魔を残し、殆どの下僕悪魔が中央部を目指し、飛び出した。



バキイ！

「…うげらあっ!？」

「こ、このチビ!!」

「……………」

中央部で鉢合わせた両陣営が、戦闘を開始した。

まだ序盤だが、どう見てもサイラオーグ側が有利にしか見えない。

「ん〜？紫い龍う〜？お前の鍛えたってガキ達、全然だなく？www」

喧しいわっ!!

確かにゼファードル眷属は、決して弱くはない…と思う。

俺とアザゼルとで組んだプログラマを、エックスやアザゼルの監視付きとは云え、一応は こなして来たのだ。

しかし それは、嫌々、渋々に取り組んで来たからか、表面的な肉体強化はされているが、身体の内側…内面的な その成果は、殆ど無い様だ。

「……………」

ドヤ顔なデスマスクとは対照的に、アザゼルも複雑な表情を浮かべ











人型の時に、その手に持っていた。それと同じ形状……しかし、それ以上の大きさの、巨大な戦斧に変化した。

ガシィ……

それを、自らの得物とすべく、サイラオーグは手に取り、戦闘の構えを見せる。

神滅具（ロンギヌス）が1つ、【獅子王の戦斧（レグルス・ネメア）】。それこそが、この兵士の少年の正体であった。

嘗ての所有者が斃れた時も、その神器、魂は無に還る事無く暴走、その仇を討った後、最終的には生きた神器の儘、サイラオーグの眷属となる。

つまり彼は、サイラオーグの兵士であると同時に、サイラオーグの所有する神器でもあったのだ。

「……の出来損ないがあー！」

得物がデカけりや、良いつてモンじゃ無えぞお、悪う羅ア!!」

ドツドツドツド……

ゼファードルが両掌から、無数の高密度の魔力弾を放つ。

その1つは一直線に正面から、その1つは変化球の様に弧を描き背後から、様々な軌道で前後左右。全ての方向から、サイラオーグ目掛けて魔力の弾が襲い迫る。

「覇ああつっ!!!」

バシユウツ!!

「なっ……？」

しかし、それを、サイラオーグが魔力ではなく、生まれながらに僅かな魔力しか持ち合わせなかった故に、幼き日からの鍛錬の末に得た闘気を身体全身から放出し、其れ等を打ち消した。

「なっ……バカな……？」

魔法もロクに使えない、出来損ないが俺の技を……だとお?!

『闘気』と云う概念が皆無なゼファードルが狼狽える。

自分の必殺技だったのだろう、圧縮された、魔力弾の連打。

それをノーダメージで凌いだサイラオーグを見て、動揺するぜ

フアードルに対し、

「…終わりか？」

ならば、次は俺の番だ！

今回のゲーム…我が師より、出し惜しみはすると言われる！  
故に、死んでも怨むなよ？

ゼフアードル・グラシャラボラス!!

サイラオーグが、目の前の相手に、このゲームを観ているであろう  
魔王や師、そしてリアス達若手悪魔のライバル達に見せつける様に、  
雄々しく叫んだ。

「禁手化（バランス・ブレイク）!!」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「これは…？」

サイラオーグの禁手化（バランス・ブレイク）。

それにより、この男の手にしていた巨大戦斧は、胸部に獅子の顔の  
造りを施した、黄金の全身鎧へと形を変えた。

それは正に、獅子座の黄金聖衣を連想させる。

「驚いたか？紫龍よ。」

俺の心を見透かした様なデスマスクが、ニヤニヤしながら話し掛ける。  
る。

「…だが、本当に面白いのは、この後だぜ？」

「……??？」

》》》》》》》》》》》》》》》》》》》》

「うおおおおお~~~~~~~~つ!!」

黄金の獅子の鎧を装着した後も、更に闘氣を高めて放出するサイラ  
オーグ。

…?!

いや、これは、闘氣では無く…!?!

「くつくつく…気付いたか？」

あれは正しく、今お前が頭で考えている、『それ』だよ。」

………!!

やはり、そうか！



咄嗟にゼファードルが幾重もの魔法陣の障壁を張るが、

パン：

「な…」

その抵抗も虚しく拳の一撃で打ち砕かれ、サイラオーグが追撃に放つのは、無数の拳の連打。

その一瞬の内に繰り出された1つ1つの拳の軌跡は、煌めく光の線となる。

その拳にデスマスクが附けた銘。

それは嘗てのデスマスクの盟友、『黄金の獅子』と呼ばれていた漢の代名詞。

「ライトニング・プラズマ!!」

カツ：

「うっぎやあああああゝゝゝっ?!」

その全てを受けたゼファードルは、天高く撃ち飛ばされるのだった。





…？ w w w



「シリユー君？ベツロ殿？今の技は…？」

「はい、説明だよ☆！」

サイラオーグの光る拳に驚きを隠せないのは、魔王達も同様だった。

「いや、別に大した事じゃない。」

それに対して、やれやれ顔で口を開いたのはデスマスクこと、ベツロ・カンクロ。

「単純に光速の動き…それによる空気摩擦の何たらで静電気が放電起こして…この辺りは、俺も実は完全に理解出来ていないんだが、兎も角、それで光って見えるんだ。」

確かに殴った際、その光に相当する熱や電気エネルギーはダメージプラスされるだろうが、それもアンタ達の弱点…天使墮天使やその遣いが使う様な、光や神氣の類じゃ無えよ。」

「そ…そうだったんですか…」

「ほっ☆…」

多少アバウトな説明では有るが、とりあえずは聖光の類では無い事だけは解り、安堵の顔を見せる魔王達。

「俺は、神器にアンタ等『せいんと』の血を与えたらパワーアップするってのに、興味が有るな？」

どうだい2人さん？少しだけで良いから、献血してみん「断る！」  
そして狂科学者気質な墮天使の総督は、聖闘士の血に、関心を持たみたいだった。

尤も その研究協力の要請は、正しく光の速さで拒否されたが。

因みにだが、神器に聖闘士の血を与えたとしても、その神器の遣い手が小宇宙（コスモ）に目覚めていなければ、何の意味も無い。



「シリユーう~~~~っ!!」

貴方は、貴方わあ~~~~っ!!?」

「あわわ…部長、ちよ…落っ着いて?」

かっくんかっくん：

：今日のゲームが終わり、また魔王達と少しミーティングを行った後、俺とアーシアは、一足先にグレモリー邸へと戻ったリアス部長の処へ遊びに：コホン：明日のゲームの激励に、アーシアと一緒に足を運んだのだが、其処で俺を待っていたのは、

「あ、丁度 良かったわ、シリユー。」

貴方と、OHANASHIしたい事が有ったの。」

「：何だか字が、違くないですか？」

リアス部長の尋問だった。

「誰が彼処迄、サイラオーグを強くしろと言ったのよっつ!!？」

「違：俺じゃない！デスマスクだ!!」

「貴方が あの人を、サイラオーグに紹介したのでしょ?!同じ事よ!!」  
かっくんかっくん：

両肩をホールドして前後に揺さぶりながら、夜叉の如くな形相で問い詰める駄肉姫。

ライバルであるサイラオーグの度を過ぎる程な強化に、『己は一体、誰の味方だ?』的な理由で御立腹の様子だ。

見れば小猫やレイヴェルも、ジト目で こっちを睨んでいるぜ。

：確かに、サイラオーグの内側（なか）に、小宇宙（コスモ）を見出したのは俺。

だからこそ、本当は俺が指導したかったのだが、公用私事諸々で手が足りなかったので、デスマスクを逢わせてみると、ヤツもサイラオーグに才能を感じたのか、師事にノリノリとなったのだ。

しかし まさか俺も、1ヶ月其処等で あの漢の小宇宙（コスモ）を、第七感（セブセンス）：黄金聖闘士（ゴールドセイント）の域迄引き上げたのは、流石に想定外。

せいぜい白銀（シルバー） 止まり程度だと思っていた。

確かに修行初日に眷属諸共、積尸気送りしての自力生還を強要したと云う鬼畜っ振りを聞いた時、そして眷属全員が其れをクリアしたと

聞いた時には、或いは…とは思ったりしたが。

サイラオーグ以外の眷属達が、小宇宙（コスモ）に目覚めなかった分、リアス部長達（支取先輩や匙達も そうだが）はラツキーと思わなければ。

尤も、その修行の甲斐有って、魔力や精神力は大幅にアップしたらしいが。

デスマスク曰わく、

「お前に解り易く言えば、アテナが聖域（サンクチュアリ）に降臨された頃の俺と同等の実力を、既にアイツは持つてるぜ。」

…だとか。

つまりは、黄金聖闘士（ゴールドセイント）としては、まだまだなりたての ひよつこだと言いたいらしい。

それでも完成された、白銀聖闘士を相手に無双する実力は充分に有る。 閑話休題。

「分かった！分かったから!!」

新学期が始まったら、オカ研の皆、俺が鍛えるから!!」

「よおーっし、言質は録ったわよー!」

ふう：漸く解放されたぜ。

しかしながら俺の見立てじゃ、オカ研メンバーで小宇宙（コスモ）に目覚めそうな者は、残念だが居ない。

リアス部長や朱乃先輩、レイヴェルにギヤスパーは完全な魔力特化。

木場とミルたんは一見、それぞれスピードとパワーに特化した近接戦闘タイプだが、実は其れも、魔力補正による物だ。

つまり2人も魔力寄り。

既に ある程度、魔力に秀でている者は、小宇宙（コスモ）に目覚めるのは難しい。

サイラオーグは だからこそだったのだ。

強いて言えば、小猫は可能性が有るには有るが、それでも黄金聖闘士の域には達しない：せいぜいが青銅（ブロンズ）を脱して、白銀（シ



翌日―8月28日の朝。

所変わって、アスタロト城内の、ディオドラの寝室。

30畳の大部屋の床一面が全て、ベッドとなっている、正に寝室。

「う…うわああああっ!!」

目を覚ますと同時に、比較的寝付きの良いディオドラは絶叫する。

「「すやすや…」」

何故なら自分の両腕両脚に、全裸の美女美少女美幼女、総勢4人が、  
がっしりとしがみついていたのだから。

更には自分の周りを見れば、やはり生まれた儘の姿の美女美少女美  
幼女達が、静かに寝息を立てている。

いや、これは別に、驚く事では無い。

心当たりが有り過ぎるのだから。

「はあ…」

王である自分自身。

女王。

戦車2人。

騎士2人。

僧侶2人。

兵士5人。

この、自分と眷属達、総勢13人が一緒に寝れる様にと、特別に作った部屋。

単に寝るだけなのか?…かどうかは察し。ディオドラの絶叫の理由…それは、何も身に纏っていない、自分の眷属である彼女達に対し、自身は一応、下に一枚、トランクスだけは履いていた筈だったのだが、何故だかそれが、片足は完全に、もう片足も足首迄ずり下ろされていたのである。

自分が熟睡した時に何が有ったのか、概ね理解出来たディオドラは、深い溜め息を1つ零した。

「今日はゲームだから、体力温存しておこうって言ったじゃないかあ…ハア…」

右腿に抱き付いている赤い髪の少女、左脛に顔を押し付けている金

髪の少女。

右腕にしがみついている幼女…正確には、幼女体型のピンクブルンドの少女、そして左腕に抱きつき、それを自らの胸に埋めている銀髪の少女。

未だ目を覚ます気配の無い、揃いも揃って艶やかな顔をした彼女達を見て、デイオドラはもう1回、今度は小さな溜め息を吐くのだった。



カチャ…

「どうも。」

「失礼しますう。」

「にゃー！」

AM 11:35

昨日と同じく、ルシファー城のVIPルームに入ったシリュー達。

「やっほ☆」

「やあ〜♪」

「こんにちは。」

「よっ♪」「……………」。

「どうも。」「…………（ペコリ）」

既に部屋にはセラフォル、アジュカ、ファビウムの魔王。

更にはデスマスクにアザゼルとバラキエル、ミカエルと その秘書

天使、そして、

「…神崎様、お疲れ様です。」

「やあ、シリュー君…って痛い痛い痛い！」

「ごめんグレイファイア、謝るから！」

「……………」。

一体 何が有ったのか…

サーゼクスと、この紅髪の魔王にSTFを仕掛けている、グレイファイアが居た。

「……………」。

オーデインは、まだ来ていないのか？」









を貫く。

ガン！

「ひいっ!!」

鎧の大振りな剣を、ギリギリで躲したギヤスパー。

しかし その攻撃に思わず腰が引け、尻餅を搦いてしまう。

ボン：

「え…？」

そのギヤスパーが座り込んだ床に、魔法陣が展開かと思えば、

「う…うわわわわ!?!」

「ギヤー君?!」「ギヤスパーさん?!」

シユウン…

何処かに転移したかの様に、ギヤスパーは この場から姿を消した。



中央エリアの地下に位置する迷宮エリア。

パタパタパタ…

この光の届かない暗闇の空間を、1匹の小さな蝙蝠が彷徨う様に飛んでいた。

「小猫ちゃん…祐斗先輩…」

グスン…怖いよお…部長くお…」

転移魔法陣の罠（トラップ）で飛ばされたギヤスパーである。

超音波を発し、その壁の反射を感知する事により、迷宮のマツピン

グは既に終了。

恐らくは中央エリアに繋がっているであろう、階段の位置も確認していた。

後は、ランダムエンカウントするモンスターを避け、地上を目指すだけ。

「…な…何か、居る?」

また、モンスターさんですかあ!?!」

ずももも…

「ひい…!?!」



ギヤスパー（15）、人生最大の危機！

スライム（大）が現れた！

ギヤスパーは逃げ出した！

しかし回り込まれてしまった!!

『うわああああん!!先輩い〜!』

「何やってんだギヤスパー！」

逃げてないで攻撃しろ!!」

「シリユール、落ち着くにや！」

今回のリアスvsディオドラのゲームのステージには、中継用のカメラが各所に配備され、戦闘開始が確認されると、観戦モニターは、その場所に画面が切り替わる仕様になっていた。

それは地下の迷宮エリアも同様。

JAPAN国籍を得て、現地企業で勉強したスタッフ達が作り出した最新技術搭載のカメラにより、光が全く差し込まない地下迷宮でも、鮮明な画像を映し出す事が出来ていた。

∴ スライムから逃げ回るギヤスパーの姿も、きっちり映し出されていった。

「反省会で、説教だ！」

>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>>

「ひいひいひい?!!」

逃げる。

逃げる。

ギヤスパーが逃げる。

ずずずず…

そんなギヤスパーに対してスライムは、自身の体を変形させ、壁床天井、全てを塞ぐかの様な巨大な壁に変化。

「はわわわ…」

逃げ回る内に気が付けば、通路の突き当たり迄追い込まれ、完全に逃げ場を奪われたギヤスパーは思わず、絶望の顔色で、コンクリート





「一応伺いますが、素直に『まいった』する心算は…」

「そんなの、有る訳が無いだろ!!」

余裕の笑みを零しながらのレイヴェルの問いに、赤毛の少女は顔を真っ赤にして怒りながら応える。

「クス…そうですか…ならば…」

レイヴェル自身も、素直に降参するとは微塵も思っただけはなかったが、余りの怒り振りに苦笑すると、両手を頭上に掲げ魔力を集中、その上に巨大な炎の玉を作り出し、

「…ならば、リタイアしなさい!」

ブオワワアアアアツ!!

それを、巨大な火の鳥に形を整える。

「クス…」

しかし、その攻撃を予測していた少女は その時既に、魔力を集中させており、

「エレエ・レ・ナムメ・イリン! 聖霊よ、我が盾と成り賜え!!」

それを防ぐ為の呪文を詠唱していた。

「行つけー! っ! 皇炎風!!」

「【覇邪霊陣（ストライバー）!!」

バシイイツ!!

「うっそっ!!?」

結果、レイヴェルが撃ち放った炎の鳳は、少女の創り出した聖盾の結果に阻まれる。

「ななな…何ですの、それわ?!」

それ、神聖魔術では、ないですか?

貴女、いくら僧侶（ビショップ）だからって、僧侶（クレリック）の魔法を使えるって…?」

「ウフフ…ボクはね、でいおどらクンの眷属になる前は、とある国の城属の大神官の娘だったんだ。」

その時に一通りの神聖魔術は、父様から習っていた。

だから悪魔に転生しても、それ以前に習得していた魔法なら、例えばそれが悪魔にとってマイナスな聖なる魔法でも、平気で使えるのさ



！」

「な、何ですって…!？」

自信満々に応えるディオドラの僧侶の少女に、狼狽えるレイヴェル。

だが、直ぐに落ち着きを取り戻し、

「…でも、知っていますのよ！」

その魔法は結界が強力過ぎて、この先、貴女の繰り出す魔法迄も、一  
緒に打ち消してしまう事を！」

その魔法の欠点を指摘する。

「それくらい、解っているよ。だから…

破アアアッ！」

「…!？」

しかし赤毛の少女は、それは承知だとばかり、更に魔力を集中させ、  
その結果、この結界魔法は部屋全体に包み込んだ。

「あはは、これで お互い、魔法は…魔力を使う術や技は、使えない。

…つまり それは、解るかい？

フェニックスであるキミの最大の特性である、”不死” さえも封じ  
られた。

つまりは肉弾戦しかないんだけど…

実はボクは僧侶（クレリック）であり、それと同時に、武闘家でも  
あるんだ。」

「…修道僧（モンク）!!」

「正解♪それで…それでもボクに、勝てる気である心算なのかな？」

「…くっ!!」

拳法のような構えを取る赤毛の少女に対し、金髪の少女も不慣れそう  
に格闘の構えを取る。

まさか…こんな不死（フェニックス）の攻略法が在ったなんて…シ  
リユー先輩も吃驚ですわ！

シリユーがライザーを倒した時に、それ以前から感じてはいたが、

改めてフェニックスと云えど、絶対ではないと云う事を確信していた  
レイヴェル。

少し前、それについてシリュウと話した事を思い出していた。

《《《《

「ああ、俺以外にも、フェニックス攻略出来そうな奴は居るさ。」

例えばデスマスク。

アイツなら、魂を身体から引き剥がし、その魂を其の儘、黄泉比良  
坂（あの世）に送ったり、その場で燃やし尽くしたり、爆裂させたり  
も出来る。

セラフォルーが あの氷の匣の魔法を本気で繰り出したら、『相手  
は死ぬ！』らしいし…

殺せないにせよ、その体を異次元の彼方に吹き飛ばし、永遠にそ  
の空間を漂い彷徨わせる…そんな技の使い手を、俺は知っている。」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「…こつの一！【爆発（エクスプロージョン）】!!」

「ふん！」

どっかん！

「……?!」

…転移魔法陣に引つ掛かり、ミルたんは中央エリア1Fの中心部、  
エントランスに飛ばされていた。

そして其処で、デイドラ眷属の兵士の少女3人と遭遇、戦闘に突  
入。

速攻でメイド服（滅威弩服に非ず）を着た巨乳黒髪ボブカット少女  
を肉体言語（サブミッション）で、返す刃で、エルフ耳の金髪爆乳少  
女を魔力で背中に具現化させた、”もう1人のミルたん”による拳打  
ラッシュで撃破。

ゲームフィールドに今回のゲーム初の、そして立て続けに、2人目  
の脱落者（リタイア）報告のアナウンスが流れる中、残った小柄で慎  
ましいピンクブロンドの少女は、仲間が倒された怒りを表情（かお）に  
隠す事無く、得意技である爆発系の魔法を、ミルたんに向けて撃ち

放った。

…しかし、

「…今、何かしたによ？」

「嘘…嘘でしょ?!」

それは前側に差し出されたミルトんの掌の前に、簡単に受け止められる。

「今のがアナタの最大必殺なら、ミルトんには勝てないによ。」

さあ、素直に『参った』して、道を開けるによ。」

「う…うるさいうるさいうるさあーい!!」

ミルトんからすれば、何の悪意の無い、降参の勧めだったのだが、この小柄な少女は顔を真っ赤にして怒り出し、再び先程と同じ、爆発魔法を仕掛けようとするが、

「仕方無い…:によ…」

一瞬…少しだけ、哀しそうな表情を浮かべたミルトんは、次の瞬間には厳しい顔で、両足を やや広く開き、右足を一步、前に踏み出し、左脇を引き締め、肘を曲げて前に向けた左拳に右掌を重ねる構えを取る。

そして魔力を集中させ、左拳を被せていた右手を左手首に掴み直し、左拳を思いつきり、前に突き出した。

それはシリユートと小猫、そしてミルトんもお気に入りである、『ドラグ・ソボール』なるコミックの主人公の必殺技の構え。

シリユートも同じ構えから、小宇宙（コスモ）と魔力を融合させた破壊のエネルギー波を放つ技に、『廬山漆星龍珠』と銘打っているが、ミルトんの それは、魔力100割のエネルギー弾。

そして その魔力の弾が、ミルトんの拳から、撃ち放たれる。

「ビッグバン・ミルトん波ーっによ！」

ドオツゴオオツ!!

「きゃああああああっ!?!」



「てええいやあっー!」

バキイツ!

「くっ…」

こ、この三角帽子の武闘家女子、本当に強いです。

繰り返し出てくる一撃一撃が速いし、重い!

黒歌姉様から受けている仙術の施し:

練った『氣』を体内に循環させて、身体を硬化させてなかったら、もう5回は斃されています!

:悔しいですが、仙術体得を勧めた裸ドラゴン先輩には感謝ですね。

そして当然、黒歌姉様にも。

『ディオドラ・アスタロト様の兵士(ポーン) 1名、リタイアです。』  
「!!」

また敵(あちら)さんから、リタイアが出たアナウンスが流れました。

倒したのは、祐斗先輩かミルたんでしょうか?

これで向こうは、3人リタイアですね。

「もう、何やってんのよ!」

ぶうん…

身内の連続リタイアで、少し苛立ったのでしょうか、今迄の攻撃と違う、”らしくない”隙だらけの大振りな攻撃。

それを見逃す程、私は甘くは有りません。

「えいつ…」

バキイツ…

「か…っ!」

ぶい! 狙いすました、『氣』で強化された拳によるリバブローが、見事にヒットしました!! (どやあ!)

「くっ…」

あ…この人、まだ起き上がりますか?

肋骨、何本か折った手応えが有ったのですが…

まあ、苦しそうな顔で脇腹を押さえていますし、膝がつくがく言わせ

てますから、かなり効いているのでしようが…

「ま…まだよ…！」

勝負は、これ、か…ら…？」

パターン…

「????」

「スウースウー…」

え？ 此方を睨みながら、戦闘続行の構えを見せたと思ったら、いきなり倒れ込んで寝ちゃいましたよ？この女（ひと）？

ザツ…

「て、手出し無用と言われていましたが、やっぱり お友達が倒されるのを、だ…黙って見ていられないです！

つ、次は、私が お相手します!!」

そして代わりに前に出てきたのはガスマスクさん（仮名）。

ん…何だかシリユー先輩が普段から言っている、ベツロさんの呼び名と紛らわしいですね。

まあ今は、そんなのは どーでも良い話ですけどね！

どん！

「う…??ど…どうして、動けるの…？」

とりあえず、鳩尾に きつつい一撃を。

「…もしかして、睡眠か麻痺系のガスを撒いていたのですか？」

「…!!」

ガク…

気絶しましたが、凶星だった様ですね。

まさかそんな、これ見よがしに妖しいガスマスクみたいな被り物をしている人に対して、その類の攻撃を警戒しないとでも思っていたのですか？

最初から、仙術による『氣（オーラ）』で、身体全体をガードしていましたよ。

『リアス・グレモリー様の僧侶（ビショップ）1名、リタイアです。』

……!!??

ウチの僧侶（ビショップ）がリタイア…ですか？

まさか、不死（フェニックス）のレイヴェルさんが倒されるとは思えませんから、普通に考えて、ギャー君でしょう。

あの魔法陣から転移？で消えて、何処に行ったかと心配していましたが、結局はコレですか？ あの、役立たずヴァンパイア。

兎に角、ゆつくりしている暇は無いみたいですね。

とりあえず この2人のトドメ、刺す事にしましょう。

『ディオドラ・アスタロト様の兵士（ポーン）1名、戦車（ルーク）1名、リタイアです。』



「い、嫌ああああああっ!!」

「ケケケ…ジタバタするなっ♪」

…あの後ギヤスパーは、ディオドラの兵士・ホエイルとの決死の鬼ごっこさながらの逃走虚しく、捕まってしまう。

首筋に注射を打たれ、その中の薬物の効果か、身体の自由の殆どを奪われてしまったギヤスパー。

「ハーフ・ヴァンパイア…コイツは本当に、興味深い研究素材（オモチャ）だぜ…♪」

「い、嫌あ、止めてえ!」

「…この人、アザゼル先生と、同じ目をしてますうっ?!」



「（怒）失礼なヤツだな？おいつ?!」

「いや、間違っていないから! w w w」

「何おー…つ!!?」



「ふうんんん〜!ふぬふぬふむ〜!」

「ふ〜♪漸く大人しくなったぜ♪」

頭の上で手首を交差して縛られ、それを床に固定。

更に口は猿轡され、身動きを封じられたギヤスパー。

「うむうんうん〜〜〜!!」

瞳に涙を溜めた その顔は、賊に浚われた乙女の如く。

「とりあえず…は、血液採取…」

「!!!」

そう言つて、邪悪な笑みを零しながら注射器を取り出す姿は、アザゼルが狂科学省ならば このホエイルは正しく狂生物学者。

「…は、下手にヴァンパイアにやつたら、貧血起こすか？」

それで意識を失われて、リタイア扱いされて消えられたら、勿体無いよな。」

「…(ホツ)」

しかし それは、包帯越からも心底残念がつてると判る眼をして、注射器を懐に仕舞い込む。

「な・ら・ば…やっぱし、DNA撰取か？」

汗や涙でも構わねーが、こーゆー時は、やっぱ『ぴー』液だよなあ？」

「…!!!んんんんんむむむむむ?!」

血液採取（…というか注射）が取り止めになり、ホツとしたギヤスパーに、其処から更に斜め上の代案を出すホエイル。

本日最高の抵抗を試みるギヤスパーだが、足をジタバタする程度では、この狂生物学者には抗いにはならない。

「そんなに足掻くなよ？」

先に言つとくが、別に俺は、○ズなんかじゃ無いぜ？

一応は、デイオドローloveだからな。

それに女同士なんだから、其処迄恥ずかしがる事あ無えだろ？ん？」

「んんんんんんんんんんんんんんんんんん!!!」

その容姿からか、ホエイルはギヤスパーについて、少し勘違いしている様だった。

「それに心配しなくても、此の場は俺達2人だけだ。

他に誰も見ちゃいねーから、安心しろ。」

「んんんんんんんんんんんんんんんんんん!!!」

…更には2人共、中継カメラの存在には、気付いてない様だ。

続く。











自らの眷属・ホエイルにより、ギヤスパーを基準に己の『ピー』の大きさを公開処刑の如く公言された同然のディオドラが、近日中で最高にorzっており、彼と共に、此の拠点の部屋に残っていた彼の女王（クイーン）が、必死に慰めていた。

「……………」

普段から他の眷属達と一緒に、ディオドラを『へたれ』とか『小さい』とか『速い』とか言っていて、弄っている女王。

しかし、今回のアレは流石に酷過ぎると感じたか、普段とは打って変わって かなり真剣な面持ちでフォロワーしているが、部屋の隅っこで体育座りをしているディオドラは、自らの作った殻から出ようとしていない。

「あゝ！もう、仕方無いわね！」

「わわわっ!?!」

業を煮やした女王はディオドラの首根っこを掴み、無理矢理に引き起こすと文字通り、物理的に一肌二肌脱ぎ、

「うぶぶつ?!」

朱乃にも匹敵する胸を直に、凹み王（キング）の顔面に押し付ける。



「……………」

「あう……!」

「……ど、どうですか？元氣、出ましたか？」

「ん……。心配掛けて、ごめんね……」

顔を埋めてるだけな筈が、何時の間にか赤ん坊の様に『吸っている』ディオドラに対し、女王が顔を少し赤くしての問いに、このへたれ王（キング）は弱々しくも、ハッキリと大丈夫だと答える。

「（ディオドラちやま、可愛い〜〜!）」

その大型肉食獣に追われている、小型の草食動物の様な顔に、ディオドラ眷属特有の『へたれ萌え』を拗らせる女王だが、決して それを表には出さず、まだ少し不安ではあるが、とりあえず一安心と小さく、安堵の溜め息を一つ零した。

そして脱いだ衣服を着直している時、この部屋に設置されている、ゲーム状況を映しているモニターが、新たな戦局を映す。

画面には朱乃と、ディオドラ眷属の騎士…日本刀の様な武器を手に、サイズがキツイのか意図的に強調しているのか、胸元をやや大きく開けた黒装束を着込んだ、金髪美女の対峙している場面が映されていた。

「……………」

あれは確か、リアス・グレモリーの女王（クイーン）！  
向こうも、勝負に出たみたいですね！」

そう言うのと、女王は魔法陣を展開。

「ぬぼお~~~~~」

そして其処から、身の丈2倍越え、やや でっぷりした体型の男…  
使い魔を召喚。

「おい、お前！ この部屋で、ディオドラ様をお守りしろ!!」  
「……………」

「…返事わああっ?!」  
ビシィツ!!

自分の命令に対し、無言の使い魔を怒鳴りつけ、その手に持っている指示棒で”躰”とばかりに叩きつける女王。

「ひえっ?!」  
「うおっ！うおっ♪！」

その様に どん引きするディオドラを余所に、上下、白と黒のストライプの服装の大男は満面の笑みと共に首を上下に振り、女王の命令に承諾の意を示す。

「フン…」

パタン…

それを確認した女王は、このディオドラ拠点である部屋を出て行った。



「ん〜？んむぬぬん〜」

「…………?」 可っ笑しいなあ…?

まだ出ないのか？ディオドラは何つ時も、5秒程度で…」  
人間とのハーフ、そして悪魔に転生しているとは云え、ヴァンパイアであるギヤスパア。

研究サンプルとして、そのギヤスパアのDNAを採取すべく、剥き出しとなっている『ピー』を自ずの手でXXXXXXXXしている狂生物学者・ホエイル。

なかなか”至らない”…大粒の涙を多量に零している…ギヤスパアに対して疑問を持ち、またもや然り気無く、ディオドラの公開処刑的発言をしてしまう。

すばかーん!!

「…?! な…ん…だ…と…?!?」

そして次の瞬間、そんな彼女の後頭部に、重い衝撃が走った。

「…ギヤア君に何をしているのですか？」

アナタわ?」

其処にはジト目な呆れ顔で、ハリセンを持っている小猫が。

「うう…お、お前…?」

そんな…ハリセンで、俺を…?」

「…少し前、シリユア先輩が言いました。

『達人は、只の布の鉢巻きに己の”氣”を通す事により、鋼の刃の如く扱う』…と。

その言葉を参考に、仙術で練った『氣』を、ハリセンに通わせてみたのですが、思いの外 上手くいったみたいですね。」

「ふ…巫山戯…る…な…」

ガク…

それは余程 強力な一撃だったのか、ホエイルは小猫の顔を一瞬だけ睨み付けた後、意識を失い、その場に倒れ込んだ。

『ディオドラ・アスタロト様の兵士（ポーン） 1名、リタイアです。』

「…ギヤア君、大丈夫ですか?」

ギヤスパアの手首の拘束と猿轡を外しながら、小猫は少年マンガにてヒロインを救い出すヒーローの如く、囚われの身になっていた仲間





この、むつつりヴァンパイア…

とりあえず これは、『小さい』『綺麗』『小さい』『可愛い』『小さい』  
と言ってくれた、正直者へのGOHOUBIです。」

「あわわ…ぐ、ぐめんなきいぐ!!」

すばかーん!

「うわらばっ!!」

…そんな遣り取りをしながら走る2人の前に、上階に繋がる階段が  
現れた。



「…!? あれは?」

中央エリア3F。

階段を登った直後の大広間で、木場の視界に写ったのは、

「うぐっ…」

「くう…ううん…クハアハア…」

ディオドラの眷属であろう、金髪の美少女2人が、1匹の巨大な蛇  
型のモンスターに、その身を縛られ締め付けられている光景だった。

「…ゲーム的には、この儘 斃れて消えて貰う、或いは もう少し消耗  
するのを待つのが定石だろうけど…」

そう言って木場は聖魔剣を構え、

「やはり騎士として、目の前の光景を見過ごす訳には往かない!!」

ズバアッ!

『キシャー…!!?』

この大蛇を一閃の下に斬り棄てた。

「ちいっ!」 「……っ!!」

これにより、大蛇の拘束から逃れた少女2人が、改めて木場と対峙  
する。

「だ、大丈夫かい?」

「ありがとう、グレモリーの騎士よ。」

今の件に関してだけは、純粹に礼を言わせて貰おう。」

軽装鎧を纏った、長い金髪を三つ編みに結った美少女が、武器であ

る細剣を一度 鞘に納め、木場に一礼。

そして もう1人、やはり長い金髪をポニーテールに結った、重厚な鎧を着込んだ美少女も、木場に向かって口を開く。

「き、貴様あ…何て余計な真似を…」

あの様なキツイ締め付け、そう頻繁に味わえる様なモノでは無いのだぞ!？」

「え…?？」

続く

## CAT FIGHT

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇「あの…小猫ちゃん？」

「何ですか？この、むっつり被りヴァンパイア。」

「うわあああああん！…って、それは もお、放つといてよお!!」

地下迷宮から漸く抜け出し、祐斗先輩達と合流する為、城の最上階を目指して走っている私とギャー君。

その途中途中で現れる、ゲーム運営サイドが場を盛り上げる為に用意した？幾多のモンスターを蹴散らし、一息吐いた所で、ギャー君が話し掛けてきました。

「小猫ちゃんて、どうして あのタイミングで、地下迷宮に…？」

「…それは、秘密です。」

「え〜？」

ちい…まさか、何処かの誰かさんみたいに、魔法陣のトラップに引つ掛かって、偶々ギャー君と、ギャー君への悪戯に夢中になって、私の存在に全然気付いていない包帯女の前に飛ばされた…なんて言える筈無いじゃないですか。…って!?

「ギャー君！ストップ！」

「あわ？こ、小猫ちゃん？急に止まったりしないですよ!？」

全力疾走中の いきなりの停止。

これに要らぬ質問をしてきた、ミニマムヴァンパイアがクレームみたいですが、そんなのシカトです。スルーです。

「…隠れてないで、出てきたらどうですか？」

「え?!」

「……………」

スウ…

私の呼び掛けに、柱の影から姿を現したのは、大きなリュックを背負った、小柄な犬耳の女の子。

背丈は私と そう大して変わらないのに、この娘は…敵です！エネミーです!!

普段から一体、何を食べてたら そんなになるんですか？

「参ったなあ…リリ、完全に気配を消していた心算だったのに…」

「”完全に気配を消した”から…ですよ。」

「ええっ?」

この、リリさん…ですか?の疑問に伝えてあげたら、尚更 頭の上に、大量のクエスチョンマークを浮かばせましたよ、この人…って、ギャー君もですか?

「恐らくは私達の接近に気付いて、隠れ忍んだのでしようが、それは此方も同じ事。」

今迄感じていた気配が、其処から動きを見せずに、いきなり消えたのです。

それは”其の場所で気配を消しました”って、言っているのと同じですよ。」

「(ポン!) 成る程…お勉強になりました!」

ペコリ…

凄く納得した様に掌を叩き、頭を下げるリリさん。

「じゃ、そろそろ戦えますか!」

そう言うと、此方が構える前に この ろりきよぬー(怒)、背負っている巨大リュックの中から、沢山のミサイル弾やらロボットアームやらファン〇ルっぽいのが飛び出して、私達に攻撃を仕掛けて来やりました!!

ちゅっどおおんっ!!

「うっわあああっ!?!」

「…くうっ!!」

いきなりの奇襲…それを卑怯とは言いませんが、屋内戦闘で銃撃飛び越えて爆撃で、この攻撃は少し洒落に なっていません。

…にしても あのリュック、確かにビッグサイズですが、どう見ても それ以上の容量な武装が ばんばん出て来ます。

もしかして それ、神器ですか?

四次〇〇。ケットの親戚ですか?

「ええいやあああっ!!」

びた…

「ぴた？」

おお！ナイスです。

ここでギャー君が、自らの神器である…ふおーびと…えーと…

…あの、狙った対象の”刻”を停める神器を発動！

ミサイルからロボツトアームからフア○ネル迄、全てを停めてしま  
いました。

ついでに その光景を見たりりさんも、何が起きたのか、理解出来  
て無い様で、思考が停止しています。

∴(ゆ・え・に)！今がつ、チャーンズ!!

すばかーん！

「あ痛ああい!?」

きつつい一撃、お見舞いです。

「あ痛たたたた…何なのですかあ…?」

「こ、小猫ちゃん…?」

涙目になって、頭を抑えるりりさん。

そして何故か、ギャー君も、目が点に。

「何、それえ!?!」

そして2人揃って、私が手に持つ武器(エモノ)を指差しての質問  
です。

「…見ての通りの、ハリセンですが?」

「嘘仰い！只のハリセンが、こんなに痛い筈がありません!!」

ちい…気が付きましたか。

さつきの包帯女は、単に”氣”を通した故の殺傷力で一応、納得し  
たみたいでしたが…

流石に”素”の一撃じゃ、まだまだ必『殺』とは往かない様ですね。

「ならば、教えてあげましょう。

これぞアザゼル先生から、モニター協力依頼として借り受けた人工  
神器・『張扇・挫・愚零斗』!」

「じ…人工神器い?」

驚くギャー君とりりさん。

ああ、これ知ってるの、部長だけでしたからね。

どつどつどつど…どつこーん!!

「きやああつ!!?」

あ…危なかったですね!?

このタイミングで いきなり、ギャー君が停めていたミサイル他が、再び動き出してきました!

「ギャー君! 一気に締めますから、コイツ等もう1回、停めて下さい!!」

「う…うん! ええいやああつ!!」

ぴた…

「嘘? また止まった?」

2回目となる”ぴた”に、動揺なりりさん。

鬼畜ドラゴン先輩の鬼畜指導の賜か…

ギャー君、かなり自分の神器を使いこなせていますね。

ならば、次は私の番です。

見せてあげましょう!

つい先程に至りたてはやほやの、この『張扇・挫・愚零斗』の、真の姿を!!

「禁手化 (バランス・ブレイク)…!!」

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

小猫ちゃんの『バランス・ブレイク』の掛け声に反応して、あの『はりせん・ぎ・ぐれーと』が…

「な…何のですか、それえ!?!」

「ふっ…これぞ『張扇・挫・愚零斗』の禁手状態、【墮天使乃撲殺棍棒 (エクスカリボルグ)】…です!!」

何て言うか邪悪さ満載な…刺々しい針みたいなのが沢山付いた、真っ黒な金属バットに変化しちゃいましたあ!!

「喜んで下さいりりさん。」

貴女が この、【墮天使乃撲殺棍棒 (エクスカリボルグ)】の餌食… 栄えある第1号です。」

「ちよ…ちよお待ち!」

そ…そんなバットで殴られりしたら、りり、死んじゃいますよお!!?」







しかし、これはブロックされてしまい、  
バツx2！

「……………」

同時に2人がバックステップで後退し、距離を開けての睨み合い。  
……あの後、城内で迷子状態だった僕達は、僕の（蝙蝠変化での）超音波で城内フロアを探索、上に登る階段を確認して、その場に向かう途中、あの子と遭遇。

しかし小猫ちゃん曰わく、さっきのりりさんは気配を消してたけど、彼女は僕達の存在に遠くから気付いたか、気配を消す処か馬鹿正直な殺気：闘気を発散して、自分の存在を誘う様にアピールしていたとか。

そして それは偶々か狙っていたのか、彼女は僕達が目指すルートで待ち構えていて、結果的には僕達は彼女に釣られてしまった体だとか。

必然的に戦闘開始となりましたが、その早々に あの子、”絶対魔法無効空間”みたいな魔法を使って、お互いに魔法や魔力を使う技が使えない状態、純粋な肉弾戦しか使えない状態となり、神器が使えなくなった僕は全くの役立たずに。

小猫ちゃんに退がるように言われて、今は通路の端っこ、壁際に退避しています。

「でえいやああっ!!」

「やあー!」

バキイツ!

小猫ちゃんが有利と思っていた格闘戦、純粋に互角?です。

レイヴェルさんをやっつけたという あの女の子、本当に強いです!  
!

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇  
「キミ!頑丈過ぎるにも、程があるぞ!

ララじゃないんだからさ!!」

…いや、ララって誰ですか?

まあ察するに、この子の仲間の…恐らくは戦車でしょうか。

そもそも戦闘中の相手へ向かって言う台詞じゃないですね？それに私、その頑丈さがウリな戦車な訳ですし。

それにしても、魔法が使えない この空間…

最初、この子がレイヴエルさんを倒したって聞いた時は信じませんでした、今は納得です。

多分、今夜シリユー先輩主導で行われる反省会、レイヴエルさんは格闘戦の薦めを受けるかも知れませんか。

「破あああ!!」

ガシッ!

「……!?!」

そして この子、修道僧（モンク）を自称するだけあり、そしてこの”絶対魔法無効空間”の中でも、魔力でなく”闘氣”を使う事でのエグい攻めをしてきますが、さっきの戦車の女の子のが、やはり接近戦では強かったですよ？

あと、もう1つ…

この子、さつき私の事を頑丈って言ったけど、”素”の状態ならあの闘氣を纏った拳一撃で、斃されていたでしょう。

そう、絶対魔法無効空間で使えないのは”魔力”だけ。

自分が”闘氣”を使っているというのに、私が今 使ってる”これ”に、気付いていないのですか？

「えいつ!!」

どん!

「きやつ!?!」

今の掌打は牽制…本命は!!

バツ…

…先ずは両足を やや広く開き、右足を一步 前に踏み出す。

左脇を引き締め、肘を曲げて前に向けた左拳に右掌を添える構えを取り、そして…シリユー先輩は ここで”魔力”と”こすも”、ミルたんは魔力を集中させていましたが…私は”仙術”で練った”氣”を…”精神エネルギー”を左拳に集中!

そして添えていた右手を左手首に掴み直し、左拳を思いきり前に突

き出すと同時に、溜めていた この”精神エネルギー”を一気に撃ち放つ!!

其れ、即ち…

「ファイナル・にやんにやん波あつ!!!」

「なつ…!?!」



『ディオドラ・アスタロト様の僧侶(ビショップ)1名、リタイアです。』  
ふう…ぶつつけ本番、自信は有りましたが、予想以上に上手くいき  
ました。

「小猫ちやくん!」

パチイン…

「いえい!」

安全を確認してか、飛び出てきたギャー君とハイタッチ。

「やったね!」

「当然です。」

これで、ディオドラ様の眷属は、王自身を含めて4人の筈。

それに対して此方は6人。

まだまだ決して、油断出来る人数差では無いですね。

「さあギャー君、上に向かいますよ。」

「うん!」

私達は再び、最上階の王の間を目指し、走り出します。

シリユ―先輩の”廬山漆星龍珠”、ミルたんの”ビッグバン・ミルたん波”に続く、私流のオリジナル・ドラゴン波である。”ファイナル・にやんにやん波”。

今迄 接近戦オンリーだった私にとっては、此処一番で頼れる技になりそうです。

何時かシリユ―先輩とミルたんの3人で並んで、『トリプル・ドラゴ

ン波（仮名）』とかをやってみたいですね。

あの2人なら、話を切り出したらノリノリで応じてくれそうですから、それまでに正式名称を考えておかないと。

あ…その時のセンターは勿論、私ですよ？

## 衝突！聖剣 V S 聖魔剣！！



…時は少し、巻き戻る。

「き、貴様あ…何て余計な真似を…

あの様なキツイ締め付け、そう頻繁に味わえる様なモノでは無いのだぞ!!」

「え…?」

木場が中央エリア3Fに辿り着いた時、其処ではディオドラ眷属の少女2人が、巨大な蛇型のモンスターと戦闘中。

2人纏めて、身体を縛られ締め付けられ苦しめられている光景だった。

ゲームの定石からすれば、此の儘モンスターに倒され、リタイアしてもらおうのを待つも良かったのだが、己の騎士道精神がそれを許さず、木場はこの大蛇を聖魔剣で斬り棄て、少女達を救出した。が：

「何の心算なのだ？嫌がらせか?!!」

「え…いや、その…スイマセン?」

助けた少女、2人の内の1人からは、素直な礼を言われたが、もう1人、重厚な鎧を着込んだ、金髪ポニーテールの少女からは、斜め上の対応を受けていた。

「ふん、まあ良い…」

この無粋、貴様の その剣で償って貰う!

おいジャンヌ！出だしするなよ!!」

「はいはい…ハア…」

金髪ポニテ美少女の台詞に、ジャンヌと呼ばれた金髪三つ編み美少女は呆れながらの返事で、小さな溜め息1つ。

「そんな訳で、早速 戦り合おうとしようではないか！グレモリーの騎士よ!!」

そう言いながら、木場に大剣の切っ先を向けるポニーテールの少

女。

「退く事は出来ないかい？」

僕は出来れば、如何にゲームと云えど、女性は斬りたくはないんだ……」

それに対して、木場は『女に向ける剣は持ってない（但し聖劍使いは別）』とばかりに、バトルを避けたい旨を伝えるが……

「そんなの私達は、寧ろ望む処だ!!」

ガンガン斬りつけて来い!」

「えええっ!?!」

「い、いや、私は違うからね!」

私は そんな趣味、持っていないからね!

そんなの、その変態戦車だけだからね!!」

「変態……く、くう……(〵〵〵〵〵〵)……!!」

「……………」

……この様な遣り取りの中、現在に至る。



ぶらぶらぶらぶら……

「あつはつはつ……!」

やるな!グレモリーの騎士!

しかし、避けるだけでは私は斃せないぞ!

さあ、その お前の自慢の魔剣とやらで、打ってきてみる!!

さあ!さあ!さあつ!早く!

はりーあつぷ!!」

「……………」

素早くはあるが、無駄なモーションが在り過ぎる、この少女の大振りな斬撃を、木場は既に見切っているとばかり、悉く躲している。

戦闘中に何を妄想しているのか、興奮して呼吸(いき)を荒ぶらせ、顔を艶やかに赤くした狂気を帯びた笑顔、まるで斬られるのを望むかの様な その言動に、木場は軽く引いてしまう。

……嗚呼、何となく解ったよ。

この女（ひと）、こーゆー女（ひと）なんだ…

何となく察してしまった木場。

「もう良いでしょう？」

既に、貴女の剣筋は見切っています！

そもそも先の大蛇、あれに苦戦していた貴女では、僕には勝てない  
！」

反撃を待つかの様に、嬉々として、当たる気配の無い剣を振るう残念美少女に、先程の蛇型モンスターを引き合いにして自力の差を唱え、降参を呼び掛ける。

「苦戦だど？馬鹿を言え!!」

あの蛇の締め付け、外そうと思えば、あの蛇の体を内側から引き千切る等して、何時でも外せたわ!!」

「はあ!? だったらアンタ何故、それ直ぐに やらなかつたのよ?!」

しかし、それに返ってきたのは、木場からすれば、想定外の答え。

それには身内の、三つ編みの少女からも、非難の声が上がる。

「何を言うか、ジャンヌよ。」

私は先程も言ったではないか。

あれ程の きつつい締め付け、そう頻繁に味わえるモノでは無いと

…

それを この男は、まだ十分に堪能しきれていない時にい、だなあ

…!!」

「ららら…ララティーナああーっ!!」

お前の変態趣味に、この私を巻き込むなあーっ!!!

この、弩M戦車がああああっ!!!」

まさかの真実に、ジャンヌは顔を真っ赤にした怒り顔で、声を張り上げて味方である戦車…ララティーナに向かって怒鳴りつけるが、

「また…変態と、言ったな？」

…… (／／／▽／／／) …くうく…

このポニーテールの少女は、『変態』という単語(ワード)に過剰反

応し、顔を赤らめて悶えるだけで、何も堪えていない様子。

カキイン…

「くっ…い」

しかし そんな お馬鹿な内輪揉めをしながらも、口だけでなく、身体も ちゃんと動かしているララティーナ。

次第に その攻撃は精度を増し…たりはせずに、未だ木場にクリーンヒットする事は無いが、反撃する隙も見せたりはしない。

「こうなったら…」

【双覇の聖魔剣（ソード・オブ・ビトレイヤー）！

…ver. ムラマサ!!」

今迄防御だけだった木場の掛け声で、聖魔剣が両刃の西洋剣でなく、片刃の日本刀の形状…聖魔刀へと姿を変えた。

そもそも木場の剣術の師匠でもあるサーゼクス騎士は、元はとある結構有名な日本人剣士。

その彼から指南を受けたのは、今は喪われた日本の古流剣術。

それ故、木場のスタイルは、実はカタナで振るう方が、相性が良かった。

「でえいやあっ!!」

バキッ!

「うがつ?」

正眼の構えから、騎士の特性を存分に活かした、高速の踏み込みから放たれた横薙の胴一閃。

剣の形状が変わった際に生じた、その刀に注意が注がれた僅かな隙を見逃さない、木場の一撃が決まった。

「安心して下さい…峰打ちですから。」

倒れ込んだ少女に、木場は一声だけ投げ掛けると、

「どうせ貴女も…此処で退いてはくれないん…ですよ?」

「ああ。当然だ。」

しかし…

その質問、少しだけ早すぎは しないか?」

「???」



もう1人の敵である、ディオドラの騎士の少女に、戦意の確認を問う。

しかし返って来たのは、質問の内容に対しては肯だが、質問そのものには否と云う応え。

「痛たたた…」

「ええっ!？」

そして その直後、ララティーナは死体が蘇るが如くに立ち上がった。

「馬鹿なっ?!」

確実に気絶させた心算だったのに!？」

「あははははー良い、良いぞー!」

今のは かーなーり、好い一撃だったぞ!!」

「ふっ…そのララティーナの防御力、硬さは我等ディオドラ様の眷属の中でも随一!」

今な一撃程度で、簡単に落ちるとでも思ったか?」

驚く木場に対し、何だか凄く嬉しそうに その攻撃を誉めるララティーナと、そして どや顔で、身内の頑丈さを誇らし気に解説するジャンヌ。

「ハアハア…さあ!もつと打ってきてみる!!」

今度は峰でなく、刃の方でな!!」

「うう…」

余程 気に入ったのか余程 好い一撃だったのか…薬物中毒者の様な血走ったイった眼と荒々しい息遣いで、次なる攻撃をララティーナが要求してくる。

「さあー早くー早くー!」

「う…うわあああゝゝゝゝっ!!」

そして我慢の限界が天突したのか、木場に特攻を仕掛けるララティーナ。

それに対して多少 引き顔の木場は、まだ得物の間合いの外で在るにも拘わらず、聖魔刀を振り翳し、



「さあ、一思いに直ぐに殺せ!!」

『いや、そんな事は本当にしないから!!』

『おい、ララティーンナ…』

「このイケメン君、本当に泣きそうな顔になってるから、ちよつと止めてやれ…」

「やだ…木場君で、そんな悪魔（ひと）だったの…」

「嘘!そんなの、嘘よ!!」

「それって、兵藤と変わらないよお?!」

「駄目よ!木場きゅん!

「そんなの、絶対に駄目なおつ!!」

「そうよ木場君!そーゆーのは、私に…」

「二副会長お!!」

「あの男は、ああいうヤツだったのか…」

「イケメンは何をやっても許されると、勘違いしている輩の典型ですね…」

「サイテー。」

「ぎゃあーーーーーっはっはっはあい!!」

木場（イケメン）、ざまあwww

モニターの中の会話で、生徒会（うち）の腐女子共やサイラオーグ様、そしてシーグヴァイラ様の女性眷属の皆さん、只今大絶賛どん引き中。www

「いや、俺は木場（アイツ）が そーゆーキャラじゃないのは分かってるが、面白いからフォローや弁護は、しないでおくwww。」

「多分 今頃、VIP（アツチ）の部屋の神崎も、腹筋全開で大笑いしてるんじゃないかな?」



「と、兎に角、彼女は暫くは動けないし、どうせ貴女も、退く気は無いのでしょうか?」

「…だったら!」

「シャキィ…」

「この周辺を取り巻く気不味い雰囲気を誤魔化すが如く、木場はこ

の場に居る もう1人の敵である、デイオドラの騎士の金髪三つ編みの少女に、既に此の場では『女は斬らない』の信条も通らないと観念したのか、刃先を向ける。

「ふっ…良かろう。」

噂に聞いた、リアス・グレモリーの聖魔剣遣い…相手に不足無し！

このデイオドラ・アスタロト様が騎士、ジャンヌ・ダルクが相手となろう！」

「じゃ…ジャンヌ・ダルク?!」

細剣を構えての彼女の名乗り、そのフルネームに、木場は驚きの顔を見せる。

「ふっ…察したか…。」

如何にも私は、15世紀のフランスで…(中略)…の、あのジャンヌ・ダルクの魂をその記憶の儘に受け継ぎ、今に生まれし者だ!」

「そういう設定?」

「いや、違うから!」

設定とか、そんなのでなく本当だから!!」

木場の『設定』という言葉に、少女は涙目で必死に否定し始めた。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

成る程、そういう設定か…。」

木場の相手…弩Mの次は、電波か。

「……………」

…って、彼女を見たミカエルが、凄く気不味そうな顔をしているが…もしかして本当に御本人(マジ)?

「ミカエルちゃん?」

「…はい。皆さんの察しの通り、彼女は あの”聖女”ジャンヌ・ダルクの魂を受け継ぎし者です。」

俺と同じ疑問を感じたのか、セラフォールの話し掛けに、当時の彼女に託宣を告げた本人が、それを認めた。

「ジャンヌ様…!」

そして それを聞いた、同じ”聖女”の肩書きを持っているウチのシスターが、そのビッグネームの登場に、瞳を輝かせて画面を見つめ

でした。

その際、余りの感動に、思わず両手を合わせて祈ろうとした処を、サーゼクスさん、グレイファイアさん、セラフォルーに、必死に止められたり。

「しっかし…何で、その聖女様の転生者とやらが、天界でなくて悪魔側に居んだ？」

「う…」

このデスマスクの疑問に、ミカエルが言葉を詰まらせた。

「一応は、彼女の存在を確認した時点で、我々の側へとオファアを持ち掛けたのですが…」

「あく、もしかしてアレか？」

悪魔になった経緯は知らんが、少なくとも国の為 神（笑）の為に戦ったにも拘わらず、テメーの名誉欲（メンツ）の為に自分を裏切り、異端として始末した教会や、その時に救いの手を差し出さなかった天界は、もう信用出来ないから お断りとか言われて、拒否られたってか？」

「カツハアツ!？」

「み、ミカエル様あ!？」

このアザゼルの推論がジャストミートだったのか、ミカエルがダウン。

これに、先程のポニーテール戦車の発言で、また墮天しかけた お付きの秘書天使サンが慌てて介抱に付いた。

「ん〜。確かに それで、その20数年後に、『 m ( | | ) m スイマセン、やっぱし異端じゃなかったです』とか言っても…ねえ？」

「確かにね☆」

「ゲボファアアツ!？」

「み、ミカエル様あーっ!!？」

そして この天使長にトドメを刺したのは、2人の魔王（シスコン）だ。



カイイン…!!



「ふん…可能ならば、純粹に劍術の優劣で勝負を決めたかったが、腕は互角…」

いや、認めたくは無いが、僅かに貴様の方が優れている様だ…。」

少女は若干、悔しさを浮かべた表情で　そう言うと、聖劍を横に向けた構えで呟いた。

「禁手化（バランス・ブレイク）…!!」

バアアアツ!!

「な…これは?!」

ジャンヌの禁手化の声に神器が反応して、彼女の周りに、彼女を護るかの様に、無数の聖劍が…持ち柄の無い、純粹な刃だけの聖劍が召喚される。

パリン…

そして其れ等は直後に粉々に砕け、更なる無数となった刃の破片は1ヶ所に集中して固まるかの様に纏まり、

「こ、これは…?」

身の丈3呎程の、聖銀の刃を鎧の如く、全身に被ったドラゴンに変化したのだった。

「さあ、殺ってしまえ、ガーラント!!」

『グオオオン!!』

ジャンヌの声に反応し、このガーラントと呼ばれた白銀の竜が、木場に襲い掛かる。

「そのガーラント、爪や牙は当然　聖劍その物、口から吐くブレスも聖劍の粒子から成っている!

如何に聖魔劍遣いの貴様でも、自分が創り出す以外の”聖”属性の攻撃は耐え凌ぐ事は出来まい!!」

ダツ…

そして　それと同時にジャンヌ自身も、最初から　その手に持っていた、細劍型の聖劍で木場に斬りつけてきた。

「この私とガーラントの同時攻撃…」

実質2対1となった今、貴様に勝ち目は無くなったぞ!

さあ、観念しろ！

リアス・グレモリーの騎士よ!!」



一方その頃…

「ふふふ…おチビちゃん達、覚悟は宜しいかしら?」

「あわわ…この女(ひと)、怖いですう…」

「ギャー君。ギャー君は後ろに、下がっていて下さい。」

小猫とギヤスパーは、中央エリア2Fでディオドラの女王(クイーン)と対峙、

「…雷よお!!」

ドツゴオーン!!

「く…キリが無いですわあ…」

転位魔法陣で飛ばされた朱乃は、地下迷宮エリアでモンスターの群れと戦闘中、

「うゝうゝ…一体此処、何処なのよ?」

「完全に迷ってしまったによ。」

そして偶々に合流した後、朱乃と同様に転位魔法陣の罠に揃って仲良く引っ掛かった、滅威弩服の乙漢と紅髪の駄肉姫は、南エリアで迷子になっていた。

続く





『くえええっ!!』

次から次へと、モンスター、ウザい!!

「によー!」

バキイ!

『ぐぎやわー!』

「リアス様、こっちも片付いたによ。」

「あ…ありがと…」

あく、本当に（転位魔法陣で飛ばされての偶然だけど）ミルたんとか流出来て、良かったわ〜!…て、此処って何処なのよ?!

「迷子になったによ。」



「せいやああつ!!」

カキイイン…!

「…っ!!」

新たに創造した聖魔刀を用いた二刀流のスタイルで、木場がジャンヌの持つ二振りの曲刀の内の一本を弾き飛ばした。

「貴女は言った!」

『如何に聖魔剣遣いの貴様でも、自分が創り出す以外の”聖”属性の攻撃は耐え凌ぐ事は出来まい!!』…と!!

…しかし其れは、貴女も同じ事!」

「!?!」

蛇状の尾の猛攻を掻い潜り、ジャンヌの正面、漸く自分の間合いを位置取る事が出来た木場が、二刀流聖魔刀を構える。

斬×2!!

「ぎやあああつ!?!」

木場の斬撃の軌跡は十字架となり、ジャンヌの鎧の胸元に刻まれた。

「僕の聖魔刀も一応は、”聖”属性も持ち併せていますから…

それを…十字架の形で打ち込んだから、ダメージ倍増でっ…しよ。

う…うっ!!」

「ふっ…また峰打ちで よく言うっ…

まあ、決着を着けるには、十分だったが…

うう…しかし その斬撃を十字架…に、放つ行為が、自分にも多少なりダメージが来るのは、想定外…だったか？」

「ええ…そうですね…」

金輪際 封印ですよ、これ。

でも大丈夫、貴女程のダメージは、受けていませんから…」

「そりゃ…そうd…」

会話の途中、ジャンヌは其の場から姿を消す。

『ディオドラ・アスタロト様の騎士（ナイト）1名、リタイアです。』  
そして城内に、彼女の戦線離脱（リタイア）を告げるアナウンスが流れた。

「さて…と…。」

そう言つて、木場はフロアの天井を見据えると、この中央エリア最上階の”王の間”を指し、歩み始めた。

「…待て!!」

「??」

しかし、そんな木場を呼び止める声。

「き、貴様あ…この私を、此の儘に しておく心算かあ!!」  
「……………」

急所を外されて致命傷は避けられ、強制リタイアは避けられているが、未だに身動きが出来ないララティーナである。

「…すいません、急ぎますので…」

タタタツ…

しかし木場は、振り向く事無く彼女に一声だけ掛けると、其の場を走り去って行くのだった。

「くうく?!ほ、放置プレイとは、とことん鬼畜な男だ…」

私が もし、ディオドラの眷属でなければ、惚れていた…かもな…」  
そして その後ろ姿を見て頬を朱に染め、恍惚な表情を浮かべる変態が1人。



ガチャ…

「り、リアスう?!」

「ディオドラ!?!」

リアス&ミルたんが、其処がディオドラ陣営の拠点がある南エリアと知らず、とりあえず上へと各フロアの登り階段を進み、登り階段が見当たらない、最上階フロアと思われる一室の扉を開いてみると、其処には今回のゲームの相手チームの王(キング)である、ディオドラ・アスタロトが。

『……………』

そして上下、太い白と黒の横縞模様の衣服に身を包んだ身長2.1超えの、メタボ体型な大男。

「ななな…何で此処に…?」

「はあ?きききき、決まってるでしょ?」

貴方を斃し、一気にゲームを終わらせようとしてる他に、何が有るってのよ!?!」

片や いきなりの襲撃に驚くディオドラ。

片や迷子になっていたら、偶々相手チームの拠点に辿り着いてしまったリアス。

両者共に、テンパって…特にリアスは、迷子になってたのを誤魔化すが如く、

「さあ、覚悟なさい!」

ほ、滅ぼしてあげるから!!

ミルたん、行くわよ!!」

「によー!」

大見栄を切ったオーバーアクションを取り、戦闘の構えを見せる。「な、何をやってるんだよ お前!」

メイコにアイツ等から、僕を護るように言われてたんじゃなかったのか?」

『……………』

戦闘態勢の2人に対して、この大男…ディオドラの女王(クイーン)・メイコの使い魔の男は、それに何する事無く、ぼおくと見て立っているだけ。

「(ボソ…) 油断を誘っているのかしら?」

「(ボソ…) …だと、思うによ。」

そんな使い魔に、リアス達は尚の事 警戒、慎重に様子を窺う。  
「だから、さっさとアイツ等、片付けろって!」

お前、後でメイコに お仕置きされても知らないからな?!」

『(ニマ…) …………… (／＼／＼／)』

ディオドラは この使い魔に、リアス達を攻撃するように囁けるが、使い魔の男は”お仕置き”という単語に反応、何を頭の中でイメージしたのか、満面の笑みを浮かべ、尚更動く様子を見せなくなつた。

「(ボソ…) ねえ、ミルたん?

ディオドラの あの焦り具合…って…?」

「(ボソ…) 絶対に、演技によ。」

「(ボソ…) や…やっぱし?」

ディオドラは全く動こうとしないボディガードに、かなり真剣(マジ)に焦っているのだが、その真剣(マジ)っぷりが却って、迫真の演技だと錯覚しているグレモリーの2人は、なかなか踏み込めない。

『リアス・グレモリー様の騎士(ナイト) 1名、リタイアです。』

「!!」「ゆ、祐斗?!」

そんな空気の中、またも流れる戦線離脱者(リタイア) 報告のアナウンス。

リアス達、そしてディオドラが室内のモニター画面に目をやる。

其処にはダークオレンジのブレザーに、膝上15センチ位の Red & Blackのチェックのスカート、ブラウスは胸元の敢えてボタンを外した その豊満な胸を強調しているかの様な着付け、銀髪をアツプで纏め、鋭角的ラインの眼鏡を掛けた少女が、競馬鞭を手に持ち、カメラ目線で妖艶に嗤っている姿が映っていた。

「ほ、ほら見ろよ!」

メイコだって仕事してるんだぞ?

お前も きちんと言われた命令をこなせば、後からメイコに御褒美

…!!

いや、GO★HO★U★BI★が、貰えるかも知れないぞ!!」  
『…!!?』

リアス達が木場退場のアナウンスを聞いて動揺してる中も、何とかこの使い魔の大男に動いて貰おうと、必死なディオドラ。

先程の”お仕置き”という言葉に対する反応を思い出し何か閃いたのか、今度は”御褒美”…それを少し違うイントネーションで発した時、この男の元から小さかった目が、本の僅かだが鋭く見開き、眼光が宿る。

「むん！」

「うわっ？」

どん！

「ええ？」

そしてディオドラの胸元を強く押し叩き、部屋の隅まで飛ばす。

この仲間割れにしか見えない流れに、リアスも困惑。

「痛たた…何、するんだよ?!お前!!」

壁に痛打した腰を抑えながら、ディオドラも、その一見、只の線にしか見えない糸目を少しだけ涙を浮かべながら見開き、文句を言うが、

ニヤリ…

この部屋に召喚されてから ずっと、ぼおつとした無表情だった人物と同一とは思えない程の悪い笑みを浮かべると、左掌をディオドラに向け、

「ふんむー！」

どっどっどっど…!!

ディオドラの足元手前、床から突き出る様に、無数の黒い鉄の棒を出現させ、それらは全て、天井まで突き刺さった。

「こ…これは もしかして、僕を守ってくれてる…のかな？」

それは端から見れば、ディオドラが鉄格子の檻に閉じ込められた凶にしか見えないが、魔力に通じている者だからこそ、これが強力な防御結界だと理解も出来る。

ニイ…

大男は再び、黒い笑みを己の主の主に向けると、今度はリアス達を凝視、

「うがーーーーーっ!!」

狙いを定めての突撃を仕掛ける。

「ひえっ?!」

その余りの迫力に、リアスは一瞬怯んでしまうが、

「リアス様!!」

ガシイッ!

彼女を守るべく、一步前に踏み出たミルたんが、この猛追を体全体で受け止め、

「み…ミルたん?」

「によによによによによ!」

「むーーーーーん!!」

この使い魔の男とロックアップの体勢、その儘 力比べが始まった。



「ふん…雷の巫女…か…」

「あらあらあら?」

そういう貴女は、【監獄女王（プリズン・クイーン）】さん…ですね?」

場所（カメラ）は移り、中央エリアの最上階。

王の間の入り口にて、リアスとディオドラ、2人の女王（クイーン）が対峙していた。

「部屋の前で立ちんぼって、何か有ったのですの?」

朱乃が自分より先に最上階に辿り着いた、ディオドラの女王であるメイコが、王の間に入らず、その扉の前で立っていた事を尋ね、

「フン…扉を見てみる。」

「あらあら?」

メイコに言われる儘に、両開き式の2枚扉を見てみると、その扉のノブは左右共に、“右の手”を差し出している様な、奇抜なデザイン

だった。

「悪趣味ですわ…。」

「それには同意するが、今は そういう問題では無い。」

つまり、この扉は基本、” 2人の人物が同時に右手を差し出さないと開かない” 仕様なのであった。

「せーのっー!」

ギギイ…

2人で扉をノブと握手する様に開くと、

『キシヤアアアアアアアアアアアア ツ!!』

「!?!」

王の間で待つていたのは巨大な…青い鱗に黒い羽、髑髏を象った首飾りを下げた、四本腕のドラゴン型モンスターだった。

「でえいやー!」 「雷よお!!」

ビュン!

ドツガアツ!!

『グエエエツ!!?』

しかし これを、メイコが手にしていた競馬鞭型の神器から放たれた真空の刃と、朱乃の召雷で瞬殺。

「確か…今回のゲームの勝利条件の1つ、王の間の制圧条件は…」

「…その部屋の” 守護者 (ガーディアン) ” を斃した、その上で…」

2人の女王は、確かめ合う様に呟き合い、互いに戦闘姿勢を取る。

「其の場に居合わせる、室内の敵を殲滅する事!」

ズガアツ!!

そして言葉を重ねたと同時に互いが放った、真空刃と雷撃が衝突、距離を取っていた2人の中間位置で相殺された。

「やるな雷の巫女!

ならば私も、本気を出さねばなるまい!!」

そう言うメイコは、右手に持っていた神器を顔の高さ、真横に構えると、

「…禁手化 (バランス・ブレイク) !」

カッ

「ううっ?!」





つマンを彷彿させる様なド迫力な肉弾戦に釘付けだったが、もうそんなの観てる場合じゃないぜ!

「いつええ〜つい!!」

パアン!

とりあえず、恐らくは同じ結論に至ったのであろう、不意に目が合ったサイラオーグ様とハイタツチ(両手)さ!

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

「あ、朱乃お〜〜〜〜〜つ!!?」

どっこおー~~~~~つん!!!

「あ、ーっ?! このバカキエル! テメー、何て事をしやがるんだ!」

「だ、黙れ! 朱乃の肌は、誰にも晒させんぞおお!!」

あのデイオドラの女王の攻撃で、朱乃先輩の胸が露わになった瞬間、バラキエルがマジギレ。

画面に向けて極大な雷光を放ち、モニター半壊。

画像が不鮮明に乱れ、今度はこれにアザゼルがマジギレ。

因みに現在、

「こ、これロスヴァイセ、この手を離さぬか?

先の短い老人の楽しみを奪うでない。」

「お黙りなさい! このスケベ爺い!!」

貴方は北欧の主神ですよ!

他勢力トップの皆様方の前で、あんな『ひやつはー! 有り難や有り難や(一人ー)』…みないな、破廉恥なアクションは慎んで下さい!!」

オーデインは介護付き添いの戦乙女(ヴァルキリー)に背後から目隠しされ、

「痛い痛い痛い痛い!」

た:確かに大ききさでは負けてるけど、グレイファイアの方が、形も整っていて綺麗で可愛かったかr:痛い痛い痛い痛い!ご、ごめんなさい!!ギブギブギブギブ!」

サーゼクスさんがグレイファイアさんに、超人圧搾機を仕掛けられている。

参考迄にミカエルは、立場的に墮天を怖れてか、自主的に画面に背

中を向け、デスマスクも意外に？紳士なのか、天使長と同じアクションを取っている。

…で、セラフオール？

貴女は何時迄、俺の目を塞いでいるんだ？

「は☆い☆、シリユーちゃんは、見ちゃあダメだよ☆？☆」

「…トーカーさんに、チクりますよ？」

「ごめんなさい。m ( ) m

「ぬおおおっ!!朱乃お~~~~~~~~!!」

「ちい!とりあえず このバカ、抑え付けるぞ!!

おい、サーゼクス!神崎!デツちゃん!

ちよつと手伝ってくれ!!」



カチャ…

「やあ、失礼するよ。」

「やつほく☆♪」

「邪魔するぜ。」

「「「「はい?!?!?!」」」」」

ゲーム観戦中、部屋に入ってきたのはサーゼクス様、セラフオルー様を基とする、VIPルームに居る筈の人達でした。

ええ、これには皆、吃驚ですよ。

「ま…魔王様方が、何故、此方へ？」

余りに突然の来訪に尋ねてみると、

「簡単に話せば、朱乃んの　ぽろり、朱乃ん。パパの墮天使の熊みみたいなオヤジが突然キレて暴れ出して、モニター破壊しやがったんだにや。」

「…それで仕方無く、皆で　あの親バカ墮天使をふん縛って、こっちに来た訳です。」

それに答えたのは、黒歌さんと神崎君。

「…で、アッチのアレは、何なんだ？」

「「「「んうく！んうんく!!」」」」」

次にアザゼル…先生が、部屋の隅で縛り付けられ猿轡させられ置かれて、匙やサイラオーグ様達、この部屋に居た男性陣全員を指差して、説明を求めてきました。

「…簡単に言えば、リアスの女王の　ぽろりに、感涙しながら馬鹿騒ぎしていた大馬鹿者共（おんなのこのてき）に、修正（物理）を加えただけです。」

それに答えたのは、シーグヴァイラ様。

「じゃ、あれは？」

…支取先輩、何が有ったんですか？」

「…象ウゝサン、象オゝサン、オラわ人気者♪」



神崎君とベツロさん？それ違いますから。



バキイツ！

「ごぶっ!!」

大男の右の剛腕が、ミルたんの首筋に食い込むと同時に、ミルたんの右膝が大男の鳩尾に突き刺さった。

「…強いによー！」

「…………… (ニヤア)」

既に両者、顔はボコボコに腫れ上がっている。

最初の腕の組み合いから今迄、一見互角の展開を見せている2人。しかし、互いの攻撃を受け、ダウンから立ち上がった、その表情は対極的。

決して手を抜いていない、最高の一撃を喰らわせ続けているにも拘わらず、それでもニヤリと余裕とも受け取れる笑みを浮かべる男に、ミルたんは焦りの色を隠せない。



うーん…

プロレス↓ボクシング↓プロレスな展開。

シリユーや小猫、あと、ソーナン所の匙君なんかを観たら、大喜びしそうな戦闘の運びだわ。

それにしても、あの男…

ミルたんの攻撃を受ける度に、顔を歪める処か、悦に浸った様な、凄く嬉しそうってゆーか、幸せそうな顔をしてるのは、絶対に気のせいやね？そうよね？

お、お願いだから、皆も同意して！

コホン…それにしても、眷属リストには載ってなかった、あの大男…

さっきのディオドラの台詞から察するに、ディオドラの女王の使い魔みただけど、本当に色んな意味で、只者では無いわ！

さつきも魔弾での加勢をしようとしたら、ミルたんが一騎打ちに拘って拒否られたけど、本当に大丈夫なんでしょうね？

「んむぐわあぁー………っ！！」

V W A A A A A H !!!

「…つによ!?」

み、ミルたんくっくくくくっ??!

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

肉弾戦から一転、いきなりあのデカブツ、口から特大の魔弾を吐き出しやがったぜ!

これには あの滅威弩サンも不意を突かれたか、まともに直撃し…  
…おお、きつちりと反応していたか!

クロスガードでブロック、ダメージを最小限に抑えたみたいだな。

「魔法戦闘でも、負けないによ!!」

どうやら、今度は肉弾戦から魔力戦に移行するみたいだな。

背中から魔力を練って具現化させたのか、自身の そっくりさんをス○ンドみたいに出現させて、またこの前みたて、カミユの技っぽいアレを繰り出すのか?

「マジカル・ドリーミング・エクスプロージョン!によっ!!」

…って、直接殴るんかいっ!?

どっごー………っん!!

……………。

な…成る程…

拳に爆裂系の魔法を附加させての、2人掛かり?の剛拳打か。殴ったと同時に爆発させる この技で、吹っ飛ばされる巨漢。

「決まったか!？」

「あれは、立てないでしょう…」

紫龍や魔王が眩くが、その台詞を様式美とするが如く、あのデカ男は立ち上がり、

「ぐいふふへ…」

脚をガクガクと震わせながらも、あのデカい顔に比べて小さ過ぎる目を三角形に吊り上げギラつかせ、不気味に嗤う。





正しくオーバーキル。

この危険窮まりない、1人プロレス連携で、デカ男は完全に大の字で動けなくなり、最後は その場から姿を消した。

…その消え際の顔が、凄く悦に入っていた様に見えたのは、気のせいだと思いたい。



「あああ…そ、そんな、馬鹿な…」

「さあ、デイオドラ！

残るは貴方だけよ!!」

倒され、姿を消した使い魔が作ったのだが、それでも消えない鉄格子の檻の中、わなわなと怯愕するデイオドラに、先程の激闘で消耗しているミルたんを下がらせ、今度はリアスが前に詰め寄る。

「とりあえず、貴方も消えなさい！」

これで、終わりよ!!」

「うわ!?…ちよ、止め…」

しかし止めろと言われて止める程、冥界随一の『身内への慈愛』が売りなグレモリー家の御嬢様は、残念ながら身内以外には慈愛の『じ』の字も持ち合わせてはいない様で、特大サイズの滅びの魔弾を掌に精製すると、情け容赦無く撃ち放った。

ガインツ！

「嘘っ?!」

しかし、その滅びの魔弾は、デイオドラの前の鉄格子に阻まれる。

デイオドラの女王、メイコの使い魔が作った魔法障壁の防御結界は、それ程の能力を秘めていた。

「あは…あははははは！」

ど…どうだリアス！

この結界の前では、キミの自慢の”滅びの魔力”すら、通じないみたいだね！」

その防御力を目の当たりにし、先程とは打って変わり、強気な発言のデイオドラ。

「はあ?何、偉っそうに言ってるのよ?!」

アナタだって、その結界で、こつちには攻撃出来ないでしょうが！  
…って言ーか、大体それ、其処から どうやって出る心算なのよ!?  
後ろ側、壁だけでなく、床や天井にも魔法障壁が張られてるから、壁  
床破壊して脱出なんて、無理そうじゃない?」

「え?」

それに対して、リアスは怒り半分呆れ半分での指摘（ツッコミ）。  
つまりディオドラは、その結界の防御力以上の火力でない限り、あ  
らゆる攻撃を受け付けないが、同時に あらゆる攻撃を仕掛ける事が  
出来ない事になる。

ディオドラ自身もリアスの指摘で初めて それに気付き、間抜け面  
となった。

「はあ…つまり、敵の王（キング）撃破と、敵拠点制圧は無理ね…」

…と、なると、後は頼んだわよ、朱乃…」

そう呟くとリアスは、この部屋のモニターに映っている、ディオド  
ラの女王と一騎打ちの様相を成している自身の女王に目を向けるの  
だった。

## 覚悟と決意

ビィンバアツシ!!

「あはははー平伏しなさい!この雌豚!!」

「くっ!!」

防御結界により、現状ではディオドラを討てない(ディオドラ自身も攻撃不可)状況な南エリアのディオドラ拠点、リアスは部屋に設置されているモニターに目を向けると、其処には正しく、THE・女王様な出で立ちのディオドラ・アスタロトの女王(クイーン)が、自身の女王(クイーン)の朱乃を鞭で責め立てている場面だった。

朱乃自身は その一撃は躲しているが、鞭で叩きつけられる事により、その部分が破損。

壁床天井、部屋中に立派な装飾が為されていた この”王の間”は、見るも無惨に破壊し尽くされた姿と変わっている。

「く!此処に居ても、仕方が無いわ!」

ミルたん!朱乃の加勢に向かうわよ!!」

「はいによー!」

ディオドラには手出し不可能:即ち今回の勝利条件の内の、『敵拠点制圧』及び『王(キング)の打倒』は無理と判断したりアス。

ならば残された勝利条件である『王の間の制圧』をクリアすべくと、魔法障壁の防御結界に護られている:と云うか、寧ろ閉じ込められたと言う表現が正解なディオドラを放置して、ミルたんと共に朱乃の援護をすべく、王の間へと向かったのだった。

「た:助かったく:って、僕はもしかして、ゲームが終わるまで、この檻から出られないのかな?」



ビリイッ!

「ぎゃああっ!?!」

メイコの鞭が、朱乃の白小袖を再び引き裂いた。

「:貴女、さつきから:」

も、もしかして、『あっち』の趣味を、お持ちなんですか?」

「はああ!? そ、そんな訳、ないでしょ!!」

女相手に、身の貞操の危険を感じたかの様に、我が身を抱き締める様に露わになった胸を両手で隠す朱乃。

その朱乃から振られた疑問に、顔を赤くして、本気で否定するメイコの追撃の鞭が唸るが、朱乃は悪魔の羽を広げて それを空中に回避。

「…アーシア? 朱乃先輩が肌ける度に、目隠しするのは止めてくれないか?」

「シリューさんは、見ちゃ駄目ですう!」

「は☆い☆ アザゼルちゃんも、あっち向いてようね☆!! ☆」

「な…: 放せ、セラフオール!!」

流星に俺も、親友の娘の乳を見て、はしやいだりは せんぞ!

大体そんなのしたら、アイツに確実に殺されるぜ!!」

「ぬう? ロスヴァイセ! お主、儂に何か怨みでも有るのか?

何故、老人の楽しみもの、邪魔をする?!」

「お黙りなさい! このエロジジイ!!」

「痛い痛い! く、グレイフィア、心配しなくても僕は、キミ以外の女性の裸には、興味が無いから痛たたた!!」

き、厳しいなあ…: 昨夜は あんなにも、素直で甘えん坊で おねだりさんで、凄く可愛かったのに…:」

「…明道流…: 極”駱駝固め!!」

「ぎよえー…: つ?!」

そして この時、その様子がモニターに映し出された時、それを観戦していた殆どの男性陣は、女性陣に様々な形で、その視覚を封じられる。

「ベツロ氏? 先程もでしたが、貴方は画面に喰い付いたりしないのですね?」

「応くう、そりゃあ俺も、若い娘さんの肌に興味が無いと言えば嘘になるが、万が一にも そういう様子を孫娘に知られて、『えつちな じいじ嫌い』とか言われた日にゃ、ショックで自殺する自信が有るからな。」

「くっ…」

観戦の部屋にて その様な遣り取りの中、天井間近迄浮遊した儘、破られた巫女服を、換装により着替え直す朱乃。

「雷よおっ!!」

カツ…

両手を手首の部分で交差させる様に頭上で掲げ、特大の雷撃をメイコに向けて落とすが、

「ふっ…」

「な…?」

ディオドラの女王は それに向けて、手にした鞭を放つ。

すると朱乃の撃った雷は、其れに吸収される様に消えて逝った。

「あははは!! 驚いた?」

この鞭、そして この衣装は、貴女への対抗手段…と云う訳では無いが、偶々に雷撃耐性を備えている!

解る? 雷の巫女?

つまり貴女は、この私を斃す手段を持ち合わせていないのよ!

あははは! そら! そら! そら! そら!!」

ビシバシ! ボオワツ!

「…くう!!」

ドヤ顔で自身の得物の解説をした女王様は、更に鞭での打撃と、それに伴って生じる真空刃で追撃に入る。

「くっ…い 雷よおっ!!」

バシイ!

それを躲した朱乃が、反撃とばかりに雷撃を放つが、

「あはははは! 無駄無駄無駄あ!!」

雷撃耐性を備えたメイコの神器の前に、それは無意味。

「この私に雷撃は通用しない!

それしか攻撃の術が無いならば、最早 貴女には勝ち目は無い!

さあ、覚悟を決めなさい!

リアス・グレモリーの女王(クイーン)!!」

トドメとして振り放った鞭が、まるで蛇の様に くねりながら朱乃

を襲うが、

バチイッ!

「な…!?!」

その攻撃は、魔力で創られた防御シールドによって弾き返される。

「…覚悟、ですか。」

小猫ちゃんも既に、自分の中の血(チカラ)を受け入れている…

確かに私自身も、覚悟を決めなければならぬ時が、来た様ですね。」

「はあ? な、何を、訳の解らぬ事を?!」

ボタン…

「朱乃!」 「朱乃たん!」

「リアス? ミルたん?」

「リアス・グレモリー?!」

その時 扉が開かれ、王の間に新たな客が。

リアスとミルたんである。

「くっ!!」

この時 一瞬だがメイコの顔が、若干歪む。

それも仕方の無い話。

自身: デイオドラ眷属としての、ゲームの勝利条件: 朱乃1人を倒せば良かった筈のハードルが、一気に上がったのだから。

見方を変えれば、この部屋に のこのこと やってきた王(キング)を討ちさえすれば、例えば朱乃とミルたんが生き残っていようと、自分達の勝利となる。

「悪いけど、一気に決めさせて貰うわよ。」

朱乃! ミルたん! 行くわよ!!」

しかし現状は3 v s 1と、どう見ても不利なのは明らか。

「待って!」

あの女(ひと)は、私1人で倒してみせる!

リアス! ミルたん!

手出しは無用ですわ!!」

「朱乃?」



「抜かせ！確かに一見、防御は互角に見えるが、貴女の魔力障壁（シルド）は、その防御力以上の力をぶつけければ破壊出来る！」

メイコは自信な発言。

「引き換え私の神器は、貴女の攻撃手段が”雷撃”で在る限り、この私には通用s……」

バサアツ……

「なあ?!」「あ、朱乃……!!」「によ……?」

しかし、その自信に満ちた口上の途中、朱乃は背中に羽を広げる。

そして、その姿に、その場の者達は、それぞれが、それぞれの意味での驚きの声と顔を見せた。

「ななな……何なのですか?その羽わ?!」

一番驚いているのはメイコ。

何故なら朱乃の背から生えている羽……

右の其れは、一般的な悪魔が持つ、蝙蝠を象った羽だが、左は黒き鳥の羽根から成る漆黒の翼……正しく墮天使を連想させるに他ならなかったのだから。

「朱乃……その姿……」

「……………」。

バサア……

驚くりアス達を余所に、朱乃は天井間近迄飛翔すると敵の女王（クイーン）を刮目、

「はあああああ……っ!!」

バチバチバチバチ……

掌をその敵に向けて、今迄以上の雷を漲らせる。

「あは……あはははは……!」

何をするかと思えば……!

まだ理解出来ないのですか?雷の巫女……!

今の私に雷は効かないと、何度言えば分かるのです……!

確かに悪魔の其れとは違う、黒い翼に面喰いはしたが、結局は雷による攻撃。

それを見たメイコは、余裕と自信の発言と表情から、



「それ！」

ヒュン！

この勝負を終わらせるべく、今迄に放った、数倍の大きさの真空刃を放つが

バシイッ！

「くっ…これでも…なのか…？」

朱乃の張っていた防御シールドを破壊するには至らず。

「ええい!!」

カッ！

そして次の瞬間、朱乃が自らの掌に溜めていた、雷を撃ち放つ。

「はあ？あ、貴女は本当に、雷（それ）しか能が無いのですか？」

そして その雷は、先程迄同様に、半ば呆れ顔なメイコの神器の衣に無効化され

「うぎゃああああっ!!」

…される事は無く、ダメージを与える。

いや、正確に言えば、放たれ”雷”自体は確かに無効化されたが、同時に放たれていた…雷の中に組み込まれていた別の要因…別の属性”エネルギーは無効化される事が無く、そのエネルギーが被弾したのだった。

「クツハア…ば…馬鹿な…？ 今のは…」

対雷仕様だけでなく、禁手（バランス・ブレイカー）状態の神器の衣の防御能力自体が高かったのか、何とか致命傷は避けられたメイコ。

しかし その一撃だけで、女王様の衣はズタズタ、撓わな果実が露わとなり、

「…だから、一々目隠ししなくても良いから！」

「黙れにや！この おっぱいドラゴン！」

「サイラオーグ様！不潔です!!」

「はい、元ちゃんもアッチ向いてる！」

「アザゼルちゃんもだよ！☆」

「レグ君は まだ早いの！」



バラキエルの娘…

その朱乃のカミングアウトに、若干の驚きを見せつつも、メイコは通常形態に戻った、指示鞭型の神器から無数の真空の刃を放つが、  
バスイツ！

「なっ?」

それ等は全て、朱乃の展開したシールドに阻まれてしまう。

「そう…あの忌まわしき堕天使（おとこ）の血（チカラ）を継いだからこそ、雷に”光”を織り交ぜ、本来ならば雷撃が通用しない貴女にも、  
ダメージを通す事が出来た！

…この様に!!」

そして朱乃のターン。

自らに流れる血（チカラ）を受け入れる覚悟を決めた女王（クイーン）が、その力、その魔力を躊躇う事無く全開し、頭上：天井一面に大きく展開させた、稲光が迸る魔法陣に張り巡らせる。

「ひえっ!!」

それを見たメイコは危険と判断、自身を何重もの魔法障壁（シールド）で身を包んで防御を固めるが、

「雷光よおっ!!」

カッ…!!

其処から撃ち放たれるは、従来の雷撃に、堕天使の血を引いているからこそ組み合わせる事が出来る、悪魔にとっては天敵となる”光”の属性。

則ち、雷光。

「きゃああああああああああつ!!?」

それは防御障壁（シールド）等 始めから無いに等しいとばかりに容易く粉碎して、メイコを直撃。

既に雷を封じる術も失っていた彼女は、その威力を十全に喰らってしまった。

「朱乃…」

やっと、やっと前に進めたのね…」

その光景を見て、事情を知っているリアスが喜びの涙を零す。

『ディオドラ・アスタロト様の女王（クイーン）、戦闘不能（リタイア）です。』

此により、リアス・グレモリー様眷属の”王間”制圧の条件が、クリアされました。

よって此の度のゲーム、リアス・グレモリー様の勝利とします！』





部長の順番で、多少の駄目だしを…

何時かの、はぐれ悪魔討伐の時の反省会と比べたら、かなりソフトな内容ですが。

反省会と言いつつ、結構 誉めてくれたり、最後はオチを付けて、笑いを誘ってくれたり。

…それで部長は、”G”型のモンスターと戦っていたのですか…。

”G”のモンスター…

恐らくは巨大な”G”な姿のモンスターだと思いますが…まさか、人型が混じって、「George」とか言ったりは しませんよね？  
それから”G”が相手なら、女の子だったら悲鳴を上げても仕方ありません。

あんなの、絶滅してしまえば良いんです。

「木場は…セクハラは程々にな。」

「ちよ…神崎君？」

「ま…!?」「え…?!」「に…よ？」

そして次は、祐斗先輩の番ですが…ゆ、祐斗先輩?!

「ゆゆゆ…祐斗?あ、貴方…?!」

「エロエロ騎士だにゃ！」

「く、黒歌さん、何 言ってるんですか?!

いや、部長!誤解ですから!皆も!!

ほら、黒歌さんも神崎君も、目が瞞ってるでしょ!」

ふむ…恐らくは あつちの女性眷属との戦闘中、らつきーすけべ的なイベントが起きたのでしょう、シリュウ先輩と黒歌姉様に弄られて、真っ赤な顔で、何だか必死に慌てふためく祐斗先輩。  
凄くレアです。

「そして最後に、朱乃先輩…」

「……………!!」

その後、祐斗先輩に二言三言の真面目な駄目だしと助言をしたシリュウ先輩は、朱乃先輩に話し掛けました。

表情（かお）が一気に強張る朱乃先輩。

「朱乃先輩は…まあ、突っ込み処も多々有るのは有りますが、とりあえずは よくできました、はなまる…ですか？」

「え？」

そんな緊張しまくりな朱乃先輩に、凄く優しい笑みを浮かべて誉めるシリユー先輩。

これには朱乃先輩も、驚いています。

ぽん…

「小猫もそうだけど、己の殻を破った、破れたのは大きいからね。

自分の血（チカラ）を忌みず、或いは恐れずに受け入れた…

それを証明出来ただけでも、今回のゲームは意味が有ったと思う。」

ふにや!?!

ちよ…誉めてくれるのは良いですが、どさまぎで人の頭をぽんぽんしないでくれますか？セクハラドラゴン先輩？

わわわ、私は撫でポで堕ちたりなんかしませんよ？

トーカちゃんにチクリますよ？

…つて、部長も「うん、うん！」つて、嬉しそうに頷いています。

「……………」。

シリユー君に そう言つて貰えると、凄く嬉しいでs……………つて、え？」

そして朱乃先輩。

まさかの優しい発言、それも殆ど不意打ちだったからでしょう。

その決意と覚悟を認められて余程嬉しかったのでしょうか、目から一筋の涙が。

無自覚だったのでしょうか、本人も それに気付いて驚いていますが

…

「あ、シリユー先輩、朱乃先輩、泣かしました。」

「え？」

朱乃先輩には申し訳有りませんが、これは またとないチャンスです。

「あ、いけないんだ、女の子泣かした。」

「え？」







そして このディオドラ、部長と一通り話したと思えば、今度は俺に話し掛けてきた。

「其方のアーシア・アルジェントさんと少し、お話したいのですが？」  
「はい？」

「え？私…と、ですか？」

.....

大丈夫なのか、この男。

あの初対面の日…若手悪魔と魔王と老害の対面の儀があった日の夜、思い出した様にアーシアはオカ研の皆に教えてくれたのだが、実は この男こそ、アーシアが魔女の烙印と共に、教会を追放される原因を作った元凶だったとか。

…深読みかも知れないが、もしかしたらディオドラは、最初からアーシアが教会…延いては天界から追放されるのが狙いで、わざと瀕死を装い、彼女の前に現れた。

その後、悪魔すら癒やす魔女として露頭に迷った処に再び姿を見せ、口説き落として自が眷属にしようとした…

うむ、あの焼鳥男（ライザー・フェニックス）に負けず劣らずな、美女美少女美幼女コレクターならば十分に考えられる話だ。

まあ、それが全て悪いとは、俺は思っていない。

寧ろ、アーシアが天界から飛び出す きっかけを作ったのだ。

その件だけは、ファインプレーだ！

俺の読みが当たっていたならば、この男より先に墮天使や…そして俺が、彼女に近付いたのは計算違いだったのだろう。

……!?

まさか、改めて此の場で、自分の眷属としてスカウトに来たのか？

まあ、それでもアーシアが それを自分の意志で肯と応えるなら、俺は…俺達は、それを止める権利なんかは無いが…?!

いやいやいやいや、ちよつと待てい!!

この男は、女子の前で平気で上半身…胸元を肌ける様な変態だぞ!!?

確かに俺は、アーシアに対して恋愛感情は持ち合わせてはいないが（俺にはトーカーがいるしね）、それでも彼女は、大事な妹みたいな者だ



トーカさんや桐生さんに村瀬さん片山さん…駒王学園の皆さんと出逢え知り合えた きっかけ…

今の私の始まりですから…今は、貴男が あの時、私の前に現れてくれた事に、凄く感謝しています。

お礼を言わせて下さい、ありがとうございます、ディオドラさん。(ベコリ)「

そう、それは、紛う事無き本心。

「あ…ありがとう、アーシアさん。」

そう言ってくれて、僕も、救われた気がします。」

ディオドラさん、さつき迄の申し訳無さ全開な暗い表情が消え、何だか憑き物が取れた様な、スツキリとした顔になりました。

「そ、それから、アーシアさん?」

「はい?」

あ、まだ何か、お話が有るのでしょうか?

「…の前に、赤龍帝殿…?」

「ん?」

「……………? (ボソボソ)」

「…………… (ボソボソ)」

「……………?! (ボソボソ)」

「……………!! (ボソボソ)」

ん?

何やらシリユーさんと、小声で話しています。…って、また私に顔を向けました。

「あ…あの、今この時の ついでと言ったら何ですが、よ、宜しければ、僕と、友達になってくれませんか?」

「ほえ?」

え?ええー………!!?

と、ととと…友達…ですかあ?

「…………… (チラツ)」

「…………… (ニツコリ)」

お友達って…急に言われても…私なんか良いのでしょうか?…



他の面々も、口元を引き攣らせた、乾いた笑みを浮かべていらつしやいる。

…って、あつちの女王（クイーン）も、笑うのを我慢してね？

「シリユーさくん、お友達が増えましたあ♪」

「応、良かったな、アーシア！」

「えへ♪」

そして早速、嬉しそうに交換したアドレスの表示画面（ガラケー）を俺に見せるアーシア。

ぐい…

「…?!」

そして俺は、若干orzってるディオドラの肩に腕を回し、

「どんまいwww」

「うう…」

一声、掛けてやった。

まあ、どうせアーシアの真面目っぷりからすれば、仮に最初から…アーシアが俺達と会う前に、このディオドラが接触していたとしても…どう転んでもハーレムルートは無かったと思うけど？

そして、更に耳元、小声で

「(ボソ…) まあ、これは言わなくても分かると思うが、アーシア泣かしたりしたら、楽には死なさんからね？

例えば…羽と手足引き千切って真っ裸（パ）にした上で、牝の猪獣人（オーク）の群れのど真ん中に放り投げるとか…面白くね？ ww  
w」

「ひ、ひいっ?!」。(。O。L)」

当然、アフターケアも怠らない。(アーシアの)

そして、

「今日の…素晴らしい出逢いが出来た この日を、今は亡き主に感謝します…amen…」

「「「きやあっ?!」」」

「ひいえっ?!」「ふん、や?」

「うわわっ?!」「によによっ?!」

「はわわわ……ご、ごめんなさいいっ!!」

聖女さんのお祈りで、悪魔な皆さん達の頭痛が痛くなったのは、御愛嬌。

いいぞ、もっとやれ♪www

「「「(怒) 笑い事じゃ、無あ〜い!

こ・の、鬼畜ドラゴンっ!! (怒)「「「」  
すばかーん!!

「あじやは……っ!!」



## 悪神、再び!!

8月29日

『シーグヴァイラ・アガレス様、リザインを宣言。』

よって今回のゲーム、ソーナ・シトリー様の勝利とします。』

◇シリユースide◇

「「「「「「.....」」」」」」

「とんだ、泥試合だったな...」

「...だな。」

リアス部長とディオドラのゲームの翌日、若手悪魔同士のレーティング・ゲーム第1戦の最終戦、支取先輩vsシーグヴァイラ嬢のゲームは、最後は支取先輩が勝利を拾った。

その様相を観ていた、魔王達VIPルームの面々は最終的には無言となっていた。

そんな中で、新調されたモニター画面を観ながら、ポツリと感想を漏らしているのは、アザゼルとデスマスク。

：兎につ角、非道い内容のゲームだった!

双方、支取先輩を除く女性陣が、如何にも「私、寝不足ですう」：な、覇気の無い顔構え（肌は何故か艶ってましたけど!）。

まさか本当に一晩中、昨日のゲームのギヤスパアのあの画像を観ながら○○○○してたんじゃあないだろうな!?!?

シーグヴァイラ眷属は、そう面識無いから分からんが、生徒会腐女子は然も有りなんかから怖いわ!

特に、新羅先輩!!



「こ、これは、昨日のゲームとは別の意味合いで、放送は中止だねえ...」  
「こんなの、将来を担う若手の試合として公開する訳には行きませんかからね...」

「うゝ☆、折角のソーさんのデビュー戦だったのにいゝ☆!!」

そう呟くのは、”3”人のシスコン。

昨日のリアスとディオドラのゲームは既に、双方の露出が放送倫理

的に烈し過ぎると云う理由で、放映は中止が決定。

更には その記録映像の媒体も その夜の内に、銀髪のメイドさんと熊みたいな堕天使の男が、それ等を管理保管している放送局に特攻を仕掛け、マスターを含む その全て灰燼と化していた。

結果、これから先、リアス・グレモリーvsデイオドラ・アスタロトのゲームの内容は、紙面か口伝でしか、語られる術が無くなった。  
：そんな互いに動きが散漫な潰し合いの中、一番の活躍を見せたのは匙だった。

修行の際、アザゼルが所持していた籠手や具足、邪眼等の黒邪龍系神器を全て受け取った匙は、結局は禁<sup>フランス・ブレイカー</sup> 手には至らなかったが、現状の神器を十全に使いこなすレベルには達していた。

左手の籠手から延びる、蜥蜴の舌の様なパーツ、ライン。

聖剣でも簡単に断ち斬れない程の耐久力を持つ このラインは、対象に巻き付くと、其処からパワーを吸い取り、自身をパワーアップさせる能力を持つ。

此処で言う”自身”とは、神器の遣い手でなく、神器その物を差す。そのラインを：匙は自らの体に巻き付け、自らの生命力を”餌”にして、神器をパワーアップする戦法を選択。

この捨て身で無双を重ねた匙は、最後にはシーグヴァイラの女王を討ち取った直後、その場で力尽きて退場<sup>リタイア</sup>。

残るはソーナと彼女の戦車の人狼、そしてシーグヴァイラの3人となったが、昨日のギヤスパーションック(笑)から立ち直つてのコンディション抜群なソーナと、朝迄ナニをやっていたのか、体力や精力が欠片程度しか残っていない瓶底眼鏡の令嬢では、既に勝敗は決していたのだった。



「…メガネ対決は、ソーナの勝ちだにや〜!!♪」

ヴオオン…

「！！！！！！！！！！」

それは、黒歌がゲームの感想をポツリと呟いた時。

VIPルームの天井付近に突如、青銀の魔法陣が出現したと思え

ば、その中から魔法陣と同じ色の長い髪、白のローブを纏った男が姿を見せた。

「ごきげんよう。我が主神に魔王殿。

天使長殿、墮天使総督。そして赤龍帝。」

「ロキ!!」

現れたのは、北欧の悪神、ロキ。

その場の全員が即座に身構え、シリユーはアジアと黒歌を、サーゼクスはグレイフィアを庇う様に後ろに下げ、オーデインの御付きヴァルキリー戦乙女のロスヴァイセとアザゼルの護衛として此の場に居る、バラキエルが前面に立つ。

「一応、聞くぞ…」

何用じゃ、ロキ？

此処は、如何にお主と云えど、易々と勝手に顔を出して良い場所では無いぞ?」

「愚問だな、オーデインよ。

知れた事よ。前回の宣言通り、改めて宣戦布告を…ラグナロクの開幕を、告げに来た」

バシイッ!!

「!!?」

◇アザゼル side ◇

北のジジイの問い掛けに、両手を大きく広げてのオーバーアクションで、宣戦布告を告げようとしたロキを、その口上の途中、金色に輝く結界が捕らえ、

「ぐぬぬ…小癩な真似を!

墮天使!これは貴様の仕業だn」

フウ…ツ…

更に俺に、何やら冤罪を吹っ掛ける様な台詞の途中、その結界毎何処かに転移され、この部屋から姿を消した。

「いつえーい!!」

パチン!

…因みに、この結界は其処でハイタッチをかましてる、神崎とベツ

口。

転移は、サーゼクスの術式に拠る物だ。

断じて俺じゃねーからな!? 悪神!!

ドタドタドタドタ…パタン!!

「な、何が有ったのです、魔王様!?!」

「此方の部屋から、尋常でない魔力を感じました!!」

「お兄様!?!」

お? お客さんだぜ。

◇デスマスク side ◇

騒々しい足音と一緒に やってきたのは、リアスちゃんとサイラ  
オーグ、それから…えーつと……………糸目の小僧だ。

リアスちゃん達も若手部屋で、ロキの魔力の波動を感じ、只事では  
無いと思っただらしい。

》》》》

「そ、そんな…?!」

「ロキ…が…?」

「本当なのですか、師匠!?!」

とりあえず隠しても仕方無しとして、魔王が有りの儘を話すと、  
まあ、当然だよな…と、ばかりに驚く若手の3人。

「ヤツは今、俺と紫龍の張っていたトラップで封じ込め、魔王殿の転移  
魔法で、吹っ飛ばした。

あと、3時間は、出てこれねえさ。

この3時間が長いか短いかは、そっちが勝手に解釈してくれ。」

俺と紫龍は、先日のロキの襲来から、次は何時、何処に やってく  
る?…と、ヤマを張っていた。

ヤツは あの時、「近日中に…」と言っていたので、そう遠くは無  
未来、早けりや それこそ、その日の明日での可能性も視野に入れて  
いた。

北欧が他の神話勢力と協力体制を取るのを快く思っていないロキ。  
如何にアイツが、他人の裏を掻くのが得意しゅみな、トリックスターと云  
えども、忘れた頃に…みたいな、じつくりと日を置いて攻撃を仕掛け

る可能性は低いと思っていた。

それで、一番警戒していたのが今日つてか正に今、ガキンちよ達のゲームが一通り終わった直後なタイミングだ。

場所に到つては、オーデインの爺さん曰わく、ヤツは多少、かまつてちゃんを拗らせてるつてゆうから、とりあえずは御偉方に嫌がらせな如く、わざわざ宣言しに来るだろと言っていたので、俺達 嘗てのゴールド・セイント黄金聖闘士2人掛かりの捕獲結界に魔王の転移術式を組み合わせたトラップをこの部屋に：一応、この城の各所や冥界の主要地に仕込んでいたが、ドンピシヤリだったぜ。

魔王によるとヤツは今、レーティング・ゲームに使われる様な疑似空間に飛ばしたらしいから、後は俺達や魔王達、今この部屋に居る各勢力のトップで、その場に飛んで、結界が解けると同時に迎撃フックにすれば、それで終わりだ。

へ？結界に閉じ込めている内に、どうにか出来ないか？…だと？

ふっふっふ…言つたでわないか！

あの結界は、ゴールド・セイント黄金聖闘士2人で造つたと！

そんな外からの攻撃で簡単に崩れたり、内側の対象に良し悪し関係無く影響を与える程な、柔い代物等造つた覚えは無い!! (どやあ！)

「いや、デスマスク…これは自慢するのは、少し違うと思うぞ?」

◇シリユースィde◇

「いや、それは駄目じゃ…」

そうなると正しくラグナロク：貴奴の思う壺じゃわい。」

デスマスク案の、魔王、天使長、墮天使総督、更には北欧主神や俺達 聖闘士等の最大戦力一斉投入は、それこそロキの目論む【ラグナロク神々の黄昏】の引き金に成りかねないと、没にされた。

「それならば、私達が迎え撃ちます!」

…と、名乗りを上げたのは、我等がリアス部長。

そして、

「リアスばかりに、良い顔は させんぞ!」

「ほ、僕だつて!」

残る2人の若き王も名乗り出た。

タイムリミットが設けられている今、冥界の軍勢をかき集める時間も無く、件の空間への転移の発動は、最初に術式を施したサーゼクスさんしか不可能だとか。

同時に転移出来る人数も、限られている。

したがって：

俺

デスマスク

リアス部長

朱乃先輩

木場

サイラオーグ

レグルス（兵士）

ディオドラ

メイコ（女王）

ジャンヌ（騎士）

そして、

「敵は北欧の神の1柱。

ならば当然、私も出向きます。」

オーデインの介護…失礼、護衛として冥界入りしていた戦乙女、ヴァルキリー口スヴァイセ女史。

先日迄着ていたスーツでなく、蒼と銀を基調とした、戦乙女の鎧を身に纏った彼女を含む、この11人となった。

小猫と黒歌も現在、アザゼルが呼び出しているヴァーリ・チームと共に、後から駆け付けける手筈となっている。

ん？ゼファードル？

ああ、アイツは…ゲーム開幕戦でサイラオーグにフルボッコされて、身体は兎も角、心が完全に折れて、既に戦線離脱リタイアしており、昨日からこの場に居ない。

それと これは今から始まるであろうバトルとは関係無い話だが、その余りにも惨めな負けっぷりに、現在グラシヤラボラス家の党首である父親がブチキレ（これは、相手が悪過ぎたのだが）、次期党首の資

格を本当に、自分の甥に渡したとか。

閑話休題。

》》》》

「済まないね…」

「つい この前、若い命を簡単に戦場へと送り込めないなんて、言っただけなのにな…」

「本当に悪いな。結局は若いモンに全て…」

「いや1人、オツサンが居たか（笑）」

「喧しいわ!!」

ルシファアー城の西口玄関にて、サーゼクスさんが俺達に…は兎も角、部長達に本当に申し訳無さそうな顔をしている中、

「お嬢様…これを。」

「これは…?」

「グレイファイアさんが、部長に小さな箱を渡す。」

「部長が蓋を開けると、中には小さな赤い瓶が3つ。」

「フェニックスの涙です。」

「緊急な事だったので、それしか用意出来ませんでした。」

「いえ、ありがとう、グレイファイア。」

「フェニックスの涙。」

「簡単に言えば、エリクサー。」

「死んでいない限りは、どんなに瀕死な重傷でも…ゲーム的に説明すると、HPとMP、そして状態異常を瞬時に全回復してしまう、反則アイテムだ。」

「フェニックス家だけが、精製可能な秘薬らしいが、フェニックスの”涙”と察するに、恐らくは高品質な回復系ポーションに、フェニックス家の者の涙をブレンドした物なのだろう。」

「よし。今度レイヴェルに、『かけそば』の小説や『子狐ヘレン』等のDVDを見せてみよう。」

「シリユー君…リアスを…皆を、頼む。」

「…頼まれた!」

「サーゼクスさんと一言二言 言葉を交わした後、俺達は転移術式

で、ロキが封印された空間へ飛び発った。

》》》》

「そろそろ…なのか？」

「…ああ。」

まるで まだ、CG技術が確立していない頃の特撮ヒーロー番組の戦闘シーンに使われる様な…容赦無く爆薬が使い放題な、掘削現場の様な空間に飛ばされた俺達。

約1時間の遅れで合流した、ヴァーリ達と共に高台から、黄金の光の壁から成る12角錐の形状の、悪神を封じた結界を見据えていた。

俺達 第1陣のメンバーに、ヴァーリ、美猴、アーサー、ルフエイ、ミルたん、小猫、黒歌。

この総勢、18人のメンバーで、ロキを迎え撃つ事になる。

この人数が多いのか少ないのか…そう考えていると、

『おい、紫龍…』

<sup>むかし</sup>前世、此処とは別の世界線だが、嘗て北欧の悪神と戦った事が有るといふ男が<sup>テレバシー</sup>念話で話し掛けてきた。

『…あの時は、<sup>ゴッド・クロス</sup>神聖衣を纏った<sup>ゴールド</sup>黄金12人でフクロにして、漸く勝てたって感じだな。』

ま…まじなのか？

『応。しかも、その時のロキは、当時のアスガルドの地上代行者の”人間”の身体を依代にしたヤツだ。』

正確には、マジ物な”神”様じゃねえ。

だが、今回はマジ物だ。

俺達が戦ったロキと、この世界のロキの戦闘力の差は分らんから正直、この人数でも…って、不安はある。』

…つまり そのロキは、嘗て俺達が戦ったポセイドン…即ち<sup>サンクチュアリ</sup>ジュリアン・ソロやハーデスに身体を乗っ取られた舜、或いは<sup>サンクチュアリ</sup>聖域にて門外不出の歴史記録書に記されている、アローンという人間の様な存在だった…と。

『詳しくは【黄金魂】を観てくれ！』



貴様は一体、誰に向かって言っている!?



「来るぜ!!」

「!!!!!!!!!!?」

デスマスクの台詞に、その場の全員が顔に緊張感を持ち、悪神を封じた結界を刮目する。

ビシィ…ツ…

結界を形成する光の壁が一瞬一際眩しく輝き、その表面に無数の罅が入ったと思えば、それは粉々に砕け散り消滅。

その場に1つの人影を残した。

「あの堕天使め…薄汚い鳥の分際で、よくも神である この私を…」  
それは言わずもがな、悪神ロキ。

自身を封じた(…と思い込んでいる)、この場には居ない堕天使総督の代わりに、シリユ―達を忌々し気に睨み付ける。

「ロキ…その結界はアザゼルの仕業では ないぞ…この2人だ!!」

「おい!」

義父に冤罪をなすりつけられるのを快く思わなかったのか、銀髪碧眼の少年が、その真犯人を指差しながら叫んだ。

「ふん…この際、そんな事は どうでも良いわ!」

チツ…オーデインめ…この私を舐めているのか…?

この場に刺客を送るのは分かっていたが、まさか それが、下等な  
蜥蜴が2匹。

後はガキと…老いた、只の人間とはな!!」

「あゝ?!」 「蜥蜴…だあ!」

「誰が老いてるだ、ゴラァア?!」

俺は まだまだ現役だぞ!!」

「落ち着いて下さい。」

3人共、沸点低過ぎです。」

ガンツ x3

「びびるー!」 「びるびる!」 「びびるびー!!」

そんなロキの挑発に釣れた3人に、小猫が撲クール・ダンウン殺に務める。

「ふん…まあ良い…貴様等の血と肉と骨、そして命を、断末魔を！」

ラグナロクの始まりを告げる鐘の音としてくれよう!!

出よ！我が眷属達よ!!」

どつき漫才にしか見えない遣り取りをスルーしたロキは、魔力を解放、周囲に大小の魔法陣を多数展開させると、其処から剣と盾、甲冑で武装した鬮髑の大群と巨人の集団、更に招雷と共に姿を見せたのは、灰色の毛皮の巨大な3匹の狼と

「……………」

漆黒の衣を纏う見た目だけは、リアス達と変わらない年代の女。

そして

「「「なっ…!?」「」」

「デカ過ぎだにや?!」「」によ！」

全長数キロにも及ぶであろう その身で、戦場の外周を何重にも取り囲む、巨大な蛇…否、ドラゴンを召喚した。

「よし、先ずは俺が、あの雑魚の群れを片付けよう。

老いた人間…とやらを舐めたら どうなるか、あの腐れ神に教えてやるぜ。」

その異形の集団を目にして、一歩前に出たのはデスマスク。

「デスマスク！」

「師匠!!」

「ベツロさん?」

そんなデスマスクに、少しだけ心配そうにシリュー達が声を掛ける。

「ふん…そこの おチビちゃんにも言われたが、残念だがロートル扱  
いされて黙ってる程、俺は大人じゃないんでね。」

「確かに精神年齢は、このメンバーの中じゃ一番低そうd

「喧しいわ!!」

ゴンッ!

「もきゅっ!?!」

「し、シリュー?!」

年長者に敬意を示さない若者(前世込み、実質的年齢は、遥かに年

上)の頭上に、拳骨が落ちる。

「あ痛てて…」

いや、本当に大丈夫なのか？

何の武器…聖衣クrossも無しに…」

「ふん…」

涙目で頭を押さえながら、改めて心配そうな顔をするシリューに、デスマスクは どやな笑みを浮かべ、首に掛けていた、金色のペンダントを取り外し、蟹座…巨蟹宮の紋を象った、そのペンダントを見せ付けた。

「まさか…それは…?」

若干の驚きの顔を見せるシリューに対し、デスマスクは どや顔を更に強め、ペンダントを頭上、天高く掲げると、小宇宙コスモを燃やしながら叫ぶ。

「キャン…ツサア…ツツ!!」

ヴォン…

「嘘おっ!?!」

その時、その掲げた手の上の空間に穴が開き、其処から蟹を象った、黄金のオブジェが姿を現すのだった。

開戦！ラグナロク！！

空間を破り、突如として現れた黄金に輝く蟹型のオブジェ。

カシヤアア…

そのオブジェが複数のパーツに分解され、それ等はデスマスクに向かって飛び立ち、腹部、胸部、脚部、腰部、腕部、肩部、そして頭部の順に装着されてゆく。

「デスマスク…お前…」

「し…師匠？」

「…驚いたか？紫龍？サイラオーグ？」

デスマスクの全身を纏う、黄金の鎧。

その造型は正しく、蟹座の黄金聖衣。

この日、最高などや顔をしているデスマスクが、驚きの余り、あんびりーばぼーな間抜け面を晒している男達に説明を始めた。

◇デスマスクside◇

ぎゃーっはっはっはっは！！

どーだ！驚いたか？紫龍？んんん？♪

ちいつ！不覚にも、スマホは城に置いて来ちまったからな…

この間抜け面を撮れないのは残念だぜ！

さて、説明すると、これは結論からすれば、正確には聖衣じゃあない。

この世界には、ガマニオンとスターダストサンドという物質は存在していないらしく、コイツは100パー、オリハルコンで出来ている。つまり、素材構成的には海皇の眷属である、海闘士が纏う鱗衣に近い…ってか鱗衣と同質だ。

しかし只、オリハルコンを聖衣の造型に仕立て上げただけな訳ではない。

先ずは鉱物の塊でしかなかったオリハルコンを、太陽神アポロンの熱で溶解。

次に俺の、小宇宙を最大限に燃やした状態の黄金の血を、ドロドロになったオリハルコンに混ぜ合わせ、馴染ませる。

そして造型担当は、鍛冶神へパイストス！

この時点で、造型美や単純な物理的防御の面に関してだけは、ムウやシオン様の造った物以上だぜ!!

そして”型”が出来上がったら、再びアポロンの登場だ。

実は今、俺が聖衣を喚び出すギリギリ迄、太陽神の祝福…黄道の陽の光を浴びせて貰っていたのだ。

結果、コイツは単なる硬い鎧なんかでは無い、俺の小宇宙<sup>コスモ</sup>の燃焼により、より強力な力を発揮する、極めて黄金聖衣<sup>ゴールド・クロス</sup>に近い物となっているのだ。

更には…いや、これは、また後で説明する事にしよう。

…因みにアポロンとパイストスは、我が主アテナには何やら諸事情で逆らう事が出来ないらしく、OHANASHIした上で、無償の労働を強いられていたとか。

◇シリユースide◇

…てな、訳さ。」

ま、まぢかよ…

まあ、兎に角 御老体が丸腰で戦場に立っているとゆう心配は無く

n

ガンツ！

あ痛っ?!

「おい お前 今、凄く失礼な事、心の中で呟いてなかったか?」

「きつ、ききき、気のせいだ!」

「そーかい。そりゃーわるかったなー(棒)」

ちいっ! 何て、勘の鋭いジジイだ!!

「ふん…!」

ザツ…

兎に角その、黄金聖衣<sup>ゴールド・クロス</sup>(擬き)を纏ったデスマスクが、俺達の先頭に立ち、

「はあああああっ!!!」

小宇宙<sup>コスモ</sup>を燃焼させ、!!!

「おらあっ!」

蠢き迫る、髑髏兵と巨人の集団に向けて、拳を放った。

小宇宙<sup>コスモ</sup>を燐気に変換しての、積尸気の技でない、只の空拳だ。

どつごおおんっ!!!

「「「ええっ?!」「」」」

しかし、その只の空拳の衝撃波だけで、敵の ほぼ半数が消し飛び、地面には小さなクレーターが出来上がった。

「ちい〜…やっぱ、全滅って訳には往かなかったか〜!」  
「ブランク  
実戦離れってな恐ろしいな…」

成る程…;” なんちやって” 聖衣と思いきや、オリンポスの神が鍛え造ったのは伊達ではなく、かなり本格的な其れの様だ。

或る意味、本物の聖衣<sup>ククロス</sup>よりも本物だ。

「さ…流石は師匠! 素晴らしい!!」

「…伊達に鬼畜指導の権化では、有りませんね。」

「魔術でも仙道でもないにや…」

「はい。…かと言って、単なる物理とも違います。

シリユー先輩と同じ、こすも。」

「とんでもない爺さんだぜ〜い…」

「はい〜!♪」

「凄いな…」

是非一度、手合わせ願いたい物だ。」

「強い!」

これで もう少し、あの方が若ければ…

いえ、この際、歳の差なんて…!!」

「彼からすれば、仮に あの鎧の補助が無くとも、可能な芸当なのでしよう。」

一体” 限界” という” 壁” を何度超えたら、只人が あの領域に立てるのでしようか?」

それが” 見えていた” 者は、その実力に様々な感想を抱き、

「ななな…何なのよ、今のわ?!」

「あのベツロ・カンクロ氏の右腕が一瞬消えて、ピカって光ったかと思えば…」

「だ、大爆発が起きた…だと?」

「あれが、赤龍帝殿の盟友で、サイラオーグ様が師事した人間の實力…!」

「僕の目でも、見切れなかった…」

「拳圧だけで、クレーターを…」

ベツロさんがシリユー君と同じ せいんとって、本当だったのです  
ね…」

「によろ!」

デスマスクの光速の拳が見えてなかった者は、御覧の通り、只 結果に驚いているだけの反応だ。

…って、黒歌は兎も角、小猫も視えていたのに、部長? 貴女が見えてないって…

「ふん! 俺に痺れて憧れるのは後にしろ、ガキんちよ共!

追撃を仕掛けるぜ!!」

「「「は…はい!!」「」」

バサツ:

デスマスクの言葉に、リアス部長達が悪魔の羽を広げ、残りの髑髏兵達が待つ戦場に降り立った。

…って、この駄肉姫!

だから王のアンタが、真っ先に前線キングに降りて どうする!!!?

因みに残る王、サイラオーグとディオドラは、まだ俺達の隣に要る。

◆◆

「バランス・ブレイク禁手化!」

デスマスクの一撃が、戦の始まりを告げる鐘となり、遂に戦いの火蓋が切り落とされた。

先ず、ディオドラの女王クイーンのメイコが禁手化。バランス・ブレイク

「女王様乃調教鞭」!!

さあ、謡いなさい!

ビシイッ!

蝶・最っ高!…な衣装に衣替えした女王様が、鞭を撓らせ一度に数体の髑髏兵を攻撃。

そして その攻撃の余波から生じる真空刃が、更に数体の髑髏兵を蹴散らした。

「ビッグバン・ミルトン波！によーっ!!」

「ごおおおっ!!」

続いてミルトンが、魔力を使った自己流<sup>オリジナル</sup>ドラゴン波で、髑髏兵を粉碎。

「えい…い！」「にやっ!!」

バキツ！　ズバツ！

『ウガアルル!!』

仙氣を纏った小猫の拳と黒歌の爪が、巨大狼の1匹を殴り飛ばし、斬り裂き、

「でええい！」「覇ああっ!!」

斬!! x2

『ルガアルルアアツ!!』

木場とジャンヌが、各々の神器から創造した聖魔剣と聖剣で、もう1匹の狼を斬りつける。

「雷光よおっ！」「消し飛びなさい!!」

カッ…　　ヴァン…!!

朱乃とリアスが、それぞれ雷光と滅びの魔弾を巨人兵へ放ち、

「ひゃっはー！ー！ー！ー！ー！っい!!」

ズバアツ!!

そして召喚した筋斗雲を駆る美猴が、如意棒を振り回しながら死者の集団に特攻、すれ違う全ての敵を斃して行った。

「ふん…い！」

雑魚にしては、楽しませてくれる。

…ならば!!」

ズズズズ…

「!?」

「!?」

自らの手駒を悉く撃破されるロキだが、余裕の姿勢は崩さず、更に追加と言わんばかり、多量の死者の戦士を召喚した。

》》》》



「さて…私達の相手は、お前ですか。」

『ぐるぐる…』

アーサーとルフエイは3匹の巨大な灰色狼…その中でも、一際大きな個体と対峙していた。

「神殺しの魔狼、フェンリル…」

ロキと合間見えると聞いた時、コレも現れるのは、予想はしていませんが…」

「オーデイン様から お借りしていた”これ”が、早速 役に立ちますう！」

『ぐるうああああああつ！』

巨狼が牙を剥き、アーサーに飛び掛かる。

「…くっ!!」

ガキイツ!

その鋭く長い剣歯を、携えていた聖王剣・コールブランドで受け止めるアーサー。

「お兄様！」

その瞬間、ルフエイが懐から取り出した、長さ15程の小さな銀の鎖を、フェンリルに投げつける。

カッ…

ルフエイの手から離れた瞬間、鎖は光を放ち、巨大化。

ガシツ!!

『ぐるああああああつ!!?』

込められていた魔術的效果で、巨大に変化した魔法の鎖枷…グレインルが、フェンリルの身体に纏わり憑き、遂には全身を拘束した。

「グレインル…だと?!」

おのれ、オーデイン! 何処までも!!」

それを見て、先程迄、髑髏兵や巨人兵の軍勢を倒されても余裕を崩さなかった北欧の悪神が、忌々し気に表情を歪める。

『ぐおおおおつ!!』

「さて…私は身動きの取れない無抵抗な者を、甦る趣味は持っていま

せん。

：一思いに楽にしてやりましょう。」

スチャ：

吼えるしか抗う術を持たなくなった魔狼の首元に、聖王剣をア―サーが向けた時、

「待って、お兄様！」

「ルフエイ？」

それにルフエイが”待った”を掛ける。

「どうかしたのですか？」

「お兄様、この子、飼いたい！」

「は？」

ずる…

まさかな発言に眼鏡が ずり落ち、眼が『 3 』になるア―サー。

「る、ルフエイ？」

アナタは こんな時に、何を言っ

「だ・め…？」

明らかに場違いな発言に、クソ真面目が眼鏡を掛けている様な奴（ヴァーリ・談）が、ズレた眼鏡を直しながら、真っ当に自分の妹を諭そうとするが、その妹は上目遣いで瞳を若干潤ませるのONEDAR I。

「：ルフエイ、アナタが自分で寝て、きちんと面倒見ますか？」

「はい!!」

「はあ…仕方無いですね…。」

結果、兄は、折れた。

「何となく察しては いたが…

やはり あの男…シスコンだったか…」

「シスコンだな。」

「シスコンですね。」

「カッコイイのに…」

「な、何だか、スマン…」

チラ： コクン：

一応、確認を取る意味で、その遣り取りを伺っていたであろう、ヴァーリに向けてアーサーが目線を向けると、ヴァーリは小さく頷く。

スチャ：

そしてコールブランドを鞘に納めると、左脇に携えていた、もう一本の剣を抜く。

「あ、あれは、まさか…?」

「エクスカリバー…だと?!

あの男、コールブランドだけでなく…!」

その剣が発する波動に気付き驚いたのは、木場とジャンヌ。

「……………」

そんな2人の騎士の視線を余所に、アーサーは先の大戦で破壊された、エクスカリバーの欠片から復元された7本の聖剣の内の最後の1振り、【エクスカリバー・ルーラー支配の聖剣】の切っ先を、フェンリルに向けると、その儘眉間に突き刺した。

いや、それは突き刺すと云うよりも、刃が魔狼に吸い込まれると云う表現が正しく、剣を引き抜くと、身の丈数10倍も有った巨大がみるみる内に縮んでいき、最終的には成人馬程の大きさとなる。

尤も、それでも狼や犬としては、充分に巨大なのだ。

『きゆうくん…』

そしてフェンリルは、今迄剥き出しにしていた殺気を、最初から無かったかの様に引つ込め、アーサーの前に平伏した。

『くくん…』

「きやはは♪ お座り!」

『ガウツ!』

「お手!」

『ガウツ!』

「おかわり！」

『ガウツ！』

「おちん○ん!!」

『ガウツ!!』

「よしよし、良い子良い子♪」

『をんっ！』

「いや、ルフエイ？」

その場合、『お』、は、要りませんよ？」

大人しくなったフェンリルと魔女っ娘が じゃれあっているのを、  
やや複雑な表現で見ているアーサー。

「…巫山戯るなっ!!」

しかしロキは、その光景を好しとせず。

「え〜い、ミドガルズオルム・コピーー！」

その人間、その駄犬共々、滅してしまえ!!」

ミドガルズオルム・コピーー…つまり、5大龍王の一角を担い、ロキ  
の息子でもある【終末の大龍】スリーピング・ドラゴンミドガルズオルムの複製版とも謂うべ  
き巨大な龍を、アーサー達に睨けた。

複製の龍王は主の命に従い、今迄の傍観の姿勢から一変、鎌首を大  
きく持ち上げると

『キシャー……っ!!』

アーサー達をその周辺地面毎飲み込む心算なのか、大きく口を開け  
て突撃してきた。

ズシャ！

だが その突進は、突如 地面から生え出でた、無数の巨大な黒と  
銀の刃によって阻まれ、その刃の幾本かは、蛇龍の喉元に突き刺さり、  
シュツ！

同時に、何処からか出現した、6本の白銀の曲刀が まるで その  
全て、自らが意思を持つかの様に宙を舞い、蛇龍を斬り刻む。

「シャー……っ!!」

ミドガルズオルム・コピーーが苦痛の雄叫びを上げる中、アーサー達  
の前に立ったのは、

「私達 ナイト 騎士を！」

「忘れてもらっては困る!!」

フェンリルの子供の1匹、スコルを斃したジャンヌと木場。

「あ、ありがとうございます。ごさいますう。」

「1つ、借りですね。」

『ファン！』

「いや、それよりも…」

「ああ…。アレの大きさは、尋常じゃあ無いぞ…」

残念だが私や木場の剣では、与えるダメージも、高が知れている。

絶対に斃せなく…は無いが、時間と手間が、掛かり過ぎる。」

「確かに…コピールと云えど、相手は龍王。」

この【エクスカリバー・ルーラー支配の聖剣】で御せるかは疑問ですし、コールブランドでも、簡単に斃すのは難しそうですね。

消耗戦の末、何とか斃せるか、どうか…」

基本、生物の体力や耐久力は、その身体の大きさに比例する。

確かに如何に聖剣や聖魔剣を以つてでも、この巨大なドラゴンに決定打を与えるには、多少の無理があった。

「こうなれば…ルフェイ?」

「はい、お兄様。お任せあれ!」

それならば別の手段を用いると言いた気なアーサーの呼び掛けに、ルフェイは笑顔で応え、魔力を集中しながら手にしていた杖を回転させながら、

「S ϐ Φ Ψ Β ϕ † † † † ∷ ∷ ∷ ∇ ⊥ ∷ ∷ Γ ζ Й Л Ю ? ( ☆ ◎ ☆ ) ⊙ ⊙ Π { ∞ ∇ ≡ ] ? Ж Ы @ Ш Ь 全々 Π Φ † · Ч Г Α ♯ …」

ヴオオオン…

「え?!」「これは…?」

常人には発音も聞き取りも ほぼ不可能な言霊を唱えると、その場に翠色に光る、巨大な魔方阵が浮かび上がった。

## 怪獣大激戦!!

ヴオオオン…

ルフェイが発動させた巨人な魔法陣。

書き込まれた文字が光り、その輝きが最高潮に達した時、

ずももも…

「な?!」「へ?!」「をん?!」

その魔法陣から、巨大な腕が伸び出でてきた。

どん!

その腕は掌で大地を押しさえ付けると、其処を支点に、身体全身を魔法陣から湧き出る様に徐々に姿を見せ、大地に立つ。

『ごおお〜つく〜ううん…!!』

それは身の丈推定、50 呎オーバーの巨体。

それは全身が削り磨かれた、大理石で出来た巨人…ゴーレムが、壮大な雄叫びと共に現れた。

「な、なな…何なのよ、あれ?」

「ごっつ君です♪」

「はい?」

「だからあ、ゴグマゴグのお、ごっつ君ですう!」

「ご、ゴグマグクうう!?!」

ルフェイの巨人の紹介、そのゴグマゴクと云う言葉に、ジャンヌと木場は驚きの声を上げる。

ゴグマゴグ：嘗て、太古のイギリスに居たとされる巨人。

そして その実体は、古代の民が侵略者の侵入を防ぐ為に造った、生命有る人型機動兵器。

ルフェイが喚んだ、この”ごっつ君”と呼ばれる個体は、数年前にヴァーリ・チームがイギリスの地下遺跡で活動停止していた機体を偶然に発見、その場で機動させて仲間として引き入れた、現在唯一、現存する機体である。

「まさか、生き残りが居たなんてね。」

「白龍皇はゴグマゴグ迄も、取り込んでいたとは…」

既に伝承でしか聞かされていない、巨人の登場に、少しだけ啞然とした顔を見せる、騎士の2人。

「さあつ、ごっつ君！殺っちゃって!!」

『ごおつく~~~~~~~~うん♪!!』

それとは対照的に、活喜活喜とした表情で巨人に指示する、魔女な風貌の少女：所謂「魔女っ娘」。

巨人は それに従い、ノリノリな？返事と共に、眼前の巨龍に向かって行き、

バキイツ!!

挨拶代わりとばかり、その喉元目掛け、強烈なアッパーカットを炸裂させた。

『ギジャアアツ!!』

しかし、ミドガルズオルム・コピーも、即座に反撃に。  
パシッ

古の巨人兵器ゴグマゴグ：ごっつ君の背後から、尾を叩き付ける様に攻撃、更に その尾で、身体全体に巻き付け、大理石（：の様な鉱材）で出来たボディを粉碎せんとばかりに締め上げる。

『ごっつ……?』

それに対して、一緒苦しむ様な声を出した ごっつ君。

そのボディ：黒とダークグレーを基調とした身体が、瞬く間に灼赤色に変化する。

『シャアアアアツ!!?』

すると今度は、複製版龍王が苦痛の声と共に、巨人の拘束を解いた。

「あれは……?」

「はい！あれは ごっつ君が自分の身体を瞬時に熱したんです。

あのドラゴンは、その余りの熱さに、つつい縛りを解いたみたいですね。」

「い、言われてみれば……」

「何だか、肉が焦げた様な匂いが……」

『おをくん……』



カチャ…

「…失礼するぞい。」

「オーデイン殿…」

一方その頃の、ルシファア城。

その一室、サーゼクス達がリアス達からの吉報を待つ中、入ってきたのは北欧の主神、オーデイン。

「ふう〜い…やつと、あの頑固者を説得出来たわい。」

あやつ、ロキがマジに攻めて来た事で、漸く納得しおったわ。

ま、気持ちは解らんでも無かったがの。」

「それじゃ…!☆」

「ふむ。アツチで転移術式を始めとるよ。」

ただ もう少し、時間が掛かりそうじゃがのう。」

対ロキの切り札の1つとして、オーデインが考えていたのが、北欧神が1柱、雷神トールが持っている巨鎚ミヨルニル。

しかし、その持ち主であるトールが、「いくらロキでも、まさか他神話勢力に、正面切つて喧嘩する訳が無い。どうせハツタリ、何時もの悪巫山戯だ。」…と、自分の得物を貸し出すのを渋っていた。

しかし本当に その事態となり、だからと云つて、自らがミヨルニルを持つて出陣するとなれば、本当に最終戦争が勃発する恐れが有る為、仕方無く、ミヨルニルを貸し出すのを決意したとか。

参考までに、フェンリル捕獲の際にルフエイが用いた魔法の鎖枷グレイプニルは、前回のロキの襲撃予告の後、直ぐに北欧圏内に住む、鍛冶師の小人に作らせていた。

閑話休題。

「ミヨルニルの破壊力を赤龍帝に倍化譲渡でパワーアップさせた上で、あのゴツツイメイドに持たせたら、さしものロキも、一溜まりも有るまいに。」

「…でもよ、爺さん、敵はロキだけじゃ無えんだろ?」

一安心…と言った顔なオーデインに、アザゼルが尋ねる。

「…ふむ。真つ先に考えらるるのは、ロキの子供じゃな。」

先ずは、神殺しの牙を持つ巨狼フェンリルと、その子供であるハ



テイとスコル。」

そんなアザゼルの問い掛けに、北欧の主神は顎に蓄えた白く長い髭をなぞりながら、予想出来るロキの手駒を話し出した。

尤も、そのフェンリルは既にアーサーとルフェイによって手懐かされ、ハテイとスコルも、木場とジャンヌ、小猫と黒歌によって それ斃されている事を知らない。

「次男の巨龍ミドガルズオルム…は、龍王と称される様になった頃に、ロキと袂を別っておるから、今更 貴奴の命令なんぞで、わざわざ出ては来んじやろう。」

「…ん。ミドガルズオルムは、今は世界の果ての地中で眠っている筈。何年か前、我がティアマトと一緒に遊びに訪ねた時も、お菓子の1つも出さずにガン無視で ずっと寝ていた。

折角、びしょじよ&びじよが訪ねてきてやったのに、全然起きなかった あの御無礼ドラゴンが、如何に自身の父親と云えど、男の呼び掛けに応じる訳が無い（きつぱり!）。」

「…そ、そう願いたいですね。」

「ん☆ん☆!」

「…って、遊びにって、友達かよ?」

巨狼親子の話の次。

ミドガルズオルムは、恐らくは今回は参戦しないと云うオーデインの考えに、オーフィスもフォローしながらの同調。

それに若干の安心を覚える一同だが、今 件の戦場には、その龍王の模倣体コピが出現しているのを、彼等は知らない。

「…それと末娘、冥府の女王ヘル。」

後はロキに付き従う巨人族や、ヘルの配下の魔獣や死者の兵士共…と、言った処かの。

特に死者の兵士は、あの若者達からすれば、戦闘力は大した事は無いが、数で押してくるじやろうから、ちいと厄介かも知れんのう…」

「…かと言って、我々が大量戦力を投下したら、それこそロキの、思うが儘です。」

ロキの目論むラグナロク勃発を防ぐ為の、少数精鋭の投入。

これが正解か否か、答えが出るのは、もう少し先。



すおおお…

ミドガルズオルム・コピーが大きく息を吸い込み、喉の付け根と両の頬が、風船の様に大きく膨れ上がる。

ボオオウワツ!!

そして そこから吐き出されるのは、業火の吐息<sup>ブレス</sup>。

『ごおつくうくくつん!』

その炎をごっつ君は身体全身に浴びてしまいが、まるで その身は『火属性無効お!無駄無駄無駄あ!!』とでも言いたいが如く、炎の中を突き進み、

ガシイッ!!

遂にはゼロ距離から巨龍の首根っこを掴み、先程の締め付けの意趣返しの心算なのか、締め技…ヘッドロックに捕らえた。

ずっしいーリーーん!!

「うわっ?!」「きゃん?!」「をん?」

そして、立ち<sup>スタンド</sup>から寝<sup>グラウンド</sup>技式の それに移行。

落下の際の衝撃も、ダメージに加えたかったのか、勢い良く尻餅を搗くかの様に身を落とした為、周囲に一瞬、小規模な地震の如くな揺れが起き、

「もくーごっつ君!!」

もう少し静かに、技に入れないの?!」

『ごっつくうん…(、ω、)』

両膝を地に付け、スミニカートの裾を押さえているルフエイが猛抗議、巨龍の頭部をその巨軀に違わぬパワーで締め上げながら、ごっつ君は それに しょぼーんとした口調で応える。

『キシャーリーーあっ?!』

そして その締めめに、苦しむかの様な声を上げるのは、龍王複製版。

この戦場となっている大地を壁の如く取り囲んでいるミドガルズオルム・コピーの胴体も、派手に脈打つかの様に、上下に波立っている。

「あの龍王の劣化版は、ごっつ君に任せて大丈夫でしょう。」

ルフエイは念の為、彼のアシストとして、この場に残って下さい。  
私と騎士<sup>ナイト</sup>の御二方は、リアス嬢達の加勢に行きましょう。」

「はいー!」「ええー!」「うむ!!」

『わおん?』

「あ…アナタも、ルフエイと一緒に、この場にて、お願いします…。」

◇デスマスクside◇

現状は、傍目には俺達のが有利に見える。

こっちは俺に2天龍、王様<sup>キング</sup>が2人と、その眷属君が1人、そして戦乙女<sup>ヴァルキリー</sup>の姉ちゃんが1人、まだ残っている。

それに対して、向こうは…大将のロキに、恐らくは巨人族のリーダー格であろうヤツが1人、神話知識から予想して、多分、ロキの娘であるヘルと思われる女が1人。

そして、その傍らに、双頭のワンコが1匹、様子見な如く控えている。

しかしアイツ等、全然余裕な態度を見せていやがる。

特にロキ。

フェンリルの鞍替えに対しても気持ち切り替えたのか、更にはあのドラゴンも結構ピンチな筈なのに、冷静に戦局を窺っている様だ。

まあ、雑魚が殆どとは云え、数では向こうが圧倒的に有利だからな。

…で、その雑魚を相手にしている、リアスちゃん達は…まだ、雑魚の片付けに時間が掛かりそうだな。

「うわっ!?!」「くわあああっ?!」

…って、ヤバいぞ!

金髪の小僧と爆乳な方の眼鏡の姉ちゃんが、ヤッバいい撃、貫つちまっただぜ?!

「ディオドラ、頼む!」

「は、はいっ!」

そんな2人には、紫龍の指示で糸目の小僧：ディオドラが、フェニックス家特製の秘薬とやらで、回復させるが如く、現場へ飛んで行った。

「ディオドラ様、なんだかRPGの僧侶プリーストポジションですね。」

そう言ってるのはレグルスだが：

ん。さつきも猫っ子の おチビちゃんのピンチに、紫龍の指示でパシラされたしな。

俺も、そう思うぞ。



「でやあっ!!」

ズバアッ!

木場を、そして自分の女王クイーンであるメイコをフェニックスの涙で回復させたディオドラが、その儘その場で魔力を解放、足下の土を石を、矢の様に精製すると、それを巨人に撃ち放った。

「すいません、ディオドラ様…」

「構わないさ。」

それよりも、降り立った ついでだ!

この僕も、攻撃に参加させて貰うよ!」

ズドオッ!

そう言うとディオドラは、今度は地面を隆起させて無数の巨大な柱を作り出し、

「僕の大事な眷属を傷付けたんだ、その酬いは受けて貰う!!」

それ等を巨人に向けて突撃させる。

ブシャアアッ!!

これにより、巨人は交通事故さながらの石柱の押し潰しを連続で浴びせられ、肉塊となった。

「ちよつと…：スプラッター過ぎたかな?」

◇シリユースide◇

あのディオドラ：駄肉りあすぶちよー姫が言うには、世間知らずな お坊ちゃんてな話だが、なかなか やるじやないか!

仲間思いなもの、結構好感持てるぞ!

「おい、神崎孜劉。

フェニックスの涙も尽きたし、そろそろ俺達も、出るべきでは無いか？」

そして白龍皇<sup>ヴァーリ</sup>が話し掛けてきた。

確かにフェニックスの涙は全て使い切ったし、勝負所かも知れない。

但し、ヴァーリは単に、自分が暴れたいだけな発言だろうが。

「…だな。よし、行くぞ！」

「応！」 「はい！」 「承知！」

》》》》

「レグルス！」

「はっ!!」

サイラオーグが自分の兵士の少年に呼びかけると、少年は それに応える様に、その身を本来の姿である、巨大戦斧型の神<sup>セイクリッド・ギア</sup> 器へと変化させた。

ガシッ

それを確と握り締めるサイラオーグ。

「禁手化!!」<sup>バランス・ブレイク</sup>

そして既に、籠手と翼の神<sup>セイクリッド・ギア</sup> 器 発動していた俺とヴァーリと声を揃えての禁手化。

「レグルス・レイ・イザー・レックス  
『獅子王の剛皮!!』」

『Welsh Dragon Balance breaker!!』

『Vanishing Dragon Balance breaker  
er!!』

サイラオーグの斧が、獅子の雄叫びと共に鎧に変化。

俺とヴァーリの神器も、電子音の様な声を放ち、同様に禁<sup>バランス・ブレイカー</sup> 手の鎧に変化。

しかし、それで終わりでは、無い。

俺とサイラオーグは、更にもう一段、次なる進化に踏み出す。

「燃えろ！我が小宇宙よ!!」

カッ：

小宇宙コスモに呼応し、サイラオーグの黄金の獅子を象る鎧が、そして俺の  
真紅のドラゴンを象る鎧が、金色の光を放つ。

「一紅珠黄金龍へルビー・ゴールド・ドライブ」!!」

「真オ・獅ロ子レ王オ乃ン黄金剛皮デレ」!!」

## 戦慄の巨人!!



「覇あああつ!!」

ドツドツドツドツ：

飛翔したロスヴァイセが自身の周囲の空間に、無数の魔法陣を展開、その全てから魔力のエネルギー波を放ち、

「積尸気い！鬼蒼焰ん~~~~~つ!!」

ボオオツ!!

デスマスクが小宇宙<sup>コスモ</sup>から生成した焔気を蒼い炎に変えて、死者の兵士の集団を焼き払う。

「でやー!」

ボウツ!

ヴァーリが差し出した両拳が、連続で魔力の弾を撃ち出し、

「ライトニング・ボルトおつ!!」

轟々ツ!!

サイラオーグの右の拳から繰り出された雷電の球が、巨人に直撃。

巨人は大きく崩れ去った。

「廬山漆星龍珠!!」

そして、シリユーの左拳から、小宇宙<sup>コスモ</sup>と魔力の融合された、破壊のエネルギー波が一直線、その軌道に居合わせていた全ての敵を、討ち滅ぼした。

◇シリユーside◇

「ロキ様！もう これ以上、馬鹿な真似は お止め下さい!」

冥界サイドの総突撃で、漸く隙と言うか、道が出来た処で、ロスヴァイセさんがロキに詰め寄るが、

「ふん！オーティンの御付きか。

生憎だが私は、貴様如きヴァルキリーの言葉に貸す耳は、持ち合わせていない!!」

悪神は一向に相手にせず。

「殺れい！ベルゲルミル!!」

『あゝ あああああ!!』

ロキの言葉に、その傍らに控えていた巨人が…他の巨人と比べても、一際デカい、如何にも この場の巨人を束ねているヤツが、ロスヴァイセさんに殴り掛かってきた。

ばきっ!

「く…」

一瞬 直撃と思われたが、それをロスヴァイセさんは防御系魔法陣のシールドを展開して、ダメージを最低限で抑えた様だ。

「でえいやっ! 廬山龍尾刃!!」

ドスッ!

其処に俺が、鎧の龍翼を広げて飛翔、巨人に対して小宇宙<sup>コスモ</sup>込みの延髄切りの一撃。

『あゝ あっ?!』

ガタツ…

サイズは違えど、人の型で有る限り、人体に於ける急所も同じ。

これが良い感じにピンポイントに極まったのか、この学校の科(化学実験室に置かれてある、人体模型の半身の様に皮膚が無い、全身筋肉繊維剥き出しの巨人が膝を着いた。

「大丈夫かよ、姉ちゃん?」

「先ずはヤツを倒さないと、ロキとは戦えそうにないな?」

此処にデスマスクとヴァーリが駆け付けてきた。

サイラオーグは…

「でえいや!」 「によーっ!!」 「てやあっ!」

あ…ミルたん、木場と一緒に、髑髏兵の大軍に囲まれているか。

流石に あの3人でも、あの数は まだ、手こずりそうだな。

「コイツは4人で! 一気に片付けよう!!」

「おう!」 「はい!」 「うむ!」

◇小猫 side ◇

「ほう? 我の相手は、其方<sup>そち</sup>達かえ?」

「ええ…恥ずかしいけど、そうでもしないと、貴女の相手には、ならな  
いでしょうからね。」



悪いけど このメンバーで、挑ませて貰うわ!!」

白と黒のハーフ&ハーフの長い髪の人に、黒と赤のオッドアイ、要所に黒曜石の装飾と云うか、装甲の付いた、漆黒のドレスを纏った巨乳女に、部長が代表して布告です。

「ほっほ…殊勝な心構えじゃ…」

其方達の様な者…嫌いではないぞえ？」

「行くわよー!」

「…「はい!」にや!」

そして この見た目は私達と同年代ですが、喋り方がバ〇。あなたをリアス部長部長の号令の下に討ちに出るのは、私、黒歌姉様、朱乃先輩…と、ディオドラ様の眷属の、騎士さんと女王のホルスタインメガネの6人です。

◇美猴 side◇

ん…『チーム女子』…とでも、名付けるべきかねい?

あの冥府の女王・ヘルは、駄肉姫さん達に任せて、

「…じゃ、俺っち達は、コイツってか?」

『ぐるぐる…』

「…そうなりますね。」

「ディオドラ殿。この場合は、王である貴方が、指揮を執って下さい。

それで構いませんね?美猴?」

「へいへい♪」

「わ…分かった。」

あの、二首の犬つコロは、俺っちとアーサー、そして目の細い王様の3人で片付けるか。

「覇あつ!」

どつどつどつどつ…

おおっ!

王様の魔力で、地面が盛り上がり巨大な土の壁が現れ、ワンコを押し潰すが如く迫り寄る!

「正面の視界は封じた!」

僕とアーサー氏は左右から、美猴君は、真上から攻める!」

「了解です！」「あいよ！金斗雲!!」  
成る程。

あの土壁は、単なる押し潰してのダメージ目的な攻撃でなく、目眩ましの意味…寧ろ、そっちのが本命だった訳ね。

それじゃ、サクツと殺りますか！

「伸びろ！如意棒!!」

◇ルフェイ side ◇

『ごっくううっん!!』

『ぎじやーりーっ?!』

ごっ君の剛腕ヘッドロックに、ドラゴンが苦しそうな悲鳴を上げていますう！

バシツ！ドスウツ！

抵抗するように、尻尾で ごっ君の身体を叩いたり突いたりしていますが、ごっ君の石の様に硬いボディには、ダメージは有りません。

『ごっくうん!』

ぱっ…

あ、ごっ君が漸く締め付けを放しました。

一気に決めるみたいですね。

『キシヤーりーっ!!』

それに対してドラゴンは、鎌首を持ち上げ、牙を剥き出しに大口を開けて ごっ君に突撃を仕掛けてきました。

がしっ…

しかし ごっ君は それを両手で受け止めると、

『ごっくううううううううっん!』

ごんっ!!

ドラゴンの おでこ目掛けて、強烈な“ごっ君ヘッドバッド”を炸裂！

『キシヤ…っ!』

これにドラゴンが よろけました。

かーなり、効いています。

そして ごっ君は、いよいよフィニッシュへ。

ばかつ…

右前腕のカバーを開けると、其処から出てきたのは、3門の魔導砲。  
ぐぼお…

『キ…??』

それを拳毎、ドラゴンの大口の中に突っ込む ごっ君。

『ごおおおくくくくくうん!!』

カッ…

次の瞬間、ドラゴンの口や目元から、薄いブルーの光が零れたと思つたら、ドラゴンの頭は粉々に吹き飛んでしまいました。

辺りに文字通りな、血の雨が降り注ぎました。

あ、反射的に防衛結界を張って、私もフェンリルちゃんも、返り血を浴びるのは免れましたよ？

ずどおん…!!

そして頭を失ったドラゴンは、持ち上げていた首を地面に落とすと、その儘 動かなくなりました。

ごっ君 v s 巨大ドラゴン：【爆裂ごっ君ブラスター】で、ごっ君の勝利です！ いえいつ!!

それじゃあ次は、お兄様達…は、大丈夫そうですね。

それじゃ、リアス様の方へ、加勢に行きますか。

とりあえず、ごっ君は転移で帰して…

「フェンリルちゃん、行くよ！」

『うをんっ!!』

◇デスマスク side◇

『あゝ あっ！』

ぼうわっ!!

あ、危なっ?!

この巨人、いきなり口からビームみないなのを吐きやがった！

さつき、白龍皇の小僧が両手から撃っていた、圧縮された魔力弾と似ているが…

「ちいつー！」

その白龍皇は、鎧の龍尾みたいなパーツを外すと、それを鞭の様に

繰り返している。

生命力つてのは基本、ガタイのデカさに比例するが、このデカ物はそれ相応以上の物を持ち合わせている。

ヴアルキリーの姉ちゃんや紫龍も、当然 俺も、本気の一撃を放っているが、いまいち火力不足な感は、否めねえ。

しかも この巨人、予想に反して、意外と動きが鋭いときてる。

まあ、見切れなくは無えがな。

…!!?

…つて、紫龍？

「皆、下がってろ!!ぶつ放す!」

紫龍が かなりマジな小宇宙コスモを燃やしている。

こりや、大技繰り出す心算だな。

「行くぞ!ドライグ!!」

『(ハア…相棒…

もう、好きにしてくれ…(——#)』

何やら、ヤツの内に宿っているらしいドラゴンに一声掛ける様に？

一言呟くと、

「龍・鎧・解・装!!」

パカア…

左腕の籠手の部分を除く、赤龍帝の鎧の上半身のパーツが紫龍の身体から剥がれて分解、昼夜の概念の無い、真っ白な空に吸い込まれるかの様に上昇したかと思えば、それ等は剣・槍・トンファー・双節棍・三節棍・円盾が各2ケずつ、12の武器に変形し、

「最後の正義」!!」

N H Y U N H Y U N H Y U N H Y U N H Y U N H Y U N H Y U

N…!!

まるで流星雨の如く、その全てが巨人に直撃被弾した。

あの墮天使とのバトルでも見せた、天秤座ライブラの聖闘士セイントとしての、切り札的な技だ。

「うあ、あ、あ、あああっ!!?」

ずっしーん…



## 戦う少女達！

◇デスマスク side ◇

「おらー！」

「てえいやあつ！」

「ひやつはあくついい！！」

「でえいー！」

「によー……………つ！！」

あの後には、我ながら壮観だった。

俺を含む、天秤座ライブラの武器（擬き）を手にした連中が、次々と目の前の敵を葬って行くのだ。

特に孫悟空の小僧が、某・世紀末モヒカンの如くにノリノリだ。

この俺が言うのもなんだが、どう見ても お前のが悪役だぜ？

とりあえず こつちも、紫龍の大技を喰らい、それでも虫の息ながらも起き上がった巨人を、俺と戦乙女ヴァルキリーの姉ちゃん：紫龍の”ぬーど（笑）”によるショックから復活したロスヴァイセ女史と共に、それぞれ手にした三節棍と槍で、トドメを刺した。

「おのれえ…小娘共があ…！！」

そして、お嬢ちゃんズとヘルの戦いも、決着が近そうだ？

あつちはリアスちゃん達に任せて、俺等は いよいよ以て、ラスボス様と対峙と逝きますか、紫龍よ！

◆◆

ロキの娘にして、北欧の冥府の女王・ヘル。

それに対峙しているのは、リアス、朱乃、小猫、黒歌、メイコ、ジャンヌ。

そして先刻、新たに戦列に加わったルフエイとフェンリルの7人と1頭。

最初はヘルも、この多人数相手にも拘わらず、優勢に戦闘を進めていたのだが、天秤座ライブラの…否、赤龍帝の武具とでも呼ぶべきか、その1

2の武具の内の5つが、自分の相手をしている少女達の手に渡り、それ等を含む攻撃、散開されての全方位からの集中攻撃を受け、戦況は徐々に、ひっくり返されそうになっていた。

「舐めるでないわあつ!!」

鬼女の表現が相応しい怒りの形相と共に、白黒ハーフ&ハーフの髪と黒と紅のオッドアイを赤に変えるヘル。

そして漆黒のドレスの裾の中から、軟体動物の様な触手を無数に：ドレスで隠していた、己の醜く腐食した脚を露わにして、それで今度、自身が周囲を取り囲んでいる少女達に、全方位攻撃を仕掛けた。  
「くっ…!!」「にやつ!」「えいつ!」

ガシツ…

リアスが円盾で触手の刺突を防ぎ、黒歌と小猫が双節棍で叩き落とす。

「はあつ!!」「てえい!」

ザスツ…

朱乃とジャンヌも、それぞれが手に持つ槍と剣で風払う。

「せい!」「やああつ!!」

疾っ! 燃っ!!

そしてメイコが鞭で、ルフエイも火の弾を撃ち出して、それ等を迎撃。

ドスっ!!

「え…っ?!」

そんな中、それ等の攻撃は最初から囿と言わんばかり、不意を突く様に地中より勢い良く這い出た1本の触手が、1人の少女の脇腹を貫いた。

「め…メイコさん!」

「あ…危ない!来るな!!」

「きやつ?!」

血を吐き蹴くメイコに、近くに居たルフエイが駆け寄ろうとするが、地中からは更に無数の腐敗した触手が生え出で、今度は彼女に襲いかかる。

それをルフエイは咄嗟に箒に跨がり、空中に回避。

「くくく…先ずは、1匹。」

何処からか取り出した、巨大な双刃の処刑鎌を構えた冥府の女王が、動けなくなっているメイコを最初のターゲットに絞り、突撃を仕掛けてきた。

「めっ…メイコおっ?!」

「王様！気持ちちは解るが、こっちは こっちで まだ大変なんだぜい!!」

「ちい…っ！ ああ、分かってるさ!!」

冥府の番犬・ガムルを相手取りながら、その様子を見ていたディオドラが、自分の女王の危機に叫び声を上げるが、美猴に嗜められる。

美猴の言う通り、この双頭の魔犬も、この戦闘に先立つて悪神から新たな加護を得ているのか、簡単に斃せる相手では無く。

万能薬であるフェニックスの涙も既に尽きており、残念だが彼女の近くに構える味方達のフォローに期待するしかなかった。

「くそ…下僕1人、も救えずに…何が、王<sup>キング</sup>だよっ！」

◇小猫side◇

『先ずは1匹!』

大鎌を構え、ディオドラ様の女王にヘルが突撃しますが、

「させません!」

Bow!

それをルフエイちゃんが、炎を帯の様に放ち、フォロー。

「にゃー!」

Hyun!

そして黒歌姉様も、裸ドラゴン先輩から借り受けた棍を放って援護です。

そして、

「えいっー!」

確かに世の きよぬーは、敵！テキ！敵！皆 敵!!…ですが、ゲームも終わった事ですし、一応あのホルスタインメガネも、今は味方で



すからね。

流石に見殺しは出来ません。

ここは一先ず、敵視するのは あのヘルだけにしておきます。

ええ、つい昨日、ギヤール君諸共に不意打ちで鞭でシバかれた事なんて、今は もう全く、全然、本当に、これっぽっちも気にしてないですから。

私も同様に、この”赤龍帝の双節棍”とでも銘打ちましょうか、これで追撃です。

因みにアザゼル先生から貰った【墮天使乃撲殺棍棒】ですが、アレは『必ず殺す』と『必ず蘇生』が分離不可のセット能力な武器ですから、今みたいなガチな殺し合いでは意味が無いと言うか、役に立ちません。

「邪魔…するな！」

ドヒュン!!

「二「きやあつ?!」二」

ディオドラ様の女王に対する、私達のフオローが気に入らなかったのでしょうか、ヘルは怒り気味に声を荒げ、またも無数の触手による全方位攻撃。

ガードして直撃は免れましたが、パワー負けして吹き飛ばされてしまいました。

…戦車である私がパワー負けです。

当然、他の皆さんも同様に吹き飛ばされてしまい、多少のダメージを負っている様です。

「死ね!!」

そして半分位は意地になってるのでしようか、あくまでも本命なターゲットは、ホルスタインメガネに定めているとばかり、ヘルは自らが持つ得物の射程に入ると、定石的に狙いは首元でしょうか、その大鎌を一気に振り下ろしますが、

ビュン!

「な…?!」

彼方から突如、黒い炎を纏ったロープの様な物が飛んできて、ヘル

の手首をガツチリと拘束、その動きをストップさせました。

「メイコー！」

「うう…ジャンヌ…済まない…」

その僅かな隙に、ディオドラ様の騎士さんが超スピードを活かし、仲間の女王をヘルの間合いの外に連れ出し、救出に成功。

バアツ…

「な…?!」「う…?!」

そう安心したのも束の間、今度は同じ方角から、翠色の光線ビームが飛んできて、ディオドラ様の女王…めーこさんを直撃い?!

「ええ?」

しかし その光線を受けた めーこさんは、更なるダメージを負う事は無く、寧ろ、致命傷ギリギリだった傷が塞がれて回復しています。これって、まさか…

ドツドツドツド…

どつごお~~~~~~~~ん!!!

「うえごるあらあつ?!」

…つて、ええ!!?

更に今度は、無数のミサイルが跳んできて、ヘルに集中爆撃です!

「……………」

ヘルが面白い? 悲鳴を上げる中、改めて それ等が飛んできた方向を、皆で顔を向けると

「リアス、お待たせしました!」

「へへっ…真打ち登場!!…つてか?」

「ディオドラ様〜!」

「ソーナ?」

「リリー・ララティーナ!!」

其処にはソーナ様と匙先輩、そしてディオドラ様とサイラオーグ様の眷属さんが数名程。

そして、

「癒やしビーム…です!!♪」

凄く嬉しそうな笑顔どやがで、ドラゴン波のポーズを決めている、アーシ

ア先輩でした。

◇ディオドラ side ◇

た：助かったあく！

絶対的なメイコの危機に、ナイスなタイミングで増援に駆け付けたのは、ソーナと その眷属の黒邪龍君、サイラオーグの眷属が数名、そして僕の眷属からは、戦車のララティーナと兵士のリリの2人。

そしてそして、アジアさんだ!!

「この場は我等に お任せを！」

サイラオーグ様は赤龍帝殿達の元!!」

「うむ!!ならば任せたぞ！」

リアスの騎士よ！

この場の指揮は、君に一任する!!

お前達も それで良いな？」

「はいっ!!」

サイラオーグ眷属は自分の主の下に駆け付けると、サイラオーグ本人は彼等に後を任せ、赤龍帝と合流するべく、髑髏の大軍から抜け出した。

「リアス様、僭越では ありますが…」

「加勢します！」

「ええ！よろしくお願いね！」

そしてリリとソーナは、リアス達と合流。

「皆…この聖女が この場から、回復の光線を放つ！」

そして聖女は、この私が全責任を持って、肉壁となつて護つてみせる!!

だから お前達はダメージを恐れず、心置きなく戦え！」

ララティーナは、回復役として参上したアジアさんの護衛の位置に。

確かに参戦早々に、あの癒やしの能力を披露したからには、真っ先に狙われる事になるのは当然だ。

だから そういう意味では、ララティーナは護衛には打ってつけの人選。

尤も彼女は、本当は あつちの髑髏兵の大軍に飛び込んで、成すが儘に蹂躪されたいってのが本心なんだろうなあ…

頼むから間違っても、デコイ 囿のスキルを発動させて、わざと敵をおびき寄せられる様な真似だけは、しないでくれよ？

「加勢、しますよ？」

「ええ。龍王の1人が助つ人とは、心強い限りです！」

そして僕達の処には、ザリトトラ 黒邪龍の兵士…確か匙君…だったかな？

シークヴァイラとのゲームで大活躍を魅せてくれた彼が、駆け付けた。

…が、しかし…

「君、ゲームのダメージは、大丈夫なのかい？」

「…俺はゲームでは、怪我なんかは殆ど無い、生命力を消費した上の自爆みたいなモンでしたから。」

アルジエントさんの神器で、体力を回復させて貰ったから十分ですよ！

まあ、その回復に時間掛かり過ぎたのが、実は遅れて来た理由なんすけどね…」

…らしい。

…って、彼はアーシアさんに、長時間回復して貰っていたと言うのかい？

な、何て羨ましいんだよ?!



この増援の後、最初に戦いが終了したのは

『ぎゃいーん!!?!?』

魔犬ガムルとディオドラチームのバトルだった。

匙が神器から放つ、ザリトトラ 黒邪龍の呪いの炎の拘束が双頭の猛犬を捉え、それによってパワーダウンした処に、アーサーの聖王剣の一閃が、その2つの首を同時に斬り落としたのだった。

「ひゃはーナイスなアシストだったぜい！

ドラゴンの兄ちゃん!!」

「ははは…どーも。」

ニカツと笑いながら、肩に腕を回して労う美猴に、匙も照れ笑い。「まだまだ!」「まだです!」

「え?」

しかし その勝利ムードを打ち消す様に、デイオドラとアーサーが声を出す。

その瞬間、

ずももも…

「な…何じゃあこりやあ…?!」

その場周辺の地面から、恐らくは冥府の女王の権能なのであろう、大量の屍：髑髏兵とは違い、所々に内蔵や骨が剥き出しとなっている、腐敗した肉体を纏う死体の群れが地中より湧き出る様に現れ、デイオドラ達に向かい襲い掛かる。

「おら!」「ちいつ!」

パキツ! 斬!

その個々の戦闘力は大した事は無かったのだが、

「か、数が多過ぎる!」

「何処の無双ゲームですか!」

「いや、このゾンビな集団は、寧ろバイ〇・ハザード…」

それ等を殲滅するには、まだ多少の時間が必要な様だった。



「ちい!小賢しい小娘共!!」

一方、触手に処刑鎌、魔弾に仙氣弾、そして癒やしの光が交差する、ヘルとリアス達の戦闘域。

「くう~~~~~~~~つ!!」

あの触手は なかなか、えげつないぞ!?

私も あれに、この身を貫かれたと思えば…

ハアハア… (／／▽／／)

「ら、ララティーナさん?」

要所で癒やしの光を放つアーシアを背にして、その光景を見守っている重装鎧を着込んだ金髪ポニーテール美少女の、ややバクトル違いの妄想からの呟きに、アーシアも やや引き。

「リアス！皆さん！！」

30秒程、私に時間を下さい！！」

「ソーナ？わ…分かった…」

皆、行くわよ！！」

「「「「はいっ！」「」「」」」

勝負所と見たソーナの申し出に、強力な攻撃を仕掛けると確信したリアスが、それに頷き、他のメンバーと共に、ヘルの足止めに入る。

「行っけー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！っ！！」

どっどっどっど…

先ずはディオドラの兵士のリリが、その背負った巨大リュックから、その大容量さえも凌ぐ質量保存の法則を無視したかの如くな、大量のミサイル弾を発射、

どっごん！

「ぐああっ?!?!」

その殆どはヘルの触手と魔術防御壁に阻まれるが、それでも数発はヒットし、決して少なくは無いダメージを与える。

「…ヴァーナード・ウォールター・ウアーナード・レイチャ…」

それを見たソーナは、リアス達の時間稼ぎの成功を確信、強力魔術の詠唱に入った。

「覇ああっ!!」

「にゃん！」

「でえいやあ!!」

続くは黒歌と小猫が、”赤龍帝の双節棍”に各々の仙気を纏わせての攻撃。

リアスも、”赤龍帝の円盾”の投擲攻撃。

ビシイッx3！

「ぎやああっ?!」

際限無く延びる鎖に連なる武具の一撃二撃三撃が、冥府の女王に炸裂。

「…水よ！氣に満ちよ!! 我が敵は…」

この間にも、ソーナの詠唱は続く。



それでも、仲間のアシストを得なければならぬ程の、長い詠唱を必要とする強大な魔術での一撃を耐えた冥府の女王のタフネス振りに、ソーナは驚きを隠せないが、

「これで最期よ！滅びなさい!!」

即座にリアスが、前面に差し出した掌から黒く光る魔弾…滅びの魔術を撃ち放った。

ヴオン…

紫電を纏った黒い滅びの光弾は、高速回転しながら一直線にヘル向かって飛び立つ。

「ちいっつー!」

それに対し、満身創痍な冥府の女王は両手を前に出して、ガードの構え見せ、

ドオン!

「く…!!」

「え? た…耐えた?!」

両腕を犠牲にする代わりに、自身の完全消滅だけは、何とか回避。

これには先程のソーナに続き、リアスも信じられない様な表情を浮かべる。

「ふ…本当に、潮時だねえ…」

シユウウ…

そして両腕の肘から下を喪ったヘルは、自虐的な笑みを浮かべながら、足元に転移の魔法陣を展開。

「に、逃げる気?!」

「ふん…誰だって、己の命は惜しいさね。」

それに、これだけ暴れたなら、父との義理も、もう果たしたさ。

元より私は、オーディンが他勢力と手を組もうが、然程興味無いしねえ。」

そう言うのと、髪の色を黒と白の2色に戻したヘルは、魔法陣の放つ光に溶け込む様に、この戦場から姿を消した。

》》》》

「ぬ?」「これは…?」「どうよ?」



ヘルが消えたと同時に、木場にミルたん、サイラオーグ眷属が戦っていた髑髏の兵士達が一齐に倒れ堕ち、動かぬ骸と化し、

「へ?」「む…」「何!?」「え?」

デイトドラ達が相手取っていたゾンビの群れも、同様に その場で倒れ崩れ、物言わぬ屍となる。

「:どうやら、死者の兵を操っていたヘルが この場を去った事により、この者達も只の死体に戻った様ですね。」

「:…って事は、残る敵は、漸く あの悪神だけってかい?」

「だったら俺達も、神崎達の処に!」

◇シリユースide◇

どうやらアンデツドの元締めだったヘルを撤退させた事により、雑魚の死者の兵士達は片付いたみたいだな。

だったら…

シユウウ…

「へ?」「お?」「ん?」

「む?」「あら?」「によ?」

「裸ドラゴン先輩の武器が…」

「光の粒になって、消えてったにや?」

「いえ、光の粒子が、シリユーの方に…」

「光が神崎君の身体を包んで、鎧に?」

とりあえず鎧の欠片…天秤座ライブラの武具（擬き）は、返して貰うぞ。

『ふう~~~~~』

ん?どうしたドライグ?

その如何にも『一安心』と言いた気な深い溜め息は、一体何なのだ

?

》》》》

ずらっ!!

「……………」

ロキひとり1柱を、冥界側からのメンバーが誰1人欠ける事無く取り囲ん

だ。

俺。

リアス部長。

朱乃先輩。

木場。

小猫。

黒歌。

ミルたん。

支取先輩。

匙。

サイラオーグ。

…と、その眷属3人。

いや、正確に言えば、ヤツの鎧となっている兵士も居るから4人か。

ディオドラ。

…と、その眷属3人。

ヴァーリ。

アーサー。

美猴。

ルフエイ。

デスマスク。

ロスヴァイセさん。

…総勢、24人で、だ。

更に後方には、回復役のアーシアと、その護衛役であるディオドラの戦車も控えている。

『…うをん!?! (怒)』

あー、悪かった。

お前も立派な戦力だよな、フェンリル。

》》》》

「ロキ様！もう、十分でしょう？」

馬鹿な真似は止めて、投降して下さい！

冥界に…三大勢力に実質的被害が無い今なら まだ、オーデイン様

もサーゼクス様達に…」

「黙れヴァルキリー！

もしかして雑魚が多少 頭数を揃えただけで、勝てる心算か？

私が駒を用意したのは、あくまでもラグナロクに相応しい、派手な演出が欲しかっただけの事。

その気になれば、最初から私一人で事は成せてたわ!!」

ロスヴァイセさんが改めて、ロキに降る様に話を持ち掛けるが、当の悪神は それを受け入れない。

「…話に聞けば、貴様は かなり優秀な人材な様だが、あの老いぼれの介護に追われ、英雄と結ばれる縁が無いらしいな？

どうだ？

貴様こそ、今からでも遅くはない、オーデインを見限り、私の下に就かぬか？

そうすれば、配下の英雄オトコを幾らでも紹介してやるぞ？」

「…な、なあ?!」

それどころか、逆に此の場で、ロスヴァイセさんに対して引き抜き  
の勧告だ。

「……………」。

ろろろ…ロキ様！あ、貴方は阿呆ですか？

そ、そんな しよーもない理由で主を裏切るヴァルキリーが一体、何処の世界に居るとゆうのですか??！」

……………。

ろ、ロツスヴァイセさあ……くん？

その今の間は一体、何なのですか？

燃えろ小宇宙（コスモ）！ 最強の必殺技!!

◇シリユースィde◇

「ふん：如何に雑魚の寄せ集めとは云え、流石に この数は鬱陶し過ぎる：な!!」

BoUWaA!!

「「なっ!?!」」

「げっ?」

「「うっ??」」

「ちいっ!!」

最終局面：とでも表現すべきか。

ロキを除く全ての敵、特にヤツの娘でもある、冥府の女王・ヘルを退け、それはイコール、無限に沸き現れていた死者の兵士を片付け、残すは今回の戦いの首謀者のみ。

それを俺達は全方位から集中攻撃すべく、取り囲んだが：

ん？ 聖闘士<sup>セイント</sup>が1人に対してフクロして良いのか?：だと?

それは あくまでも、一介の戦士同士で闘う時の話だ!

そもそも俺とデスマスク以外は、聖闘士<sup>セイント</sup>じゃないし!

しかも、今回は『神』が相手!

だから、セーフなんだよ!! 閑話休題!

：それに対してロキは、身体全体から、銀色に光る魔氣を立ち上げると、それを その儘、全包围している俺達に向けて放ってきた。

それは魔弾の様な”点”の攻撃でなく、魔力の壁とでも言うべき”面”での攻撃。

つまりは回避不可。

防御して耐え凌ぐしか、術が無いのだが：

◆◆

ドッコオオooooooooon!!

「「うわあっ!!」」

「「きゃああっ!!?!」」

ロキが全方位に向けて飛ばした、魔力の障壁を浴びたりアス達。

それは全員、ガードを試みるも、半数が その攻撃力破壊力に耐えきれず、吹き飛ばされてしまう。

「うう…」

「ら、ララティーナさん?!」

「わ、私は まだ大丈夫だ!」

それよりも、あっちの倒れた連中に!!」

「は、はい!」

その魔力の波動は、回復役として後方に控えていたアシアの立つ位置にも及んでいたが、彼女の前に、護衛役として控えていたララティーナが、そのダメージを全て、文字通りな肉壁となり肩代わり。

慌てて回復しようとしたアシアに、弱冠 悦ばな表情を浮かべながら、自分ではなく”現場”で倒れた者が先だと指示。

「「う…」」

「「「うううう…」」」

「ふっ…所詮は雑魚…か…!」

絶大な攻撃を受け、倒れ伏せている者達に、見下す様な冷たい視線を浴びせるロキ。

アシアが放つ、癒やしの光は敢えて無視して、未だ自らの両足で立っている者に向けて言い放つ。

「今の攻撃に耐えた者達よ!」

貴様等には一応、このロキと戦える権利が在る様だ。

さあ、掛かってくるが良い。」

「今のは篩ふるいかよ!?!」

「巫山戯いたづらやがって…!」

◇リアスside◇

くっ…

何とか耐えてみたけど、とんでもない一撃だったわ。

あのロキは、今の攻撃を自分と戦う権利が有るかを計る、篩落ふるいとしてみたいに言ってたけど、それで実際に今、立っているのは…

私。

シリユー。

ミルたん。

ソーナ。

匙君。

サイラオーグ。

ディオドラ。

ヴァーリ。

アーサー。

ベツロさん。

ロスヴァイセさん。

猿。

それと、後ろ側に居るアジアと、ディオドラの戦車…か。

あの攻撃に耐えきれなかった皆も、ダメージが酷過ぎて起き上がれないだけで、死んではいないみたいだけど…

「くっ…」「ちい…」「うう…」

ディオドラとアーサー、ついでに猿も、何だかギリギリみたい。

私も、もしもミルたんが前面に出てきてくれなかつたら、どうなっていたか…

ソーナも匙君が、前に出ていたし。

◇デスマスクside◇

おいおいおいをゐる？

今の攻撃は、ちと洒落にならねーぞ?!

死屍累々（笑）。

いや、マジに笑えねえ。

アジア嬢ちゃんが、倒れた奴等に向けて回復ビームをガンガン放っているが、あれは本来、連射して　どーのこーのって代物じゃないだろ？

以前、紫龍から少し教えて貰ったが、お嬢ちゃんの神器の回復量は、所謂”溜め”に比例する。

回復エネルギーを飛ばすでなく、直接に　その対象の者に直に触れて治療する場合でも、何処ぞのゲームみたく速効性タイプでなく、全快させるには　それなりに治療時間を要する…ってな。

あれは本当に、自力で立てる…戦闘の邪魔にならない様、その場から撤退出来る程度の”元気”ってヤツを与えてるに過ぎない。

残念だが、今倒れている奴等は戦線離脱リタイアだな。

…にしても、まさか、サイラオグの眷属3人（戦車2人・騎士1人）も、纏めてリタイアとはねえ…

アイツのついでとばかり、多少の師事の真似事を施した身としては、少しばかり複雑な心境だぜ。

◇ヴァーリside◇

更なる篩…か。

あの貴族の坊ちゃんは兎も角、アーサーと美猴が あれ程のダメー  
ジを負ってしまうとは…

ふっ…アイツ等には悪いが、面白い！

ロキ。

流星は北欧神話にて、悪神として名を馳せているだけはある!!

『…嬉しそうだな、ヴァーリ?』

…悪いか?アルビオン?

『いや、それでこそ、お前だ。』

ならば、問題無いだろう!行くぞ!!



天の理

地の理

有の理

無の理

人の理

魔の理…

ロキが己の周りに多数の魔法陣を展開、その1つ1つが砲門の如く、対峙している者達に向けて幾多の魔弾を撃ち出す中、ヴァーリは自らに魔法障壁シールドを張りながら、魔力を高め集中し、魔術詠唱を始めた。

「あつの野郎!



永いの唱えるなら、先に言え！

フォローが必要だろーが!!」

「報連相は、大切だよー!」

先程のソーナの魔法同様に、やや長い詠唱を必要とする…唱え終える迄、ある程度のフォローを必要とする攻撃を、いきなり開始したヴァーリに対し、匙とミルたんが、多少文句を言いながら前面に出る。

「はあああ…」

「によによおお〜…」

そして魔力を溜めて、攻撃する2人。

「ミルたん・ギヤラクテイカ・マグナム銀河火弾拳!!によー!」

ミルたんの力強い踏み込みの一步からの、右ストレートのポーズで振り抜いた拳の先から、噴火した火山の如く、無数の燃え盛る溶岩の弾が撃ち放たれ、

「ヴリトラ・ブラスタ黒邪龍炎殺王穹覇!!」

魔力によって生成された黒炎が匙の左手腕に纏わり憑き、それは瞬く間に蠢く龍の形を成一閃、ロキに直撃。

「賢しいわっ!下級悪魔共が!!」

神を、嘗めるな!!」

「ぐ?!」によ?」

それは決定打に至る程のダメージでは無かったにしろ、それを不快とした悪神は、2人に向けて反撃…神罰として、嗤う頭蓋を象った魔弾を放つ。

どどん!

「何い?!」

しかし それは、突如として地面より沸き出でた石の壁により阻まれた。

「勝てるなら、決して主役に なれなくても良い…歯車でも裏方でも、何でも やってやるさー!」

「ディオドラ様!」

それはアーシアの癒やしを受け、僅かながらに回復した、ディオドラのアシスト。

…力の円錐デイズの紋を以て、今こそ我、白き三ツ頭の龍皇と成らん!!!

「(フツ…)」

そして その様子を見て、微かに口元を緩めたヴァーリが詠唱を唱え終えた。

ズズズ…

鎧の両肩のパーツが変形。

大きく口を開けた龍の頭を形成し、その口内に魔力の光が灯る。

そして両腕を前に差し出し、龍の顎の如く組み合わされた両手からも、魔の力による蒼い輝きを放ち、

「滅べー!

アルティメット・バースト・ストリーム!!」

弩つ轟々々々々々々々々々々々々々々々!!!!

「ぐあああああああつ?!」

3つのドラゴンの口から飛ばされた、魔力のエネルギー波が、ロキを撃った。

「な…嘗めるなど言っている!

薄汚いドラゴン風情が!!」

バシユツ!

「ぐわあつ?!」

この攻撃は かなり効いたのか、表情を怒りに歪め、魔力を飛ばすでなく、高速移動で間合いを詰めた上での蹴り、魔力を込めた直接の打撃が、ヴァーリの胸元に炸裂。

肉弾戦は想定の外だったのか、反応が遅れて防御が間に合わず、その攻撃をまともに受けたヴァーリは、鎧の破片を撒き散らしながら吹き飛ばされた。

「ヴァーリ!!」

ガシツ

「…すまない。確かに少しばかり、油断し過ぎていた様だ。」

そのヴァーリを受け止めたのは、やはりアーシアの回復の光を僅かながらに受け、最低限の動きは出来る様になった、アーサーと美猴。2人に一言、礼の言葉を述べると、ヴァーリは砕けた鎧の部位を再生し、再び、悪神に挑み掛かるべく、光る翼を広げた。

◇デスマスク side ◇

傍目には、集団を活かしての大技攻勢だが、実の処、あのロキには大してダメージは届いていない。

あくまでも身体の上っ面、表面的なダメージに過ぎない。

まあ、あのキレっぷりからして、あの白龍皇の小僧の攻撃は、結構効いてるみたいだな。

「デスマスク！」

紫龍も それに気付いてるみたいだな。

ああ、分かってるよ。

やはりアイツを確実に仕留めるには、今現在、この場に転位の準備を進めていると云う、雷神ミヨルニル乃鎚ニルの一撃か…

「積尸コスモ気い…冥界波あつ!!」

小宇宙コスモによる一撃しか、無いよな!

貴様の魂、その肉体うっわから引きずり出して、直接キツツイ一撃喰らわせてやるよ!悪神!!

「ぬうおわああああつ!!」

「く…そつだらがあ!!」

ちい…だが流石に、神の”魂”は重い…!

”神”相手に、身体から魂を引き剥がす この技は…いや、今の俺では、やはり無理が有り過ぎたか?

…いや、過去の聖戦で、当代の蟹座の黄金聖闘士が『死の神』から、この技で肉体の器から魂を引き抜き、アテナの封が施された棺に閉じ込めたって記録が有る!

だったら俺でも、そしてコイツにも通じない道理は無えっ!

「神を…弄するか、人間!!」

ドゴツ!

「ぐは…!?」

ぐえ…拙った…油断した…

身体から魂を引き剥がされかけてるつのに、あのヤロー、抵抗する様に魔弾を放ってきやがって…その直撃、貰っちゃった…

「デスマスク…」「師匠!?!」

紫龍とサイラオーグが心配そうに駆け寄って来たが、大丈夫だ。

確かに聖衣クロス(モドキ)が無けりやババかったが、俺は可愛い孫娘の花嫁姿を拝む迄、死んでたまるかってんだよ!!

◇シリユースィde◇

ロキの魂を引っ張り出すのに手こずっているデスマスク。

その最中、抗いの一撃を受けたのは、油断したヤツが悪いとして…

「デスマスク、受け取れ!

ブーステッド・ギア・ギフト

【赤龍帝からの贈り物】!!」

『Transfer!』

ならば俺も、サポートに回ってやる。

「有り難え!ううるあああつ!!」

ずずず…

『ニ、ニンゲンガアアア!!』

”譲渡”の作用で小宇宙コスモをパワーアップさせたデスマスクが、遂にロキの魂を…所謂”靈魂”型でなく、神格なのか、人の型を保っているヤツの魂を、肩口からスタ○ドの如く、上半身だけが引き擦り出すのに成功した。

「積尸気魂葬破ア!!」

BOMB!!

「グギャアアア?!」

そこに間髪入れず、その魂に直接、デスマスクの爆裂系?の技が炸裂。

「ライトニング・プラズマ!!」

閃ツ!!

続け様にサイラオーグの、光速の拳の連打が、そして、

「廬山百龍覇あー…!!」

弩撃々々々々つ!!

本来は、目の前に立ちはだかる複数の敵を、一気に討ち滅ぼす技。差し出した両の掌から放たれた、小宇宙<sup>コスモ</sup>で形成される龍を象つた100の氣<sup>オーラ</sup>全てが、拡散する事無く、剥き出しの魂に集中直撃<sup>ヒット</sup>した。「うぐああああああー！ー！ー！ー！！？」

ズシャッ！

この…ええい、もう面倒だから、サイラオグも数に入れる！

この…黄金聖闘士<sup>ゴールド・セイント</sup>の攻撃3連発の衝撃により、再び魂が仕舞われたロキの身体は天高く飛ばされ、それは 最終的には頭部から垂直に地面に激突。

「貴様等…神に対して よくも…」

赦さん…絶対に赦さんぞ…」

起き上がったロキが頭頂から血を流しながら、俺たちを睨み付けるが、魂に直接、小宇宙<sup>コスモ</sup>を込めて受けた技のダメージは決して小さくは無く、それこそヤツが見下している人間の様に、膝をガクガクさせている。

「があああつ！！」

バシィッ！

「ぐわっ！」

「きゃああつ！！」

「うげやつ?!」

しかしながら、その魔力は未だに健在。

全方位に魔力の弾丸を跳ばし、軌道を見切り易い直線的な動きでは無く、不規則に蠢きながら迫る魔弾に俺達は吹き飛ばされ、ダメージを受けてしまう。

「…!! 皆さん、お待たせしました！」

「!!」

そんな中、ロスヴァイセさんが叫ぶ。

それに呼応する様、皆が上空を見上げると、巨大な魔法陣が現れ、其処から赤い雷を纏った巨大なハンマーが、姿を見せた。

「ちい…ミヨルニルだど？」

オーデインめ、何処迄…！」

本来は北欧神が1柱、雷神トールの愛用の武器である、ミヨルニル雷神乃鎚。この度の戦闘にて、北欧サイドが用意した切り札だ。

ガシ：

そして翼を広げて飛翔、鎚の柄を力強く握り締めたのは、

「さあ、行くによー！」

腕力的に一番使いこなせると判断されたのであろう、オーティンから直々のドドメ役の指名を受けた、ミルたんだ。

「皆、ミルたんをサポートよー！」

「「「応!!」「」」」

リアル部長の号令の下、ミルたんが完璧な一撃を放てる隙を作る為、動けるメンバーが動き出す。

「ライン！」「Divide！」

「くっ…!?!」

匙の【アフソープシヨン・ライン黒い龍脈】の黒炎の綱がロキの腕に絡み憑き、力を奪った

処で更に、ヴァーリが己の神器の能力の1つ、”半減”の能力を発動。

匙は兎も角、あの戦闘狂が、純粹なサポート役に勤しむとわね…

さっきのデイオドラの歯車発言に、何か思い、感じる事でも有ったか？

「覇あー！」「てやつ！」「ええい！」

ドドドド…

「クソっ！増々以て、小賢しい!!」

更にはリアス部長、支取先輩、ロスヴァイセさんが同時に放つ、魔力の弾幕で悪神の動きを封じ込め、

『Transfer!』

「せえーっによっ!!」

バキイ!!

「うぐえわああっ!?!」

そして遂に、【ブリステッド・ギア・ギフト赤龍帝からの贈り物】により譲渡された効果により、

ミルたんが持つ…文字通り、物理的に倍々化された…ミヨルニル雷神乃鎚による

最高の一撃が、北欧のトリックスターに炸裂した!

ヴァアア…

そして巨大ハンマーの一撃が決まると同時に、予め雷神ミョルニル乃鎚ニルに術式として仕込まれていたのであろう、北欧式の捕縛型魔法陣が現れ、悲痛な表情を浮かべるロキを拘束し始めた。

恐らくは其の儘、北欧の本拠地であるアースガルズに転位させる仕様なのだろう。

「やっと、終わったのね…」

…それを見ながら、リアス部長が安堵の溜め息を零しながら呟く。

…いや、まだだ。

俺の脳内に、最高にヤバいと、警告音が鳴り響く。

俺の勘…特に悪い予感、よく当たる。

その証拠にロキは今、既に己の敗北が確定したにも拘わらず、最高に邪悪な笑みを浮かべている。

「紫龍！サイラオーグ！」

どうやらデスマスクも、同じ考えに至った様だ。

懐から小さな瓶を取り出すと、その中身の紅い液体を、サイラオーグの鎧に吹っ掛けた。

「し、師匠？」

それに反応したのか、サイラオーグの獅子王の鎧が、更なる黄金の煌めきを放ち出す。

「サイラオーグ！限界迄小宇宙コスモを燃やせ！」

紫龍、お前もだ！我がアテナからは、事前シに許可キョクを得ている！！」

拘束されながらも、最期の抵抗…恐らくは自爆。  
この疑似空間毎、自らを含む、此の場の全員を消し飛ばさんとばかり、魔力を高めるロキを見据えながら、デスマスクが叫ぶ。

…承知したよ。

《《《《

夏休みの最初の頃に冥界入りした数日後の、ルシファー城でのパーティー。

その時 俺は、デスマスクの仲介で初めて、この世界のアテナと逢った。

あの時、アテナは俺の力量を直に知りたいたってきただので、当時の赤龍帝の籠手の最強形態である、【紅珠黄金龍】ルビー・ゴールド・ドラゴンを見せた。

「噂に違わぬ凄まじき力よ…。」

それでは改めて赤龍帝よ…

これが、妾と貴方との、同盟の証だ…。」

「おい?! あんた….:つ?!」

すると見た目は小猫より少し背が高い程度な、猫耳ニツトの銀髪少女は満足して微笑み、懐から黄金の短剣を取り出し…

ザツ…

「!?!」

「……………」

在ろう事か、それを自らの胸元に突き刺した。

アテナの傍らに居たデスマスクは、この展開を予め聞いていたのだろう。

驚く俺とは違い、無言、且つ冷静に事の成り行きを見守っており…

カアアツ…

「(…:これは…:!!?)」

その時に噴き出たアテナの血を浴びた赤龍帝の鎧は、黄金の煌めきを更に強め、新たななる進化を果たしたのだった。

…尚、アテナの胸元の傷は直後、何事も無かったかの様に癒えていた。

》》》》

イコーゴールの神の血。

先程、デスマスクがサイラオーグに浴びせた液体も、アテナの血液なのだろう。

そしてデスマスクの聖衣も当然、オリンポスで造られた際に、既にその仕込みが成されていたのは、想像に難しくは無い。

そして、身に纏う鎧に、この神の…:アテナの血の祝福を受けた俺達は、

『『うおおおおおー』』』



「燃え上がれ！」

「吼えろ！」

「轟け！」

『『…我が、小宇宙よ!!!』』』

己の小宇宙を雄叫びと共に、最大限に高めた。

カアアアツ…!!

「うつ…?!」「眩しっ!」「あれは…?」

正しく神々しい光という表現。

俺達3人が小宇宙を極限迄燃焼させる事により発する、その眩い光を部長達が目を眩ませながらも見つめる中、アテナの血の祝福を受けた鎧は、その小宇宙に呼応して、更なる進化を遂げた。

サイラオーグの鎧には、背に巨大な翼の様なパーツを筆頭に、各所にも細かい造形が施されたパーツが追加されている。

デスマスクの聖衣も、全体的に更に棘々しいデザインとなり、背中からは蟹の脚を連想させる、長く鋭利なパーツが数本、付け加わった。

更に両者の鎧は、今迄は金属として、単に光を反射して輝いていたのが、鎧自体から、黄金の光を放つ様になる。

そして俺の鎧。

デザイン的には【ルビー・ゴールド・ドライブ紅珠黄金龍】と大して変わらないが、背の龍翼が1対2枚から6対12枚に増し、細部全体に、伝統工芸品を思わせる様なラインの装飾が施され、その色も重い赤から、水晶の様に透き通った、鮮やかな紅となった。

そして やはり、鎧本体から眩い黄金の輝きを放っている。

名付けるなら、【ゴッド・クロス・ドライブ赤龍帝乃神聖衣】…とでも云った処か。

ザツ…

俺を中心にしてデスマスクとサイラオーグが両脇に立ち、手首を重ねた両掌を、今 正に俺達を道ずれに自爆しようと、魔力を溜め込み逆らせているロキに向けて、更に小宇宙を燃やす。

そして各々が究極に迄高めた小宇宙を破壊のエネルギーに変え、そ

の両の掌から一気に解き放つのだった。

「「アテナ・エクスクラメーション!!!!」」



りに眩く。

「ええ。俺達の勝ち…ですよ。」

「…だな。」

「結果、誰一人、欠けてもいない。

完全勝利と言っても良いだろう。」

ホッ：

しかし、俺とデスマスク、サイラオーグの言葉に、2人は…否、その場の全員が、安堵の表情を浮かべる。

「よっしゃー！それじゃ、帰ろうぜい。」

勇者様の帰還だぜい！

「！！！！おーっ！！！！！！」

『おんっ！』

◇小猫side◇

「皆。本当に、よく やってくれた。」

「お疲れ様☆」

「御苦労さん…だな。」

「身内が、申し訳無かったのう。」

本当に済まなかった。」

帰還後、サーゼクス様達から労いの言葉を受けた私達。

直ぐに、勝利を祝う意味での囁かな宴を用意すると、魔王様達が仰りましたが、当の私達は、もう くたくた。

確かに、宴に出てくるであろうスイーツは、魅力的ですが魅力的ですが魅力的ですが魅力的ですが魅力的ですが魅力的ですが…兎に角、今は休みたいです。

これは戦いに赴いた皆さん、同じ考えみたいで、結局 宴は中止に。「あいすくりーむ…ぷりん…けーき…無いの？」

オーちゃん、気持ちは分かります。

でも、今回は本当に疲れたから、早く お風呂入って寝たいです。

「小猫さんが食い気よりも眠気を優先させるなんて、余程でしたのね…」

「…ですうー！」

おい、そのこの 作者に存在を忘れられていた 転移の人数制限で今回は出番の無かった焼鳥娘…と、”先つきよだけ「コンニチワ」のミニママ被りヴァンパイア”、少し話そうか。

◇シリユースィde◇

「オーデイン殿達も、同行ですか？」

「うむ。近い内に日本で、日本やインド等の、アジア神話勢力との話し合いが有るで、折角じゃからな。

それに この冥界の列車、一度乗ってみたかったしの〜♪」

翌日。

俺達は、日本に帰る事に。

グレモリー邸の地下プラットフォームには、オカ研メンバーに生徒会の皆さん、アザゼルにデスマスク、オーデインにロスヴァイセさん。「……………」

そして3勢力側から、日本でのオーデインの護衛として就く事になった、墮天使幹部・バラキエル。

朱乃先輩との雰囲気、凄く気拙い。

彼女は確かに、自身に流れる血は受け入れたみたいだが、父親との確執は、また別物な様だ。

朱乃先輩、前みたいに、夜叉の様な形相で睨み付ける事は無くなった様だが、まだまだ この2人、時間が必要だな…

「それじゃリアス、元気でね。」

「リアス姉様、眷属の皆さん、シリユースィさん、また来て下さいね！」

そして見送りには、ヴェネエラさんにミリキヤス、

「また会おう、リアス。」

そして師匠、赤龍帝殿も お元気で！」

「皆さん、元気でね。」

「次に会うのは、来月のゲームですね。」

更にはサイラオグ、デオドラ、シーグヴァイラ嬢も、眷属数名を引き連れて来てくれた。

「赤龍帝…神崎孜劉殿！」

「ん？」

「アナタとは何時か、ゲームとは関係無く、一度手合わせしたい物だ。」  
「ふ…」

コン…

サイラオーグの突き出した右拳に、俺も拳を軽く重ね、列車に乗り込んだ。

尚、ヴァーリ・チームは、戦いの後に直ぐ、転移で自分達の拠点へと帰っている。

◇木場side◇

「うう…ロキ以上の、強敵だにや…」

「う…迂闊でした。」

次元の狭間を進む冥界列車。

その車内で僕達は まったりと…

「ほらほら、修行やゲーム、ロキとの戦いで、宿題出来てませんは、理由にならないわよ！

グレモリー眷属として、そしてオカルト研究部の名誉の為にも、きつちりと やつてもらおうからね!!」

「ふにや~~~~~~~~つ!!」

…小猫ちゃんと黒歌さんは、部長の見張りの下、夏休みの宿題をやっています。

「奥様、凄く綺麗な方ですわね。」

「娘さんも、美人ですし。」

「お孫さん、凄く可愛らしいですね。」

「ですう！」

「によく。」

「だろ?だろ?だろ?♪」

副部長、レイヴェルさん、アーシアさん、ギヤスパ―君、ミルたんは、僕達の車両に遊びに来た、ベツロさんが持ってきたアルバム…御家族の写真に夢中。

「さつき、生徒会の車両に遊びに行ってみたけど、向こうも匙と…1年の子が、支取先輩と新羅先輩の監視付きで、「うーうー」言いながら、宿題やってたぜ。

…王手！」

…だ、そうです。

因みに僕は宿題は、夏休み前に全て終わらせてますし、神崎君とアーシアさんも、一度 人間界に戻った時に、全部終わらせたとか。…って、神崎君？

その王手、ちよつと待つて?!

「待つた無し!!」

◇シリユースィデ◇

「うむ…先程、ヴァルハラから連絡が有ったのじゃが…」

現在、オーデインと対話中。

オーデインが言うには、北欧の拠点に転移されたロキは現在、嚴重な封印術式を施した上で、この拠点最下層に投獄。

この北欧の主神の帰還の後、正式に沙汰を下す予定だったらしいが、それを待たずして自ら、永久水晶に その身を封じたそうさ。

「つまり、引き籠もり?」

「お主も なかなか痛烈じゃのう?!

あながち間違つてはないが、もう ちよつと こう…何か別の表現は無いのか?」

引き籠もり否定は、しないのか…

「やれやれ…全く世話の焼ける、愚弟じゃわい…」

》》》

「う…死にました…」

「ぶにゃあ…」

「自業自得だろ?」

次元の狭間を進む冥界列車。

その中で、ぐったり…と座席に もたれ掛かっているのは、何とか宿題を片付けた、白と黒の猫姉妹。

「おう、邪魔するぜ?」

「邪魔するなら失せろ。」

「そんな、酷い?!

そこに やつてきたのは、墮天使総督様だ。

俺の軽いボケ（半分はマジ）に、何処かの お姫様みたいなリアク  
ションで切り返すアザゼル。

意外にノリが良いな。w w w

「ち…とりあえず、オカ研に伝達だ。」

明日の正午、部室に集合な。」

「「は？」「」「へ？」「」「え？」「」

「ま、詳しい話は、その時にする。」

話は、それだけだ。じゃあな。」

そう言うと、アザゼルは去って行った。

…何なのだ？少し、気になるな…

リアス部長も何も知らないのか、『??』な顔をしてるし。

》》》

「皆、お疲れ様。」

今日は、この場で解散するわ。

それじゃ明日、また部室で。」

「「「「「はい！」「」「」「」

駒王駅の地下プラットフォームに到着した俺達。

オカ研の合宿は、リアス部長の締めという言葉で解散となった。

少し間を開けた先では、生徒会の皆さんも、同様に支取先輩が締め  
括りしているみたいだ。

そして…

「ほっほ~~~~~い♪

初めての日本じやのう。

ほれ、アザゼル坊、何をしておる？

さっさとJAPANを案内せぬか!!」

「分あーった分あーった！

落っ着けジジイ!

そんなに焦らなくても、おっぱいは逃げやしねーよ!!」

「ほっほっほ…楽しみじやのう♪」

「ちよ…オーデイン様？アザゼル殿??」

貴方達は一体、何処に行こうとしてるのですか!!?」



「おっパブ。」

「おっ…おお…オーデイン様あ〜っ!!」

あ、貴方は一体、何の為に日本に来たと思っっているのですかあー…あー…あーっ!!」

…ん。あつちの墮天使総督と北歐の皆さんは、無視しておこう。そうしよう。



そして翌日、8月31日の正午。

「よっし、全員、揃っているな?」

「「「「「「「……………。」」」」」」」

オカルト研究部の部室には、オカ研と生徒会の面々が集合。

その全員が、普段はリアスが使っている、豪華な机の前に立つ、したり顔なアザゼルに目を向けていた。

「オカルト研究部の顧問になった、アザゼルだ。よろしくな。」

「「「「「「「はあああゝっ??」」」」」」

突然の言葉に、驚くりアス達。

「ついでに言えば、明日から2年のクラスの副担任となり、科学の担当教諭として、教鞭を執る事になる。

2年の連中には、そっちの方でも、よろしく頼むわ。」

「「「「な、何だつてー?!」」」」

続く台詞に、シリユー達2年生が、更に驚きの声を上げる。

「そんな訳で、今後は改めて、アザゼル先生と呼べよ。」

あー、そのヤク〇ゝみないな輩顔で、凄く嫌つつつそんな顔をしている赤龍帝…神崎孜劉〜?

当然、お前もだからなく?」

「断る!」

「あゝ!?! 退学にすつぞ? テメー?」

「そんな、非道い!?!」

「…で、でも、何で急に…?」

早速に教師の権限?を濫用するアザゼルに、ソーナが尋ねる。

「夏休み前、3勢力で和平が…その流れで、北歐とオリンポスとも、同

盟が成立したろ？

今後もアジア圏の神話勢力等とも、連携する方針でな。

知ってる者も居ると思うが、オーディンの爺さんとセラフオルーが、近日中に その件で日本神話とインド神話連中と、会談する事になっっている。」

「対テロリスト…ですか？」

「ああ。その通りだ。」

ヴァーリの仲間によって、禍カオス・ブリゲードの団は壊滅状態。

何しろアタマのオフィスが、グリゴリウチの本部に居候してる状態だしな。

…だが、それでも残りの…逃げ出したって雑魚とやらが、事を起こさないとは限らない。

それで その同盟の地である この学校を正式な対テロの拠点に据え、とりあえずの代表として、墮天使トップである、この俺様が出張ったって訳だ。

それと ついでに、サーゼクスからの依頼で、お前達をガンガン鍛えるって理由も在るがな。」

「代表…」 「貴方が…ですか？」

それを聞き、3大勢力の代表者として、そして自分達の師事者として出向いた男に対し、かーなーり、不信感丸出しな顔をする、オカルト研究部の部長と生徒会会長。

尤も、『いい加減』に手足と羽が生えて、服を着ている男』と謂われる男が相手なので、それも仕方無しと言えば、仕方無いのだが。

しかし、そんな顔を見ても構わず、アザゼルはニヤリと笑いながら言葉を続ける。

「因みに…お前達が、俺が駄目って言うなら、その時はサーゼクスとセラフオルーの2人が揃って、学園こゝに来る事になっている。

そして それ以後のチェンジは、無い！」

「…!!!」

サーゼクスとセラフオルー…

それぞれの兄と姉が来る…

それを聞いて、今度は顔を硬直させる、リアスとソーナ。

そして2人は顔を見合わせると、どちらからともなく互いに頷き、今度は少しばかり口元を引き攣らせながらも、ファーストフード店員の営業スマイルな如く、アザゼルに向けて満面な笑みを浮かべる。

新学期を翌日に控えた駒王学園。

雲1つ無い澄み切った青空の下、眩い日差しに照らされる旧校舎に、2人の少女の、元気な声が高らかに響き渡った。

「ようこそアザゼル先生！」

駒王学園は、貴方を歓迎します!!」

T H E   E N D

<br>【Bonus Episode】

新学期です！

9月1日。

最近是小・中・高問わずに、8月後半から新学期が始まる学校も珍しくはないが、駒王学園では、この9月1日が新学期であり、各教室では久々の学校、久方振りのクラスメート達との、会話が弾んでいた。

⇒⇒

2年C組。

「おはよー神崎。髪の毛、伸ばしたの？」

「神崎君、似合ってるよ。」

「ああ。夏休み前、男子のロン毛も解禁になったろ？」

「だから早速って感じだな。」

着席したと同時に、隣の席の水沢や、他の女子達に、話し掛けられるシリユウ。

夏休み前の終業式にて、男子生徒の長髪が正式に認められ、夏休み期間も前髪は兎も角、後ろ髪はカットせず<sup>ぜんせ</sup>に伸ばし始め、その容姿はより以前の頃と近くなっていた。

「カッコイい…」

「黒髪ロン毛の神崎君×金髪短髪の木場きゅん…」

嗚呼、想像しただけで…

きゃー（／＼△／／）ー！！」

「きゃー（／＼△／／）ー！！！！」

「（怒）止（怒）め（怒）ろ（怒）！」

「受け・責めが、ハッキリした！」

「きゃー（／＼△／／）ー！！！！」

「（怒）いい加減にしろ！（怒）誰か防腐剤、持って来い（怒）！！」  
…それは色々、多岐な意味で、女子生徒達には評判がよろしかった。

「それと匙！反町！草薙！」

「お前等、笑い過ぎだ!!」

「すばかーん!! x3」

「「ギャーーーーーッス!!」」

》》》

「そー言えば知ってる?」

「副担任の先生、代わるんだって。」

「あー…」

シリユウの髪の毛と、木場きゅんとのホ○話も一段落した後の、次の会話の御題は、この2学期より新しくなると云う、C組副担任教諭の話。

水沢曰わく、新学期に向けて新しく赴任してきた外国人の教諭らしいが…

「アンタ達、反応薄いわね…」

「事前に その事を」知らされている」、シリユウと匙は、素っ気無いリアクション。

「ついでに、転入生も来るんだって。」

「「へー。」」

「…美少女らしいけど?」

「「な、何だってー!!」」

「「反応、凄っ?!」」

転入生…と言っても、大した興味を示さないシリユウ達だったが、続く”美少女”というワードに、匙・反町・草薙の3人及び、クラス内の男子生徒が見事に喰らい憑いた。

一方、同じ頃の、1年E組の教室では…

◇小猫side◇

「…さ・て・と、カンちゃんはシリユウ先輩から、ある程度は聴きました…が、トーカちゃん?」

「さあ、全て吐いて、楽になると良いですわ。」

「う…」「うう…」

「矢田つちは兎も角、まさか、ユキちゃんが…」



うっし！トーカちゃん、堕ちました。

あ、それから男子達？

これは見せ物じゃないですよ？

ガン見してないで、向こう向いて屈んでいなさい。

はい、其処の人！

スマホで撮影しようとしなさい！

トーカちゃんの彼氏の893ドラゴン先輩にバレたら、リアルに埋

められますよ？

とりあえず、スマホ没収↓データ削除！

それからギャー君、どん引いたりしない。

「うゝ、じ、実わ…」

》》》

「「「「「……………。」」」」」

トーカちゃんの自供に、何とも言えない複雑な顔を浮かべる私達。

「わ、笑つちや駄目ですわ…小猫さんも由紀子さんも…w」

そー言<sup>ゆ</sup>ーレイヴエルさんも、全然笑うのを堪えていません。

曰わく、宿に着いて一緒に温泉入って(この時点でギルティです)ご

飯食べて…迄は良かったのですが、夜になり、いざ！就寝前の運動!!

…なタイミングで、トーカちゃんに月一の”女の子の日”が発動した

そ<sup>う</sup>で…w w w

成る程、シリユー先輩自身が語りなかつた理由が、漸く分かり

ました。

しつかーし、あのオツパイスキー先輩が、その程度で完全に歩みを

止める訳が在りません!!

ゆっさゆっさゆっさゆっさゆっさゆっさゆっさ…

「ひええっ!?!」

「さあ、吐きなさいー!」

「わ、分かった!話すから、もう離やしてえ〜!」

それで、ぐったり…なトーカちゃんが、話した内容は…

「ほ、本当に”最後迄”は、してないよ。」

孜劉さんも、残念な顔はしてたけど、仕方無しって怒ったりしないで納得してくれたらしい……」

「ほう？最後迄……て事は、途中迄は、何かしら有ったのですね？」

「さあ、吐け！吐くのです!!」

また揺さぶりますよ!!」

「ん……だから、ばふばふしたり……孜劉さんの、おち……あれを、お口や胸で、アレしたり……は、したけど……」

「「ま、っ!?!」」

「……それで、最後は孜劉さん、私の体を気遣ってくれて、腰やお尻を優しくマッサージしてくれて……」

「「「……………」」」

うう……自分達で自供させておいてアレですが、凄く負けた気分です。

トーカちゃんの、赤くした頬を押さえながらの惚気話。

聴くんじゃなかったと、少し後悔です。

既に彼氏君と”最後迄”至しているカンちゃんだけは、にこにここと微笑んでいます……

「特に お尻のマッサージ、凄く、気持ち良かったあ……（はあと）」

「「「……………」」」

ちい、最悪ですね!

あの露出先輩、単なる おっぱいドラゴンだけでなく、尻龍帝でもありましたか!!

ゆっさゆっさゆっさゆっさゆっさゆっさ……

「ひいえええっ!?!ちよ……小猫ちゃん?」

……とりあえず何だか凄く悔しいので、トーカちゃんには”揺さぶりの刑”続行です!!

ガラ……

「うを……い、何時迄騒いでる……?」

さっさと席に着k……って、おいをゐ、塔城と矢田?お前達、新学期早々に教室で何をやっているのだ?」





ガラ：

そして教室に入ってきたのは：

「Bonjour♪」

今日から皆さんと、この教室で学ぶ事になった、ジャンネット・ダルカシス、でーっす！

ジャンヌ：って呼んで下さ〜い♪」

すってーん!! x2

「神崎？匙？」

教室に入ってきた編入生を見て、思わずコケる俺と匙。

「「「「「おとおおお〜！」

美少女、キターーーー!!「「「「「」

「D組のアルジェントさんに続き、我がクラスにも、金髪美少女、キターーーー！」

「「「「「おとおおお〜！」

そんな俺達そっちのけで、騒ぎ立てる男子共。

「あ、神崎君、匙君、お久〜♪」

…って、何2人してコケてんのお？」

「「お前の せいだよ!!」

そう、教室に入ってきたのは、あのディオドラ・アスタロトの眷属、騎士のジャンヌ・ダルクだった…。

「あら？ジャンヌさんて、神崎や匙と知り合いなの？」

俺達のリアクション、そして遣り取りを見て、水沢が早速、この転入生に質問。

「神崎君のオカルト研究部の合宿、それと匙君の生徒会の海外研修を通して知り合いました〜♪」

すると このジャンヌ、クラスの皆には上手い事説明。

「あ〜、転入生への質問は、始業式の後にしろ。

とりあえず、ダルカシスの席は、後r…」

ツカツカツカツカ：

恐らくは才橋先生が、「後ろの空いた席」と言おうとした所、その前

にジャンヌは俺の席の隣…水沢の前に立ち、

「…ねえ、貴女？私は転入したてで慣れない学校、延いては慣れない国で、結構不安だらけなの。」

だから最初は少しでも、それを紛らわす意味でも、知り合いの近くに席を置くべきでなくて？」

…つて、一般人に魔力催眠術を掛けるな！

「は…はい…そうよね…」

先生…私…が、後ろの席に行きますから、ジャンヌさん…は神崎の隣に…」

そして術が効いたのか、虚ろな眼で、自分の机の中身を纏め、覚束無い足取りで、教室後ろの空いた席に向かう水沢。

「そ、そうか？済まん水沢…じゃ、ダルカシスは神崎の隣に…」

「はい♪そんな訳で、よろしくね？」

神崎・君？」

……………。

◇小猫side◇

「「「「「きやーーーーー」」」」」

「「……………」」

その後、何とか先生の誤解を解き、ホームルームが始まりました。

そして早速に、編入生の紹介。

私とギャー君、レイヴェルさんが微妙な顔をしてる中、”彼”を見たクラスの女の子の殆どが、歓喜な悲鳴を上げています。

黒板には、先生の書いた【漆原芭有】の文字が。

そして先生の隣には、何処かで見えた様な、銀髪碧眼の男の子。

「…漆原芭有うるしはらばありです。」

一応、日独のクォーターです。よろしく。」

…ヴァーリ君です。

日独クォーターそういう設定、ですか…。

「ねえユキコ、あの人って…」

「うん…間違い無い…よね？」

ん？トーカーちゃんにカンちゃん、もしかしてヴァーリ君と面識が有

るんですか？

◇ジャンヌside◇

「ねーねー、ジャンヌさんてさあ…」

.....

これがジャパンに於ける、転入生の宿命ってヤツかしら？

クラスの皆が、私に あれこれと質問してくる。

特に、男子の質問責めがウザい！

まあ、私がハイパーな美少女なのは自覚してるけど、もう少し遠慮なさいよ！

「恋人とか居るの？」とか、何を期待してるのかは察するけど、私にはディオドラちやまが居るの！

だから「故郷こくにに婚約者が居る」って、ディオドラちやまのスマホ写真見せたら、集団でorzって退散して行つたわ。

…で、今度は それで、「どんな人どんな人どんな人？」…って、女の子達が群がってきたのだけど。

写真を見せると、「優しそう」とか、まざまずな反応。

「しつかし、ディオドラloveな あんたが、よく人間界こんなどころに1人でやって来たな？」

そう言ってるのは神崎。

人間界こつちで赤龍帝様…の名で呼ぶのは流石にマズいだろうから さつきは「君」付けで呼んでみたけど、「クラスメートなんだから、呼び捨てで構わない」って言うてくれたから、こう呼ぶ事にするわ。

ソーナ様の所の兵士君も、そんな感じみたいだし。

…って、仕方無いじゃないのよ！

リアス様達には報告が遅れる程に急な話な訳だけど、実は人間界の新学期に合わせ、各若手悪魔関係者からも誰か1人、駒王町に派遣する事になったのだ。

…で、私だつて、ディオドラちやまと離れるなんて有り得ないけど、それは眷属全員が同じな訳で…

くそ…あそこでチョコキを出していたら…

尤も、週末は冥界へ戻る事にしてるし、昨日も「ディオドラちやま

分」を、限界迄搾り獲ったしい…♪

「…つてか、やつぱり目、細いよなあ？」

この一見瞑ってる様にしか見えない糸目が、優しく微笑んでる様に錯覚させてるんだろうな。」

……………。

神崎？それ、間違っても本人の前で言っちゃ、駄目だからね。

ディオドラちゃまだって頑張ったら、もう少しだけ眼が開けるんだけど（それでも凄く細い）、でも それやると、優しい雰囲気が一変：表現するなら、『策に溺れる策士っぽい、ヘタレで下種な汚物で小物なディオドラちゃま』…略して【下種ドラちゃま】みたいな顔になっちゃうの！

前に眷属みんなで それで弄つたら、本人も自覚在ったのか、最高に沈んじやつて、立ち直らせるのに大変だったんだから！

◇匙 side ◇

「アザゼルはA組、ロスヴァイセさん…先生がD組か…」

ホームルームの後の始業式。

それが終わり、再び教室に戻った俺と神崎、そしてクラスメートの質問責めから解放されたジャンヌとで、式の中で紹介された、新任の先生達の事を話していた。

てつきり俺達のクラスの副担任になると思っていたアザゼル先生は木場のクラス、そして、北欧神話所属のロスヴァイセさん…今後はロスヴァイセ先生か…は、アルジェントさんのクラスの副担任に。

「それと、シークヴァイラ様とコリアナちゃんは、大学部に入ってるわよ。」

「だ…大学って、途中で入れるのかよ？」

「さあ？その辺りは、魔王様達が上手く手を回したんじゃないかしら？」

そしてジャンヌが言うには、アガレス家の お姫様とサイラオーグ様の僧侶さんが、大学部に入ったとの事。

「これで駒王学園に、若手悪魔の関係者が最低1人ずつ、揃った事になるな…」

それを聞いて、神崎が呟く。

更には1年の…塔城さん達のクラスに、あの白龍皇、ヴァーリ・ルシファアも入ったそうだし、中等部にはアーサー…先生の妹な、ルフェイさんも編入してるとか。

「あ、それと神崎？私、オカ研に入るから、放課後に案内してよね。」

◇リアス side ◇

「報告を受けたのが、今日の朝早くで驚いたけど…オカルト研究部は、貴方達を歓迎するわ!!」

放課後の部室には、何時ものメンバーに加え、新しい顔ぶれが沢山。シリユウが連れてきた、ディオドラの騎士。

小猫達が連れてきた白龍皇。

そして駒王学園に新任教諭として配属された、アザゼル、アーサー、ロスヴァイセさん。

アザゼルには昨日も言われたけど、今後は この3人、少なくとも学内では先生と呼ばないといけないのか…。

ロスヴァイセさんやアーサーは兎も角、アザゼルは…凄く抵抗があるって云うか、何か嫌。

ん。シリユウも、同じ様な事を考えてる顔してるし。

「よろしく、お願いしますうー!」

更には高等部の生徒じゃないので部員(仮)として、アーサー先生の妹のルフェイが。

今、この場には不在だが、大学部に入ったシークヴァイラとサイラオーグの僧侶は、外様部員として登録する事に。

「外様部員が増えたによ。」

》》》

「ん、今、気付いたんだけど、天界からは、誰も来てないんだにや?」  
「……………」

それは そのこの、天界大嫌いな、ヤク〇、みたいな顔をしている男が拗れるからじゃないの?」

「いや、天界からも、1人派遣する事になってるんだが、どうしてもスケジュールが合わないらしくてな…明後日には、学園に到着出来ると

思うんだが…」

…らしいわ。

はい、その人、本職さんも土下座して逃げ出しそうな顔しない。アジアとギヤスパーが、脅えてるわよ！

「そう云えば、ロスヴァイセさん…先生って、オーデイン様の護衛はどうなったんですか？」

もう直ぐ、アジア圏の神話勢と対談が有るんですよ？…」

「くび。」

祐斗の質問に、代わりに応えたのはヤ○ザ屋さん…でなくて、シリユー。

「…な、訳無いでしょうが!？」

この学園に赴任が決まった際に、だったら新学期に合わせた方が良い、護衛はバラキエル様だけで充分だ…って、オーデイン様が仰られて…。

でも、それは建て前で、あつのスケベ爺、私が居ないのを良い事に、きつと また おっパブとか、いかがわしい店に繰り出したいからに決まってるわく!!」

「はっはっは!! 違いねえや!」

アザゼル! アナタが言うな!!



◇シリユー side ◇

「保健室に行こうぜ!!」

「はっ。」

新学期が始まって4日目。

休み時間に声を掛けてきたのは、草薙と反町。

何でも、新しく配属された保健室の先生とやらが、超絶美人らしい。

コイツ等は、その先生を姿を拝もうと、俺を誘ってきたのだ。

「俺は良ーよ。」

「そう言うなよ〜?」

「付き合い悪いな!?!」

俺は別に、そーゆーのには興味無いから(俺にはトーカが居るしw)

パスしようと思ったのだが、

「いや、行こうぜ、神崎。」

そう言ってきたのは匙。

スマホを見せながら、

「会長からの指示だ。」

お前も一緒に…だつてさ。」

ほわあつつ？

》》》》

がやがやがやがやがやがやがやがやがや…

「マジかよ…？」

「此処迄…とわ、ねえ？」

匙に支取先輩から届いた、【保健室に屯している男子生徒を撤退させよ！】な指令メール。

何故だか俺も、同行させる様に指示が有ったらしく付き合ってみると、保健室前の廊下には、本当に件の美人な先生とやらを一目拝見したいのか、予想以上な大勢の男子共ヤローで賑わっていた。

「悪羅悪羅！オメー等！！ 解散だ、解散！！」

別に具合が悪いつて訳でも無いのに、こんなトコで屯ってんじやねー！」

「二「げっ？生徒会の狂犬?!」二」

何時の頃からか、問題児の間からは”狂犬”の二つ名が定着している匙。

その匙を見て、半数は舌打ちしながら その場を去るが、

「お、俺は本当に、体の調子が悪くて、だな…本当に本当だぞ!!」

「そーだそーだ！」

「生徒会だからって、横暴だぞ!!」

「二「二「そーだそーだ!!」二」二」

やはり居たか、コイツ等…な3人が先頭に立ち、残った連中が抗戦姿勢を見せる。

「あゝ ああつ!?」

「二「二「ひいいつ?!」二」二」



しかし、『ヤ』の付く自営業な方々でさえ、アホの振りして逃げてしまいたいような匙大先生の眼のメシチ前に、次々と撤退して行く男子生徒。

そして残るは3人だが…

「体の具合が悪い…ねえ?」

「だったら救急車、呼んでやろうか?」

「若しくは…霊柩車か?」

パキパキ…x2…

「!?!?!」

2人掛かりの拳を鳴らしながらの問いに、この残った3人も、顔を青くして退散して行った。

ガラ…

「失礼しまーす。」

「廊下の男子共、蹴散らしときましたー。」

そして支取先輩の指令メル曰わく、『ついでに新しい先生に挨拶しておきなさい』と有ったので、保健室の扉を開けてみると其処には、

「はい、御苦労様。」

赤龍帝…神崎君と、ソーナ・シトリーさんの兵士…匙君で良かったわよね?

私は…

「!!?」

白衣を羽織った…衣服の上からでも分かる、リアス部長や朱乃先輩を凌駕する程な立派な御胸様をお持ちな、少しウエーブの入った長い金髪の…正しく噂通りな超絶おっとり系美女が、頭の上には光る輪冠を、背中からは6対12枚の白い翼を出して、俺達に微笑みながら挨拶してきた。

赤と白、再び！

◇シリユースィデ◇

3 勢力和平に基づき、天界から代表として駒王学園に派遣されたのが、天界トップ4の一角、熾天使の1人だったのが分かった、その日の放課後の部室…

「おい、リアス・グレモリー、少し尋ねるのだが…」  
「……………」。

「神崎孜劉、少し良いか？」  
「……………」。

「なあ、アーシア・アルジエント。ここの部分だが…」  
「……………」。

「おい、木場祐t  
「ちよつとヴァーリ！」

「ん？」  
オカ研に入部はしたが、眷属でない故に、悪魔契約稼業にはタッチしていないヴァーリ。

この日も、出された宿題の分からない箇所を、俺や部長に聞いて…いや、白龍皇が真面目に宿題でwww…な点は、今はスルーしてくれ。兎に角、分からない問題を、俺達に聞いていたのだが、

「此処は学校であり、部室！」  
私にしろシリユースィ達にしろ、貴方の先輩なのよ！  
フルネーム呼び捨てでなく、”先輩”なり、”さん”を付けて呼びなさい！

あ、私は”部長”よ！」  
…そうなのである。  
この男、クラスメートの小猫、ギヤスパー、レイヴェルは それぞ

れ、塔城 ヴラディ フェニックスと、名字を呼び捨て…これは同級生相手の話だから、別に問題は無いのだが、俺や部長…残る2年3年のメンバーに対しては、フルネーム呼び捨てだったのである。

黒歌に対しては、『黒歌』だ。

新学期初日のミーティングの時は、”そーゆーキャラだから”で流していたが、此処迄フルネーム呼び捨てが連発すると、流石に一言、物申したくなったのだろう。

しかも この男、今は俺達に宿題を…しかも その問題の解き方や調べ方でなく、答え その物を教えて貰っているのだ。

「ヴァーリ君、体育会系の上下関係は絶対ですよ。」

「ええ?! 小猫ちゃん、この部って、体育会系だったの?」

ええ?! ギヤスパ、知らなかったのか?

まさか お前、この部を文系とでも思っていたのか?

赤龍帝である この俺が、グレモリー令嬢に有事は兎も角、学校内で頭が上がらないのも、部長と部員、若しくは先輩と後輩な関係なら成る、その鋼鉄の掟故なのだ。

「オカ研に至っては、鋼鉄通り越して、ロンズデーライトの掟です。」

ま、まちですか? 小猫さん??

「う…しかし…だな…リアs

「O・D A・M A・R I!!」

「…!!?」

そして何やら言い訳しようとするヴァーリを、夏休みのグレモリー邸にて、部長の父親であるグレモリー卿の発言を封殺していたグレモリー夫人…あの”マダム・ザ・エクスティンクト亜麻髪の絶滅淑女”を彷彿させるオーラを放ち、完全に黙らせる。

「し、しかし…」

それでも やや畏縮しながら、言い返そうとするヴァーリだが、「外なら まだ、何も言わないけど、学校内は示しを付ける意味でも、学年等から成り立つ礼節等には、従って貰うわよ!

シリユーだって、学校内ではアザゼル…先生の事を、先生呼びしてるんだから!!」

「ううっ!!」

我等がリアス部長は、それを赦さない。  
全くご尤も。

アーサーやロスヴァイセさんなら特に、先生呼びでも抵抗は無いが、あの墮天使総督に対しては…いや、別に怨みが有るとか嫌いとかでなく、あの いい加減男に先生を付けて呼ぶのは、何だか凄く嫌なのだ。

因みに部長も同じらしい。

尚、他のオカ研メンバーや生徒会の皆さんは、夏休みから指導して貰っていた事も有り、既に余り抵抗は無いとか。

》》》》

「おい、神崎孜劉。

そんな訳で、俺と勝負しr (すぱかーん!) ヤガガ!?

い、いきなり何をするのだ?

リアス・グレム (ズバガアツ!!) よくろー!?

…あの遣り取りの後、何が そんな訳なのか分からないが、宿題を終え、俺に勝負を仕掛けてきたヴァーリのド頭に、部長のハリセンが炸裂。

更には続けざまに顔面、鼻っ柱目掛け、ハリセンによる”牙突”が決まった。

「何度言えば分かるのよ?!」

シリユーは先輩、私は部長と呼びなさい!

…つてゆーか、勝負って何なのよ!?!」

「ふっ…」

白と赤は、常に戦う宿命に在るのさ。

これには学園内に於ける上下関係とやらも、関与出来ん

「あゝっ、ああゝんん?!」

「いや…その、す、すいません…」

それは仮にアニメ風に例えるならば、”画面弩upで本職さん顔負けな迫力で睨み付けるリアス部長に、画面左下隅で小さく狼狽えながら謝るヴァーリ”の図。

》》》

「ダニクヒメコワイ、ダニクヒメコワイ…ブツブツ…」

結局は部長の迫力に屈し、部室の隅っこで蹲り、ブツブツと何やらボヤき始めたヴァーリ。

「……………。(?) | (?) チラツ…」

そして時折、何かを求め訴える様に、俺の顔を見やがる。 ハア…

「…分かったよヴァーリ、闘ってやるよ。」

ガバツ

「ほ、本当か?」

俺の この一言に、刹那で立ち上がると、先程迄の駄肉姫様の圧力に脅えていた様は何処へやら、瞳をキラキラと輝かせた満面の笑みで応えてきた。

勢い良く振られる尻尾が見えるのは、目の錯覚だと思いたい。

「ちよ…シリュー?」

貴方も、何を考えてるのよ!?

そして当然な如く、それを問い質す部長。

「いや、こうでもしないと、ずっと部室の隅で体育座りして、”どよん”て空気、撒き散らされても困るでしょう。」

「ハア…わ、分かったわよ、認めるわよ…」

但し…!!」

「?」

俺の意見に、リアス部長は折れ、そして条件付きで、勝負を認めてくれた。

くシリューvsヴァーリ・対戦ルールく

・神器の使用禁止

・魔力の使用禁止

・小宇宙<sup>コスモ</sup>の使用禁止

・決着はK・O、ギブアップ、レフェリーストップによる

・殺しダメ!絶対!!

・勝敗問わず、ヴァーリは今後、学園内では先輩や教諭に対して、相応の態度で接する事

・ヴァーリが敗北した場合、(仮)部員や外様部員を含め、部内のヒエラルキーは一番下となる

・その他その他…

》》》》

「ふっ…少し不満も有るが、神崎孜劉と闘れるなら、この際 俺は構わない。」

…このバトルマニアめ!!

そう言いながら、部長がパソコンで打ち出した、この契約書か誓約書とでも云うべきか…な用紙に、サインして血判を押す白龍皇。

「どうやらコイツの戦闘狂癖は、ドラゴン云々でなく、”素”な様だ。そして如何にハーフとは云え、悪魔的に何事に於いても、契約は絶対な筈。」

結果からすれば、部長は上手い事、ヴァーリの部内での態度を改めさせた事になる?」

「ごめんねシリュー。」

何だかんだで、結局は貴方を利用したみたいで…」

「気にする必要無いですよ。」

生意気な後輩に、キツツイ お灸を据えるのも、先輩の仕事ですから。」

少しだけ後ろめたい気持ちな部長に、無問題と応える俺。

そして勝負の為、皆は部室からグラウンドへ場所を移すのだが、何だか この勝負に未だ不満が有るのか、ボヤいてるのが約2名…否、2匹。

『いや、赤いのとのバトルは、俺を使わんと意味が無いのだが…。』

『全くだ。赤と白の戦いに、ドラゴンの力を使わないとは有り得ない。』

「はああ つ?! 何か、言った?」

『す、すいません、何でも無いです。』

◇小猫side◇

「ほお〜?何だか、面白い事に、なってるな?」

「そうですね。」

グラウンドに出た後、一応は認識阻害と防護の結界を張っている中、やって来たのはアザゼル先生とアーサー先生。

「先生、何か有ったのですか？」

「いや、会議の内容が余りにも否・建設的で暇だったのでな…」

「ロスヴァイセ先生に全部押し付けて、抜け出してきました。」

こ、この人達わ…

「お？小猫、このキャラメ○コーン、貰って良いか？」

「ちよ…先生？」

更には私の断りも無く、私の おやつ袋から、キャ○メルコーンを取り出すと、

バリ…

袋の”下”の方を開きました。

「これ、ピーナッツが美味いんだよな♪

アーサー、お前も食うか？」

「頂きます。」

……………。

先生…いきなりピーナッツは、邪道ですよ？

》》》

ざわざわざわざわざわざわざわざわ…

結界を張り終えた頃には、更に沢山のギャラリーが。

「ヴァーリー、殺っても良いぞー！」

俺が許す！寧ろ、殺れ!!www」

「結界を張る気配を感じたので、何事かと思えば…」

生徒会の皆さんに、大学部からシーグヴァイラ様とコリアナさんにルガルルさん、

「ヴァーリーさん、頑張れ♪」

「我、お菓子、所望…」

中等部からは、ルフェイちゃん、そして何故か、そして何処からか、オーちゃんもやってきました。

はい、オーちゃん、とんがり○ーンですよ。

「どつちも頑張るによ。」

ミルたんもバイト先から、転移で駆け付けて来ました。

会議中のロスヴァイセ先生と、業務時間が終わると、直ぐに帰宅したガブリエル先生を除いたら、駒王の関係者勢揃いです。

◇木場side◇

スウ：

審判役の部長が、右手を上によびます。

「それじゃ、始m…」

バキイツ!!!x2

…つて、えええつ!?!?

部長が手を振り下ろすと同時の、「始め」の言葉を言い終わる前に、神崎君とヴァーリ君の拳が、互いの頬に突き刺さりました!

「ヴァーリイイイ!、貴っ様ア!

不意打ちとは、何て卑怯な!」

ん…、神崎君?

思いつきりブーメランだからね?それ。

「ちいつ!」

何か突っ込みたい顔をしながら、ミドルキックを放つヴァーリ君。ん。何となく分かるよ。

ガシツ：

しかし神崎君は、その蹴り足を両腕でキャッチすると、その儘 自らの身体を捻り、一回転させての…

ドシユツ!

「ぐわっ?!」

ドラゴンスクリュー!

「まだまだあつ!」

ガチイツ!

「うがああつ…う!」

更には其処から、スピニング・トウ・ホールドに繋いでいく!

「あく、やあっぱ、魔力とか抜き、単純な肉弾戦の喧嘩じゃ、神崎に分が有るわなく。」

「そうなのですか?」



「ああ。」白龍皇としてのヴァーリの戦闘スタイルは、殴る蹴るを全く使用しない訳じゃ無いが、魔力弾ぶつ放す戦法がメインだ。」

「成る程…対してシリユー先輩は、ドラゴン波等の所謂”飛び道具”も使いますが、本当に得意なのは、隣接戦闘…」

「そーゆーこつた。」

ま、それでもプロレス技は…なあ？（笑）」

アザゼル先生が、バトルの流れを分析しながら苦笑。

「クソ！」

ガン！

ヴァーリ君がフリーになった足を蹴り出し、スピニング…から脱出。

即座に起き上がり距離を開け、再度 戦闘の構えを見せるけど、よく見たら膝が僅かにカクカク言っている。

「一気に決めてやる！」

それを見逃す筈の無い、神崎君。

バサアツ…!!

「「「きゃーっ！♪」」」

「「「きゃあああっ!？」」」

「なっ…?!」

「あらあらあらあら♪」

「「おっっ！」

「「によによっ!!」

「「はあ…」

「「「ぎゃーっははははは!!」」

「「「はわわわわわ…」」

「…赤龍帝、暑いのか？」

ははははは…

神崎君のアクションに、歓声やら悲鳴やら溜め息やら爆笑やら、その他様々なアクションが巻き起こる中、ダッシュで間合いを詰める  
と、

ダブルアームス→プレックス→ローリンググレイドル→み○る式

パイルドライバーに繋がっていき、最後は、

「ぐがああつ…!!?」

吊り天井固め…ロメロ・スペシャルをガツチリ極めた!

◇小猫side◇

「うがああ…か、神崎孜劉!

参った!俺の、負け…だ!!」

シリユウ先輩のプロレス技オンパレードの前に、ギブアップを宣言するヴァーリ君。

「あ?誰…だつて?」

「す、すみません、神崎先輩!ギブっす!

…てか、早く解いて下さい!

いや、マジに!痛ててててててて!!」

ヴァーリ君は、ヤク〇〇ドラゴン先輩に屈しました。

そして…

》》》》

「おいヴァーリ、ウーロン茶買ってきてくれ。」

「あ、ヴァーリ君く、私、焼きそばパンとバナナ・オレく。」

「私はマンゴープリンをお願いします。」

「我、はーげん〇つつのまっちや所望。

ついでに、お金も払って。」

「じゃ…じゃあ、僕は…」

「は、はい、ただいま…!」

バトルの際の契約に基づき、ヴァーリ君はオカ研のパ〇リになりました。

あ、パシらせて お金も払わせる鬼畜所業は、オーちゃんだけです  
よ?」